續國譯漢文大成

文學部　三十三

309
65

帙入

始

吉田侍郎氏
寄贈本

續國譯漢文大成

文學部第三十三冊（第九帙の二）

白樂天詩集一の一

309
65

白樂天詩集　第一卷目次

例　言……一
總　說……一―三一

卷一

諷諭一

賀　雨……一
讀張籍古樂府……六
哭孔戡……九
凶　宅……一二
夢　仙……一四
觀刈麥……一八
題海圖屛風……二〇
羸　駿……二二
廢　琴……二四
李都尉古劍……二五
雲居寺孤桐……二六
京兆府新栽蓮……二八
月夜登閣避暑……二九
初授拾遺……三一

贈元稹……三二
哭劉敦質……三四
答友問……三六
雜興三首……三七
宿紫閣山北邨……四二
讀漢書……四三
贈樊著作……四六
蜀路石婦……四八
折劍頭……五〇
登樂遊園望……五一
酬元九對新栽竹有懷見寄……五三
感鶴……五四
春雪……五六
高僕射……五八
白牡丹……六〇
贈內……六三
寄唐生……六五
傷唐衢二首……六九
問友……七三
悲哉行……七四
紫藤……七六
放鷹……七八
慈烏夜啼……八〇
燕詩示劉叟……八二
采地黃者……八四
初入太行路……八六
鄧魴張徹落第……八六
送王處士……八八
村居苦寒……八九
納粟……九〇

薛中丞……九二
秋池二首……九四
夏旱……九六
諭友……九七
丘中有一士二首……九九
新製布裘……一〇二
杏園中棗樹……一〇三
蝦蟇……一〇五
寄隱者……一〇七
放魚……一〇九
文柏牀……一一一
潯陽三題并序……一一二
廬山桂……一一三
湓浦竹……一一四
東林寺白蓮……一一六
大水……一一七

卷二 諷諭二

續古詩十首……一一九
秦中吟十首并序……一二一
議婚……一二一
重賦……一二四
傷宅……一二七
傷友……一二九
不致仕……一三一
立碑……一三四

輕肥……一四六
五絃……一四八
歌舞……一四九
買花……一五一
贈友五首幷序……一五三
寓意詩五首……一六二
讀史五首……一六九
和答詩十首幷序……一七六
和思歸樂……一八〇
和陽城驛……一八四
答桐花……一八九
和大觜烏……一九三
答四皓廟……一九八
和雉媒……二〇四
和松樹……二〇六
答箭鏃……二〇八
和古社……二一〇
和分水嶺……二一三
有木詩八首幷序……二一四
歎魯二首……二二五
反鮑明遠白頭吟……二二七
青塚……二二九
雜感……二三三

卷三

諷諭三

新樂府幷序……二三五
七德舞……二三六
法曲……二四〇
二王後……二四三
海漫漫……二四五
立部伎……二四七
華原磬……二五〇
上陽人……二五三
胡旋女……二五七
折臂翁……二六一
太行路……二六六
司天臺……二六九
捕蝗……二七一
昆明春……二七四
城鹽州……二七七
道州民……二八一
馴犀……二八四
五絃彈……二八八
蠻子朝……二九二
驃國樂……二九六
縛戎人……三〇〇

卷四

諷諭四

驪宮高……三〇七
百鍊鏡……三一〇

青石……三一二
兩朱閣……三一五
西涼伎……三一七
八駿圖……三二二
澗底松……三二五
牡丹芳……三二七
紅線毯……三三二
杜陵叟……三三五
繚綾……三三八
賣炭翁……三四一
母別子……三四三
陰山道……三四六
時世粧……三四九
李夫人……三五一
陵園妾……三五五
鹽商婦……三五八
杏爲梁……三六二
井底引銀瓶……三六五
官牛……三六九
紫毫筆……三七〇
隋堤柳……三七三
草茫茫……三七七
古塚狐……三七九
黑潭龍……三八二
天可度……三八四
秦吉了……三八六
鵶九劍……三八九
采詩官……三九一

卷五 閑適一

常樂里閑居……三九七
答元八宗簡同遊曲江後明日見贈……四〇〇
感時……四〇二
首夏同諸校正遊開元觀因宿翫月……四〇四
永崇里觀居……四〇六
早送舉人入試……四〇七
招王質夫……四〇九
祗役駱口因與王質夫同遊秋山偶題三韻……四一〇
見蕭侍御憶舊山草堂詩因以繼和……四一一
病假中南亭閑望……四一三
仙遊寺獨宿……四一四
前庭涼夜……四一五
官舍小亭閑望……四一五
早秋獨夜……四一七
聽彈古淥水……四一八
松齋自題……四一八
冬夜與錢員外同直禁中……四二〇
和錢員外禁中夙興見示……四二一
夏日獨直寄蕭侍御……四二二
松聲……四二四
禁中……四二五
贈吳丹……四二六
初除戶曹喜而言志……四二八
秋居書懷……四三一

禁中晚臥因懷王起居……四三二
養拙……四三三
寄李十一建……四三四
旅次華州贈袁右丞……四三七
酬楊九弘貞長安病中見寄……四三八
禁中寓直夢遊仙遊寺……四四〇
贈王山人……四四一

卷六 閑適二

自題寫眞……四七九
遣懷……四八〇
渭上偶釣……四八二
隱几……四八三
春眠……四八五
秋山……四四二
贈能七倫……四四四
題楊穎士西亭……四四五
題贈鄭祕書徵君石溝溪隱居……四四六
及第後歸覲留別諸同年……四四八
淸夜琴興……四五〇
效陶潛體詩十六首幷序……四五一
閑居……四八六
夏日……四八八
適意二首……四八八
首夏病閒……四九一
晚春沽酒……四九三

蘭若寓居……四九四
麴生訪宿……四九五
聞庾七左降因詠所懷……四九六
答卜者……四九八
歸田三首……四九九
秋遊原上……五〇四
九日登西原宴望……五〇五
寄同病者……五〇七
遊藍田山卜居……五〇八
村雪夜坐……五〇九
東園翫菊……五一〇
觀稼……五一二
聞哭者……五一四
新構亭臺示諸弟姪……五一五
自吟拙什因有所懷……五一七
東陂秋意寄元八……五一八
閑居……五二〇
詠拙……五二〇
詠慵……五二三
冬夜……五二四
村中留李三固言宿……五二五
友人夜訪……五二七
遊悟眞寺詩……五二七
酬張十八訪宿見贈……五四七
朝歸書寄元八……五四九
酬吳七見寄……五五二
昭國閑居……五五四
喜陳兄至……五五六
贈杓直……五五七
寄張十八……五五九

題玉泉寺……五六一

卷七 閑適三

舟行江州路上作……五六五
湓浦早冬……五六六
江州雪……五六七
題潯陽樓……五六八
訪陶公舊宅并序……五七〇
北亭……五七三
泛湓水……五七五
答故人……五七七
官舍内新鑿小池……五七九
宿簡寂觀……五八〇
讀謝靈運詩……五八一
朝回遊城南……五六二
北亭獨宿……五八三
約心……五八三
晩望……五八四
早春……五八五
春寢……五八六
睡起晏坐……五八七
詠懷……五八八
春遊西林寺……五八九
出山吟……五九〇
歲暮……五九一
聞早鶯……五九二
栽杉……五九三
過李生……五九五
詠意……五九六
食筍……五九八
遊石門澗……六〇〇
招東鄰……六〇一
題元十八溪亭……六〇二
香鑪峯下新置草堂即事詠懷題於石上……六〇三
草堂前新開一池養魚種荷日有幽趣……六〇八
白雲期……六〇九
登香鑪峯頂……六一〇
答崔侍郎錢舍人書問因繼以詩……六一二
烹葵……六一四
小池二首……六一六
閉關……六一七
弄龜羅……六一八
截樹……六二〇
望江樓上作……六二一
題座隅……六二三
昔與微之同蓄休退之心追尋前約且結後期……六二四
垂釣……六二七
晩燕……六二七
贖雞……六二八
秋日懷杓直……六三一
食後……六三三
齊物二首……六三三
山下宿……六三五
題舊寫眞圖……六三五
閒居……六三七
對酒示行簡……六三八

詠　懷……六三九
夜　琴……六四一
山中獨吟……六四二
達理二首……六四四
湖亭晚望殘水……六四六
郭虛舟相訪……六四八

卷　八　閑適四

自中書舍人出守杭州路次藍溪作……六四九
初出城留別……六五二
過駱山人野居小池……六五三
宿清源寺……六五五
宿藍溪對月……六五六
自望秦赴五松驛馬上偶睡睡覺成吟……六五七
鄧州路中作……六五八
朱藤杖紫驄馬吟……六六〇
桐樹館重題……六六〇
過紫霞蘭若……六六一
感舊紗帽……六六二
思竹窓……六六三
馬上作……六六四
秋　蝶……六六七
登商山最高頂……六六八
枯　桑……六六九
山路偶興……六七〇
山　雉……六七一

初下漢江舟中作寄兩省給舍……六七三
自蜀江至洞庭湖口有感而作……六七四
初領郡政衙退登東樓作……六七七
清調吟……六七九
狂歌詞……六八〇
郡　亭……六八一
詠　懷……六八三
立春後五日……六八四
郡中即事……六八五

卷　九　感傷一

西明寺牡丹花時憶元九……六八九
傷楊弘貞……六九〇
權攝昭應早秋書事寄元拾遺兼呈李司錄……六九一
新栽竹……六九三
秋霖中過尹縱之仙遊山居……六九四
寄江南兄弟……六九五
曲江早秋……六九六
寄題盩厔廳前雙松……六九八
翰林院中感秋懷王質夫……六九九
禁中月……七〇一
贈賣松者……七〇一
初見白髮……七〇二
別元九後詠所懷……七〇三
禁中秋宿……七〇四

早秋曲江感懷……七〇五
寄元九……七〇六
春暮寄元九……七〇八
早梳頭……七〇九
出關路……七一〇
別舍弟後月夜……七一〇
新豐路逢故人……七一二
金鑾子晬日……七一三
青龍寺早夏……七一四
秋題牡丹叢……七一五
勸酒寄元九……七一六
曲江感秋……七一八
酬張太祝晩秋臥病見寄……七一九
立秋日曲江憶元九……七二一
早朝賀雪寄陳山人……七二二
初與元九別後悵然感懷因以此寄……七二三
和元九悼往……七二八
重到渭上舊居……七二九
白髮……七三一
秋日……七三三
將之饒州江浦夜泊……七三四
思歸……七三五
冀城北原作……七三七
客路感秋寄明準上人……七三九
游襄陽懷孟浩然……七四〇
秋暮西歸途中書情……七四一
秋懷……七四二
別楊潁士・盧克柔・殷堯藩……七四三
題贈定光上人……七四五
祗役駱口驛喜蕭侍御書至……七四六
酬李少府曹長官舍見贈……七四八
留別……七四九
晩別……七五一
北園……七五一
惜栯李花……七五二
照鏡……七五三
新秋……七五四
夜雨……七五五
秋江送客……七五五
感逝寄遠……七五六
秋月……七五八

例言

一、本書は清の汪立名の編訂する所の白香山詩集を以て底本とせり。

一、本書詩篇の正文、稀に汪本と異るものあるは、全唐詩・唐宋詩醇等を參照して予の改訂せるものなり。

一、二三の選本・詩話・隨筆に見ゆるものを除く外、白詩には古來註釋書なし。予の譾陋を以て敢て之を解釋す。佛頭糞を著くるの譏を免るるを得ば幸なり。

昭和三年八月

著者識

白樂天詩集總說

一、白樂天の詩

詩は唐代に於て全盛を極めたり。是を以て詩人輩出し殆ど屈指に遑なきほどなり。試に一部の全唐詩を取りて之を檢せよ。作者二千二百餘人。その作る所の詩篇四萬八千九百餘首の多きに上るを見るべし。されど其類を出で其萃に拔くものを求むれば、盛唐に於ては李太白・杜少陵を推し、中唐に於ては韓退之・白樂天を推さざるべからず。李・杜・韓三家に就いては姑く措いて論せず。ここに白詩に就いて少しく考究する所あらんとす。

白詩の今に存する者三千八百餘首。其數に於ては唐賢中第一位に居る。然らば其價値は如何。淸の趙翼の甌北詩話に云く、

中唐の詩、韓（愈、字は退之）孟（郊、字は東野）元（稹、字は微之）白（居易、字は樂天）を以て最となす。韓・孟は奇警を尙び、務めて人の敢て言はざる所を言ふ。元・白は坦易を尙び、務めて人の共に言はんと欲する所を言ふ。試に平心に之を論するに、詩は性情に本づく。當に性情を以て主となすべし。奇警なるものは猶ほ第詞句の間に在りて難を爭ひ險を鬪はし、人をして心を蕩し目を駭かし敢て逼り視ざらしむ。而かも意

味或は少し。坦易なるものは多く景に觸れて情を生じ事に因つて意を起し、眼前の景、口頭の語、自ら能く人の心脾に沁し人の咀嚼に耐ふ。此れ元・白較韓・孟に勝れり。世徒輕俗を以て之を訾るは、此れ詩を知らざる者なり。

と。これ眞に允當の見と謂ふべし。樂天は務めて人の共に言はんと欲する所を言ふ。眼前瑣屑の光景一一之を詩にしたり。彼の作る所の醉吟先生墓誌銘に云く、

凡そ平生慕ふ所、感ずる所、得る所、喪ふ所、經る所、遇る所、通ずる所、一事一物より已上、布いて文集の中に在り、卷を開けば盡く知るべきなり。

と。彼の詩材は眼前咫尺の間に在り。一事一物の微といへども詩に入らざるはなし。彼は此等の詩材を拉し來りて一一之を曲盡せんことを期したり。他人の言ひて七八分に至り、餘情を一二分の間に留むるもの、彼は必ず十二分に之を言ひ盡さんとせり。杜少陵の

訪レ舊半爲レ鬼。驚呼熱ニ中腸一

といふもの、彼は

昨日聞ニ甲死一。今日聞ニ乙死一。知識三分中。二分化爲レ鬼。

逝者不ニ復見一。悲者長已矣。（感逝寄遠。下略。）

といふ。これ動もすれば冗漫に流れて含蓄を缺く所以なり。されば唐の杜牧は白詩を譏りて、纖艷淫媟、莊人雅士の爲す所にあらずといひ、宋の蘇東坡は元輕白俗といひ、甚しきに至りては、宋の釋惠洪の冷齋夜話に見ゆる、

樂天詩を作る毎に一老嫗をして之を解せしめ、解すれば則ち之を錄し、解せざれば則ち又之を易ふ。

との附會說を生ずるに至れり。夫れ物に長短あり事に優劣あり。一長一短、一優一劣は數の免れざる所なり。白詩は和平なり坦易なり眞率なり。是れ其長所なり優所なり。白詩に向つて杜少陵の老蒼沈鬱を求め、李太白の豪宕飄逸を求むるは求むる者の誤なり。金の王若虛の滹南詩話に、

樂天の詩、情致曲盡し、人の肝脾に入り、物に隨つて形を賦し、所在充滿し、殆ど元氣と相侔し。長韻大篇動もすれば數百千言、而して順適愜當句句一の如く、爭張牽强の態なし。此れ豈に吟髭を撚斷し口吻を悲鳴する者の能く至る所ならんや。而るに世或は淺易を以て之を輕んず。蓋し與に言ふに足らざるなり。

といへるは、よく此間の消息に通せるの言なり。淸の袁枚の隨園詩話に、周元公が白香山の詩平易に似たるも、間存する所の遺稿を觀るに塗改甚だ多く、覚に終篇一字を留めざるものあり。

といへるを引きて樂天の詩に、

舊句時時改。無レ妨レ悅ニ性情一。（解詩）

とあるを證せる一條あり。されば彼の和平淺率は唯漫然率然として成れるものにあらず、自ら求めて意識的に工夫せる結果なるを知るべし。かくの如く前人の窠臼を襲はず、別に一機軸を出して獨得の境地を開拓し、而かも十二分の成功を贏ち得たるを見れば、彼は決して尋常一樣の凡手にあらず。則ち堂堂たる平民的詩人なり。大衆的詩人なり。

彼は大衆的詩人なり。平民的詩人なり。されば萬人共通の心理を抉剔し、平易簡明の語を假りて之を萬人の前に披瀝したり。是を以て彼の詩は脛なくして走り翼なくして飛び、忽ち一時に盛行するに至れり。元稹の白氏長慶集序に云く、

予始め樂天と校祕書の名を同うせしとき、多く詩章を以て相贈答す。會予讁せられて江陵に掾たり。樂天猶ほ翰林に在りて予に百韻の律詩及び雜體を寄すること前後數十章。この後各江（州の名）通（州の名）に佐たり。復た相酬寄す。巴蜀江楚の間洎び長安中の少年、遞に相倣效し競つて新詞を作る。自ら謂うて元和の詩となす。而して樂天が「秦中吟」「賀雨」諷諭等の篇は、時人能く知る者罕なり。然れども二十年の間にして、禁省觀寺郵堠墻壁の上書せざるなく、王公妾婦、牛童馬走の口道はざるなし。繕寫模勒して市井に衒賣するに至る。或は之を持して以て酒茗に交ふる者處處皆是れなり。其甚しき者は名聲を盜竊して苟も自ら售らんことを求むるに至るあり。

と。樂天も與元九書に於て亦自ら其詩の一時に流行したることを述べて云く、

再び長安に來るに及び、又聞く、軍使高霞寓といふ者あり。倡妓を聘せんと欲す。妓大に誇りて曰く、我白學士が「長恨歌」を誦し得。豈に他の妓に同じからんやと。是に由りて價を增せりと。又昨に漢南を過ぎし日、適主人の衆を集めて他賓を樂娛せしむるに遇ふ。諸妓僕の來るを見、指して相顧みて曰く、此は是れ「秦中吟」、「長恨歌」の主のみと。長安より江西に抵るまで三四千里。凡そ鄉校佛寺逆旅行舟の中、往往僕の詩を題するものあり。士庶僧徒、孀婦處女の口、每每僕の詩を詠する者あり。

と。亦以て一世を風靡したるを見るべし。

然れども彼は徒に民衆の喝采を博するを以て念となし、俗衆の歡心を買はんことを務むる者にあらざるなり。彼は與元九書に於て詩に就いての持論を述べて曰く、

夫れ文は尙し。三才各文あり。天の文は三光（日月星）之が首たり。地の文は五材（木火土金水）之が首たり。人の文は六經（詩書易春秋禮樂）之が首たり。六經に就いて言へば詩文之が主たり。何となれば聖人は人心を感せしめて天下和平なればなり。人心を感せしむるは情より先なるはなく、言より始なるはなく、聲より切なるはなく、義より深きはなし。詩は情を根にし言を苗にし聲を華にし義を實にす。上は賢聖より下は愚騃に至り、微は豚魚に及び、幽は鬼神に及ぶまで、羣は分るるも氣は同じく、形は異なるも情は一なり。未だ聲入りて應せす、情交りて感せざるものあらず。聖人は其の然るを知

り、其言に因つて之を經するに六義を以てし、其聲に緣つて之を緯するに五音を以てす。音に韻あり義に類あり。韻協へば則ち言順なり。言順なれば則ち聲入り易し。類擧れば則ち情見る。情見るれば則ち感交り易し。是に於てか大を孕み深を含み微を貫き密を洞し、上下通じて一氣泰く、憂樂合して百志熙まる。中略言ふ者罪なく、聞く者戒と作す。言ふ者聞く者兩ながら其心を盡さざるはなし。周衰へ秦興るに洎び採詩の官廢る。上は詩を以て時政を補察せず、下は歌を以て人情を洩導せず。乃ち諂成の風動いて救失の道缺くるに至る。時に六義始めて刓らる。中略陵夷して梁陳の間に至りては、率ね風雪を嘲り花草を弄ぶに過ぎざるのみ。噫風雪花草の物三百篇中豈に之を捨てんや。用ふる所何如を顧るのみ。設へば「北風其涼」の如きは風を假りて以て威虐を刺るなり。「雨雪霏霏」は雪に因つて以て征役を愍むなり。「棠棣之華」は華に感じて以て兄弟を諷するなり。「采二采芣苢一」は草を美して以て子あるを樂むなり。皆興は此より發して義は彼に歸す。是に反せば可ならんや。然らば則ち「餘霞散成レ綺。澄江淨如レ練。」、「離花先委レ露。別葉乍辭レ風。」の什、麗は則ち麗なり。吾その諷する所を知らず。故に僕の所謂風雪を嘲り花草を弄ぶのみ。時に六義盡く去る。唐興りて二百年、其間詩人勝げて數ふべからず。擧ぐべき所の者は、陳子昂に感遇詩二十首あり。鮑魴に感興詩十五首あり。又詩の豪なる者なり。世に李杜を稱す。李の作は才巳に奇なり。人逮ばず。其風雅比興を索むれば十に一なし。杜が詩最も多く、傳ふべきもの千餘篇。今古を貫穿し格律を覼縷するに至りては、工を盡し善を盡すこと又李に過ぎたり。然れども亦三四十首に過ぎず。杜すら尙ほ此の如し。況んや杜に逮ばざる者をや。僕嘗て詩道の崩壞せるを痛み、忽忽として憤發し、或は食して哺を輟め夜寢を輟め、才力を量らずして之を扶け起さんと欲す。中略拾遺より來、凡そ適する所、感ずる所、美刺興比に關するもの、又武德より元和に訖るまで事に因り題を立て、題して新樂府となすもの、共に一百五十首、之を諷諭詩と謂ふ。又或は公より退いて獨處し、或は病を移して閒居し、足を知り和を知りて情性を吟翫するもの一百首、之を閑適詩と謂ふ。又事物外に牽いて情理内に動き、感遇に隨つて歎詠に形るるもの一百首、之を感傷詩と謂ふ。又五言七言長句絕句、一百韻より兩韻に至るもの四百餘首あり、之を雜律詩と謂ふ。中略僕志兼濟に在り、行獨善に在り。奉じて之を始終すれば則ち道となり、言うて之を發明すれば則ち詩となる。之を諷諭詩と謂ふは兼濟の志なり。之を閑適詩と謂ふは獨善の義なり。故に僕の詩を覽ば僕の道を知らん。其餘の雜律詩は或は一時一物に誘かれ、一笑一吟に發し、率然として章を成す。平生尙ぶ所のものにあらず。但親朋合散の際、其の恨を釋き懽を佐くるを以て、今銓次の間未だ删り去る能はず。他時我が爲に斯文を編集する者あらば、之を略して可なり。中略今僕の詩、人の愛する所のもの、悉く雜律詩と長恨歌已下とに過ぎざるのみ。時の重んずる所は僕の輕んずる所なり。諷諭に至りては意激して言質なり。閑適は思澹にして詞迂なり。質を以て迂に合ふ。宜なり人の愛せ

ざるや。下略

と。されば風雪を嘲り花草を弄ぶは彼の志にあらず。彼は詩を以て道を託するの具となし、之を以て諷諭譏諫し、經國濟民の一助たらしむるに在りしなり。故に其の朝に在るや忠誠蹇諤抗論して回けず。傍ら「秦中吟」、「新樂府」を作りて憂憤を洩せり。唐宋詩醇に、

唐人の詩、篇什最も富むもの、白居易の詩に如くはなし。其源亦杜甫より出づ。中略杜甫の雄渾蒼勁を變じて流麗安詳となす。其面貌を襲はずして其神味を得たるものなり。

といへるは、知言といふべし。

彼志業立たず、一たび江州に貶せらるるや、復た功名に意なく、絶えて諷諭詩を作らず、蕭散閒適、塵土を擺脫して萬化と冥合せんと志し、專ら陶家の藩籬を覗ふに至れり。甌北詩話に云く、

香山の詩、恬淡閒適の趣、多く之を陶淵明韋應物に得たり。其の「自吟二拙什一」に云く、時時自吟詠。吟罷有レ所レ思。蘇州及彭澤。與レ我不レ同レ時。此外復誰愛。惟有二元微之一。と。又「題二潯陽樓一」に云く、常愛陶彭澤。文思何高玄。又怪韋蘇州。詩情亦清閒と。此れ以て其趣向の在る所を觀るべきなり。晩年自ら其適を適とし、但其意の言はんと欲する所を道ひ、一の雕飾なきは、實に力を二公に得たるのみ。

と。又與二元九一書にも、

韋蘇州が歌行、清麗の外頗る興諷に近し。其五言の詩又高雅閒澹、自ら一家の體を成す。今の筆を秉る者誰か能く之に及ばん。

といひて歸向の意を漏らせり。

されば彼の諷諭詩は、杜少陵の衣鉢を傳へて和平坦易の一派を開き、閒適詩は陶・韋の餘流を挹んで能く其源に逢ふものなり。特に長恨歌・琵琶行・遊二悟眞寺一詩の如きは古來稀に見る長篇にして、他人の追隨を許さざる所なり。樂天、李德裕と隙あり。德裕其詩を屛けて觀ず。劉禹錫以て言を爲す。德裕曰く、吾斯人に於て足れりとせざること久し。之を覽ば恐らくは吾が心を回さんと。ああ彼の詩は怨家仇人と雖も、少しも毀りて之を掩蔽する能はざるなり。豈に偉ならずや。

彼の詩を論ずるに當り、併せ述べざるべからざるは、其の次韻と稱する一格を創めたること是れなり。ここに甌北詩話の言を借りて予が說明に代へん。詩話に云く、

大凡才人名を好む、必ず前古未だ有らざる所を創めて後以て世に傳はるべし。古來ただ和詩ありて和韻なし。唐人には和韻ありて尙ほ次韻なし。次韻は實に元・白より始まる。次に依りて韻を押し、前後差はず。此れ古未だ有らざる所なり。而かも且つ長篇累幅、多きは百韻に至り、少きも亦數十韻。能を爭ひ巧を鬪はし層出して窮まらず。此れ又古未だ有らざる所なり。他人の和韻は一二首に過ぎず。元・白は則ち多きこと十六卷、凡て一千餘篇に至る。此れ又古未だ有らざる所なり。

帝圖

此を以て別に一格を成し一世を推倒せば、自ら傳はらざる能はず。蓋し元・白此一體歷代に無き所、此より奇を出すべきを覰ふ。自ら才力を量るに又之を爲すに餘あり。故に一往一來、彼此勝を角し、遂に之を以て場を擅にす。微之の上令狐相公書に謂へらく、同門生白居易、文字を驅駕するを愛し聲韻を窮極す。或は千言或は五百言。小生自ら揣るに以て之に過ぐるある能はず。往往戲れに舊韻を排し、別に新詞を創め、名づけて次韻となす、蓋し難を以て相挑まんと欲するのみと。白の與元書にも亦謂へらく、敵すれば則ち氣作り、急なれば則ち生を計る。以ふに足下の來章惟相困めんことを求む。故に老僕の報語覺えず太だ誇ると。此を觀ば以て二公才力の大を見るべし。今兩家次韻の詩、具に五言排律に在り。實に工力悉く敵し勝負を分たず。惟古詩往往、和、唱に及ばず。

と。元・白二公一たび此格を創めてより、後世の詩人皆その顰に倣ひ、技を馳せ工を爭ふに至れり。

二、白樂天の詩友と詩集

白樂天の詩友として最も關係深き者二人あり。元稹及び劉禹錫是れなり。元稹、字は微之、河南河内の人なり。幼にして孤、母鄭氏賢にして文あり。親しく書傳を授く。明經・書判に擧げられて等に入り、校書郎に補せられ、元和の初、樂天と倶に制擧に應じて第一に及第し、左拾遺に除せらる。その樂天と相知りしは當に此頃に在るべし。進んで監察御史となり、事に坐して江陵士曹參軍に貶せられ、居ること四年通州司馬に徙り、又四年にして虢州長史に移る。長慶の初、穆宗位を嗣ぐに及び、徵されて膳部員外郎となり、祠部郎中・知制誥に轉じ、召されて翰林に入りて中書舍人・承旨學士となり、工部侍郎同平章事に進む。卽ち宰相の任なり。居ること三月にして相を罷め、出されて同州刺史となり、二年にして越州に改められ、御史大夫・浙東觀察使を兼ぬ。越に在ること八年、太和の初、入りて尙書左丞・檢校戶部尙書となり、鄂州刺史・武昌軍節度使を兼ね、鄂に在ること三年。年五十三にして卒す。時に太和五年七月二十二日なり。尙書左僕射を贈らる。集あり元氏長慶集といふ。

稹少時より白樂天と唱和し、當時詩を言ふ者元・白と稱し、號して元和體といふ。然れども稹の性躁急にして顯榮を冀ひ、中ごろ廢斥せらるること十年、道を信ずること堅からずして守る所を喪ひ、官貴に附きて宰相となるや、裴度と相軋り、譏を淸議に貽すに至る。且つ局量狹小にして後進を侮蔑し、李賀・張祜の輩皆彼の爲に仕進を妨げられたりといふ。その人品固より取るに足らず。樂天の恬淡閑適と相似ざること遠し。其詩に至りては甌北詩話に、

元・白二人、才力本より相敵す。然れども香山洛に歸りてより以後、益老幹の枝なきを覺ゆ。心に稱ひて出で筆に隨ひて抒寫し、竝に工を求め好を見すの意なし。而も風趣橫生、一噴一醒。少年の時微之と各才情工力を以て勝を競ひしものに視ぶれば、更に一籌を進む。故に白自ら大家と

成し、而して元稹次ぐ。
といふもの、誠に然り。

元稹の死は、樂天の死に先だつこと十有五年。元稹の一たび死するや樂天は劉禹錫と唱和し、劉・白の稱あり。禹錫、字は夢得、彭城の人（中山の人ともいふ）貞元九年、進士の第に擢んでられ博學宏詞科に登り、淮西の幕府に從事たり。元和の初、入りて監察御史となる。時に王叔文事を用ふ。禁中に引き入れ之と圖議す。言從はざるはなし。屯田員外郎・判度支鹽鐵案に轉ず。叔文の失脚するや、坐して連州刺史に貶せられ、道に在りて朗州司馬に貶せらる。史に所謂八司馬の貶といふもの是れなり。遂に落魄して自ら聊んせず、吐詞多くは諷託幽遠なり。蠻俗巫を好む。嘗て騷人の旨に依り其聲に倚りて竹枝詞十餘篇を作る。武陵谿洞の間悉く之を歌ふ。居ること十年、召し還して將に之を郎署に置かんとす。自㆓朗州㆒至㆑京戲贈㆓諸君㆒と題する、

紫陌紅塵拂㆑面來。無㆓人不㆑道㆓看㆑花回㆒。玄都觀裏桃千樹。盡是劉郎去後栽。

の詩を賦するや、執政以て譏忿に渉るとなし、又出して播州に刺たらしむ。裴度其母の老いたるを憐み、爲に哀を帝に乞ふ。乃ち連州に改めらる。後、夔・和二州に徙り、徵されて主客郎中となる。また重游㆓玄都觀㆒と題する、

百畝庭中半是苔。桃花淨盡菜花開。種㆑桃道士歸㆓何處㆒。前度劉郎今又來。

の詩を作りしを以て、又出されて東都に分司たり。度仍ほ薦めて禮部郎中・集賢直學士となす。度の罷むるや出されて蘇州に刺たり。汝・同二州に徙り、太子賓客・分司東都に遷る。禹錫素より詩を善くす、晚年尤も精。不幸にして坐廢し、合ふ所寡し。乃ち文章を以て自適し、樂天と酬復すること頗る多し。會昌三年、七十二を以て卒す。檢校禮部尙書を贈らる。樂天詩を作りて之を哭す。集あり劉賓客文集といふ。其詩は含蓄足らざれども精銳餘あり。氣骨亦元白の上に在り。

白樂天の詩集はもと五本あり。最初に編纂せるものは白氏長慶集と題し、元稹の排纂に係る。稹、白氏長慶集序を作りて云く、

長慶四年、樂天杭州刺史より左庶子を以て詔還せらる。予時に會稽に刺たり。因つて盡く其文を徵するを得、手自ら排纂して五十卷と成す。凡て二千一百九十一首。前輩多く前集・中集を以て名となす。予以爲らく、陛下明年秋當に改元すべし。長慶是に訖ると。因つて號して白氏長慶集といふ。

と。長慶集收むる所の詩文は長慶二年冬に訖る。（事、樂天自ら作る所の長慶集後序に見ゆ）會昌五年五月一日、樂天又白氏文集自記を作りて云く、

白氏前に長慶集五十卷を著す。元微之序を爲る。後集二十卷、自ら序を爲る。今又續後集五卷、自ら記を爲る。前後七十五卷。詩筆（詩文なり）大小凡て三千八百四十首。集五本あり。一本は廬山東林寺經藏院に在り。（太和九年。二千九百六十四首。六十卷）一本は蘇州南禪寺經藏内に在り。（開成四年。三千四百八十七首。六十七卷）一本は東都聖善

寺鉢塔院の律庫樓に在り。（開成元年。三千二百五十五首。六十五卷）一本は姪龜郎に付し、一本は外孫談閣童に付し、各家に藏し後に傳へしむ。

と。而して樂天手定する所のものは皆題して白氏文集といふ。然れども古來七十五卷本をも長慶集と呼び慣せり。宋代既に三卷を亡す。今存するもの七十一卷、目錄を併せて七十二卷なり。本書據る所の淸の汪立名の白香山詩集は文を除きて專ら詩を編集せるものにして、考證編排特に精密、最も善本となす。

三、白詩の流傳

白樂天の詩が廣く世人に傳誦せられしことは既に前に述べたり。而も獨り支那本土に止まらず、遠く海外に及びしことは、元稹の白氏長慶集序に、

雞林の賈人市に求むること頗る切なり。自ら云ふ、本國の宰相每に百金を以て一篇に換ふ。其甚だ僞なるものは宰相輒ち能く之を辨別すと。篇章ありてより以來、未だ是の如く流傳の廣きものあらざるなり。

とあり、又樂天の白氏文集自記に、

日本・新羅諸國及び兩京の人家に傳寫する者は、此記に在らず。

とあるを以て明なり。白詩の一たび我邦に傳來するや文選と共に文人學士の必讀書となり、我が文壇に大影響を及ぼしたることは皆人の知る所なり。ここに少しく白詩に關する史實を擧げ以て其一斑を示さん。嵯峨帝嘗て河陽館に幸し、詩を賦して曰く、閉レ閣只聽朝暮鼓。上レ樓遙望往來船と。之を小野篁に示す、篁曰く、聖作玄淵、臣等の議すべきにあらず。然れども遙の字未だ妥ならざるに似たり。若し改めて空の字となさば奈何と。帝驚いて曰く、これ白氏の句なり。もと空に作る。卿の詩思既に樂天に同じきかと。この時白集一部ひとり御府に存せしのみといふ。嵯峨帝の御宇は唐の元和・長慶の交に當る。樂天尙ほ世に在り。その集早くも我邦に傳來せるを證すべし。菅原道眞太宰府に在り不レ出レ門と題する詩を賦す。その都府樓纔看二瓦色一。觀音寺只聽二鐘聲一の一聯は、白詩の遺愛寺鐘欹レ枕聽。香鑪峰雪撥レ簾看に模せるものなるべく、淸少納言が雪曉に簾を掲げて奇才を艶稱せられしも亦此句を諳記せるが爲なり。村上帝嘗て大江朝綱・菅原文時の二人をして、白集壓卷の詩一首を選び、各封を別にして上らしむ。帝親ら之を啓けば、同じく送二蕭處士遊二黔南一の詩なり。因つて嘆じて曰く、卿等の鑒識何ぞ乃ち符合すると。又藤原公任の倭漢朗詠集を撰するや、白氏の詩句を引くこと一百三十八條の多きに及びぬ。又高倉天皇は樂天の林間煖レ酒燒二紅葉一。石上題レ詩掃二綠苔一の二句に因つて仕丁の罪を問はざりきといふ。淸少納言の枕草紙に「文は文集（白氏文集をいふ。）文選、はかせの申文」といひ、兼好法師の徒然草に、「文は文選のあはれなる卷卷、白氏文集云云」といへる、皆白詩の珍重せられし

を證するに足る。

四、白樂天の思想

七十五年の壽命を保ち、浮沈定なき生涯を送り、三千八百餘首の詩篇を留め、憂へず懼れず又惑はず、脩然として此世を去りし樂天の思想人品は如何なりしか。彼自ら醉吟先生墓誌銘に記して曰く、外は儒行を以て其身を修め、中は釋敎を以て其心を治め、旁ら山水風月歌詩琴酒を以て其志を樂ましむ。

と。夫れ儒學の極致は治國平天下に在り。彼初め憲宗の恩遇を蒙り諫職に在るや、兼濟の志方に壯にして、慨然として天下を以て自ら任じ、屢上疏して時事を論す。然れども事志と違ひ江州に貶謫せらるるに及んでは、官情衰落して復た當世に意なく、ただ祿仕に甘んじ、天を怨みず人を尤めず、權位利勢の外に超然たり。孟子の所謂窮しては則ち其身を善くし、達しては則ち兼ねて天下を善くするもの、吾樂天に於て之を見る。彼開成三年、六十七歲の時、陶淵明の五柳先生傳に傚ひ醉吟先生傳を作りて云く、

醉吟先生は其姓字鄕里官爵を忘る。忽忽として吾が誰たるかを知らざるなり。宦遊三十載、將に老せんとして洛下に退居す。居る所に池あり五六畝、竹數千竿、喬木數十株、臺榭舟橋、體を具へて微なり。先生焉に安んず。家貧なりと雖も寒餒に至らず、年老いたりと雖も未だ耄に及ばず。性酒を嗜み琴に耽り詩に淫す。凡そ酒徒琴侶詩客多く之と遊ぶ。遊ぶの外、心を釋敎に棲ましむ。小中大乘の法を通學す。嵩山の僧如滿とは空門の友たり。平泉の客韋楚とは山水の友たり。彭城の劉夢得とは詩友たり。安定の皇甫朗之とは酒友たり。一たび相見る每に欣然として歸るを忘る。中略長吁太息して曰く、吾天地の間に生れ、才と行と古人に逮ばざること遠し。而るに黔婁よりも富み、顏淵よりも壽に、伯夷よりも飽き、榮啓期よりも樂み、衞叔寶よりも健なり。幸甚幸甚。餘は何をか求めんや。若し吾が好む所を捨つれば何を以てか老を送らんと。因つて自ら詠懷の詩を吟じて云く、拋レ琴榮啓樂。縱レ酒劉伶達。放レ眼看二青山一。任二頭生二白髮一。不レ知天地內。更得二幾年活一。從レ此到レ終レ身。盡爲二閑日月一。と。吟じ罷めて自ら哂ひ、甕を揭げ醅を撥して又數杯を引く。兀然として醉ふ。既にして醉復た醒め、醒めて復た吟じ、吟じて復た飮み、飮みて復た醉ひ、醉吟相仍り循環の若く然り。是に由りて以て身世を夢にし富貴を雲にし、天地に幕席し百年を瞬息するを得、陶陶然たり、昏昏然たり、老の將に至らんとするを知らず。古の所謂全きを酒に得る者なり。故に自ら號して醉吟先生と爲す。下略

と。以て優游自適の狀を察すべし。而して樂天が賚りて以てこの知足安分、樂天委命の思想を養ひしものは佛敎なり、禪學なり。早梳レ頭に云く、

夜沐早梳レ頭。窗明秋鏡曉。颯然握中髮。一沐知二一少一。年事漸蹉跎。世緣方繳繞。不レ學二空門法一。老病何由了。未レ得二無生心一。白頭亦爲レ夭。

と。自覺に云く、

朝哭二心所一レ愛。暮哭二心所一レ親。親愛零落盡。安用身獨存。幾許平生觀。無レ限骨肉恩。結爲二腸間痛一。聚爲二鼻頭辛一。悲來四肢緩。泣盡雙眸昏。所以年四十。心如二七十人一。我聞浮圖敎。中有二解脫門一。置レ心爲二止水一。視レ身如二浮雲一。斗二擻垢穢衣一。度二脫生死輪一。胡爲戀二此苦一。不レ去猶逡巡。回念發二弘願一。願此見在身。但受二過去報一。不レ結二將來因一。誓以二智慧水一。永洗二煩惱塵一。不レ將二恩愛子一。更種中悲憂根上。

と。是等の詩を讀まば、樂天が佛道を修して心の和平を求めしことを知るに足らん。當時は道敎思想大に流行し、仙藥を煉り不老長生を冀ふ者多かりしことは、醉吟先生傳・夢仙・海漫漫等に由りて明なるが、彼は常に此等の輩を冷笑せり。されば彼の思想は道敎思想に本づくものなきにあらずと雖も、佛敎に負ふ所極めて多しと謂はざるべからず。杜少陵を以て儒敎的詩人、李太白を以て道敎的詩人といふべくんば、彼は佛敎的詩人といふべきなり。

釋敎を以て其心を治めたる樂天は、更に詩酒を以て消遣の具に供したり。酒を以て胸中の憂を銷するは支那詩人の常情なるを以て、繁を厭ひて復た之を詳述せず。

五、白氏世系表

- 始祖勝（楚公）……裔孫起（爲二秦將一）─仲（封二於太原一）……二十六代……七世祖建（北齊五兵尚書、贈二司空一、宅在二韓城一）─士通（唐利州都督）─志善（朝散大夫、尚衣奉御）
  - 溫（朝散大夫、檢校都官郎中、徙二下邽一）
    - 次子鏻（揚州錄事參軍）─季康（溧水令）─敏中（太傅）
    - 六子鍠（鞏縣令）
      - 季庚（襄州別駕）
        - 幼文（浮梁主簿）
        - 居易……阿新
        - 行簡（主客郎中）─龜郎
        - 幼美（金剛奴）
      - 季般（沛縣令）
      - 季軫（許昌令）
      - 季寧（河南參軍）
      - 季平（鄉貢進士）

六、白樂天年譜

日本年代	支那年代	年齡	紀事
光仁天皇寶龜三年壬子	唐代宗大曆七年	一歲	正月二十日、鄭州新鄭縣東郭ノ宅ニ生ル。時ニ父季庚四十四歲、母潁川ノ陳氏十八歲。
寶龜七年丙辰	大曆十一年	五歲	詩ヲ作ルコトヲ學ブ。

寶龜十年己未	大曆十四年	八歲	五月代宗崩ジ德宗位ニ卽ク。
寶龜十一年庚申	德宗建中元年	九歲	暗ニ聲韻ヲ識ル。父季庚徐州彭城ノ令トナル。
桓武天皇天應元年辛酉	建中二年	十歲	父季庚徐州別駕ニ超拜ス。
桓武天皇延曆二年癸亥	建中四年	十二歲	十月涇原ノ兵亂ヲナス。朱泚反シテ長安ニ據ル。帝奉天ニ蒙塵ス。
延曆三年甲子	德宗興元元年	十三歲	正月、李希烈僭號ス。七月、車駕長安ニ還ル。
延曆五年丙寅	德宗貞元二年	十五歲	四月、淮西ノ將陳仙奇、李希烈ヲ殺シテ降ル。以テ淮西節度使トナス。七月、吳少誠仙奇ヲ殺ス。少誠ヲ以テ留後トナス。吐蕃入寇ス。居易難ヲ避ケテ蘇杭ノ間ニ在リ。
延曆六年丁卯	貞元三年	十六歲	初メテ長安ニ至リ、文ヲ袖ニシテ顧況ニ謁ス。
延曆十三年甲戌	貞元十年	二十三歲	父季庚襄陽ノ官舍ニ卒ス（季庚ハ衢州ヨリ襄州ニ移ル。其年月考フベカラズ）年六十六。
延曆十七年戊寅	貞元十四年	二十七歲	九月、淮西ノ吳少誠反ス。陽城ヲ貶ス。
延曆十八年己卯	貞元十五年	二十八歲	兄幼文浮梁ノ主簿トナル。居易從ヒ行ク。宣州ノ試ニ中ル。
延曆十九年庚辰	貞元十六年	二十九歲	二月、中書舍人高郢ガ下ニテ及第ス。實ニ第四人ナリ。
延曆二十一年壬午	貞元十八年	三十一歲	鄭珣瑜選部ヲ領ス。居易試判拔萃科ニ及第シ、祕書省校書郎ヲ授ケラル。

延曆二十二年癸未	貞元十九年	三十二歲	始メテ長安ニ於テ假居ヲ求メ、常樂里ノ故ノ關相國ノ東亭ヲ得テ之ニ居ル。
延曆二十三年甲申	貞元二十年	三十三歲	渭上ニト居ス。
延曆二十四年乙酉	順宗永貞元年	三十四歲	正月、德宗崩ジ、順宗位ニ卽ク。韋執誼・王伾・王叔文等事ヲ用フ。八月、順宗位ヲ太子ニ傳ヘ、自ラ太上皇ト稱ス。憲宗位ニ卽ク。
平城天皇大同元年丙戌	憲宗元和元年	三十五歲	正月、順宗崩ズ。四月、元稹ト制擧ニ應ジ、元稹ハ第三等、居易ハ第四等ニ入ル。元稹ハ拾遺トナリ、居易ハ盩厔縣尉トナル。
大同二年丁亥	元和二年	三十六歲	集賢校理トナリ、十一月、翰林學士ヲ授ケラル。
大同三年戊子	元和三年	三十七歲	制策考官トナル。四月、左拾遺ヲ授ケラル。此年若クハ前年楊氏ヲ娶ル。楊穎士ノ從父妹ナリ。
大同四年己丑	元和四年	三十八歲	去年冬ヨリ久シク旱ス。春ニ至リテ始メテ雨フル。賀雨ノ詩ヲ作ル。女金鑾生ル。
嵯峨天皇弘仁元年庚寅	元和五年	三十九歲	監察御史元稹、江陵士曹ニ貶セラル。居易上疏シテ元稹ヲ救ハントス。五月、京兆戶曹參軍ニ除セラル。女金鑾死ス。
弘仁二年辛卯	元和六年	四十歲	四月三日、母陳氏長安宣平里ノ第ニ卒ス。年五十七。居易母ノ喪ニ丁リ、渭上ニ退居ス。
弘仁五年甲午	元和九年	四十三歲	秋八月、悟眞寺ニ遊ブ、詩アリ。冬入朝、太子左贊善大夫ニ拜セラル。
弘仁六年乙未	元和十年	四十四歲	正月、吳元濟反ス。三月、劉禹錫ヲ以テ朗州刺史トナス。五月、御史中丞裴度ヲ遣シ、淮西行營ヲ宣慰セシム。六月、賊アリ宰相武元衡ヲ殺ス。裴度ヲ相トス。居易上疏シテ武元衡ヲ刺セル賊

			ヲ捕ヘンコトヲ請フ。江州司馬ニ貶セラル。
弘仁八年丁酉	元和十二年	四十六歲	九月、崔羣同平章事タリ。居易江州ニ在リ。廬山ノ香鑪峯下ニ草堂ヲ築ク。十月、李愬夜蔡州ヲ襲ヒ呉元濟ヲ擒ニス。
弘仁九年戊戌	元和十三年	四十七歲	十二月、忠州刺史ニ除セラル。
弘仁十年己亥	元和十四年	四十八歲	正月、佛骨ヲ迎フ。韓愈之ヲ論ジテ潮州ニ貶セラル。三月二十八日、忠州ニ到ル。十月、崔羣罷メテ湖南觀察使トナル。
弘仁十一年庚子	元和十五年	四十九歲	正月、憲宗暴ニ中和殿ニ崩ズ。閏月穆宗位ニ卽ク。五月、元稹ヲ以テ祠部郎中、知制誥トナス。冬、居易忠州ヨリ召シ還サレ、尙書司門員外郎ニ拜セラレ、主客郎中、知制誥ニ轉ズ。
弘仁十二年辛丑	穆宗長慶元年	五十歲	朝散大夫ヲ加ヘラレ、始メテ緋ヲ著ル。上柱國ニ轉ジ、中書舍人、知制誥ニ除セラル。弟行簡拾遺ヲ授ケラル。從弟敏中及第ス。李宗閔ヲ貶ス。
弘仁十三年壬寅	長慶二年	五十一歲	二月、元稹同平章事トナル。六月、元稹罷メテ同州刺史トナル。居易外任ヲ求メ、七月、杭州刺史ニ除セラル。十月杭州ニ到ル。
弘仁十四年癸卯	長慶三年	五十二歲	三月、牛僧孺同平章事トナル。冬、元稹浙東觀察、越州刺史ニ移ル。
淳和天皇天長元年甲辰	長慶四年	五十三歲	正月穆宗崩ジ、敬宗位ニ卽ク。是年秩滿チ、五月杭州ヲ去リ、左庶子ニ除セラレ、東都ニ分司ス。洛中履道里ニ於テ故ノ散騎常侍楊馮ノ宅ヲ得テ之ニ居ル。冬、白氏長慶集成ル。

天長二年乙巳	敬宗寶曆元年	五十四歲	正月、牛僧孺罷メテ武昌節度使トナル。三月、蘇州刺史ニ除セラル。五月任ニ到ル。
天長三年丙午	寶曆二年	五十五歲	居易病ヲ以テ官ヲ免ズ。冬弟行簡死ス。十二月宦官劉克明帝ヲ弑ス。
天長四年丁未	文宗太和元年	五十六歲	三月、徵サレテ祕書監ニ拜セラル、金紫ヲ賜フ。
天長五年戊申	太和二年	五十七歲	正月、刑部侍郎ニ除セラル。
天長六年己酉	太和三年	五十八歲	七月、李宗閔同平章事トナル。當時二李ノ黨爭起ル。居易病ト稱シテ東ニ歸ル。太子賓客ヲ以テ東都ニ分司ス。此ヨリ復タ出デズ。是冬阿崔生ル。
天長八年辛亥	太和五年	六十歲	河南尹ニ除セラル。阿崔死ス。七月、元稹武昌ニ薨ズ。
天長十年癸丑	太和七年	六十二歲	二月、李德裕同平章事トナル。四月、病ヲ以テ河南尹ヲ免ゼラル。再ビ賓客ヲ授ケラレ分司ス。
仁明天皇承和三年丙辰	文宗開成元年	六十五歲	太子少傅、分司トナリ、馮翊縣侯ニ進封セラル。
承和六年己未	開成四年	六十八歲	三月晉公裴度薨ズ。十月、居易風痺ノ疾ヲ得テ諸妓女ヲ放ツ。
承和八年辛酉	武宗會昌元年	七十歲	正月、改元。
承和九年壬戌	會昌二年	七十一歲	太子少傅ヲ罷メ、刑部尙書ヲ以テ致仕ス。秋、劉禹錫卒ス。
承和十二年乙丑	會昌五年	七十四歲	三月、洛中ニ於テ七老會ヲナシ、夏、九老圖ヲ作ル。白氏文集成ル。
承和十三年丙寅	會昌六年	七十五歲	三月、帝崩ジ宣宗位ニ卽ク。八月、居易卒ス。尙書右僕射ヲ贈ラル。十一月、龍門ニ葬ル。

七、白樂天の傳記

白樂天、名は居易、晩に香山居士・また醉吟先生と稱す。樂天は其字なり。唐の代宗の大曆七年壬子正月二十日、河南の鄭州新鄭縣東郭の宅に生る。家もと楚の公族白公勝より出づ。傳へて白起に至り、秦の將となり攻城野戰の功あり。事を以て死を賜ふ。起の子を仲といふ。始皇の時、父の功を以て太原（山西省太原府）に封せらる。樂天自ら稱して「太原の白居易」といふは之に由るなり。これより二十六世を歷て建に至る。北齊に仕へて五兵尙書となり司空を贈られ、韓城（陝西省同州府韓城縣）に居る。その曾孫溫に至り、唐に仕へて檢校都官郎中となり、下邽（陝西省西安府渭南縣の東北）に徙る。溫の第六子を鍠といふ。鞏縣の令となる。鍠は幼より學を好み文を善くし、殊に五言詩に工にして集十卷ありきといふ。鍠五子あり、長を季庚といふ。天寶の末、明經（科目の名）より出身し、檢校大理少卿兼襄州別駕に終る。季庚四子あり。長を幼文といひ、饒州浮梁縣（江西省饒州府浮梁縣）主簿たり。次は則ち樂天。次は行簡。季は金剛奴といひ、九歲にして夭す。

樂天生れて六七月の時、乳母抱いて書屛の下に弄ぶ。之無の二字を指して示す者あり。當時口未だ言ふ能はずと雖も、心已に默識す。後此二字を問ふ者あれば必ず之を指して差はず。五六歲に及んで詩を作ることを學び、九歲にして聲韻を諳識せりといふ。（事與二元九一書に見ゆ）その幼にして聰慧人に絕したるを見るに足る。十五六歲の時、詩を袖にして著作郎顧況に謁す。顧況は才を恃みて容易に人に許可せず。其卷上に白居易と署したるを見て謔して曰く、長安は物貴し。居大に易からずと。その野火燒不レ盡。春風吹又生。の二句を讀むに及び、爽然として自失して曰く、句あり此の如し。居亦何ぞ難からんと。嘆賞すること之を久うせりといふ。この二句、賦二得古原草一送別と題する詩中に在り。今その全詩を擧ぐれば左の如し。

離離原上草。一歲一枯榮。野火燒不レ盡。春風吹又生。遠芳侵二古道一。晴翠接二荒城一。又送二王孫一去。萋萋滿二別情一。

また年十七の時、王昭君を詠ずる二絕句を作る。其二に云く、

漢使却廻憑寄レ語。黃金何日贖二蛾眉一。君王若問二妾顏色一。莫レ道不レ如二宮裏時一。

と。措詞優婉にして迫切の態なし。樂天已に此詩才を有し、之に加ふるに苦學勉勵を以てす。嘗て與二元九一書に於て其狀を述べて云く、

二十より已來、晝は賦を課し、夜は書を課し、間また詩を課し、寢息に遑あらず、以て口舌瘡を成し、手肘胝を成すに至る。既に壯にして膚革豐盈ならず。未だ老いずして齒髮早く衰白し、瞥瞥然として飛蠅垂珠の眸子中に在るが如く、動もすれば萬を以て數ふ。蓋し以ふに苦學力文の致す所なり。

と。その苦學察するに餘あり。且つ家貧にして多故。衣食に奔走したることは、秋暮西歸途中書レ情と題する詩に、

耿耿旅燈下。愁多常少レ眠。思レ鄕貴二早發一。發在二雞鳴前一。九月草木落。平蕪連二遠山一。秋陰和二曙色一。萬木蒼蒼然。去秋偶東游。今秋始西旋。馬瘦衣裳破。別レ家來二年。憶レ歸復愁レ歸。歸無二一囊錢一。心雖レ非二蘭膏一。安得レ不二自燃一。

といへるを見て知るべし。されど樂天は志氣少しも撓まず。かくて貞元十六年、進士の試驗に及第し、十八年、試判拔萃に及第し、祕書省校書郎を授けられ、家を擧げて長安に移り、常樂里に假寓し、やがて渭村に卜居す。元和元年、制擧に應じて策、策四等に入り、盩厔縣尉に補せられ、翌年集賢校理を歷て翰林學士に任せられ、三年左拾遺を授けらる。樂天は少年の時より天下を匡濟するの志あり。幸にして憲宗に用ひられ諫官となるを得たれば、素志を達するの機到れりとなし、苟も國政を裨補すべきあれば、知りて言はざるはなし。憲宗も亦銳意治を圖り務めて言路を開かんと欲せしかば、樂天の言多くは聽用せらる。樂天また詩を作りて時政を諷刺し、以て明主の一顧を冀へり。與二元九一書に當時の事情を述べて云く、

朝に登りてより來、年齒漸く長じ、事を閱すること漸く多し。人と言ふ毎に多く時務を詢ふ。書史を讀む每に多く治道を求む。始めて知る文章は合に時の爲に著すべく、歌詩は合に事の爲に作るべきを。是時皇帝初めて位に卽き、宰府に正人あり、屢璽書を降して人の急病を訪ふ。僕此日に當り擢んでられて翰林に在り、身は是れ諫官なり。手に諫紙を請うて啓奏するの外、以て人の病を救濟し時の闕を裨補すべくして、而も指言するを難る者あれば、輒ち之を詠歌し、稍稍遞進して上に聞し、上は以て宸聽を廣め憂勤に副ひ、次は以て恩獎に酬い言責を塞ぎ、下は以て吾が平生の志を履まんと欲す。豈に圖らんや志未だ就らずして悔已に生じ、言未だ聞せずして謗已に成らんとは。又請ふ左右の爲に終に之を言はん。凡そ僕が賀レ雨詩を聞いては、衆口籍籍として已に宜しきにあらずと謂ふ。僕が哭二孔戡一詩を聞いては衆面脈脈として盡く悅ばず。秦中吟を聞いては則ち權豪貴近の者相目て色を變ず。樂遊園寄二足下一詩を聞いては則ち政柄を執る者腕を扼す。宿二紫閣村一詩を聞いては則ち軍要を握る者切齒す。大率此の如し。徧く擧ぐべからず。

と。されば事、志と違ひ、是等の詩は却つて樂天に禍するの因となれるなり。元和五年、任滿ちて當に官を改むべし。憲宗詔して樂天をして自ら擇ばしむ。樂天乃ち姜公輔（唐の日南の人）が親を養はんが爲に京兆府の判司たらんことを求めし例の如くせんことを乞ふ。帝因つて京兆戶曹參軍に除す。翌年母陳氏を喪ひ、官を罷めて渭村に退居す。喪に居ること三年、太子左贊善大夫を授けらる。翌十年六月賊あり宰相武元衡を通衢の中に殺し、朝野震駭す。樂天首として上疏し、速に賊を捕へ以て朝廷の恥を雪がんことを乞ふ。樂天は當時諫官に在らず。されど一片憂國の念自ら禁ずる能はざりしなり。與二

楊虞卿書に云く、

僕以爲へらく、書籍より以來未だ此事あらず。國辱めらるれば臣死すとは、此れ其時なるかと。苟も見る所あれば畎畝皁隷の臣と雖も、當に默默たるべからず。況んや班列に在りて能く其痛憤に勝へんや。故に武相の氣平明に絶え、僕の書奏日午に入る。

と。此言以て彼が憂憤の情を見るべし。然るに宰相・諫官皆その出位の言たるを惡む。會素より樂天に快からざる者あり、又誣告して曰く、居易の母花を看るに因り井に墮ちて死す。而るに居易は「賞花」及び「新井」の詩を作る。甚だ名敎を傷ると。かくて樂天は江州司馬に貶せらる、江州は江西省九江府にして南に匡廬の山あり、北に潯陽の江あり。地瘴癘少く、溢魚頗る肥ゆ。常に其間に優游自適し、遷謫を以て意に介せず。與徵之書に云く、

僕去年秋、始めて廬山に遊び、東西二林寺の間、香鑪峯下に到り、雲木泉石、勝絶第一なるを見、愛して捨つる能はず。因つて草堂を置く。前に喬松十數株、修竹千餘竿あり。青蘿を墻垣となし、白石を橋道となす。流水舍下を周り、飛泉簷間に落ち、紅榴白蓮池砌に羅生す。每に一たび獨り往き、動もすれば旬日に彌る。平生好む所の者、盡く其中に在り。唯歸るを忘るるのみならず、以て終老すべし。

と。十三年冬、忠州刺史に徙る。十五年正月、憲宗暴に崩じ、穆宗位に卽く。冬召されて京師に還り尙書司門員外郞に拜せられ、主客郞中、知制誥となり、翌長慶元年、中書舍人李宗閔といふ者、禮部侍郞錢徽に託して己の親戚某を及第せしむ。李德裕は宗閔が嘗て其父吉甫を彈劾せしことを怨む。時に李德裕・元稹・李紳竝に帝に寵あり。之を帝に訴ふ。帝乃ち樂天に詔して中書舍人王起と再試驗を行はしむ。是れ所謂「二李の爭」李宗閔と李德裕の始なり。これより牛僧孺は李宗閔と結託して德裕と爭ひ、二李の爭は施いて牛李の爭となり、朝臣各其一方に結びて朋黨の爭を續くること四十餘年なり。かくて樂天は中書舍人に除せられ、穆宗の人を制擧するや居易每に考策官たり。然れども穆宗荒縱、宰相其人に非ず。河朔復た亂る。樂天屢上疏して其事を論せしも終に用ひられず。因つて外任を乞ひ、二年七月杭州刺史となる。樂天の杭州に在るや始めて堤を築いて錢塘湖を捍ぎ、其水を鍾洩して灌漑に便にし、復た嘗て李泌の開鑿せし六井を浚ひ、民皆其汲に賴る。四年穆宗崩じ敬宗立つ。樂天任滿ちて太子左庶子に拜せられ東都洛陽に分司す。洛陽の履道里の故の散騎常侍楊馮の宅を買ひて之に居る。當時園池水石の間に、詩酒の樂をなししことは其池上篇序に詳なり。その翌年また蘇州刺史に轉じ、居ること一年、病を以て免せらる。文宗の太和元年召されて祕書監となり、尋いで刑部侍郞に遷る。樂天の妻の從父兄に楊虞卿といふ者あり李宗閔と善し。樂天黨爭の渦中に入ることを屑しとせず、三年病と稱して洛陽に至り、太子賓客を以て東都に分司たり。五年河南尹に除せられ、七年病を以て河南尹を免せられ、再び賓客分司を授けらる。開成元年、同州刺史に除せられし

も辭して就かず。尋いで太子少傅を授けられ馮翊縣開國侯に進封せらる。四年冬病に罹り枕に伏すること累月。乃ち家に畜へし所の諸妓女を放ち、自ら醉吟先生墓誌銘を作る。（誌中に會昌六年月日を以て終る。春秋七十有五などとあるは後人の補塡ならん。）病中と雖も吟詠して輟めず。武宗の會昌二年、太子少傅を罷め、刑部尙書を以て致仕し、香山の僧如滿と香火の社を結び、白衣をまとひ鳩杖を曳き肩輿に乘りて往來し、自ら香山居士と稱す。五年三月二十四日、履道坊の宅に於て七老會をなす。時に樂天年七十四にして胡杲（八十九）、吉皎（八十八）劉眞（八十七）鄭據（八十五）盧貞（八十三）張渾（七十七）の諸老會に與る。同年五月、更に李元爽（百三十六）如滿（九十五）を加へ、前の七老と共に其形貌を寫して九老圖を作る。翌會昌六年八月、病んで卒す。年七十五。尙書右僕射を贈る。十一月龍門に葬る。（李商隱の白公墓碑銘序に據る。）宣宗詩を以て之を弔して曰く、

綴レ玉聯レ珠六十年。誰教ニ冥路作ニ詩仙一。浮雲不レ繫名居易。造化無爲字樂天。童子解吟長恨曲。胡兒能唱琵琶篇。文章已滿行人耳。一度思レ卿一愴然。

と。

樂天の妻楊氏は楊穎士の從父妹なり。其死は樂天の後に在り。樂天が楊氏を娶りしは何年なるか明ならざれども、蓋し元和の初なるべし。四年一女子を擧げ、金鑾と名づけたり。三歳にして夭す。太和三年、樂天年五十八の時、始めて男子を生み崔兒と名づけしが、是れ亦三歳にして死す。ただ一女子あり、監察御史談弘謩（醉吟先生墓誌銘に見ゆ）に嫁せり。姪孫阿新を養つて嗣となす。李商隱の白公墓碑銘に子景受とあるは阿新なりや否や。是れ亦審ならず。醉吟先生墓誌銘に味道・景回・晦之の三姪あることを記せるも、何人の子なるかを明記せず。

弟行簡、字は知退、貞元の末の進士にして祕書省校書郞を授けられ、元和四年、盧坦が劍南東川の府に辟さる。罷めて潯陽に歸り、樂天に從ふ。樂天朝に入りて尙書郞となるや、行簡も亦左拾遺を授けられ、司門員外郞より主客郞中に累遷す。寶曆二年冬病んで卒す。その詞藻兄の風あり。樂天友愛人に過ぐ。兄弟相待つこと賓客の如し。行簡子あり龜兒といふ。樂天自ら敎養して名を成さしむ。阿新それ或は龜兒の子か。

從弟白敏中あり。字は用晦、長慶の初進士に及第し、會昌の初、殿中侍御史となり、翰林學士・中書舍人に遷り、咸通中、司徒・門下平章事に累拜し、中書令を加へらる。太子大師を以て致仕す。

昭和三年八月

佐久節識

白樂天詩集 卷一

唐 白居易 著
清 汪立名 編訂
日本 佐久節 譯解

諷諭一 古調詩五言 凡六十四首

賀雨　雨を賀す

(一)皇帝嗣(二)寶曆。元和三年冬。　皇帝寶曆を嗣ぐ、元和三年冬。
自冬及春暮。不雨旱(三)爞爞。　冬より春暮に及ぶまで、雨ふらずして旱爞爞たり。
上心念下民。懼歲成災凶。　上心に下民を念ひ、歲の災凶を成さんことを懼れ、
遂下罪己詔。(四)殷勤告萬邦。　遂に己を罪するの詔を下し、殷勤に萬邦に告ぐ。
帝曰予(五)一人。繼天承祖宗。　帝曰く予一人、天に繼ぎ祖宗に承け。

憂勤不遑(六)寧。夙夜心忡忡(七)。　憂勤して遑寧せず、夙夜心忡忡たり。
元年誅劉闢(八)。一擧靖巴邛。　元年劉闢を誅し、一擧して巴邛を靖んず。
二年戮李錡(九)。不戰安江東。　二年李錡を戮し、戰はずして江東を安んず。
顧惟眇(一〇)眇德。遽有巍巍(一一)功。　顧みて惟ふ眇眇の德、遽に巍巍の功有り。
或者天降沴。無乃儆予躬。　或者天沴を降し、乃ち予が躬を儆むる無からんかと。
上思答天戒。下思致時邕(一二)。　上は天戒に答へんことを思ひ、下は時邕を致さんことを思ふ。
莫如率其身。慈和與儉恭。　其身を率ゐるに如くは莫し、慈和と儉恭と。
乃命罷進獻。乃命賑飢窮。　乃ち命じて進獻を罷め、乃ち命じて飢窮を賑ひ、
宥死降五刑(一三)。已(一四)責寬三農。　死を宥して五刑を降し、責を已めて三農を寬うす。
宮女出宣徽(一五)。廐馬減飛龍(一六)。　宮女は宣徽より出し、廐馬は飛龍を減す。
庶政靡不擧。皆出自宸(一七)衷。　庶政擧らざる靡し、皆宸衷より出づ。
奔騰道路人。傴僂(一八)田野翁。　奔騰する道路の人、傴僂する田野翁。
歡呼相告報。感泣涕沾胷。　歡呼して相告報し、感泣して涕胷を沾す。

順人人心悅。先(一九)天天意從。　人に順つて人心悅び、天に先つて天意從ふ。
詔下纔七日。和氣生沖融(二〇)。　詔下りて纔に七日、和氣沖融を生じ、
凝爲油油雲。散作習習(二一)風。　凝つて油油たる雲と爲り、散じて習習たる風と作る。
晝夜三日雨。淒淒復濛濛。　晝夜三日の雨、淒淒また濛濛。
萬心春熙熙(二二)。百穀青芃芃(二三)。　萬心春にして熙熙たり、百穀青くして芃芃たり。
人變愁爲喜。歲易儉爲豐。　人は愁を變じて喜と爲し、歲は儉を易へて豐と爲る。
乃知王者心。憂樂與衆同。　乃ち知る王者の心、憂樂衆と同じきことを。
(二四)皇天與后土。所感無不通。　皇天と后土と、感ずる所通せざるは無し。
(二五)冠珮何鏘鏘。將相及王公。　冠珮何ぞ鏘鏘たる、將相及び王公。
蹈舞呼萬歲。列賀明庭中。　蹈舞して萬歲を呼び、列して明庭の中に賀す。
(二六)小臣誠愚陋。職忝金鑾(二七)宮。　小臣誠に愚陋、職金鑾の宮を忝うす。
(二八)稽首再三拜。一言獻天聽(二九)。　稽首して再三拜し、一言天聽に獻ず。
君以明爲聖。臣以直爲忠。　君は明を以て聖と爲し、臣は直を以て忠と爲す。

敢賀レ有二其始一。亦願レ有二其終一。　敢て其始あるを賀し、亦其終あらんことを願ふ。

【字解】【一】皇帝　唐の憲宗。元和は其年號。【二】寶曆　皇位をいふ。【三】旱熇熇　旱魃で雨のふらぬこと。【四】殷勤　親切丁寧に。【五】予一人　天子自ら謂ふ。【六】遑寧　安逸なり。【七】忡忡　憂ふる貌。【八】劉闢　劍南西川節度使たり、桀驁にして詔命に從はず。【九】李錡　浙西鹽鐵轉運使・鎭海節度使となり、恩を恃んで驕横なり。【一〇】眇眇　微小の貌。【一一】巍巍　高大の貌。【一二】時邕　邕は雍に同じ、やはらぐ意。【一三】五刑　隋以後は、笞・杖・徒・流・死をいふ。【一四】已責　責は債に通ず、夫役を免除したこと。三農は周禮註に、平地農・山農・澤農。【一五】宣徽　官署の名、内侍の事を掌る。【一六】飛龍　良馬の名。李白の詩に、勅賜飛龍内廐馬。【一七】宸衷　天子の御心。【一八】傴僂　せむし。一に恭敬の貌。【一九】先天　易經に、「天に先だちて天違はず、天に後れて天時を奉ず。」【二〇】沖融　沖は虛なり和なり。【二一】習習　風の吹くさま。【二二】熙熙　のびのびすること。【二三】芃芃　茂る貌。【二四】皇天　天なり。后土は地なり。【二五】冠珮　珮は佩に同じ、將相の腰に佩ぶ玉。鏘鏘は玉の聲。【二六】小臣　白樂天自ら謂ふ。【二七】金鑾　梁の時、思政殿を改めて金鑾殿となし、大學士一員を置いたので、後翰林院の稱となる。白樂天は元和二年に翰林學士を授けられた。【二八】稽首　稽は「とどむ」と訓ず、首地に至りて稽留するなり、最も重き禮。【二九】天聰　天聽といふが如し。

【題義】　唐の憲宗の元和四年閏三月、久旱の後、一雨三日、民皆喜色あり。公因つて此詩を作る。

【詩意】　元和三年冬から翌年の春の末まで旱が續いて、トント雨が降らなかつたので、陛下は饑饉にでもなりはせぬかと御心を痛め給ひ、遂に己を罪するの詔を下して、天下に布告せられた。朕帝位を繼ぎてより以來、夙夜憂勤して寸時も安逸を事とせず。元年には劉闢を誅し、一擧して巴邛の地方を安んじ、二年には李錡を誅し、兵を用ひずして江東の地方を平げぬ。顧みて自ら惟ふ、不德の身を以て、この大功を立つ。天それ或は災を降して朕が躬を戒むるにはあらずやと。上は天の戒に答へんことを思ひ、下は時和を致さんことを思ふ。如かず慈和と恭儉とを以て、自ら身を率ゐんには」と。乃ち一切の進獻を禁じ窮乏を賑ひ、刑罰を省き夫役を免じ、宮女を放ち廐馬を減じなどせられたので、治績が大に擧つた。これ皆陛下の御心から出たのであつた。臣下の進言に本づいたのではない。是に於てか、田夫野人に至るまで奔走恭敬し、歡呼抃舞して天恩に答へ、感泣して胸を沾した。すべて民意に順應すれば民悅び、天時に先だつても天意必ず己に從ふものである。さればにや、詔の下つた七日目に、和氣天地に滿ち、油然として雲を起し習習たる風を生じ、晝夜ぶつとほしに三日の間大雨が降り續き、萬物熙熙として春色を呈し、禾穀靑靑として繁茂し、嚮の愁は變じて喜となり、饑饉は易つて豐年となつた。此を觀るにつけても、王者民と憂樂を同うすれば、天地も爲に感通することがわかる。因つて王公將相相率ゐて庭中に立ち列び、歡呼抃舞して萬歲を唱へた。愚昧なる我が身も、翰林學士の榮職を 辱 うする所から、陛下に稽首再拜して一言を天聰に達した。すべて君は聰明を以て聖となし、臣は直言を以て忠となすのである。今陛下は始あるを賀するに因り、願はくは終まで之を全うし給はんことを祈る次第である。

【餘論】　起首から皆出レ自二宸衷一までを第一解とし、憲宗が災に遇うて修省した事實を歷敍した。奔騰道路人から歲易レ儉爲レ豐までを第二解とし、雨を喜ぶ情を曲盡してゐる。以下を第三解とし、本題に

入り雨を賀する意を述べ、規戒の詞を以て結んだ。情辭剴切、忠愛の情が溢れてゐる。

讀張籍古樂府(一)

張籍が古樂府を讀む

張君何爲者。業文(二)三十春。
張君は何爲る者ぞ、文を業とすること三十春。

尤工樂府詩。擧代少其倫。
尤も樂府の詩に工なり、代を擧げて其倫少し。

爲詩意如何。(三)六義互鋪陳。
詩を爲る意如何、六義互に鋪陳す。

風雅比興外。未嘗著空文。
風雅比興の外、未だ嘗て空文を著さず。

讀君(四)學仙詩。可諷放佚君。
君が學仙の詩を讀めば、放佚の君を諷す可し。

讀君(五)董公詩。可誨貪暴臣。
君が董公の詩を讀めば、貪暴の臣を誨ふ可し。

讀君(六)商女詩。可感(七)悍婦仁。
君が商女の詩を讀めば、悍婦の仁なるを感ず可し。

讀君勸齊詩。可勸(八)薄夫敎。
君が勸齊の詩を讀めば、薄夫に敎を勸む可し。

上可裨敎化。舒之濟萬民。
上は敎化を裨ふ可し、之を舒ぶれば萬民を濟ふ。

下可理情性。卷之善一身。
下は情性を理む可し、之を卷けば一身を善くす。

始從(九)靑衿歲。迨此白髮新。
靑衿の歲より始め、此白髮の新なるに迨ぶまで、

日夜秉筆吟。心苦力亦勤。
日夜筆を秉りて吟じ、心苦み力も亦勤む。

時無(一〇)采詩官。委棄如泥塵。
時に采詩の官無ければ、委棄せられて泥塵の如し。

恐君(一一)百歲後。滅沒人不聞。
恐らくは君が百歲の後、滅沒して人聞かざらんことを。

願藏中祕書。百代不湮淪。
願はくは藏中の祕書、百代湮淪せざらんことを。

願播內(一二)樂府。時得聞至尊。
願はくは樂府に播き內れ、時に至尊に聞するを得んことを。

言者志之苗。行者文之根。
言は志の苗なり、行は文の根なり。

所以讀君詩。亦知君爲人。
君が詩を讀めば、亦君の人と爲りを知る所以なり。

如何欲五十。官小身賤貧。
如何ぞ五十ならんと欲するまで、官小にして身賤貧なる。

病眼街西住。無人行到門。
眼を病んで街西に住すれども、人の行いて門に到る無し。

【字解】【一】張籍　字は文昌、韓愈に從つて學ぶ。尤も樂府體の詩に長ず。仕へて國子司業に至る。古樂府は新樂府に對して古題を用ひて作るのをいふ。【二】三十春　三十年。【三】六義　詩經の風雅頌比賦興をいふ。毛詩の序に「風は諷なり敎なり。諷以て之を動かし、敎以て之を化す。」「雅は正なり、王政の由りて興廢する所を言ふなり。」「頌は盛德の形容を美し、其成功を以て神明に告ぐるものなり」とあり。比は比喩體の詩。賦は事を直敍した詩。興は彼によりて此を引き起す體の詩。【四】學仙　張籍の作つた詩の

匱。【五】董公詩　詩の題なり。董晉の功を贊した詩である。【六】商女　妓女なり。杜牧の詩に商女不知亡國恨。【七】悍婦　心根あしき女。【八】薄夫　薄情な男。敦は和厚なり。孟子に「鄙夫も寛に薄夫も敦し」とあり。【九】青衿　學生。青色の襟の衣服を着るよりいふ。【一〇】采詩官　周の時采詩の官あり。天下を巡行して各國の詩を採り、以て風俗を察し、政を施すの用となす。【一一】百歲後　人の一生を百歲といふ。死後のこと。【一二】樂府　宮中の音樂を掌る官署。

【題義】張籍の作つた古樂府を讀んで其妙を贊歎し、其の老いて下僚に沈淪するを憐んだのである。

【詩意】張君は如何なる人ぞといふに、三十年來詩を業とし、尤も樂府體の詩に巧である。當代恐らく比肩する者はなからう。其詩たるや悉く詩經の六義に則り、敢て無用の空文を弄するやうなことはない。されば君が學仙と題する詩を讀めば放縦の君を諷すべく、董公の詩を讀めば貪暴の臣を誨ふべく、妓女の詩を讀めば悍婦も尙ほ仁なるを知るべく、勤齊の詩を讀めば薄夫をして敦厚ならしむるに足る。上にしては敎化に裨あり、之を舒ぶれば萬民を濟ふことを得、下にしては性情を理め、之を卷けば一身を善くするを得る。皆世敎に益ある詩である。君は靑年時代から白髮の老境に入るまで、日夜苦吟して少しも怠らない。然し今の世には采詩の官がないから、折角苦心して作つた詩も塵埃のやうに棄てられ、恐らく君の死後には散佚して聞く人もなくなるであらう。願はくは祕藏の詩稿をば永く此世に留め、樂府の樂章に加へて至尊の御耳にも入れたいものぢや。言は志の苗であり、行は言の根であるから、君の詩を讀めば君の人格がよくわかる。かかる立派な人格を持ちながら、五十歲に垂んとするまで微賤に居り、眼疾を患へて帝都の西に住するも、行いて訪ふ人もないとは、誠に氣の毒に堪へない。

哭孔戡

孔戡を哭す

洛陽誰不死。戡死聞長安。
洛陽誰か死せざらん。戡が死長安に聞ゆ。

我是知戡者。聞之涕泫然。
我は是れ戡を知る者なり。之を聞いて涕泫然たり。

戡佐山東軍。非義不可干。
戡山東の軍に佐たり、義に非ずんば干む可からず。

拂衣向西來。其道直如絃。
衣を拂ひ西に向つて來る、其道直きこと絃の如し。

從事得如此。人人以爲難。
事に從ひ此の如きを得るは、人人以て難しと爲す。

人言明明代。合置在朝端。
人は言ふ明明の代、合に置いて朝端に在らしむべしと。

或望居諫司。有事戡必言。
或は諫司に居かんことを望む。事有らば戡必ず言はんと。

或望居憲府。有邪戡必彈。
或は憲府に居かんことを望む。邪有らば戡必ず彈さんと。

惜哉兩不諧。沒齒爲閒官。
惜しい哉兩つながら諧はず、齒を沒るまで閒官たり。

竟不得一日。謇謇(九)立君前。　竟に一日も、謇謇として君前に立つを得ず。
形骸隨衆人。斂葬北邙山(一〇)。　形骸衆人に隨ひ、北邙山に斂葬す。
平生剛腸內。直氣歸其間。　平生剛腸の內、直氣其間に歸す。
賢者爲生民。生死懸在天。　賢者の生民を爲むる、生死懸つて天に在り。
謂天不愛人。胡爲生其賢。　天人を愛せずと謂はば、胡爲れぞ其賢を生ずる。
謂天果愛民。胡爲奪其年。　天果して民を愛すと謂はば、胡爲れぞ其年を奪ふ。
茫茫元化(一一)中。誰執如此權。　茫茫たる元化の中、誰か此の如き權を執る。

【字解】【一】孔戡　昭義節度使盧從史の掌書記たり。從史の王承宗・田緒と陰に相結ぶや戡は爭つて從はず、言を肆にして之を折き、遂に疾と稱して洛陽に歸る。李吉甫揚州を鎭するとき表して幕府に置く。從史卽ち誣ふるに事を以てす。詔して衞尉丞を以て東都に分司せしむ。未だ幾ならずして卒す。【二】洛陽　唐の東都。【三】長安　唐の西都。【四】山東軍　昭義軍節度使の掌書記たりしこと。佐は補佐の職。【五】朝端　朝職なり、文選の齊故安陸昭王碑文に「允副朝端、僉掌屯簡」とある。【六】諫司　諫諍の職司。【七】憲府　御史臺なり。罪狀を糾彈する事を掌る。【八】閒官　閑散な官職。【九】謇謇　直言する貌。【一〇】北邙山　洛陽の北に在る山、墳墓多し。【一一】元化　天道の運化をいふ。

【題義】孔戡が有爲の才を抱いて空しく死んだことを痛んだ作である。

【詩意】洛陽にゐて死ぬ人は數多あるが、死して長安まで噂の傳はる人はあまり多くはない。所が孔戡が死ぬと忽ち其噂が長安まで傳はつた。以て尋常一樣の凡骨でないことがわからう。我は特に彼の爲人を認めてゐた者であるから、訃報を聞いて坐に涙を流した。彼は嘗て山東の節度府に掌書記たりし時、不義を屑しとせず、官職を擲つて洛陽に歸つて來た。其道の直きことは弓弦のやうで、少しも曲つた事をしない。これ實に常人の難しとする所である。かかる人物であるから、其の一たび洛陽に歸り來るや、人皆「宜しく朝職に列すべし」とて、或は「諫司に置かん、事あらば彼必ず天子を諫むるであらう」といふ者もあり、或は「御史臺に置かん、邪あらば彼必ず其罪を彈すであらう」といふ者もあつた。惜しいかな二つとも諧はないで閑職にゐて一生を終り、一日も天子の陛下に立つて侃諤の辯を振ふことが出來ないでしまつた。然も世の凡俗と同じく死亡し、北邙山上に埋葬せられ、平生の剛氣も空しく地に歸してしまつた。ああ賢者の世を治むるは、其生死皆天に關係を持つてゐる。若し天は萬民を愛せぬものだとするならば、何故に孔戡の如き賢者を生んだのであらうか。若し又天は萬民を愛するものだとするならば、何故に孔戡の壽命を奪つたのであらう。天道の運化は茫茫として信を措き難いが、一體誰が運命の鍵を握つてゐるのであらう。

凶宅(一)　　凶宅

長安(二)多大宅。列在街西東。　長安に大宅多し。列つて街の西東に在り。

往往朱門(三)內。房廊相對空。　往往朱門の中、房廊相對して空し。
梟鳴松桂枝。狐藏蘭菊叢。　梟は松桂の枝に鳴き、狐は蘭菊の叢に藏る。
蒼苔黃葉地。日暮多旋風。　蒼苔黃葉の地、日暮れて旋風多し。
前主爲將相。得罪竄巴庸(四)。　前主は將相たれども、罪を得て巴庸に竄たる。
後主爲公卿。寢疾歿其中。　後主は公卿たれども、疾に寢ねて其中に歿れぬ。
連延四五主。殃禍繼相鍾。　連延として四五の主、殃禍繼いで相鍾る。
自從十年來。不利主人翁。　十年より來、主人翁に利あらず。
風雨壞簷隙。蛇鼠穿牆墉。　風雨簷隙を壞り、蛇鼠牆墉を穿つ。
人疑不敢買。日毀土木功。　人疑つて敢て買はず、日に土木の功を毀る。
嗟嗟俗人心。甚矣其愚蒙。　嗟嗟俗人の心、甚しいかな其愚蒙なる。
但恐災將至。不思禍所從。　但災の將に至らんとするを恐れて、禍の從る所を思はず。
我今題此詩。欲悟迷者胷。　我今此詩を題して、迷者の胷を悟らしめんと欲す。
凡爲大官人。年祿(五)多高崇。　凡そ大官と爲る人、年祿多くは高く崇し。
權重持難久。位高勢易窮。　權重うして持つこと久しうし難し。位高くして勢窮り易し。
驕者物之盈。老者數之終。　驕る者は物の盈なり。老は數の終なり。
四(六)者如寇盜。日夜來相攻。　四者寇盜の如く、日夜來りて相攻む。
假使居吉(七)土。孰能保其躬。　假使吉土に居るとも、孰か能く其躬を保たん。
因小以明大。借家可諭邦。　小に因つて以て大を明かにし、家を借りて邦に諭ふ可し。
周秦宅崤(八)函。其(九)宅非不同。　周秦崤函に宅り、其宅同じからざるに非ず。
一興八百年。一死望夷宮(一〇)。　一は興りて八百年、一は望夷宮に死す。
寄語家與國。人凶非宅凶。　語を寄す家と國と、人凶にして宅凶なるに非ず。

【字解】【一】凶宅　不吉な家　【二】長安　唐の都。【三】朱門　朱塗の門。地位高き人の家。【四】巴庸　竝に地名。巴は今の四川省の地。庸は湖北省の地。【五】年祿　年齡と俸祿。【六】四者　年・祿・權・位。【七】吉土　めでたき土地。【八】崤函　崤關と函谷關。【九】其宅　國を建てた土地。【一〇】望夷宮　秦の宮の名。趙高の二世皇帝を弑した處。

【題義】權勢利祿に驕る者は、禍必ず其身に及ぶことを敍す。

【詩意】長安の都には大邸宅が多くあつて市街の東西に列つてゐる。其中には朱塗の門の內の部屋も長廊も、皆がらあきで、梟は庭樹の枝に鳴き狐は蘭菊の叢に隱れ、苔蒸し葉落ちて夕暮に旋風の吹き

荒ぶに任せてある主なき家もあちこちにある。譯を尋ねて見ると、前の主人は將相たる身であつたが罪を得て巴庸に流され、その次の主人は公卿であつたが病氣に罹つて此家で斃れ、續いて四五人主人が代つたが、いづれも災禍續きで、十年以來吉事は一つもない。されば今では住む人もなく、風雨蛇鼠の壞るに任せてあるが、緣起をかづいて買ふ者もないから、日に日に簷や柱が傾くばかりであるとの事である。ああ世間の人はなぜかくも愚なのであらう。ただ災の來ることばかり恐れて、禍の由つて來る原因を考へない。余は今此詩を書して世人の迷を覺ましてやらう。凡て高官に居る人は、年齡も高く俸祿も多い。重權は永く持ち續け難く。高位は失ひ易いものである。驕者は物の滿盈であり、老大は數の終局である。滿つれば闕け老ゆれば死するは世の習であつて、年・祿・權・位四者の來りて我を攻むること寇盜の如くである。たとひ吉祥の地に居るとも其禍を免れることは不可能である。一事が萬事、小事が大事だ。個人の家でも國家でも物の道理に二つはない。周も秦も同じく嶠函の地に國を建て、周は八百年の歲月を保ち、秦は僅に三代で滅びた。皆この道理に由るのである。くれぐれも言つておくが、人事が凶なので邸宅が凶なのではない。

夢仙　　仙を夢みる

人有夢仙者。夢身升上(一)清。　人仙を夢みる者有り。夢に身上清に升る。

坐乘一白鶴。前引雙紅旌。　一白鶴に坐乘し、前に雙紅の旌を引く。

羽衣忽飄飄。玉(二)鸞俄鏘鏘。　羽衣忽ち飄飄たり。玉鸞俄に鏘鏘たり。

半空直下視。人世塵冥冥。　半空直下に視れば、人世塵冥冥たり。

漸失鄕國處。纔分山水形。　漸く鄕國の處を失ひ、纔に山水の形を分つ。

東海一片白。列(三)岳五點青。　東海一片白く、列岳五點青し。

須臾羣仙來。相引朝玉(四)京。　須臾にして羣仙來り、相引いて玉京に朝す。

(五)安期羨門輩。列侍如公卿。　安期羨門の輩、列侍して公卿の如し。

仰謁玉(六)皇帝。稽(七)首前致誠。　仰いで玉皇帝に謁し、稽首して前んで誠を致す。

帝言汝仙才。努力勿自輕。　帝言はく汝仙才あり。努力して自ら輕んずる勿れ。

(八)却後十五年。期汝不死庭。　却後十五年、汝を不死の庭に期せんと。

再拜受斯言。既寤喜且驚。　再拜して斯言を受く。既に寤めて喜び且つ驚く。

祕之不敢泄。誓志居巖(九)扃。　之を祕して敢て泄さず、誓志巖扃に居り、

恩愛捨骨肉。飲食斷羶腥。　恩愛骨肉を捨て、飲食羶腥を斷つ。

朝飡(一〇)雲母散。夜吸(一一)沆瀣精。　朝には雲母散を飡ひ、夜には沆瀣精を吸ふ。
空山三(一二)十載。日望(一三)輜軿迎。　空山三十載、日に輜軿の迎ふるを望む。
(一四)前期過已久。(一五)鸞鶴無來聲。　前期過ぐる已に久し。鸞鶴來る聲無し。
齒髮日衰白。耳目減聽明。　齒髮日に衰へて白く、耳目聽明を減す。
一朝同物化。身與(一六)糞壤并。　一朝物と同じく化し、身は糞壤と并せらる。
神仙信有之。俗力非可營。　神仙信にこれ有り。俗力營むべきに非ず。
苟無金骨相。不列(一七)丹臺名。　苟も金骨の相無くんば、丹臺の名を列せず。
徒傳(一八)辟穀法。虛受(一九)燒丹經。　徒に辟穀の法を傳へ、虛しく燒丹經を受く。
只自取勤苦。(二〇)百年終不成。　只自ら勤苦を取り、百年終に成らず。
悲哉夢仙人。一夢誤一生。　悲しい哉仙を夢みる人、一夢一生を誤る。

【字解】【一】上淸　道家三淸の一。雲笈七籤に「上淸之天、在絕霞之外、有八皇老君、蹕九天之仙、而處上淸之宮也」とある。【二】玉鸞　鈴なり。鉀鉀は鈴の音。【三】列岳　嵩山・泰山・華山・衡山・恆山を五岳といふ。【四】玉京　天帝の都。【五】安期　仙人の名。秦の瑯琊の人、抱朴子と號す。羨門も古の仙人なり。漢書に「始皇東遊海上、求仙人羨門之屬」とある。【六】玉皇帝　天帝なり。玉皇とも玉帝ともいふ。【七】稽首　賀雨の二八を見よ。【八】却後　今より後。【九】巖扃　巖扉なり。【一〇】雲母散　仙藥の名。【一一】沆瀣精　露氣なり、仙人の餐する所のもの。【一二】三十載　三十年。【一三】輜軿　四面に屏蔽ある車。【一四】前期　約束の期限。【一五】鸞鶴　仙人の乘る鳥。【一六】糞壤　穢土といふが如し。【一七】丹臺　神仙の居る處。【一八】辟穀　穀食を辟除して仙人になること。【一九】燒丹經　仙藥の製法を說く書。【二〇】百年　一生涯。

【題義】世の不老長生を希ひ仙道を修め徒に勤苦して寸效なき者を嘲笑した作である。

【詩意】仙人とならうと望む者があつて、或る日天上に升る夢を見た。身は一匹の白鶴に跨り紅旌を建てた二人の前驅に導かれ、羽衣は飄飄として風に飜り、玉鸞は鉀鉀として空に響き、實にすがすがしさの限りであつた。半空から下界を瞰下せば下界は塵霧が濛濛として暗く、いつしか鄕里も見えわかす、只纔に山や川の形を認め、東海一片の白色を湛へ五岳の點點として靑色を凝らしてゐるのを見るばかりであつた。やがて數多の仙人が來て、天帝の都に案內してくれた。安期生だの羨門だのといふ仙人が左右に列侍してゐる所で天帝に拜謁し、恭しく頭を垂れて誠意を表した。時に天帝の仰せらるるには、「その方は仙人たる天分を持つてゐるから、自ら輕んぜずに修業を勵むがよい。今から十五年の後には、不死の境地に入るやうにしてやらう」との事であつた。再拜して斯言を受けた所で、俄に夢が覺めた。覺めての後も喜び且つ驚き、深く心に祕して人には泄さず、俗界を離れて巖扃に居り骨肉の恩愛を斷ち肉食を廢し、ただ專ら仙藥と露氣とを吸うて修業を勵んだ。かくて三十年の歲月を積み、今日か明日かと迎への車を待つてゐた。約束の十五年は既に過ぎたが、鸞鶴は一向に來さう

もない。その中に齒は墮ち髮は白く耳や目も衰へて來て、程なく身死して穢土に歸してしまつた。ああ神仙といふ者はあるにはあるであらう。が、決して俗人の希ふべき所ではない。仙人の相を先天的に授かつてゐる者でなければ、到底仙臺に名を列ねることは出來ないのである。ただ辟穀の法だの燒丹經だのを傳受した所が何にならう。ただ徒に身を苦めるだけで、一生その效を見ることは出來ないのだ。

觀刈麥　時爲(一)盩厔縣尉

麥を刈るを觀る　時に盩厔縣尉たり

(二)田家少閑月。五月人倍忙。
田家閑月少し。五月人倍忙し。

夜來南風起。小麥覆隴黃。
夜來南風起り、小麥隴を覆うて黃なり。

(三)婦姑荷簞食。童稚攜壺漿。
婦姑は簞食を荷ひ、童稚は壺漿を攜ふ。

相隨(四)餉田去。丁壯在南岡。
相隨つて田に餉して去り、丁壯は南岡に在り。

足蒸暑土氣。背灼炎天光。
足は暑土の氣に蒸され、背は炎天の光に灼かる。

力盡不知熱。但惜夏日長。
力盡きて熱きを知らず、但夏日の長きを惜む。

復有貧婦人。抱子在其傍。
復貧婦人有り、子を抱き其傍に在り。

右手秉遺穗。左臂懸弊筐。
右手に遺穗を秉ひ、左臂に弊筐を懸く。

聽其相顧言。聞者爲悲傷。
其の相顧みて言ふを聽き、聞く者悲傷を爲す。

家田(五)輸稅盡。拾此充飢腸。
家田は稅を輸すに盡きたれば、此を拾うて飢腸に充つと。

今我何功德。曾不事農桑。
今我何の功德ありて、曾て農桑を事とせず、

吏祿(六)三百石。歲晏有餘糧。
吏祿三百石、歲晏れて餘糧有る。

念此私自媿。(七)盡日不能忘。
此を念うて私に自ら媿ぢ、盡日忘るる能はず。

【字解】〔一〕盩厔　縣の名。陝西省西安府に屬す。尉は官名。〔二〕田家　農家。閑月は、ひまな時。〔三〕婦姑　よめもしうとも。簞食は籠にいれた飯。〔四〕餉田　田畑に辨當をはこぶ。〔五〕輸稅　稅を納める。〔六〕三百石　石は枡目の名。我邦では斛に代用し、十斗の稱とす。〔七〕盡日　終日なり。

【題義】農民の苦勞を寫し、併せて己の耕さずして食ふを媿ぢた作である。

【詩意】農家には一年中ひまな時とては少しもないが、五月になると特に忙しくなる。宵から南風が吹くと、もう小麥が黃色に實つて畝を覆ふやうになる。婦姑は簞食を荷ひ、子供等は壺漿を攜へ、打連れて辨當を運び、丁壯は南の岡で働く。足は暑氣に蒸され背は炎天に燒かれるが、心を打込んでは熱

いのも忘れて、長き日足を惜んで働いてゐる。傍を見ると貧に窶れた女が子を抱いて立つてゐる。右の手には遺穗を持ち左の臂には弊筐を懸けてゐる。「家も田地も納税の爲に形なしになつたから、遺穗を拾つて飢を凌ぐのだ」との事だ。此言を聞いては誰でも涙を流さぬ者はない。飜つて自ら念ふに、余は何の功德があつて耕作もせずに食つてゐるのであらう。三百石の俸祿を貰つて、年年いくらかの餘裕がある。此を念うて自ら媿ぢ、終日忘れられない。

題海圖屏風 元和己丑年作　　海圖の屏風に題す 元和己丑の年作る

海水無風時。波濤安悠悠。　海水風無き時、波濤安ぞ悠悠たる。
鱗介(一)無小大。遂性各沈浮。　鱗介小大と無く、性を遂げて各沈浮す。
突兀(二)海底鼇。首冠三神丘(三)。　突兀たり海底の鼇、首に三神丘を冠し、
釣網不能制。其來非一秋(四)。　釣網も制する能はず、其來ること一秋に非ず。
或者不量力。謂茲鼇可求。　或者力を量らずして、茲鼇求む可しと謂ひ、
贔屭(五)牽不動。綸(六)絶沈其鉤。　贔屭牽けども動かず、綸絶えて其鉤を沈む。
一鼇既頓頷。諸鼇齊掉頭。　一鼇既に頷を頓れば、諸鼇齊しく頭を掉ふ。
白濤與黑浪。呼吸繞咽喉。　白濤と黑浪と、呼吸して咽喉を繞る。
噴風激飛廉(七)。鼓波怒陽侯(八)。　風を噴きて飛廉を激し、波を鼓して陽侯を怒らしむ。
鯨鯢得其便。張口欲吞舟。　鯨鯢其便を得、口を張つて舟を吞まんと欲す。
萬里無活鱗。百川多倒流。　萬里活鱗無く、百川倒流多し。
遂使江漢(九)水。朝宗(一〇)意亦休。　遂に江漢の水をして、朝宗意亦休せしむ。
蒼然屏風上。此畫良有由。　蒼然たり屏風の上、此畫良に由有り。

【字解】【一】鱗介　魚貝なり。【二】突兀　高く聳ゆる貌。鼇は大龜。【三】三神丘　蓬萊・方丈・瀛洲、渤海の中に在り。【四】一秋　一年といふが如し。【五】贔屭　盛に力を用ふる貌。【六】綸　つり絲。鉤は釣針。【七】飛廉　風の神。【八】陽侯　水神の名。淮南子註に「陽侯陵陽國侯也。死於水、其神能爲大波。」とある。【九】江漢　竝に川の名、長江と漢水。【一〇】朝宗　百川の海に注ぐこと。

【題義】海に風のない時は波が穩で大魚も小魚も各其性を全うして浮沈してゐる。折しも海底の大龜が蓬萊山を頭に戴き突兀として現れて來た。この大龜は釣針でも網でも捉へられないやつで、然も其の來るのが一回ではない。所が己の力を知らぬ者があつて、「この大龜を捉へるのは、いと易いことだ」と謂つて、力を用ひてやつて見たが動かばこそ。遂に綸は切れ鉤は沈んでしまつた。一匹の大龜が頷

を擧げると、他の大龜が皆勢を得て之に倣ひ、風を起し波を湧かし大混亂を來した。すると鯨鯢が得たり賢しと其機に乘じて荒れ狂ひ、萬里に亙つて活きた魚はなく、百川悉く逆流することになつた。それが爲に江漢の水まで海に朝宗せぬやうになつてしまつた。蒼然たる此屛風の畫こそ誠に意味深い畫である。

【餘論】この詩の題の下に元和己丑の年作ると自註がある所を見れば、必ず何か理由があるに相違ない。己丑は元和四年である。その四月に憲宗皇帝は恆冀深趙節度使王士眞が死んだので、此機會に河北諸鎭の世襲の弊を革めようとしたが、裴垍だの李絳だのといふ當局大臣は、俄に變革を行へば必ず諸鎭が黨援して叛抗するであらうとの意見で躊躇した。時に中尉吐突承璀といふ者が裴垍の權を奪はんとの野心を抱き、自ら請ひ兵に將として之を討つた。此より以來禍亂相續いて已まなかつた。此詩は此事を諷したのであらう。

(二) 羸駿

騂騮失其主。羸餓無人牧。
向風嘶一聲。莽蒼黃河曲。
蹋冰水畔立。臥雪冢間宿。
歲暮田野空。寒草不滿腹。
豈無市駿者。盡是凡人目。
相馬失於瘦。遂遺千里足。
村中何擾擾。有吏徵芻粟。
淪彼軍廐中。化作駑駘肉。

羸駿

騂騮其主を失ひ、羸餓して人の牧ふ無し。
風に向つて嘶くこと一聲、莽蒼たり黃河の曲。
冰を蹋んで水畔に立ち、雪に臥して冢間に宿す。
歲暮れて田野空しく、寒草腹に滿たず。
豈駿を市ふ者無からんや。盡く是れ凡人の目。
馬を相すること瘦に失し、遂に千里の足を遺す。
村中何ぞ擾擾たる、吏の芻粟を徵する有り。
彼を軍廐の中に淪め、化して駑駘の肉と作す。

【字解】〔一〕羸駿　瘦せ衰へた駿馬。〔二〕騂騮　駿馬の名。〔三〕莽蒼　草の茂る色。〔四〕冢間　塚の間。〔五〕失於瘦　馬の貴き所は骨に在りて肉に在らず。即ち瘦せてゐる所に價値があるのである。然るに其價値のある所を見失ふこと。〔六〕千里足　一日千里を走る駿足。〔七〕擾擾　騷がしいこと。〔八〕芻粟　草や穀物。〔九〕駑駘　駑馬。

【題義】羸駿を借りて俊傑の用ひられないで沈淪してゐるのに喩へたのである。

【詩意】駿馬が主人を失つて餓ゑ瘦せてゐる。莽蒼たる黃河の邊で風に向つて嘶き、或は冰を蹋んで水畔に立ち、或は塚の間の雪中に臥しなどしてゐる。歲の暮で草も枯れて食ふ物もなく、非常な苦境に陷つてゐる。世に駿馬を買はうといふ者が無いわけではないが、皆駿馬を知る眼識のない人ばかりで、瘦せた所に著眼しないで折角の駿馬を失つてしまふ。適村中が騷がしくなつたと思つたら、それは役人が芻粟や軍馬を徵發する爲に來たのであつた。遂に彼の羸駿も軍馬に取られ、可惜駑馬と伍す

る破目に陷つてしまつた。

廢琴（一）

廢琴

絲桐合爲琴。中有太古聲。　絲桐合せて琴と爲す。中に太古の聲有り。

古聲淡無味。不稱今日情。　古聲淡くして味無し。今日の情に稱はず。

玉徽（二）光彩滅。朱絃（三）塵土生。　玉徽光彩滅し、朱絃塵土生ず。

廢棄來已久。遺音尙泠泠（四）。　廢棄せられて來已に久し。遺音尙ほ泠泠たり。

不辭爲君彈。縱彈人不聽。　君が爲に彈ずるを辭せず。縱ひ彈ずるも人聽かず。

何物使之然。羌笛（五）與秦箏（六）。　何物か之をして然らしめたる、羌笛と秦箏と。

【字解】【一】廢琴　棄てられた琴。【二】玉徽　徽とは琴の按抑する處を表識するシルシ。嵆康の琴賦に「徽以鍾山之玉」とある。【三】朱絃　陸機の文賦に「同朱絃之淸氾」とあり。禮記に「淸廟之瑟、朱絃而疏越、一唱而三歎、有遺音者矣。」鄭玄註に、「朱絃練朱絃也、練則聲濁云云」とある。【四】泠泠　水の流るる聲。【五】羌笛　羌は西戎の名。エビスの笛。【六】秦箏　箏は秦の蒙恬の作る所なりといふ。因つて秦箏と稱す。

【題義】この詩も琴を借りて俗論の用ひられて君子の言の世に容れられないことを悲んだのである。

【詩意】絲と桐とを合せて琴を作る。琴には太古の聲がある。併し古聲は淡泊であるから、今日の俗人の氣には入らない。故に玉徽は光を失ひ、朱絃は塵に汚れ、久しく棄てられてゐるが、なほ遺音が泠泠として殘つてゐる。敢て君の爲に彈ずることを辭せないが、恐らく君は聽くことを好まぬであらう。何物がこんな狀態にならしめたかといふに、羌笛や秦箏が珍重されるやうになつた結果である。

李都尉古劍

李都尉の古劍

古劍寒黯黯。鑄來幾千秋。　古劍寒うして黯黯たり。鑄來りて幾千秋。

白光納日月。紫氣排斗牛（二）。　白光日月を納れ、紫氣斗牛を排す。

有客借一觀。愛之不敢求。　客あり借りて一たび觀、之を愛すれども敢て求めず。

湛然（三）玉匣中。秋水澄不流。　湛然たり玉匣の中、秋水澄みて流れず。

至寶有本性。精剛無與儔。　至寶にして本性有り、精剛にして與に儔する無し。

可使寸寸折。不能繞指柔。　寸寸に折れしむ可きも、指を繞つて柔なる能はず。

願快直士心。將斷佞臣頭。　願くは直士の心を快くし、將て佞臣の頭を斷たんと。

不願報小怨。夜半刺私讐。　願はず小怨に報いて、夜半に私讐を刺すを。

勸君愼所用。無作神兵羞。　君に勸む用ふる所を愼み、神兵の羞を作す無かれ。

【字解】【一】懍懍　心膽を寒からしめる貌。【二】斗牛　星の名。南斗星と牽牛星。【三】湛然　水のたたへること。玉匣は玉の箱。【四】神兵　兵は劍なり。靈劍といふが如し。

【題義】これも古劍を借りて李都尉その人の有爲の材を抱いてゐることを賛歎し、愼んで輕用せぬやうに戒めたのである。

【詩意】この古劍は何處となく見る人の膽を寒からしめる。鑄來つて旣に幾千年を經た名劍であるから其れも其筈である。白い光は日月を欺き紫の氣は星をも凌ぐばかりだ。人（白樂天自ら謂ふ）あり借りて一たび之を觀、非常に氣に入つたが敢て吾が物にしようとはしない。玉の箱の中に藏めて置くと、恰も秋水が澄み湛へて、流れぬやうである。その精剛なる本性は世に竝ぶものがない。寸寸に折れることはあるとも指を繞つて卷きつくやうな柔態はない。願はくは直士の用に供して佞臣の頭を斷ちたいものぢや。小怨を報い夜陰に私讐を刺す用に供したくはない。君（李都尉を指す）に勸めるが輕輕しく用ひて靈劍を汚すことは決してせぬがよい。

雲居寺孤桐

雲居寺の孤桐

一株靑玉立。千葉綠雲委。　一株靑玉立ち、千葉綠雲委す。

亭亭五丈餘。高意猶未已。　亭亭たり五丈餘、高意猶ほ未だ已まず。

山僧年九十。淸淨老不死。　山僧年九十、淸淨老いて死せず。

自云手種時。一顆靑桐子。　自ら云ふ手づから種うる時、一顆の靑桐子と。

直從萌芽拔。高自毫末始。　直は萌芽より拔き、高は毫末より始まる。

四面無附枝。中心有通理。　四面附枝無く、中心通理有り。

寄言立身者。孤直當如此。　言を寄す身を立つる者、孤直當に此の如くなるべし。

【字解】【一】靑玉　桐の樹をいふ。【二】亭亭　高く立つ貌。【三】一顆　一個。靑桐子は桐の實。【四】附枝　横に出た枝。慾心に驅られて色色な事に手を出すに喩ふ。【五】通理　モクメの通つてゐること。物の道理に通じてゐるのに喩ふ。

【題義】雲居寺の庭に桐の樹の亭亭と聳えてゐるのを見て、人の身を立てるのも此の如くありたいものだとの意を述べた。

【詩意】一本の桐が玉の如く立つてゐる。葉は綠の雲のやうに茂つてゐる。五丈餘の高さがあるが、それでも猶ほ伸びようといふ心を失はない。この寺の僧は九十歳になるが、六根淸淨の身であるから年はとつても容易に死なない。老僧は、「自分が蒔いた時は一個の靑い實であつたが、今ではこんなに高くなつた」と言つてゐる。新芽の時から眞直に伸び、毫末の微から今日の高さに進んだ。皆絶え

ざる努力の結果である。しかも妄に枝をさゝす木理がよく通つてゐる。人の身を立てるのも此の桐のやうに孤直でありたいものだ。

【餘論】 唐宋詩醇に「香山集中古體多くは鋪敍暢達を以て長を見る。短篇間含蓄蘊藉を以て姿を生ず。此者は短峭中殊に遠勢あり。高意猶未已の五字尤も妙なり」と評してゐる。四面以下二句は周茂叔の愛蓮說の本づく所。

(一)京兆府新栽蓮　時爲盩厔(二)縣尉趨府作

京兆府に新に蓮を栽う　時に盩厔縣尉たり、府に趨きて作る

汚溝貯濁水。水上葉(三)田田。　汚溝濁水を貯ふ。水上葉田田たり。
我來一長歎。知是東溪蓮。　我來つて一たび長歎す。知る是れ東溪の蓮。
下有清泥汚。馨香無復全。　下に清泥の汚るる有り。馨香復全き無し。
上有紅塵撲。顏色不得鮮。　上に紅塵の撲つ有り。顏色鮮なるを得ず。
物性猶如此。人事亦宜然。　物性猶此の如し。人事亦宜しく然るべし。
託根非其所。不如遭棄捐。　根を託する其所に非ざるは、棄捐せらるるに如かず。
昔在溪中日。花葉媚清漣。　昔溪中に在りし日、花葉清漣に媚ぶ。
今來不得地。(四)顦顇府門前。　今來れば地を得ずして、府門の前に顦顇たり。

【字解】 【一】京兆府　京師を管理する役所。【二】盩厔　京兆府の管下の縣名。尉は官名。府は京兆府を指す。【三】田田　蓮の葉の水に浮ぶ貌。【四】顦顇　やせ衰へること。

【題義】 京兆府の門前の汚溝の中に咲く蓮花を見て、己の不遇を歎じたのである。

【詩意】 きたない溝の中に濁水がたまり、其上に蓮の葉が浮んでゐる。自分は之を一見して坐に歎聲をもらした。この蓮はもと東溪にあつた蓮である。所が今新にここに栽ゑられて、下には汚れた泥があり、上には塵の散するあり、それが爲に十分の色香を保つことも出來ずにゐる。心なき草木すらかくの如くである。人事も亦此と同じである。滿足な地位を得られないくらゐなら、いつそ棄てられた方がましである。この蓮も東溪にあつた頃は花も葉も清漣に洗はれ、時めいてゐたのが、今はこんな心にもない所に栽ゑられて、府門の前にしをたれてゐる。氣の毒なことだ。

月夜登閣避暑

月夜閣に登り暑を避く

旱久炎氣甚。中人若(一)燔燒。　旱久しうして炎氣甚し。人に中りて燔燒するが若し。
清風隱何處。草樹不動搖。　清風何處にか隱る。草樹動搖せず。
何以避暑氣。無如出塵囂。　何を以てか暑氣を避けん。塵囂を出づるに如くは無し。

行行都門外。佛閣正岧嶢。　行き行く都門の外、佛閣正に岧嶢。
清涼近高生。煩熱委靜銷。　清涼高きに近づいて生じ、煩熱靜に委して銷す。
開襟當軒坐。神泰意飄飄。　襟を開き軒に當つて坐すれば、神泰にして意飄飄たり。
迴看歸路傍。禾黍盡枯焦。　歸路の傍を廻看すれば、禾黍盡く枯焦す。
獨善誠有計。將何救旱苗。　獨善誠に計有り。何を將てか旱苗を救はん。

【字解】【一】熇燒　燒くこと。【二】岧嶢　高く聳ゆる貌。【三】獨善　ただ我が一身だけを善くすること。

【題義】佛閣に登つて炎暑を避け、人は暑を避ける道があるが、草木の枯焦を救ふ道のないことを歎じた。

【詩意】旱天が續いて燒くやうに熱い。清風は何處に隱れたか、草木は微動だにしない。暑を避けるには世塵を離れるがよいと考へて、都門を出て、佛寺の高閣に登つた。段段登るに隨つて涼味も生じ靜寂も加はる。襟を開いて欄干に憑れば神氣の頓に爽なるを感ずる。さて歸路に傍の禾黍を顧視すると、盡く枯れ焦げてゐる。ああ我が身は涼を納れる事も出來るが、此の枯れた禾黍を救ふ方法はないものであらうか。

初授拾遺（一）

初めて拾遺を授けらる

奉詔登左掖。束帶參朝議。　詔を奉じて左掖に登り、束帶して朝議に參す。
何言初命卑。且脫風塵吏。　何ぞ言はん初命の卑きを。且風塵を脫するの吏。
杜甫陳子昂。才名括天地。　杜甫陳子昂、才名天地を括ぬ。
當時非不遇。尙無過斯位。　當時遇はざるに非ず。尙斯の位に過ぐる無し。
況予蹇薄者。寵至不自意。　況んや予の蹇薄なる者、寵至つて自ら意はず。
驚近白日光。慙非靑雲器。　白日の光に近きを驚き、靑雲の器に非ざるを慙づ。
天子方從諫。朝廷無忌諱。　天子方に諫に從ふ。朝廷忌諱無し。
豈不思匪躬。適遇時無事。　豈匪躬を思はざらんや。適時の事無きに遇へり。
受命已旬月。飽食隨班次。　命を受けて已に旬月、飽食班次に隨ふ。
諫紙忽盈箱。對之終自媿。　諫紙忽ち箱に盈つ。之に對して終に自ら媿づ。

【字解】【一】拾遺　官名。供奉諷諫を掌り、以て君主の言行の過失を救ふ。【二】左掖　左拾遺の役所。【三】初命　初任といふが如し。【四】風塵　世路の苦辛。【五】蹇薄　蹇は跛なり。駑鈍といふが如し。【六】靑雲器　榮達すべき器量。【七】匪躬

一身の利害を顧みずに君の爲に盡すこと。【八】班次 班は位なり、等位なり。【九】諫紙 君を諫むる上奏文。

【題義】初めて左拾遺に任ぜられた時の感想を述べたのである。

【詩意】詔を奉けて左拾遺となり衣冠を整へて朝議に參與することになつた。官位の卑いことに就て決して不平は申さぬ。世路の苦辛を脫るるを得ただけでも結構なことだ。杜甫や陳子昂は才名天地を兼ぬる程であり、且つ名君に遇合せぬのではなかつたが、それでさへ僅に拾遺の官にありついたに過ぎなかつた。況んや予の如き駑鈍の身で此寵命を拜しようなどとは思ひもかけぬことであつた。されば天日に近づき陛下に咫尺するを驚き、顯榮の地位に陞るべき器でないことを愧づる。天子は諫に從ひ、朝廷には何等忌憚すべきこともない。忠諫を盡さうと思はぬではないが、今は天下無事で、諫むべき問題もない。故に命を拜してから早くも一個月ばかりになるが、ただ俸祿を頂戴して員に備はり、諫書の箱に盈つるを見て獨り自ち媿づるのみだ。

贈元稹

元稹に贈る

自我從宦遊。七年在長安。
我宦遊に從つてより、七年長安に在り。

所得惟元君。乃知定交難。
得る所惟だ元君のみ。乃ち知る交を定むるの難きを。

豈無山上苗。徑寸無歲寒。
豈山上の苗無からんや。徑寸歲寒無し。

豈無要津水。咫尺有波瀾。
豈要津の水無からんや、咫尺波瀾有り。

之子異於是。久要誓不諼。
之子是に異り、久要誓つて諼れず。

無波古井水。有節秋竹竿。
波無し古井の水、節有り秋竹の竿。

一爲同心友。三及芳歲蘭。
一たび同心の友と爲り、三たび芳歲の蘭に及ぶ。

花下鞍馬遊。雪中杯酒歡。
花下鞍馬の遊、雪中杯酒の歡。

衡門相逢迎。不具帶與冠。
衡門に相逢迎し、帶と冠とを具せず。

春風日高睡。秋月夜深看。
春風に日高けて睡り、秋月夜深けて看る。

不爲同登科。不爲同署官。
登科を同じうするを爲さず、署官を同じうするを爲さず。

所合在方寸。心源無異端。
合ふ所は方寸に在り、心源異端無し。

【字解】【一】宦遊 仕官して他郷に遊ぶこと。【二】長安 唐の都。【三】元君 元稹をいふ。【四】歲寒 論語に「歲寒然後知松柏之後凋」とあり、節操の高いこと。【五】久要 久しき約束。論語に「久要不忘平生之言」とある。【六】同心 易經繫辭上傳に「二人同心、其利斷金、同心之言、其臭如蘭」とある。【七】衡門 衡は横なり。木を横へて門となす、隱居の意。【八】登科 官吏登庸試驗に及第すること。【九】方寸 心をいふ。

【題義】元稹に贈り投合の厚きを述ぶ。

【詩意】我は官途に就いて長安に在ること既に七年になるが、其間に得た所の友は惟だ元君一人である。以て交情を訂するの難いことがわかる。山上に草木の苗がないのではないが、それが歳寒の節を保つのは稀だ。又要津の水がないのではないが、忽ち波瀾を生じて物別れになつてしまふ。ただ元君だけは此と其撰を異にし、久約を守つていつまでも忘れない。之を譬へて見れば古井の水の波なきが如く、秋竹の節あるが如くである。我は元君と同心の友となつてから既に三年になる。其間鞍馬に跨つて花下に遊び、杯酒を俱にして雪景を賞し、陋屋に相迎へては衣冠の窮屈なるを脱ぎ、春は日の高くのぼるまで睡り、秋は夜の深けるまで月を眺めなどして交つてゐる。同年の及第者だといふのでもなければ、又同僚の官吏だといふのでもない。ただ氣心がよく合つて異見がないからだ。

哭劉敦質

劉敦質を哭す

小樹兩株柏。新土三尺墳。
小樹兩株の柏、新土三尺の墳。

蒼蒼白露草。此地哭劉君。
蒼蒼たり白露の草、此地に劉君を哭す。

哭君豈無辭。辭云君子人。
君を哭するに豈辭無からんや。辭に云ふ君子の人。

如何天不弔。窮悴至終身。
如何ぞ天弔まず、窮悴して身を終るに至る。

愚者多貴壽。賢者獨賤迍。
愚者多くは貴壽、賢者は獨り賤迍。

龍亢彼無悔。蠖屈此不伸。
龍亢彼悔ゆる無く、蠖屈此伸びず。

哭罷持此辭。吾將詰義文。
哭し罷めて此辭を持ち、吾將に義文を詰らんとす。

【字解】【一】蒼蒼　草の色。白露は秋に降る露。【二】迍　沈滯して進まざること。【三】龍亢　龍ののぼりつめること。易經に、「亢龍有悔」とある。【四】蠖屈　尺蠖（しやくとりむし）が屈して伸びないこと。易經に、「尺蠖之屈、以求伸也」とある。【五】義文　伏羲及び文王、就に易を作つた人。

【題義】劉敦質の榮達の期を待たずに死んだことを悲んだのである。

【詩意】二本の小さい柏が三尺の新しい塚の上に植ゑられ、草の上には白露がシツトリとおりてゐる。余は今この劉君の墓前に立つて君の死を哭する。我は何の辭を以て君を哭するか。君は實に君子人であつた。如何して天は君を憐愍せずして君をして窮迫の間に死なせたのであるか。愚者は多くは貴き位に在りて長生きし、賢者は微賤にして榮進することが出來ない。愚者は龍の如くのぼりつめるとも決して悔ゆることはなく、賢者は蠖のやうに屈したが、終に伸びないでしまつた。易には「亢龍悔あり」だの「尺蠖の屈するは以て伸びんことを求むるなり」だのとあるが、どうも合點が行かない。余は君を哭し終つたら伏羲や文王に詰問しようと思つてゐる。

答友問

友の問に答ふ

(一)大圭廉不割。利劍用不缺。　大圭は廉なれども割かず、利劍は用ふれども缺けず。

當其斬馬時。良玉不如鐵。　其の馬を斬るの時に當つてや、良玉も鐵に如かず。

置鐵在(二)洪爐。鐵消易如雪。　鐵を置いて洪爐に在れば、鐵消すること易うして雪の如し。

良玉同其中。三日燒不熱。　良玉其中に同じうすれば、三日燒けども熱せず。

君疑才與德。詠此知優劣。　君才と德とを疑ふ。此を詠めば優劣を知らん。

【字解】(一)大圭　良玉なり。廉は稜角あること。(二)洪爐　金を熔かす大爐。

【題義】利劍を以て才に比し、良玉を以て德に比し、德の才に優ることを說いたのである。

【詩意】良玉は廉稜あれども物を割裂することなく、利劍は之を用ふれども缺折することはない。馬を斬る時には良玉は利劍にはかなはないが、若し大爐の中に投ずれば利劍は雪のやうに忽ち熔けてしまふが、良玉は同じく火中に投ずるも三日たつても熔けはしない。君は才と德との優劣を疑ふが、之を見れば德の才に優ることがわからう。

雜興三首

雜興三首

楚王多(一)內寵。(二)傾國選嬪妃。　楚王內寵多し。傾國嬪妃を選ぶ。

又愛(三)從禽樂。馳騁每相隨。　又禽に從ふ樂を愛し、馳騁每に相隨ふ。

(四)錦韝臂花隼。羅袂控(五)金羈。　錦韝花隼を臂にし、羅袂金羈を控く。

遂習宮中女。皆如馬上兒。　遂に宮中の女に習はすこと、皆馬上の兒の如し。

色禽合爲荒。刑政兩已衰。　色と禽と合せて荒みを爲し、刑政兩ながら已に衰ふ。

(六)雲夢春仍獵。(七)章華夜不歸。　雲夢春仍に獵し、章華夜歸らず。

東風二月天。春雁正(八)離離。　東風二月の天、春雁正に離離たり。

美人挾銀鏑。一發疊雙飛。　美人銀鏑を挾んで、一發雙飛を疊む。

飛鴻驚斷行。斂翅避(九)蛾眉。　飛鴻驚いて行を斷ち、翅を斂めて蛾眉を避く。

君王顧之笑。弓箭生光輝。　君王之を顧みて笑ふ。弓箭光輝を生ず。

廻眸語君曰。昔聞(一〇)莊王時。　眸を廻らして君に語りて曰く、昔聞く莊王の時、

有一愚夫人。其名曰(一一)樊姬。　一愚夫人有り、其名を樊姬と曰ふ。

不レ有二此遊樂一。三(一二)載斷二鮮肥一。　此遊樂有らず、三載鮮肥を斷つ。

【字解】【一】内寵　寵愛する所の婦人。【二】傾國　美人をいふ。【三】從レ禽樂　狩獵。【四】錦鞲　鞲はユガケとて射の腕卷なり。花隼は鷹なり。【五】金羈　馬の手綱。【六】雲夢　大澤の名。狩獵地なり。【七】章華　楚王の臺の名。左傳に、「楚子成二章華之臺一、願下與二諸侯一落上レ之」とある。【八】離離　列り飛ぶ貌。【九】蛾眉　美人をいふ。【一〇】莊王　楚王の名。【一一】樊姬　莊王の夫人。莊王が狩獵を好んだので、姬は之を諫めたが聽かなかつた。因つて禽獸の肉を食はなかつたので、莊王も遂に過を改め政事に勤めるやうになつた。【一二】三載　三年。鮮肥は禽獸の肉。

【題義】昔の王者の奢侈遊樂に耽つた事を詠じて暗に時君を諷した作である。

【詩意】楚王は多くの美人を選んで妃となし、又狩を好み錦の鞲をして鷹を臂に載せ、羅の著物を著て馬を驅り、此等の妃を隨へて狩に出かけた。遂に宮女だちが男子と同じく武藝を習ふやうになつた。かくて女色と狩獵とに現をぬかしてゐた爲に政刑が忽ち弛んでしまひ、晝は雲夢の澤に狩し夜は章華の臺に宴し、飽く所を知らぬ有樣であつた。東風が吹いて春雁の飛ぶ季節になれば、美人たちが弓箭を挾んで御伴を致し、一發して雙飛の雁を射止めるやうな妙伎を演ずるので、流石の雁も驚いて飛ばず、翅を斂めて美人に警戒するやうになつた。楚王は之を顧みて滿面に得意の笑を湛へ、美人は大に面目を施し、媚を含んで楚王を見て、承れば昔莊王の御時に、樊姬とやら申す愚な夫人が御坐つて、この遊樂を好まず、三年も禽獸の肉をたべられなかつたとの御話で御坐いますが、さても愚な事で御坐ります」などと謂つてゐる。

〔二〕

越國政初荒。越天旱不レ已。　越國政初めて荒み、越天旱して已まず。
風日燥二水田一。水涸塵飛起。　風日水田を燥かし、水涸れて塵飛び起る。
國中新下レ令。官(一)渠禁二流水一。　國中新に令を下し、官渠に流水を禁ず。
流水不レ入レ田。壅入二王宮裏一。　流水田に入らず、壅がりて王宮の裏に入る。
餘波養二魚鳥一。倒影浮二樓(二)雉一。　餘波魚鳥を養ひ、倒影樓雉を浮ぶ。
(三)瀲灩九折池。縈廻十餘里。　瀲灩たる九折の池、縈廻すること十餘里。
四月芰(四)荷發。越王日遊嬉。　四月芰荷發き、越王日に遊嬉す。
左右好風來。香動二芙蓉蕊一。　左右より好風來り、香芙蓉の蕊を動かす。
但愛二芙(五)蓉香一。又種二芙蓉子一。　但芙蓉の香を愛し、又芙蓉の子を種う。
不レ念二閭(六)門外一。千里稻苗死。　念はず閭門の外、千里稻苗の死るるを。

【字解】【一】官渠　官で開鑿した溝。【二】樓雉　雉は垣なり。【三】瀲灩　水の搖く貌。九折池は唐書安樂公主傳に「嘗請二昆明池一、爲二私沼一、帝曰、先帝未レ有二以與レ人者一、主不レ悅、自鑿二定昆池一、延袤數里、司農卿趙履溫爲繕治、累レ石肖二華山一、回瀾九折、以

石濱水」とある。【五】芰荷　芰と蓮。【五】芙蓉　蓮花の異名。【六】閶門　天に昇る門。因つて王城の門をいふ。

【詩意】越國の政令が荒廢するや旱魃が打續いて起り、田の水が涸れて埃が立つやうになつた。すると國中にお布令を出して官渠の水を流すことを禁じ、之を田に入れないで王宮の池に入れた。王宮の池は延袤十餘里に亙り、中には魚鳥が悠悠と泳ぎまはり、城閣の影が倒にうつつてゐる。四月になつて菱や蓮の花の開く頃になると、越王は之を賞玩することを日課とし、蓮花の香氣を好んで益〻蓮花を種ゑ足しなどして樂み、足一たび城門を出ると千里に亙つて稻が枯死するのも顧みない。

〔二〕

吳王心日侈。服玩盡奇瓌。
身臥翠羽帳。(一)手持紅玉杯。
冠垂明月珠。帶束通天犀。(二)
行動自矜顧。數步一徘徊。
小人知所好。懷寶四方來。
奸邪得藉手。從此倖門開。(三)
古稱國之寶。穀米與賢才。

〔二〕

吳王心日に侈り、服玩奇瓌を盡す。
身は翠羽の帳に臥し、手は紅玉の杯を持つ。
冠は明月の珠を垂れ、帶は通天の犀を束ぬ。
行動自ら矜り顧み、數步に一たび徘徊す。
小人好む所を知り、寶を懷いて四方より來る。
奸邪手を藉るを得、此より倖門開く。
古に稱す國の寶は、穀米と賢才となりと。

今看君王眼。視之如塵灰。
(四)伍員諫已死。浮屍去不迴。
(五)姑蘇臺下草。麋鹿暗生麑。(六)

今看る君王の眼、之を視ること塵灰の如し。
伍員諫めて已に死し、浮屍去つて廻らず。
姑蘇臺下の草、麋鹿暗に麑を生せり。

【字解】【一】翠羽帳　翡翠の羽のトバリ。【二】通天犀　抱朴子に「通天犀、得其角一尺以上、刻爲魚而銜以入水、水常爲開」とある。【三】倖門開　君に諂つて寵倖を得んと希ふ者が多くなつたこと。【四】伍員　吳王夫差の越を敗るや越王勾踐和を請ふ。夫差之を許す。伍員諫むれども聽かず。太宰嚭の讒を信じて伍員に死を賜ふ。伍員死する時家人に告げて曰く、吾が眼を抉りて東門に懸けよ、以て越寇の吳を滅すを觀んと。夫差之を聞いて大に怒り、伍員の屍を取り、之を馬革囊に盛り之を江に投ず。後九年越吳を滅ぜり。【五】姑蘇臺　吳王の都城。【六】麑　鹿の子。

【詩意】吳王の越を敗るや心日に侈り、服玩すべて綺麗を盡し、身は翠羽の帳中に臥し、手には紅玉の杯を持ち、冠には明月の珠を垂れ、帶には通天犀を束ね、擧動も亦隨つて矜誇になり、徘徊睥睨四邊を壓するばかりであつた。すると世の小人どもが君の好につけ込み、四方から珍奇な寶を持込むやうになり、奸邪の臣は奇貨置くべしとなして、珍玩を進めて君に取り入ることを務めた。昔は穀米と賢才とは國の寶だと言つたが、吳王の目には塵埃ぐらゐにしか見えない。伍員（字は子胥）は諫めて死し、江上に投棄てられた。其屍も已に流れ去つて返らず。やがて國礎が覆つて麋鹿の棲所と化してしまつた。

宿(一)紫閣山北邨

紫閣山北の邨に宿す

晨遊紫閣峰。暮宿山下邨。　晨には紫閣の峰に遊び、暮には山下の邨に宿す。
邨老見予喜。爲予開(二)一尊。　邨老予を見て喜び、予が爲に一尊を開く。
擧杯未及飲。暴卒來入門。　杯を擧げて未だ飲むに及ばざるに、暴卒來つて門に入る。
(三)紫衣挾刀斧。(四)草草十餘人。　紫衣刀斧を挾み、草草たり十餘人。
奪我席上酒。掣我盤中飱。　我が席上の酒を奪ひ、我が盤中の飱を掣す。
主人退後立。斂手反如賓。　主人退きて後に立ち、手を斂めて反つて賓の如し。
中庭有奇樹。(五)種來三十春。　中庭に奇樹有り、種來三十春。
主人惜不得。持斧斷其根。　主人惜しめども得ず、斧を持ちて其根を斷つ。
口稱采造家。身屬(六)神策軍。　口に稱し采られて家に造る。身は神策の軍に屬す。
主人愼勿語。(七)中尉正承恩。　主人愼んで語ること勿れ。中尉正に恩を承く。

【字解】【一】紫閣山　陝西省鄠縣の東南に在る。杜甫の詩に「紫閣峯陰入渼陂」とある。【二】一尊　尊は樽に同じ、酒樽。【三】紫衣　神策軍に屬する兵士の服。唐の李庾の西都賦に「親兵百萬、制以神策、紫身豹首云云」とある。【四】草草　無作法な貌。【五】種來　植ゑて以來。三十春は三十年。【六】神策軍　唐の禁軍の稱。【七】中尉　唐の中葉以後神策軍を置き、宦官を以て護軍中尉となし之を統領せしめた。

【題義】紫閣山北の村に宿して、禁衞軍の暴行に遇つた有樣を敍したのである。

【詩意】朝に紫閣峰に遊び夜山下の村に宿つた。村の老人は余の來たのを喜んで酒の用意をして款待してくれた。いざ飲まうといふ時に紫の軍服をまとひ手に手に刀や斧を持つた十餘人の暴卒が藪から棒に飛び込んで來て、席上の酒を奪つて飲み、盤上の肴を引つ張り寄せて食ひちらした。主人は驚き怖れて引き退り却つて客人でもあるかのやうに愼んでゐた。庭に珍らしい樹があつて植ゑてから三十年にもなる。主人は伐られるのを惜んだが兵卒は容赦もなく伐り棄ててしまつた。歸り際に、「吾吾は採用されて兵士となり、神策軍に屬する者であるが、主將の命令で御前の家に來たのである。主將護軍中尉殿は君恩を受けて時めいてゐる御方だから、表沙汰にすると却つて御前の爲にならないから、此事は泣寢入にするがよいぞ」と言つて引き揚げて行つた。

讀(一)漢書

漢書を讀む

(二)禾黍與稂莠。雨來同日滋。　禾黍と稂莠と、雨來れば同日に滋り、
桃李與(三)荊棘。霜降同夜萎。　桃李と荊棘と、霜降れば同夜に萎む。

草木既區別。榮枯那等夷。
茫茫天地意。無乃太無私。
小人與君子。用置各有宜。
奈何西漢末。忠邪竝信之。
不然盡信忠。早絕邪臣窺。
不然盡信邪。早使忠臣知。
優游兩不斷。盛業日已衰。
痛矣蕭京輩。終令陷禍機。
每讀元成紀。憤憤令人悲。
寄言爲國者。不得學天時。
寄言爲臣者。可以鑒於斯。

草木既に區別す。榮枯那ぞ等夷する。
茫茫たる天地の意、乃ち太だ私無き無からんや。
小人と君子と、用置各宜しき有り。
奈何ぞ西漢の末、忠邪竝に之を信ずる。
然らずして盡く忠を信ぜば、早く邪臣の窺を絕たん。
然らずして盡く邪を信ぜば、早く忠臣をして知らしめん。
優游として兩ながら斷せず、盛業日に已に衰ふ。
痛しいかな蕭京が輩、終に禍機に陷れられしむ。
元成の紀を讀む每に、憤憤として人をして悲しましむ。
言を寄す國を爲むる者、天の時を學ぶを得ず。
言を寄す臣たる者、以て斯に鑒みる可し。

【字解】【一】漢書　前漢時代の事を記述した史書。後漢の班固の撰。【二】禾黍　稻やキビ。食料になる穀類。稂莠は苗を害するハグサ。【三】荊棘　いばら。醜木なり。【四】區別　差別のあること。【五】等夷　なかま。同等なこと。史記に「諸將皆陛下故等夷」とある。【六】用置　用ふると用ひざると。【七】西漢　前漢をいふ。【八】優游　優柔不斷。【九】蕭京　蕭望之と京房。蕭望之は宣帝の時太子太傅となり遺詔を受けて政を輔く。元帝位に卽くに及び、匡正する所多し。後弘恭・石顯の陷る所となり、鴆を飲んで自殺す。京房は孝廉を以て郞となり、元帝の時屢上疏し言ふ所皆中る。石顯等之を疾み、出して魏の太守となす。後獄に下されて死す。【一〇】元成　漢の元帝・成帝。

【題意】漢書を讀み所感を述べたのである。

【詩意】美穀でも醜草でも雨の潤を得れば同じく茂り、桃李でも荊棘でも霜が降れば同じく萎む。草木には美醜の區別があるのに、なぜ榮枯を同じうするのであらうか。天地の心は茫茫として知り難いが、至公無私だからではあるまいか。さて小人と君子とは本來用捨を異にすべきものである。かの前漢の末には、なぜ忠臣も邪臣も幷せ用ひたのであらう。若し盡く忠臣を信用したならば早く邪臣の窺窬を絕つことが出來たであらう。若し又盡く邪臣を信用したならば、早く忠臣をして之を知つて奮起せしめたであらう。然るに優柔不斷であつたから、盛業已に衰へ、蕭望之・京房などの忠臣も禍に陷ることになつて國家を恢復することは出來なかつた。故に漢書の元帝紀や成帝紀を讀めば人をして悲憤に堪へざらしめる。國を治める者は天を學んで至公無私を金科玉條と心得てはいけない。又臣たる者は此を鑒みて忠正を心懸くべきである。

贈樊著作(一)

樊著作に贈る

陽城爲諫議(二)。以正事其君。
陽城諫議と爲り、正を以て其君に事ふ。

其手如屈軼(三)。擧必指佞臣。
其手は屈軼の如く、擧ぐれば必ず佞臣を指す。

卒使不仁者。不得秉國鈞(四)。
卒に不仁者をして、國鈞を秉るを得ざらしむ。

元稹爲御史(五)。以直立其身。
元稹御史と爲り、直を以て其身を立つ。

其心如肺石(六)。動必達窮民。
其心肺石の如く、動けば必ず窮民を達す。

東川八十家。寃憤一言伸。
東川八十家、寃憤一言に伸ぶ。

劉闢(七)肆亂心。殺人正紛紛(八)。
劉闢亂心を肆にし、人を殺して正に紛紛たり。

其嫂曰庾氏。棄絶不爲親。
其嫂を庾氏と曰ふ。棄絶して親と爲さず。

從史(九)萌逆節。隱心潛負恩。
從史逆節を萌す。隱心潛に恩に負く。

其佐曰孔戡(一〇)。捨去不爲賓。
其佐を孔戡と曰ふ。捨て去つて賓と爲さず。

凡此士與女。其道天下聞。
凡そ此士と女と、其道天下に聞ゆ。

常恐國史上。但記鳳與麟(一一)。
常に恐る國史の上、但鳳と麟とを記せんことを。

賢者不爲名。名彰教乃敦。
賢者は名の爲にせざれども、名彰れて敎乃ち敦し。

每惜若人輩。身死名亦淪。
每に惜むかくのごとき人の輩、身死して名亦淪むを。

君爲著作郎。職廢志空存。
君著作郎と爲り、職廢れて志空しく存す。

雖有良史才。直筆無所申。
良史の才有りと雖も、直筆申ぶる所無し。

何不自著書。實錄彼善人。
何ぞ自ら書を著し、彼の善人を實錄し、

編爲一家言。以備史闕文(一二)。
編みて一家言と爲し、以て史の闕文に備へざる。

【字解】【一】樊著作　樊宗師、字は紹述、元和中著作佐郎を授けられ、綿絳二州の刺史となり、治績あり、諫議大夫に進む、著作郎は國史を掌る官。【二】諫議　官名、諫議大夫。【三】屈軼　また指佞草と名づく。帝王世紀に「黃帝時有草生於庭。佞人入指之名曰屈軼」とある。【四】國鈞　國家の政權。【五】御史　官名、監察御史。【六】肺石　周禮に「以肺石達窮民」注に「赤石也。古設於外朝、爲聽訟之處」とある。【七】劉闢　初め韋皐の府に佐たり。皐卒す。闢後務を主る。憲宗給事中を以て之を召す。詔を奉ぜず。卽ち劍南西川節度使に拜す。闢益驕蹇にして三川を統べんことを求む。杜黃裳高崇文等を薦め神策行營の兵に將として西討せしむ。詔して自ら新にせんことを許す。闢聽かず。崇文東川を取る。帝乃ち詔を下して其官を奪ひ、京師に擒送して之を斬る。【八】紛紛　多き貌。【九】從史　盧從史なり。澤潞節度使李長榮署して督將となす。長榮卒す。昭義節度副大使に拜せらる。漸く驕恣なり。憲宗兵を領して賊を討たしむ。從史陰に王承宗と通じ兵を勒して逗留し、上書して宰相を兼ねんことを求む。吐突承璀密旨を受け間に乘じ之を縛して以て獻ず。死を賜ふ。【一〇】孔戡　哭孔戡の(一)を見よ。【一一】鳳與麟　國家の祥瑞をいふ。【一二】史闕文　史上の缺失。論語に「吾猶及史之闕文也」とある。

【題義】 著作佐郎樊宗師に贈り直筆を奮つて善人を彰すべきことを勸めたのである。

【詩意】 陽城は諫議大夫となり正論を唱へて君に事へた。手は屈軼の如く必ず佞人を指摘した。卒に不仁者(裴延齡)の宰相となることを拒んだ。元稹は監察御史となり直を以て其身を立て、心は肺石の如く必ず窮民に及んだ。故に東川八十家の寃憤が其一言で霽らされた。劍南西川節度使劉闢は亂心を肆にし、妄に人を殺し其嫂庾氏を棄てて顧みず。昭義節度使盧從史は君恩に負いて叛逆を謀り、其佐孔戡を捨てて賓僚とせず。此等の士女は其善惡皆天下に聞えてゐる。國史には麟鳳嘉瑞をのみ記述して賢者の名を彰すことを閑却する嫌がある。賢者は名の爲に事を爲すものではないが、賢者の名を彰せばこそ敎化も敦くなるのである。此等の善人の名が淪沒することは惜むべきことである。君は著作郎となつてゐるが、思ふ樣に職責を果すことの出來ぬはめに陷つてゐて、良史の才を持ちながら、直筆を奮ふことが出來ない。已むなくば自ら一書を著して彼の善人を實錄し、正史の闕を補つてはどうだ。

蜀路石婦

蜀路の石婦

道傍一石婦。無記復無銘。　道傍の一石婦、記も無く復銘も無し。
傳是此鄉女。爲婦孝且貞。　傳ふ是れ此鄉の女と、婦と爲りて孝且つ貞。
十五嫁邑人。十六夫征行。　十五邑人に嫁し、十六夫征行す。
夫行二十載。婦獨守孤煢。　夫行いて二十載、婦獨り孤煢を守る。
其夫有父母。老病不安寧。　其夫父母有り、老病して安寧ならず。
其婦執婦道。一一如禮經。　其婦婦道を執ること、一一禮經の如し。
晨昏問起居。恭順發心誠。　晨昏に起居を問ひ、恭順心の誠に發す。
藥餌自調節。膳羞必甘馨。　藥餌自ら調節し、膳羞必ず甘馨なり。
夫行竟不歸。婦德轉光明。　夫行きて竟に歸らず、婦德轉光明なり。
後人高其節。刻石像婦形。　後人其節を高しとし、石に刻して婦の形に像る。
儼然整衣巾。若立在閨庭。　儼然として衣巾を整へ、立ちて閨庭に在るが若し。
似見舅姑禮。如聞環珮聲。　舅姑の禮を見るに似たり、環珮の聲を聞くが如し。
至今爲婦者。見此孝心生。　今に至るまで婦たる者、此を見て孝心生ず。
不比山頭石。空有望夫名。　山頭の石の、空しく望夫の名有るに比せず。

【字解】【一】二十載　二十年。【二】孤煢　孤獨なり。【三】膳羞　羞は食物の滋味あるもの。【四】環珮　腰に佩ぶる玉。禮記に「行步則有環珮之聲、升車則有鸞和之音」とある。【五】望夫　武昌の北山に石あり、狀人の立つが如し。相傳ふ昔貞婦あり。其夫役に從ひ遠く國難に赴く。婦子を攜へ此山に餞送して夫を望み、化して石となると。事神異經に見ゆ。

【題義】 蜀路に婦人の石像を見て其孝貞を述べたのである。

【詩意】 路傍に婦人の石像が立つてゐる。記も銘も刻してない。聞けば此村の女で孝貞の譽の高い女なさうだ。十五の時村の男に嫁し、十六の時夫は從軍し、それ以來二十年の間といふものは獨り空閨を守つた。夫に兩親があつて年老い病みほうけてゐるが、此婦は正しく婦道を守つて禮經の通りにし、朝晩は必ず舅姑の御機嫌を伺ひ、誠意を以て恭順を行ひ、藥餌や食事も人手を借らずに自ら整へた。後の人が其貞節をほめて此像を立てたとの事である。見れば儼然と衣巾を整へて立ち、舅姑に事ふる禮を見るが如く、環珮の音を聞くやうに感ぜられる。今日まで此石を見て孝心を起したものが少くないであらう。かの夫の後を慕つて石に化したといふ望夫石とは同日の論ではない。

折劍頭（一）

折劍頭

拾得折劍頭。不知折之由。
折劍の頭を拾得す。之を折りし由を知らず。

一握青蛇尾。數寸碧峯頭。
一握青蛇の尾、數寸碧峯の頭。

疑是斬鯨鯢。不然刺蛟虬（二）。
疑ふらくは是れ鯨鯢を斬るか、然ずんば蛟虬を刺すかと。

缺落泥土中。委棄無人收。
缺けて泥土の中に落ち、委棄せられて人の收むる無し。

我有鄙介性（三）。好剛不好柔。
我鄙介の性有り、剛を好んで柔を好まず。

勿輕直折劍。猶勝曲全鉤（四）。
輕んずること勿れ直折の劍、猶曲全の鉤に勝れり。

【字解】【一】折劍頭　折れた劍の頭。【二】蛟虬　龍なり。【三】鄙介性　狷介な性質。一國者。【四】曲全鉤　曲つて折れずにゐるカギ。鉤は釣針の如きもの。

【題義】 折劍の端を拾ひ、所感を述べた。

【詩意】 折れた劍の頭を拾ひ得た。なぜ折れたのか其由はわからない。其形は青蛇の尾の如く、又碧峰の頂のやうだ。恐らく鯨鯢を斬つたか蛟龍を刺した爲に折れたのであらう。一旦折れて泥土の中に落ちると、全く棄てられて拾ひ取る人もない。ただ余は狷介な氣質で剛を好んで柔を惡む。世人に直にして折れる劍を輕んじてはいけない。曲つて全き鉤よりは遙に優つてゐるではないか。

登樂遊園望

樂遊園に登りて望む

獨上樂遊園（一）。四望天日曛。
獨り樂遊園に上る。四望天日曛る。

東北何靄靄（二）。宮闕入煙雲。
東北何ぞ靄靄たる、宮闕煙雲に入る。

愛此高處立。忽如遺垢氛（三）。
此を愛して高處に立てば、忽ち垢氛を遣るるが如し。

耳目暫淸曠。懷抱鬱不伸。　耳目暫く淸曠、懷抱鬱して伸びず。
下視十二街。綠樹間紅塵。　十二街を下視すれば、綠樹紅塵に間る。
車馬徒滿眼。不見心所親。　車馬徒に眼に滿ち、心の親む所を見ず。
孔生死洛陽。元九謫荊門。　孔生は洛陽に死し、元九は荊門に謫せらる。
可憐南北路。高蓋者何人。　憐む可し南北の路、高蓋の者は何人ぞ。

【字解】【一】樂遊園　樂遊原ともいふ。長安の南、杜陵の西北に在り。漢の宣帝廟宇を曲江池の北に立て樂遊と號したので、遂に樂遊原の名が起つた。原は京城の最高處で眺望絕佳である。每年正月晦日、三月三日、九月九日には京城の士女皆此に登賞する習である。【二】靄靄　雲のたなびく貌。【三】垢氛　塵俗なり。【四】十二街　張衡の西都賦に方軌十二、街衢相經とあり。鮑照の詩に、京城十二衢とあり。張籍の詩に十二街中春雪遍とある。【五】孔生　孔戡。前の哭二孔戡一と題する詩を見よ。【六】元九　元稹なり。前の贈二元稹一と題する詩を見よ。荊門は山名。元稹は江陵參軍に貶せられた。【七】高蓋　蓋は車の日おほひ。高車といふが如し。

【題義】 樂遊園に登り四方を望んだ感懷を敍したのである。

【詩意】 唯獨り樂遊園に上り、四方を眺めた。折しも日の暮れがたであつたので、東北に見ゆる宮城のあたりは薄暗くてはつきりと見えない。自分は此の景が甚だ氣に入つたので、更に一段高い處に立てば、遙に俗塵を超脫したやうに思はれて耳も目もすがすがしさを感じるが、胸中の鬱憤は一向に霽れない。長安の街衢を瞰下せば綠樹が紅塵に雜り、車馬が右往左往してゐるが、吾が親交を結んでゐる友は見えない。ああ吾が友孔戡は洛陽に死し、元稹は荊門に貶せられ、南を見ても北を見ても高車駟馬を驅つて時めいてゐる者は、取るにも足らぬ徒輩ばかりだ。慨嘆に堪へない。

酬元九對新栽竹有懷見寄

元九が新に栽うる竹に對して懷有り寄せらるるに酬ゆ

頃有贈元九詩云。有節秋竹竿。故元感之。因重見寄

頃ろ元九に贈る詩あり、云く、節あり秋竹の竿と。故に元之に感じ、因つて重ねて寄せらる

昔我十年前。與君始相識。　昔我十年の前、君と始めて相識る。
曾將秋竹竿。比君孤且直。　曾て秋竹の竿を將て、君が孤且つ直なるに比す。
中心一以合。外事紛無極。　中心一に以て合ひ、外事紛として極り無し。
共保秋竹心。風霜侵不得。　共に秋竹の心を保ち、風霜侵し得ず。
始嫌梧桐樹。秋至先改色。　始めて嫌ふ梧桐の樹、秋至れば先づ色を改むるを。
不愛楊柳枝。春來軟無力。　愛せず楊柳の枝、春來れば軟かにして力無きを。

憐君別我後。見竹長相憶。　憐む君我に別れて後、竹を見て長く相憶ひ、
常欲在眼前。故栽庭戸側。　常に眼前に在らしめんと欲し、故に庭戸の側に栽う。
(一)分首今何處。君南我在北。　首を分つて今何處ぞ。君は南 我は北に在り。
吟我贈君詩。對之心(二)惻惻。　我君に贈る詩を吟じて、之に對して心惻惻たり。

【字解】【一】分首　遠く別れること。【二】惻惻　痛み悲む貌。

【題義】元稹江陵に貶せられ、新に竹を庭前に栽ゑ、之に對して懷あり、詩を作つて樂天に寄せた。樂天因つて此詩を作つて元稹に酬いたのである。

【詩意】今から十年前に君と僕とは相識の間柄になつた。僕は君の心の孤直なることを秋竹に比して贊歎し、世事紛紛として極りなきも、君と僕とは中心相合うて違ふことなく、共に秋竹の操を保ち、風霜も侵すことは出來なかつた。因つて梧葉の秋至れば忽ち落ち、楊柳の春色に媚びて柔枝を垂るるを嫌つた。君は僕に別れて後、竹を見て遙に僕を思ひ、故に窓前に栽ゑて、僕を偲ぶ料となし、僕が君に贈つた詩を吟じ、其竹に對して獨り心を痛ましめてゐる。誠に氣の毒に堪へない。

感鶴　鶴に感ず。

鶴有不羣者。飛飛在野田。　鶴不羣の者有り、飛び飛んで野田に在り。
飢不啄腐鼠。渴不飲盜泉。　飢うれども腐鼠を啄まず、渴すれども盜泉を飲まず。
貞姿自(一)耿介。雜鳥何(二)翩翾。　貞姿自ら耿介、雜鳥何ぞ翩翾たる。
同遊不同志。如此十餘年。　遊を同じうして志を同うせず。此の如きこと十餘年。
一興嗜慾念。遂爲(三)矰繳牽。　一たび嗜慾の念を興し、遂に矰繳に牽かる。
(四)委質小池內。爭食羣雞前。　質を小池の內に委ね、食を羣雞の前に爭ふ。
不惟懷稻粱。兼亦競(五)腥羶。　惟稻粱を懷ふのみならず、兼ねて亦腥羶を競ふ。
不惟戀主人。兼亦狎(六)烏鳶。　惟主人を戀ふるのみならず、兼ねて亦烏鳶に狎る。
(七)物心不可知。天性有時遷。　物心知る可からず、天性時有つて遷る。
一飽尙如此。況乘(八)大夫軒。　一飽尙此の如し。況んや大夫の軒に乘るをや。

【字解】【一】耿介　節操を守ること。【二】翩翾　輕く飛ぶ貌。【三】矰繳　いぐるみの矢。【四】質を委す　身を置くこと。【五】腥羶　肉なり。【六】烏鳶　凡俗の徒に比す。【七】物心　人心なり。【八】大夫軒　左傳に、「衞の懿公鶴を好み、鶴軒に乘る者あり。」註に軒は大夫の車とあり。

【題義】鶴の凡鳥と異つて操守の高いことを詠じ、俗人の名利に奔走することを刺つたのである。

【詩意】鶴は凡鳥と羣せざる操守があつて野田の間に飛んでゐる。飢ゑても腐鼠を食はず、渴しても盜泉の水は飲まない。世の凡鳥の翩翩として輕く飛ぶのとはまるで違つて、氣位の高いものであつた。此の如きこと十年の長い間であつた。然るに一朝、慾念に驅られて、遂にいぐるみの禍に遭ふに至つた。身を小池の内に置き、羣雞と伍して食を爭ひ、ただ米粟を爭ふのみならずして鮮肉をも爭ひ、ただ主人を慕ふのみならずして凡俗の輩をも慕ふ。人心は豫期すべからず、天性も時としては變るものである。利益ですら此の如く爭ふのであるから、官位などを爭ふのは謂ふまでもない。

春雪

(一)元和歳在卯。六年春二月。　元和歳卯に在り、六年春二月。

(二)月晦寒食天。天陰夜飛雪。　月晦寒食の天、天陰つて夜雪を飛ばす。

連宵復(三)竟日。(四)浩浩殊未歇。　連宵復竟日、浩浩として殊に未だ歇まず。

大似落鵝毛。密如飄玉屑。　大は鵝毛を落すに似たり、密は玉屑を飄すが如し。

寒銷春(五)茫蒼。氣變風凜冽。　寒銷えて春茫蒼、氣變じて風凜冽。

(六)上林草盡沒。(七)曲江水復結。　上林草盡く沒し、曲江水復結ぶ。

紅乾杏花死。綠凍楊枝折。　紅乾いて杏花死れ、綠凍りて楊枝折る。

所憐物性傷。非惜(八)年芳絕。　憐む所物性の傷くを、年芳の絕ゆるを惜むに非ず。

上天有(九)時令。(一〇)四序平分別。　上天時令有り、四序平に分別す。

(一一)寒燠苟反常。物性皆(一二)夭閼。　寒燠苟も常に反すれば、物性皆夭閼す。

我觀聖人意。(一三)魯史有其說。　我聖人の意を觀るに、魯史其說有り。

或記水不冰。或書霜不殺。　或は水の冰らざるを記し、或は霜の殺さざるを書す。

上將儆政敎。下以防(一四)災孽。　上は將て政敎を儆め、下は以て災孽を防ぐ。

茲雪今如何。信美非時節。　茲雪今如何、信に美なれども時節に非ず。

【字解】【一】元和　憲宗の年號。歳は歳星とて星の名。その星が卯をさすことで、元和六年辛卯をいふ。【二】月晦　みそか。寒食は氣節の名、冬至から一百五日目。【三】竟日　終日に同じ。【四】浩浩　盛にふる貌。【五】茫蒼　春のぼんやりした貌。【六】上林　天子の御苑。【七】曲江　長安に在る池の名。都人遊賞の地。【八】年芳　春の花。【九】時令　もとは時節に布く政令の意であるが、後世では單に時節の意となる。【一〇】四序　四季、春夏秋冬。【一一】寒燠　寒暖。【一二】夭閼　おさへふさがれる。【一三】魯史　孔子の著した春秋を指す。【一四】災孽　わざはひ。

【題義】春になつて大雪が降つたことを賦して、時節の順調でないことを悲んだのである。

【詩意】元和六年春二月末の寒食の頃に、大雪が連日連夜ふりつづいて尙ほ歇まない。その大きさは鵞鳥の羽の如く、その密なることは玉屑を飄すやうである。一時寒氣もゆるみ大分春景色になつて來たのが、忽ち一變して寒風膚を劈き、御苑の草も盡く埋まり、曲江には復び氷がはりつめ、紅の杏の花も色褪せ、綠の楊の枝も折れた。春花の絕えたのは敢て惜みはしないが、萬物が其性を損傷せらるるのは同情に堪へない。天には一定の時節があつて、四季に平分せられてゐるのであるから、寒暖其常を失へば、萬物は皆其性を害される。聖人孔子も此に感ずる所があつて、春秋に氷のはらなかつた事や霜が草木を枯らさなかつた事を記し、上は政敎の宜しきを失つてゐることを警め、下は災殃を防ぐ料とした。さて今年の雪は如何といふに、信に景色は美しくなつたが、時節には相應しない。これといふも政敎が宜しきを失つてゐるからであらう。

(一)高僕射

富貴人所レ愛。聖人去二其泰一。(二)　富貴は人の愛する所、聖人は其泰を去る。
所以致(三)レ仕年。著在二禮經内一。　所以に仕を致すの年、著して禮經の內に在り。
(四)玄元亦有レ訓。知レ止則不レ殆。　玄元亦訓有り、止るを知れば則ち殆からずと。
(五)二疏獨能行。遺二跡東門外一。(六)　二疏獨り能く行ひ、跡を東門の外に遺す。
清風久銷歇。追レ此向二千載一。(七)　清風久しく銷歇し、此に追ぶまで千載に向とす。
斯人古亦稀。何況今之代。　斯のごとき人古亦稀なり。何ぞ況んや今の代をや。
(八)遑遑名利客。白首千百輩。　遑遑たり名利の客、白首千百輩。
唯有二高僕射一。七十懸(九)二車蓋一。　唯高僕射のみ有り、七十にして車蓋を懸く。
我年雖レ未レ老。歲月亦云邁。　我年未だ老いずと雖も、歲月亦云に邁きぬ。
預恐耄及時。貪レ榮不レ能レ退。　預め恐る耄の及ぶ時、榮を貪つて退く能はざるを。
中心私自儆。何以爲二我戒一。　中心私に自ら儆む、何を以てか我戒と爲さん。
故作二僕射詩一。書二之於大帶一。(一〇)　故に僕射の詩を作り、之を大帶に書す。

【字解】【一】高僕射　僕射は官名。高は姓。【二】泰　驕泰なり。老子第二十九章に「聖人は甚を去り奢を去り泰を去る」とあり。【三】致仕　官を辭して隱退すること。【四】玄元　老子をいふ。【五】二疏　漢の疏廣は宣帝の太傅となり、兄の子受は少傅となる。位に在ること五歲、俱に病と稱し官を辭して鄕に歸る。【六】東門　疏廣、疏受の官を辭して歸鄕する時、洛陽の東門外に送る者車數百乘あつたといふ。【七】千載　千年なり。【八】遑遑　汲汲といふが如し。【九】懸車蓋　懸車に同じ、車を懸けて再び出でざるを示す意で、辭職すること。【一〇】大帶　紳なり。禮服の上にしめる帶。論語に「子張これを紳に書す」とあり。

【題義】高僕射の七十になつて高踏勇退したことをほめた詩である。

【詩意】富貴は皆人の好む所で、ともすれば溺れ易いから、聖人は驕泰を去つて貪らず。又禮記の中には「大夫七十にして事を致す」と明記してある。老子も亦「止まるを知れば殆からず」と敎訓を垂れてゐる。漢の疏廣、疏受の二人は能く此訓を守り東門の外に偉跡を留めてゐる。かかる清廉の風は久しく絶えて今や將に千年ならんとするが、古人にも稀なのだから現代には尙更少いわけで、今日の人は皆名利の奴となつて白髮を戴いて奔走する者が幾千百人あるかわからない。獨り高僕射は禮記の明文通り七十になつた所が潔く官を辭した。余はまだ老年といふ程ではないが、年月の立つのは早いものだから、おつつけ老年になるのであるが、どうか老いぼれないうちに早く足を洗ひたいものだ。中心私に此を以て戒となし、高僕射の詩を作つて之を紳に書し、忘れないやうにする次第である。

白牡丹　和錢學士作

（一）城中看花客。旦暮走營營。（二）

（三）素華人不顧。亦占牡丹名。

開在深寺中。車馬無來聲。

唯有錢學士。盡日遶叢行。

憐此皓（四）然質。無人自芳馨。

衆嫌我獨賞。移植在中庭。

留景夜不暝。迎光曙先明。

對之心亦靜。虛（五）白相向生。

（六）唐昌玉蘂花。攀翫衆所爭。

折來比顏色。一種如瑤瓊。

彼因稀見貴。此以多爲輕。

始知無正（七）色。愛（八）惡隨人情。

豈惟花獨爾。理與人事幷。

君看入眼者。紫艷與紅英。

白牡丹　錢學士に和する作

城中花を看る客、旦暮走つて營營たり。

素華は人顧みざれども、亦牡丹の名を占む。

開いて深寺の中に在り、車馬來る聲無し。

唯錢學士のみ有り、盡日叢を遶つて行く。

憐む此皓然の質、人無くして自ら芳馨。

衆は嫌へども我獨り賞し、移し植ゑて中庭に在く。

景を留めて夜暝からず、光を迎へて曙先明なり。

之に對すれば心も亦靜に、虛白相向つて生ず。

唐昌の玉蘂花、攀翫して衆の爭ふ所なり。

折り來つて顏色を比すれば、一種瑤瓊の如し。

彼は稀なるに因つて貴ばれ、此は多きを以て輕ぜらる。

始めて知る正色無く、愛惡は人情に隨ふことを。

豈惟花のみ獨爾らんや、理は人事と幷ぶ。

君看よ眼に入る者、紫艷と紅英と。

【字解】【一】城中　長安の都の中。【二】營營　忙しく奔走する貌。【三】素華　白い花。白牡丹。【四】皓然質　白い姿。【五】虛白云云　莊子人間世篇に「虛室生白」とあり。【六】唐昌　劇談錄に「長安の安業坊の唐昌觀にもと玉蘂花あり云云」とあ

り。玉蘂は花の名。色白し。唐人は甚だ此花を重んじた。【七】正色　定色といふが如し。美醜の評價の一定して動かない色。莊子齊物論に「毛嬙麗姬は人の美とする所なり。魚之を見れば深く入り、鳥之を見れば高く飛び、麋鹿之を見れば決驟す。四者孰か天下の正色なるを知らんや」とあり。【八】愛惡　愛憎、好惡なり。

【題義】白牡丹を借りて、世人は紅紫を愛して素白を嫌ふが、美醜は本來物に在るのではなくて我が心に在るのであるといふことを敍した。

【詩意】長安城中の人人は、朝から晩まで花を觀る爲に奔走してゐる。併し白い花は見ばえがしないので誰も顧る者もなく、此花はただ牡丹といふ名ばかりで、日蔭者のやうに山寺の中に在るから、トント觀に來る人もない。ただ錢學士のみは此花を好んで、終日叢を遶つて賞玩した。余も此花の潔白な姿を持ち、賞玩する人がなくても不平がましい色もせず、獨り自ら操守を守つてゐるのを愛する。因つて中庭に移し植ゑた。夜になつて花の色で明るさを感じ、夜の明けぬに早くも旭の光を見ることが出來る。此花に對すれば、吾が心も自然と虛靜になる。唐昌觀の玉蘂花は世人の爭つて賞玩する所のものであるが、折り來つて此花と色香を比べると、玉のやうな美しさを持つてゐることは、孰れも同じであるが、ただ彼は類が稀なので貴ばれ、此は類が多いので珍重されない。此に因つても世に正色といふものはない。美醜は人情に由つて決するものだといふことがわかる。ただ獨り花ばかりでない。人事も此と同理である。眼に入る者は紫艷と紅英とであることを見て考へて見給へ。

贈内（一）

内に贈る

生爲同室親。死爲同穴塵。
生きては同室の親みを爲し、死しては同穴の塵と爲る。

他人尙相勉。而況我與君。
他人すら尙相勉む、而るを況んや我と君とをや。

（二）黔婁固窮士。妻賢忘其貧。
黔婁は固より窮士なるも、妻賢にして其貧を忘る。

（三）冀缺一農夫。妻敬儼如賓。
冀缺は一農夫なるも、妻敬して儼として賓の如し。

（四）陶潛不營生。（五）翟氏自爨薪。
陶潛は生を營まず、翟氏自ら爨薪す。

（六）梁鴻不肯仕。孟光甘布裙。
梁鴻は肯て仕へず、孟光布裙に甘んず。

君雖不讀書。此事耳亦聞。
君書を讀まずと雖も、此事耳に亦聞かん。

至此千載後。（七）傳是何如人。
此千載の後に至り、傳ふ是れ何如なる人ぞ。

人生未死間。不能忘其身。
人生れて未だ死せざる間、其身を忘るる能はず。

所須者衣食。不過飽與溫。
須ふる所の者は衣食、飽と溫とに過ぎず。

蔬食足充飢。何必膏粱珍。
蔬食も飢を充すに足る、何ぞ必しも膏粱の珍のみならん。

繒絮足禦寒。何必錦繡文。
繒絮も寒を禦ぐに足る、何ぞ必しも錦繡の文のみならん。

君家有貽訓（八）。清白（九）遺子孫。　君が家に貽訓有り、清白子孫に遺す。
我亦貞苦士。與君新結婚。　我も亦貞苦の士、君と新に婚を結ぶ。
庶保貧與素。偕老同欣欣。　庶くは貧と素とを保ち、偕に老いて同じく欣欣たらん。

【字解】【一】内　妻をいふ。【二】黔婁　古代の齊の隱士、貧甚だし。【三】冀缺　左傳に「臼季使して冀を過ぐ。冀缺の耕耨し其妻之に饁するを見るに、相敬すること賓の如し」とあり。【四】陶潛　陶淵明。【五】翟氏　陶淵明の妻。【六】爨薪は炊事を躬らすること。【七】梁鴻　後漢の人、字は伯鸞、家貧にして氣節を尚ぶ。孟光を娶る。椎髻布衣自ら操作し、食を進むるに案を擧ぐること眉に齊うす。【七】千載　千年なり。【八】貽訓　遺訓に同じ。【九】清白　清廉潔白。

【題義】妻に贈つて質素を守るべきことを諭した詩である。

【詩意】生きては倶に室を同うし、死しては墓穴を倶にするは夫婦の道であるから、余の感ずる所を御身に勸勉するが、昔黔婁は窮士であつたが、妻が賢婦であつて少しも其貧を苦にしなかつた。冀缺は一の農夫であつたが、其妻は夫を敬すること賓客の如くであつた。陶淵明は生計を營まなかつたが、其妻翟氏は躬ら炊事までして善く夫に事へた。梁鴻も仕官を快しとせず、其妻孟光は粗服をまとつて滿足してゐた。御身は書物で讀んだことはあるまいが、耳には聞いたこともあるであらう。以上の婦人だちが千年を經た今日何如なる人と傳へられてゐるか、皆賢婦貞女として稱贊されてゐるではないか。人が生きてゐる間は衣食は必要缺くべからざるものであるが、要は腹を滿たし寒を防ぐに足ればよいのである。粗食でも腹は滿たせる。何も膏粱の珍味でなければならないわけではない。粗服でも寒は防げる。錦繡の文飾は無用の沙汰ぢや。御身の家には祖先の遺訓があつて子孫に清廉潔白の行を守らせてゐる。我も固より貞苦の人である。今御身と夫婦の縁を結んだからは、どこまでも貧素を守り、愉快に一生を終らうではないか。

寄唐生（一）

唐生に寄す

賈誼哭時事。阮籍（二）哭路岐。　賈誼は時事を哭し、阮籍は路岐を哭す。
唐生今亦哭。異代同其悲。　唐生今亦哭し、代を異にして其悲を同うす。
唐生者何人。五十寒且飢。　唐生なる者は何人ぞ。五十にして寒且飢う。
不悲口無食。不悲身無衣。　口に食無きを悲ます、身に衣無きを悲ます。
所悲忠與義。悲甚則哭之。　悲む所は忠と義と、悲甚だしければ則ち之を哭す。
太尉（四）擊賊日。尙書（五）叱盜時。　太尉賊を擊つの日、尙書盜を叱するの時。
大夫（六）死兇寇。諫議（七）謫蠻夷。　大夫兇寇に死し、諫議蠻夷に謫せらる。

每見如此事　聲發涕輒隨　　此の如き事を見る每に、聲發して涕輒ち隨ふ。
往往聞其風　俗士猶或非　　往往其風を聞きて、俗士猶或は非る。
憐君頭半白　其志竟不衰　　憐む君頭半白、其志竟に衰へず。
我亦君之徒　鬱鬱何所爲　　我亦君が徒なり、鬱鬱として何の爲す所ぞ。
不能發聲哭　轉作樂府詩　　聲を發して哭する能はず、轉た樂府の詩を作る。
篇篇無空文　句句必盡規（八）　篇篇空文無く、句句必ず規を盡す。
功高虞人箴（九）　痛甚騷人辭（一〇）　功は虞人の箴よりも高く、痛みは騷人の辭よりも甚だし。
非求宮律高（一一）　不務文字奇　　宮律の高きを求むるに非ず、文字の奇なるを務とせず。
惟歌生民病　願得天子知　　惟生民の病を歌ひて、天子の知を得んことを願ふ。
未得天子知　甘受時人嗤　　未だ天子の知を得ず、甘んじて時人の嗤を受く。
藥良氣味苦　琴淡音聲稀　　藥良ければ氣味苦く、琴淡ければ音聲稀なり。
不懼權豪怒　亦任親朋譏　　權豪の怒を懼れず、亦親朋の譏に任す。
人竟無奈何　呼作狂男兒　　人竟に奈何ともする無く、呼んで狂男兒と作す。
每逢羣盜息　或遇雲霧披　　羣盜の息むに逢ふ每に、或は雲霧の披くに遇ふがごとく、
但自高聲歌　庶幾天聽卑　　但自ら高聲に歌ふ。庶幾くは天の卑きに聽かんことを。
歌哭雖異名　所感則同歸　　歌哭名を異にすと雖も、感ずる所は則ち歸を同じうす。
寄君三十章　與君爲哭詞　　君に寄す三十章、君が與に哭詞を爲る。

【字解】【一】唐生　名は衢。舊唐書本傳に「進士の試に應じ久しく第せず、能く歌詩を爲る、意感發多し。人の文章を見、傷歎する所の者あれば、讀み訖つて必ず哭し、涕泗已む能はず。故に世に唐衢善く哭すと稱す云云」とあり。【二】賈誼　前漢の人、文帝召して博士となす。超遷して太中大夫に至る。【三】阮籍　三國魏の詩人。山に登り水を玩び竟日歸るを忘れ、途窮るに至る每に輒ち慟哭して歸る。路岐は路の分るること。【四】太尉　段太尉の笏を以て朱泚を擊つたこと。【五】尙書　顏眞卿代宗の時尙書右丞となる。李希烈の叛するや往きて順逆を論し、遂に其の殺す所となる。【六】大夫　自註に「陸大夫亂兵の爲に害せらる」とあり。【七】諫諍　諫議大夫陽城、裴延齡の相となるを拒んで極諫し、白麻を取つて之を裂く。乃ち道州刺史に貶せらる。【八】規　戒なり。【九】虞人箴　虞人は獸を掌る官。箴は訓戒の辭なり。左傳襄公四年に、「昔周の辛甲の大史たるや、百官に命じて官もて王の闕を箴せしむ。虞人の箴に於て曰く、芒芒たる禹跡、畫して九州となす。九道を經啓し、民に寢廟あり、獸に茂草あり。各處る攸あり、德もつて擾れず云云」とあり。【一〇】騷人　騷は憂なり。楚の屈原憂愁憂思して離騷を作る。【一一】宮律　宮は音律の名。音律といふが如し。

【題義】唐衢に寄せて、衢の世事を哭するは樂天の世事を歌ふと其揆を一にすることを述べたのである。

【詩意】昔賈誼は時事を哭し阮籍は岐路を哭したといふが、今唐生は世を異にして彼等と其悲哭を同うしてゐる。さて唐生は如何なる人ぞといふに、五十になつても尙ほ飢寒に苦んでゐるが、衣食の乏しいことなどは悲まないで不忠不義を悲み、悲むの結果は常に哭する。段太尉の賊を擊つた時、顏眞卿の盜を叱した時、陸大夫の寇兵に斃れた時、陽城の蠻夷に貶せられた時、皆之を哭して聲淚相倶に下つた。世の俗士は之を聞いて非笑するが、余は君が半白の老人になるまで、少しも其志の衰へないのを愛する者である。實は余も亦君の仲間で、常に鬱鬱として世事を憂へ、聲を發して哭しはしないが、樂府の詩を作つて慨を寄せてゐる。故に余が詩は一篇として空文はなく、必ず規戒の意を寓してゐるので、功は虞人の箴よりも高く、悲は騷人の辭にもまさつてゐる。音律の高いことや文字の奇は求めない。唯人民の痛苦を歌つて之を天聽に達すればよいのだ。所が未だ天聽に達しないうちに、世人の嘲笑を買つてしまふ。良藥は口に苦く稀聲は聽く者が少いならひで、余の詩も世人には受けがわるいが、怒らば怒れ譏らば譏れといふ態度でゐるので、世人も余を如何ともする能はず、狂男兒と呼んで取り合はない。羣盜の鎭まるに逢へば雲霧の散じたやうに氣がはればれとして、高聲に歌つて天子の聽かんことを庶幾つてゐる。歌ふと哭するとは事はちがふが、感慨は同じだ。因つて君に三十章の歌を寄せ、君が爲に哭詞を作つた。

傷唐衢二首

唐衢を傷む二首

自我心存道。外物少能逼。
我心に道を存してより、外物能く逼ること少し。

常排傷心事。不爲長歎息。
常に傷心の事を排し、長歎息を爲さず。

忽聞唐衢死。不覺動顏色。
忽ち唐衢が死を聞き、覺えず顏色を動かす。

悲端從東來。觸我心惻惻。
悲端東より來り、我に觸れて心惻惻たり。

伊昔未相知。偶遊滑臺側。（一）
伊昔未だ相知らざりしとき、偶滑臺の側に遊び、

同宿李翺家。一言如舊識。
同じく李翺が家に宿し、一言にして舊識の如し。

酒酣出送我。風雪黃河北。
酒酣にして出でて我を送る、風雪黃河の北。

日西竝馬頭。語別至昏黑。（二）
日西にして馬頭を竝べ、別を語つて昏黑に至る。

君歸向東鄭。我來遊上國。（三）
君は歸つて東鄭に向ひ、我は來つて上國に遊ぶ。

交心不交面。從此重相憶。
心を交へて面を交へず。此より重ねて相憶ふ。

憐君儒家子。不得詩書力。
憐む君が儒家の子にして、詩書の力を得ざることを。

五十著青衫。（四）試官無祿食。
五十にして青衫を著、官に試みられて祿食無し。

遺文僅千首。六義(五)無差忒。　遺文千首に僅く、六義差忒無きも、

散在京洛間。何人爲收拾。　散じて京洛の間に在り。何人か爲に收拾せん。

【字解】【一】滑臺　地名、白馬城ともいふ。今の河南省滑縣。【二】昏黑　夕暮。【三】上國　帝都に近い地方。【四】青衫　身分の低い者の著る服。【五】六義　詩に六義あり。風雅頌比賦興是れなり。差忒は違ふこと。

【題義】唐衢の死を悲んだ詩である。

【詩意】われ道術を體得してより、外物の爲に心を傷ましむることもなく、長歎太息することもない。ふと唐衢の死んだことを聞いて、覺えず顏色を變へて驚歎した。悲報は東方から傳はり來つて、わが心緒を亂したのである。想へば昔滑臺に遊んだ時、君と同じく李翶の家に宿り、一見舊知の如く親しくなつたのが、抑〻の知り始めであつた。あの時共に酒杯を擧げ、君は余を送つて風雨の中を黃河の北まで來て、馬を竝べて離別の悲を語つて日沒に至つた。それから君は東鄭に向ひ我は京に向つて、爾來心の交だけで相見ることはなく、常に遙に相憶ふのみであつた。氣の毒なことに、君は儒者の家に生れながら詩書の力を得ず、文官試驗を受けても及第も出來ず、五十になつても青衫を著、官に就いても俸祿も薄かつた。遺文は千首に近いほどあつて、六義に叶つた立派な作であるが、京洛の間に散佚し、誰あつて收錄する者もない。

【餘論】青衫は微賤の人の服である。甌北詩話に、「香山の詩惟に俸を記するのみならず、兼ねて品服を記す。初め校書郎となりてより江州司馬に至るまで、皆青綠を衣る。春去の詩あり、云く、青衫不改去年身と。寄微之に云く、折腰俱老綠衫中と。及び琵琶行に云く、江州司馬青衫濕と。是れなり云云」とある。

〔二〕

憶昨元和(一)初。忝備諫官位。　憶ふ昨元和の初、忝く諫官の位に備はる。

是時兵(二)革後。生民正憔(三)悴。　是時兵革の後、生民正に憔悴す。

但傷民病痛。不識時忌諱。　但民の病痛を傷んで、時の忌諱を識らず。

遂作秦中吟。一吟悲一事。　遂に秦中吟を作り、一吟一事を悲しむ。

貴人皆怪怒。間人亦非(四)訾。　貴人皆怪しみ怒り、間人も亦非訾す。

天高未及聞。荊棘生滿地。　天高うして未だ聞ゆるに及ばず、荊棘滿地に生ず。

惟有唐衢見。知我平生志。　惟唐衢のみ見る有り、我が平生の志を知る。

一讀興歎嗟。再吟垂涕泗。　一讀して歎嗟を興し、再吟して涕泗を垂る。

因和三十韻。手題遠緘(五)寄。　因つて和す三十韻、手づから題して遠く緘寄す。
致我陳(六)杜間。賞愛非常意。　我を陳杜の間に致し、賞愛すること常の意に非ず。
此人無復見。此(七)詩猶可貴。　此人復び見る無し、此詩猶貴ぶ可し。
今日開篋看。蠹(八)魚損文字。　今日篋を開いて看れば、蠹魚文字を損す。
不知何處葬。欲問先歔(九)欷。　知らず何の處にか葬る。問はんと欲して先づ歔欷す。
終去哭墳前。還君一掬淚。　終に去つて墳前に哭し、君に一掬の淚を還さん。

【字解】【一】元和　憲宗の年號。【二】兵革　戰亂なり。【三】憔悴　疲弊すること。【四】非訾　そしる。【五】緘寄　緘は封なり、封筒に入れて郵寄すること。【六】陳杜　陳子昂、杜甫。竝に盛唐の大詩人。【七】此詩　唐衢の作つた詩。【八】蠹魚　しみ。紙を食ふ蟲。【九】歔欷　すすり泣く。

【詩意】憶へば元和の初に余は諫官に任ぜられた。時恰も戰亂の後であつたので人民は皆疲弊してゐた。余は民の疲弊を悲むの餘り、時人の嫌疑を顧みず、秦中吟十首を作つて十弊を悲んだ。之を讀んで貴人は怪み怒り賤人も亦誹謗した。余が此詩を作つた本意は弊事を天聽に達するに在つたのだが、未だ天聽に達せぬうちに疲弊その極に達して到る處土地が荒廢してしまつた。余はつくづく天下に知己なきの感を深うした。ただ唐衢のみは吾が平生の志を理解し、一讀して歎嗟を發し、再吟して淚を流し、因つて和詩三十韻を作り手書して之を郵寄し、余を陳杜の列に推稱し、一方ならず賞揚した。ああ吾が知己なる唐衢は復た見ることは出來ないが、其詩は尙ほ珍重することが出來る。今日本箱を開いて見た所が、大分蠹魚に食はれてゐた。何處に葬つたかを問ふより前に先づ淚が出る。いつかは一度墳墓に哭し君に一掬の淚を手向けよう。

問友　友に問ふ

種蘭不種艾。蘭生艾亦生。　蘭を種ゑて艾を種ゑず、蘭生じて艾も亦生ず。
根(二)荄相交長。莖葉相附榮。　根荄相交つて長じ、莖葉相附いて榮ゆ。
香莖與臭葉。日夜俱長大。　香莖と臭葉と、日夜俱に長大。
鋤艾恐傷蘭。漑蘭恐滋艾。　艾を鋤けば蘭を傷んことを恐れ、蘭に漑げば艾を滋らせんことを恐る。
蘭亦未能漑。艾亦未能除。　蘭も亦未だ漑ぐ能はず、艾も亦未だ除く能はず。
沈(三)吟意不決。問君合何如。　沈吟意決せず、君に問ふ合に何如すべき。

【字解】【一】蘭　香草の名。艾は臭草の名。【二】根荄　荄は草の根。【三】沈吟　思案すること。

【題義】一利一害は數の免れざる所で、利を求むれば害之に伴ひ、害を除かんとすれば利をも失ふことになる、困つたものだといふ意。

【詩意】蘭は植ゑたが艾は植ゑなかつた。然るに蘭が生えると艾も倶に生える。蘭と艾と兩兩相竝んで生長する。さて艾を除き去らうとすると蘭を傷ける恐があり、蘭に水をかけようとすると艾をも養ふことになる。結局どちらも除くことも養ふことも出來ないことになる。一體どうしたらよいのちや。君の智慧を借りたいものだ。

(一)悲哉行

悲哉爲儒者。力學不知疲。
讀書眼欲暗。秉筆手生胝。
十上方一第。成名常苦遲。
縱有宦達者。兩鬢已成絲。(二)
可憐少壯日。適在窮賤時。
(三)丈夫老且病。焉用富貴爲。

悲哉行

悲しいかな儒者と爲つて、力め學んで疲るるを知らず。
書を讀みて眼暗からんと欲し、筆を秉りて手に胝を生ず。
十たび上つりて方に一第、名を成すこと常に遲きに苦む。
縱ひ宦達の者有りとも、兩鬢已に絲と成る。
憐む可し少壯の日は、適に窮賤の時に在り。
丈夫老いて且つ病む。焉んぞ富貴を用ふるを爲さん。

(四)沈沈朱門宅。中有乳臭兒。(五)
狀貌如婦人。光明膏粱肌。(六)
手不把書卷。身不擐戎衣。(七)
二十襲封爵。門承勳戚資。
春來日日出。服御何輕肥。(八)
朝從博徒飲。暮有娼樓期。(九)
平封還酒債。堆金選蛾眉。(一〇)
聲色狗馬外。其餘一無知。
山苗與澗松。地勢隨高卑。
古來無奈何。非獨君傷悲。

沈沈たる朱門の宅、中に乳臭の兒有り。
狀貌婦人の如く、光明膏粱の肌あり。
手に書卷を把らず、身に戎衣を擐せず。
二十にして封爵を襲ぎ、門勳戚の資を承く。
春來つては日日に出づ、服御何ぞ輕肥なる。
朝には博徒の飲に從ひ、暮には娼樓の期有り。
平封酒債を還し、堆金蛾眉を選ぶ。
聲色狗馬の外、其餘は一も知る無し。
山苗と澗松と、地勢高卑に隨ふ。
古來奈何ともする無し、獨り君の傷悲するのみに非ず。

【字解】【一】悲哉行　樂府題の名。【二】絲　白髮をいふ。【三】丈夫　男子をいふ。【四】沈沈　宮室深邃の貌。朱門は朱塗の門、豪家のこと。【五】乳臭兒　年少無知の人。【六】膏粱　美食なり。【七】戎衣　軍服、甲冑なり。【八】輕肥　輕裘肥馬。【九】期　約束なり。【一〇】蛾眉　美人。

【題義】 儒生は苦學力行して常に貧窮を免れず。貴族の子弟は遊惰無知にして豪奢を極めてゐる。これが古來の沿襲で如何ともしかたがないことを述べた。

【詩意】 悲しいかな儒者となれば、書を讀んで眼は爲に暗くなり、筆を乘つて手には胝が出る。十たびも試驗に應じてやつとこさで及第し、名を成すことは容易でない。幸に榮達する者があつても、其頭には兩鬢に白毛が生える。少壯の時には貧賤であつて、老病の年に及んで富貴になつた處が何の役にも立たぬではないか。此とちがつて貴族の子弟は奥深い邸宅の中に住み、華奢な風姿をして、膏つた肌を持ち、書物も讀まず甲冑も纏はず、二十になれば父祖の爵位を襲ぎ、勳閥の資に由り、春が來れば肥馬に乘り輕裘を著て毎日のやうに遊びあるき、朝には博徒に伍して飲み、晩には娼婦の膝を枕に眠り、金を封じて酒債を償ひ、金を積んで美人を買ふなど聲色狗馬の樂に耽るより外には何の考もない。ああ山苗は短いけれども山に在るから高い、澗間の松は長いけれども澗底に在るから低い。高きも低きも其地位に由るので本來の資質に由るのではない。生れがわるければ賢きも浮ばれず、根が愚でも生れがよければ榮耀榮華が出來る。これが昔からの世の習ぢや。人皆傷悲せざるはないが奈何とも致し方がない。

紫藤

紫藤

藤花紫蒙茸(一)。藤葉靑扶疎(二)。
藤花は紫にして蒙茸、藤葉は靑くして扶疎たり。

誰謂好顏色。而爲害有餘。
誰か謂ふ好顏色と、而も害を爲すこと餘有り。

下如蛇屈盤(三)。上若繩縈紆。
下つては蛇の屈盤するが如く、上つては繩の縈紆するが如し。

可憐中間樹。束縛成枯株。
憐む可し中間の樹、束縛せられて枯株と成る。

柔蔓不自勝。嫋嫋(四)挂空虛。
柔蔓自ら勝へず、嫋嫋として空虛に挂る。

豈知纏樹木。千夫力不如。
豈知らんや樹木を纏うて、千夫の力も如かざるを。

先柔後爲害。有似諛佞徒。
先には柔にして後には害を爲すこと、諛佞の徒に似たる有り。

附著君權勢。君迷不肯誅。
君の權勢に附著するも、君迷うて肯て誅せず。

又如妖婦人(五)。綢繆蠱其夫。
又妖婦人の如く、綢繆して其夫を蠱し、

奇邪壞人室。夫惑不能除。
奇邪人の室を壞る、夫惑うて除く能はず。

寄言邦與家。所愼在其初。
言を寄す邦と家と、愼む所は其初に在り。

毫末不早辨。滋蔓(六)信難圖。
毫末も早く辨せずんば、滋蔓信に圖り難し。

願以藤爲戒。銘之於座隅。
願はくは藤を以て戒と爲し、之を座隅に銘せんことを。

【字解】〔一〕蒙茸　亂れ茂る貌。〔二〕扶疏　枝葉の盛なる貌。〔三〕屈盤　わだかまる。〔四〕嫋嫋　柔弱の貌。〔五〕纏繞　纏繞なり。蠱は惑はすこと。〔六〕滋蔓　はびこること。左傳隱公元年に「滋蔓すれば圖り難し」とあり。

【題義】藤を借りて佞臣妖婦の害を述べたのである。

【詩意】藤の花が紫の房を垂れ綠の葉が茂つてゐる。人はよい色香だと謂ふが、その餘毒は實に恐るべきものがある。蔓の這ひまはること蛇の盤るが如く繩の纏ふが如く、中間の樹は蔓にからみつかれて皆枯れてしまふ。蔓は柔かで獨立が出來ないので、他物にたよつて高く掛つてゐる。然も樹木にからみついたが最後、千人力でも離すことは出來ない。其初めは柔かで後には害をなすことは、彼の佞臣が君の權勢に阿附し、君も迷つて誅戮を加へず、又妖婦が纏綿して其夫を惑はし、夫も惑つて斥けることが出來ないのに似てゐる。國家に取つては佞臣、一家に取つては妖婦。これほど大害をなすものはない。宜しく其初を愼んで微細な時に芟除するがよい。はびこつて來てはもう手がつけられない。因つて藤を借りて戒となし、座右の銘とすることを願ふ。

放鷹

十月鷹出籠。草枯雉兎肥。　十月に鷹籠を出づ。草枯れて雉兎肥えたり。

下韝隨指顧。百擲無一遺。　韝を下りて指顧に隨ひ、百たび擲ちて一も遺す無し。

鷹翅疾如風。鷹爪利如錐。　鷹翅疾きこと風の如く、鷹爪利きこと錐の如し。

本爲鳥所設。今爲人所資。　本鳥の爲に設けられ、今人の爲に資らる。

孰能使之然。有術甚易知。　孰か能く之をして然らしむる。術有り甚だ知り易し。

取其向背性。制在飢飽時。　其の向背の性を取り、制すること飢飽の時に在り。

不可使長飽。不可使長飢。　長く飽かしむ可からず、長く飢ゑしむ可からず。

飢則力不足。飽則背人飛。　飢うれば則ち力足らず、飽けば則ち人に背いて飛ぶ。

乘飢縱搏擊。未飽須縶維。　飢に乘じて縱搏擊するも、未だ飽かざるに須く縶維すべし。

所以爪翅功。而人坐收之。　所以に爪翅の功、而も人坐ながら之を收む。

聖明馭英雄。其術亦如斯。　聖明英雄を馭するも、其術亦斯の如し。

鄙語不可棄。吾聞諸獵師。　鄙語も棄つ可からず。吾諸を獵師に聞けり。

【字解】〔一〕韝　革で作り腕を卷くもの。韝で卷いた腕の上に鷹を置く。指顧は指圖すること。〔二〕縶維　縛つておくこと。〔三〕聖明　明君なり。

【題義】　明君の英雄を使ふのは鷹を使つて鳥を捕へるのと同じだといふことを述べた。

【詩意】　十月になると狩の氣節で鷹は籠から出され、野邊の草も枯れて雉や兎が肥える。鷹匠が指圖をすれば鷹は韝を下つて獲物を目がけて飛び、百に一つも失敗はない。其翅は疾きこと風の如く、其爪は錐のやうに鋭い。抑〻翅と爪とはもと鷹自身のために設けられたものであるが、今は人間に利用されて人間の爲に鳥を捕へることになつたのである。一體鷹を使ふ術は其の向背の性を審にし飢飽の間を制するに在るのだ。故に十分食に飽かせてもいけず、又極端に飢ゑさせてもいけない。飢ゑてゐては獲物を擊つだけの力が出ず、食に飽いてゐては鳥を捕らうといふ慾がないから、飼主に背いて飛去つてしまふ。故に飢に乘じて獲物に擊ちかかるとも、あまり飽かしめないうちに縛つてしまふがよい。かうすれば鷹の翅爪の功をば坐ながらにして手に收めることが出來る。明君が英雄を驅使するのも此と同じだ。この語は鄙近な語であるが棄て難い値がある。余は之を鷹匠から聞いた。

慈烏夜啼

慈烏夜啼く

慈烏失其母。(一)啞啞(二)吐哀音。　慈烏其母を失ひ、啞啞として哀音を吐き、

晝夜不飛去。經年守故林。　晝夜飛び去らず、年を經て故林を守り、

夜夜夜半啼。聞者爲沾襟。　夜夜夜半に啼き、聞く者爲に襟を沾す。

聲中如告訴。未盡反哺(三)心。　聲中告げ訴ふるが如し、未だ反哺の心を盡さざるを。

百鳥豈無母。爾獨哀怨深。　百鳥豈に母無からんや、爾獨哀怨深し。［るなるべし。］

應是母慈重。使爾悲不任。　應に是れ母慈重うして、爾をして悲んで任へざらしむ

昔有吳起者。母歿喪不臨。　昔吳起といふ者有り、母歿して喪に臨ます。

嗟哉斯徒輩。其心不如禽。　嗟哉斯徒輩、其心禽に如かず。

慈烏復慈烏。鳥中之曾參(四)。　慈烏復慈烏。鳥中の曾參。

【字解】【一】慈烏　烏の反哺するもの。禽經に「慈烏曰孝烏。長則反哺其母。大觜烏否」とあり。【二】啞啞　烏の聲。淮南子に「烏之啞啞、鵲之唶唶」とあり。【三】反哺　哺は口中に含む食。恩に報いて親に食はしめることを反哺といふ。【四】曾參　孔子の弟子、孝を以て名高し。

【題義】　慈烏の母を失つて哀み啼くのを聞いて、鳥すらかく孝心の深いものがあるのに、人として鳥に劣るやうではならないといふことを述べたので、汪立名は元和六年辛卯、樂天が母の喪に居た時の作であらうと言つてゐる。

【詩意】　慈烏が其母の死に遇ひ思慕して哀鳴し、年を經ても棲みなれた林を去るに忍びず、每夜夜半

になると哀み啼くので、聞く者皆涙を流した。その聲は未だ反哺の孝を盡さぬに、早くも母を失つたことを告げ訴へるものの如くである。如何なる鳥でも母のない鳥はないが、なぜお前はそんなに哀慕の情が深いのか。察する所お前の母は特別に慈愛の深い母であつたからでもあらう。昔呉起といふ人は母を棄てて他國に往きて仕へ、母が死んでも其喪に臨まなかつたといふが、かかる徒輩は鳥にも劣る者である。それに比すればお前は鳥ではあるが、鳥の中での曾參である。

燕詩示劉叟　叟有愛子。背叟逃去。叟甚悲念之。叟少年時。亦嘗如是。故作燕詩以諭之

燕の詩劉叟に示す　叟に愛子あり。叟に背いて逃れ去る。叟甚だ悲んで之を念ふ。叟少年の時亦嘗て是の如し。故に燕の詩を作りて以て之を諭す

梁上有雙燕。翩翩(一)雄與雌。　梁上に雙燕有り、翩翩たり雄と雌と。
啣泥兩椽間。一巢生四兒。　泥を兩椽の間に啣み、一巢に四兒を生む。
四兒日夜長。索食聲孜孜(二)。　四兒日夜に長じ、食を索めて聲孜孜たり。
青蟲不易捕。黃口(三)無飽期。　青蟲捕へ易からず、黃口飽期無し。
觜爪雖欲弊。心力不知疲。　觜爪弊れんと欲すと雖も、心力疲るるを知らず。
須臾千來往。猶恐巢中飢。　須臾に千たび來往し、猶巢中の飢を恐る。
辛勤三十日。母瘦雛漸肥。　辛勤三十日、母瘦せて雛漸く肥えたり。
喃喃(四)敎言語。一一刷毛衣。　喃喃として言語を敎へ、一一毛衣を刷ふ。
一旦羽翼成。引上庭樹枝。　一旦羽翼成り、引ゐて庭樹の枝に上る。
擧翅不回顧。隨風四散飛。　翅を擧げて回顧せず、風に隨つて四に散飛す。
雌雄空中鳴。聲盡呼不歸。　雌雄空中に鳴き、聲盡くるまで呼べども歸らず。
却入空巢裏。啁啾(五)終夜悲。　却つて空巢の裏に入りて、啁啾として終夜悲む。
燕燕(六)爾勿悲。爾當返自思。　燕燕爾悲むこと勿れ、爾當に返つて自ら思ふべし。
思爾爲雛日。高飛背母時。　思ふ爾雛たりし日、高く飛んで母に背きし時、
當時父母念。今日爾應知。　當時父母の念、今日爾應に知るべし。

【字解】【一】翩翩　翔り飛ぶ貌。【二】孜孜　雛の鳴く聲。【三】黃口　雛の黃色な吻。【四】喃喃　燕の鳴く聲。呢喃に同じ。【五】啁啾　燕の悲み鳴く聲。【六】燕燕　ただ重ねて言ふのみ。猩猩、狒狒など皆然り。

【題義】一老翁あり、其子翁を棄てて去る。翁甚だ之を悲む。昔此翁少年の時、亦親を棄てて去れり。

故に其子之に倣へるのみ。宜しく自ら反省して己の非を悟るべきなりとの意を燕を借りて諭したのである。

【詩意】梁上に雌雄の燕が棲んでゐた。時時飛び去つては泥を啣んで來て兩椽の間に巢を作り、中に四羽の雛を生んだ。雛は段段生長して食物を求めて鳴くので、親燕は血眼になつて靑蟲を搜しまはるが仲仲捕れない。從つて雛の腹は滿されなかつた。併し子の爲には疲れるのも忘れて餌を漁り、幾度となく往來して子の飢を氣遣つた。かくの如く苦辛すること三十日に及び、親は瘦せたが子は漸く肥えて來た。親燕は更に喃喃と言葉を敎へ、羽や毛を整へてやつた。その中に羽翼も自由にきくやうになつたので、引き連れて庭の樹の枝に上つた。所が雛は翼を擧げて顧みもせず四方に飛び去つてしまつた。親燕は之を悲んで聲の嗄れるほど呼んだが雛は終に歸つて來ない。因つて空巢の中に終夜悲み鳴いた。されど親燕よ、さう鳴くには及ぶまい。お前は昔の事を考へて見るがよい。お前が雛の頃に親を棄てて飛び去つた時の親の悲は、今日始めて思ひ當るであらう。

采地黃者（一）

地黃を采る者

麥死春不雨。禾損秋早霜。　麥死れて春雨らず、禾損じて秋早く霜る。

歲晏無口食。田中采地黃。　歲晏れて口の食無く、田中地黃を采る。

に易ふ。

采之將何用。持以易餱糧（二）。　之を采つて將に何にか用ひんとする、持して以て餱糧

淩晨荷鋤去。薄暮不盈筐。　晨を淩ぎて鋤を荷ひて去れども、薄暮まで筐に盈たず。

攜來朱門（三）家。賣與白面郎（四）。　朱門の家に攜へ來つて、白面郎に賣り與ふ。

與君啖肥馬。可使照地光。　君に與へて肥馬に啖はしめ、地光を照さしむ可きよりは、

願易馬殘粟。救此苦飢腸。　願はくは馬の殘粟に易へて、此苦飢の腸を救はん。

【字解】【一】地黃　藥草の名。【二】餱糧　糧食なり。【三】朱門　朱塗の門、富豪の家。【四】白面郎　少年をいふ。

【題義】年飢ゑて食足らず、地黃を採り之を賣つて食に代ふる者のことを敍したのである。

【詩意】今年は春雨が降らなかつたので麥が枯れてしまひ、秋には霜が早く降つたので稻が痛められ、今や年の暮に迫つて食ふ物もない始末である。已むを得ず田に生えてゐる地黃を採り、之を賣つて糧とする。朝早くから鋤を荷つて往き、日の暮れるまで採つても仲仲筐に滿たない。それを金持の家に持つて行つて若樣に賣るのだ。若樣の馬に食べさせ光澤を增して地面をも照すほどにならせることはどうでもよいが、責めて馬の食ひ殘りでも戴いて我がすき腹を滿たしたいのが何よりの願ぢや。

初入太行路
初めて太行の路に入る

天冷日不光。太行峯蒼莾。　天冷くして日光らず、太行峯蒼莾たり。
嘗聞此中險。今我方獨往。　嘗て此中の險を聞く、今我方に獨り往く。
馬蹄凍且滑。羊腸不可上。　馬蹄凍りて且つ滑なり。羊腸として上る可からず。
若比世路難。猶自平於掌。　若し世路の難きに比せば、猶ほ自ら掌よりも平なり。

【字解】【一】太行　山の名。大明一統志に「懷慶府大行山、在府城北二十里、山勢綿亙數千里」とあり。蒼莾はあをあをとして遠き貌。

【題義】太行の險路を經て、人世行路の難きは、更に此にまさること一層なる由を述べた。

【詩意】天日光なく寒氣身に沁む時、蒼莾たる太行の峯を登り行けば、聞きしにまさる險路である。路が凍つて馬の蹄がすべり、つづらをりになつてゐて上りにくい。併し人世の行路の險に比べると、掌よりも平だと謂つてもよい位だ。

鄧魴張徹落第
鄧魴・張徹が落第

古琴無俗韻。奏罷無人聽。　古琴俗韻無く、奏し罷んで人の聽く無し。
寒松無妖花。枝下無人行。　寒松妖花無く、枝下りて人の行く無し。
春風十二街。軒騎不暫停。　春風十二街、軒騎暫くも停らず。
奔車看牡丹。走馬聽秦箏。　車を奔らして牡丹を看、馬を走らして秦箏を聽く。
衆目悅芳艷。松獨守其貞。　衆目芳艷を悅び、松獨り其貞を守る。
衆耳喜鄭衞。琴亦不改聲。　衆耳鄭衞を喜び、琴亦聲を改めず。
懷哉二夫子。念此無自輕。　懷ふ哉二夫子、此を念うて自ら輕んずる無かれ。

【字解】【一】十二街　前の登樂遊園望に出づ。【二】軒騎　軒は車なり。【三】秦箏　風俗通に「箏、秦聲也、或言蒙恬所造」とあり。【四】鄭衞　淫靡な俗樂をいふ。

【題義】鄧魴・張徹の二子が落第したのを古琴と貞松とに喩へて慰めた詩である。

【詩意】古琴は俗な音がしないので奏しても聽き手がなく、松はあでやかな花がないので枝振おもしろく垂れてゐても觀に行く人もない。長安の市街を車や馬が織るが如く馳せちがつてゐる。何の爲かといへば牡丹を看るとか秦箏を聽くとかいふ爲である。かくの如く世人は芳艷を好むが、松は獨り貞節を守つて操をかへない。俗人は俗惡な音樂を好むが、古琴は決して己の本音を改めない。君等も此を念うて自ら輕んじ世俗に媚びるやうなことをなさるな。

送王處士

王處士を送る

王門豈無酒。侯門豈無肉。　王門豈に酒無からんや、侯門豈に肉無からんや。
主人貴且驕。待客禮不足。　主人貴うして且つ驕れり、客を待するに禮足らず。
望塵而拜者。朝夕走碌（一）碌。　塵を望んで拜する者、朝夕走りて碌碌たり。
（二）王生獨拂衣。遐擧如雲鵠。　王生獨り衣を拂ひ、遐に擧つて雲鵠の如し。
寧歸白雲外。飲水臥空谷。　寧ろ白雲の外に歸り、水を飲んで空谷に臥せん。
不能隨衆人。斂手低眉目。　衆人に隨ふ能はず、手を斂めて眉目を低る。
扣門與我別。沽酒留君宿。　門を扣いて我と別る、酒を沽つて君を留めて宿せしむ。
好去（三）采薇人。（四）終南山正綠。　好し去れ薇を采るの人、終南山正に綠なり。

【字解】【一】碌碌　隨從の貌。【二】王生　即ち王處士。【三】采薇人　伯夷叔齊首陽山に隱れ薇を採つて之を食ふ。ここは王處士を伯夷叔齊に比して言ふ。【四】終南　長安の南に在る山の名。

【題義】王處士が王侯に媚びて榮利を貪るを屑しとせず、去つて山に隱れんとするを送つた詩である。

【詩意】王侯の家には酒も肉も豐富にあるが、ただ主人が威張つてゐて客を待遇することが無禮だ。それ故其後塵を拜して恥ぢない者は日夜つきまとつて御機嫌をとつてゐるが、王處士は之を屑しとせず、衣を拂つて去ること雲中の鵠の如く、寧ろ白雲の外に歸り、水を飲んで空谷に臥せん。俗人と伍して俯仰する能はずとの意氣ごみで、暇乞の爲に我を訪ねて來た。因つて我は酒を沽つて君に飲ませて一泊させた。まア去つて山に隱れるがよい。終南山は正に綠滴るばかりの好景だから。

村居苦寒

村居寒に苦む

（一）八年十二月。五日雪紛紛。　八年十二月、五日雪紛紛。
竹柏皆凍死。況彼無衣民。　竹柏皆凍死す。況んや彼の無衣の民をや。
廻觀村閭間。十室八九貧。　村閭の間を廻觀すれば、十室八九は貧し。
北風利如劍。布絮不蔽身。　北風利きこと劍の如く、布絮身を蔽はず。
唯燒（二）蒿棘火。愁坐夜待晨。　唯蒿棘の火を燒き、愁坐して夜晨を待つ。
乃知大寒歲。農者猶苦辛。　乃ち知る大寒の歲、農者猶苦辛するを。
顧我當此日。草堂深掩門。　顧ふ我此日に當り、草堂深く門を掩ひ、
褐裘覆（三）絁被。坐臥有餘溫。　褐裘絁被を覆ひ、坐臥餘溫有り。

幸免飢凍苦。又無(四)壠畝勤。　幸に飢凍の苦を免れ、又壠畝の勤無し。

念彼深可愧。自問是何人。　彼を念ひて深く愧づ可し、自ら問ふ是れ何人ぞ。

【字解】【一】八年　元和八年であらう。時に樂天は渭村に居た。【二】蒿棘　よもぎやいばら。【三】褫被　つむぎの夜具。【四】壠畝　田圃。

【題義】農民の寒に苦むを憐み、己の飽暖自ら安んずるを恥づることを述べた。

【詩意】元和八年十二月五日は雪が紛紛と降り竹も柏も皆凍死する程の寒さであつた。貧窮無衣の民の苦境が思ひやられる。此村を見渡して見るに十戸のうちで八九戸は貧家だ。身を切るやうな寒さに身に纏ふつづれもなく、蓬や荊を焚いて煖を取り、坐して夜の明けるのを待つてゐる。農民は單に飢に苦むばかりではなく寒にも苦んでゐるのだ。翻つて吾が身を見れば草堂の奥深く安居して、起臥ともに餘溫がある。幸に飢凍の苦を免れ、然も稼穡の艱難をも免れてゐる。一體我は何物であるか。彼等農民に對して自ら恥づべきである。

納粟

粟を納る

有吏夜叩門。高聲催納粟。　吏有り夜門を叩き、高聲に粟を納れんことを催す。

家人不待曉。場上張燈燭。　家人曉を待たず、場上に燈燭を張り。

揚簸淨如珠。一車三十斛。　簸を揚ぐれば淨きこと珠の如し。一車三十斛。

猶憂納不中。鞭責及僮僕。　猶は納れて中らざるを憂ふ。鞭責僮僕に及ぶ。

昔余謬從事。內媿才不足。　昔余謬つて事に從ひ、內才の足らざるを媿づ。

連授四命官。(一)坐尸(二)十年祿。　連に四命の官を授けられ、坐して十年の祿を尸す。

常聞古人語。損益周必復。　常に古人の語を聞く、損益周りて必ず復ると。

今日諒甘(三)心。還(四)他太倉穀。　今日諒に甘心し、太倉の穀を還他す。

【字解】【一】四命官　命は官等なり。周の制では、官吏は一命から九命まであつた。【二】尸　尸位素餐すること。【三】甘心　甘んじて。納得すること。【四】還他　他は助辭。看他などの他と同じ。太倉は天子の米倉。

【題義】租税を納めることを述べたのである。

【詩意】夜役人が來て聲高くどなりちらして納税を催促する。家人は夜の明くるをも待たず、庭にあかりをつけて籾を搰り箕で糠や粃を去れば珠のやうな米になつた。車につけて三十斛積み出したが、それでもまだ納税額に滿たないので、役人は嚴しく責め立てて召使にまであたりちらしてゐる。昔余は無能の身を以て謬つて官職に就き、四命の官に敍せられて十年間無駄扶持を戴いてゐた。古人の言

業に損益は必ず周り還るものだとあるが、自分は十年間不當利得を得てゐたので、今日は所謂年貢の納め時が來たのだから、甘んじて太倉の米をお返し申さう。

薛中丞

百人無(一)一直。百直無(二)一遇。　百人一直無く、百直一遇無し。
借問遇者誰。正人行得路。　借問す遇ふ者は誰ぞ。正人行路を得。
中丞(三)薛存誠。守直心甚固。　中丞薛存誠、直を守りて心甚だ固し。
皇明燭如日。再使秉王度。　皇明燭すこと日の如く、再び王度を秉らしむ。
奸豪與佞巧。非不憎且懼。　奸豪と佞巧と、憎み且つ懼れざるに非ず。
直道漸光明。邪謀難(四)蓋覆。　直道漸く光明あり。邪謀蓋覆し難し。
毎因(五)匪躬節。知有(六)匪時具。　匪躬の節に因る毎に、匡時の具有るを知る。
張爲墜網綱。倚作頽簷柱。　張つて墜網の綱と爲り、倚つて頽簷の柱と作る。
(七)悠哉上天意。報施紛廻互。　悠なるかな上天の意、報施紛として廻互す。
自古已冥(八)茫。從今猶不諭。　古より已に冥茫たり、今より猶諭られず。
豈與小人意。昏然同好惡。　豈小人の意と、昏然として好惡を同じうせんや。
不然君子人。何反如朝露。　然らずして君子の人、何ぞ反つて朝露の如くなる。
(九)裴相昨已夭。薛君今又去。　裴相昨已に夭し、薛君今又去る。
以我惜賢心。五年如旦暮。　我が賢を惜む心を以てすれば、五年も旦暮の如し。
況聞善人命。長短繫運(一〇)數。　況んや善人の命、長短運數に繫ると聞くをや。
今我一涕零。豈爲中丞故。　今我一たび涕零つるは、豈に中丞の爲の故のみならんや。

【字解】【一】一直　一人の正直な人。【二】一遇　一人の幸運に遇つた人。【三】薛存誠　字は資明、進士の第に中り給事中に累官し、事の不可なるに遇へば輒ち執つて下らす。憲宗悦んで御史中丞に拜す。【四】蓋覆　掩ひかくすこと。【五】匪躬節　己の身を忘れて君に忠を盡すこと。【六】匡時　時弊を匡救すること。【七】悠哉　遙なる貌。【八】冥茫　眞意の知り難き貌。【九】裴相　裴垍なり。字は弘中、翰林學士、中書舍人に累遷し、李吉甫の相を罷むるや、中書侍郎、同中書門下平章事に拜せらる。【一〇】運數　運命。

【題義】御史中丞薛存誠の死を悼んだ作である。

【詩意】百人の中にも正直な人は一人もなく、正直な人百人の中にも時に遇うて榮達する人は一人も

ない。さて如何なる人が時に遇うて榮達するかといふに、それは正しい人が正しい道を行ふに因るのだ。かの御史中丞薛存誠は直を守つて其心が甚だ固かつた。時の天子が鑒識の高い君であつたので、流石の奸佞の徒も己の不正を掩ひ得なかつた。我も彼の忠節を見て時弊の匡救されることを悦んだ。彼は實に墜綱を引き緊める綱であり、頽簷を支へる柱であつた。抑、天意は悠遠で、人に對する報施が、ともすれば意量の外に出で、冥茫として測り知られぬ所がある。併し世の小人と好惡を同うする筈はない。果して然らば性行の正しい君子が何故に朝露の如く果敢なき最後を遂げるのであらう。裴相は去年夭死し、薛君も今又歿した。我が賢者を愛惜する心を以てすれば、君が五年の間要路にゐたのも僅か一朝夕のやうにしか思はれないのに、況んや善人の壽命が運命に左右されるものだと聞いては、益、あぢきなさを感ずる。今涙を落して歎息するのは、唯薛君の爲ばかりではない。

秋池二首

前池秋始半。卉(一)物多摧壞。　前池秋始めて半、卉物多くは摧壞す。

欲暮槿(二)先萎。未霜荷(三)已敗。　暮れんと欲して槿先づ萎み、未だ霜ふらずして荷已に敗る。

默然有所感。可以從茲誡。　默然として感ずる所有り、以て茲誡に從ふ可し。

本不種松(四)筠。早凋何足怪。　本松筠を種ゑざれば、早く凋むも何ぞ怪むに足らん。

【字解】(一) 卉物　花の咲く草。(二) 槿　むくげ。其花朝に開き夕に凋む。(三) 荷　蓮の葉。(四) 松筠　松と竹。

【題義】秋日池邊の景を見て所感を述べたのである。

【詩意】庭前の池は今や秋の半で、草花は多くは枯れ、木槿も夕に先だつて萎み、荷葉も霜を待たずに敗れてゐる。此景を見て深く感ずる所があつて之を戒としようと思つた。人でも草木でも節操が大切だ。松や竹のやうな常に綠の色をかへないものを植ゑておかなければ、忽ち凋落しても敢て怪むには足らない。

〔二〕

鑿池貯秋水。中有蘋(一)與芰。　池を鑿ちて秋水を貯ふ、中に蘋と芰と有り。

天旱水暗消。堨(二)然委空地。　天旱して水暗に消え、堨然として空地に委す。

有似汎(三)汎者。附(四)離權與貴。　汎汎たる者の、權と貴とに附離し、

一旦恩勢移。相隨共憔(五)悴。　一旦恩勢移り、相隨つて共に憔悴するに似たる有り。

【字解】（一）蘋　うきくさ。蔆は菱。（二）塌然　くぼむ貌。（三）汎汎　漂ひ流るる貌。（四）附離　附著すること。（五）憔悴　やせ衰へること。

【詩意】池を鑿ち秋水を貯へ、池中に蘋と菱とがあつたが、旱が續いて水がひあがり、忽ち凹地になつて蘋も菱も枯れてしまつた。丁度世の輕薄者流が權貴に阿り一時は榮華の夢を見るとも、一旦君寵が衰へると相倶に失脚してしまふのに似てゐる。

夏旱

（一）太陰不離畢。（二）太歲仍在午。
旱日與炎風。枯憔我田畝。
金石欲銷鑠。況茲禾與黍。
（三）嗷嗷萬族中。唯農最辛苦。
憫然（四）望歲者。出門何所覩。
但見棘與茨。蘿生徧場圃。
惡苗承（五）沴氣。欣然得其所。

夏旱

太陰畢に離らず、太歲仍ほ午に在り。
旱日と炎風と、我が田畝を枯憔す。
金石すら銷鑠せんと欲す、況んや茲の禾と黍とをや。
嗷嗷たる萬族の中、唯農のみ最も辛苦す。
憫然たり歲を望む者、門を出でて何の覩る所ぞ。
但棘と茨とを見るのみ、蘿生じて場圃に徧く、
惡苗沴氣を承け、欣然として其所を得。
「やと。

感此因問天。可能長不雨。
此に感じて因つて天に問ふ、能く長く雨ふらざる可き」

【字解】（一）太陰　月をいふ。畢は星の名。書經洪範の傳に「月經於箕則多風、離於畢則多雨」とあり。（二）太歲木星。十二年で天を一周する。故に年を紀するに用ひる。太歲在午とは午の年のことで、元和九年甲午であらう。（三）嗷嗷　多人數で愁へ訴ふる貌。（四）望歲　年穀の豐穰を望む者。左傳に「國人望君、如望歲焉」とあり。（五）沴氣　惡氣。

【題義】夏の旱魃の害を敍したのである。

【詩意】元和九年甲午の夏、旱天打續いて雨降らず、禾穀も枯れ金石も鎔けんばかりだ。人皆嗷嗷として愁訴せぬはないが、特に農民は最も難儀である。あたりを見れば唯荊棘や蘿蔦が生ひ茂り、惡苗が時を得顏にはびこつてゐるばかりだ。一體いつまで雨が降らないのかと天に向つて詰問したいくらゐだ。

諭友

昨夜霜一降。殺君庭中（一）槐。
乾葉不待黃。（二）索索飛下來。
憐君感（三）節物。晨起步前階。

友に諭す

昨夜霜一たび降り、君が庭中の槐を殺す。
乾葉黃ばむを待たず、索索として飛び下ち來る。
憐む君が節物に感じ、晨に起きて前階に步し、

臨風蹋葉立。半日顏色哀。　風に臨み葉を蹋んで立ち、半日顏色哀むを。
西望長安城。歌鐘十二街。（四）　西のかた長安城を望めば、歌鐘十二街。
何人不歡樂。君獨心悠哉。（五）　何人か歡樂せざらん、君獨り心悠哉。
白日頭上走。朱顏鏡中頹。（六）　白日頭上に走り、朱顏鏡中に頹る。
平生青雲心。（七）銷化成死灰。（八）　平生青雲の心、銷化して死灰と成る。
我今贈一言。勝飲酒千杯。　我今一言を贈る、酒千杯を飲むに勝る。
其言雖甚鄙。可破悒悒懷。　其言甚だ鄙しと雖も、悒悒の懷を破る可し。
（九）朱門有勳貴。陋巷有顏回。　朱門に勳貴有り、陋巷に顏回有り。
窮通各有命。不繫才不才。　窮通各命有り、才不才に繫らず。
推此自豁豁。（一〇）不必待安排。（一一）　此を推せば自ら豁豁たらん、必ずしも安排を待たじ。

【字解】【一】庭中槐　槐は木の名、和名ゑんじゆ。三公の位の者は庭に槐を植ゑる習慣である。【二】索索　落葉の聲。江淹の賦に「樹索索而搖枝」とあり。【三】節物　時節の風物。時節の景物。【四】十二街　前の登樂遊園望の詩を見よ。【五】悠哉　憂思の貌。詩經に「悠哉悠哉、輾轉反側」とあり。【六】朱顏　紅顏に同じ、少年の人をいふ。【七】青雲心　榮達を期する志。【八】死灰　冷えきつた灰。【九】朱門　朱塗の門。富豪の家。【一〇】豁豁　氣のはれる貌。一に豁豁に作る。【一一】安排　處置することゝ。

【題義】官職を免せられた友人を慰めた詩である。

【詩意】昨夜一たび霜が降つて君が庭の槐を枯らしてしまつた。（官職を免せられたこと）葉が乾枯らびて黃色になるまもなく忽ちチラ〳〵と飛び落ちた。君は氣節の變化に驚き、朝起きて階前を步み、秋風に臨み落葉を踏んで、覺えず顏色を愁へしめた。飜つて長安の都を望めば街中鐘歌の聲に滿ちて人皆歡樂に醉うてゐるが、君のみ獨り尾羽打枯らして憔悴してゐる。歲月忽ち逝き紅顏空しく老い、宿昔青雲の志も忽ち消えて死灰となつてしまつた。余は今君に一言を呈しようと思ふ。此言は千杯の酒を飲むにもまして君を慰め得るであらう。そは他ではない、朱門に勳貴あり、陋巷に顏回あり。人の窮達は運命であつて、才不才には拘らないといふことだ。此理を推せば處置安排を要せずして自ら愁が霽れるであらう。

丘中有一士二首　命首句爲題　丘中に一士有り　首句を命じて題となす

丘中有一士。不知其姓名。　丘中に一士有り、其姓名を知らず。
面色不憂苦。血氣常和平。　面色憂へ苦まず、血氣常に和平なり。

毎選隙地居。不踏要路行。　毎に隙地を選んで居り、要路を蹈んで行かず。
擧動無尤悔。物莫與之爭。　擧動尤悔無く、物之と爭ふ莫し。
藜藿不充腸。布褐不蔽形。　藜藿腸に充たず、布褐形を蔽はず。
終歲守窮餓。而無嗟歎聲。　終歲窮餓を守り、而も嗟歎の聲無し。
豈是愛貧賤。深知時俗情。　豈是れ貧賤を愛せんや。深く時俗の情を知ればなり。
勿矜羅弋巧。鸞鶴在冥冥。　羅弋の巧みに矜る勿れ。鸞鶴冥冥に在り。

【字解】【一】隙地　あき地。人の居ない場所。【二】尤悔　人のとがめ、自己の悔。【三】物　人なり。【四】藜藿　あかざと豆の葉。【五】羅弋　羅は網。弋はイグルミ。鳥を捕へること。【六】鸞鶴　高尙な鳥。冥冥は天の高い處。

【題意】鸞鶴に比して俗士と伍して利達を貪らない高士の風を敍した。

【詩意】山丘の中に一人の紳士がゐる。其名は何といふか知らない。少しも憂苦の色なく血氣常に和平で、人を避けて閑地に居り、要路には立寄らない。後暗い行がないから人の非難も蒙らず自ら後悔することもなく、誰あつて之と爭ふ者もない。貧窮を守つて嗟歎もしない。貧賤を好むわけではないが、深く世情の賴み難きを悟つてゐるからだ。名利を以て此士を釣らうとしても、鸞鶴と同じく高尙に構へて空高く飛んでゐるから、網でも矢でも捕へることは出來ない。

〔二〕

〔二〕

丘中有一士。守道歲月深。　丘中に一士有り、道を守つて歲月深し。
行披帶索衣。坐拍無絃琴。　行くに帶索の衣を披、坐して無絃の琴を拍つ。
不飮濁泉水。不息曲木陰。　濁泉の水を飮まず、曲木の陰に息はず。
所逢苟非義。糞土千黃金。　逢ふ所苟も義に非ざれば、千の黃金をも糞土にす。
鄕人化其風。薰如蘭在林。　鄕人其風に化し、薰ずること蘭の林に在るが如し。
智愚與强弱。不忍相欺侵。　智愚と强弱と、相欺き侵すに忍びず。
我欲訪其人。將行復沈吟。　我其人を訪はんと欲し、將に行かんとして復沈吟す。
何必見其面。但在學其心。　何ぞ必ずしも其面を見ん。但其心を學ぶに在り。

【字解】【一】帶索　繩を帶にすること。列子に「鹿裘帶索」とあり。【二】無絃琴　絃のない琴。陶淵明は無絃琴一張を蓄へ、醉へば撫弄して自ら樂んだといふ。【三】沈吟　思案すること。

【詩意】丘中に一士あり、常に正道を守る。行くには索の帶をまとひ、坐しては無絃の琴を撫す。濁泉の水を飮まず、曲木の蔭に息はず。事の不義なるに逢へば千金を視て糞土となす。鄕人其風に感化

して善良になり、智者强者と雖も敢て欺侮せず。我行いて其人を訪はんと欲せしも躊躇してやみぬ。必ずしも面會するを要せず、其心を學べば足ると思へばなり。

新製布裘

新に布裘を製す

(一)桂布白似雪。呉綿軟於雲。　桂布雪よりも白く、呉綿雲よりも軟なり。
布重綿且厚。爲裘有餘溫。　布は重く綿は且つ厚く、裘を爲りて餘溫有り。
朝擁坐至暮。夜覆眠達晨。　朝に擁し坐して暮に至り、夜覆ひ眠りて晨に達す。
誰知嚴冬月。(二)支體暖如春。　誰か知らん嚴冬の月、支體暖なること春の如きを。
中夕忽有念。撫裘起逡巡。　中夕忽ち念ふ有り。裘を撫して起つて逡巡す。
丈夫貴(三)兼濟。豈獨善一身。　丈夫は兼濟を貴ぶ。豈に獨り一身を善くするのみならんや。
安得萬里裘。(四)蓋裹周四垠。　安んぞ萬里の裘を得、蓋裹して四垠に周く、
穩暖皆如我。天下無寒人。　穩暖皆我の如くにし、天下に寒人無からしめん。

【字解】(一)桂布　次句の呉綿に對してゐるのだから、桂は地名であらう。(二)支體　四肢五體。(三)兼濟　天下の人を兼ねすくふ。(四)蓋裹　掩ひ包む。四垠は四方のはて。

【題義】新に布裘を作り身の暖さを覺ゆるにつけて、更に大裘を作つて天下の民をして悉く暖ならしめたいものだといふ意を述べた。

【詩意】雪よりも白く雲よりも軟かな布と綿とで溫な裘を作つたので、夜も晝も御陰で寒さ知らずに春のやうな氣持でゐられる。夜半に突然感ずる所があつて起きて裘を撫でて見た。一體男子たる者は天下を兼濟する志がなければならない。自分ひとり善ければ人はどうでもよいといふものではない。何とかして萬里を掩ふに足るやうな大きな裘を作つて四方を掩ひ、天下の人をして皆我と同じく暖さを感ぜしめる方法はないであらうか。

杏(一)園中棗樹

杏園中の棗樹

人言百果中。唯棗凡且鄙。　人は言ふ百果の中、唯棗凡にして且つ鄙しと。
皮皺似龜手。葉小如鼠耳。　皮皺んで龜の手に似たり、葉小にして鼠の耳の如し。
胡爲不自知。生花此園裏。　胡爲ぞ自ら知らず、花を生ずる此園の裏。
豈宜遇攀翫。幸免遭傷毀。　豈宜しく攀翫に遇ふべけんや。幸に傷毀に遭ふを免る。
二月曲(二)江頭。雜(三)英紅旖旎。　二月曲江の頭、雜英紅旖旎たり。

棗亦在其間。如(四)嫫對西子。　棗も亦其間に在り、嫫の西子に對するが如し。

(五)東風不擇木。吹煦長未已。　東風木を擇ばず、吹煦して長く未だ已まず。

眼看欲合抱。得盡生生理。　眼に合抱せんと欲するを看、生生の理を盡すことを得たり。

寄言遊春客。乞君一廻視。　言を寄す春に遊ぶ客、乞ふ君一たび廻視せよ。

君愛繞指柔。從君憐(六)柳杞。　君指を繞らすの柔を愛せば、君が柳杞を憐むに從せん。

君求悅目艷。不敢爭桃李。　君目を悅ばすの艷なるを求めば、敢て桃李と爭はず。

君若作大車。輪軸材須此。　君若し大車を作らば、輪軸の材は此を須ひん。

【字解】【一】杏園　長安の西に在る園の名。芙蓉園と相竝んで秦の宜春苑の地で、唐の遊宴の地である。【二】曲江　前の春雪の詩に見ゆ。【三】穠英　種種の花。旖旎は逶り靡く貌。【四】嫫　嫫母、古の醜婦、黃帝の第四妃。西子は西施なり、古の美女。【五】東風　春風。【六】柳杞　柳の一種、至つて柔なる木なり。

【題義】棗の樹は至つて武骨で見映がないが堅固であるから車の輪軸とするに適する。人も此と同じで柔媚便佞の徒や才華英發の士よりも剛毅木訥の士が却つて國用をなすものだといふ意を述べた。

【詩意】すべての果樹の中で棗ほど凡且つ鄙なものはない。皮は皺がよつてゐて龜の手のやうで、葉は小さくて鼠の耳のやうだ。然るに柄にもなく杏園の中に花を開いてゐるのは己を知らぬといふものだ。誰あつて攀ぢ翫ぶ者などはない。傷毀されないのが責めてもの幸といふものだと世間の人は棗を罵倒する。春二月曲江の頭には色様様の粧を凝らして各種の花が咲いてゐる。その中に棗が立ちまじつてゐるのは、なるほど醜婦が美人と肩を竝べてゐるやうだ。併し春風は一視同仁だから吹き煦めることに偏頗がない。されば此棗も合抱の大きさになつて、持前の生理を盡してゐる。さて春遊の士に一言を呈する。君まづ一たび廻視せられよ。君は指を繞るやうな柔軟さを好むならば、勝手に柳杞を愛し給へ。又目を悅ばす艷麗さを求めるならば、桃や李を賞し給へ。併し車を作るには此棗の木を輪軸としなければなるまい。

蝦蟇　和張十六。

蝦蟇　張十六に和す

(一)嘉魚薦宗廟。靈龜貢邦家。　嘉魚は宗廟に薦む、靈龜は邦家に貢す。

(二)應龍能致雨。潤我百穀芽。　應龍は能く雨を致し、我が百穀の芽を潤す。

蠢蠢水族中。無用者蝦蟇。　蠢蠢たる水族の中、用無き者は蝦蟇か。

形穢肌肉腥。出沒於泥沙。　形穢れて肌肉腥く、泥沙に出沒す。

六月七月交。時雨正(三)霶霈。　六月七月の交、時雨正に霶霈たり。

蝦蟇得其志。快樂無以加。　蝦蟇其志を得て、快樂以て加ふる無し。

地既蕃其生。使之族類多。　地既に其生を蕃くし、之をして族類多からしむ。

天又與其聲。得以相諠譁。(四)　天又其聲を與へ、以て相諠譁するを得しむ。

豈惟玉池上。汚君清冷波。　豈惟玉池の上、君が清冷の波を汚すのみならんや。

何獨瑤(五)瑟前。亂君鹿(六)鳴歌。　何ぞ獨瑤瑟の前、君が鹿鳴の歌を亂すのみならんや。

常恐飛上天。跳躍隨姮(七)娥。　常に恐る飛んで天に上り、跳躍姮娥に隨ひ、「んことを。

往往蝕明月。遣君無奈何。　往往に明月を蝕し、君をして奈何ともする無からしめ」

【字解】【一】嘉魚　美魚なり。【二】應龍　龍の翼あるもの。【三】霈霈　雨のふりそそぐ貌。【四】諠譁　かまびすしく鳴く。【五】瑤瑟　玉で飾つた瑟。【六】鹿鳴　詩經小雅の篇名。羣臣嘉賓を宴する詩。【七】姮娥　一に嫦娥に作る。古の仙人。淮南子に「羿請不死之藥於西王母。姮娥竊之奔月宮」とあり。

【題義】蝦蟇を借りて邪臣の忌むべきことを述べた。

【詩意】魚は供物として宗廟に薦むべく、龜は卜筮の具として國家に貢すべく、龍は能く雨を降らし百穀を潤すべきも、水蟲の中で何の役にも立たぬものは蝦蟇であらう。穢らしい形をして泥の間に出沒し、六七月頃雨が降ると、得たり賢しとして樂んでゐる。地は既に惠を與へて其種族を繁殖させ、天も亦恩を施して、其聲を諠からしめてゐる。されば啻に玉池の波を汚したり、瑤琴の歌を亂したりするのみでなく、更に姮娥に隨つて天上に上り明月を蝕するやうな大害をもする。憎みてもあまりあるやつである。

寄隱者

隱者に寄す

賣藥向都城。行憩青(一)門樹。　藥を賣りて都城に向ひ、行いて青門の樹に憩ふ。

道逢馳(二)驛者。色有非常懼。　道に馳驛の者に逢ふ、色非常の懼有り。

親族走相送。欲別不敢住。　親族走つて相送る、別れんと欲して敢て住らず。

私怪問道傍。何人復何故。　私かに怪んで道の傍に問ふ、何人ぞ復何故ぞと。

云是右丞相。當國握樞務。　云ふ是れ右丞相、國に當つて樞務を握る。

祿厚食萬錢。恩深日三(三)顧。　祿厚うして萬錢を食み、恩深うして日に三顧す。

昨日延(四)英對。今日崖(五)州去。　昨日は延英に對し、今日は崖州に去る。

由來君臣間。寵辱在朝暮。　由來君臣の間、寵辱朝暮に在り。

青青東郊草。中有歸山路。　青青たる東郊の草、中に歸山の路有り。
歸去臥雲人。謀身計非誤。　歸り去れ雲に臥す人、身を謀る計誤るに非ず。

【字解】【一】 青門　漢の長安城の東南の門で、秦の東陵侯召平が秦破れて布衣となり、瓜を種ゑて生活した處。【二】 驛騎　驛傳なり。【三】 三顧　蜀の劉備三たび諸葛亮の廬を訪ひし故事。君の優遇を受くること。【四】 延英　唐の宮殿の名。【五】 崖州　廣東省瓊州府。南方極遠の地。

【題義】 權勢の恃み難く隱遁の嘉すべきことを述べた詩である。

【詩意】 隱者が藥草を賣りに都へ出かけて青門の樹蔭に休んでゐたが、早飛脚が顏色を變へて走り行くのに逢つた。すると間もなく親族の人が打連れ立つて旅立の人を見送りに來た。一體此人は何者で何事が起つたのか傍の人に聞いて見ると、この人は右丞相に任せられて國家の樞機に參し、萬錢の厚祿を食み君主の恩寵を蒙り、昨日までは延英殿に昇つて君の御下間に奉答する身であつたが、今日俄に崖州に貶せられることになつた。由來君臣の間柄といふものは永續きのせぬもので、朝に夕を慮らず寵辱忽ち地を易へるものであるとの事であつた。ああすまじきものは宮仕である。東郊には青青と春草が茂つて中に山路が通じてゐる。隱者よ早くあの山へ歸つて雲の奧に臥してゐるがよい。それが身の萬全を謀る最上策である。

放魚　自此後詩到江州作　　魚を放つ　此より後の詩は江州に到りて作る

曉日提竹籃。家僮買春蔬。(一)　曉日竹籃を提げ、家僮春蔬を買ふ。
青青芹蕨下。疊臥雙白魚。　青青たる芹蕨の下、疊臥す雙白魚。
無聲但呀呀。(二)以氣相呴濡。(三)　聲無くして但呀呀たり、氣を以て相呴濡す。
傾籃寫(四)地上。撥(五)刺長尺餘。　籃を傾けて地上に寫す、撥刺として長さ尺餘。
豈唯刀机(六)憂。坐見螻蟻(七)圖。　豈唯刀机の憂のみならんや、坐に螻蟻に圖らる。
脫泉雖已久。得水猶可蘇。　泉を脫して已に久しと雖も、水を得ば猶は蘇す可し。
放之小池中。且用救乾枯。　之を小池の中に放ち、且く用つて乾枯を救はん。
水小池窄狹。動尾觸四隅。　水小にして池窄狹、尾を動かせば四隅に觸る。
一時幸苟活。久遠將何如。　一時幸に苟も活くるも、久遠將に何如とかする。
憐其不得所。移放於南湖。(八)　其の所を得ざるを憐み、移して南湖に放つ。
南湖連西江。好去勿踟躕。(九)　南湖は西江に連る。好し去つて踟躕する勿れ。
施恩卽望報。吾非斯人徒。　恩を施して卽ち報を望む、吾斯人の徒に非ず。

不須泥沙底。辛苦覓明珠。　須ひず泥沙の底、辛苦して明珠を覓むるを。

【字解】【一】春蔬　春の野菜。【二】呀呀　口を張る貌。【三】煦濡　いきをはきかけ、うるほす。【四】寫　籃から地面に移すこと。【五】撥刺　潑剌に同じ。魚のぴんぴんはねる貌。【六】刀机　庖丁と俎。【七】螻蟻　けら、あり。【八】南湖　湖の名。【九】踟躕　ためらふこと。【一〇】明珠　夜光る珠。

【題義】魚を憐んで之を南湖に放つたことを敍したのである。

【詩意】曉に家僮が竹籃を携へて野菜を買ひに行き、芹や蕨の下に二匹の白魚を買つて入れて來た。見れば聲も立て得ずに口を開き互に氣を以て煦め濡してゐる。籃から地面に移して見ると、長さが一尺餘あつてピンピンはねてゐる。かうして置けば庖丁や俎の憂目を見、蟻や螻の侮をさへ受けねばならない。水を離れて既に久しくはあるが、今水の中へ入れてやれば蘇生しないものでもない。因つて之を池に放ち乾枯を救つてやらうと思つたが、まア待てよ池は狹いから尾を動かせば四隅に衝突し、一時命は助かつても永く壽命を保つことは出來まいと考へて、之を南湖に放してやつた。南湖は西江に續いてゐるから、自由に活動ができるであらう。さあ躊躇せずに去るがよい。俺は恩を施して其報を望むやうな男ではないから、骨折つて明珠を探して持つて來るには及ばない。

【餘論】南湖連西江。吾非斯人徒の二句は五字とも皆平聲である。古詩の平仄をやかましく論ずる人もあるが、かかる聲律に拘らぬのもあることを注意すべきである。

文柏牀

陵上有老柏。柯葉寒蒼蒼。
朝爲風煙樹。暮爲宴寢牀。
以其多奇文。宜升君子堂。
刮削露節目。拂拭生輝光。
玄斑狀貍首。素質如截肪。
雖充悅目翫。終乏周身防。
華彩誠可愛。生理苦已傷。
方知自殘者。爲有好文章。

文柏牀

陵上に老柏有り、柯葉寒うして蒼蒼たり。
朝には風煙の樹と爲り、暮には宴寢の牀と爲る。
其の奇文多きを以て、宜しく君子の堂に升るべし。
刮削して節目を露はし、拂拭して輝光を生ず。
玄斑貍首に狀り、素質截肪の如し。
目を悅ばしむる翫に充つと雖も、終に周身の防に乏し。
華彩誠に愛す可し。生理已に傷るるに苦む。
方に知る自ら殘ふ者、好文章有るが爲なるを。

【字解】【一】柯葉　柯は枝。蒼蒼は青色なり。【二】宴寢　安臥なり。【三】玄斑　黑い斑點。貍首の貍は狸に通ず、獸の名。【四】素質　白い地質。截肪は脂肪を切ること。【五】周身　周は賙に通ず、吾が身をすくふこと。【六】生理　生生の理。前の杏園中棗樹の詩を見よ。

【題義】文柏牀を借りて隱然自ら貶謫を傷んだのである。

【詩意】陵上に一本の老柏があつて、冬でも枝葉が靑靑としてゐる。朝には風煙を帶ぶる樹である

が、夜になれば臥牀にすることが出來る。其材質の極めて文彩あるを以て君子の堂にも升るべき値がある。刮削すれば美しい木理が露れ、拂拭すれば光澤が出て、黑い斑は狸の形に似て、白い地質は脂肪のやうである。さて此文柏牀は人の目を悅ばす玩物となることは出來るが、自ら己の身を救ふ術には乏しい。卽ち華彩は賞すべきであるが、己の生存能力は害されてゐる。因つて思ふに自ら身を損傷する者は、好文彩の人を悅ばすものがあるからで、何の能もなければ決して害されはしない。

【餘論】莊子人間世篇に「山は木にて自ら寇するなり。膏は火にて自ら煎るなり。桂は食ふべし、故に之を伐る。漆は用ふべし、故に之を割く云云」とあると同意。

潯陽三題（一） 并序

廬山（二）多桂樹。湓浦（三）多修竹。東林寺（四）有白蓮花。皆植物之貞勁秀異者。雖宮闈（五）省寺中。未必能盡有。夫物以多爲賤。故南方人不貴重之。至有蒸爨其桂。剪棄其竹。白眼（六）於蓮花者。予惜其不生於北土也。因賦三題以唁之。

潯陽三題 并に序

【訓讀】廬山に桂樹多く、湓浦に修竹多く、東林寺に白蓮花有り、皆植物の貞勁秀異なる者。宮闈省寺の中と雖も、未だ必ずしも能く盡く有らず。夫れ物は多きを以て賤しと爲す。故に南方の人、之を貴重せず。其柱を蒸爨し、其竹を剪棄し、蓮花を白眼する者有るに至る。予其の北土に生ぜざるを惜む。因つて三題を賦して以て之を唁ふ。

【字解】【一】潯陽　郡名。隋には九江といひ、唐には潯陽といふ。今の江西省九江縣治。【二】廬山　山の名。江西省星子縣の西北、九江縣の南に在る。【三】湓浦　湓水の長江に入る處。九江縣の西に在り。修竹は長い竹。【四】東林寺　廬山に在る寺の名。方輿勝覽に「晉慧遠法師居廬山東林寺。有白蓮池。與劉遺民等十八人同修淨土之法。然遣公招陶潜入社。終不能致。謝靈運求入社。而以心雜不許」とあり。【五】宮闈　宮殿の闈。省寺は役所。【六】白眼　晉の阮籍の故事。睥睨すること。

廬山桂

偃蹇（一）月中桂。結根依青天。
天風繞月起。吹子下人間。
飄零委何處。乃落匡（二）廬山。
生爲石上桂。葉如剪碧鮮。
枝幹日長大。根荄（三）日牢堅。
不歸天上月。空老山中年。

廬山の桂

偃蹇たる月中の桂、根を結んで青天に依る。
天風月を繞つて起り、子を吹いて人間に下す。
飄零して何處にか委つる、乃ち匡廬の山に落つ。
生じて石上の桂と爲り、葉は碧鮮を剪るが如し。
枝幹日に長大、根荄日に牢堅。
天上の月に歸らず、空しく山中の年に老ゆ。

廬山去(四)咸陽。道里三四千。　廬山は咸陽を去ること、道里三四千。

無人爲移植。得入(五)上林園。　人爲に移植し、上林園に入るを得る無し。

不及紅花樹。長栽溫室前。　紅花樹の、長く溫室の前に栽ゑらるるに及ばず。

【字解】【一】偃蹇　驕傲の貌。【二】匡廬　廬山の別名。周の時仙人匡裕が此山に廬を結んでゐたからいふ。【三】根蔕　蔕も根なり。【四】咸陽　秦の都、唐の長安の地。【五】上林園　天子の御苑をいふ。

【詩意】月の中に桂の樹があつて靑天の上に根を託してゐた。風が其實を下界に吹きおろし、それが廬山の石の上に落ちて、そこに桂の樹が生えた。剪刀で切つたやうな綠の葉が茂り、枝も幹も日增に伸び根も堅くなつた。竟にもとの天上には歸らずに山中に老いてしまつた。廬山は帝都を距ること三四千里もあるので、此桂を帝都に移植する者もないから、天子の御苑にも植ゑらるべき樹でありながら、空しく山中に老いて、美しき花樹のやうに長く溫室の前に栽ゑられて珍重されることもない。誠に惜むべきことだ。

溢浦竹　溢浦の竹

潯陽十月天。天氣仍溫燠。　潯陽十月の天、天氣仍溫燠。

有霜不殺草。有風不落木。　霜有れども草を殺さず、風有れども木を落さず。

(一)玄冥氣力薄。草木冬猶綠。　玄冥氣力薄く、草木冬猶綠なり。

誰肯溢浦頭。廻眼看修竹。　誰か肯て溢浦の頭、眼を廻して修竹を看ん。

其有(二)顧盼者。持刀斬且束。　其の顧盼する者有れば、刀を持ちて斬り且つ束ぬ。

剖劈(三)靑琅玕。家家蓋牆屋。　靑琅玕を剖劈して、家家牆屋を蓋ふ。

吾聞(四)汾晉間。竹少重如玉。　吾聞く汾晉の間、竹少うして重んずること玉の如しと。

胡爲取輕賤。生此西江曲。　胡爲れぞ輕賤を取つて、此西江の曲に生ずる。

【字解】【一】玄冥　冬の神。禮記に「孟冬之月……其神玄冥」とあり。【二】顧盼　かへりみる。【三】靑琅玕　琅玕は玉に次ぐ美石。竹を玉に比していふ。【四】汾晉　山西省の地名。

【詩意】潯陽郡は氣候が暖で十月になつても寒くない。霜は降つても草を枯らすほどではなく、風が吹いても落葉を吹散らすほどではないから、草木がいつも綠である。故に溢浦に竹が生えてゐても誰もふり向いて見る人もない。たまさか顧る者があれば、其れは竹を斬つて束ねに來るので、玉にも比すべき靑竹を惜氣もなく斬倒して屋根や牆を作るのである。聞けば汾晉地方では竹が少いので玉のやうに珍重するといふが、この竹はなぜこんな西江の邊に生えて人から馬鹿にされてゐるのであらう。

氣の毒なことだ。

東林寺白蓮

東林北塘水。湛湛見底清。　東林北塘の水、湛湛として底清きを見る。
中生(一)白芙蓉。(二)菡萏三百莖。　中に白芙蓉を生じ、菡萏三百莖。
白日發光彩。清飈散芳馨。　白日光彩を發し、清飈芳馨を散す。
洩香銀囊破。瀉露玉盤傾。　香を洩して銀囊破れ、露を瀉いで玉盤傾く。
我慙塵埃眼。見此(三)瓊瑤英。　我慙づ塵埃の眼、此瓊瑤の英を見ることを。
乃知紅蓮花。虛得清淨名。　乃ち知る紅蓮花、虛しく清淨の名を得たるを。
夏蕚敷未歇。秋芳結纔成。　夏蕚敷いて未だ歇まず、秋芳結んで纔に成る。
夜深衆僧寢。獨起繞池行。　夜深けて衆僧寢ね、獨起きて池を繞つて行く。
欲收(四)一顆子。寄向長安城。　一顆の子を收め、長安城に寄向せんと欲す。
但恐出山去。(五)人間種不生。　但恐る山を出で去つて、人間種うとも生ぜざらんことを。

【字解】【一】白芙蓉　白蓮花なり。【二】菡萏　蓮花をいふ。【三】瓊瑤　玉なり。英はハナビラ。【四】一顆　一箇。【五】人間　俗世間。

【詩意】東林寺の北邊に清水の湛へた池があつて、中に白い蓮花が三百本ばかり咲いてゐる。その潔白な狀は錦囊が破れて香が散じ、玉盤が傾いて露を瀉ぐにも比すべく、俗塵に汚れた目で見るのは愧づかしいやうな氣がする。紅蓮の花が清淨だと呼ばれてゐるのは、虛名に過ぎない。今や蕚は伸びて未だ歇まず、芳はますます高くなつた。夜深けて人靜つた後に、獨り池を遶つて賞翫した。一箇の實を長安に送つてやつたらと思ふが、此山を去つて俗界に植ゑては或は生えないかも知れない。

大水

潯陽郊郭間。大水歲一至。　潯陽郊郭の間、大水歲に一たび至る。
(一)閭閻半漂蕩。(二)城堞多傾墜。　閭閻半漂蕩し、城堞多くは傾墜す。
(三)蒼茫生海色。渺漫連空翠。　蒼茫として海色を生じ、渺漫として空翠に連る。
風卷白波翻。日煎紅浪沸。　風卷いて白波翻り、日煎りて紅浪沸く。
工商徹屋去。牛馬登山避。　工商屋を徹して去り、牛馬山に登つて避く。

況當率稅時。頗害農桑事。　況んや稅を率むる時に當り、頗る農桑の事を害するをや。

獨有(四)傭舟子。鼓枻生意氣。　獨り傭舟子有り、枻を鼓して意氣を生じ、

不知萬人災。自覓(五)錐刀利。　萬人の災を知らず、自ら錐刀の利を覓む。

吾無奈爾何。爾非久得志。　吾爾を奈何ともすること無し。爾久しく「志を得るに非ず。」

九月霜降後。水涸爲平地。　九月霜降つて後、水涸れて平地と爲る。

【字解】【一】閭閻　村里。【二】堞埤　城壁。【三】蒼茫　ひろびろとしてゐる貌。【四】傭舟子　渡船の船頭。【五】錐刀利　微少の利。左傳に「錐刀之末、將盡爭之」とあり。

【題義】大水の時舟子ひとり他人の損害をよそに見て、機に乘じて己の小利を貪るを慨した詩である。

【詩意】潯陽附近には一年一回必ず大水が出る。すると村里は流され城壁は崩され、一面に茫茫たる大海と化し、商工は家を引揚げ、牛馬は山に登つて避難する。一番みじめなのは納稅をひかへて作物を害される農民である。ただ渡船の船頭は機乘ずべしとなして得意の色あり、他人の災難をよそに見て己の利を貪つてゐる。俺はお前の火事場泥棒的行爲を如何ともすることは出來ないが、お前の得意も永續はしないぞよ。九月になつて霜の降る時節になれば、水が涸れて平地になつてしまふ。その時こそお前が代つて泣く番だ。

白樂天詩集　卷二

諷諭二　古調詩五言　凡五十八首

續古詩十首

(一)戚戚復戚戚。送君遠行役。　戚戚復戚戚、君を送る遠行の役。

行役非中原。海外(二)黃沙磧。　行役中原に非ず、海外の黃沙磧。

(三)伶俜獨居妾。(四)迢遞長征客。　伶俜たる獨居の妾、迢遞たる遠征の客。

君望功名歸。妾憂生死隔。　君は功名の歸を望み、妾は生死の隔を憂ふ。

(五)誰家無夫婦。何人不(六)離析。　誰が家か夫婦無からん、何人か離析せざらん。

所恨薄命身。嫁遲別日迫。　恨むる所は薄命の身、嫁すること遲うして「別るる日は迫し。」

妾身有存沒。妾心無改易。　妾が身は存沒有り、妾が心は改易無し。

生爲閨中婦。死作山頭石。　生きては閨中の婦と爲り、死しては山頭の石と作る。

【字解】【一】戚戚　憂思の貌。【二】黄沙磧　沙漠をいふ。海とは青海で蒙古のココノールといふ湖水をいふ。【三】伶俜　よるべなき貌。【四】迢遞　遠き貌。【五】誰家　誰に同じ。【六】離析　離別。【七】山頭石　望夫石なり。神異經に「武昌の北山に石あり。狀人の立つが如し。相傳ふ昔貞婦あり、其夫役に從ひ遠く國難に赴く。婦子を携へ此山に餞送して夫を望み、化して石となる」とあり。

【題義】漢代の古詩十九首に倣つて、遠行の夫を慕ふ妻のことや、旅先で古塚を見て人生の果敢なきを感じたことや、隱遁生活を賛美することや、樣樣の問題について感慨を述べた作である。

【詩意】戚戚と憂へ悲んで君が遠征するのを送る。君は沙漠を超えて外夷を征伐する爲に行くのである。君は功名を望み勇んで行くが、妾は君の生死をも知らずに獨り殘つてゐる。昔から夫婦の離れ住むことがないではないが、ただ嫁すること遲く別れの早い吾が身が恨めしい。たとひ吾が身は死するとも君を慕ふ心は決して渝らない。生きては閨中の婦となり死しては望夫石となつて永く君を望むであらう。

〔二〕

掩淚別鄉里。飄颻將遠行。　淚を掩ひて鄉里に別れ、飄颻として將に遠行せんとす。

茫茫綠野中。春盡孤客情。　茫茫たる綠野の中、春は盡く孤客の情。

驅馬上丘隴。高低路不平。　馬を驅つて丘隴に上れば、高低路平ならず。

風吹棠梨花。啼鳥時一聲。　風棠梨の花を吹いて、啼鳥時に一聲。

古墓何代人。不知姓與名。　古墓何の代の人ぞ、姓と名とを知らず。

化作路傍土。年年春草生。　化して路傍の土と作り、年年春草生ず。

感彼忽自悟。今我何營營。　彼に感じて忽ち自ら悟る、今我何ぞ營營たる。

【字解】【一】飄颻　風に飄る貌。【二】營營　汲汲といふが如し、名利に奔走する貌。

【詩意】淚を拂つて鄉里を離れ、飄然として旅路に上り、とぼとぼと廣漠たる春の野原を過ぎ行けば、遣瀨ない旅愁を感ずる。馬を驅つて山坂を昇り降りして行くと、風が花の香を吹き送り、鳥の聲も慰め顔に聞える。折しも路傍に古塚があつた。いつの世の誰の墓やら知る由もないが、春草は年年生えるが墓の主は永遠に覺めることはない。これが人生の終局だと思ふと、名利に奔走してゐる吾が身がつくづくいやになる。

〔三〕

朝采山上薇。暮采山上薇。　朝に山上の薇を采り、暮に山上の薇を采る。

歲晏薇亦盡。飢來何所爲。　歲晏れて薇亦盡く。飢ゑ來つて何の爲す所ぞ。
坐飲白石水。手把青松枝。　坐して白石の水を飲み、手に青松の枝を把る。
擊節獨長謌。其聲淸且悲。　節を擊つて獨長く謌ふ。其聲淸うして且つ悲む。
櫪馬非不肥。所苦常繫維。　櫪馬肥えざるに非ず、苦む所は常に繫維せらるるを。
豢豕非不飽。所憂竟爲犧。　豢豕飽かざるに非ず、憂ふる所は竟に犧と爲る。
行行歌此曲。以慰常苦飢。　行く行く此曲を歌うて、以て常に飢に苦しむを慰す。

【字解】【一】擊節　一種の板を擊つて歌曲の調子を取ること。【二】櫪馬　廐に飼はれてゐる馬。【三】繫維　繫がれてゐる。【四】豢豕　檻に入れて養はれてゐる豕。

【詩意】世を避けて山に入り、薇を採つて食つてゐる。年暮れて薇も盡きると水を飲んで飢を凌いでゐる。青松の枝を把り節を擊つて歌へば、其聲が淸らかにも亦悲しげである。廐に飼はれてゐる馬は肥えてはゐるが、いつも繩目にかかつてゐる。又檻に入れられてゐる豕はひもじいことはないが、終には犧牲として屠られる。して見れば結句自由な隱者生活が氣樂だ。因つて此曲を歌つて常に飢に苦んでゐる吾が心を慰める。

〔四〕

雨露長纖草。山苗高入雲。　雨露は纖草を長ず。山苗も高く雲に入る。
風雪折勁木。澗松摧爲薪。　風雪は勁木を折る。澗松も摧かれて薪と爲る。
風摧此何意。雨長彼何因。　風に摧くるは此れ何の意ぞ、雨に長ずるは彼れ何の因ぞ。
百丈澗底死。寸莖山上春。　百丈なるも澗底に死れ、寸莖も山上に春なり。
可憐苦節士。感此涕盈巾。　憐む可し苦節の士、此に感じて涕巾に盈つ。

【詩意】雨露は短き草をも生長させるから、山上の苗は高く雲の上に立つてゐるが、風や雪は勁木をも折るので、澗底の松は折られて薪にされてしまふ。一は折られ一は長ずるは何故であらうか。百丈の松は澗底に倒れ、一寸の苗は山上に時めいてゐる。便佞の徒が榮華に耽つて苦節の士は虐げられるのも此と同じだ。此に感じて覺えず涙が流れた。

〔五〕

窈窕雙鬟女。容德俱如玉。　窈窕たる雙鬟の女、容德俱に玉の如し。
晝居不踰閾。夜行常秉燭。　晝居れども閾を踰えず、夜行けば常に燭を秉る。

氣如含露蘭。心如貫霜竹。　氣は露を含める蘭の如く、心は霜を貫く竹の如し。

宜當備嬪（二）御。胡爲守幽獨。　宜しく當に嬪御に備ふべし。胡爲ぞ幽獨を守れる。

無媒不得選。年忽過三六。　媒無うして選を得ざればなり。年忽ち三六を過ぎ。

歲暮望漢（三）宮。誰在黃（四）金屋。　歲暮れて漢宮を望む、誰か黃金の屋に在る。

（五）邯鄲進倡女。能唱黃（六）花曲。　邯鄲倡女を進む。能く黃花の曲を唱ふ。

一曲稱君心。恩榮連九（七）族。　一曲君の心に稱うて、恩榮九族を連ぬ。

【字解】【一】窈窕　幽閒貞靜の貌。婷鬟は髻の形。【二】嬪御　君主の寢所に侍する女。【三】漢宮　漢の宮殿。【四】黃金屋　后妃の居る宮殿。漢武故事に「武帝爲太子時、長公主欲以女配帝。問曰、得阿嬌好否。帝曰、若得阿嬌、當以金屋貯之」とあり。【五】邯鄲　趙の都。燕趙には古來美人が多い。倡女は女樂なり。【六】黃花　趙の山の名。史記趙世家の正義に「西河側之山名也」とあり。【七】九族　父族母族妻族。

【詩意】窈窕たる美女がありて容色德行玉の如く美しい。晝は妄に閾を踰えて外出せず、夜は必ず燭を秉つて行く。その行の正しきこと大率此類である。又その氣品精神は蘭の如く竹の如く高尙である。天子の嬪御としても應はしかるべき身でありながら、何故に獨り淋しくひつこんでゐるのであらうか。誰も媒をしてくれる者がないで選に漏れ、いつか十八の盛の春も過ぎてしまつたのである。併し漢宮の嬪御を見ると晚年まで金屋の中にゐとほした人は一人もなく、趙都邯鄲あたりから倡女を進め、一曲の歌が天子の御意に叶へば、忽ち寵榮を蒙つて恩九族に及ぶやうになつて、忽ち取つて代られてしまふのであるから、其れを思へば始から宮仕をせぬ方が寧ろ賢い仕方かも知れない。

〔六〕

（一）栖栖遠方士。讀書三十年。　栖栖たる遠方の士、書を讀むこと三十年。

業成無知己。徒步來入關。　業成つて知己無し、徒步し來つて關に入る。

長安多王侯。英俊競攀援。　長安王侯多し、英俊競つて攀援す。

幸隨衆賓末。得厠門館間。　幸に衆賓の末に隨ひ、門館の間に厠はるを得たり。

東閣有旨酒。中堂有管絃。　東閣に旨酒有り、中堂に管絃有り。

何爲向隅客。對此不開顏。　何爲ぞ隅に向ふ客、此に對して顏を開かざる。

富貴無是非。主人終日歡。　富貴是非無し、主人終日歡ぶ。

貧賤多悔（二）尤。客子中夜歎。　貧賤悔尤多し、客子中夜歎ず。

歸去復歸去。故鄉貧亦安。　歸り去らん復歸り去らん。故鄉は貧しけれども亦安し。

【字解】（一）栖栖　忙しき貌。（二）悔尤　自ら後悔することや他人のとがめ。

【詩意】余は僻遠の地に生れた一書生であるが孜孜として三十年の間學業を勵み、學業は成つたが誰も認めて用ひてくれる人がないので、徒歩して函谷關に入り長安の都に來た。さすがに長安には王侯が多いので天下の英才が競ひ集つて之に取入る。幸に余も衆賓の末に隨つて門下に列することが出來た。王侯の家には酒もあり管絃もあるが、なぜか隅の方に向つて小さくなつてゐる余は酒や音樂によつて憂さをはらす氣になれない。ああ富貴なれば是も非もなく、いつも歡樂を極めてゐられるが、貧賤の者は中夜に歎息せざるを得ない。いつそ故鄕へ歸らう。故鄕は貧しくはあるが氣樂に暮らせる。

〔七〕

涼風飄嘉樹。日夜減芳華。　涼風嘉樹を飄し、日夜芳華を減ず。

下有感秋婦。攀條苦悲嗟。　下に秋を感ずる婦有り、條を攀ぢて苦に悲嗟す。

我本幽閑（一）女。結髮（二）事豪家。　我本幽閑の女、結髮して豪家に事ふ。

豪家多婢僕。門內頗驕奢。　豪家婢僕多く、門內頗る驕奢なり。

（三）良人近封侯。出入鳴玉珂（四）。　良人封侯に近く、出入に玉珂を鳴らす。

自從富貴來。恩薄讒言多。　富貴より來、恩薄く讒言多し。

（五）冢婦獨守禮。羣妾互奇衺（六）。　冢婦獨り禮を守り、羣妾互に奇衺。

但信言有玷。不察心無瑕。　但言の玷あるを信じて、心の瑕無きを察せず。

（七）容光未銷歇。歡愛忽蹉跎。　容光未だ銷歇せざるに、歡愛忽ち蹉跎す。

何意掌上玉。化爲眼中砂。　何ぞ意はん掌上の玉、化して眼中の砂と爲らんとは。

（八）盈盈一尺水。浩浩千丈河。　盈盈たる一尺の水、浩浩たる千丈の河。

勿言小大異。隨分有風波。　言ふ勿れ小大異りと、分に隨つて風波有り。

閨房猶復爾。邦國當如何。　閨房すら猶復爾り、邦國當に如何なるべき。

【字解】（一）幽閑　しとやかな貌。（二）結髮　結婚すること。（三）良人　をつと。（四）玉珂　馬具。貝を以て之を作る。色白玉の如し。張華の詩に「乘馬鳴玉珂」とあり。（五）冢婦　主婦。正妻なり。（六）奇衺　衺は邪に同じ。（七）容光　容色風丰。劉廷芝の公子行に「古來容光人所羨」とあり。銷歇は衰へること。（八）盈盈　淸淺なり。古詩に「盈盈一水間」とあり。

【詩意】秋風が吹き立つて芳しき花も色あせる時になり、時節の推移を痛感して一人の婦人が枝に倚つて薄命を嗟いてゐる。もと我が身は幽閑貞靜な女であつた。緣あつて豪家に嫁した。豪家には數多の僕婢も居り生活も驕奢である。夫は王侯にも比すべく出入には玉珂を鳴らし駿馬に乘る身になつた。段段富貴になるに隨つて恩情は薄くなり讒言はいやますばかりであつた。主婦たる我は獨り禮儀を守

つてゐるが、羣妾はいづれも奇邪の限を盡した。夫は羣妾の誤つた言葉を信じて、我が正しき心を察してはくれない。遂に容色も衰へないのに先づ愛がなくなつて、嚮には掌中の玉と寵愛したのが、今では目の中の砂のやうに邪魔にする。あゝ一尺の流でも千丈の河でも物の道理に二つはない。それぞれの分相應に風波が立つ。一家の夫婦のいざこざは斯の如くである。國家の君臣關係も此と同じだ。

〔八〕

心亦無所迫。身亦無所拘。　心亦迫る所無く、身亦拘る所無し。

何爲腸中氣。鬱鬱不得舒。　何爲れぞ腸中の氣、鬱鬱として舒ぶるを得ざる。

不舒良有以。同心久離居。　舒びざるは良に以有り、心を同うして久しく離居す。

五年不見面。三年不得書。　五年面を見ず、三年書を得ず。

念此令人老。抱膝坐長吁。　此を念へば人をして老いしむ、膝を抱いて坐に長吁す。

豈無盈尊酒。非君誰與娛。　豈尊に盈つる酒無からんや、君に非ずんば誰と與に娛まん。

【字解】【一】長吁　長歎なり。

【詩意】心も身も拘束されてはゐないのに、なぜ氣がはればれとせぬのであらう。それは他ではない。好いた同志が永く別れ住んで、五六年の間顏も見ず音信も不通でゐるからである。此事を考へると氣がくさくさして、めつきり吾が身がふけて行くやうに感ずる。樽に酒がないではないが、好いたお方がゐなくては、酒を飮んでも氣ははれない。

〔九〕

攬衣出門行。遊觀遶林渠。　衣を攬つて門を出でて行き、遊觀して林渠を遶る。

澹澹春水暖。東風生綠蒲。　澹澹として春水暖に、東風綠蒲に生ず。

上有和鳴雁。下有掉尾魚。　上に和鳴の雁有り、下に掉尾の魚有り。

飛沈一何樂。鱗羽各有徒。　飛沈して一に何ぞ樂しむ、鱗羽各徒有り。

而我方獨處。不與之子俱。　而して我方に獨處り、之子と俱にせず。

顧彼自傷己。禽魚之不如。　彼を顧みて自ら己を傷ましむ、禽魚にだも如かざることを。

出遊欲遣憂。孰知憂有餘。　出で遊んで憂を遣らんと欲す、孰か知らん憂の餘有ることを。

【字解】【一】林渠　林や溝。【二】鱗羽　魚鳥。【三】之子　愛する所の男。

【詩意】衣を整へて野山の間に逍遙すれば、春の水がなみなみと滿へて春風が綠の蒲を吹いてゐる。上には鳴きかはす雁があり、下には尾鰭を竝ぶる魚がゐる。かの魚や鳥は各、仲間があつて樂んでゐ

るのに、自分は獨り離れ住んで思ふお方と倶に居ることも出來ない。つくづく魚鳥にも及ばぬ我が身が恨めしい。遊山にでも出て憂を遣らうとするが、どうしても氣がはれない。

〔十〕

春旦日初出。瞳瞳耀晨輝。　春旦日初めて出で、瞳瞳として晨輝を耀す。

草木照未遠。浮雲已蔽之。　草木照すこと未だ遠からざるに、浮雲已に之を蔽ふ。

天地黯以晦。當午如昏時。　天地黯として以て晦く、當午も昏時の如し。

雖有東南風。力微不能吹。　東南の風有りと雖も、力微にして吹く能はず。

中園何所有。滿地青青葵。　中園何の有る所ぞ、滿地青青たる葵。

陽光委雲上。傾心欲何依。　陽光雲上に委す、心を傾けて何くに依らんと欲する。

【字解】〔一〕瞳瞳　日の明なる貌。〔二〕當午　正午に同じ。〔三〕青青葵　葵は常に日に向つて傾くものである。

【詩意】春の旭日がヒカヒカと輝いて草木を照すよと思ふまに忽ち浮雲が蔽つてしまつた。天地も爲に暗くなり、當午でも日暮のやうだ。東南風が吹かぬではないが、力弱くて此雲を吹拂ふ由もない。されば園に青青と茂つた葵があつて日に心を寄せてはゐるが、日が雲に蔽はれてゐるから心を寄せる術もない。

秦中吟十首 并序　　秦中の吟十首 并に序

貞元元和之際。予在長安。聞見之間。有足悲者。因直歌其事。命爲秦中吟。

貞元元和の際、予長安に在り。聞見の間、悲しむに足るもの有り。因つて直に其事を歌ひ、命じて秦中の吟と爲す。

議婚　　議婚

天下無正聲。悅耳卽爲娛。　天下正聲無し、耳を悅ばしむれば卽ち娛と爲す。

人間無正色。悅目卽爲姝。　人間正色無し、目を悅ばしむれば卽ち姝と爲す。

顏色非相遠。貧富則有殊。　顏色相遠きに非ず、貧富則ち殊なる有り。

貧爲時所棄。富爲時所趨。　貧しきは時の棄つる所と爲り、富めるは時の趨く所と爲る。

紅樓富家女。金縷繡羅襦。　紅樓富家の女、金縷羅襦に繡す。

見人不斂手。嬌癡二八初。　人を見るも手を斂めず、嬌癡二八の初。

母兄未開口。已嫁不須臾。　母兄未だ口を開かざるに、已に嫁して須臾もせず。

(八)綠窗貧家女。寂寞二十餘。　綠窗貧家の女、寂寞として二十餘。
(九)荊釵不直錢。衣上無眞珠。　荊釵錢に直らず、衣上眞珠無し。
幾廻人欲聘。臨日又踟(一〇)躕。　幾廻か人聘せんと欲するも、日に臨みて又踟躕す。
(一一)主人會良媒。置酒滿玉壺。　主人良媒を會し、置酒玉壺に滿つ。
(一二)四座且勿飲。聽我歌兩(一三)途。　四座且く飮む勿れ、我が兩途を歌ふを聽け。
富家女易嫁。嫁早輕其夫。　富家の女は嫁し易く、嫁すること早うして其夫を輕んず。
貧家女難嫁。嫁晚孝於姑。　貧家の女は嫁し難く、嫁すること晩うして姑に孝なり。
聞君欲娶婦。娶婦意何如。　聞く君婦を娶らんと欲すと。婦を娶る意何如。

【字解】【一】貞元　德宗の年號。元和は憲宗の年號。【二】秦中吟　長安は昔秦の都であるから、かく題したのである。【三】議婚　韋穀の才調集には貧家女と題してある。【四】人間　世間なり。正色は定色といふが如く、これが美しいと一定した色。卷一の白牡丹の詩を見よ。【五】紅樓　朱塗の樓。【六】金縷　金色の絲。羅襦は薄絹の襦袢。【七】不斂手　刺繡する手をやめないこと。一説に傲慢の態と解するは非なり。【八】綠窗　綠色に塗った窗。【九】荊釵　いばらの花のかんざし。【一〇】踟躕　ためらふこと。【一一】主人　後に聞君欲娶婦とある、婦を娶らうとしてゐる人を指す。良媒は、よいなかうど。【一二】四座　一座、滿座に同じ、そこに列する賓客たちを指す。【一三】兩途　貧富二方面。

【題義】妻を娶るには如何なる家の女を娶るべきかを述べた。

【詩意】天下にはこれぞ正しい音樂と定つたものはない。耳を悅ばせば、それが其人に取つての正しい音樂だ。世間にはこれが美人だと定つた容色はない。目を悅ばせばそれが其人に取つての美人だ。今二人の女があるとする。其容色は格別の相違がなくとも、其家の貧富によつて愛憎の差別が生ずるので、貧家に生れると人から棄てられ、富家に生れるとちやほやされるのだ。富家の女は紅樓の上に住み金絲の刺繡などして暇をつぶしてゐる。人が來ても手を離さず嬌羞を含む。十六になつたばかりの花ならば蕾といふ時に、母や兄が心配せずとも忽ち話がまとまつて緣づいてしまふ。貧乏人の女は綠窗の下にそだつて二十を過ぎても定まつた夫もなく淋しく暮してゐる。荊の花を釵とし著物には眞珠の飾などはない。幾度か人が結納を贈つて嫁に貰はうとはするが、その當日になると二の足をふんで破談にする。今此家の主人は良媒たちを集めて盛宴を張り、婚を議せんとしてゐる。一座の方方よマア姑く飮むのを待ち給へ。今貧富兩道の歌を歌ふからお聽きなされ。富家の女は容易によめに行けるが、行くとすぐに其夫を輕んずる。貧家の女は緣遠いが其姑には孝行だ。さて御主人は妻を娶るさうなが、どちらの家から貰はうと思ひなさるか。

【餘論】源氏物語帚木の卷の有名な雨夜の品定の所にも、「或る博士の許に學問などし侍るとて罷り通ひし程に、主人の女ども多かりと聞きたまへて、はかなき序に言ひ寄りて侍りしを、親聞きつけて、杯もちいでて、我が二つの道謠ふを聞けとなん聞えごち侍りしかど、をさをさうちとけてもまから

す云云」と此詩を引いてある。

重賦（一）

厚地植桑麻。所要濟生民。　厚地に桑麻を植う。要する所は生民を濟はんとなり。

生民理布帛。所求活一身。　生民布帛を理む。求むる所は一身を活さんとなり。

身外充征賦（二）。上以奉君親。　身外征賦に充て、上以て君親に奉ず。

國家定兩稅（三）。本意在愛人。　國家兩稅を定む。本意人を愛するに在り。

厥初防其淫（四）。明敕內外（五）臣。　厥初は其淫を防ぎ、明に內外の臣に敕す。

稅外加一物。皆以枉法論。　稅外一物を加ふるをば、皆枉法を以て論ず。

奈何歲月久。貪吏得因循（六）。　奈何ぞ歲月久しく、貪吏因循するを得たる。

浚我以求寵。斂索無冬春（七）。　我を浚うて以て寵を求め、斂め索むること冬春無し。

織絹未成疋。繰絲未盈斤。　絹を織りて未だ疋を成さず、絲を繰つて未だ斤に盈たず。

里胥（八）迫我納。不許暫逡巡。　里胥我に迫つて納めしめ、暫くも逡巡するを許さず。

歲暮天地閉（九）。陰風生破村（一〇）。　歲暮れて天地閉ぢ、陰風破村に生ず。

夜深煙火盡。霰雪白紛紛。　夜深けて煙火盡き、霰雪白うして紛紛たり。

幼者形不蔽。老者體無溫。　幼者は形蔽はず、老者は體溫なる無し。

悲喘與寒氣。併入鼻中辛。　悲喘と寒氣と、併せて鼻中に入りて辛し。

昨日輸殘稅（一一）。因窺官庫門。　昨日殘稅を輸し、因つて官庫の門を窺ふ。

繒帛如山積。絲絮似雲屯。　繒帛山の如く積み、絲絮雲に似て屯る。

號爲羨餘物（一二）。隨月獻至尊（一三）。　號して羨餘の物と爲し、月に隨つて至尊に獻ず。

奪我身上暖。買爾眼前恩（一四）。　我が身上の暖を奪ひ、爾が眼前の恩を買ふ。

進入瓊林（一五）庫。歲久化爲塵。　瓊林の庫に進め入れ、歲久しうして化して塵と爲る。

【餘論】【一】重賦　才調集には無名稅と題してある。【二】征賦　稅なり。君親の親は附けたりである。【三】兩稅　夏と秋とに納むる稅法。德宗の建中元年に楊炎が宰相の時に定めた。【四】淫　すべて度に過ぎること。ここは一定の稅法以上に稅を取ること。【五】內外　中央政府の官吏を內といひ、地方官を外といふ。【六】因循　前からの惡例に倣ふこと。【七】無冬春　冬でも春でもかまはずに稅を取立てる。【八】里胥　村長。【九】天地閉　禮記月令篇に、「天地不通、閉塞而成冬」とあり。【一〇】破村　荒廢した村。【一一】殘稅　納め殘りの稅。【一二】羨餘物　つかひのこりの品。當時役人が天子に媚びる爲に、人民から不當な稅を取

り、羨餘と稱して獻上することが流行した。【一三】至尊 天子。【一四】爾 汝なり。官吏を指す。【一五】瓊林庫 德宗皇帝が奉天の行在所にゐた時に建てた庫の名。

【題義】重稅の弊害を述べた。

【詩意】我我人民が大地に桑や麻を植ゑるのは人人を濟はんがためだ。人人が布や帛を織るのは吾が身を養ふ爲だ。一身を養ふ必要以外の分は稅として君に奉るのである。我が國家が兩稅の法を定めたのは、人民を愛するからである。故に其初に不當の稅を取らないやうに、內外の役人に敕を下して規定以外に一物でも取つたならば、法規を破つた者として處罰すると戒めてある。然るに貪吏どもは長い間の惡例に倣ひ、いやが上にも我我から搾り取つては君に獻じて君寵を求め、冬でも春でもお構なしに取立てる。絹を織つて未だ一疋とまとまらず、絲を繰つて未だ一斤にならないのに、村長がうるさく納稅を催促し一刻も猶豫しない。冬になつて北風が吹荒び、夜が深けて火の氣もなく、雪や霰がパラパラ降るのに、老幼ともに著物もなく、悲歎と寒氣とが一時に鼻の中に飛込んで來る。昨日納め殘りの稅を納める爲に役所へ行つて御庫の門をのぞいて見た所が、繒や絮が山のやうに積んであつた。これは貪吏どもが羨餘だと稱して月月至尊に獻上し、我我の身から剝取つて自分達の君寵を買うたもので、つまりは御庫の中で朽ち果ててしまふのである。

傷宅(一)

誰家起甲(二)第。朱(三)門大道邊。
豐(四)屋中櫛比。高墻外廻環。
纍(五)纍六七堂。棟宇相連延。
一堂費百萬。鬱鬱起青煙。
洞(六)房溫且清。寒暑不能干。
高堂虛且迴。坐臥見南(七)山。
繞廊紫藤架。夾砌紅(八)藥欄。
攀枝摘櫻(九)桃。帶(一〇)花移牡丹。
主人此中坐。十(一一)載爲大官。
廚有臭敗肉。庫有貫(一二)朽錢。
誰能將我語。問爾(一三)骨肉間。
豈無窮賤者。忍不救飢寒。

傷宅

誰が家か甲第を起す、朱門大道の邊。
豐屋中に櫛比し、高墻外に廻環す。
纍纍たり六七堂、棟宇相連延す。
一堂費百萬、鬱鬱として青煙起る。
洞房溫かにして且つ淸し、寒暑干す能はず。
高堂虛しうして且つ迴なり、坐臥南山を見る。
廊を繞る紫藤の架、砌を夾む紅藥の欄。
枝を攀ぢて櫻桃を摘み、花を帶びて牡丹を移す。
主人此中に坐し、十載大官と爲る。
廚に臭敗の肉有り、庫に貫朽の錢有り。
誰か能く我語を將つて、問はん爾が骨肉の間、
豈窮賤の者の、忍んで飢寒を救はざる無からんや。

如何奉一身。直欲保千年。　如何ぞ一身に奉じ、直に千年を保たんと欲する。

不見馬(一四)家宅。今作奉(一五)誠園。　見ずや馬家の宅、今奉誠園と作るを。

【餘論】【一】傷宅　才調集に傷大宅と題してある。【二】甲第　大邸宅。【三】朱門　朱塗の門。【四】豐屋　大きな家。【五】累累　かさなる貌。【六】洞房　奥深き部屋。【七】南山　終南山。長安の南にあり。【八】紅藥欄　紅の芍藥の花壇の欄。砌は石疊。【九】櫻桃　さくらんぼの實。【一〇】帶花　花のついたまま。【一一】十載　十年。【一二】貫朽錢　緡のまま錆びついた錢。【一三】爾　主人を指す。【一四】馬家　馬燧及び其子暢の家。【一五】奉誠園　德宗の時、馬暢の獻じた邸宅を園とし奉誠園と名づけた。長安の安邑里に在つた。

【題義】大邸宅を營んでも永く保たれないことを傷み悲んだのである。

【詩意】誰の家だか知らないが立派な大邸宅がある。大道に面して朱塗の門が建てられ、中には大きな棟が立ちならび、その周圍を高い牆がめぐらしてゐる。堂宇一つでも恐らく百萬の金が掛つてゐるであらう。それが幾つとなく雲のやうに聳えてゐる。さて奥深い部屋は冬溫く夏涼しく出來てゐて、暑さも寒さも侵す能はず。高く見晴らしがよく出來てゐて、坐つたままで終南山が見える。長廊のまはりには藤棚があり、階段の兩側には芍藥の花壇がある。枝を引つぱれば櫻桃を摘むことも出來るし、花のついたまま牡丹を移植ゑなどしてある。此家の主人は十年間大官をつとめてゐるので、厨には喰ひ殘りの肉が腐るほどあり、庫には緡のまま銹びついた錢が積み重ねてある。さて誰か私の言葉（以下述ぶる所）を以て此家の主人に問ひ質してくれる人はあるまいか。「君の親族の中に貧窮に泣いてゐる者があるのに、君は平氣で救ひもせずに高見の見物をしてゐはしないか。君は自分一人豪奢を極めて、永久に續けて行けると思つてゐるのか。かの一時榮華を極めた馬氏の邸宅も、今では朝廷の所有に歸して、奉誠園となつてゐるではないか」と。

傷友(一)

陋巷孤寒士。出門苦恓恓(二)。　陋巷孤寒の士、門を出でて苦だ恓恓。

雖云志氣高。豈免顏色低。　志氣高しと云ふと雖も、豈顏色の低きを免れんや。

平生同門友。通籍在金閨(三)。　平生同門の友、籍を通じて金閨に在り。

曩者膠漆(四)契。邐(五)來雲雨睽。　曩者には膠漆の契あり、邐來雲雨睽く。

正逢下朝歸。軒(六)騎五門西。　正に朝を下りて歸るに逢ふ。軒騎五門の西。

是時天久陰。三日雨淒淒。　是時天久しく陰り、三日雨淒淒。

(七)蹇驢避路立。肥馬當風嘶。　蹇驢路を避けて立ち、肥馬風に當つて嘶く。

廻頭忘相識。占道上沙堤。(八)　頭を廻らして相識を忘れ、道を占めて沙堤に上る。
昔年洛陽社。(九)貧賤相提攜。　昔年洛陽の社、貧賤相提攜す。
今日長安道。對面隔雲泥。　今日長安の道、面を對して雲泥を隔つ。
近日多如此。非君(一〇)獨慘悽。　近日多くは此の如し、君が獨り慘悽なるのみに非ず。
死生不變者。唯聞任與(一一)黎。　死生變せざる者は、唯聞く任と黎とのみ。

【餘論】【一】傷友　一に「傷苦節士」と題し、才調集には膠漆契と題してある。【二】愴惱　煩ひ惱む貌。【三】金閨　金馬門。漢の宮門の名。籍は名札。籍に姓名や人相などが書いてある。それを宮門に懸けておいて、自由に出入を許すことを通籍といふ、即ち仕官すること。【四】膠漆契　親密なる交。【五】通來　通は近なり。ちかごろ。【六】軒騎　車馬。五門は宮殿の門。路門・應門・皐門・雉門・庫門をいふ。【七】蹇驢　びつこな驢馬。【八】沙堤　國史補に「凡拜相、府縣載沙塡路、自私第至於城東街、名曰沙堤」とあり。大臣の通路をいふ。【九】洛陽社　社とは交友の團體。【10】君　孤寒の士を指す。【11】任與黎　白樂天の自註に「任公叔、黎逢」とある。黎逢は大曆十二年の進士である。

【題義】貧賤の時には親しく交つた友が、一旦立身してえらくなると、振り向いても見なくなる、交情の輕薄なことを傷んだのである。

【詩意】陋巷の中に一人の貧士が住んでゐる。門を出ても浮かぬ顏をしてゐる。氣位だけは高いが一向男前は揚らない。其友が官に就いて金馬門に出入するやうになつた所が、舊には膠や漆のやうに親密であつたのが、近來は雲や雨のやうに分れ分れになつてしまつた。或る日其友が朝廷から退出するので御門の西を馬車で通るのに出逢つた。其時は天が久しく曇つて三日も雨が降りつづいた時であつた。こちらでは蹇の驢馬を脇に寄せて道を讓つたが、其友は肥馬を春風に嘶かせ、わざと顏を背けて昔の誼合を忘れたかの如く、沙を敷きつめた道を我物顏に上つて往つた。昔は洛陽にゐて友垣を結び貧賤の間に助け合つた仲だが、今日長安の道では、たとひ顏は合せても月と鼈ほど身分が違ふやうになつたので振向いても見なくなつてしまつた。併し近頃の交際といふものは大抵此類で、君だけがみじめを見るのではない。死生の變に際會しても昔の友情を變へないのは、任公叔と黎逢ぐらゐのものだ。

不致仕(一)　　不致仕

七十而致仕。禮法(二)有明文。　七十にして致仕するは、禮法に明文有り。
何乃貪榮者。斯(三)言如不聞。　何ぞ乃ち榮を貪る者、斯言聞かざるが如くする。
可憐八九十。齒墮雙眸昏。　憐む可し八九十、齒墮ちて雙眸昏し。
朝(四)露貪名利。夕(五)陽憂子孫。　朝露名利を貪り、夕陽子孫を憂ふ。

掛冠顧翠緌。懸車惜朱輪。　冠を掛けんとして翠緌を顧み、車を懸けんとして朱輪を惜む。
金章腰不勝。傴僂入君門。　金章腰勝へず、傴僂して君門に入る。
誰不愛富貴。誰不戀君恩。　誰か富貴を愛せざらん、誰か君恩を戀はざらん。
年高須告老。名遂合退身。　年高うして須く老を告ぐべし、名遂げて合に身を退くべし。
少時共嗤誚。晩歲多因循。　少き時は共に嗤誚すれども、晩歲多くは因循す。
賢哉漢二疏。彼獨是何人。　賢なるかな漢の二疏、彼獨り是れ何人ぞ。
寂寞東門路。無人繼去塵。　寂寞たる東門の路、人の去塵を繼ぐ無し。

【詩意】【一】不致仕　才調集に合致仕と題してある。致仕とは官を辭し退くこと。【二】禮法　禮記曲禮上篇に「大夫七十而致事」とあり。註に「致其所掌之事於君、而告老」とあり。【三】斯言　禮記の明文。【四】朝露　人生の果敢なきこと。【五】夕陽　老年をいふ。【六】掛冠　辭職すること。翠緌は冠の紐。【七】懸車　車を懸けて復用ひざること。辭職するをいふ。朱輪は朱塗の車。【八】金章　金印。【九】傴僂　背をかがめること。老態なり。【一〇】告老　引退すること。【一一】因循　ぐづぐづしてすわること。【一二】二疏　疏廣・疏受の二人、漢の宣帝の時太子の傅となつたが、年七十になつたので官を辭して故郷に歸つた。其時洛陽の東門外に見送る人の車が數百乘あつたといふ。

【題義】老年になつても官職に戀戀として勇退しない者を刺つたのである。

【詩意】七十になれば官を辭するといふことは禮記に明文があるのに、榮華を貪る者は禮記の明文などは聞いたこともないやうな風をしてゐる。八九十になつて齒は墮ち目は見えなくとも朝露の如き身を忘れて名利を貪り、明日をも知らぬ年で子孫のことを心配してゐる。たまには引退しようと思つても又未練が出て、金印の重さに勝へずに腰をかがめて御門をはひつて行く。誰とて富貴を愛し君恩を希はない者はないが、年老い名遂ぐれば勇退するのが當然である。若い時には勇退せぬ人を誚つた身が、自分が年老いると矢張いつまでも居据らうとする。かの漢の疏廣・疏受の二人は見上げたものだ。あれから後には東門外の路もひつそりとして、其跡を繼ぐ者は一人もない。

【餘論】汪立名は、「八朝偶雋を按ずるに、元和の初、杜佑司徒となり、年七十を過ぐるも猶ほ未だ老を請はず。裴晉公時に知制誥たり。高郢の致仕するに因りて詞を令して曰く、年を以て致仕するは、抑〻前聞あり。近代廉寡く斯道に由ること罕なりと。蓋し佑を譏るなり。公（白樂天）の此詩の指す所當に裴と同じかるべし。盛に當時に傳誦せらる。厥後杜牧之毎に公に於て不足の語多し。之を詩篇に形し、李戡の言に託し口を極めて詆誚す。文章家の報復畏るべきこと此の如し。宋祁察せず、據りて以て公を論するは過れり。牧之は佑の孫なり」と謂つてゐる。又唐宋詩醇には「朝露貪名利」の二句、之を淵明集中に入るるも、幾んど以て辨するなし。或は樂天を淺易なりと謂ふも、豈に其れ然らんや」と評してゐる。

立碑(一)

立碑

勛(二)德既下衰。文章亦陵夷(三)。　勛德既に下り衰へ、文章亦陵夷す。

但見山中石。立作路旁碑。　但見る山中の石、立てられて路旁の碑と作る。

銘勳悉太公(四)。敍德皆仲尼(五)。　勳を銘すれば悉く太公、德を敍すれば皆仲尼。

復以多爲貴。千言直萬貫(六)。　復た多きを以て貴しと爲す、千言直萬貫。

爲文彼何人。想見下筆時。　文を爲る彼何人ぞ、想ひ見る筆を下す時、

但欲愚者悅。不思賢者嗤。　但愚者の悅ばんことを欲し、賢者の嗤ふことを思はす。

豈獨賢者嗤。仍傳後代疑。　豈獨り賢者の嗤ふのみならんや、仍後代の疑を傳ふ。

古石蒼苔字。安知是愧詞(七)。　古石蒼苔の字、安んぞ是れ愧詞を知らん。

我聞望江縣(八)。麴令(九)撫惸嫠。　我聞く望江縣、麴令惸嫠を撫すと。

在官有仁政。名不聞京師。　官に在りて仁政有れども、名は京師に聞えず。

身歿欲歸葬。百姓遮路岐(一〇)。　身歿して歸葬せんと欲す、百姓路岐に遮り、

攀轅不得歸。留葬此江湄(一一)。　轅を攀ぢて歸るを得ず、留めて此江湄に葬る。

至今道其名。男女涕皆垂。　今に至るまで其名を道へば、男女涕皆垂る。

無人立碑碣。唯有邑人知。　人の碑碣を立つる無し、唯邑人の知る有るのみ。

【字解】【一】立碑　才調集には古碑と題してある。【二】勛德　勛は勳の古字。【三】陵夷　次第に衰へること。【四】太公　周の武王を輔けた太公望。【五】仲尼　孔子の字。【六】萬貫　貫は財なり。萬金といふが如し。【七】愧詞　愧づべき詞。【八】望江縣　安徽省安慶府望江縣治。【九】麴令　令は縣令。麴は其姓、名は信陵。惸嫠とは孤獨者并に寡婦。【一〇】路岐　分れ路。【一一】江湄　江のほとり。

【題義】世に寸功なき者が妄に碑を建てて後世に傳へようとする愚を嗤つた作である。

【詩意】近頃は人の勳功や德行が大分下落して來て、勳德を記述する文章も値打が下つて來た。所で山の中の石が石碑としてどんどん路傍に立てられる。石碑にどんな事が刻んであるかと見れば、勳功を記すれば誰も彼も太公望ででもあるやうに、德行を記すれば猫も杓子も孔子のやうにほめちぎつてある。又文句の長いのを貴んで千字の文章に萬金も禮を拂つて書いてもらふ。碑文の作者はどんな人かといふと、察するに筆を下す時は唯愚人の悅ぶやうに書かうとばかり考へて、賢者に嗤はれることは少しも考へないらしい。だから賢者の笑草になり、又針小棒大に書いて後世に疑を遺すことになる。されば古びた石に苔の蒸してゐる碑文は、實は碑の主人に取つては愧づべき文字であると謂つてよいのだ。聞けば望江縣には麴信陵といふ縣令があつて、寄邊なき人を憐み仁政が多かつたが、其名

が都までは聞えなかつた。其人が死んで鄕里に歸葬しようとした所が、百姓が路を遮り轅にすがつて之を引きとめたので、遂にこの江の邊に葬つた。今日になつても其人の名を言へば男も女も涙を流して其德を慕つてゐるさうだ。この人などは一片の碑をも立てないが、縣民の心に永く傳つてゐる。

【餘論】汪立名曰く、「按ずるに麴信陵は貞元元年鮑防の榜下に及第し、六年を以て望江令となる。其の石を投じ江に祀り雨を祈る文に云く、必ずや私欲の求邑里に行はれ、慘黷の政黎元に施さば、令長の罪なり。神得て之を誅せん。豈人に移して以て其歲を害すべけんやと。其の政を爲す、蓋し想見るべし」と。

(一)輕肥

意氣驕滿路。鞍馬光照塵。
借問何爲者。人稱是(二)內臣。
(三)朱紱皆大夫。紫綬或將軍。
誇赴軍中宴。走馬去(四)如雲。
(五)罇罍溢九醞。水陸羅(六)八珍。
果擘(七)洞庭橘。膾切(八)天池鱗。
食飽心(九)自若。酒酣氣益振。
是歲江南旱。(一〇)衢州人食人。

輕肥

意氣驕りて路に滿つ、鞍馬光塵を照らす。
借問す何爲る者ぞ、人は稱す是れ內臣と。
朱紱は皆大夫、紫綬は或は將軍。
誇りて軍中の宴に赴き、馬を走らして去ること雲の如し。
罇罍九醞溢れ、水陸八珍を羅ぬ。
果は洞庭の橘を擘き、膾は天池の鱗を切る。
食飽きて心自若たり、酒酣にして氣益〻振ふ。
是歲江南旱し、衢州人人を食ふ。

【字解】【一】輕肥　輕裘肥馬の意。才調集には江南旱と題してある。【二】內臣　宦官。天子の奧向きに仕ふる臣。當時は宦官が勢力を占めて將相皆宦官から經登つた者が多かつた。【三】朱紱　紱は綬なり、印の紐。【四】如雲　多いこと。【五】罇罍　酒樽。九醞は上等の酒。【六】八珍　八種の珍味。周禮天官膳夫註に詳なり。【七】洞庭橘　洞庭は湖南省の洞庭湖の中にある山。柑橘類の名產地。【八】天池　海なり。莊子逍遙遊篇に「南冥者天池也」とあり。【九】自若　平氣で動かないこと。【一〇】衢州　今の浙江省衢縣。

【題義】朝臣の豪奢を難じ江南の旱飢を憐んだ作である。

【詩意】意氣揚揚として四邊を拂ひ、駿馬に鞭つて橫行する者がある。一體何者ぞと聞いて見ると、これは天子の側近に仕ふる內臣なさうだ。大夫とか將軍とかいふ身分で、皆赤や紫の印綬をおびてゐる。得意になつて軍中の宴會に往くこと雲の如くである。さて宴席には美酒佳肴が滿ち溢れて、洞庭の蜜柑だの大海の魚だのといふものまであるが、見慣れ食慣れてゐるから、如何なるものが出ても平氣で驚きもせず、酒酣になると元氣が益〻振つて來る。內臣はかかる豪奢を極めてゐるが、打つてかはつて江南地方は旱魃が續いて、衢州などでは人が人を食つて飢を凌いでゐる有樣だ。

【餘論】是歲以下二句忽ち局面を一轉して結んだのは、特に味が深い。唐宋詩醇に「結句斗絕、一落千丈の勢あり」とあるは此點を謂つたのである。

五絃（一）

清歌且罷唱。紅袂亦停舞。
趙（二）叟抱五絃。宛（三）轉當胸撫。
大聲麤若散。颯颯風和雨。
小聲細欲絕。切（四）切鬼神語。
又如鵲（五）報喜。轉（六）作猿啼苦。
十指無（七）定音。顚倒宮（八）徵羽。
坐客聞此聲。形（九）神若無主。
行客聞此聲。駐足不能擧。
嗟嗟俗人耳。好今不好古。
所以綠（一〇）窓琴。日日生塵土。

五絃

清歌且つ唱ふるを罷めよ、紅袂亦舞ふを停めよ。
趙叟五絃を抱き、宛轉として胸に當てて撫す。
大聲は麤にして散ずるが若く、颯颯たり風と雨と。
小聲は細くして絕えなんと欲し、切切として鬼神語る。
又鵲の喜を報ずるが如く、轉猿啼の苦きを作す。
十指定音無く、宮徵羽を顚倒す。
坐客此聲を聞けば、形神主無きが若し。
行客此聲を聞けば、足を駐めて擧ぐる能はず。
嗟嗟俗人の耳、今を好んで古を好まず。
所以に綠窓の琴、日日塵土を生ず。

【字解】【一】五絃　才調集には五絃琴と題してある。【二】趙叟　新樂府五絃彈の中に見える趙璧であらう。【三】宛轉　器用に手を動かす貌。【四】切切　聲の急なる貌。【五】鵲報喜　鵲が鳴き噪げば佳客が來るか喜事があるといはれてゐる。禽經註に「鵲噪則喜生」とあり。【六】轉　うつつて。轉じて。【七】無定音　音調が樣樣にかはること。【八】宮徵羽　皆音調の名。【九】形神　肉體と精神。【一〇】綠窓琴　綠窓は綠に塗つた窓、おもに貧家の窓をいふ。前の議婚に見ゆ。才調集には綠を北に作る。陶淵明は夏日北窓の下で無絃琴を彈じた。

【題義】この詩は世人が妄に新奇を好んで古樂の廢れ行くのを惜んだのである。

【詩意】今のはやりの清歌や縵舞をやめて、趙叟が五絃琴を抱いて胸のあたりに器用に手を動かすのを聽かれよ。高い聲は雨風の吹荒るるが如く、低い聲は鬼神のさざめきのやうである。又鵲の喜を告げて噪ぐが如く、猿の悲しげに啼くやうである。樣樣の調子が十本の指の差引によつてかはるがはる出る。坐つてゐる者が此聲を聞けば心ももぬけの殼になり路行く人が聞けば足の運びも忘れてしまふ。こんな結構な古樂があるのに、今の人は新しいものばかり好んで古樂を好まない。だから五絃琴などは貧家の窓の下に退けられて、日日塵埃が積るばかりだ。

歌舞（一）

歌舞

(二)秦城歲云暮。大雪滿(三)皇州。　秦城歲云に暮る、大雪皇州に滿つ。
雪中退朝者。(四)朱紫盡公侯。　雪中朝より退く者、朱紫 盡く公侯。
貴有風雪興。富無飢寒憂。　貴は風雪の興有り、富は飢寒の憂無し。
所營唯第宅。所務在追遊。　營む所は唯第宅、務むる所は追遊に在り。
(五)朱門車馬客。紅燭歌舞樓。　朱門車馬の客、紅燭歌舞の樓。
歡酣促密坐。醉暖脫重裘。　歡酣にして密坐を促し、醉暖にして重裘を脫す。
(六)秋官爲主人。(七)廷尉居上頭。　秋官主人爲り、廷尉上頭に居る。
日中爲樂飮。夜半不能休。　日中より樂飮を爲し、夜半まで休む能はず。
豈知(八)閿鄕獄。中有凍死囚。　豈知らんや閿鄕の獄、中に凍死の囚有るを。

【字解】【一】歌舞　才調集には、傷閿鄕獄囚と題してある。【二】秦城　長安をいふ。昔の秦の地だからである。【三】皇州　帝都。【四】朱紫　赤や紫の印綬。銀印は朱綬、金印は紫綬。【五】朱門　朱塗の門。富豪の家。【六】秋官　司法官。【七】廷尉　訟獄を掌る官。即ち秋官なり。上頭は上席。【八】閿鄕　地名。河南省陝州。

【題義】人みな歌舞遊宴に耽つて風規を維持すべき官吏までが佚樂を事としてゐることを歎いたのである。

【詩意】長安の都には歲の暮に大雪が降つた。その雪の中を朝廷から退て來る者を見れば、朱紫の印綬を佩びた公侯である。富貴の人には風雪の興味はあるが、飢寒の憂などはない。だから競つて立派な邸宅を營んで人を招いたり招かれたりして樂んでゐる。今や車馬の客が集つて紅燭を燃して歌舞に興じてゐる。歡酣になると互に膝を進めて語り合ひ、醉つて暖になると裘まで脫いで騷いでゐる。宴會の主人公は司法官で、賓客の筆頭は獄官である。日中から夜半まで休みもせずに樂飮してゐる。世の風規を取締るべき身分の人までこんな爲體だ。閿鄕の牢屋に凍死する囚人のあることなどは全く眼中に置かない。

(一)買花

買花

帝城春欲暮。喧喧車馬度。　帝城春暮れんと欲し、喧喧として車馬度る。
共道牡丹時。相隨買花去。　共に道ふ牡丹の時と、相隨つて花を買ひ去る。
貴賤無常價。(三)酬直看花數。　貴賤常價無く、酬直花數を看る。
灼灼百朶紅。(四)戔戔五束素。　灼灼たり百朶の紅、戔戔たり五束の素。

上張幄幕庇。旁織笆(五)籬護。　上は幄幕を張つて庇ひ、旁は笆籬を織つて護る。

水洒(六)復泥封。移來色如故。　水洒復泥封、移し來りて色故の如し。

家家習爲俗。人人迷不悟。　家家習うて俗を爲し、人人迷うて悟らず。

有一田舍翁。偶來買花處。　一田舍翁有り、偶花を買ふ處に來る。

低頭獨長歎。此歎無人諭。　頭を低れて獨長歎す、此歎人の諭る無し。

一叢深(七)色花。十戶中(八)人賦。　一叢深色の花、十戶中人の賦。

【字解】【一】買花　才調集には牡丹と題してある。【二】帝城　長安の都。【三】酬直　報酬として拂ふ價。【四】戔戔　易經の賁卦に「束帛戔戔。」淺小の意。又剪裁分裂の狀。五束素とは一處に五個の白花が聚り咲いてゐることをいふ。【五】笆籬　竹垣。【六】水洒　水をそそぎかけること。泥封は土を根にもりあげること。【七】深色　色の濃いこと。【八】中人　中流の財產家。賦は稅金。

【題義】當時の人が牡丹を愛して値を構はず買つて賞翫することを刺つた詩である。唐代に牡丹を珍重したことは容齋隨筆卷二に詳く述べてある。

【詩意】長安の都には春の末になると車馬が喧しく往來する。何事が起つたのかと思へば、今が牡丹の時節だと言つて、續續と花を買ひにでかけるのである。花の貴い賤いは一定してゐない。ただ花の數の多少に由つてちがひを生ずるのである。一株に百本も枝がさして其れに紅の花が咲いてゐるのもあれば、一枝に五個の花が束ねたやうに咲いてゐるのもある。之を買つて來て上には幕を張つて日除にし、側には竹垣を結んで保護し、水をかけたり土を盛つたりして銘銘の家の庭に移し植ゑるが、故の通り美しさがかはらない。こんな事が世間の習になつて誰でも怪む者がない。ある田舍翁が偶然花を買ふ處を見て、頭を垂れて歎息してゐる。其歎息する意味などは誰あつて悟る者もない。一叢の色の濃い牡丹の花の價は中產階級の十戶分の稅金に相當する。其金をむざむざ花の爲に棄てるのは惜むべきことだといふのが歎息する意味だ。

贈友五首　幷序

友に贈る五首　幷に序

吾友有王佐之才者。以致君濟人爲己任。識者深許之。因贈是詩。以廣其志云。

吾友王佐の才有る者、君を致し人を濟ふを以て己が任と爲す。識る者深く之を許す。因つて是詩を贈り、以て其志を廣むと云ふ。

一年十二月。每月有常令(一)。　一年十二月、每月常令有り。

君出臣奉行。謂之握金鏡。(二)　君出して臣奉行す、之を金鏡を握ると謂ふ。
由茲六氣順。(三)以遂萬物性。　茲に由つて六氣順ひ、以て萬物の性を遂ぐ。
時令一反常。生靈(四)受其病。　時令一たび常に反かば、生靈其病を受く。
周漢德下衰。王風始不競。　周漢德下り衰へ、王風始めて競はず。
又從斬晁錯。(五)諸侯益强盛。　又晁錯を斬つてより、諸侯益强盛。
百里不同禁。四時自爲政。　百里禁を同じうせず、四時自ら政を爲す。
盛夏興土功。(六)方春剿人命。　盛夏に土功を興し、春に方つて人命を剿つ。
誰能救其失。待君佐邦柄。(七)　誰か能く其失を救はん。君を待つて邦柄を佐けしめ、
(八)巍巍象魏門。懸法彝(九)倫正。　巍巍たる象魏門、法を懸けて彝倫正しからん。

【字解】【一】常令　一定の政令。禮記に月令篇あり。十二個月の政令を記する所以なり。【二】金鏡　明道に喩ふ。文選劉孝標の廣絶交論に、聖人握金鏡闡風烈とあり。【三】六氣　陰陽風雨晦明なり。【四】生靈　生民をいふ。晉書に生靈仰其德、四海歸其仁とあり。【五】晁錯　吳楚七國の亂起るや、晁錯に責を負はせて之を斬る。【六】土功　土木事業。【七】邦柄　國家の政權。【八】巍巍　高き貌。象魏は闕門なり。法を懸くるを以て之を象といひ、巍然として高大なるを狀して之を魏といふ。【九】彝倫　人倫道德。

【題義】友人に贈り出でて治績を擧げんことを請うた詩である。

【詩意】一年十二個月には毎月一定の政令がある。君主は其令を出し臣僚は之を遵奉し、以て國を治め民を導くをば金鏡を握るといふのである。この政令に由れば六氣よく調ひ萬物皆其性を遂げることが出來るが、若し之に反すれば生民忽ち其害を蒙るに至る。周漢の衰ふるや王威地に墜ち、漢は晁錯を斬つてより以來諸侯益〻强恣になり、州縣敎禁を同うせず四時政令を正うせずといふ有様になり、土功は秋に於てすべきを盛夏に於てし、刑殺は秋に於てすべきを陽春に於てするといふ不始末を敢てしてゐる。今の世に此弊を正す者は誰であらうか。願くは君を煩して此事に當らしめたいものだ。高大なる闕門に法禁を掲示し、民をして政令を明にせしめば、ここに始めて彝倫正しといふことになるであらう。

〔二〕

銀生楚山曲。金生鄱(一)溪濱。　銀は楚山の曲に生じ、金は鄱溪の濱に生ず。
(二)南人棄農業。求之多苦辛。　南人農業を棄て、之を求むるに苦辛多し。
披砂復鑿石。(三)矻矻無冬春。　砂を披き復石を鑿ち、矻矻として冬春無し。
手足盡皴(四)胝。愛利不愛身。　手足盡く皴胝、利を愛して身を愛せず。

(五)畬田既慵斫。稻田亦懶耘。　畬田既に斫るに慵く、稻田亦耘るに懶し。
相攜作游(六)手。皆道求金銀。　相攜へて游手と作り、皆金銀を求むと道ふ。
畢竟金與銀。何殊泥與塵。　畢竟金と銀と、何ぞ泥と塵とに殊ならん。
且非衣食物。不濟飢寒人。　且つ衣食の物に非ず、飢寒の人を濟はず。
棄本以趨末。日富而歲貧。　本を棄てて以て末に趨り、日に富んで而も歲に貧し。
所以先聖王。棄藏不爲珍。　所以に先聖王、棄藏して珍と爲さず。
誰能反古風。待君秉國鈞(七)。　誰か能く古風を反さん。君を待ちて國鈞を秉らしめ。
捐金復抵璧。勿使勞生民。　金を捐て復璧を抵げ、生民を勞せしむる勿れ。

【字解】【一】鄱溪　地名。江西省に屬す。【三】南人　南方の人。楚山も鄱溪も皆支那の南方に在る。【三】矻矻　努力する貌。【四】皴胝　ひび、あかぎれ。【五】畬田　開墾して三年を經た田地。【六】游手　遊惰の民。【七】國鈞　國政なり。

【詩意】楚山には銀を產し鄱溪には金を產するので、南方の人は農業を廢棄して皆金銀を發見する爲に苦辛してゐる。砂を披き石を鑿ちなどして冬でも春でも差別なしに苦勞してゐるので、手足も皴胝で裂けてしまふが、利の爲には一身の傷害などは念としない。田を耕すことも耘ることも打棄てて遊惰を事とし、ただ金銀を發見するのだと狂奔してゐる。一體金銀などといふものは泥土と同じで衣食のたしにはならないから、飢ゑ寒えてゐる人を濟ふことは出來ないものだ。然るに本を棄てて末に趨り、本業を廢して金銀を貪つてゐる。こんな事をしてゐると一時の富は得られようが永久の損失を招くことになる。故に古の聖王は之を棄て藏めて珍重しなかつた。今の世に於て誰か能く古の美風を挽回するであらう。願くは君を煩して政局に當らしめ、金銀を捐棄して民をして之が爲に狂奔せしめないやうにしたいものだ。

〔三〕

私家無錢(一)鑪。平地無銅山。　私家に錢鑪無く、平地に銅山無し。
胡爲秋夏稅。歲歲輸銅錢。　胡爲れぞ秋夏の稅、歲歲銅錢を輸さしむる。
錢力日已重。農力日已殫。　錢力日に已に重く、農力日に已に殫く。
賤糴(二)粟與麥。賤貿絲與綿。　賤く粟と麥とを糴し、賤く絲と綿とを貿る。
歲暮衣食盡。焉得無飢寒。　歲暮れて衣食盡く、焉ぞ飢寒無きを得んや。
吾聞國之初。有制(三)垂不刊。　吾聞く國の初、制垂れて刊せざる有り。
(四)傭必算丁口。租必計桑田。　傭は必ず丁口を算し、租は必ず桑田を計る。

不求土所無。不强人所難。　土の無き所を求めず、人の難しとする所を强ひず。
量入以爲出。上足下亦安。　入るを量りて以て出づるを爲し、上足りて下も亦安し。
兵興一變法。兵息遂不還。　兵興りて一たび法を變じ、兵息むも遂に還らず。
使我農桑人。（五）顚頓畎畝間。　我が農桑の人をして、畎畝の間に顚頓せしむ。
誰能革此弊。待君秉利權。　誰か能く此弊を革めん。君を待つて利權を秉らしめ、
復彼租傭法。令如（六）貞觀年。　彼の租傭の法を復し、貞觀の年の如くならしめん。

【字解】【一】錢爐　錢を鑄る爐。【二】糶　穀物を賣出すこと。【三】制　制度法令。不刊とは磨滅すべからざるをいふ。【四】傭　庸に同じ。租庸調は唐代の收稅法で、租は田地に課する稅。庸は正丁一人を一年に日數を定めて公役に當らしめること。調は其土に產する絹布などを官に納めしめること。【五】顚頓　瘁せ衰へる。畎畝は田圃なり。【六】貞觀　太宗の年號。

【詩意】民家には錢を鑄る爐もなく、平地には銅を產する山もない。農民には錢は乏しいのである。然るに何故あつて夏秋の稅に銅錢を納めしめるのであらうか、租稅に銅錢を納めさせるから、隨つて銅錢の位が貴くなり、農民は米麥や絲綿を賤く賣つて錢を得なければならなくなり、年の暮になつても衣食がなくて飢寒に泣かなければならない。聞けば吾が唐の初に千古不磨の法制を垂れ、庸は必ず丁數を算へ、租は必ず桑田を計つて徵收し、土地に產せざるものは求めず、人の苦む所を强ひず、收入を量つて支出を定めたから、國用足りて上も下も安泰であつたといふ。一たび兵亂が起つて時宜に應する爲に法制を變更したが、亂が鎭まつても舊制に復することをしない。その結果として農民が疲弊することになつてしまつた。今の世に誰が此弊を革めるであらう。願くは君を煩して利權を掌らしめ國初の舊制に復せしめたいものである。

〔四〕

京師四方則。王化之本根。　京師は四方の則、王化の本根なり。
（一）長吏久於政。然後風敎敦。　長吏は政に久しうして、然る後風敎敦し。
如何（二）尹京者。（三）遷次不逡巡。　如何ぞ京に尹たる人、遷次して逡巡せざる。
請君屈指數。十年十五人。　請ふ君指を屈して數へよ、十年に十五人。
（四）科條日相矯。吏力亦已勤。　科條日に相矯め、吏力亦已に勤む。
寬猛政不一。民心安得淳。　寬猛政一ならず、民心安んぞ淳きを得ん。
（五）九州雍爲首。（六）羣牧之所遵。　九州は雍を首と爲す、羣牧の遵ふ所。
天下率如此。何以安吾民。　天下率此の如し。何を以てか吾民を安んせん。

誰能變此法。待君贊絲綸(七)。　誰か能く此法を變せん。君を待つて絲綸を贊けしめ、
愼擇循良吏。令其長(八)子孫。　愼んで循良の吏を擇び、其をして子孫を長せしめん。

【字解】【一】長吏　長官。【二】尹京者　帝都の長官たる者。【三】遷次　轉任すること。逡巡は留滯すること。【四】科條　規則。【五】九州　夏禹の時天下を九州に分つ。兗冀青徐豫荊揚雍梁是れなり。唐都長安は雍州に在り。【六】羣牧　各州の長官。【七】絲綸　天子の詔。【八】長子孫　漢の文帝景帝五六十年の間は家給し人足り、國家無事で、漢書に爲吏者長子孫、居官者以爲姓號。故有倉氏・庫氏云云とある。

【詩意】帝都は天下四方の則る所の標準で王化の根本である。又長吏たる者は永く其地位に居りてこそ、治績を擧げ風敎を敦うすることが出來るのである。然るに京師の長官たる者が轉轉として遷徙して永く其地位に留らないのは何故であらうか。君試に指を折つて數へて見られよ。十年間に十五人更つてゐる。長官の更ると共に規則も變る。その爲に役人は目のまはるほど忙しく、政治的方針も寬嚴を異にする。これでは民心の淳厚になる筈がない。一體帝都雍州は天下九州の首であつて、州牧の見倣ふ所である。若し天下擧つてこんな狀態になつてしまつたらば、どうして民を安んずることが出來ようぞ。今の世に誰が此風を改めるであらう。願くは君を煩して天子を輔佐せしめ、循良の吏を擇んで永く其地位を守り子孫を長せしめるやうにしたいものだ。

〔五〕

三十男有室。二十女有歸。　三十にして男に室有り、二十にして女歸ぐ有り。
近代多離亂。婚姻多過期。　近代離亂多く、婚姻多く期を過ぐ。
嫁娶卽不早。生育常苦遲。　嫁娶旣に早からず、生育常に苦だ遲し。
兒女未成人。父母已衰羸。　兒女未だ人と成らざるに、父母已に衰羸す。
凡人貴達日。多在長大時。　凡そ人貴達の日、多く長大の時に在り。
欲報親不待。孝心無所施。　報せんと欲すれども親待たず、孝心施す所無し。
哀哉三(一)牲養。少得及庭闈(二)。　哀しい哉三牲の養、庭闈に及ぶを得ること少し。
惜哉萬(三)鍾粟。多用飽妻兒。　惜しい哉萬鍾の粟、用ひて妻兒を飽かしむること多し。
誰能正婚禮。待君張國維(四)。　誰か能く婚禮を正しうせん。君を待つて國維を張り、
庶使孝子心。皆無風樹(五)悲。　庶くは孝子の心をして、皆風樹の悲無からしめん。

【字解】【一】三牲　牛羊豕なり。【二】庭闈　父母をいふ。東晳補南陔詩に見ゆ。【三】萬鍾　鍾は枡目の名。【四】國維　管子に、禮義廉恥、國之四維、四維不張、國乃滅亡とある。【五】風樹悲　子が親に孝養を盡さんとするも親死して在らざるを悲むこと。韓詩外傳に、樹欲靜而風不止、子欲養而親不待とある。

【詩意】男子が三十になれば妻を持ち、女子が二十になれば嫁するのが古來の制であるが、近頃は戰亂などが續いたので、男も女も婚期がおくれるやうになつた。結婚が後れるから子を生むことも遲く、子がまだ成人しないうちに親は早くも老衰してしまふ。人の榮達するのは老大の時であるから、榮達して親の恩に報いようと思ふ時は、親は既に死んでしまつて孝養を盡すことが出來ない。肥肉があつても厚祿があつても、親に供することは出來ないで妻子の飽に充てるに過ぎない。今の世に誰が婚禮を正しうするであらう。願はくは君を煩して禮制を張り、天下の孝子をして風樹の歎を發せしめないやうにしたいものだ。

寓意詩五首

(一)豫樟生深山。七年而後知。
挺高二百尺。本末皆十圍。
天子建(二)明堂。此材獨中規。
(三)匠人執(四)斤墨。采度將有期。
(五)孟冬草木枯。烈火燎山陂。

寓意の詩五首

豫樟深山に生ず、七年にして後知る。
挺として高きこと二百尺、本末皆十圍。
天子明堂を建つるに、此材獨り規に中る。
匠人斤墨を執り、采り度ること將に期有らんとす。
孟冬草木枯れ、烈火山陂を燎く。

疾風吹猛焰。從根燒到枝。
養材三十年。方成棟梁姿。
一朝爲灰燼。(六)柯葉無孑遺。
地雖生爾材。天不與爾時。
不如(七)糞土英。猶有人掇之。
已矣勿重陳。重陳令人悲。
不悲焚燒苦。但悲(八)采用遲。

疾風猛焰を吹き、根より燒いて枝に到る。
材を養ふこと三十年、方に棟梁の姿と成る。
一朝灰燼と爲り、柯葉孑遺無し。
地爾材を生ずと雖も、天爾時を與へずんば、
糞土の英の、猶ほ人の之を掇る有るに如かず。
已めよ重ねて陳る勿れ、重ねて陳ぶれば人をして悲ましむ。
焚燒の苦を悲まず、但采用の遲きを悲むのみ。

【字解】【一】豫樟　木の名。【二】明堂　天子の政教を明にする堂。【三】匠人　大工なり。【四】斤墨　斤は斧、墨は繩墨。【五】孟冬　初冬。【六】柯葉　枝葉。孑遺は殘存すること。【七】糞土　塵土なり。英は花。【八】采用　採用なり。

【題義】諷刺の意を含めた詩である。

【詩意】豫樟が深山の中に生じ七年を經て始めて人にも知られるやうになつた。二百尺も高く伸び太さが十圍にもなつた。天子が明堂を建てる時には此材が唯規制に叶ふのである。故に匠人が斧斤を執りて近近の中に伐採することになつた。冬になつて草木の枯るる季節に山火事が起り、根から枝まですつかり燒けてしまつた。三十年が間養ひ育てて來て、既に棟梁の役にも立つやうになつた所で

忽ち燒け失せてしまつて枝も葉も殘らない。如何に地が其材を生じても、天が時を與へなければ、塵土の花の人の採り樂む所となるにも及ばない。誠につまらなく終つてしまふ。併しもうこんな愚痴はこぼすまい。言へば悲しさが増すばかりだ。燒けたのを悲むのではない。早く採用されなかつたのを悲むのだ。

〔二〕

(一)赫赫京内史。(二)炎炎中書郎。　赫赫たる京内史、炎炎たる中書郎。

昨傳(三)徵拜日。恩賜頗殊常。　昨徵拜を傳ふる日、恩賜頗る常に殊なり。

(四)貂冠水蒼玉。(五)紫綬黃金章。　貂冠水蒼の玉、紫綬黃金の章。

佩服身未暖。已聞竄(六)遐荒。　佩服身未だ暖ならざるに、已に遐荒に竄すと聞く。

親戚不得別。吞聲泣路旁。　親戚別るるを得ず、聲を吞んで路傍に泣く。

賓客亦已散。門前(七)雀羅張。　賓客亦已に散じ、門前雀羅張る。

富貴來不久。倏如(八)瓦溝霜。　富貴は來りて久しからず、倏ち瓦溝の霜の如し。

權勢去尤速。(九)瞥若石火光。　權勢は去ること尤も速なり、瞥として石火の光の若し。

不如守貧賤。貧賤可久長。　貧賤を守るに如かず、貧賤は久長なる可し。

傳語(一〇)宦遊子。且來歸故鄉。　語を傳ふ宦遊の子、且來つて故郷に歸れ。

【字解】【一】赫赫　勢の盛なこと。京内史は官名。京師を治むることを掌る。漢左右内史を置く。武帝右内史を更めて京兆尹となし、左内史を左馮翊となす。【二】炎炎　勢の盛な貌。中書郎は官名。【三】徵拜　任命なり。【四】貂冠　貴人の冠。貂尾を飾として著ける。【五】紫綬　綬は官印の組。黃金章は金印。漢書に丞相金印紫綬とある。【六】遐荒　僻遠の地。竄は配流なり。【七】雀羅　雀を捕へる網。漢の翟公廷尉となるや賓客門に滿ち、廢せらるるに及んで門外雀羅を張るに至れりといふ。訪ふ人なく淋しきこと。【八】瓦溝　仰瓦の覆瓦を受くる流をいふ。【九】瞥　チラと光ること。石火は石を擊つて發する所の光。【一〇】宦遊　仕官すること。

【詩意】京内史だの中書郎だのといふ官職は威勢赫赫たるもので、一たび任命を受くれば恩賜頗る厚く、衣冠束帶して紫綬金印を佩びるが、其翌日はもう遠方に流竄せられると傳へられ、親戚も別を惜む暇もなく、ただ聲を吞んで路傍に哭するばかりで、門に滿つるほど多くゐた賓客も皆散じ去り、門前には雀ばかりが幅をきかせるに至るものだ。富貴は永續し難いもので丁度瓦溝の霜の如く忽ち消えてしまふ。權勢は去ること早く石火の閃光のやうなものだ。されば永久性のある貧賤を守るに越したことはない。世の仕官する者に寄語するが、宦達を謀る心を棄てて早く故郷に歸るがよい。

〔三〕

(一)促織不成章。(二)提壺但聞聲。　促織は章を成さず、提壺は但聲を聞くのみ。

嗟哉蟲與鳥。無實有虚名。　嗟哉蟲と鳥と、實無うして虚名有り。
與君定交日。久要如弟兄。　君と交を定むる日、久しく弟兄の如きを要す。
何以示誠信。（三）白水指爲盟。　何を以つてか誠信を示さん、白水指して盟を爲す。
雲雨一爲別。飛沈兩難并。　雲雨一たび別を爲し、飛沈兩ながら并せ難し。
君爲得風鵬。我爲失水鯨。　君は風を得る鵬と爲り、我は水を失ふ鯨と爲る。
音信日已疎。恩分日已輕。　音信日に已に疎に、恩分日に已に輕し。
窮通尙如此。何況死與生。　窮通尙此の如し、何ぞ況んや死と生とをや。
乃知擇交難。須有知人明。　乃ち知る交を擇ぶの難きを。須く人を知る明有るべし。
莫將山上松。結託水上萍。　山上の松を將て、水上の萍に結託する莫れ。

【字解】【一】促織　蟲の名、はたおり。【二】提壺　鳥の名。【三】白水　左傳の重耳（僖公二十四年）に、所不與舅氏同心者、有如白水とあり。

【詩意】促織といふ蟲は名ばかりで少しも織物が捗取らない。提壺といふ蟲は鳴聲を聞くばかりで壺を提げるわけではない。所謂有名無實である。君と僕との間柄も此と同じで、始めて友垣を結ぶ時には兄弟のやうに親しくしようと、川の神にまで盟つて誠意を表したのであつたが、今では友といふ名ばかりになつてしまつて、雲雨の東西に分散するが如く、君は雄飛して僕は雌伏し、君は得意揚揚として僕は失意落魄、音信も途絶え、恩情も薄くなつた。窮通の相違でさへ此の如くになるのであるから、生きる死ぬるの場合は尙更である。因つて知る明眼を以て人を擇んで交ることが大事だ。山上の松の如き操の高い身を以て、水上の萍のやうな氣まぐれな人と交を結んではならない。

〔四〕

（一）翩翩兩玄鳥。本是同巢燕。　翩翩たる兩玄鳥、本是れ同巢の燕。
分飛來幾時。秋夏炎涼變。　分飛して來幾時ぞ、秋夏炎涼變ず。
一宿（二）蓬蓽廬。一栖明光殿。　一は蓬蓽の廬に宿し、一は明光の殿に栖む。
偶因銜泥處。復得重相見。　偶泥を銜む處に因り、復た重ねて相見るを得たり。
彼矜杏（三）梁貴。此嗟茅棟賤。　彼は杏梁の貴きを矜り、此は茅棟の賤しきを嗟く。
眼看（四）秋社至。兩處俱難戀。　眼に秋社の至るを看て、兩處俱に戀ひ難し。
所託各暫時。胡爲相歎羨。　託する所は各暫時、胡爲ぞ相歎き羨む。

【字解】【一】翩翩 飛ぶ貌。玄鳥は燕をいふ。【二】蓬草 よもぎ、いばら。【三】杏梁 杏の木のウツバリ。【四】秋社 立秋後の第五の戊の日。この日になれば燕は南國に歸る。

【詩意】同じ巣から巣立つた二羽の燕があつて、夏から秋にかけて相分れて時を送り、一羽の燕は茅屋に宿り、一羽の燕は金殿に宿るやうになつた。泥を銜みに來て二羽の燕が偶然一緒に落合つた。一羽の燕は己の宿の富貴に矜り、一羽の燕は其貧賤を歎じた。彼此してゐる中に秋社になつて二羽の燕は皆南國に歸らねばならぬことになり、栖み慣れた宿を戀ひ慕つてゐるわけに行かなくなつた。ああ富貴にせよ貧賤にせよ、身を託するのは束の間である。何も歎いたり羨んだりするには當らない。

〔五〕

(一)婆娑園中樹。根株大合圍。
(二)蠢爾樹間蟲。形質一何微。
孰謂蟲至微。(三)蟲蠹已無期。
孰謂樹至大。花葉有衰時。
花衰夏未實。葉病秋先萎。
樹心半爲土。觀者安得知。

〔五〕

婆娑たる園中の樹、根株大なること合圍。
蠢爾たる樹間の蟲、形質一に何ぞ微なる。
孰か蟲至微なりと謂ふ。蟲蠹已に期無し。
孰か樹至大なりと謂ふ。花葉衰ふる時有り。
花衰へて夏未だ實らず、葉病みて秋先づ萎む。
樹心半土と爲る、觀る者安んぞ知るを得ん。

借問蟲何在。在身不在枝。
借問蟲何食。食心不食皮。
豈無(四)啄木鳥。觜長將何爲。

借問す蟲何くにか在る、身に在つて枝に在らず。
借問す蟲何をか食ふ、心を食うて皮を食はず。
豈啄木鳥無からんや、觜長きも將た何をか爲さん。

【字解】【一】婆娑 動搖する貌。【二】蠢爾 蟲のうごめく貌。【三】蟲蠹 蟲が物を食ふこと。【四】啄木鳥 鳥の名。きつつき。能く枯木の中に居る蟲を啄み食ふ。

【詩意】園中に大樹あり、其の本は一抱ほどもある。其樹の間に小さな蟲がうごめいてゐる。蟲は小さくとも油斷はならない。忽ちの中に枝でも幹でも食つてしまふ。樹が大きいとて安心は出來ない。蟲害に遇へば花も葉も衰へてしまふ。花が衰へれば實が結ばず、葉が病めば秋に先だちて萎んでしまふ。いつの間にか樹の心が枯れて土と化する。觀る人は何故なるかを怪んでゐる。試みに問はん蟲はどこに居るのか。樹身に潛んでゐるので枝に居るのではない。又問ふ、蟲は何を食ふか。最も大切な樹の心を食ふので皮を食ふのではない。こんな蟲がついては、たとひ啄木鳥が長い觜で啄まうとしても及ぶことではない。

讀史五首

(一)楚懷放靈均。國政亦荒淫。

讀史五首

楚懷靈均を放ち、國政亦荒淫。

彷徨未忍決。繞澤行悲吟。
彷徨して未だ決するに忍びず、澤を繞つて行く悲吟す。

漢文疑賈生。謫置湘之陰。
漢文賈生を疑ひ、謫して湘の陰に置く。

是時刑方措。此去難爲心。
是時刑方に措けり、此に去つて心を爲し難し。

士生一代間。誰不有浮沈。
士一代の間に生れ、誰か浮沈有らざらん。

良時眞可惜。亂世何足欽。
良時眞に惜む可し、亂世何ぞ欽むに足らん。

乃知汨羅恨。未抵長沙深。
乃ち知る汨羅の恨、未だ長沙の深きに抵らざるを。

【字解】【一】楚纍　楚の懷王。靈均は屈原。屈原は懷王に仕へて誠忠を盡せるも讒に遇ひて疏ぜられ、襄王の時江南に謫せらる。五月五日自ら汨羅に投じて死す。【二】彷徨　徘徊に同じ。【三】漢文　漢の文帝。賈生は賈誼。賈誼は文帝の時博士となり、超遷して太中大夫に至る。大臣の忌む所となり、出されて長沙王の太傅となる。湘水を渡る時賦を作つて屈原を弔せり。【四】湘之陰　湘水の南、即ち長沙。陰は水南なり。【五】刑方措　刑罰をば其儘にさしおいて用ひないこと。

【題義】史上の事實について所感を述べた詩である。

【詩意】楚の懷王は屈原を放逐し國政も亦宜しきを得なかつた。屈原は去留に迷つて彷徨し、澤畔に行吟した。漢の文帝は賈誼を疑ひ之を長沙に謫した。この時は刑措いて用ひずと贊美されてゐる時代であるが、その時に貶謫の罪を蒙つたのであるから、賈誼は定めて心外であつたであらう。人此世に生れては誰でも浮沈は免れない。文帝のやうな結構な時代に此事ありしは惜むべきことである。それに比すれば懷王の時代は亂世で少しも羨むに足らない。此に因つて之を觀れば、屈原の恨は賈誼ほどに深くなかつたと謂つてよからう。

〔二〕

禍患如棼絲。其來無端緒。
禍患は棼絲の如く、其の來る端緒無し。

馬遷下蠶室。嵆康就囹圄。
馬遷蠶室に下り、嵆康囹圄に就く。

抱冤志氣屈。忍恥形神沮。
冤を抱いて志氣屈し、恥を忍んで形神沮む。

當彼戮辱時。奮飛無翅羽。
彼の戮辱せらるる時に當り、奮飛するに翅羽無し。

商山有黃綺。潁川有巢許。
商山に黃綺有り、潁川に巢許有り。

何不從之遊。超然離網罟。
何ぞ之に從つて遊ばざる、超然として網罟を離る。

山林少羈鞅。世路多艱阻。
山林は羈鞅少く、世路は艱阻多し。

寄謝伐檀人。愼勿嗟窮處。
寄謝す伐檀の人、愼んで窮處を嗟く勿れ。

【字解】【一】棼絲　亂れた絲。【二】馬遷　漢の司馬遷。蠶室は宮刑の獄舍。【三】嵆康　三國の魏の人。囹圄は牢獄。【三】

形神　肉體丼に精神。【五】商山　山の名。夏黃公・綺里季・東園公・甪里先生の四人、秦の亂を避けて此山に隱る。之を商山の四皓といふ。【六】潁川　川の名。巢許は巢父と許由。堯天下を巢父に讓らんとせしも巢父受けず。許由に讓らんとせしに、許由は耳汚れぬとて潁川の水に耳を洗へりといふ。【七】網罟　あみ。罪辟に喩ふ。【八】羈紲　束縛なり。【九】寄謝　寄語といふが如し。伐檀は詩經魏風の篇名。序に刺食也、在位貪鄙、無功而受祿、君子不得進仕爾とある。【一〇】窮處　窮居といふが如し。

【詩意】禍は絲の亂るるが如く其の來ること測るべからず。司馬遷・嵆康等は皆罪なくして牢獄に投ぜられ、寃を抱いて心爲に屈し、恥を忍んで心身沮喪した。かの戮辱を蒙る時に飛び去らうとしても翅がないから飛び去ることも出來ない。之に反し商山の黃綺や潁川の巢許は罪も咎も被らない。宜しく彼等に從ひ、世外に超然として刑辟を免れるがよい。山林には何等の束縛もないが、世路は艱難が多い。伐檀の詩を作つて仕進の出來ないことを歎じた人に寄語する。決して窮困してゐることを嗟かぬがよいと。

〔三〕

漢日大將軍。少爲乞食子。　漢日の大將軍、少くして乞食の子と爲る。
秦時故列侯。老作鋤瓜士。　秦時の故列侯、老いて鋤瓜の士と作る。
春華何暐曄。園中發桃李。　春華何ぞ暐曄なる、園中桃李發く。
秋風忽蕭條。堂上生荊杞。　秋風忽ち蕭條、堂上荊杞を生ず。
深谷變爲岸。桑田成海水。　深谷は變じて岸と爲り、桑田は海水と成る。
勢去未須悲。時來何足喜。　勢去るとも未だ悲むを須ひず、時來るとも何ぞ喜ぶに足らん。
寄言榮枯者。反復殊未已。　言を寄す榮枯の者、反復殊に未だ已まず。

【字解】【一】故列侯　もとの諸侯。【二】鋤瓜　瓜を作ること。秦の邵平は東陵侯に封ぜらる。秦亡びて後瓜を長安城東に種う。【三】暐曄　美しくてり輝くこと。【四】蕭條　物淋しき貌。【五】堂上　堂のほとり。荊杞　いばら、くこ。共に灌木の名。

【詩意】漢の大將軍某はもと乞食の子であつた。秦の諸侯たる邵平は老後に瓜を賣つて活計を立てた。春には桃や李がまばゆきばかりに美花を開くが、秋風が一たび起れば蕭條たる荊や枸杞の荒地と化してしまふ。深谷も變じて岸崖となり桑田も化して碧海となるのが世の習である。形勢がわるくなつても悲むには及ばず、時運が向いて來ても喜ぶには當らない。榮を喜び枯を悲む者に一言を寄せる。榮枯は反復して定まらぬものぢや、喜んだり悲んだりせぬがよいと。

〔四〕

含沙射人影。雖病人不知。　沙を含んで人影を射れば、病むと雖も人知らず。
巧言構人罪。至死人不疑。　言を巧にして人の罪を構ふれば、死に至るも人疑はず。

(三)掇蜂殺愛子。掩鼻戮寵姬。　蜂を掇つて愛子を殺し、鼻を掩うて寵姬を戮す。
(三)弘恭陷蕭望。(四)趙高謀李斯。　弘恭は蕭望を陷れ、趙高は李斯を謀る。
陰德既必報。陰禍豈虛施。　陰德既に必ず報ゆ、陰禍豈虛しく施さんや。
人事雖可罔。天道終難欺。　人事は罔ふ可しと雖も、天道終に欺き難し。
明則有刑(五)辟。幽則有神祇。　明には則ち刑辟有り、幽には則ち神祇有り。
苟免勿私喜。鬼得而誅之。　苟も免れて私に喜ぶこと勿れ、鬼得て之を誅せん。

【字解】【一】含沙云云　說文王註に、蜮、一名は射影、沙を含んで人を射る、人に中れば卽ち瘡を發す、影に中る者亦病むとある。【三】掇蜂　尹吉甫の子伯奇、母亡す。吉甫の後妻之を讒す。毒蜂を取り衣領に置き、伯奇をして之を掇らしむ。【三】弘恭　漢の元帝の時、石顯と竝に信任を得、遂に蕭望之等を讒殺し、權一時を傾く。【四】趙高　秦の寵臣。【五】刑辟　刑罰。

【詩意】蜮といふ蟲が沙を含んで人影を射れば、其人は病に罹るが、何故病に罹つたのかはわからない。又言を巧にして人の罪を構へると、讒せられた人は死刑にされても、世人は少しも怪まない（暗中人を害するの恐るべきことをいふ）蜂を掇つて愛子を殺さんとしたのも、鼻を掩つて寵姬を戮したのも、弘恭が蕭望之を陷れ、趙高が李斯を謀つたのも、皆此筆法に由つたものである。陰德ある者は必ず陽報があるものであるから、陰に人を賊害した者も必ず惡報があるに相違ない。決して無事では濟まぬ。出來ても天を欺くことは到底出來ない。故に陰にまはつて人を讒するやうな事をすれば、明にしては刑罰を蒙り、幽にしては鬼神の咎を蒙る。苟も刑罰を免れて喜んでゐてはいけない。鬼神は必ず誅罰を加へずには置かないから。

〔五〕

(一)季子憔悴時。婦見不下機。　季子憔悴の時、婦見れども機を下らず。
(二)買臣負薪日。妻亦棄如遺。　買臣薪を負ふ日、妻亦棄てて遺るが如し。
一朝黃金多。佩印衣錦歸。　一朝黃金多く、印を佩び錦を衣て歸る。
去妻不敢視。婦嫂强依(三)依。　去妻敢て視ず、婦嫂强ひて依依たり。
富貴家人重。貧賤妻子欺。　富貴なれば家人も重んじ、貧賤なれば妻子も欺く。
奈何貧富間。可移親愛志。　奈何ぞ貧富の間、親愛の志を移す可き。
遂使(四)中人心。汲汲求富貴。　遂に中人の心をして、汲汲として富貴を求めしめ、
又令(五)下人力。各競錐(六)刀利。　又下人の力をして、各錐刀の利を競はしめ、
隨分歸舍來。一取妻(七)孥意。　分に隨つて舍に歸り來り、一に妻孥の意を取らしむ。

【字解】【一】季子　蘇秦の字。憔悴は失意落魄のさま。蘇秦遊説して用ひられず、失望して歸るや、妻は機を下らず嫂は爲に炊がず。後合縦の約成り六國に併せ相たるに至る。【二】買臣　漢の朱買臣家貧にして常に薪を賣りて自ら給す。妻之を羞ぢ、去らんことを求む。買臣後會稽太守となる。【三】依依　慕ひ仰ぐこと。【四】中人　中才の人。【五】下人　下等な人。【六】錐刀　微少の利をいふ。【七】妻孥　妻子。

【詩意】蘇秦の失意の時は、妻は機を下りて出迎へもせず。朱買臣が薪採をしてゐた時は、妻は離縁を迫つて去つた。後日蘇秦は六國の相となり、朱買臣は會稽太守となり、錦を著て故郷に歸るに及び、去つた妻は自ら羞ぢて正視する能はず、妻嫂は平蜘蛛のやうになつて前日の罪を謝した。富貴になれば家人も尊び、貧賤であると妻子すら侮る。貧富の相違がどうしてかうも人の心を變へるのであらう。だから中才の人は汲汲として富貴を求め、下等の人は利益を競つて奔走し、各己の才分に應じて妻子の機嫌を取ることばかり謀つてゐる。

和答詩十首 并序

和答詩十首 并に序

(一)五年春。(二)微之從東臺來。不數日。又(三)左轉爲江陵士曹掾。詔下日。會予下(四)內直歸。而微之已即路。邂逅相遇於街衢中。自永壽寺南抵新昌里北。得馬上話別。語不過相勉保(五)方寸。外形骸而已。因不暇及他。是夕足下次於山北寺。僕職役不得去。命季弟送行。且奉新詩一軸。致於執事。凡二十章。率有比(六)興。淫文艷韻。無一字焉。意者欲足下在途諷讀。且以遣日時。消憂懣。又有以張直氣而扶壯心也。及足下到江陵。寄在路所爲詩十七章。凡五六千言。言有爲。章有旨。迨於宮(七)律體裁。皆得作者風。發緘開卷。且喜且怪。僕思牛僧孺戒。不能示他人。唯與杓直拒非及樊宗師輩三四人。時一吟讀。心甚貴重。然竊思之。豈僕所奉者二十章。遽能開足下聰明。使之然耶。抑又不知足下是行也。天將屈足下之道。激足下之心。使感時發憤而臻於此耶。若兩不然者。何立意措辭。與足下前時詩。如此之相遠也。僕既羨足下詩。又憐足下心。盡欲引狂簡而和之。屬(八)直宿拘牽。居無暇日。故不即時如意。旬月來。多乞(九)病假。假中稍閒。且摘卷中尤者。繼成十章。亦不下三千言。其間所見同者。固不能自異。異者亦不能強同。同者謂之和。異者謂之答。并別錄和夢遊春詩一章。各附于本篇之末。餘未和者。亦

續致之。頃者在科試（一〇）間。常與足下同筆硯。每下筆時。輒相顧共患。其意太切。而理太周。故理太周則辭繁。意太切則言激。然與足下爲文。所長在於此。所病亦在於此。足下來序。果有詞犯文繁之說。今僕所和者。猶前病也。待與足下相見日。各引所作。稍刪其繁而晦其義焉。餘具書白。

【訓讀】五年の春、微之東臺より來る。數日ならずして、又左轉して江陵士曹の掾と爲る。詔下る日、予內直を下りて歸るに會ふ。而して微之已に路に卽く。邂逅して街衢の中に相遇ひ、永壽寺の南より新昌里の北に抵るまで、馬上に別を話るを得たり。語相勉めて方寸を保んじ形骸を外にするに過ぎざる而已。因つて他に及ぶに暇あらず。是の夕足下山北の寺に次る。僕職役して去ることを得ず。季弟に命じて行を送らしむ。且つ新詩一軸を奉じて執事に致す。凡そ二十章、率ね比興有り。淫文艷韻一字も無し。意に足下途に在つて諷讀し、且く以て日時を遣り、憂懣を消し、又以て直氣を張つて壯心を扶くる有らんことを欲す。足下江陵に到るに及びて、路に在つて爲る所の詩十七章を寄す。凡て五六千言、言は爲にする有り章に旨有り。宮律體裁に迫るまで皆作者の風を得たり。緘を發し卷を開きて、且つ喜び且つ怪む。僕牛僧孺が戒を思うて他人に示すこと能はず。唯杓直拒非及び樊宗師が輩三四人と、時に一たび吟讀し、心甚だ貴重せり。然して竊に之を思ふに豈に僕が奉ずる所の者二十章、遽に能く足下の聰明を開きて、之をして然らしむるか。抑〻又知らず足下の是の行や天將に足下の道を屈し足下の心を激せんとして、時に感じ憤を發して此に臻らしむるか。若し兩ながら然らずんば何ぞ意を立て辭を措くこと、足下前時の詩と此の如く相遠きや。僕既に足下の詩を羨み、又足下の心を憐み、盡く狂簡を引きて之に和せんと欲するも、屬直宿に拘牽せられて、居るに暇日無し。故に卽時に意の如くならず。旬月來、多く病假を乞ふ。假中稍閒なり。且く卷中の尤なる者を摘み、繼ぎて十章を成す。亦三千言を下らず。其間見る所の同じき者は、固より自ら異にする能はず。異る者は亦强ひて同じうする能はず。同じき者之を和と謂ひ、異る者之を答と謂ふ。幷に別錄す。夢に春に遊ぶに和する詩一章、各〻本篇の末に附す。餘の未だ和せざる者は、亦續ぎて之を致さん。頃者科試の間に在り、常に足下と筆硯を同じうす。筆を下す時每に、輒ち相顧みて共に患ふ、其意太だ切にして理太だ周きを。故に理太だ周ければ則ち辭繁く、意太だ切なれば則ち言激す。然れども足下と文を爲ることは、長ずる所は此に在り、病とする所も亦此に在り。足下の來序に、果して詞犯文繁の說有り。今僕が和する所の者は、猶前病のごときなり。足下と相見ん日を待つて、各〻所作を引きて、稍其繁きを刪つて其義を晦まさん。餘は書白に具す。

【字解】【一】五年　元和五年。【三】微之　元稹、字は微之。元和五年一月監察御史元稹江陵士曹に貶せらる。東臺は門下省な

いふ。【三】左轉　左遷なり。【四】內直　大內、卽ち宮城にての宿直。【五】方寸　心をいふ。【六】比興　寓意なり。【七】宮律　音律なり。【八】直宿　宿直に同じ。【九】病假　病氣によりて休暇を乞ふこと。【一〇】科試　官吏登庸の試驗。

和思歸樂

思歸樂に和す

山中(一)不栖鳥。夜半聲嚶嚶。
山中不栖の鳥、夜半に聲嚶嚶たり。

似道思歸樂。行人掩泣聽。
思歸樂と道ふに似たり、行人泣を掩うて聽く。

皆疑此山路。遷客多南征。
皆疑ふ此山路、遷客南に征くこと多し。

憂憤氣不散。結化爲精靈。
憂憤して氣散せず、結び化して精靈と爲ると。

我謂此山鳥。本不因人生。
我は謂ふ此山の鳥、本と人に因つて生せず。

人心自懷土。想作思歸鳴。
人心自ら土を懷ふ、想うて思歸の鳴を作すと。

(二)孟嘗平居時。娛耳琴泠泠。
孟嘗平居の時、耳を娛ましめて琴泠泠たり。

(三)雍門一言感。未奏淚沾纓。
雍門一言の感、未だ奏せざるに淚纓を沾す。

(四)魏武銅雀妓。日與歡樂幷。
魏武銅雀の妓、日に歡樂と幷す。

一旦西(五)陵望。欲歌先涕零。
一旦西陵の望、歌はんと欲して先づ涕零つ。

峽猿亦何意。隴水復何情。
峽猿亦何の意ぞ、隴水復何の情ぞ。

爲入愁人耳。皆爲腸斷聲。
爲に愁人の耳に入りて、皆腸斷の聲と爲る。

請看元(六)侍御。亦宿此郵(七)亭。
請ふ看よ元侍御、亦此郵亭に宿す。

因聽思歸鳥。神氣獨安寧。
因つて思歸鳥を聽き、神氣獨り安寧なり。

問君何以然。道勝心自平。
問ふ君何を以てか然る、道勝れて心自ら平なり。

雖爲南遷客。如在長安城。
南遷の客と爲ると雖も、長安城に在るが如し。

云得此道來。何慮亦何營。
云に此道を得來つて、何をか慮り復何をか營まん。

窮達有前定。憂喜無交爭。
窮達前に定まる有り、憂喜交爭ふ無し。

所以事君日。持憲立大(八)庭。
所以に君に事ふる日、憲を持して大庭に立つ。

雖有廻天力。撓之終不傾。
廻天の力有りと雖も、之を撓すも終に傾かず。

況始三十餘。年少有直名。
況や始めて三十餘、年少にして直名有り。

心中志氣大。眼前爵祿輕。
心中志氣大いに、眼前爵祿輕し。

君恩若雨露。君威若雷霆。
君恩は雨露の若く、君威は雷霆の若し。

退不苟免難。進不曲求榮。
退いては苟も難を免れず、進んでは曲げて榮を求めず。

在火辨玉性。經霜識松貞。
火に在りては玉の性を辨じ、霜を經ては松の貞を識る。

（九）展禽任三黜。（一〇）靈均長獨醒。
展禽三たび黜けらるるに任せ、靈均長く獨醒めたり。

獲戾自東洛。貶官向（一一）南荊。
戾を獲て東洛よりし、官を貶して南荊に向ふ。

再拜辭闕下。長揖別公卿。
再拜して闕下を辭し、長揖して公卿に別る。

荊州又非遠。驛路半月程。
荊州又遠きに非ず、驛路半月の程のみ。

（一二）漢水照天碧。楚山插雲青。
漢水天を照して碧に、楚山雲に插んで青し。

江陵橘似珠。（一三）宜城酒如餳。
江陵は橘珠に似たり、宜城は酒餳の如し。

誰謂譴謫去。未妨遊賞行。
誰か謂ふ譴謫し去ると、未だ遊賞の行を妨げず。

人生百歲內。天地暫寓形。
人生百歲の內、天地暫く形を寓す。

太倉一稊米。大海一浮萍。
太倉の一稊米、大海の一浮萍のみ。

身委（一四）逍遙篇。心付（一五）頭陀經。
身は逍遙の篇に委ね、心は頭陀の經に付す。

尙達死生觀。寧爲寵辱驚。
尙死生の觀に達せり、寧ろ寵辱の爲に驚かんや。

（一六）中懷苟有主。外物安能樂。
中懷苟に主有り、外物安んぞ能く樂はん。

（一七）任意思歸樂。聲聲啼到明。
任意あれ思歸樂、聲聲啼いて明に到れ。

【字解】【一】不栖鳥　栖むべき塒を得ない鳥。【二】孟嘗　齊の孟嘗君。平居は平生。【三】雍門　雍門周嘗て孟嘗君に干め琴を鼓して歌ふ。孟嘗君沛泣悲哀す。【四】魏武　魏の武帝。銅雀は臺の名、武帝多くの妓を此に置けり。【五】西陵　魏の武帝の墓。武帝諸子に遺命して曰く、吾が死後には、吾が妾と妓人と皆銅雀臺に著き、臺上に六尺の牀を施し繐帳を下し、朝晡に酒脯を供し、時に吾が西陵の墓田を望め云云と。【六】元侍御　元稹をいふ。【七】郵亭　驛亭。【八】大庭　朝廷。憲は法なり。【九】展禽　柳下惠なり。論語に、柳下惠士師となり三たび黜けらる云云とある。【一〇】靈均　屈原なり。【一一】南荊　南楚なり。江陵は古の楚の地。【一二】漢水　川の名、江陵に在り。【一三】宜城　南方の縣名。【一四】逍遙篇　莊子の逍遙遊篇。【一五】頭陀　煩惱を去る意。【一六】中懷　心中。【一七】任意　ままよ、勝手に鳴けとの意。

【題義】江陵に貶謫せられた元稹が詩を贈つてよこしたので、白樂天が其詩に或は和し或は答へたのである。

【詩意】山中に塒を得ない鳥があつて夜半に嚶嚶と鳴く。其聲が思歸樂と鳴くやうに聞えるので、旅の人が之を聞くと皆懷鄉の涙を流す。此山路は南方に貶謫せらるる人の多く通る所だから、其憂憤の氣が凝り結んで精靈となつたのではあるまいかと皆人は疑つてゐるが、余はさうは思はぬ。此山の鳥が人に因つて生じたのではなくて、人が故鄉を慕ふ心を持つてゐるから、鳥の聲を聞けば思歸樂と鳴くやうに感ずるのだと思ふ。平生孟嘗君の耳を娛ませた琴も雍門周の言に感じては涙の種となつた。

銅雀臺上に歡樂を極めた美妓も武帝の墓を望んで、先だつものは涙であつた。峽中の猿聲、隴山の流水、愁人の耳に觸るれば忽ち斷腸の聲となるのである。所が彼の元侍御は此驛亭に宿し此鳥の聲を聽いても少しも悲まない。なぜかと問へば、彼答へて曰く、道を悟つてゐれば心は自然と平靜であるから、南遷の身になつても長安に居ると同じである。窮達は運命であるから、憂へたり喜んだりするのは愚の至だ。故に君に事へ朝廷に立てば國憲を固持して屈せず、年少より剛直の名を負ひ今既に三十である。不幸にして君のお譴を蒙らば苟も免れようとはしない。心は玉と同じく火にも燒けず、松と同じく霜にも枯れない。昔柳下惠は三たび黜けられても悲まず、屈原は世人皆醉へる中に唯獨り醒めてゐた。吾は洛陽から江陵に貶せられたが、江陵は僅に半月程の地で決して遠方といふわけではない。又漢水楚山の風景も美しく、橘だの酒だのといふ名物もあるから、寧ろ遊賞のつもりで行くのだ。人壽百歲之を天地の長久に比ぶれば大倉の一粟大海の浮萍と同じことだ。既に死生寵辱を一如として、疑はぬだけの悟は持つてゐる。心中守る所の主あらば外物も敢て犯すことは出來ない。思歸樂鳥よ勝手に夜の明けるまで啼くがよい。

和陽城驛　陽城驛に和す

(一)商山陽城驛。中有歎者誰。　商山の陽城驛、中に歎する者有るは誰ぞ。
云是元(二)監察。江陵謫去時。　云ふ是元監察なり、江陵に謫し去る時。
忽見此驛名。良久涕欲垂。　忽ち此驛名を見、良久しうして涕垂れんと欲す。
何故陽(三)道州。名姓同於斯。　何故ぞ陽道州、名姓斯に同じき。
憐君一寸心。寵辱誓不移。　憐む君が一寸の心、寵辱移らざるを誓ふ。
疾惡若巷(四)伯。好賢如緇(五)衣。　惡を疾むこと巷伯の若く、賢を好むこと緇衣の如し。
(六)沈吟不能去。意者欲改爲。　沈吟して去る能はず、意者に改め爲さんことを欲し、
改爲避賢驛。大署於門(七)楣。　改めて避賢驛と爲し、門楣に大署す。
荆人愛羊(八)祜。戶曹(九)改爲辭。　荆人羊祜を愛し、戶曹改めて辭を爲る。
一字不忍道。況兼姓呼之。　一字も道ふに忍びず、況や姓を兼ねて之を呼ぶをや。
因題八百言。言直文甚奇。　因つて八百言を題す、言直にして文甚だ奇なり。
詩成寄與我。鏗若金和絲。　詩成りて我に寄與す、鏗として金の絲に和するが若し。
上言陽公行。友悌無等(一〇)夷。　上は陽公が行を言ふ、友悌等夷無く、
骨肉同衾裯。至死不相離。　骨肉衾裯を同じうして、死に至るまで相離れず。

次言陽公迹。夏邑始棲遲。(一)　次は陽公が迹を言ふ、夏邑始めて棲遲す。

鄕人化其風。少長皆孝慈。　鄕人其風に化し、少長皆孝慈なり。

次言陽公道。終日對酒巵。　次は陽公が道を言ふ、終日酒巵に對し、

兄弟笑相顧。醉貌紅怡怡。　兄弟笑うて相顧みる、醉貌紅にして怡怡たり。

次言陽公節。謇謇居諫司。(二)　次は陽公が節を言ふ、謇謇として諫司に居り、

誓心除國蠹。(三)決死犯天威。　心に誓つて國蠹を除き、死を決して天威を犯す。

終言陽公命。左遷天一涯。　終に陽公が命を言ふ、天の一涯に左遷せらる。

道州炎瘴地。身不得生歸。　道州は炎瘴の地、身生きて歸るを得じと。

一一皆實錄。事事無孑遺。(四)　一一皆實錄し、事事孑遺無し。

凡是爲善者。聞之惻然悲。　凡そ是れ善を爲す者、之を聞いて惻然として悲む。

道州既已矣。往者不可追。　道州既に已んぬ、往く者は追ふ可からず。

何世無其人。來者亦可思。　何れの世か其人無からん、來る者は亦思ふ可し。

願以君子文。告彼大樂師。(五)　願はくは君子の文を以て、彼の大樂師に告げ、

附於雅歌末。奏之白玉墀。(六)　雅歌の末に附し、之を白玉墀に奏せん。

天子聞此章。敎化如法施。　天子此章を聞かば、敎化法の如くに施して、

直諫從如流。佞臣惡如疵。　直諫從ふこと流るるが如く、佞臣惡むこと疵の如くならん。

宰相聞此章。政柄端正持。　宰相此章を聞かば、政柄端正に持して、

進賢不知倦。去邪勿復疑。　賢を進めて倦むを知らず、邪を去つて復疑ふこと勿らん。

憲臣聞此章。(七)不敢懷依違。(八)　憲臣此の章を聞かば、敢て依違を懷かざらん。

諫官聞此章。不忍縱詭隨。　諫官此章を聞かば、縱に詭り隨ふに忍びず。

然後告史氏。舊史有前規。　然して後に史氏に告げ、舊史前規有らん。

若作陽公傳。欲令後世知。　若し陽公が傳を作り、後世をして知らしめんと欲せば、

不勞敍世家。不用費文辭。　世家を敍するを勞せず、文辭を費すを用ひず。

但使國史上。全錄元稹詩。　但國史の上、全く元稹が詩を錄せしめん。

【字解】【一】商山　山の名。陝西省商縣の東、終南山脈の中に在り。【二】元監察　監察御史元稹。【三】陽道州　唐の陽城、德宗の時諫議大夫となる。陸贄を辯護し裴延齡の奸佞を論じ、顏を犯して極論す。乃ち道州刺史に貶せらる。【四】巷伯　詩經小雅の

篇名。序に、刺二幽王一也、寺人傷二於讒一故作二是詩一也とある。【五】 緇衣 詩經鄭風の篇名。序に、緇衣美二武公一也、父子並爲二周司徒一善二於其職一國人宜レ之云云とある。【六】 沈吟 思案すること。【七】 門楣 里門のひさし。【八】 羊祜 晉に仕へて荊州諸軍事を都督し、德望あり。祜襄陽に在りし時常に峴山に登る。卒して後、人碑を其地に立つ。其碑を望む者流涕せざるはなし。杜預因つて名けて墮涙碑といふ。【九】 戶曹 官名。【一〇】 等夷 夷もヒトシと訓す、匹儕といふが如し。【一一】 棲遲 世を避けて田野に居ること。【一二】 謇謇 直言の貌。【一三】 國蠹 國の害をなすもの。【一四】 孑遺 のこり。【一五】 大樂師 宮中の音樂者。【一六】 白玉墀 宮殿なり。【一七】 憲臣 司法官なり。【一八】 依違 態度の曖昧にして決せざること。

【詩意】 商山の陽城驛を過ぎて歎息した者がある。それは監察御史元稹である。彼が江陵に謫せられて去る時、此驛名を見て涙を流して謂へらく、此驛の名は道州刺史に貶せられた陽君と同じだ。ああ陽道州は己の心を守り寵辱に因つて操守を變せず、惡を疾み賢を好む立派な人物であつた。其人と同名とは賢者を汚すものであると。因つて避賢驛と名を改め里門の楣に大書した。昔荊州の人は羊祜を愛し戶曹が改めて辭を作つたが一字も言ふに忍びなかつた。況んや名も姓も兼ねてゐるのは怪しからぬとて、因つて八百言の長詩を賦して我に贈つてよこした。實に絲竹金石にも比すべき聲調の詩だ。先づ上には陽公の友愛の行を述べ、次には陽公の忠節を述べ、次には陽公が能く鄉人を感化した事迹を述べ、次には陽公が道を樂む狀を述べ、次には陽公の薄命を憐むなど、終に陽公の履歷が一一漏れなく錄してある。苟も善を爲す者が此詩を聞けば惻然として涙を流さぬ者はない。ああ陽公は既に歿して今更追ひ求めることは出來ないが、將來の人は宜しく鑑となすべきである。願くは此詩を大樂師に告げ之を宮中に奏したいものだ。天子が此詩を聞けば直諫を容れ佞臣を惡むやうになるであらう。宰相が此詩を聞けば賢を進め邪を去るやうになるであらう。司法官が聞けば裁決流るるが如くになり、諫官が聞けば附和雷同せぬやうになるであらう。然る後之を史官に告げ、陽公の傳を作る時に、此詩を其儘史上に載せたならば、文辭を費さずに立派な史傳が出來るのである。

答二桐花一

山木多蓊鬱。茲桐獨亭亭。(一)
葉重二碧雲片一。花簇二紫霞英一。
是時三月天。春暖山雨晴。
夜色向レ月淺。暗香隨レ風輕。
行者多商賈。居者悉黎民。
無三人解二賞愛一。有レ客獨屏營。(二)
手攀二花枝一立。足蹋二花影一行。

桐花に答ふ

山木多くは蓊鬱、茲桐獨亭亭たり。
葉は碧雲の片を重ね、花は紫霞の英を簇らす。
是時三月の天、春暖かにして山雨晴れ、
夜色月に向つて淺く、闇香風に隨つて輕し。
行く者多くは商賈、居る者悉く黎民。
人の賞愛を解する無し、客有りて獨屏營し、
手に花枝を攀ぢて立ち、足に花影を蹋みて行く。

生憐不得所。死欲揚其聲。　生きては所を得ざるを憐み、死しては其聲を揚げんと欲す。
截爲天子琴。刻作古人形。　截つて天子の琴と爲し、刻んで古人の形を作る。
云待我成器。薦之於穆（三）清。　我が器を成すを待つて、之を穆清に薦めんと云ふ。
誠是君子心。恐非草木情。　誠に是れ君子の心なるも、恐らくは草木の情に非じ。
胡爲愛其華。而反傷其生。　胡爲ぞ其の華を愛し、而も反りて其の生を傷る。
老龜被刳腸。不如無神靈。　老龜の腸を刳らるるは、神靈無きに如かず。
雄雞自斷尾。不願爲犧牲。　雄雞の自ら尾を斷つは、犧牲と爲るを願はざればなり。
況此好顏色。花紫葉靑靑。　況んや此の好顏色、花は紫にして葉は靑靑たり。
宜遂天地性。忍加刀斧刑。　宜く天地の性を遂げしむべし、刀斧の刑を加ふるに忍びんや。
我思五（四）丁力。拔入九重城。　我は思ふ五丁の力を以つて、拔きて九重の城に入れ、
當君正殿栽。花葉生光晶。　君が正殿の栽に當て、花葉光晶を生せしめん。
上對月中桂。下覆堦前蓂（五）。　上は月中の桂に對し、下は堦前の蓂を覆ひ、
汎拂香爐煙。隱映斧（六）藻屏。　香爐の煙を汎拂し、斧藻の屏に隱映し、
爲君布綠陰。當暑蔭軒楹。　君が爲に綠陰を布き、暑に當りて軒楹を蔭はん。
沈沈綠滿地。桃李不敢爭。　沈沈として綠地に滿つれども、桃李敢て爭はず。
爲君發淸韻。風來如叩瓊。　君が爲に淸韻を發し、風來れば瓊を叩くが如く、
泠泠聲滿耳。鄭（七）衞不足聽。　泠泠として聲耳に滿ち、鄭衞も聽くに足らざらん。
受君封植力。不獨吐芬馨。　君が封植の力を受けば、獨芬馨を吐くのみならず、
助君行春（八）令。開花應晴明。　君が春令を行ふを助け、花を開きて應に晴明なるべし。
受君雨露恩。不獨含芳榮。　君が雨露の恩を受けば、獨芳榮を含むのみならず、
戒君無戲言。剪（九）葉封弟兄。　君が戲言無きを戒め、葉を剪つて弟兄を封せん。
受君歲月功。不獨資生成。　君が歲月の功を受けば、獨生成を資るのみならず、
爲君長高枝。鳳凰上頭鳴。　君が爲に高枝を長じ、鳳凰上頭に鳴かん。
一鳴君萬歲。壽如山不傾。　一たび鳴けば君萬歲、壽は山の傾かざるが如く、
再鳴萬人泰。泰（一〇）階爲之平。　再び鳴けば萬人泰に、泰階之が爲に平ならん。
如何有此用。幽滯在巖坰。　如何ぞ此用有つて、幽滯して巖坰に在る。

歲月不爾駐。孤芳坐凋零。　歲月爾も駐らず、孤芳坐ら凋零す。
請向桐枝上。爲余題姓名。　請ふ桐枝の上に向ひ、余が爲に姓名を題せよ。
待余有勢力。移爾獻丹庭。　余が勢力有るを待ちて、爾を移して丹庭に獻ぜん。

【字解】【一】亭亭　高く立つ貌。【二】屛營　さまよふ貌。【三】穆清　天子の宗廟。詩經大雅清廟篇に、於穆清廟。【四】五丁　五人の若者。【五】蓂　堯の時に階を夾んで生じた瑞草の名。【六】扆屛　天子の玉座の後に立つる屛風。扆或は藻の模様を畫いて飾とす。【七】鄭衞　俗樂をいふ。【八】春令　春の政令。【九】剪葉云云　周の成王桐葉を剪つて珪となし、弟唐叔虞に授けて曰く、以て汝を封ずと。周公入つて賀す。成王曰く戲なりと。周公曰く、天子に戲言なしと。乃ち唐叔虞を唐に封ず。【一〇】泰階　天の三階なり。三階平なれば陰陽和し風雨時あり、天下大に安し、是を太平となす。【一一】丹庭　朝廷。

【詩意】山木の多く茂れる中に此桐樹のみ獨り高く聳え、葉は碧雲を重ね花は紫花を簇らせてゐる。時恰も陽春三月、雨晴れて月出で桐花の香が風に送られて薰じてゐる。行く者も居る者も商賈か賤民で誰とて桐花の風情を賞愛する者はない。一客あり手花枝に攀ぢ足花影を蹋み、桐樹の生きて其所を得ざるを憐み、死して其名を揚げんことを欲し、此桐を截つて天子の琴となし、古人の形像を刻み、その成るを待つて宗廟に薦めようと云ふ。是は誠に君子の心ではあるが、桐の身に取つては本懷ではあるまい。其花を愛しながら其生を害するのは宜しくない。老龜は其甲が卜筮の役に立つので其生を傷けられるが、役に立つのが身の仇となるならば寧ろ何の役にも立たぬ方がよい。雄雞は其尾が美しいので犧牲となるを恐れ自ら其尾を斷つといふ。桐花もこんな美しい色を持つてゐるのだから、天地自然の性を全うさせて斬り倒すことはせぬがよい。それよりも私が思ふには五人の壯士をして此桐を拔いて宮城に移さしめ、上は月中の桂に對し、下は階前の蓂を覆ひ、君の爲に綠陰を布き、君の爲に淸風を送り、鳳凰を其上に棲ましめて君の萬歲を唱へしめたいものだ。それほどの材能ある此桐がこんな巖崖の間に埋もれてゐるのは氣の毒なことだ。どうぞ枝の上に余が姓名を書いておいてくれ。後日余が勢力を得るを待つて之を天子に獻上するであらう。

【餘論】唐宋詩醇に、「元詩中、爾生不得所。我願截爲琴。安置君王側。調和元首音の句あり。此詩前段命意相似たり。所謂同じき者は自ら異にする能はざるなり。我思五丁力以下、推廣して之を言ひ放聲大作す。所謂異る者は强ひて同うする能はざるなり。詞意之を杜甫の入蜀鳳凰臺の一章に本づく。然れども彼は淒涼激楚を以て勝り、此は則ち纏綿濃至、一唱三歎。知るべし居易世に用ひらるるに意なき者に非るを。旋用ひられて旋黜けられ、其才を覓るを獲ざりしを惜むのみ」とある。

和大觜烏　大觜烏に和す

烏者種有二。名同性不同。　烏は種に二つ有り、名同じくして性同じからず。
觜小者慈孝。觜大者貪庸。　觜小なる者は慈孝に、觜大なるは貪庸なり。

觜大命又長。生來十餘冬。 觜大なるは命又長し、生來十餘冬。

物老顏色變。頭毛白茸茸(一)。 物老いて顏色變じ、頭毛白うして茸茸たり。

飛來庭樹上。初但驚兒童。 庭樹の上に飛び來つて、初は但兒童を驚かす。

老巫生奸計。與烏意潛通。 老巫奸計を生し、烏の意と潛に通ず。

云是非凡鳥。遙見起敬恭。 云ふ是れ凡鳥に非ず、遙に見て敬恭を起す。

千歲乃一出。喜賀主人翁。 千歲にして乃ち一たび出づ、主人翁に喜賀あり。

祥瑞來白日。神靈占知風。 祥瑞白日來り、神靈占うて風を知る。

陰作北斗使。能爲人吉凶。 陰に北斗の使と作り、能く人の吉凶を爲す。

此鳥所止家。家產日夜豐。 此の鳥の止る所の家、家產日夜に豐かなり。

上以致壽(二)考。下可宜田農。 上は以て壽考を致し、下は田農に宜しかる可しと。

主人富家子。身老心童蒙。 主人富家の子、身は老いて心は童蒙なり。

隨巫拜復祝。婦姑亦相從。 巫に隨ひて拜し復た祝し、婦姑も亦相從ふ。

殺雞薦其肉。敬若禋六(三)宗。 雞を殺して其肉を薦め、敬すること六宗を禋するが若し。

烏喜張大觜。飛接在虛空。 烏喜びて大觜を張り、飛接して虛空に在り。

烏既飽羶(四)腥。巫亦饗甘濃。 烏既に羶腥に飽き、巫も亦甘濃に饗せらる。

烏巫互相利。不復兩西東。 烏巫互に相利して、復た兩ながら西東せず。

日日營巢窟。稍稍近(五)房櫳。 日日に巢窟を營み、稍稍に房櫳に近づく。

雖生八九子。誰辨其雌雄。 八九子を生むと雖も、誰か其の雌雄を辨せん。

群雛又長成。衆觜逞殘(六)兒。 群雛又長成し、衆觜殘兒を逞しうす。

探巢吞鷇卵。入蔟啄蠶蟲。 巢を探りて鷇卵を吞み、蔟に入りて蠶蟲を啄む。

豈無乘秋隼。羈絆委高墉。 豈秋に乘ずる隼無からんや、羈絆せられて高墉に委ぬ。

但食烏殘肉。無施搏擊功。 但烏の殘肉を食ひ、搏擊の功を施す無し。

亦有能言鸚。翅碧觜(七)距紅。 亦能言の鸚有り、翅碧くして觜距紅なり。

暫曾說烏罪。囚閉在深籠。 暫く曾て烏の罪を說き、囚閉せられて深籠に在り。

青青窓前柳。鬱鬱井上桐。 青青たる窓前の柳、鬱鬱たる井上の桐。

貪烏占栖息。慈烏獨不容。 貪烏栖息を占め、慈烏獨容れられず。

慈烏爾奚爲。來往何憧憧。(八) 慈烏爾奚爲ぞ、來往して何ぞ憧憧たる。

曉去先晨鼓。暮歸後昏鐘。 曉に去ること晨鼓に先ち、暮に歸ること昏鐘に後る。

辛苦塵土間。飛啄禾黍叢。 塵土の間に辛苦して、禾黍の叢に飛び啄み、

得食將母哺。飢腸不自充。 食を得て將に母に哺せんとし、飢腸自ら充たず。

主人憎慈烏。命子削彈弓。 主人慈烏を憎み、子に命じて彈弓を削らしむ。

絃續會稽竹。丸鑄荊山銅。 絃は會稽の竹を續ぎ、丸は荊山の銅を鑄る。

慈烏求母食。飛下爾庭中。 慈烏母の食を求め、爾が庭中に飛び下る。

數粒未入口。一丸已中胷。 數粒未口に入らざるに、一丸已に胷に中る。

仰天號一聲。似欲訴蒼穹。(九) 天に仰ぎて號ぶこと一聲、蒼穹に訴へんと欲するに似たり。

(一〇)反哺日未足。非是惜微躬。 反哺日未だ足らず、是れ微躬を惜むに非ず。

誰能持此寃。一爲問化工。(一一) 誰か能く此の寃を持し、一たび爲に化工に問ふ。

胡然大觜烏。竟得天年終。 胡然ぞ大觜の烏、竟に天年を得て終る。

【字解】【一】茸茸 亂れ生ずる貌。【二】壽考 長命なり。【三】六宗 書經堯典に、禋于六宗。孔傳に精意以て享するを禋といふ。其祀六あり。四時なり寒暑なり日なり月なり星なり水旱なり。【四】膿腥 肥肉なり。【五】房櫳 人家なり。【六】殘兇 脊毒なり。【七】觜距 距はケヅメ。【八】憧憧 定まらざる貌。【九】蒼穹 天なり。【一〇】反哺 慈鳥が己の食を母に與へて母を養ふこと。【一一】化工 天帝。造物者。

【詩意】 烏に二種類ある。名は同じでも性質はまるで違ふ。觜の小さいのは慈孝で觜の大きいのは貪庸である。又觜の大きい方は長命で、生れて十餘年を經ると頭の毛が白くなり、庭樹の上に飛び來つて兒童等を驚かしなどする。その中に老巫が奸計を考へ出し烏の意を惡用し、この烏は普通の烏ではない、一目見れば忽ち恭敬の心を起させる。千歲に一たび出るので、出れば主人に目出たいことがある。祥瑞は白日に現れ、北斗の使となつたり、人の吉凶を占つたりする。此烏が屋根に止れば家も富み長命も出來る」などといふ。富家の主人は年は取つても心は兒童も同樣だから、忽ち巫の妄言を信じて婦姑を從へて烏を拜し、雞を殺しなどして烏に供へること神を祭るやうである。かくて烏も巫も東西に奔走せずとも坐ながら甘い汁を吸ふ。かくて段段人家の近くに巢を營み、八九羽の雛を生む。其雛が成長すると燕の卵を呑み鷇を啄むなど殘害の限を盡す。秋に乘じ鷙鳥を懼れしめる隼はあつても、高い墻の上に縛られて烏の食ひ殘りを食つてゐるやうな狀態だから、到底烏を搏擊する力はない。又物を言ふ鸚鵡はあつても、烏の罪を言ひ立てた爲に深籠の中に幽閉せられてしまつた。かくて此貪烏のみが窓前の柳、井上の桐の綠陰濃かな所に安樂に栖んでゐる。打つて變つて慈烏の方は人から疏ん

せられ、そはそはとして落ちつかず。朝から晩まで齷齪として食を求め、食を得て母に哺せんとするので自分はいつも飢ゑてゐる。まして主人は慈烏を憎み、子に命じて彈弓を作らせ慈烏が來ると射させるので、慈烏は天を仰いで號泣する。己の死を惜むのではなく、反哺の孝を盡す日のないのを悲むのである。誰か此の寃枉を烏に代つて天に訴へるであらう。なぜ彼の大觜の烏は天命を全うして終り、慈烏は非命の最期を遂げるのであるかと。

答四(一)皓廟

四皓廟に答ふ

天下有道見。無道卷懷之。
天下道有れば見はれ、道無ければ卷きて之を懷にす。

此乃聖人語。吾聞諸仲(二)尼。
此れ乃ち聖人の語なり、吾諸を仲尼に聞けり。

(三)矯矯四先生。同稟希(四)世資。
矯矯たる四先生、同じく希世の資を稟けたり。

隨時有顯晦。秉道無(五)磷緇。
時に隨つて顯晦有り、道を秉りて磷緇無し。

(六)秦皇肆暴虐。二世遘亂離。
秦皇暴虐を肆にし、二世亂離に遘ふ。

先生相隨去。商嶺(七)采紫芝。
先生相隨つて去り、商嶺に紫芝を采る。

君看秦獄中。戮辱者李斯。
君看よ秦獄の中、戮辱せらるる者は李斯なり。

(八)劉項爭天下。謀臣竟悅隨。
劉項天下を爭ひ、謀臣竟に悅び隨ふ。

先生如鸞鶴。去入冥(九)冥飛。
先生は鸞鶴の如く、去つて冥冥に入つて飛ぶ。

君看齊(一〇)鼎中。燋(一一)爛者酈其。
君看よ齊鼎の中、燋爛せらるる者は酈其なり。

(一二)子房得沛公。自謂相遇遲。
子房は沛公を得、自ら謂ふ相遇ふこと遲しと。

(一三)八難掉舌樞。三(一四)略役心機。
八難舌樞を掉し、三略心機を役す。

辛苦十數年。晝夜形(一五)神疲。
辛苦すること十數年、晝夜形神疲る。

竟雜霸者道。徒稱帝者師。
竟に霸者の道を雜へ、徒に帝者の師と稱す。

子房爾則能。此非吾所宜。
子房爾は則ち能くす、此れ吾が宜しとする所に非ず。

(一六)漢高之季年。嬖寵鍾所私。
漢高の季年、嬖寵私する所に鍾り、

(一七)冢嫡欲廢奪。骨肉相憂疑。
冢嫡をば廢し奪はんと欲し、骨肉相憂疑す。

豈無子房口。口舌無所施。
豈に子房が口無からんや、口舌施す所無きのみ。

亦有陳(一八)平心。心計將何爲。
亦陳平が心有るも、心計將何をか爲さん。

(一九)皤皤四先生。高冠危映眉。
皤皤たる四先生、高冠危く眉に映す。

從容下南山(二〇)。顧眄入東闈(二一)。　從容として南山を下り、顧眄して東闈に入る。
前瞻惠太子(二二)。左右生羽儀(二三)。　前に惠太子を瞻て、左右に羽儀を生ず。
却顧戚夫人。楚舞無光輝。　却きて戚夫人を顧みるに、楚舞光輝無し。
心不畫一計。口不吐一詞。　心に一計を畫せず、口に一詞を吐かず。
闇定天下本。遂安劉氏危。　闇に天下の本を定め、遂に劉氏の危きを安んず。
子房吾則能。此非爾所知。　子房は吾則ち能くす、此れ爾が知る所に非ず。
先生道既光。太子禮甚卑。　先生道既に光れり、太子禮甚だ卑し。
(二四)安車留不住。功成棄如遺。　安車留むれども住らず、功成つて棄つること遺れたるが如し。
如彼旱天雲。一雨百穀滋。　彼の旱天の雲の如く、一たび雨ふつて百穀滋ふ。
澤則在天下。雲復歸希夷(二五)。　澤ひは則ち天下に在り、雲復た希夷に歸る。
勿高巢與由(二六)。勿尙呂與伊(二七)。　巢と由とを高しとすること勿れ、呂と伊とを尙ぶこと勿れ。
巢由往不返。伊呂去不歸。　巢由往いて返らず、伊呂去つて歸らず。
豈如四先生。出處兩逶迤(二八)。　豈に四先生の、出處兩ながら逶迤たるに如かんや。
何必長隱逸。何必長濟時。　何ぞ必ずしも長く隱逸せん、何ぞ必ずしも長く時を濟はん。
由來聖人道。無朕不可窺。　由來聖人の道、朕なくして窺ふ可からず。
卷之不盈握。舒之亙八陲(二九)。　之を卷けば握に盈たず、之を舒ぶれば八陲に亙る。
先生道甚明。夫子猶或非(三〇)。　先生道甚だ明かなり、夫子猶或は非る。
願子辨其惑。爲予吟此詩。　願はくは子の其惑を辨せんことを、爲に予此詩を吟ず。

【字解】【一】四皓　卷二讀史五首の商山を見よ。【二】仲尼　孔子の字。【三】嬌嬌　高く擧る貌。【四】希世　世に稀なること。【五】磷緇　磷は薄くなること。緇は黑くなること。論語陽貨篇に、不曰堅乎、磨而不磷、不曰白乎、涅而不緇とある。【六】秦皇　秦の始皇帝。【七】商嶺　商山なり。紫芝は靈草。【八】劉項　劉邦と項羽。【九】冥冥　天空。【一〇】齊鼎　齊の鼎。鼎は人を烹殺すもの。【一一】燋爛　こげただれる。酈其は酈食其なり。劉邦に事へ軾に憑りて齊の七十餘城を下す。韓信齊を襲ふに及び齊、食其己を欺くとなし遂に之を烹る。【一二】子房　張良の字。沛公　即ち劉邦。【一三】八難　酈食其劉邦に說き六國の後を諸侯として立てんとするや、張良之を非とし其の八難を指摘せり。舌幅は舌根といふが如し。【一四】三略　李康の運命論に「張良受黃石之符、誦三略之說」とある。【一五】形神　肉體と精神。【一六】漢高　漢の高祖、即ち劉邦。季年は末年なり。【一七】冢嫡　長子なり。初め戚姬寵あり趙王如意を生む。呂后疎んぜらる。太子仁弱なり。高祖如意の己に似たるを以て太子を廢して如意を立てんと欲す。呂后人をして計を張良に問はしむ。良曰く、此れ口舌を以て爭ひ難し。願ふに上商山の四皓を高しとす。然も招致する能はず。今太子をして禮を厚うして之を召さしめ、從へて入朝せば、是れ則ち一助なりと。因つて其策に從ひ、太子をして四皓を從へて入朝せしむ。上驚く。乃ち戚夫人を召して之を指示して曰く、我太子を易へんと欲するも、彼の四人の者之を輔く。羽翼已に成る、動かし難しと。【一八】陳平　漢の高祖の時の謀臣。【一九】皤皤　白髮の貌。【二〇】南山　長安の南に在る終南山。商山

は終南山脈の中に在る。【二一】東閣 太子の宮。【二二】惠太子 漢の高祖の太子で、諡して惠帝といふ。【二三】羽儀 羽翼といふが如し。【二四】安車 坐乘の車。【二五】希夷 老子に、之を視れども聞えず、名づけて希といふ。之を聽けども聞えず、名づけて夷といふ。【二六】巢與ㇾ由 讀史五首の潁川を見よ。【二七】呂與ㇾ伊 周の武王を輔けた呂尙と殷の湯王を輔けた伊尹。【二八】逶迤 斜に行く貌。【二九】八隴 八方のはて。【三〇】夫子 元稹を指す。

【詩意】 天下道あれば則ち見はれ（論語泰伯篇）邦道なければ則ち卷いて之を懷にすべし（論語衞靈公篇）とは、此れ聖人孔子の語である。漢の初の商山の四先生（東園公・綺里季・夏黃公・甪里先生）は稀世の才德を抱き世の汙隆に隨つて或は顯れ或は隱れ、道德を守つて終始變じなかつた。秦の始皇の暴虐を肆にし二世皇帝の兵亂に遇ふや、四人相伴うて商山に隱れた。此時秦の丞相李斯は獄に下されて刑死した。劉邦・項羽の天下を爭ふに及び、智謀の士は之に隨つて功名を立てんとした。然るに四先生は超然として高く擧り、鸞鶴の中天に飛ぶが如くであつた。酈食其の如きは功名に驅られて鼎鑊の中に烹らるるに至つた。張良は劉邦に仕へ、八難・三略を說き智辯無雙と稱せられたが、苦辛積年心身共に疲れ、霸道を雜へて帝者の師となつたものの、眞の帝王の道を得た者ではない。四先生は冷笑して言つた。子房よ、此の如きは汝の能くする所であるが、吾が好む所ではないと。高祖の末年、私愛する所の戚夫人に溺れ、太子を廢して趙王如意を立てようとした。一族大に憂懼したが張良の智辯も陳平の心計も如何ともすることが出來なかつた。時に四先生は從容として山を下り東宮に入り太子を輔けて羽翼を成した。翻つて戚夫人を見れば光輝を失つて憔悴するのみであつた。ああ四先生は心に一計を畫せず口に一辭を吐かずして國本を固うし劉氏を安んじた。四先生は心の中に言つた。子房よ此の如きは吾の能くする所で汝の知る所ではないと。四先生の道既に天下に輝いたが、太子は之を禮するの道を知らなかつたので、四先生は再び山に歸つてしまつた。其出處進退は恰も旱天の雲一たび雨となつて百穀を潤せば、また無形の雲に歸ると同じである。巢父・許由・呂尙・伊尹は世の稱讚する所であるが、一たび此世を退くや復還らなかつた。四先生の出處に囚はれず優容迫らず、必ずしも隱遁を期せず、必ずしも世務に拘らないのには及ばない。由來聖人の道は迹の求むべきなく、之を卷けば掌中に收まり、之を舒ぶれば八方に擴がるものである。四先生の道は甚だ明かである。然るに君は之を非としてゐる。予因つて此詩を吟じて君の惑を解かんとするのである。

【餘論】 唐宋詩醇に、「元詩、四皓惠帝を定めて以て呂氏の禍を釀すを責む。此れ事後の論、未だ苛に過ぐるを免れず。假令當年長を廢し愛を立て、如意をして位を嗣がしむるも、恃みて以て孤を託する所は獨り一周昌のみ。絳・灌諸人未だ必ずしも帖然心服せず。且產・祿輩根蒂深固、呂雉構患益急にして意外の變なきを保せんや。居易之を駁す。自ら是れ正論。起、孔子の語を引き、末又聖人の道に歸到し、前後照應す。中間子房を以て陪となす。蓋し劉項逐鹿の時に當り、羣雄擾擾皆功名の士、子房獨り道に入るの姿を具す。其傑出せるものなり。賓を借りて主を定む。身分愈高し。手に隨う

て陳平を帶出す。則ち賓中の賓なり。末又伊呂巣由を以て襯となす。議論瀾翻竭きず。是れ作文の法を以て之を行る。直に一篇四皓論に當てて讀むべし」とある。

和雉媒(一)

雉媒に和す

吟君雉媒什(二)。一哂復一歎。　君が雉媒の什を吟じ、一たび哂ひ復た一たび歎く。

和之一何晚。今日乃成篇。　之に和すること一に何ぞ晩き、今日乃ち篇を成す。

豈唯鳥有之。抑亦人復然。　豈に唯鳥のみ之れ有らんや、抑亦人も復然り。

(三)張陳刎頸交。竟以勢不完。　張陳刎頸の交、竟に勢を以て完からず。

至今不平氣。塞絕泜(四)水源。　今に至るまで不平の氣、泜水の源を塞絕す。

(五)趙襄骨肉親。亦以利相殘。　趙襄が骨肉の親、亦利を以て相殘ふ。

至今不善名。高於磨(六)笄山。　今に至るまで不善の名、磨笄山よりも高し。

況此籠中雉。志在飲啄間。　況や此籠中の雉、志は飲啄の間に在り。

(七)稻粱暫入口。性已隨人遷。　稻粱暫く口に入れば、性已に人に隨つて遷る。

身苦亦自忘。同族何足言。　身の苦しきも亦自ら忘る、同族何ぞ言ふに足らん。

但恨爲媒拙。不足以自全。　但恨む媒を爲すこと拙、以て自ら全うするに足らざるを。

勸君今日後。養鳥養青鸞。　君に勸む今日より後、鳥を養はば青鸞を養へ。

青鸞一失侶。至死守孤單。　青鸞一たび侶を失へば、死に至るまで孤單を守る。

勸君今日後。結客結任(八)安。　君に勸む今日より後、客に結ばば任安に結べ。

主人賓客去。獨住在門(九)闌。　主人賓客去るも、獨り住まつて門闌に在り。

【字解】【一】雉媒　雉を囮即ち媒となし、他の雉を誘うて之を捕ふ。元稹が詩に、同族相誘ひ相欺く。その不仁不智を責む。【二】什　詩篇。【三】張陳　張耳と陳餘とは刎頸の交をなししも後隙あり。【四】泜水　川の名。韓信張耳と陳餘を泜川の邊に斬る。【五】趙襄　趙襄子。【六】磨笄山　山の名。史記趙世家に見ゆ。【七】稻粱　米の上等な類をいふ。【八】任安　嘗て大將軍衞青の舍人となる。後青の門下多く去つて霍去病に事ふ。獨り安肯て去らず。【九】門闌　闌は欄干。

【詩意】君の雉媒と題する詩を讀んで、一たびは哂ひ又一たびは歎いた。沈吟して之に和すること遲く、今日始めて此篇を作つた。君は雉の不仁不智を責めるけれども、それは唯鳥ばかりではない。人でも同じ事だ。張耳と陳餘とは初め刎頸の交をなしたが勢力の爭から終を全うせず。不平の氣が今日まで殘存して泜水の源を塞ぐほどである。又趙襄子兄弟も利慾の爲に相攻伐し、不善の名が磨笄

山よりも高いくらゐだ、況んや區區たる籠中の雉の如きは、欲する所は唯飲啄に在るので、稻粱が口にはひれば忽ち人に馴れて身の苦をも忘れるのだから、同族相欺くとも深く咎むるには足らない。ただ囮となつて他の雉を誘ふことが拙なる爲、其身を全うすることが出來ないのを恐れるのみだ。されば君に勸めるが鳥を飼ふならば青鸞を飼ひなさい。青鸞は一たび其侶を失へば、死ぬまで他の鳥と交らない。又交を結ぶならば任安の如き人と結びなさい。任安は主人の賓客皆去るとも、獨り其家に留り門戶を守るであらう。

【餘論】唐宋詩醇に、「正意多く喩意少し。言下竦然として驚心動魄す」とある。

和松樹

松樹に和す

亭亭(一)山上松。一一生朝陽(二)。
亭亭たる山上の松、一一朝陽に生じ、

森聳上參天。柯條(三)百尺長。
森聳して上天に參り、柯條百尺長し。

漠漠塵中槐。兩兩夾康莊(四)。
漠漠たる塵中の槐、兩兩康莊を夾み、

婆娑(五)低覆地。枝幹亦尋常(六)。
婆娑として低れて地を覆ひ、枝幹も亦尋常なり。

八月白露降。槐葉次第黃。
八月白露降り、槐葉次第に黃なり。

歲暮滿山雪。松色鬱青蒼。
歲暮れて滿山の雪、松色鬱として青蒼。

彼如君子心。秉操貫冰霜。
彼は君子の心の如く、操を秉りて冰霜を貫く。

此如小人面。變態隨炎涼。
此は小人の面の如く、態を變じて炎涼に隨ふ。

共知松勝槐。誠欲栽道傍。
共に知る松の槐に勝るを、誠に道傍に栽ゑんと欲す。

糞土種瑤草(七)。瑤草終不芳。
糞土に瑤草を種うるも、瑤草終に芳しからず。

倘可以斧斤(八)。伐之爲棟梁。
倘はくは斧斤を以て、之を伐つて棟梁と爲す可し。

殺身獲其所。爲君構明堂。
身を殺して其所を獲、君が爲に明堂を構へん。

不然終天年。老死在南岡。
然らずんば天年を終り、老死して南岡に在らん。

不願亞枝葉。低隨槐樹行。
枝葉を亞れ、低れて槐樹の行に隨ふを願はず。

【字解】【一】亭亭　高く立つ貌。【二】朝陽　山の東をいふ。詩經に、「鳳凰鳴矣、于彼朝陽」とある。【三】柯條　枝なり。【四】康莊　大きな道路。【五】婆娑　舞ふ貌。【六】尋常　尋は八尺、常は一丈六尺。【七】瑤草　仙草なり。【八】斧斤　をの、まさかり。

【詩意】山上の松が亭亭として山の東に聳え立ち枝が百尺も長い。槐の樹は塵の濛濛とあがる道の兩

側に植ゑられ、其枝もせいぜい八尺か一丈ぐらゐだ。八月になつて白露の降る頃には槐の葉は黄色になるが、歳の暮の滿山雪に鎖さるる時でも松は緑を保つてゐる。松は君子の心と同じで氷霜に屈せず操を立てとほすが、槐は小人の面と同じで炎涼に隨つて其態を變へる。誰でも松の槐にまさることを知つて之を道傍に植ゑようとするが、それは糞土に仙草を植ゑても終に芳香を放たないと同じであるから、松は矢張斧斤を以て之を伐り、棟梁にされることを願ふであらう。さすればたとひ斬られても君主の明堂の建築材料となることが出來る。若し然らずば老死するまで岡の上に立つことを願ふであらう。枝葉を垂れて槐と肩を竝べることは本意であるまい。

答箭鏃

箭鏃に答ふ

(一)矢人職司憂。爲箭恐不精。　矢人職司の憂、箭を爲つて精しからざるを恐る。
精則利(二)其鏃。錯磨鋒鏑成。　精しければ則ち其鏃を利し、錯磨して鋒鏑成る。
揷以青竹簳(三)。羽之赤雁翎。　揷むに青竹の簳を以てし、之に赤雁の翎を羽つく。
勿言分寸鐵。爲用乃長兵(四)。　言ふこと勿れ分寸の鐵と、用を爲すこと乃ち長兵。
聞有狗盜者。晝伏夜潛行。　狗盜の者有り、晝伏して夜潛行すと聞けば、
摩弓拭箭鏃。夜射不待明。　弓を摩で箭鏃を拭ひ、夜射て明くるを待たず。
一盜既流血。百犬同吠聲。　一盜既に血を流し、百犬吠聲を同じうし、
(五)狺狺嘷不已。主人爲之驚。　狺狺として嘷びて已まず、主人之が爲に驚く。
盜心憎主人。主人不知情。　盜心に主人を憎む、主人情を知らず、
反責鏃太利。矢人獲罪名。　反つて鏃の太だ利なるを責め、矢人罪名を獲たり。
寄言控(六)弦者。願君少留聽。　言を弦を控く者に寄す、願はくは君少く留りて聽け。
何不向西射。西天有狼星(七)。　何ぞ西に向つて射ざる、西天に狼星有り。
何不向東射。東海有長鯨。　何ぞ東に向つて射ざる、東海に長鯨有り。
不然學仁貴(八)。三矢平虜廷(九)。　然らずんば仁貴を學んで、三矢虜廷を平げよ。
不然學仲連(一〇)。一發下燕城。　然らずんば仲連を學んで、一發燕城を下せ。
胡爲射小盜。此用無乃輕。　胡爲ぞ小盜を射る、此用乃ち輕き無からんや。
徒沾一點血。虛汚箭頭腥。　徒に一點の血に沾し、虛しく箭頭を汚して腥くせんや。

【字解】【一】矢人　矢を作る人。【二】利　鋭くする。【三】簳　矢竹。【四】長兵　長距離に用ふる武器。【五】狺狺　犬の吠ゆる聲。【六】控弦　弓をひくこと。【七】狼星　星の名。【八】仁貴　唐の薛仁貴、突厥を天山に撃ち、三矢を發して三人を殺す。【九】虜廷　エビスの朝廷。【一〇】仲連　魯仲連、史記魯仲連傳に、齊の田單聊城を攻むること歳餘、士卒多く死して聊城下らず。魯連乃ち書を爲り之を矢に約し以て城中に射、燕の將に書を遺りて曰く云云とある。

【詩意】矢人の職責上の憂は矢を作つて精巧ならざるに在る。矢を精巧にするには先づ其鏃を鋭くし、之に矢竹を揷み雁の羽を附ける。さうすれば僅に一寸か五分の鐵ではあるが、長距離にも達する武器となる。竊盜があつて晝は匿れてゐて夜潛み行くと聞けば弓矢を携へて夜の明くるのを待たずに之を射止める。一人の盜が血を流せば多くの犬が吠え出す。すると主人も目を醒ます。盜は心に主人を憎む。主人は事情を明にせずに却つて鏃の鋭きに過ぎることを責め、矢人は其れが爲に罪を蒙るに至ることがある。因つて世の弓を彎く人に告げるが、西に向つて狼星を射、東に向つて長鯨を射るがよい。然らずは薛仁貴のやうに三矢を以て虜廷を平げ、魯仲連のやうに一發して燕の城を下すがよい。小泥棒などを射るのは用ひ方が輕いと謂はねばならない。ただ一點の血に沾して箭の先を汚すのは馬鹿らしいではないか。

和古社

古社に和す

廢村多年樹。生在古社隈。
廢村多年の樹、生じて古社の隈に在り。

爲作妖狐窟。心空身未摧。
爲に妖狐の窟と作る、心空しきも身未だ摧けず。

妖狐變美女。社樹成樓臺。
妖狐美女に變じ、社樹樓臺と成る。

黃昏行人過。見者心徘徊。
黃昏行人過ぎ、見る者心徘徊す。

飢鵰竟不捉。老犬反爲媒。
飢鵰も竟に捉へず、老犬も反つて媒を爲す。

歲媚年少客。十去九不廻。
歲ごとに媚ぶ年少の客、十去つて九は廻らず。

昨夜雲雨合。烈風驅迅雷。
昨夜雲雨合し、烈風迅雷を驅り、

風拔樹根出。雷劈社壇開。
風拔いて樹根出で、雷劈いて社壇開く。

飛電化爲火。妖狐燒作灰。
飛電化して火と爲り、妖狐燒けて灰と作る。

天明至其所。淸曠無氛埃。
天明けて其所に至れば、淸曠にして氛埃無し。

舊地葺村落。新田闢荒萊(一)。
舊地村落を葺き、新田荒萊を闢く。

始知天降火。不必常爲災。
始めて知る天火を降す、必ずしも常に災と爲らざるを。

勿謂神默默。勿謂天恢恢(二)。
謂ふ勿れ神默默たりと、謂ふ勿れ天恢恢たりと。

勿喜犬不捕。勿誇鵰不猜。　喜ぶ勿れ犬の捕へざるを、誇る勿れ鵰の猜はざるを。

寄言狐(三)媚者。天火有時來。　言を狐媚する者に寄す、天火時有つて來ると。

【字解】【一】荒萊　荒蕪の地。【二】恢恢　大なる貌。老子に天網恢恢、疎而不漏とある。【三】狐媚　狐の人を魅するが如く、媚侫して人を惑す者。

【詩意】荒廢した村の古い社殿に大木があつた。心は空になつても身はまだ摧けなかつたので、此木を狐が窟にした。狐が化けて美人となり其木が樓閣になつた。夕方其處を通る人は皆心を引かれて徘徊した。鵰も犬も狐が美人に化けてゐるので之を害しようとはしなかつた。年少い人は年年美人の色香に迷ひ込み、十人の中で九人は歸らなかつた。昨夜雨が降り出し風雷さへ加はつた。風は其木の根を拔き雷は社殿を破り、稻妻は化して火となり、狐は燒けて灰になつてしまつた。夜が明けてから行つて見ると塵一つ殘つてゐない。もとの土地に新しく村が出來、荒地を開墾して新田を作つた。玆に始めて天が火を降らしても必ずしも災を爲すとは限らないことを知つた。神も默視し天も咎めず犬も鵰も捕へないとて安心はならない。世の人を惑す者に忠告するが、此狐のやうな事をすると、いつかは天火が降つて來て燒き殺されるものだ。

和分水嶺　　分水嶺に和す

高嶺峻稜稜。細泉流亹亹。(二)　高嶺峻しうして稜稜、細泉流れて亹亹たり。

勢分合不得。東西隨所委。　勢分れて合し得ず、東西委する所に隨ふ。

悠悠草蔓底。濺濺石(三)罅裏。　悠悠たり草蔓の底、濺濺たり石罅の裏。

分流來幾年。晝夜兩如此。　分流して來幾年ぞ、晝夜兩つながら此の如し。

(四)朝宗遠不及。去海三千里。　朝宗遠くして及ばず、海を去ること三千里。

浸潤小無功。山苗長旱死。　浸潤小にして功無く、山苗長く旱死す。

(五)縈紆用無所。奔迫流不已。　縈紆用ふるに所無く、奔迫流れて已まず。

唯作嗚咽聲。夜入行人耳。　唯嗚咽の聲を作し、夜行人の耳に入る。

有源殊不竭。無坎終難止。　源有り殊に竭きず、坎無くして終に止り難し。

同出而異流。君看何所似。　同じく出でて流を異にす、君看よ何の似る所ぞ。

有似骨肉親。派別從玆始。　骨肉の親に似たる有り、派別玆より始まる。

又似勢利交。波瀾相背起。　又勢利の交に似たり、波瀾相背いて起る。

所以贈君詩。將君何所比。不比山上泉。比君井中水。所以に君に贈る詩、將君何の比する所ぞ。山上の泉に比せず、君が井中の水に比せよ。

【字解】【一】稜稜　角立つ貌。【二】壓壓　勉めて倦まざる貌。【三】石罅　石のすきま。【四】朝宗　河流の海に注ぐこと。【五】縈紆　めぐり流れる。

【詩意】高い嶺がかどかどしく聳え立ち、山の背を泉がちよろちよろと流れてゐる。一は東に一は西に流れて一たび分れては又合ふことは出來ない。或は悠悠と叢の下を流れたり、或は濺濺と石の隙を流れたりして晝夜舍めずに流れるが、大海に達するには遠くして及ばず、草木を潤すには功小にして足らない。ただ嗚咽の聲をなして夜旅人の心を悲ましめるのみ。源があるから絶えることがなく、坎がないから何處までも止まらない。さて同じ源から出た泉が末は東西に分れるのは何に似てゐるだらうか。兄弟の間柄にも似てゐるやうだ。利益を中心としての交際にも似てゐるやうだ。今余が君に贈る詩をば、君は何に比するか。分流する山上の泉には比せず、君が井中の水に比せられよ。

有木詩八首 并序

有木の詩八首 并に序

余嘗讀漢書列傳。見佞順婉㛹(一)圖身忘國。如張禹輩者。見惑上蠱下。交亂君親。如江充輩者。見暴狠(二)跋扈。壅君樹黨。如梁冀輩者。見色仁行違。先德後賊。如王莽輩者。又見外狀恢弘。中無實用者。又見附離(三)權勢。隨之覆亡者。其初皆有動人之才。足以感衆媚主。莫不合於始而敗於終也。因引風人(四)騷人之興。賦有木八章。不獨諷前人。亦儆後代爾。

【訓讀】余嘗て漢書の列傳を讀み、佞順婉㛹身を圖り國を忘るること、張禹が輩の如き者を見る。上を惑し下を蠱し君親を交亂すること、江充が輩の如き者を見る。暴狠跋扈して君を壅ぎ黨を樹つること、梁冀が輩の如き者を見る。色仁にして行は違ひ、德を先にして賊を後にすること、王莽が輩の如き者を見る。又外狀恢弘にして、中に實用無き者を見る。又權勢に附離し、之に隨つて覆亡する者を見る。其の初は、皆人を動すの才有つて、以て衆を感せしめ主に媚ぶるに足れり。始に合うて終に敗れざるは莫し。因つて風人騷人の興を引き、有木八章を賦す。獨前人を諷するのみならずして、亦後代を儆むる爾。

【字解】【一】婉㛹　柔媚なり。【二】暴狠　暴戾なり。跋扈は縱恣なり。【三】附離　就くこと。【四】風人　詩經の國風の詩の作者。騷人は楚辭を作つた詩人。

有木名弱柳。結根近清池。 木有り弱柳と名づく、根を結んで清池に近し。
風煙借顏色。雨露助華滋。(一) 風煙顏色を借し、雨露華滋を助く。
(二)峩峩白雪花。(三)嫋嫋青絲枝。 峩峩たる白雪の花、嫋嫋たり青絲の枝。
漸密陰自庇。轉高梢四垂。 漸く密にして陰自ら庇ひ、轉高うして梢四に垂る。
截枝扶爲杖。軟弱不自持。 枝を截りて扶けて杖と爲せば、軟弱にして自ら持せず。
折條用樊圃。柔脆非其宜。 條を折りて用つて圃を樊へば、柔脆にして其宜きに非ず。
爲樹信可翫。論材何所施。 樹と爲ては信に翫ぶ可し、材を論ずれば何の施す所ぞ。
可惜(四)金堤地。栽之徒爾爲。 惜む可し金堤の地、之を栽ゑて徒に爾爲す。

【字解】〔一〕華滋 花のうるほひ。〔二〕峩峩 高き貌。〔三〕嫋嫋 しなやかなる貌。〔四〕金堤 金は堤の堅きに喩ふ、張衡の賦に、「周以金堤、樹以柳杞」とある。

【題義】樹木を借りて喩となし、以て人事を諷したのである。

【詩意】弱柳といふ木がある。清池の邊に根を張り、風煙雨露の助を借り、白花を著け青絲を垂れ亭亭として立つてゐる。其枝を截つて杖にしても圃の籬にしても柔で用をなさす。樹としては賞翫するに足るが材としては役に立たない。之を金堤に栽ゑるのは無益な徒事だ。

〔二〕

有木名(一)櫻桃。得地早滋茂。 木有り櫻桃と名づく、地を得て早く滋茂す。
葉密獨承日。花繁偏受露。 葉密にして獨日を承け、花繁くして偏に露を受く。
迎風暗搖動。引鳥潛來去。 風を迎へて闇に搖動し、鳥を引いて潛に來去す。
鳥啄子難成。風來枝莫住。 鳥啄んで子成り難し、風來りて枝住ること莫し。
低軟易攀翫。佳人屢迴顧。 低軟攀ぢ翫び易し、佳人屢迴顧す。
色求桃李饒。心向(二)松筠妬。 色は桃李の饒を求め、心は松筠に向つて妬む。
好是映墻花。本非當軒樹。 好し是れ墻に映ずる花、本軒に當る樹に非ず。
所以(三)姓蕭人。曾爲伐櫻賦。 所以に蕭を姓とする人、曾て伐櫻の賦を爲る。

【字解】〔一〕櫻桃 落葉の灌木。春夏の交、小白花を開き梅の如し。實は小球の如し、熟すれば紅にして食ふべし。〔二〕松筠 松竹。〔三〕姓蕭人 唐書蕭穎士傳に、穎士集賢校理となる、李林甫其の己に下らざるを怒り廣陵參軍事に調す。穎士堪ふる能はす、伐櫻桃樹賦を作り、以て林甫を譏るとある。

【詩意】櫻桃といふ木がある。早く善い地を占めて根を張り、葉も花も密茂して日光雨露の惠も豐に

風を迎へ鳥を引いて暗に幅をきかせてゐる。鳥が啄むから實が成らず、風が來るから枝が動いてやまない。低く軟かで攀翫し易いので佳人（君主に喩ふ）が屢回顧する。色は桃李の如く美しからんことを求め、心は松竹の操を妬んでゐる。この木は墻のあたりに栽うべきもので、玄關の前などに栽うべきものではない。故に蕭穎士は伐櫻桃樹賦を作つて之を譏つた。

〔三〕

有木秋不凋。青青在江北。　木有り秋凋まず、青青として江北に在り。

謂爲洞庭(一)橘。美人自移植。　謂つて洞庭の橘と爲し、美人自ら移植す。

上受顧眄恩。下勤澆漑力。　上は顧眄の恩を受け、下は澆漑の力を勤む。

實成乃是枳。臭苦不堪食。　實成れば乃ち是れ枳、臭苦食ふに堪へず。

物有似是者。眞僞何由識。　物是に似たる者有り、眞僞何に由つてか識らん。

美人默無言。對之長歎息。　美人默して言無し、之に對して長く歎息す。

中含害物意。外矯凌霜色。　中物を害ふ意を含み、外霜を凌ぐの色を矯る。

仍向枝葉間。潛生刺如棘。　仍ほ枝葉の間に向つて、潛に刺を生ずること棘の如し。

【字解】（一）洞庭　江南の大湖。橘の名産地。

【詩意】ここに或る木がある。靑靑として江北に在る。美人（天子に喩ふ）が洞庭の橘であると謂うて自ら移し植ゑたのである。上の恩顧を受け灌漑の養をも受けて、いよいよ實が成つた所が、橘とはちがつた枳であつて、苦く臭くて食ふに堪へない。世には色色此に似たものがある。眞僞は容易にわからない。美人は枳を見て物も言はずに歎息してゐる。何となれば中には物を害する苦味を含み、表面は霜を凌ぐ節操を裝ひ、おまけに枝葉の間には棘のやうに刺まで生えてゐるから。

〔四〕

有木名杜(一)梨。陰森覆丘(二)壑。　木有り杜梨と名づく、陰森として丘壑を覆ふ。

心蠹已空朽。根深尙盤(三)薄。　心蠹して已に空朽、根深くして尙ほ盤薄。

媚狐言語巧。妖鳥聲音惡。　媚狐言語巧に、妖鳥聲音惡し。

憑此爲巢穴。往來互棲託。　此を憑んで巢穴と爲し、往來互に棲託す。

四傍五六本。枝葉相交錯。　四傍五六本、枝葉相交錯す。

借問因何生。秋風吹子落。　借問す何に因つて生ずる。秋風子を吹いて落す。

爲長社壇下。無人敢芟(四)斫。　社壇の下に長ずるが爲に、人の敢て芟斫する無し。

幾度野火來。風廻燒不著。　幾度か野火來るも、風廻つて燒き著かず。

【字解】【一】杜梨　果樹の名。【二】陰森　茂ること。【三】盤薄　はびこること。【四】斐斫　斬ること。

【詩意】杜梨といふ木があつて丘の上に茂つてゐる。樹心は蟲ばんで空になつてゐるが根は深くはびこつてゐて、惡狐や妖鳥が互に往來して其處に棲んでゐる。又其近所に五六本枝葉を交へて立つてゐる。どうしてそんなに澤山生じたかと問へば、秋風が實を吹き落して、其れから生じ、又祠堂の下に在るので誰も伐る者がなく、幾度か野火が起つたが風向が變つて燒失を免れたのだといふ。

〔五〕

有木香苒苒。(一)山頭生一蕟。(二)　木有り香苒苒、山頭に一蕟を生ず。

主人不知名。移種近軒闥。　主人名を知らず、移し種ゑて軒闥に近くす。

愛其有芳味。因以調麴蘗。(三)　其の芳味有るを愛し、因つて以て麴蘗を調ふ。

前後曾飲者。十人無一活。　前後曾て飲む者、十人に一りも活くるは無し。

豈徒悔封植。兼亦誤采掇。(四)　豈に徒に封植を悔ゆるのみならんや、兼ねて亦采掇を誤る。

試問識藥人。始知名野葛。　試みに藥を識る人に問へば、始めて野葛と名くるを知る。

年深已滋蔓。(五)刀斧不可伐。　年深く已に滋蔓し、刀斧も伐る可からず。

何時猛風來。爲我連枝拔。　何の時か猛風來り、我が爲に枝を連ねて拔かん。

【字解】【一】苒苒　盛なる貌。【二】一蕟　未詳。【三】麴蘗　酒をいふ。麴は麯に同じ。【四】采掇　摘み取ること。【五】滋蔓　はびこる。

【詩意】山上に一種の香木が生じた。何といふ名だか知らないが軒の近くに移植した。芳香があるので之を酒に調和して飲んだ所が十人が十人死んでしまつた。始めて移植したことを悔いたが取返しがつかない。因つて藥を識る人に問ひ、野葛といふものだとわかつた。併し今は根がはびこつて今更伐ることも出來なくなつた。どうか猛風が吹いて來て枝ごと拔き去つてくれればよい。

〔六〕

有木名水檉。遠望青童童。(一)　木有り水檉と名づく、遠望すれば青くして童童たり。

根株非勁挺。柯葉多蒙籠。(二)　根株勁く挺んづるに非ず、柯葉蒙籠多し。

彩翠色如柏。鱗皴皮似松。(三)　彩翠にして色柏の如く、鱗皴皮松に似たり。

爲同松柏類。得列嘉樹中。　松柏の類に同じきが爲に、嘉樹の中に列するを得たり。

枝弱不勝雪。勢高常懼風。　枝弱くして雪に勝へず、勢高うして常に風を懼る。

雪壓低還擧。風吹西復東。　雪壓せば低れて還た擧り、風吹けば西復た東す。

柔芳甚楊柳。早落先梧桐。　柔芳楊柳より甚しく、早く落ちて梧桐に先だつ。

惟有一堪賞。中心無蠹蟲。　惟一の賞するに堪へたる有り、中心蠹蟲無し。

【字解】【一】童童　樹蔭下垂の貌。【二】柯葉　枝葉。蒙籠は、おほひかぶさること。【三】鱗皴　鱗のやうに皺のよること。【四】蠹蟲　樹の心を食ふ蟲。

【詩意】水檉といふ木は遠くから見ると枝葉が垂れて青く見える。根も株も勁く高くはないが、こんもりと茂つてゐる。色は柏の如く肌は松のやうであるので美樹の中に算へられてゐる。雪が積れば高くもなり低くもなり、風が吹けば東にも西にも靡く。柔芳なることは柳にまさり、葉の落ちることは梧桐よりも早い。格別稱美すべき點はないが、ただ中心に害蟲のゐないのが取柄だ。

〔七〕

有木名凌霄。擢秀非孤標。　木有り凌霄と名づく、擢んで秀づるも孤標に非ず。

偶依一株樹。遂抽百尺條。　偶一株の樹に依り、遂に百尺の條を抽んづ。

託根附樹身。開花寄樹梢。　根を託して樹身に附き、花を開いて樹梢に寄る。

自謂得其勢。無因有動搖。　自ら謂へらく其勢を得、動搖有るに因無しと。

一旦樹摧倒。獨立暫飄颻。　一旦樹摧け倒れ、獨立して暫く飄颻す。

疾風從東起。吹折不終朝。　疾風東より起り、吹き折つて朝を終へず。

朝爲拂雲花。暮爲委地樵。　朝には雲を拂ふ花と爲り、暮には地に委する樵と爲る。

寄言立身者。勿學柔弱苗。　言を寄す身を立つる者、柔弱の苗を學ぶ勿れ。

【字解】【一】凌霄　のうぜんかづら。【二】孤標　獨り立つこと。【三】飄颻　ひるがへりあがる。【四】樵　散木なり。

【詩意】凌霄といふ木がある。高く立つてはゐるが獨力で立つてゐるのではなくて、他の樹にたよつて根を託し花を開いてゐるのだ。うまい形勢の地を得て大磐石だと思つてゐたが、一旦大樹が倒れると忽ち頼る所を失つてふらふらになつた。やがて風が起つて吹折られてしまつた。身を立てる者に忠告するが、決して此木のやうに人にたよつて立たうとするな。

〔八〕

有木名丹桂。四時香馥馥。　木有り丹桂と名づく、四時香馥馥たり。

花團夜雪明。葉剪春雲綠。　花は夜雪の明を團め、葉は春雲の綠を剪る。

風影淸似水。霜枝冷如玉。　風影淸うして水に似たり、霜枝冷にして玉の如し。

獨占小山幽。不容凡鳥宿。　獨小山の幽を占め、凡鳥の宿を容れず。
(一)匠人愛芳直。裁截爲廈屋。　匠人芳直を愛し、裁截して廈屋を爲す。
幹細力未成。用之君自速。　幹細くして力未だ成らず、之を用ふること君自ら速し。
重任雖大過。直心終不曲。　重任大いに過ぐと雖も、直心終に曲らず。
縱非梁棟材。猶勝尋常木。　縱ひ梁棟の材に非ざるも、猶尋常の木に勝らん。

【字解】【一】匠人　大工。

【詩意】丹桂といふ木がある。四時其香が高い。花は雪を團めたやうで夜でも白く、葉は綠の雲をちぎつたやうで、淸らかな狀は水の如く玉の如くである。山の深い所に在つて、凡鳥の棲などにはならない。大工が其芳直を愛して伐つて家屋を作つた。幹が細くて十分の力はないけれども決して曲るやうなことはない。棟梁の材ではないが、普通の木にまさること萬萬である。

【餘論】韻語陽修に、「樂天の有木八章、其六章は弱柳等に託して以て在位者を諷す。七章は權勢に附麗する者を諷す。八章に有木名丹桂といふは蓋し自ら謂ふなり。樂天素より李紳に善し。而も李德裕の黨に入らず。素より牛僧孺・楊虞卿に善し。而も李宗閔の黨に入らず。素より劉禹錫に善し。而も王伾・王叔文の黨に入らず。中立して倚らず、峻節凜然たり。自ら桂に比するも殆ど未だ過ぎたりとなさざるなり」とある。

歎魯二首

魯を歎ず二首

(一)季桓心豈忠。其富過(二)周公。　季桓心豈に忠ならんや、其富周公に過ぐ。
(三)陽貨道豈正。其權執國命。　陽貨道豈に正しからんや、其權國命を執る。
由來富與權。不繫才與賢。　由來富と權とは、才と權とに繫らず。
所託得其地。雖愚亦獲安。　託する所其地を得れば、愚と雖も亦安きを獲。
(四)彘肥因糞壤。鼠穩依社壇。　彘の肥ゆるは糞壤に因り、鼠の穩なるは社壇に依る。
蟲獸尚如此。豈謂無因緣。　蟲獸尙ほ此の如し、豈に因緣無しと謂はんや。

【字解】【一】季桓　季桓子、魯の大夫、名は斯。【二】周公　論語先進篇に、季氏周公より富めり、而るに求や之が爲に聚斂して之を附益す云云とある。【三】陽貨　季氏の家臣、名は虎、季桓子を囚へて魯の國政を專にした。【四】彘　豚なり。

【題義】魯の史實に就いて感ずる所を述べた詩である。

【詩意】季桓子は其心が忠ではなかつたが周公以上の富を持つてゐた。陽貨は其道が正しくはなかつ

たが、國政を專にするの權を得た。由來權と富とを得る者は必ずしも才子や賢者とは限つてゐない。其の居る所の地位がよければ愚者でも富と權とを得られるのである。豚が肥えるのは糞土の爲であり鼠の安穩なのは社に居るからである。人も此と同じく託する所の因緣によつて富や權を得られるのである。

〔二〕

(一)展禽胡爲者。直道竟(二)三黜。　展禽は胡爲る者ぞ、道を直くして竟に三たび黜けらる。
(三)顏子何如人。(四)屢空聊過日。　顏子は何如なる人ぞ、屢空うして聊か日を過ぐ。
皆懷(五)王佐道。不踐陪臣秩。　皆王佐の道を懷き、陪臣の秩を踐まず。
自古無奈何。命爲時所屈。　古より奈何ともする無し、命時の屈する所と爲る。
有知草木分。天各與其一。　草木の分の如き有り、天各其一を與ふ。
(六)荔枝非名花。牡丹無甘實。　荔枝は名花に非ず。牡丹は甘實無し。

【字解】【一】展禽　柳下惠なり。【二】三黜　論語微子篇に、柳下惠士師となり、三たび黜けらる云云とある。【三】顏子　孔子の弟子、名は回。【四】屢空　論語先進篇に、子曰、回也其庶乎、屢空云云とある。【五】王佐　天子を輔佐するに足る才能。【六】荔枝　果の名。

【詩意】柳下惠は如何なる人であつたか。正しき道を行つて而も三たび黜けられた。顏回は如何なる人であつたか。貧困で辛うじて日を送つた。皆王佐の才を抱きながら陪臣の位を踐むことも出來なかつた。運命の致す所は古來如何ともし難いのである。恰も草木の定分あると同じで、天は二つの特長は與へない。例へば荔枝は甘實はあるが美花はなく、牡丹は美花はあるが甘實はないやうなものだ。

反鮑明遠白頭吟

鮑明遠の白頭吟に反す

(一)炎炎者烈火。(二)營營者小蠅。　炎炎たる烈火、營營たる小蠅。
火不爇貞玉。蠅不點清冰。　火も貞玉を爇かず。蠅も清冰に點せず。
此苟無所受。彼莫能相仍。　此苟も受くる所無ければ、彼能く相仍る莫し。
乃知物性中。各有能不能。　乃ち知る物性の中、各能不能有るを。
古稱怨恨死。則人有所懲。　古稱す怨恨して死すれば、則ち人懲さるる所有りと。
懲淫或應可。在道未爲弘。　淫を懲す或は應に可なるべし、道に在ては未だ弘れりと爲さず。
譬如(三)蜩鷃徒。(四)啾啾啅龍鵬。　譬へば蜩鷃の徒、啾啾として龍鵬を啅ぶが如し。

宜當委之去。(五)寥廓高飛騰。　宜しく當に之を委てて去り、寥廓として高く飛び騰るべし。

豈能泥塵下。區區酬怨憎。　豈に能く泥塵の下、區區として怨憎に酬いんや。

胡爲坐自苦。呑悲仍撫膺。　胡爲れぞ坐に自ら苦しみ、悲を呑んで仍ほ膺を撫でん。

【字解】【一】炎炎　火の盛に燃える貌。【二】營營　往來する貌。【三】蜩鷃　蜩は蟬、鷃は斥鷃とて小鳥の名。莊子逍遙游篇に見ゆ。【四】啾啾　虫の聲、小聲なり。【五】寥廓　廣大なること。

【題義】文選卷二十八に鮑明遠の白頭吟が載せてある。この詩は其詩意に反對したものである。

【詩意】炎炎たる烈火でも堅固な玉を燒くことは出來ない。營營たる蠅でも清い氷に就くことは出來ない。さればこちらが受附けなければ、先方から侵してくることはないのである。故に物性の中に能不能があることがわかる。古より人を怨んで死すれば、怨まれた人が自ら懲りるといふが、他人の淫を懲すには或はよからうが、それでは己の道が弘まつたとは謂はれない。譬へば蜩や鷃が龍や鵬を相手にして叫ぶやうなものである。宜しく人の淫を相手にせず、超然として高く天上に翺翔するがよい。區區として塵土に於て怨憎に酬ゆるなどはつまらぬことだ。何とて自ら苦しんで胸を撫でるやうなことをしようぞ。

青塚

上有飢鷹號。下有枯蓬走。　上に飢鷹の號ぶ有り、下に枯蓬の走る有り。

茫茫邊(一)雪裏。一掬沙(二)培塿。　茫茫たる邊雪の裏、一掬沙培塿。

傳是昭君墓。埋閉蛾(三)眉久。　傳ふ是れ昭君の墓と、蛾眉を埋閉すること久し。

(四)凝脂化爲泥。鉛(五)黛復何有。　凝脂は化して泥と爲る、鉛黛復た何か有る。

時有陰怨氣。常生墳左右。　時に陰怨の氣有り、常に墳の左右に生ず。

鬱鬱如苦霧。不隨骨銷朽。　鬱鬱として苦霧の如し、骨に隨つて銷朽せず。

婦人無他才。榮枯繫(六)妍否。　婦人他才無し、榮枯妍否に繫る。

何乃明妃命。獨懸畫工手。　何ぞ乃ち明妃が命、獨畫工の手に懸れる。

(七)丹青一詿誤。白黑相紛(八)糺。　丹青一たび詿誤し、白黑相紛糺す。

遂使君眼中。西施作(九)嫫母。　遂に君の眼中をして、西施を嫫母と作さしむ。

同儕傾寵幸。(一〇)異數爲配偶。　同儕寵幸を傾け、異數配偶と爲る。

禍福安可知。美顏不如醜。　禍福安んぞ知る可けん、美顏は醜きに如かず。

何言二一時事一。可レ戒二千年後一。　何ぞ一時の事を言はん、千年の後を戒む可し。

特報二後來妹一。不レ須レ倚二眉首一。　特に後來の妹に報ず、須らく眉首を倚るべからず。

無レ辭レ挿二荊(一一)釵一。嫁作二貧家婦一。　辭すること無かれ荊釵を挿み、嫁して貧家の婦と作るを。

不レ見青塚上。行人(一二)爲澆レ酒。　見ずや青塚の上、行人爲に酒を澆ぐを。

【字解】【一】邊雪　邊塞の雪。【二】沙培塿　沙の小山。【三】蛾眉　美人をいふ。【四】凝脂　白き皮膚。詩經衞風碩人篇に膚如二凝脂一とある。【五】鉛黛　おしろい、まゆずみ。【六】妍否　美醜なり。【七】丹青　繪畫。【八】紛糺　まぎれ亂れる。【九】西施　古の美人の名。嫫母は古の醜婦の名。【一〇】異數　常ならぬ例。配偶は匈奴王の妻となつたこと。【一一】荊釵　いばらの釵。【一二】行人　路ゆく人。

【題義】青塚とは王昭君の墓である。今蒙古の綏遠道歸化城の南三十里に在る。王昭君、名は嬙、字は昭君（晉人司馬昭の諱を避けて改めて明君と稱し、後人又明妃と稱す）は漢の元帝の時選ばれて後宮に入つた。時に匈奴の呼韓邪單于が入朝して美人を求めて閼氏（匈奴の皇后）となさんとした。元帝の時に後宮の美人が數多ゐたので、元帝は畫工に命じて肖像を畫かしめ、其肖像畫を見て召し幸せられた。故に宮人は皆畫工に賄賂を贈つて美しく畫いてもらつたが、王昭君は美貌を恃んで賄賂を贈らなかつたので、元帝に御目にかかることも出來ずにゐたが、單于に妻すことにきめたので元帝が召して御覽になつた所が後宮第一の美人であつたので、匈奴にやることを悔いたが、既に決定してしまつたので今更如何ともすることが出來なかつた。そこで王昭君は戎服して馬に乘り琵琶を提げて塞を出て匈奴に入り、遂に匈奴で死んだのである。此詩は王昭君の不遇を憐んだのである。

【詩意】上には飢ゑた鷹が鳴いてゐる。下には枯れた蓬が風に吹かれて走つてゐる。茫茫たる雪に埋められた邊塞の中に、一握ほどの小さな塚がある、これが王昭君の墓だといふ。今や泥土と化して美人の俤は見る由もない。ただ怨氣が今以て消えずに塚の邊に霧のやうに罩めてゐる。一體婦人は、他に才能とてはないもので、身の榮枯は偏に其容貌の美醜に由るのだ。併し王昭君の運命はさうではなくて畫工の手に由つたので、畫工が誤つて醜く畫いたが爲に、君をして美人を醜婦と思はしめるに至つた。それが爲に同輩の宮人が君の御寵愛を得たのに、王昭君だけは匈奴に嫁するといふ異例に陷り、禍福顚倒し、美顏却つて醜に如かずといふことになつた。この事はただ一時の出來事ではない。よく世にある習であるから、特に後來の美人に忠告するが、決して己の美に誇つてはいけない。荊釵を挿して貧家の妻たることを厭うてはいけない。王昭君のやうに己の美を恃んでゐると、異域の鬼となつて、纔に行人が酒を澆いで其靈を祭るぐらゐのもので、來り弔ふ者もないやうな最後を遂げるであらう。

雜感

君子防悔（一）尤。賢人戒行（二）藏。　君子は悔尤を防ぎ、賢人は行藏を戒む。
嫌疑遠瓜（三）李。言動愼毫（四）芒。　嫌疑瓜李を遠ざけ、言動毫芒を愼む。
立教固如此。撫事有非常。　敎を立つること固より此の如し、事を撫すること常に非る有り。
（五）爲君持所感。仰面問蒼（六）蒼。　君が爲に所感を持し、面を仰いで蒼蒼に問ふ。
犬齧桃樹根。李樹反見傷。　犬桃樹の根を齧めば、李樹反つて傷つけらる。
老龜烹不爛。延禍及枯桑。　老龜烹れども爛れず、禍を延いて枯桑に及ぶ。
城門自焚爇。池魚罹其殃。　城門自ら焚爇し、池魚其の殃に罹る。
（七）陽貨肆兇暴。（八）仲尼畏於匡。　陽貨兇暴を肆にし、仲尼匡に畏れぬ。
（九）魯酒薄如水。邯鄲開戰場。　魯酒薄うして水の如く、邯鄲戰場を開く。
（一〇）伯禽鞭見血。過失由成王。　伯禽鞭たれて血を見、過失成王に由れり。
（一一）都尉身降虜。（一二）宮刑加子長。　都尉身から虜に降り、宮刑子長に加へらる。
（一三）呂安兄不道。都市殺嵇康。　呂安の兄不道にして、都市に嵇康を殺す。
斯人死已久。其事甚昭彰。　斯のごとき人死して已に久し、其事は甚だ昭彰なり。
是非不由己。禍患安可防。　是非己に由らず、禍患安んぞ防ぐ可き。
使我千（一四）載後。涕泗滿衣裳。　我をして千載の後、涕泗衣裳に滿たしむ。

【字解】【一】悔尤　くい、とがめ。【二】行藏　行は出でて道を行ふこと、藏は世を退いて隱れること。【三】瓜李　文選の古詩に君子防未然、不處嫌疑間、瓜田不納履、李下不整冠とある。【四】毫芒　微少の意。【五】爲君　君は世人を指す。【六】蒼蒼　天なり。【七】陽貨　魯の季氏の家臣、名は虎。孔子陳に往かんとして匡を過ぐ。匡人嘗て陽虎の暴する所となる。孔子の貌陽虎に似たり。匡人因つて孔子を野に圍む。【八】仲尼　孔子の字。【九】魯酒云云　莊子の胠篋篇に、魯酒薄而邯鄲圍、聖人生而大盜起とある。邯鄲は趙の都。【一〇】伯禽　周公の子。周公成王を誨ふるに、王に過あれば伯禽を撻つた。【一一】都尉　漢の李陵武帝の時騎都尉となり匈奴と戰つて功あり。後力竭きて匈奴に降る。【一二】宮刑　刑罰の名。子長は司馬遷の字。李陵が匈奴に降つた時司馬遷は之を辯護した爲に宮刑に處せられた。【一三】呂安　三國魏の人。嵇康と友とし善し。兄巽、安の不孝を誣ふ。康爲に其誣を明す。鍾會司馬昭に勸めて安及び康を殺さしめた。【一四】千載　千年。

【題義】世の是非禍福は必ずしも己に由るにあらず、思ひ設けぬ原因によつて不慮の禍に罹ることあるを歎じた詩である。

【詩意】君子は悔と尤とに至らぬやうに用心し、賢人は出處進退を警戒し、嫌疑に遠ざかり言動を愼むものである。敎はかくの如くに立ててはあるが、併し世間には不測の變といふことがあるから、意外の禍といふことがないとは謂はれない。因つて其譯を天に問うて見よう。犬が桃の樹を齧むと、李

309
65

の樹の枝を折つて犬を打たうとする爲に李の枝が傷けられ、老龜を烹ようとすると、老龜はなかなか烹えないで却つて枯桑が頻に燒かれる。城門に火事が起ると池の魚が災難に遇ひ、陽貨が亂暴を働いた爲に孔子が匡人に苦められ、魯の酒が薄かつた爲に趙の邯鄲が攻圍に遇つた。伯禽が鞭たれて血が流れたのは、實は成王が惡いからである。李陵が匈奴に降參した爲に司馬遷は宮刑に處せられ、呂安の兄が惡人であつた爲に、嵇康が町中で殺された。以上述べた人人は死して既に久しくなるが、意外の側杖を食つて禍に罹つた事實は今以て明である。かくの如く是非は必ずしも己に由るのではないから、禍の豫防は出來ないことだ。千載の後に生れた余輩をして此等の事實に直面して涙を流さしめる。

終

續國譯漢文大成

文學部 三十四

309
65

續 一〇

始

續國譯漢文大成

文學部 第三十四册（第九帙の二）

白樂天詩集 一の二

吉田德郎氏 寄贈本

309
65

白樂天詩集卷三

諷諭三 新樂府上 二十首

新(一)樂府 並序 元和四年爲左拾遺時作。

新樂府

序曰。凡九千二百五十二言。斷爲五十篇。篇無定(二)句。句無定字。繫(三)於意不繫於文。首句標(四)其目。卒(五)章顯其志。詩(六)三百之義也。其辭質而徑。欲見之者易諭也。其言直而切。欲聞之者深誡也。其事覈而實。使采(七)之者傳信也。其體順而律(八)。可以播於樂章歌曲也。總而言之。爲君爲臣爲民爲物爲事而作。不爲文而作也。

【訓讀】 序に曰く、凡て九千二百五十二言、斷めて五十篇と爲す。篇に定句無く句に定字無し。意に繫けて文に繫けず。首句に其目を標はし、卒章に其志を顯はすは、詩三百の義なり。其辭質にして

徑、之を見る者の諭り易からんことを欲してなり。其言直にして切、之を聞く者深く誡めんことを欲してなり。其事覈にして實、之を采る者をして信を傳へしめんとなり。其體順にして律、以て樂章歌曲に播す可し。總て之を言へば、君の爲め臣の爲め民の爲め物の爲め事の爲めにして作る、文の爲にして作らざるなり。

【字解】【一】新樂府　汪立名云く、元稹の集に李校書の新題樂府に和するあり。序に云く、予が友李公垂(名は紳)予に樂府新題二十首を眎ふ。雅より所謂虛しく文を爲らざるあり。予其の時を病ふるの尤急なる者を取り、列して之に和する蓋し十二のみ云云と。語未だ嘗て白に及ばす、而して此序中文李の作に和することを言はず。當に是れ李の作に因りて推廣する者なるべし云云と。【二】定句　一定の句數。【三】繫於意云云　目的は詩意に在るので文字を弄するに在るのではない。【四】標其目　この下に我邦に傳はる古寫本には、古十九首之例也とある。古十九首は文選の古詩十九首をいふ。【五】卒章　詩の結末の段。【六】詩三百　詩經をいふ。古寫本には詩三百篇とある。【七】采之者　此詩を採取する人。【八】律　音調の整つてゐること。

七德舞　美撥亂陳王業也

七德舞　亂を撥め王業を陳するを美するなり

(一)七德舞(二)七德歌。　七德の舞七德の歌、

傳自(三)武德至元和。　傳へて武德より元和に至る。

元和小臣白居易。　元和の小臣白居易、

觀舞聽歌知(四)樂意。　舞を見歌を聽きて樂意を知る。

樂終(五)稽首陳其事。　樂終つて稽首して其事を陳ぶ。

太宗十八擧義兵。　太宗十八にして義兵を擧げ、

(六)白旄黃鉞定(七)兩京。　白旄黃鉞兩京を定め、

(八)擒充戮竇四海淸。　充を擒にし竇を戮し四海淸し。

二十有四功業成。　二十有四功業成り、

二十有九卽帝位。　二十有九帝位に卽き、

三十有五致太平。　三十有五太平を致す。

功成理(九)定何神速。　功成り理定まること何ぞ神速なる。

速在(一〇)推心置人腹。　速は心を推して人の腹に置くに在り。

(一一)亡卒遺骸散帛收。　亡卒の遺骸帛を散じて收め、

飢人賣子分金贖。　飢人の賣子金を分つて贖ふ。

(一二)魏徵夢見天子泣。　魏徵夢に見えて天子泣き、

【字解】【一】七德舞　左傳宣公十二年に、夫れ武は暴を禁じ兵を戢め大を保ち功を定め民を安んじ衆を和し財を豐にするものなりとあり。之を武の七德となす。唐の太宗が舞を作つて之を七德舞と名づけた。【二】七德歌　七德舞の歌なり。その歌今傳はらず。【三】武德　唐の高祖の年號。元和は憲宗の年號。【四】樂意　舞樂を作られた趣意。【五】稽首　頭を垂れて地に至り暫く之をとどめるなり。【六】白旄　白い旄牛の尾、指揮するもの。黃鉞は黃金で飾つたマサカリ。刑具なり。【七】兩京　洛陽・長安。【八】充は王世充。竇は竇建德。【九】理定　理は治なり。唐の高宗の諱は治なる故、之を避けて理の字を代用す。【一〇】推心云云　後漢の光武帝の故事、赤心を推して人の腹中に置く

(一三)張謹哀聞辰日哭。 張謹哀聞して辰日哭す。
(一四)怨女三千放出宮。 怨女三千放して宮を出し、
(一五)死囚四百來歸獄。 死囚四百來つて獄に歸る。
剪鬚燒藥賜功臣。 鬚を剪り藥に燒いて功臣に賜ひ、
李勣嗚咽思殺身。 李勣嗚咽して身を殺さんことを思ふ。
含血吮瘡撫戰士。 血を含み瘡を吮うて戰士を撫し、
思摩奮呼乞效死。 思摩奮ひ呼んで死を效さんことを乞ふ。
(一六)不獨善戰善乘時。 獨り善く戰ひ善く時に乘ずるのみならず、
以心感人人心歸。 心を以て人を感せしめ人心歸す。
爾來一百九十載。 爾來一百九十載、
天下至今歌舞之。 天下今に至るまで之を歌舞す。
歌七德舞七德。 七德を歌ひ七德を舞ふ。
聖人有作垂無極。 聖人作有り無極に垂る。

なり。人を信じて疑はぬこと。

【一一】亡卒　死亡した兵卒。

【一二】魏徵　太宗の重臣。徵の病篤き時太宗は夢に徵と別れ、覺めて淚を流す。天子は一に子夜に作る。子夜は夜半なり。

【一三】張謹　張公謹の卒するや太宗哀禮を擧げんとす。有司奏す、今日は辰の日なり、陰陽家の忌む所なれば哭すべからずと。太宗情に於て忍ぶべからずとて遂に哀禮を擧げた。

【一四】怨女　夫のない女。太宗は宮女三千人を解放して嫁人に嫁せしめた。

【一五】死囚　貞觀六年、死刑の囚人三百九十人を縱して家に歸らしめ、明年秋來りて刑に就かんことを約した。期に至り悉く來りて刑に就き後るる者なし。

豈徒耀神武。 豈に徒神武を耀すのみならんや、
豈徒誇聖文。 豈に徒聖文に誇るのみならんや。
太宗意在陳王業。 太宗の意は王業を陳じ、
王業艱難示子孫。 王業の艱難をば子孫に示すに在り。

【一六】不獨善　この上、一本に間知の二字がある。

【題義】此詩は唐の太宗皇帝が隋末の禍亂を平定し、此舞を作つて王業を創める艱難を陳ね示したことをほめたのである。

【詩意】七德の舞、七德の歌が武德の御宇から今日まで傳つてゐる。元和の微臣たる白居易は此舞を觀、此歌を聽いて、此舞樂を製作せられた御趣意を知り、謹んでここに其事を陳べる。太宗皇帝は御年十八で義兵を擧げ、白旄や黃鉞を手にして洛陽・長安の二京を鎭定し、王世充や竇建德を誅戮し、二十四の時に至りて功業全く成り、二十九で天子の位に卽き、三十五で天下を太平ならしめられた。どうしてかくも速に治功が成つたかと申せば、それは太宗が人を信じて疑はぬからである。戰死した兵卒の骸骨をば金帛を散じて埋葬させたり、飢に迫つた人民が吾が子を賣つたのを金を分け與へて身受けさせたり、魏徵が御夢の中に別を告げた時、夜半に別れを悲んで御泣きになつたり、張公謹の死をお聞きになつて辰の日にも拘らず哭泣されたり、三千の宮女を解放したり、四百の死囚が約を違へずに

歸つたり、李勣が病氣の時、醫者が龍鬚を燒いて灰にして飮めば癒えると言つたので、太宗は己の鬚を剪り藥に燒いて勣に賜うたので、李勣は身を棄てて君恩に報いようと期したり、李思摩が負傷した時、太宗は其瘡を吮つてやつたので、李思摩が感激して太宗の爲に一身を捧げんことを乞うた如きは、皆其實例である。されば唯戰が上手でよい時運に乘じたから天下が取れたのではなく、眞心を以て人を感ぜしめたから自然と人が歸服したので、此舞や歌が作られてから百九十年の今日まで傳はつて亡びないのも之が爲である。さて七德の歌、七德の舞は、聖人たる太宗がお作りになつて無窮の後の世に殘されたもので、ただ己の聖文神武を見せびらかす爲ではなく、王業の艱難を述べ、その艱難をば子孫に示さうとの御趣意である。

法曲　美列聖正華聲也

法曲　列聖の華聲を正すを美するなり

（一）法曲法曲歌大定。（二）　法曲法曲大定を歌ふ、
（三）積德重熙有餘慶。　積德重熙餘慶有り。
（四）永徽之人舞而詠。　永徽の人舞うて詠ず。
法曲法曲舞霓裳。（五）　法曲法曲霓裳を舞ひ、
政和世理音洋洋。（六）　政和し世理まりて音洋洋たり。
（七）開元之人樂且康。　開元の人樂んで且つ康し。
法曲法曲歌堂堂。（八）　法曲法曲堂堂を歌ひ、
堂堂之慶垂無疆。　堂堂の慶無疆に垂る。
中宗肅宗復鴻業。（九）　中宗肅宗鴻業を復し、
唐祚中興萬萬葉。　唐祚中興萬萬葉。
法曲法曲雜夷歌。　法曲法曲夷歌を雜ふ。
夷聲邪亂華聲和。　夷聲は邪亂にして華聲は和なり。
以亂干和天寶末。（一〇）　亂を以て和を干す天寶の末、
明年胡塵（一一）犯宮闕。　明年胡塵宮闕を犯す。
乃知法曲本華風。　乃ち知る法曲は本華風なるを。
苟能審音與政通。（一二）　苟に能く音を審にせば政と通ず。
一從胡曲（一三）相參錯。　一たび胡曲の相參錯せしより、

【字解】【一】法曲　朝廷で定めた標準の樂曲。
【二】大定　一戎大定樂。高宗の時制定した樂曲である。
【三】積德重熙　代代の天皇が德光を積みかされゑ。
【四】永徽　高宗の年號。
【五】霓裳　霓裳羽衣曲。玄宗の時に制定した樂曲である。
【六】洋洋　盛なる貌。
【七】開元　玄宗の年號。
【八】堂堂　歌曲の名。自註に永隆元年太常丞李嗣眞、よく音律を審にし、能く興衰を知る。云く近ごろ樂府堂堂の曲あり、唐祚再興の兆也とあり。
【九】鴻業　大業なり。
【一〇】天寶末　自註に天寶十三載始めて諸道に詔して法曲を調せしめ、胡部の新聲と合作せしむ。識者深く之を異とす。
【一一】胡塵云云　安祿山叛し長安を陷れしこと。
【一二】與レ政通　禮記の樂記に、聲音之道、與レ政通矣とあり、音樂の正亂と政治の善惡とは大關係ありとの意。

不辨興衰與哀樂。　興衰と哀樂とを辨せず。
願求牙曠(一四)正華音。　願はくは牙曠を求めて華音を正し、
不令夷(一五)夏相交侵。　夷夏をして相交侵せしめざらんことを。

【題義】唐の歴代の天皇が音樂を正し給ひしことをほめた詩である。

【詩意】朝廷の法曲として一戎大定樂が歌はれた。祖先以來代代德を積み光を累ね子孫が其餘慶を蒙つて、高宗の永徽年間に、此樂を舞ひ且つ歌つたのである。又法曲として霓裳羽衣の曲が舞はれた。時恰も政和し世治まり音樂も洋洋として盛で、玄宗の開元時代の人は皆樂しく且つ康らかであつた。又永隆年代には法曲として堂堂の曲を歌つた。其曲を歌ふ餘慶は永く無窮の後の世まで傳へられた。中宗も肅宗も大亂の後を承けたが、よく大業を恢復せられ、帝位中興して萬世までも續くべき氣運を示した。然るに法曲の中に夷狄の樂曲が混ずるやうになつた。夷狄の樂曲は邪亂で中國の樂曲は和平である。天寶十三年に夷華の混淆が行はれ、その翌年には胡人安祿山が帝都を蹂躙するに至つた。此に由つて音樂は政道と相通することがわかる。一たび夷狄の歌曲が中國の歌曲と混淆するやうになつてから、國家の盛衰と人情の哀樂とを辨知することが出來なくなつた。どうか伯牙・師曠のやうな大音樂家を求めて、中國の音樂を正させ、夷狄と中國との音樂が相侵害することのないやうにありたいものだ。

【一三】胡曲　夷歌なり。
【一四】牙曠　伯牙・師曠。古の音樂家の名。
【一五】夷夏　夷狄と中國。

二王後　明祖宗之意也　二王後　祖宗の意を明にするなり

(一)二王後。彼何人。　二王の後、彼れ何人ぞ。
(二)介公酅公爲國賓。　介公酅公國賓と爲る。
周武隋文之子孫。　周武隋文の子孫なり。
古人有言天下者。　古人言へる有り天下なる者は、
非是一人之天下。　是一人の天下に非ず。
周亡天下傳于隋。　周亡びて天下隋に傳はる。
隋人失之唐得之。　隋人之を失うて唐之を得。
唐興十葉歲二百。　唐興つて十葉歲二百、
介公酅公世爲客。　介公酅公世〻客たり。
(三)明堂太廟朝享(四)時。　明堂太廟朝享の時、

【字解】【一】二王後　唐の前の隋及び北周の天子の子孫。
【二】介公　隋の開皇元年、北周の靜帝を介國公となした。其死後、宇文仲の孫絡を介國公として隋室の賓とした。唐の武德元年、隋の恭帝を廢して酅國公となした。
【三】明堂　天子の政事堂。
【四】朝享　朝は臣下を參內せしめること。享は神を祭り饗すること。

引居賓位備威儀。　引かれて賓位に居り威儀を備ふ。
備威儀助(五)郊祭。　威儀を備へ、郊祭を助く。
高祖太宗之遺制。　高祖太宗の遺制なり。
不獨興滅國。　獨り滅國を興すのみならず、
不獨繼絕世。　獨り絕世を繼ぐのみならず。
欲令嗣位守文君。　嗣位守文の君をして、
亡國子孫取爲戒。　亡國の子孫を取つて戒と爲さしめんと欲す。

【題義】此詩は唐の皇室が其前代の天皇の子孫を優待することを明にしたのである。

【詩意】二王の子孫とは何人であるか。介公と酅公との二人で皇室が客分として優待してゐる。それは北周の武帝、隋の文帝の子孫である。天下は一人の私有すべきものでないと古人も言つてゐるが、實に其のとほりで、北周が亡びてから天下は隋に傳はり、隋が亡びて唐が得た。唐が興つてから十代二百年を經たが、介公と酅公とは常に客分となつて朝享の時には國賓の位に据わり威儀を備へ祭禮の手傳をした。これは高祖、太宗以來の遺制であつて、其趣意は滅びた國を興し、絕えた世を繼ぐのみならず、祖宗の成業を守る君主をして、亡國の子孫を見て己の戒となさしめようといふに在るのだ。

【五】郊祭　天子が天を祭ること。

海漫漫　戒求仙也　海漫漫　仙を求むるを戒むるなり

海漫漫。(一)　海漫漫たり。
直下無底旁無邊。　直下底無く旁邊無し。
雲濤煙浪最深處。　雲濤煙浪最深の處、
人傳中有三(二)神山。　人は傳ふ中に三神山有り。
山上多生不死藥。　山上多く不死の藥を生じ、
服之羽(三)化爲天仙。　之を服すれば羽化して天仙と爲ると。
秦皇漢武信此語。　秦皇漢武此語を信じ、
方(四)士年年采藥去。　方士年年藥を采りて去る。
蓬萊今古但聞名。　蓬萊今古但名を聞くのみ、
煙水茫茫無覓處。　煙水茫茫として覓むる處無し。

【字解】【一】漫漫　廣き貌。
【二】三神山　蓬萊、方丈、瀛洲。
【三】羽化　羽が生える。天仙は天上の仙人。
【四】方士　仙術を說く者。

海漫漫。風（五）浩浩。　海漫漫たり、風浩浩たり。
（六）眼穿不見蓬萊島。　眼穿たんとするも蓬萊島を見ず。
不見蓬萊不敢歸。　蓬萊を見ずんば敢て歸らず。
童男（七）丱女舟中老。　童男丱女舟中に老ゆ。
（八）徐福文成多誑誕。　徐福文成誑誕多し。
（九）上元太一虛祈禱。　上元太一虛く祈禱す。
君看（一〇）驪山頂上茂陵頭。　君看よ驪山の頂上茂陵の頭、
何況（一一）玄元聖祖五千言。　何ぞ況んや玄元聖祖の五千言、
畢竟悲風吹蔓草。　畢竟悲風蔓草を吹く。
不言藥不言仙。　藥を言はず仙を言はず、
不言白日昇青天。　白日青天に昇るを言はざるをや。

【題義】　古の天子が仙人を求めた愚を嗤つた詩である。

【詩意】　海がひろびろとしてゐる。下は深くして底なく、四方は廣くして際限がない。其最も深い處に三神山があつて、不死の藥が多く生えてゐて、其れを飲めば自由に天上を飛び廻る仙人になれると傳へられてゐる。秦の始皇帝や漢の武帝は其言を信じて方士を遣して不死の藥を求めしめた。併し蓬萊山などは今も昔も名を聞くばかりで、實際は何處を搜しても見つからない。けれども蓬萊山を見出さないうちは歸らぬとあつて、一緒につれて行つた若い男女は皆舟の中で老いてしまつた。徐福や文成はうそをついたのであるが、始皇や武帝は其れを信じて上元夫人だの太一星だのに祈禱を捧げたが何の效果もなく、不老不死も空賴で、驪山や茂陵の墓の主となり、悲風が草葉を吹きそよがせてゐる。それも其筈で神仙の元祖と謂はれる老子の道德經には藥のことも仙人のことも言うてはない。又白晝青天を飛び廻ることが出來るなどとも言つてない。要するに愚者を欺く妄言に過ぎないのだ。

【五】浩浩　大なる貌。
【六】眼穿　強く見つめること。
【七】丱女　總角の髮を結つた少女。
【八】徐福　秦の始皇帝の時の方士。文成は漢の武帝の時の方士、少翁ともいふ。
【九】上元　仙女の名。太一は星の名、天上最尊の神。武帝之を甘泉宮に祭る。
【一〇】驪山　秦の始皇の墓。茂陵は漢の武帝の墓。
【一一】玄元聖祖　老子をいふ。唐の天子は李氏にして、老子と同姓なるを以て老子を尊んで玄元皇帝となす。五千言は老子の著した道德經をいふ。

立部伎　刺雅樂之替也

立部伎　雅樂の替るを刺るなり

（一）立部伎。鼓笛諠。　立部伎、鼓笛諠すし。
舞雙劍。跳七丸。　雙劍を舞はし、七丸を跳らす。
嫋（二）巨索掉長竿。　巨索を嫋め、長竿を掉ふ。
太常部伎有等級。　太常の部伎等級有り。

【字解】【一】立部伎　唐では音樂の部を分けて立部と坐部とした。
【二】巨索　ふとい繩。

堂上者坐堂下立。　堂上の者は坐し堂下は立つ。

堂上坐部笙歌清。　堂上の坐部笙歌清く、

堂下立部鼓笛鳴。　堂下の立部鼓笛鳴る。

笙歌一曲衆側耳、　笙歌一曲衆耳を側て、

鼓笛萬曲無人聽。　鼓笛萬曲人の聽く無し。

立部賤。坐部貴。　立部は賤しく、坐部は貴し。

坐部退爲立部伎。　坐部退けられて立部伎と爲り、

撃鼓吹笙和雜戲。　鼓を撃ち笙を吹いて雜戲に和す。

立部又退何所任。　立部又退けらるれば何の任ずる所ぞ。

始就(三)樂懸操雅音。　始めて樂懸に就いて雅音を操る。

雅音替壞一至此。　雅音替壞して一に此に至る。

長令(四)爾輩調宮徵。　長く爾が輩をして宮徵を調へしむ。

(五)圓丘后土郊祀時。　圓丘后土郊祀の時、

【三】樂懸　樂器を懸けならべる枠。雅樂に用ふ。雅音は雅樂。
【四】爾輩　立部伎から退けられて来た拙工。宮徵は音樂の調子の名。
【五】圓丘　天の祭。后土は地の祭。郊は天を祭ること。

言將此樂感神祇。　言ふ此樂を將て神祇を感ぜしむと。

欲望(六)鳳來百獸舞。　鳳來り百獸舞ふを望まんと欲するは、

何異北轅將適楚。　何ぞ轅を北にして將に楚に適かんとするに異ならん。

(七)工師愚賤安足云。　工師は愚賤安んぞ云ふに足らんや、

太常(八)三卿爾何人。　太常三卿爾何人ぞ。

【六】鳳來百獸舞　書經の舜典、益稷に見ゆ。音樂に感じて鳳凰が來り百獸が舞ふのである。
【七】工師　樂工。
【八】三卿　太常寺には卿一人、少卿二人あり、合せて三人。

【題義】 白樂天の自註を見ると、太常（音樂を掌る役所）で、坐部伎に屬する拙工を退けて立部伎に入れ、又立部伎に屬する拙工を退けて雅樂部に入れた。だから雅樂部は大に衰微してしまつたとあるが、此詩は雅樂の衰替したことを刺つたのである。

【詩意】 立部伎が演奏せられる。太鼓や笛をやかましくうちならし、二本の劍を振り舞はし、七箇の丸を跳らし、太い繩を張つて之を渡りながら長い竿を振りまはす。これが立部伎である。太常の部伎が立部と坐部と等級づけられてゐて、堂上に坐する（坐部）方が貴く、堂下に立つ（立部）方が賤しい。坐部の方では笙歌の聲淸らかに響き、立部の方では太鼓や笛がやかましい。坐部の方には人が耳を傾けて聽くが、立部の方は誰も聽く者がない。坐部の拙工は退けられて立部に入れられ、太鼓を打ち笛を吹きなどして雜戲（曲とりや綱わたり）に和する。その立部の拙工は退けられて何になるかと

いへば、雅樂の方へまはされるのである。今や雅樂は此程までに衰廢し、他から退けられた拙工が演奏してゐる有樣である。天地の祭祀にかくも衰廢した雅樂を奏して天地の神祇を感ぜしめ、鳳凰來儀し百獸率ゐ舞ふやうにならしめようと思ふのは、車の梶棒を北に向けて南の楚に往かうとすると同じで、とても出來るものではない。樂工は愚賤であるから責めはしないが、一體太常の三卿は何と心得てゐるのであるか、其氣が知れない。

華原磬　刺樂工非其人也

華原磬　樂工の其人に非ざるを刺るなり

(一)華原磬華原磬。　華原磬、華原磬。
古人不聽今人聽。　古人聽かず今人聽く。
(二)泗濱石泗濱石。　泗濱石、泗濱石。
今人不擊古人擊。　今人擊たず古人擊つ。
今人古人何不同。　今人古人何ぞ同じからざる。
用之捨之由(三)樂工。　之を用ひ之を捨つるは樂工に由る。
樂工雖在耳如壁。　樂工在りと雖も耳壁の如し。
不分清濁卽爲聾。　清濁を分たず卽ち聾たり。
(四)梨園弟子調(五)律呂。　梨園の弟子律呂を調ふ。
知有(六)新聲不知古。　新聲有るを知つて古きを知らず。
古稱浮(七)磬出泗濱。　古稱す浮磬は泗濱より出づと。
(八)立辨致死聲感人。　辨を立て死を致して聲人を感ぜしむ。
(九)宮懸一聽華原石。　宮懸一たび華原石を聽き、
君心遂忘封(一〇)疆臣。　君心遂に封疆の臣を忘る。
果然胡(一一)寇從燕起。　果然胡寇燕より起り、
武臣少肯封疆死。　武臣肯て封疆に死するもの少なし。
始知樂與(一二)時政通。　始めて知る樂は時政と通ずるを。
豈聽(一三)鏗鏘而已矣。　豈に鏗鏘を聽くのみならんや。
(一四)磬襄入海去不歸。　磬襄海に入り去つて歸らず。
(一五)長安市兒爲樂師。　長安の市兒樂師と爲る。

【字解】【一】華原　地名、今陝西省西安府に屬す。そこに產する石で磬を作る。磬は樂器の名。
【二】泗濱石　泗水のほとりに產する石。
【三】樂工　音樂師。
【四】梨園弟子　宮廷直屬の音樂教習所の講習生。
【五】律呂　六律六呂。音律。
【六】新聲　新流行の音樂。
【七】浮磬　書經の禹貢に、泗濱浮磬とあり。註に、泗水の涯、水中に石を見る、以て磬となすべしとあり、疏に浮磬は水上に浮ぶが如く然るに似たりとある。
【八】立辨云云　禮記の樂記に、磬以て辨を立て、辨以て死を致す。君子磬聲を聽けば、則ち封疆に死するの臣を思ふとある。
【九】宮懸　宮廷の樂器を懸けならべる枠。
【一〇】封疆臣　國境を守る臣。
【一一】胡寇　安祿山の叛をいふ。燕は今の直隸省地方。
【一二】與時政通　前の法曲を見よ。
【一三】鏗鏘　金石の聲。
【一四】磬襄　古の樂師の名、擊磬襄、論語微子篇に見ゆ。
【一五】長安　唐の都。市兒は若者。
【一六】清濁　清は泗濱石の音、濁は

華原磬與泗濱石。　華原磬と泗濱石と、

（一六）清濁兩聲誰得知。　清濁兩聲誰か知るを得ん。

【題義】 當時の音樂者が技能のないことを刺つた詩である。

【詩意】 華原石で作つた磬がある。これは今こそ樂器として用ひるが、昔はこんなものは用ひなかつた。泗水の濱から產する磬石は、今の人は擊たないが昔は珍重して擊つたものである。昔は泗濱石を用ひ今は華原石を用ひる。昔と今とはなせかう違ふか。それは樂工に由るのである。今の樂工は耳が壁のやうで、音の清濁を聽き分けることも出來ず聾同樣である。今は梨園の弟子が音樂家で候などと謂つてゐるが、現代の新聲はわかりもしようが、古の音樂は少しもわからない。昔の言傳へに據れば、泗濱の磬聲を聞けば、人をして職務を辨知する心を起さしめ、職務の爲に身命を抛つに至らしめる。故に君主が之を聽けば國境に死するの臣を思ふとあるが、今日は華原磬の聲を聽いて君が心に國境に死んだ臣を忘れてゐる有樣である。さればこそ安祿山が謀叛しても、武臣が防戰して國境に死する者もない。音樂は時の政治と密接な關係があることがこれに因つてよくわかる。ただ音を聽くばかりが音樂ではないのだ。昔擊磬襄は世を厭つて海島に去つたといふが、今は長安の若者等が樂工となつて、華原石と泗濱石との清濁を辨知することも出來ない狀態である。擊磬襄でなくとも、つくづく此世がいやになる。

（一六）華原石の音。白樂天の自註に、天寶中、始めて泗濱磬を廢して華原石を代用したとある。

上陽人　（一）　愍（二）怨曠也　　上陽人　怨曠を愍むなり

上陽人。上陽人。　上陽の人、上陽の人。

紅顏暗老白髮新。　紅顏暗に老いて白髮新なり。

綠衣監使守宮門。　綠衣の監使宮門を守る。

一閉上陽多少春。　一たび上陽に閉されて多少の春ぞ。

玄宗末歲初選入。　玄宗の末歲初めて選ばれて入る。

入時十六今六十。　入りし時は十六今は六十。

同時采擇百餘人。　同時に采擇せらるるもの百餘人、

零落年（三）深殘此身。　零落年深うして此身を殘す。

憶昔吞悲別親族。　憶ふ昔悲みを吞んで親族に別れし時、

扶入車中不教哭。　扶けて車中に入れて哭せしめず。

【字解】【一】上陽　自註に、天寶五載、楊貴妃が寵を專にしてから後は、宮人の進幸を得る者なく、美色ある宮人は皆別な宮殿に置かれた。上陽宮は其一であるとある。一本には上陽白髮人と題す。

【二】怨曠　怨女曠夫。配偶者を得られない男女。

【三】年深　年久しきを經る。

皆云入(四)內便承恩。　皆云ふ内に入らば便ち恩を承けんと。
臉似(五)芙蓉胷似玉。　臉は芙蓉に似胷は玉に似たり。
未容君王得見面。　未だ君王面を見るを得るを容れず、
已被(六)楊妃遙側目。　已に楊妃に遙かに目を側てらる。
妬令潛配上陽宮。　妬みて潛かに上陽宮に配せしむ、
一生遂向(七)空房宿。　一生遂に空房に向つて宿す。
宿空房。秋夜長。　空房に宿す、秋夜長し。
夜長無寐天不明。　夜長く寐ぬる無くして天明けず。
(八)耿耿殘燈(九)背壁影。　耿耿たる殘燈壁に背ける影、
(一〇)蕭蕭暗雨打窻聲。　蕭蕭たる暗雨窻を打つ聲。
(一一)春日遲。　春日遲し。
日遲獨坐天難暮。　日遲うして獨坐すれば天暮れ難し。
宮鶯百囀愁厭聞。　宮鶯百囀するも愁へて聞くを厭ひ、

【四】入レ內　宮中に入ること。
【五】芙蓉　蓮花。
【六】楊妃　楊貴妃。
【七】空房　空閨といふが如し。
【八】耿耿　小明の貌。
【九】背レ壁　壁によせて置くこと。
【一〇】蕭蕭　淋しき貌。
【一一】春日遲　日が永くて容易に暮れないこと。
【一二】悄然　憂ふる貌。

梁燕雙栖老休妬。　梁燕雙び栖めども老いて妬むことを休む。
鶯歸燕去長(一二)悄然。　鶯歸り燕去つて長く悄然。
春往秋來不(一三)記年。　春往き秋來りて年を記せず。
唯(一四)向深宮望明月。　唯深宮に向つて明月を望む。
東西四五百廻圓。　東西四五百廻圓なり。
今日宮中年最老。　今日宮中に年最も老いたり。
(一五)大家遙賜尙書號。　大家遙に尙書の號を賜ふ。
(一六)小頭鞵履窄衣裳。　小頭の鞵履窄き衣裳。
青黛點眉眉細長。　青黛眉に點じ眉細長。
(一七)外人不見見應笑。　外人見ず見ば應に笑ふべし。
天寶末年時(一八)世粧。　天寶末年の時世粧。
上陽人。苦最多。　上陽の人、苦最も多し。
少亦苦。老亦苦。　少にも亦苦み、老いても亦苦しむ。

【一三】記レ年　幾年になるか記憶しない。
【一四】向二深宮一　向は於に同じ、上陽宮に於ての意。
【一五】大家　小吏は天子を稱して大家といひ、親近の臣は大家といふ。
【一六】小頭　さきのとがつた。鞵履はクツ。窄衣裳はぴつたりと身について、たるみのない衣裳。
【一七】外人　世間の人。
【一八】時世粧　流行の服裝。
【一九】呂尙　尙は向の誤。呂向、字は子回。玄宗召して翰林に入る。時に帝歲使を遣し天下の美女を求めしめ之を後宮に納る。之を花鳥使と號す。向、美人賦を進めて以て諷す。嘗て、李善の文選を箋するを繁となし、呂延濟・劉良・李周翰等と詁解

少苦老苦兩如何　少苦老苦兩つながら如何せん。

君不ㇾ見昔時呂向美人賦。　君見ずや昔時呂向が美人の賦を。

又不ㇾ見今日上陽宮人白髮歌。　又見ずや今日上陽宮人白髮の歌を。

〜〜たなす、時に五臣註と謂す。

【題義】此詩は配偶を得ない男女を愍んで作つたのである。

【詩意】上陽宮に閉ぢ籠められてゐる宮女は、花の顏もいつしか老いて今では白髮の老婆になつてゐる。綠衣をまとうた役人が宮門を監守してゐるが、いつから此宮に閉ぢ籠められたのであらうか。この宮女の自ら言ふ所を聞くに、玄宗皇帝の御世の末に初めて選ばれて宮中に入り、その時は年十六であつたが今は早や六十になる。同時に採用された宮女は百餘人あつたが、久しく年を經る間に死亡して、今は我獨り生き殘つてゐる。昔悲を含んで親族に別れて來る時は、手を取つて車に載せられ、お前は顏は花の如く肌は玉の如く美しいから、宮中に入れば必ず御寵愛を得るにきまつてゐる故、泣くには及ばぬなどと慰められたが、まだ天子樣の御顏さへ拜せぬうちに楊貴妃に睨まれ、此上陽宮に斥けられてしまつて、一生淋しく暮して來た。殊に秋の夜長には目が冴えて眠れず、夜は仲仲に明けず、壁に倚つて立つ小暗い燈の下に、淋しく窗を打つ夜雨の音を聞き盡し、春になれば日が永くて、獨り坐してゐると退屈でたまらない。宮殿のあたりで鶯が啼いてはゐるが、愁ある身には聞くさへ懶く、梁の上に雌雄羽を竝べて棲む燕を見ても、年老いては妬む心さへ起らない。かくて春になつて鶯が來、秋になつて燕が去る。每年之を繰返して今既に幾年を經たか殆ど記憶しないが、四五百回は滿月を見たであらう（四五十年を經たとの意。東西とは東から出て西に沈む月の經路をいふ）。で、自分は宮中での最年長者なので、今は天子樣から尙書の稱號を賜はつてゐる。先の尖つた靴、ぴつたりと身についた衣裳、靑い黛で細長くかいた眉。世間の人が見ないからよいが、若し一目見たらば必ず笑ふであらう。我が粧は今から四五十年前の天寶の末頃の流行なのだ。との事だ。さても此宮女は少い時も年老いた時も苦みとほしである。ああ此苦を如何にしようぞ。昔玄宗皇帝の時に呂向が美人賦を上つて宮女を多く納れることを諷諫した事、幷に今日自分が上陽宮人白髮の歌を作つて、此宮女に同情を寄せる事を、どうぞ諸君は心を留めて見てくれよ。

胡旋女　戒ニ近習一也　胡旋女　近習を戒るなり

胡旋女。胡旋女。　胡旋女、胡旋女。

心應ㇾ絃。手應ㇾ鼓。　心は絃に應じ、手は鼓に應ず。

絃鼓一聲雙袖擧。　絃鼓一聲雙袖擧り、

〜〜〜〜

【字解】【一】胡旋女　えびすの身を回旋して舞ふ女。自註に、天寶の末、康居國より之を獻ずとある。康居は西域の國名。

廻雪飄颻轉蓬舞。 廻雪飄颻として轉蓬のごとく舞ふ。
左旋右轉不知疲。 左旋右轉して疲るるを知らず、
千匝萬周無已時。 千匝萬周して已む時無し。
人間物類無可比。 人間の物類比ぶ可き無く、
奔車輪緩旋風遲。 奔車輪緩うして旋風遲し。
曲終再拜謝天子。 曲終つて再拜して天子に謝す、
天子爲之微啓齒。 天子之が爲めに微く齒を啓く。
胡旋女出康居。 胡旋女は、康居より出づ。
徒勞東來萬里餘。 徒らに勞す東來萬里餘。
中原自有胡旋者。 中原自ら胡旋する者有り、
鬬妙爭能爾不如。 妙を鬬はし能を爭へば爾如かず。
天寶季〔一〕年時欲變。 天寶の季年時變せんと欲し、
臣妾人人學圓〔二〕轉。 臣妾人人圓轉を學ぶ。

〔一〕季年 末年。
〔二〕圓轉 自由に身を回轉して舞ふこと。世渉りの態度の捕捉すべからざる意をも含む。

中有太〔四〕眞外祿山。 中に太眞有り外には祿山、
二人最道能胡旋。 二人最も道ふ能く胡旋すと。
梨花園中册〔五〕作妃。 梨花園中册して妃と作し、
金〔六〕雞障下養爲兒。 金雞障下養つて兒と爲す。
祿山胡旋迷君眼。 祿山胡旋して君の眼を迷はし、
兵過黃河疑未反。 兵黃河を過ぐるも未だ反せずと疑ふ。
貴妃胡旋惑君心。 貴妃胡旋して君の心を惑はし、
死棄馬〔七〕嵬念更深。 死して馬嵬に棄つるも念更に深し。
從〔八〕茲地軸天維轉。 茲より地軸天維轉じ、
五十年來制不禁。 五十年來制すれども禁ます。
胡旋女莫空舞。 胡旋女、空しく舞ふ莫れ。
數唱此歌悟明主。 數此歌を唱へて明主を悟らしめよ。

【題意】天子の側近に侍する者を戒むる詩である。

〔四〕太眞 楊貴妃をいふ。祿山は安祿山。
〔五〕册 辭令書の如きもの。
〔六〕金雞障 金雞を畫いてあるツイタテ。新唐書安祿山傳に、帝登勤政樓、幄坐之左、張金雞大障、前置特榻、詔祿山坐とある。
〔七〕馬嵬 天寶十五載、玄宗の蜀に蒙塵する時、陳玄禮等に迫られ、楊貴妃を馬嵬坡に誅す。
〔八〕地軸 地を支ふる中軸。天維は天を維持する綱。

【詩意】胡國の舞をする女がある。心は絃音に應じ手は鼓聲に應じ、兩の袖を擧げて舞ふ。其の疾いことは雪の飄るが如く蓬の飛ぶが如くである。左に旋り右に轉じて幾回なるを知らず。殆ど此世に比ぶべきものもない疾さで、奔る車の輪でも旋風でも、これに比べては遙に遲い位だ。一曲舞ひ終り再拜して天子樣に挨拶すると、天子樣は微笑して御褒めになる。さて此胡旋女は康居國の生れで、萬里の道を遙遙と渡つて來たのであるが、甚だ御苦勞千萬な話で、中國には既に胡旋をする者があつて、お前などは到底その敵ではないのだ。といふのは外でもないが、天寶の末に世柄が變らうとして男も女も圓轉滑脫の態度を取つて、信を置き難い人情になつた。其實例を擧ぐれば宮中には楊貴妃があり宮外には安祿山があつた。この二人が何と謂つても胡旋の名人だといふ世評が高い。玄宗皇帝は楊太眞をば梨の花咲く宮園に冊立して貴妃となし、安祿山をば金雞障下に召して楊貴妃の養子にした。所で安祿山は胡旋して君の目を迷はし、それが爲に玄宗は祿山の叛兵が既に黃河を渡つても、まだ叛いたのではあるまいと疑つた。貴妃は胡旋して君の心を惑はし、それが爲に既に馬嵬で斬り棄ててからも、玄宗は尙ほ忘れることが出來なかつた。爾來天地變轉して五十年になるが、胡旋を禁制しても仲仲絕やすことが出來ない。ああ胡旋する女よ。徒に舞ふことを止めよ。度度自分の作つた此歌を歌つて賢明なる君を悟らしむるがよい。

折臂翁　戒邊功也

折臂翁　邊功を戒むるなり

新豐(一)老翁八十八。　新豐の老翁八十八、
頭鬢眉鬚皆似雪。　頭鬢眉鬚皆雪に似たり。
玄孫(二)扶向店前行。　玄孫に扶けられて店前に向つて行く、
左臂憑肩右臂折。　左臂は肩に憑り右臂は折る。
問翁臂折來幾年。　翁に問ふ臂折れてより來幾年ぞ、
兼問致折何因緣。　兼て問ふ折るを致すは何の因緣ぞと。
翁云貫(三)屬新豐縣。　翁云ふ貫は新豐縣に屬し、
生逢聖代無征戰。　生れて聖代の征戰無きに逢ふ。
慣聽梨園(四)歌管聲。　梨園歌管の聲を聽くに慣れ、
不識旗槍與弓箭。　旗槍と弓箭とを識らず。
無何天寶大徵兵。　何くも無く天寶大に兵を徵し、
戶有三丁點(五)一丁。　戶に三丁有れば一丁を點す。

【字解】【一】新豐　縣名。今の陝西省西安府臨潼縣新豐鎭。
【二】玄孫　孫の孫、やしやご。
【三】貫　原籍。
【四】梨園　前の霓裳羽衣に見ゆ。
【五】點　戶籍の姓名の上に點を打つこと。點を打たれた者は徵兵として徵發される。

點得驅將何處去。　點じ得驅り將つて何處にか去る。
五月萬里雲(六)南行。　五月萬里雲南に行く。
聞道雲南有(七)瀘水。　聞道く雲南に瀘水有りと。
椒花落時瘴(八)煙起。　椒花落る時瘴煙起る。
大軍徒涉水如湯。　大軍徒涉するに水湯の如し。
未過十人二三死。　未だ過ぎざるに十人に二三は死す。
村南村北哭聲哀。　村南村北哭聲哀し。
兒別(九)爺孃夫別妻。　兒は爺孃に別れ夫は妻に別る。
皆云前後征蠻者。　皆云ふ前後蠻を征する者、
千萬人行無一廻。　千萬人行いて一も廻る無しと。
是時翁年二十四。　是時翁年二十四、
(一〇)兵部牒中有名字。　兵部牒中に名字有り。
夜深不敢使人知。　夜深けて敢て人をして知らしめず、

〔六〕雲南　省の名。唐の時は南詔といふ國あり。
〔七〕瀘水　川の名。
〔八〕瘴煙　毒氣。
〔九〕爺孃　父母なり。
〔一〇〕兵部　兵事を掌る役所。牒は帳簿。

偸將大石槌折臂。　偸かに大石を將つて臂を槌折す。
張弓簸旗俱不堪。　弓を張り旗を簸ふ俱に堪へず。
從茲始免征雲南。　茲より始めて雲南を征するを免る。
骨碎筋傷非不苦。　骨碎け筋傷んで苦まざるに非ず。
且圖(一一)揀退歸鄕土。　且揀び退けられて鄕土に歸らんことを圖る。
此臂折來六十年。　此臂折れて來 六十年、
一肢雖廢一身全。　一肢廢すと雖も一身全し。
至今風雨陰寒夜。　今に至るまで風雨陰寒の夜、
直到天明痛不眠。　直に天明に至るまで痛んで眠られず。
痛不眠終不悔。　痛んで眠らざるも、終に悔いず。
且喜老身今獨在。　且つ喜ぶ老身の今獨在るを。
不然當時瀘水頭。　然らずんば當時瀘水の頭、
身死魂孤骨不收。　身死し魂孤にして骨收められず、

〔一一〕揀退　えらび退ける。

應作雲南望鄕鬼。　應に雲南望鄕の鬼と作り、

萬人塚上哭呦呦。(一二)　萬人塚上哭して呦呦たるべし。

老人言。君聽取。　老人の言、君聽取せよ。

君不聞開元宰相宋開府。(一三)　君聞かずや開元の宰相宋開府、

不賞邊功防黷武。(一四)　邊功を賞せずして黷武を防げるを。

又不聞天寶宰相楊國忠。　又聞かずや天寶の宰相楊國忠、

欲求恩幸立邊功。　恩幸を求めんと欲して邊功を立て、

邊功未立生人怨。　邊功未だ立たずして人怨を生ぜるを。

請問新豐折臂翁。　請ふ問へ新豐の折臂翁に。

【一二】萬人塚　多くの戰死者を合葬した塚。呦呦は魂の哭する聲。

【一三】宋開府　開府儀同三司宋璟。

【一四】黷武　武事を濫用すること。

【題義】此詩は朝廷の權臣が好んで外國と戰端を構へ、功を立てて恩賞を貪らんとするのを戒めたのである。

【詩意】新豐生れの老翁は今年八十八で髮も鬚も雪のやうだ。玄孫に扶けられて茶店の方に歩いて行く。左の臂は孫の肩に倚りかかり右の臂は折れてゐる。之を觀て予は老翁に尋ねた。あなたの臂が折れてから何年になるか。又折れたのは何故であるか」。老翁の答に、私は新豐縣の生れで、太平無事の聖代に逢ひ、戰爭などは見たこともなく、音樂の聲などは聽き慣れてゐたが、弓箭の業などは全く識らなかつた。間もなく天寶年間に大に兵を徵すことになり（楊國忠が南詔を伐つた時のこと）、一戶に三人の若者があれば一人は必ず徵發し、之を驅つて何處へ行くかといへば、五月の炎天に熱帶に近い雲南へつれて行くのである。聞けば雲南には瀘水といふ川があつて、山椒の花の落ちる頃になると毒氣が湧き起り、其川の水が湯のやうに熱くて、之を渉る兵士は十人の中に二三人は死んでしまふさうだ。そんな恐ろしい所へやられるのであるから、そちらでもこちらでも徵兵に採られた者が泣き叫んで、子は親に別れ夫は妻に別れて行く。人の噂では雲南征伐に行つたものは千萬人の中に一人も生きて歸る者はないといふ。其時自分は二十四で徵兵名簿に自分の名も載つてゐた。そこで自分は人に知れぬやうに大きな石で自分の臂を折つてしまつた。弓を張ることも旗を振ることも出來なくなつたので雲南征伐に加はることを免れた。筋骨が碎けて苦痛を感せぬのではないが、擇り除けられて鄕里に歸らうと企てたのだ。それから丁度六十年の今日まで手は一本缺けたがお蔭で命に別狀はない。今でも雨風の晩などには疵痕が痛んで夜中眠れないが、少しも後悔はしない。寧ろ今以て獨り無事に生殘つてゐることを喜んでゐる。もしあの時此臂を折らなかつたら、瀘水のほとりに死して死骸を取片附ける人もなく、永く望鄕の鬼となつて萬人塚の上に哭泣してゐるであらう。翁の言は正に此の如く

である。ああ讀者諸君は此翁の言をよく聽かれよ。開元時代の名宰相宋璟は邊功を賞せずして武を黷すことを防ぎ、天寶時代の惡宰相楊國忠は君の恩寵を求めん爲に邊功を立てようとし、邊功の立たないうちに人の怨を買つた。うそだと思ふならば此新豐の折臂翁に聞いて見給へ。

太行路　借夫婦以諷君臣之不終也

太行路　夫婦を借りて以て君臣の終へざるを諷するなり

(一)太行之路能摧車。　太行の路能く車を摧く、
若比君心是坦途。　若し君の心に比せば是れ坦途。
(二)巫峽之水能覆舟。　巫峽の水能く舟を覆す、
若比君心是安流。　若し君の心に比せば是れ安流。
君心(三)好惡苦不常。　君が心の好惡苦だ常ならず、
好生(四)毛羽惡生瘡。　好すれば毛羽を生じ惡めば瘡を生ず。
與君結髮(五)未五載。　君と結髮未だ五載ならざるに、
豈期牛女(六)爲參商。　豈に期せんや牛女の參商と爲らんとは。
古稱色衰相棄背。　古稱す色衰ふれば相棄背すと。
當時美人猶怨悔。　當時の美人猶怨悔す。
何況如今(七)鸞鏡中。　何ぞ況んや如今鸞鏡の中、
妾顏未改君心改。　妾が顏未だ改まらざるに君が心改まる。
爲君(八)薰衣裳。　君が爲に衣裳を薰ずれば、
君聞(九)蘭麝不馨香。　君蘭麝を聞いて馨香とせず。
爲君盛容飾。　君が爲に容飾を盛にすれば、
君看(一〇)珠翠無顏色。　君珠翠を看て顏色無しとす。
行路難難重陳。　行路難、重ねて陳べ難し。
人生莫作婦人身。　人生婦人の身と作る莫れ。
(一一)百年苦樂由他人。　百年の苦樂他人に由る。
行路難難於山險於水。　行路難、山よりも難く、水よりも險し。
不獨人家夫與妻。　獨り人家の夫と妻とのみならず、

【字解】【一】太行　山の名。直隷省と山西省との界に在り。【二】巫峽　四川省夔州府巫山縣に在り。長江の難所なり。【三】好惡　愛憎なり。【四】生毛羽　張衡の西京賦に「所好生毛羽、所惡成瘡痏」とあるに本づく。強ひて美點をさがし出すこと。生瘡は強ひて缺點をさがし出すこと。【五】結髮　結婚すること。五載は五年。【六】牛女　牽牛星と織女星。夫婦に比す。參商も二星の名、互に反對の方角に出る。相隔るに喩ふ。【七】如今　今。唯今。鸞鏡は鏡なり。【八】薰　香を焚きこめること。【九】蘭麝　芳香なり。【一〇】珠翠　眞珠、翡翠。【一一】百年　一生をいふ。

近代君臣亦如此。　近代君臣も亦此の如し。

君不見左納言。右納史。　君見ずや、左は納言、右は納史、

朝承恩。暮賜死。　朝に恩を承け、暮に死を賜ふ。

行路難。不在水。不在山。　行路難、水に在らず、山に在らず。

只在人情反覆間。　只人情反覆の間に在り。

【題義】夫婦の關係を借りて君臣の交の終を全うしないことを諷したのである。

【詩意】太行山の路はよく車を摧くが、君（妻から夫を指す）の心の險に比ぶればまだまだ平坦だと謂つてよい。巫峽の水はよく舟を覆すが、君の心の險に比ぶれば安泰な流だと謂つてよい。君の心の愛憎は一向定まりがなく、愛する時は妄にほめそやし、憎む時は糞味噌にけなしつける。君と結婚してから、まだ五年にならないのに、もとは牽牛織女のやうな親しい間柄であつたのが、今は參商のやうに懸け離れてしまつた。容色が衰へると男から棄てられると、昔の美人が怨み悔いてゐるが、今鏡にうつして吾が顏色を見るに、少しも衰へてはゐない。然るに君の心は既に吾が身を去つてしまつた。君の爲に自分の衣裳に香を焚きこめると、君は蘭麝の香をかぎながら、香しとは言はず。君の爲に容飾を盛にすれば、吾が珠玉を見ながら、少しも美しくないと言ふ。人生の行路は難儀なものだ。

【三】左納言　官名。右納史は右內史の誤。同じく官名である。

重ねて陳べるに堪へない。人生れて婦人の身となるなかれ、一生の苦樂は夫次第で、惡い夫を持つたが最後である。この婦人の言ふとほり、人生の行路は難い。それは山よりも水より危險だ。夫妻の間柄ばかりでなく、君主と家來との關係も此と同じだ。諸君見給へ。天子の左右には納言だの內史だのといふ役人が居るが、此等の役人が朝には君恩を受けてゐるかと思ふと、夕には早くも死を賜はるやうな有樣である。行路の難は水や山に在るのではなくて、只人情の反覆定まらざる間に在るのだ。

司天臺　引古以儆今也

司天臺　古を引いて以て今を儆むるなり

司天臺。　司天臺、

仰觀俯察天人際。　仰いで觀俯して察す天人の際。

羲和死來職事廢。　羲和死してより來職事廢る、

官不求賢空取藝。　官に賢を求めずして空しく藝を取る。

昔聞西漢元成間。　昔聞く西漢元成の間、

下陵上替謫見天。　下陵ぎ上替れ謫天に見る。

北辰微暗少光色。　北辰微暗にして光色少く、

【字解】【一】司天臺　天文臺なり。【二】羲和　堯の時天文を掌りし羲氏和氏。書經堯典に見ゆ。【三】西漢　前漢なり。元成は元帝・成帝。【四】謫見天　謫は譴なり。天譴が天文に現はれた。【五】北辰　北極星。天子に喩ふ。【六】四星　星の名。后妃に喩ふ。

(七)四星煌煌如火赤。　四星煌煌として火の如く赤し。
耀芒動角射三台。　芒を耀し角を動かして三台を射る、
上台半滅中台坼。　上台半滅えて中台坼く。
是時非無太史官。　是時太史の官無きに非ず、
眼見心知不敢言。　眼に見心に知れども敢て言はず。
明朝趨入明光殿。　明朝明光殿に趨り入り、
唯奏慶雲壽星見。　唯慶雲壽星の見るるを奏す。
天文時變兩如斯。　天文時變兩ながら斯の如し、
九重天子不得知。　九重の天子知るを得ず。
不得知安用臺高百尺爲。　知るを得ずんば、安んぞ臺の高さ百尺を用ふることを爲さん。

【題義】天文臺はあつても其效のないことを惜んだ詩である。

【詩意】天文臺がある。仰いでは天象を觀、俯しては人事を察する爲に作つたものである。併し堯の時の羲氏和氏が死んでから後は天文の官職が廢れ、賢者を求めないで藝能のある者のみを任用するやうになつた。聞けば漢の元帝・成帝の頃には、下は上を陵ぎ上は勢が替れて、爲に天譴の象が天に現れ、北極星は暗くして光なく四星が益〻照り輝き（天子が勢を失つて宮妃が勢を振ふに喩ふ。）芒角を動かして三台星を射、それが爲に上台は半ば光を失ひ、中台は裂けてしまつた。此時に太史の官がなかつたのではないが、太史は天象の變異を見、心に天譴を知りながら何とも言はず、翌朝明光殿に入りて、慶雲や壽星が天に現はれまして吉祥此上も御座らぬなどと申上げた。ああ天文の變、時世の變、竝に此の如くであるのに、九重の奥に御座る天子は少しも其れを知ることが出來ない。かかる變異を知ることが出來ないくらゐならば、百尺も高い天文臺などを作る必要はないのだ。

【七】耀芒動角　芒角は放射する光をいふ。三台は星の名。上台中台下台をいふ。共に六星あり、兩兩相比し、斗魁の下に在り。又三階といふ。上階を天子となし、中階を諸侯卿大夫となし、下階を士庶人となす。
【八】太史　天文暦象を掌る。
【九】明光殿　宮殿の名。
【一〇】慶雲　めでたき雲。壽星は星の名、南極老人星ともいふ。

捕蝗　刺長吏也

捕蝗　長吏を刺るなり

捕蝗捕蝗誰家子。　蝗を捕へ蝗を捕ふ誰が家の子ぞ。
天熱日長飢欲死。　天熱し日長くして飢ゑて死せんと欲す。
(二)興元兵久傷陰陽。　興元兵久うして陰陽を傷り、
和氣(三)蠱螽化爲蝗。　和氣蠱螽して化して蝗と爲る。
始自(四)兩河及三輔。　始め兩河より三輔に及び、

【字解】【一】蝗　いなむし。稻を食ふ害蟲。
【二】興元　唐の德宗の年號。
【三】蠱螽　損傷といふが如し。
【四】兩河　河南・河北。三輔は京兆・左馮翊・右扶風。漢の時長安を此三區に分けた。

(五)荐食如蠶飛似雨。荐食蠶の如く飛ぶこと雨に似たり。

雨飛蠶食千里間。雨飛蠶食す千里の間、

不見青苗空赤土。青苗を見ず空しく赤土あり。

河南長吏言憂農。河南の長吏農を憂ふと言ひ、

課人晝夜捕蝗蟲。人に課して晝夜蝗蟲を捕へしむ。

是時粟斗錢三百。是時粟斗に錢三百、

蝗蟲之價與粟同。蝗蟲の價粟と同じ。

捕蝗捕蝗竟何利。蝗を捕へ蝗を捕ふ竟に何の利かある。

徒使飢人重勞費。徒に飢人をして勞費を重ねしむ。

一蝗雖死百蝗來。一蝗死すと雖も百蝗來る。

豈將人力競天災。豈に人力を將つて天災と競はんや。

我聞古之良吏有善政。我聞く古の良吏善政有り、

以政驅蝗蝗出境。政を以て蝗を驅り蝗境を出づと。

【五】荐食　しきりに食ふ。

【六】貞觀　唐の太宗の年號。

又聞貞(六)觀之初道欲昌。又聞く貞觀の初道昌んならんと欲す。

(七)文皇仰天呑一蝗。文皇天を仰ぎて一蝗を呑めりと。

(八)一人有慶兆民賴。一人慶有れば兆民賴る。

是歲雖蝗不爲害。是歲蝗ありと雖も害を爲さず。

【七】文皇　太宗をいふ。

【八】一人云云　書經の呂刑に見ゆ。一人は天子をいふ。天子が善を行へば人民皆其惠に浴するをいふ。

【題義】地方の長官が無益の事をさせて人民の勞力と經費とを徒消するの愚を刺つた詩である。

【詩意】頻に蝗を捕へてゐる者があるが、あれは一體どこの家の者であらう。天熱く日の長い時に蝗を捕へる爲に飢ゑて死ぬやうな苦をしてゐる。興元年中には久しく兵亂が續いた爲に陰陽の氣が傷害を受け、和氣が變じて蝗となり、河南・河北から始めて長安の地方まで及び、荐に稻を食ふこと蠶の桑を食ふが如く、羣を成して飛ぶことは雨のやうだ。それが千里の間にひろがつて、青い苗を殘らず食ひ盡し、ただ赤土を餘すのみである。河南の長官は自ら農を憂ふと稱し、人民に割當てて蝗を捕へさせてゐる。時に米價は一斗三百錢であるが、蝗を一斗捕へるには丁度米一斗の代金ぐらゐの金がかかる。かかる金を費し蝗を捕へて何になるかといふに、徒に飢人をして勞力と費用とを重ねしむるのみで、一匹の蝗が死んでも更に百匹の蝗が來るのであるから何の役にも立たない。要するに人力では天災に勝つことは出來ないのだ。聞く所に據れば、古の良吏（後漢の魯恭をいふ。恭が

河南の中牟縣令となつた所が、鄰境には蝗の害があつたが中牟縣だけは其害を受けなかつた。）は善政を施した爲に蝗を境外に驅逐したといふ話だ。又貞觀の初に太宗皇帝は天を仰いで一匹の蝗を呑んだといふが、天子に善行があれば萬民其惠に浴するので、太宗が蝗を呑んだ歳には蝗は生じたが害をしなかつたさうだ。要するに、善政を布いて蝗が害をしないやうにするのが本で、蝗を捕へて其害を除かうとするのは抑末である。

昆明春　思㆓王澤之廣被㆒也

昆明春　王澤の廣被を思ふなり

(一)昆明春。昆明春。　昆明の春、昆明の春。
春池岸古春流新。　春池岸古りて春流新なり。
影浸㆓(二)南山㆒青滉瀁。　影南山を浸して靑うして滉瀁たり。
波沈㆓西日㆒紅(三)奫淪。　波西日を沈めて紅奫淪たり。
往年因㆑旱靈池竭。　往年旱に因つて靈池竭き、
龜尾曳㆑(四)塗魚呴㆑沫。　龜尾塗に曳き魚沫を呴す。
詔開㆓八水㆒注㆓恩波㆒。　詔して八水を開きて恩波を注ぐ。

【字解】【一】昆明　池の名、長安の西南に在り。
【二】南山　終南山。長安の南に在る山。滉瀁は水の廣く搖ふ貌。
【三】奫淪　廣く波たつ貌。
【四】塗　泥なり。沫は泡なり、呴は息を吹くこと。

千介萬鱗同日活。　千介萬鱗同日に活く。
(五)今來淨淥水照㆑天。　今來淨淥水天を照し、
游魚(六)鱍鱍蓮田田。　游魚鱍鱍として蓮田田。
洲香杜(七)若抽㆑心短。　洲香しくして杜若心を抽くこと短く、
沙暖鴛鴦鋪㆑翅眠。　沙暖にして鴛鴦翅を鋪いて眠る。
(八)動植飛沈性皆遂。　動植飛沈性皆遂げ、
皇澤如㆑春無㆑不㆑被。　皇澤春の如くにして被らざるは無し。
漁者仍豐㆓網罟資㆒。　漁者は仍に網罟の資を豐にし、
貧人又獲㆓(九)菰蒲利㆒。　貧人又菰蒲の利を獲たり。
詔以㆔昆明近㆓帝城㆒。　詔す昆明の帝城に近きを以て、
(一〇)官家不㆑得㆑收㆓其征㆒。　官家其征を收むるを得ず。
菰蒲無㆑租魚無㆑稅。　菰蒲は租無く魚は稅無し、
近㆑水之人感㆓君惠㆒。　水に近きの人君の惠に感ず。

【五】今來　現今。淨淥は水の清き貌。
【六】鱍鱍　尾を振ふ貌。田田は蓮葉の水に浮ぶ貌。
【七】杜若　かきつばた。
【八】動植　動物植物。飛沈は鳥と魚とをいふ。
【九】菰蒲　まこも、かば。
【一〇】官家　政府。

感君惠獨何人。　君の惠に感ずるは、獨何人ぞ。
吾聞率(一一)土皆王民。　吾聞く率土は皆王民なりと。
遠民何疎近何親。　遠民何ぞ疎んせられ近きは何ぞ親しまるる。
願推此惠及天下。　願はくは此惠を推して天下に及ぼし、
無遠無近同忻(一二)忻。　遠と無く近と無く同じく忻忻たらん。
(一三)吳興山中罷榷茗。　吳興山中榷茗を罷め、
(一四)鄱陽坑裏休稅銀。　鄱陽坑裏稅銀を休め、
天涯地角無禁利。　天涯地角利を禁ずる無く、
(一五)熙熙同似昆明春。　熙熙として同じく昆明の春に似ん。

【一一】率土　天下中。
【一二】忻忻　よろこぶ貌。
【一三】吳興　浙江省湖州府、茶の名產地。榷茗は茶を專賣すること。
【一四】鄱陽　江西省饒州府、金銀銅鐵を產す。稅銀は採掘した銀に課稅すること。
【一五】熙熙　やはらぐ貌。

【題義】天子の恩澤の廣く天下に被るやうにと願ふ詩である。

【詩意】昆明池にも春がめぐつて來て、昔ながらの岸に春流を湛へてゐる。水面には青青とした終南山の影を浮べ、波間には紅の夕日を沈めてゐる。先年旱魃の爲に此池が涸上つてしまつて、龜は泥に尾を曳き魚は泡に息を吹く有樣であつたが、徳宗皇帝が詔をお下しになつて八水（涇・渭・滻・灞・澇・滈・灃・潏の八川）を開通し、水を此池に注いだ爲に魚も貝も同時に活き返つた。今や水清くして天を照し、游ぐ魚は尾を掉かし蓮葉は波上に浮び、池中の洲には杜若が短く其心を抽出し、沙には暖に鴛が翅を斂いて眠つてゐる。されば魚も鳥も皆其性を遂げ天子の惠澤に浴せぬものはない。漁夫は澤山の獲物があり、貧民も菰や蒲の利を得られる。おまけに昆明池は帝城の近くだから、政府でも其處から稅を取つてはならないとの詔があつたから、菰でも蒲でも魚類でも無稅で取ることが出來て、此池の近くに住む人民は皆君の惠に感じてゐる。さても君の惠に感ずるのは何人であるか。自分は天下の民は皆王民だと聞いてゐる。然るに遠方の民はなぜ疎んせられて近くの人民のみがなぜ親愛されるのであらうか。願はくは此惠を徧く天下に及ぼし遠近を論せず皆欣欣として惠の露に潤ふやうにありたいものだ。吳興の山では茶の專賣を罷め、鄱陽の銀坑では銀に課稅することを罷め、天下到處民の利を取ることを禁せず、昆明池の近くの人民のやうに熙熙として皇恩に浴するやうにしたいものだ。

城鹽州　美聖謨而誚邊將也

城鹽州　聖謨を美して邊將を誚るなり

城(一)鹽州。城鹽州。　鹽州に城く、鹽州に城く。
城在(二)五原原上頭。　城は五原原上の頭に在り。

【字解】【一】鹽州　甘肅省寧夏府靈州の東南、花馬池の北に在り。
【二】五原　鹽州の古名。

（三）蕃東節度鉢闡布。　蕃東の節度鉢闡布、
忽見新城當要路。　忽ち新城の要路に當るを見る。
（四）金鳥飛傳贊普聞。　金鳥傳を飛ばして贊普聞く、
（五）建牙傳箭集羣臣。　牙を建て箭を傳へて羣臣を集む。
君臣（六）赭面有憂色。　君臣赭面して憂色有り、
皆言勿謂唐無人。　皆言ふ唐に人無しと謂ふ勿れと。
自築鹽州十餘載。　鹽州に築きてより十餘載、
（七）左袵氈裘不犯塞。　左袵氈裘塞を犯さず。
晝牧牛羊夜（八）捉生。　晝は牛羊を牧ひ夜は生を捉ふ、
長去（九）新城百里外。　長く新城を去る百里の外。
諸邊急警勞（一〇）戍人。　諸邊急警戍人を勞す、
唯此一道無煙塵。　唯此一道のみ煙塵無し。
（一一）靈夏潛安誰復辯。　靈夏潛に安きも誰か復辯せん、
（一二）秦原暗通何處見。　秦原暗に通じて何處にか見ん。
（一三）鄜州驛路好馬來。　鄜州の驛路より好馬來る、
長安（一四）藥肆黃蓍賤。　長安の藥肆に黃蓍賤し。
城鹽州。　鹽州に城く。
鹽州未城天子憂。　鹽州未だ城かざるとき天子憂ふ。
德宗按圖自定計。　德宗圖を按じて自ら計を定む、
非關將略與廟謀。　將略と廟謀とに關するに非ず。
吾聞高宗中宗世。　吾聞く高宗中宗の世、
北虜猖狂最難制。　北虜猖狂して最も制し難し。
（一五）韓公創築受降城。　韓公創めて受降城を築く、
（一六）三城鼎峙屯漢兵。　三城鼎峙漢兵を屯む。
東西（一七）互絶數千里。　東西亙絶す數千里、
（一八）耳冷不聞胡馬聲。　耳冷なるも胡馬の聲を聞かず。

【三】蕃東節度　吐蕃の東方節度使。
【四】金鳥飛傳　急使を發して事を報ずること。贊普は新唐書吐蕃傳に、其俗謂彊雄曰贊、丈夫曰普、故號君長曰贊普とある。
【五】建牙　牙は大將旗。傳箭は使者を馳すること。新唐書吐蕃傳に、其擧兵、以七寸金箭爲契、百里一驛、有急兵驛人臆前加銀鶻、甚急鶻益多とある。
【六】赭面　赤き顏。
【七】左袵　著物を左前にあはせること。夷狄の風なり。氈裘は毛織の服。夷狄の服なり。
【八】捉生　野生の禽獸を捕へる。
【九】新城　鹽州城。
【一〇】戍人　戍卒。警備の兵。
【一一】靈夏　靈は靈州、甘肅省寧夏府の南に在り、夏は中國。靈州あたりの中國の地といふ意。
【一二】秦原　昔の秦の地方、長安附近をいふ。
【一三】鄜州　長安の北に在る州の名。好馬は駿馬。
【一四】藥肆　賣藥店。黃蓍は藥草の名。吐蕃に産す。
【一五】韓公　韓國公張仁愿。
【一六】三城　東西中の三受降城。漢兵は唐の兵。
【一七】互絶　絶もワタルと訓ず。
【一八】耳冷　秋になること。秋になれば夷狄の入寇するを常とす。

（一九）如今邊將非無策。　如今邊將策無きに非ず、
心笑韓公築城壁。　心に韓公が城壁を築きしを笑ふ。
相看養寇爲身謀。　相看て寇を養つて身の謀を爲す、
各握强兵固恩澤。　各强兵を握つて恩澤を固うす。
願分今日邊將恩。　願はくは今日邊將の恩を分ち、
褒贈韓公封子孫。　韓公に褒贈して子孫を封せん。
誰能將此鹽州曲。　誰か能く此鹽州の曲を將つて、
（二〇）翻作歌詞聞至尊。　翻して歌詞と作して至尊に聞せん。

【一九】如今　只今。

【二〇】翻　音曲を辭句に譯すること。

【題義】德宗皇帝の城を鹽州に築かしめたことを稱美し、邊將の態度を誚つたのである。

【詩意】鹽州は唐の西邊に在りて吐蕃に臨んでゐる。唐は此に城を築いて吐蕃の入寇を防ぐことにした。吐蕃の東方節度使たる鉢闡布は此城の要路に築かれたのを見て大に驚き、急使を馳せて其王に報告した。其王は早速命を傳へて羣臣を招集し、會議を開いた。君臣皆昻奮した顏色をして唐にも人物がないと侮つてはならぬと語り合つた。かくて鹽州城を築いてから十餘年の間、吐蕃入寇の禍なく、彼等は晝は牛羊を牧し夜は野獸を獵して活計を立て、遠く鹽州から百里の奥に退去した。故に他の邊境では警備に勞したが、ただ鹽州の一道だけは無事平穩であつて、靈州地方は人の知らぬ間に、いつしか安泰になり、長安のあたりまで交通が出來るやうになつた。こんな事は他の地方には見られないことだ。されば鄜州の驛路には吐蕃の駿馬が來たり、長安の藥肆には吐蕃の良藥黃蓍を安價に販賣するやうになつた。初め此に城を築かなかつた頃は、天子が吐蕃の入寇を御心配になつた。因つて德宗皇帝は親ら地圖を按じて築城の計をお立てになつた。此事は將軍の方略にもあらず、朝臣の謀議にもあらず、全く德宗の叡慮によつたのである。昔高宗・中宗の時、突厥が入寇して其勢制し難かつたので、韓國公は受降城を三個處に築いて中國の兵を駐屯せしめたので、秋になつても胡馬の聲を聞かないやうになつた。今の邊將も策略がないわけではなからうが、韓公築城の事を心中に冷笑し、互に顏を見合せて寇敵の勢を長養し、自己一身の謀に汲汲として、强兵を擅にして天子の恩寵を固うすることに憂身をやつしてゐる。願はくは今日邊將に對する恩寵を分ちて韓公を追褒し、其子孫を封じたいものだ。誰か能く此「城鹽州」の曲を飜譯して歌詞を作り天子の御耳に入れる者はないであらうか。

道州民　美賢臣遇明主也

道州民　賢臣の明主に遇へるを美するなり

（一）道州民多侏儒。　道州の民、侏儒多し。

【字解】【一】道州　湖南省永州

長者不過三尺餘。　長者三尺餘に過ぎず。
市作矮奴年進奉。　市うて矮奴と作して年ごとに進奉す、
號爲道州任土貢。　號して道州の任土貢と爲す。
任土貢。寧若斯。　任土の貢、寧ろ斯の若くならんや。
不聞使人生別離。　聞かずや人をして生ながら別離せしめ、
老翁哭孫母哭兒。　老翁は孫を哭し母は兒を哭するを。
一自陽城來守郡。　一たび陽城が來りて郡に守たりしより、
不進矮奴頻詔問。　矮奴を進らず頻に詔問せらる。
城云臣按六典書。　城云く臣六典の書を按ずるに、
任土貢有不貢無。　任土有を貢し無を貢せず。
道州水土所生者。　道州の水土生ずる所の者、
只有矮民無矮奴。　只矮民有りて矮奴無しと。
吾君感悟璽書下。　吾君感悟して璽書下る、

府に屬す。侏儒は一寸法師、身體の短小な人。

【二】 矮奴　一寸法師を奴隷として使ふ。

【三】 任土貢　書經禹貢に、任レ土作レ貢とあり、其地に産する物を貢として納むること。

【四】 陽城　人名。貞元十五年九月、道州刺史に任ぜらる。

【五】 六典　書名。唐の制度を記述せるもの。

【六】 璽書　御印を押した文書。詔書なり。

歲貢矮奴宜悉罷。　歲ごとに矮奴を貢すること宜しく悉く罷むべしと。
道州民。　道州の民。
老者幼者何欣欣。　老者幼者何ぞ欣欣たる。
父兄子弟始相保。　父兄子弟始めて相保ち、
從此得作良人身。　此より良人の身と作ることを得たり。
道州民。　道州の民。
民到于今受其賜。　民今に到るまで其賜を受く、
欲說使君先下淚。　使君を說かんと欲して先づ淚を下す。
仍恐兒孫忘使君。　仍つて恐る兒孫の使君を忘れんことを、
生男多以陽爲字。　男を生めば多く陽を以て字と爲す。

【七】 良人　良民なり。

【八】 使君　刺史の尊稱。

【題義】 賢臣が明君に遇ひ、其言が聽容せられたことを稱美したのである。

【詩意】 道州には短身矮軀の人が多く、身の長の高い者でも、三尺餘に過ぎない。之を買つて矮奴と稱して每年朝廷に進貢し、之を號して道州の任土貢と云ふ。任土貢といふものは豈此の如きものであ

らうか。骨肉の親をして生きながら離別せしめ、老翁は孫を哭し母は子を哭せしめ、其哭聲聞くに堪へない。然るに陽城が來りて道州の刺史となつてから、矮奴の朝貢を止めたので、天子頻りに詔を下して其理由を問ひ給うた。陽城對へて曰く、臣六典を按ずるに、任土貢とは、其土地に有るものを貢するので、無きものを貢するにあらず、道州の水土の產するところ、矮民はあれども矮奴は無しと。天子感悟して璽書を下し、矮奴の歲貢を全廢せしめられたので、道州の民老幼悉く欣欣として、父子兄弟鄉里に在りて相保護し以て生涯を送ることを得るを喜び、これより普通の良民となつた。されば道州の民今に至るも其恩惠を感謝し、陽使君の事を說かんとすれば先づ感泣して淚を垂れ、仍其子孫の陽城の德を忘るることを恐れ、男子を生めば多く陽の字を取つて其字とする。

馴犀　感爲政之難終也

馴犀　爲政の終へ難きを感ずるなり

(一)馴犀馴犀通天犀。　馴犀馴犀通天犀、

軀貌駭人角駭雞。　軀貌は人を駭かし角は雞を駭かす。

(二)海蠻聞有明天子。　海蠻明天子有りと聞き、

驅犀乘(三)傳來萬里。　犀を驅り傳に乘り來ること萬里。

【字解】(一)馴犀　ならされてゐる犀。通天犀とは犀の一種、其角の一尺以上なるを得て刻して魚となし、之を銜んで水に入れば、水爲に開くといふ。

(二)海蠻　南海の蠻國。

一朝得謁(四)大明宮。　一朝大明宮に謁することを得、

歡呼拜舞自論功。　歡呼拜舞して自ら功を論ず。

五年馴養始堪獻。　五年馴養して始めて獻ずるに堪へ、

(五)六譯語言方得通。　六譯して語言方に通ずるを得。

上嘉人獸俱來遠。　上人獸の俱に來ること遠きを嘉し、

蠻館四方犀入苑。　蠻は四方に館し犀は苑に入れしむ。

(六)秣以瑤蒭鏁以金。　秣するに瑤蒭を以てし鏁するに金を以てす、

故鄉(七)迢遞君門深。　故鄉迢遞として君門深し。

海鳥不知鐘鼓樂。　海鳥は鐘鼓の樂を知らず、

池魚空結江湖心。　池魚は空しく江湖の心を結ぶ。

馴犀生處南方熱。　馴犀生るる處南方熱す、

秋無白露冬無雪。　秋は白露無く冬は雪無し。

一入(八)上林三四年。　一たび上林に入つて三四年、

【字解】(三)乘傳　宿次馬車に乘る。

(四)大明宮　宮殿の名。

(五)六譯　六回通譯を重ねる。

(六)秣　秣なり。食はせること。瑤蒭は玉の如き草。鏁は鎖。

(七)迢遞　遙なる貌。

(八)上林　天子の御苑。

又逢今歲苦寒月。　又今歲苦寒の月に逢ふ。
飲冰臥霰苦跧跼。(九)　冰に飲み霰に臥して跧跼に苦み、
角骨凍傷鱗甲縮。　角骨凍傷し鱗甲縮まる。
馴犀死。蠻兒啼。　馴犀死して、蠻兒啼き、
向闕再拜顏色低。　闕に向つて再拜して顏色低る。
奏乞生歸本國去。　奏して乞ふ生きて本國に歸り去らん、
恐身凍死似馴犀。　恐らくは身凍死して馴犀に似んことを。
君不見建中初。(一〇)　君見ずや建中の初、
馴象生還放林邑。(一一)　馴象生還林邑に放たしむるを。
君不見貞元末。　君見ずや貞元の末、
馴犀凍死蠻兒泣。　馴犀凍死して蠻兒泣くを。
所嗟建中異貞元。　嗟く所建中は貞元に異り、
象生犀死何足言。　象は生き犀は死す何ぞ言ふに足らん。

【九】跧跼　せぐくまる。
【一〇】建中　德宗の年號。
【一一】林邑　地名。今の暹羅地方。

【題意】善政を爲しても終まで全うすることは難いものだといふことを述べたのである。貞元十二年に南海から馴犀を獻上したので、之を上苑に飼つて置いたが、翌十三年冬の大寒の爲に死んでしまつた。此事に感じて作つたのである。

【詩意】通天犀といふ馴らされた犀がある。其體貌は人を驚かし其角は鷄を驚かす。南海の蠻人がはるばる海山を越えて唐の明天子に獻上する爲に、此犀を牽いて唐に來た。蠻人は大明宮で天子に拜謁を賜はり、歡呼拜舞して己の功勞を述べ立てた。其言に據れば、五年も馴らして始めて獻上するまでになつた。又唐の京まで來るには六回も通譯を重ねたとの事である。天子は蠻人と犀とが遠方から來たことを嘉し給ひ、蠻人には諸處を見物させ、犀をば御苑に養はせた。瑤草を食はせ金の鎖で繫ぎなどして置くが、馴犀の身に取つては一向ありがたくもない。ただ宮門深き處に遙なる故國を慕つてゐるのみである。丁度鐘鼓の音樂を奏して祭られても海鳥には其味がわからず、（事魯語に見ゆ）池に養はるる魚は初め住んでゐた江湖を慕つてやまないやうなものだ。馴犀の生れた處は南方熱帶の國で、白露も降らず雪も降らない。それが一たび御苑に飼はれて三四年（事實と合はず）を經、今年の苦寒に氷のはつた處に飲み霰の上に寢て、身も骨も爲に縮んでしまつて遂に死んだ。すると蠻人が宮門に向つて再拜し、しをたれた樣子をして、どうぞ生きて本國へ歸りたいもので御座る。この寒さでは馴犀のやうに私も凍死致すであらうと嘆願した。諸君見られよ、建中の初には馴らされた象を林邑へ生

きながら還されたのに、貞元の末には馴犀が凍死して蠻人が泣いて歸國を願つた。予は建中の仁政が貞元に至つて終を全うしないことを嘆く者である。ただ象は生き犀は死んだといふだけならば何も言ふべき程の大問題ではない。

五絃彈　惡鄭之奪雅也

五絃彈　鄭の雅を奪ふを惡むなり

(一)五絃彈。五絃彈。　五絃を彈じ、五絃を彈す、
聽者傾耳心(二)寥寥。　聽く者耳を傾けて心寥寥たり。
(三)趙璧知君入骨愛。　趙璧知る君が骨に入つて愛するを、
五絃一一爲君調。　五絃一一君が爲めに調ふ。
第一第二絃(四)索索。　第一第二絃索索、
秋風拂松(五)疏韻落。　秋風松を拂つて疏韻落つ。
第三第四絃(六)冷冷。　第三第四絃冷冷、
夜鶴憶子籠中鳴。　夜鶴子を憶うて籠中に鳴く。

【字解】【一】五絃　五絃琴。秦中吟にも五絃琴の流行せる由を述べてある。
【二】寥寥　沈靜すること。
【三】趙璧　人名。五絃の名手。
【四】索索　さびしき貌。
【五】疏韻　まばらな聲韻。
【六】冷冷　淸凉の貌。

第五絃聲最掩(七)抑。　第五絃聲最も掩抑、
(八)隴水凍咽流不得。　隴水凍り咽んで流れ得ず。
五絃竝奏君試聽。　五絃竝び奏す君試に聽け、
(九)淒淒切切復錚錚。　淒淒切切復錚錚。
鐵擊珊瑚一兩曲。　鐵珊瑚を擊つ一兩曲、
氷寫(一〇)玉盤千萬聲。　氷玉盤に寫す千萬聲。
(一一)鐵聲殺。冰聲寒。　鐵聲は殺なり、冰聲は寒なり。
殺聲入耳膚血慘。　殺聲耳に入つて膚血慘に、
寒氣中人肌骨酸。　寒氣人に中つて肌骨酸し。
曲終聲盡欲半日。　曲終り聲盡きて半日ならんと欲す、
四座相對愁無言。　四座相對して愁へて言無し。
座中有一遠方士。　座中に一遠方の士有り、
(一二)喞喞杳杳聲不已。　喞喞杳杳として聲已まず。

【七】掩抑　おさへつける。
【八】隴水　甘肅省鞏昌府に隴山あり。其阪九回、上に淸水あり四方に注下す。所謂隴頭水なり。
【九】淒淒　風の寒き貌。切切は急切なる貌。錚錚は金の聲。
【一〇】玉盤　玉で製した盆。寫は瀉に通ず。
【一一】鐵聲殺　殺は殺氣を含むこと。この二句通行本誤り脱す。
【一二】喞喞　蟲の聲。杳杳は歎く聲。

自歎今朝初得聞。　自ら歎ず今朝初めて聞くを得たるを、

始知(一三)孤負平生耳。　始めて知る平生の耳に孤負するを。

唯憂趙璧白髮生。　唯憂ふ趙璧白髮生じ、

老死人間無此聲。　老死して人間此聲無からんことを。

遠方士。　遠方の士。

爾聽五絃信爲美。　爾五絃を聽いて信に美なりと爲す、

吾聞(一四)正始之音不如是。　吾聞く正始の音は是の如くならず。

正始之音其若何。　正始の音其れ若何、

(一五)朱絃疎越清廟歌。　朱絃疎越して清廟を歌ふ。

一彈一唱再三歎。　一彈一唱再三歎す、

曲淡節稀聲不多。　曲淡く節稀にして聲多からず。

(一六)融融曳曳召(一七)元氣。　融融曳曳として元氣を召く、

聽之不覺心平和。　之を聽けば覺えず心平和なり。

【一三】孤負　そむく。

【一四】正始之音　正しき始めの音樂。

【一五】朱絃云云　禮記樂記に、清廟之瑟、朱絃而疎越、壹唱而三歎、有遺音者矣とある。清廟之瑟とは清廟の詩を歌ふ時彈ずる所の瑟なり。朱絃とは朱絲を練りて絃となすをいふ。練れば聲濁るなり。越とは瑟底の孔をいふ。之を疎通して聲をして遲からしむ。故に疎越といふ。

人情重今多賤古。　人情今を重んじて多く古を賤む、

古瑟有絃人不撫。　古瑟絃有るも人撫せず。

更從趙璧藝成來。　更に趙璧藝成りてより來、

(一八)二十五絃不如五。　二十五絃五に如かず。

【題義】鄭は鄭聲、卽ち淫靡な俗樂をいふ。雅は雅樂である。俗樂が高尙な雅樂を壓倒して世間に流行してゐることを恨んで作つた詩である。

【詩意】五絃琴を彈すると、聽く人は耳を傾け氣を奪はれて聽き惚れる。されば此技の達人趙璧は世人が心から此音を愛好するを知り、世人の爲に一一五絃の音を調べる。第一第二の絃を調べると、其音索索として秋風が松の枝を拂ふやうである。第三第四の絃を調べると、其音冷冷として夜の鶴が子を憶うて籠の中で鳴くやうである。第五の絃は最もおさへつけるやうで、譬へば隴頭の水が咽んで流れない時のやうだ。この五絃を同時に搔き鳴らす時は、凄凄切切また錚錚として、或は鐵を以て珊瑚を擊つが如く、氷塊を玉盤に瀉ぐが如くである。鐵聲は殺氣を帶び氷聲は人の心を寒からしめる。殺聲を聞けば流血の慘を思はしめ、寒氣に遇へば肌骨を痛ましめる。趙璧の妙技を聽いて半日を經るまで、一座の人人は皆感に堪へざる者の如く物も言はずに相對して坐つてゐる。一座の中に一人の遠方

【一六】融融　和樂の貌。曳曳は洩洩、又は泄泄に同じ、舒散の貌。左傳隱公元年に見ゆ。

【一七】元氣　天地の間に流行する氣。

【一八】二十五絃　瑟をいふ。五は五絃琴。

の士がゐて頻に嘆聲を漏らしてゐる。其人の言ふには、こんな結構な音樂は今朝初めて聞いた。今迄かかる音樂を聽かせなかつたのは耳に對してすまなかつたと思ふ。それにつけても心配なことは、趙璧が老死して此妙音が世間になくなりはせぬかといふことだと言つてゐる。ああ遠方の士よ、君は五絃琴の音を信に美音であると思つてゐるが、自分の聞く所では、正始の雅音といふものはこんなものではない。正始の音は如何なるものかといへば、淸廟の詩を歌ふに瑟といふ樂器を用ひ、瑟の底には孔がまばらにあけてあつて聲を遲緩にする。その絃は練つた朱絲を用ひて音を濁らせるやうにしてある。この朱絃を彈じて一人が一句を唱へると二三人の人が從つて歎稱する。其曲調があつさりとしてあくどくない。然もやはらぎのびのびとして天地の元氣をも喚び起すほどで、聽く者をして平和な心に浸らせる。人情は新しきを好んで古きを賤むものだ。されば古瑟などは今は誰も彈する者がなく、殊に趙璧の藝が成熟してからは、五絃琴が大流行になつて、二十五絃の瑟は到底五絃琴に敵することは出來なくなつた。

蠻子朝　刺將驕而相備位也

蠻子朝　將驕りて相位に備はるを刺るなり

(一)蠻子朝。　　蠻子朝す。

【字解】【一】蠻子　南方の蠻人。

汎(二)皮船兮渡(三)繩橋。　　皮船を汎べ繩橋を渡り、
來自(四)嶲州道路遙。　　嶲州より來りて道路遙なり。
入界先經(五)蜀川過。　　界に入つて先づ蜀川を經て過ぐ、
(六)蜀將收功先(七)表賀。　　蜀將功を收めて先づ表賀す。
臣聞雲南(八)六詔蠻。　　臣聞く雲南六詔の蠻、
東連(九)牂牁西接蕃。　　東牂牁に連り西蕃に接す。
六詔(一〇)星居初瑣碎。　　六詔星居して初め瑣碎なり、
合爲一詔漸强大。　　合して一詔と爲つて漸く强大。
(一一)開元皇帝雖聖神。　　開元の皇帝聖神なりと雖も、
唯蠻(一二)倔强不來賓。　　唯蠻のみ倔强にして來賓せず。
(一三)鮮于仲通六萬卒。　　鮮于仲通が六萬の卒、
征蠻一陣全軍沒。　　征蠻の一陣に全軍沒す。
至今西洱河岸邊。　　今に至るまで西洱河岸の邊、

【二】皮船　獸皮で作つた船。
【三】繩橋　繩で作つた橋。
【四】嶲州　今の雲南地方。漢の越嶲郡。
【五】蜀川　今の四川省。
【六】蜀將　劍南西川節度使韋皐。
【七】表賀　賀表を奉る。
【八】六詔蠻　舊唐書南詔蠻傳に、「南詔蠻ハモト烏蠻ノ別種、ソノ先渠帥六アリ、自ラ六詔ト號ス」云云とある。
【九】牂牁　漢の郡名、今の雲南貴州の地方。蕃は吐蕃。
【一〇】星居　星の如く散在する。瑣碎は細小なること。
【一一】開元皇帝　玄宗皇帝。
【一二】倔强　つよいこと。
【一三】鮮于仲通　人名。天寶十三載兵六萬を率ゐて雲南王閤羅鳳を西洱

箭孔刀痕滿枯骨。 箭孔刀痕枯骨に滿つ。
誰知今日慕華風。 誰か知らん今日華風を慕ひ、
不勞一人蠻自通。 一人を勞せずして蠻自ら通せんとは。
誠由陛下(一四)休明德。 誠に陛下休明の德に由るも、
亦賴(一五)微臣誘諭功。 亦微臣が誘諭の功に賴れりと。
德宗省表知如此。 德宗表を省て此の如きを知り、
笑令(一六)中使迎蠻子。 笑つて中使をして蠻子を迎へしむ。
蠻子(一七)道從者誰何。 蠻子道從の者は誰何ぞ、
(一八)摩挲俗羽雙隈伽。 摩挲俗羽雙隈伽。
(一九)淸平官持赤藤杖。 淸平の官は赤藤の杖を持ち、
(二〇)大將軍繫金呿嗟。 大將軍は金呿嗟を繫く。
(二一)異牟尋男尋閣勸。 異牟尋が男尋閣勸、
特敕召對(二二)延英殿。 特に敕して延英殿に召對す。

河に討ち全軍覆沒した。

【一四】休明 休は美なり。
【一五】微臣 蜀將自ら謂ふ。
【一六】中使 宮中の使者。
【一七】道從 先導し隨從する。誰何は誰人何者。
【一八】摩挲 手で撫摩すること。俗羽以下未詳。
【一九】淸平官 唐宋詩醇に新唐書南蠻傳を引き「淸平官ハ國事ノ輕重ヲ決スル所以ニシテ猶ホ唐ノ宰相ノ如シ」とある。
【二〇】大將軍 唐宋詩醇に「大軍將ノ訛ナラン」とある。呿嗟は、なめしかはの帶。
【二一】異牟尋 南詔王の名。尋閣勸は異牟尋の子。
【二二】延英殿 宮殿の名。

上心貴在懷遠蠻。 上の心貴ぶは遠蠻を懷くるに在り、
引臨玉座近天顏。 引いて玉座に臨みて天顏に近かしむ。
(二三)冕旒不垂親勞俫。 冕旒垂れず親ら勞俫し、
賜衣賜食移時對。 衣を賜ひ食を賜ひて時を移して對す。
移時對不可得。 時を移すまで對すること、得可からず。
大臣相看有羨色。 大臣相看て羨色有り。
可憐宰相(二四)拖紫佩金章。 憐む可し宰相紫を拖き金章を佩ぶるも、
朝日唯聞對(二五)一刻。 朝日唯聞く對すること一刻のみと。

【題義】 武將が驕りて宰相は唯位に備はるのみなることを刺つた詩である。

【詩意】 蠻夷が來朝した。獸皮で作つた船に乘り、繩で架けた橋を渡りなどして嶲州の方から來た。嶲州は西南の蠻夷で其道程が遙遠である。中國の界に入りて先づ蜀から過ぎると、蜀の守將蠻夷懷柔の功を收め賀表を朝廷に捧げて「雲南の六詔蠻は東は牂牁に連り西は吐蕃に連り、初は諸處に散居して星の天に在る如くなりしが、合して一詔となつてから漸く强大を致し、玄宗の如き聖神の御德を以

【二三】冕旒 天子の冠。旒は冠の前後に垂れてあるもの。勞俫はねぎらふこと。
【二四】拖紫 紫は紫綬。金章は金印。
【二五】一刻 十五分の時間。

てしても之を來朝せしむる能はず、鮮于仲通六萬の兵を以て之を征するも、一戰にして全軍覆沒し、今に至るも西洱の河岸に當時戰歿者の遺骨を見る。其遺骨は刀箭の創痕を以て蔽はれてゐる。激戰の狀想ふべし。然るに其倔強なる蠻族も、今や中國の德風を慕ひ、一介の使を勞せずして自ら來りて款を通ずるに至つた。是れ陛下の聖德に由ると雖も、亦臣等勸誘諭告の功に由るので御座る」と、申上げた。德宗皇帝其表を見て此の如きを知り、笑つて中使に命じ蠻子を迎へしめた。蠻子の拜謁する時先導隨從する者は何人ぞといふに、淸平官卽ち彼國の宰相が赤藤杖を携へ、其大將軍が金色の韋帶を繫けて從つた。天子特に敕して延英殿に召對す、天子の御心は遠蠻を懷柔するを貴ぶゆゑ、更に玉座に引いて天顏に咫尺せしめ、冕旒をも垂れず龍顏の見えるやうにして、親しく勞問して衣食を賜ひ、召對時を移した。實に是れ異數の光榮であつて、朝廷の諸大臣も羨望の色あり、紫綬金章を佩びたる宰相も登朝の日、唯一刻の拜謁あるのみなるに、天子の蠻子に謁を賜ふこと此の如く叮嚀なるを見ても、宰相空しく位に備はり、徒らに至尊をして社稷を憂へしむるの狀あること察すべきである。

驃國樂　欲王化之先邇後遠也

驃國樂　王化の邇きを先にし遠きを後にせんことを欲するなり

(一)驃國樂。驃國樂。　驃國樂、驃國樂、

出自大海西南角。　大海西南の角より出づ。

雍羌之子舒難陀。　雍羌が子舒難陀、

來獻(二)南音奉正朔。　來つて南音を獻じて正朔を奉ず。

德宗(三)立仗御紫庭。　德宗仗を立てて紫庭に御し、

(四)黈纊不塞爲爾聽。　黈纊塞がず爾が爲に聽く。

(五)玉螺一吹椎髻聳。　玉螺一たび吹いて椎髻聳え、

銅鼓一擊(六)文身踊。　銅鼓一たび擊ちて文身踊る。

(七)珠纓炫轉星宿搖。　珠纓炫轉して星宿搖ぎ、

(八)花鬘斗藪龍蛇動。　花鬘斗藪して龍蛇動く。

曲終王子(九)啓聖人。　曲終りて王子聖人に啓す、

臣父願爲唐外臣。　臣が父唐の外臣たらんことを願ふと。

左右歡呼何(一〇)翕習。　左右歡呼して何ぞ翕習たる、

至尊德廣之所及。　至尊德の廣きの及ぶ所なりと。

【字解】【一】驃國　今の緬甸地方に在りし國の名。新唐書禮樂志に、「貞元十七年、驃國王雍羌ソノ弟悉利移城主舒難陀ヲ遣シ、其國樂ヲ獻ズ。韋皐其聲ヲ譜次シテ以テ獻ズ」とある。
【二】南音　南蠻の音樂。正朔は唐の曆なり。
【三】立仗　儀仗を備へる。紫庭は宮庭なり。
【四】黈纊　黄色の綿で作つた玉。天子の兩耳のあたりに垂れる。妄に聽かざるを意味す。
【五】玉螺　玉で飾つた法螺の貝。椎髻は頭のまげ。
【六】文身　いれずみした身體。
【七】珠纓　珠で飾つた冠の紐。星宿は星。
【八】花鬘　美しきかつら。斗藪は、ふるふこと。

須臾百〔一一〕辟詣閤門。　須臾に百辟閤門に詣り、
俯伏〔一二〕拜表賀至尊。　俯伏拜表して至尊に賀す。
伏見驃人獻新樂。　伏して驃人の新樂を獻るを見、
請書國史傳子孫。　國史に書して子孫に傳へんと請ふ。
時有擊壤老農父。　時に擊壤の老農夫有り、
暗測君心閒獨語。　暗に君の心を測りて閒に獨語す。
聞君政化甚聖明。　聞く君政化甚だ聖明、
欲感人心致太平。　人心を感せしめて太平を致さんと欲すと。
感人在近不在遠。　人を感せしむるは近きに在つて遠きに在らず、
太平由實非由聲。　太平は實に由りて聲に由るに非ず。
觀身理國國可濟。　身を觀て國を理むれば國濟ふ可し、
君如心兮民如體。　君は心の如く民は體の如し。
體生疾苦心〔一三〕憯悽。　體疾苦を生ずれば心憯悽なり、

〔九〕　王子　舒難陁を指す。聖人は唐の天子を指す。
〔一〇〕　翕習　多く集る貌。
〔一一〕　百辟　百官なり。
〔一二〕　拜表　賀表を奉る。
〔一三〕　憯悽　痛むこと。

民得和平君〔一四〕愷悌。　民和平を得れば君愷悌なり。
〔一五〕貞元之民若未安。　貞元の民若し未だ安からずんば、
驃樂雖聞君不歡。　驃樂聞くと雖も君歡ばず。
貞元之民苟無病。　貞元の民苟も病無くんば、
驃樂不來君亦聖。　驃樂來らざるも君亦聖なり。
驃樂驃樂徒喧喧。　驃樂驃樂徒に喧喧たり、
不如聞此〔一六〕芻蕘言。　此芻蕘の言を聞かんには如かず。

【題義】　天子の德化の近きを先にして遠きを後にせられんことを望む旨を述べたのである。

【詩意】　驃國の音樂は、大海西南の一隅より出たもので、其國王雍羌の子舒難陁が來朝して、其國の音樂を獻じ、唐の正朔を奉ずることになつた。德宗皇帝は儀仗を備へて宮庭に臨御し、黈纊耳を塞がずして之を聽きたまふ。玉螺を吹くと、椎の形の蠻人の髻が聳え立ち、銅鼓を擊ちて文身の人が踊り出す。珠玉を聯ね垂れた冠の紐が列星の動搖するが如く、花のかつらは龍蛇の動くが如くである。曲終りて王子舒難陁天子に啓奏するやう、「臣が父雍羌は、唐に臣屬して外藩を守らんことを願うて居りますと。左右の朝臣歡呼して相聚合し、「天子聖德の廣く及ぶところで御座る」と申上げた。忽ちに

〔一四〕　愷悌　やはらぎ樂む。
〔一五〕　貞元　德宗の年號。
〔一六〕　芻蕘　芻は草を刈ること、蕘は薪を採ること、賤民をいふ。

して百官宮門に至り、俯伏して賀表を捧げて、天子の德を頌し、伏して驃國人の新樂を獻するを聞き、國史に書して子孫に傳へんと願うた。時に壤を擊つの老農夫ありて、竊に天子の大御心を測り奉りて閒に獨語した。「聞けば天子の政化甚だ聖明にして、民心を感化して太平を致さんとし給ふといふ。民心を感化するは近きにありて遠きにあらず。太平は其實を主として聲を採らず。近く身に顧みて國を治むれば國自ら治まるのである。國家を以て人身に譬へて見れば、君は心の如く、民は身體の如きものである。身體に疾患あれば心の痛み悲むが如く、民に疾苦あるは君の憂である。民和平にして君も樂易するのである。貞元の民若し未だ安からざるところあれば、驃國の新樂を聞くも君樂まず、貞元の民に疾苦なくんば、驃國新樂を獻せざるも、君に聖人の德があるのである。驃樂は其聲徒に喧しきのみにて、何の效かあらん。寧ろ我等賤民の言を聽き、民の疾苦を察し、善政を施すにまさることはない」と。

縛戎人　達窮民之情也

縛戎人　窮民の情を達するなり

縛戎人(一)、縛戎人。
縛戎人、縛戎人、

耳穿面破驅入秦(二)。
耳穿たれ面破れ驅られて秦に入る。

天下矜憐不忍殺。
天子矜憐して殺すに忍びず、

詔徙東南吳與越。
詔して東南の吳と越とに徙す。

黃衣小使(三)錄姓名。
黃衣の小使姓名を錄し、

領出長安乘遞(四)行。
領して長安を出て遞に乘じて行く。

身被金瘡面多瘠。
身は金瘡を被り面多く瘠す、

扶病徒行日一驛。
病を扶けて徒行すること日に一驛。

朝湌(五)飢渴費杯盤。
朝湌には飢渴杯盤を費す、

夜臥腥臊(六)汚牀席。
夜臥には腥臊牀席を汚す。

忽逢江水(七)憶交河。
忽ち江水に逢うて交河を憶ひ、

垂手齊聲嗚咽歌。
手を垂れ聲を齊うして嗚咽して歌ふ。

其中一虜語諸虜。
其中一虜諸虜に語る、

爾苦非多我苦多。
爾が苦み多きに非ず我が苦多しと。

同伴行人因借問。
同伴の行人因つて借問すれば、

【字解】【一】縛戎人　しばられたエビス。
【二】秦　長安の都。昔の秦の地なるゆゑにいふ。
【三】小使　小役人。
【四】遞　宿次馬車。
【五】朝湌　朝食。杯盤は杯や皿。
【六】腥臊　なまぐさいこと。
【七】江水　揚子江。交河は蕃地に在る川の名。

欲說喉中氣憤憤。　說かんと欲して喉中氣憤憤たり。

自云鄉(八)管本涼原。　自ら云ふ鄉管は本と涼原、

大(九)曆年中沒落蕃。　大曆年中蕃に沒落す。

一落蕃中四十載(一〇)。　一たび蕃中に落ちて四十載、

身著皮裘繫毛帶。　身皮裘を著毛帶を繫く。

唯許正(一一)朝服漢儀。　唯正朝漢儀に服するを許す、

斂衣整巾潛淚垂。　衣を斂め巾を整へて潛に淚垂る。

誓心密定歸鄉計。　心に誓つて密に歸鄉の計を定め、

不使蕃中妻子知。　蕃中の妻子をして知らしめず。

暗思幸有殘筋骨。　暗に思ふ幸に殘の筋骨有り、

更恐年衰歸不得。　更に恐る年衰へて歸り得ざらんことを。

蕃(一二)候嚴兵鳥不飛。　蕃候兵を嚴にして鳥だに飛ばず、

脫身冒死奔逃歸。　身を脫し死を冒して奔逃し歸る。

【八】 鄉管　原籍地。 涼原は涼州の原、卽ち甘粛省涼州府。

【九】 大曆　唐の代宗の年號。 蕃は吐蕃。

【一〇】 四十載　四十年。

【一一】 正朝　正月の元日。

【一二】 蕃候　蕃人の番兵。

晝伏宵行經大漠(一三)。　晝は伏し宵は行きて大漠を經、

雲陰月黑風沙惡。　雲陰く月黑うして風沙惡し。

驚藏青(一四)塚寒草疎。　驚きて青塚に藏るれば寒草疎に、

偸度黃河夜氷薄。　偸に黃河を度れば夜氷薄し。

忽聞漢軍鼙(一五)鼓聲。　忽ち漢軍の鼙鼓の聲を聞き、

路傍走出再拜迎。　路傍に走り出で再拜して迎ふ。

游(一六)騎不聽能漢語。　游騎は聽かず能く漢語するを、

將軍遂縛作蕃生(一七)。　將軍遂に縛して蕃生と作す。

配向江南卑濕地。　配せられて江南卑濕の地に向ふ、

豈無存(一八)卹空防備。　豈に存卹無からん空しく防備す。

念此吞聲仰訴天。　此を念うて聲を吞み仰いで天に訴ふ、

若爲辛苦度殘年。　若爲ぞ辛苦殘年を度らん。

涼原鄉井不得見。　涼原の鄉井見るを得ず、

【一三】 大漠　大きな沙漠。

【一四】 青塚　漢の元帝の宮女で後匈奴に嫁し、遂に匈奴で死んだ王昭君の墓。歸化城の南三十里に在りといふ。

【一五】 鼙鼓　馬上で打つ鼓。

【一六】 游騎　巡行の騎兵。

【一七】 蕃生　吐蕃人。

【一八】 存卹　存問し憐れむ。

胡地妻兒虛棄捐。　胡地の妻兒虛しく棄捐す。
沒蕃被囚思漢土。　蕃に沒しては囚はれて漢土を思ひ、
歸漢被劫爲蕃虜。　漢に歸つては劫かされて蕃虜とせらる。
早知如此悔歸來。　早く此の如きを知らば歸來することを悔いん、
(一九)兩地寧如一處苦。　兩地寧一處の苦みに如かんや。
縛戎人。　縛戎人、
戎人之中我苦辛。　戎人の中に我苦辛す。
自古此(二〇)寃應未有。　古より此寃應に未だ有らざるべし、
漢心漢語吐蕃身。　漢身漢語吐蕃の身。

【一九】兩地　漢と蕃。
【二〇】此寃　こんな無實の罪。

【題義】困苦に泣く窮民の情を上に通ずる爲に作つた詩である。

【詩意】縛られた戎の人がある。耳には孔をあけられ顏はひつかかれて長安へ追ひ立てられて來た。天子は憐を垂れて殺すに忍びず、之を東南の吳越の地方に徙さしめ給うた。因つて黃衣を著た小役人が彼等の姓名を帳簿に書き留め、之を宰領して宿次馬車に乘つて吳越に送り行くことになつた。見れば彼等戎人は身に切瘡を受け面は痩せ枯れてゐる。病を押して步行するのであるから、一日かかつても僅に一驛ぐらゐしか行けない。朝飯には飢ゑの爲に貪り食ひ、夜寢るには腥い身で牀席を汚すといふ狀態である。進んで揚子江まで行つた所が忽ち故鄉の交河を思ひ出し、聲を合せて咽び泣いた。中に一人の虜が他の戎共に對して、「俺の苦は到底お前等の苦の比ではない」といふ。因つて同行の仲間が其譯を問ふと、大に辯じ立てる積りらしいが喉に憤激の情がつまつて頓には言葉も出ない。やや暫くして語る所に據れば、「俺の原籍地は涼州であるが、大曆年間に吐蕃の爲に捕獲せられた。其れ以來四十年の間、俺は蕃中の仲間にはひつて蕃人同樣の身裝をしてゐた。蕃人の規則では唯正月の元日だけは我我漢人が漢の身裝をすることを許すので、俺も衣巾を整へて漢の裝をすると悲みに堪へず、蕃中の妻子（この人は蕃人を妻としてゐたのであらう）にさへ知らせずに、こつそりと故鄉の涼州へ逃げて歸らうと決心し心に思うた。今ならばまだ殘れる筋骨もあるから歸れるが、この上衰へては歸らうにも歸られない。今が倔強の逃げ時だと。が、蕃人の見張が嚴重で鳥さへ飛べないくらゐであつたが、辛うじて隙をねらつて逃げ歸つた。晝は草葉の蔭に匿れ夜は沙漠の中を行き、月暗く風悲しき時、驚いて青塚のあたりに身を潛めると冬枯の草疎に、竊に黃河を渡れば氷が薄くて覺えず膽を冷やした。忽ち漢軍の鼓の音を聞き、やれ嬉しやと再拜して出迎へると、巡行の騎兵は俺が漢語をよく話すのも聽かずに將軍の處へつき出したので、將軍は俺を吐蕃人として縛つてしまつた。それが爲に今

後江南の卑濕の地に流されて行くのだが、お上では憐恤を垂れて下さらぬのではないが、如何にせん慣れぬ風土であるから邪氣の防ぎやうもない。此事を思ひ聲を呑んで天に訴へる。涼州の故郷は復見るべからず、胡地の妻子は振り棄ててしまつて、どうして辛苦して衰老の身を送らうかと。ああ吐蕃に捕はれては漢土を思ひ、漢土に歸りては劫かされて蕃人と誤認せられた。こんなことと知つたら歸らないのであつた。兩地で苦むよりは寧ろ一地で苦んだ方がよい。多くの縛られた戎の中でも、俺は殊更苦がひどい。昔から俺ほど無實の罪に泣く者はあるまい。心も言葉も漢人でありながら身は吐蕃人として縛られてゐるのだ。」との話である。

白樂天詩集卷四

諷諭四　新樂府下　三十首

驪宮高　美天子重惜人之財力也

驪宮高　天子の人の財力を重惜するを美するなり

高高驪山(一)上有宮。　高高たる驪山上に宮有り、
朱樓紫殿三四重。　朱樓紫殿三四重。
(二)遲遲兮春日。　遲遲たる春日には、
(三)玉甃暖兮溫泉溢。　玉甃暖にして溫泉溢れ、
(四)嫋嫋兮秋風。　嫋嫋たる秋風には、
山蟬鳴兮宮樹紅。　山蟬鳴いて宮樹紅なり。

【字解】【一】驪山　陝西省西安府臨潼縣に在る山の名。玄宗皇帝の開元十一年溫泉宮を此山に建て屢〻行幸あり、天寶六載華淸宮と名を改めた。
【二】遲遲　春の日の永くて容易に暮れぬさま。
【三】玉甃　浴場の石疊。
【四】嫋嫋　秋風のふく貌。

(五)翠華不來兮歲月久。 翠華來らずして歲月久し、
墻有衣兮瓦(六)有松。 墻に衣有り瓦に松有り。
(七)吾君在位已五載。 吾君位に在すこと已に五載、
何不一幸於其中。 何ぞ一たび其中に幸したまはざる。
西去(八)都門幾多地。 西のかた都門を去ること幾多の地ぞ、
吾君不遊有深意。 吾君の遊びたまはざるは深意有り。
(九)一人出兮不容易。 一人出でたまふこと容易ならず、
(一〇)六宮從兮百司備。 六宮從つて百司備はる。
(一一)八十一車千萬騎。 八十一車千萬騎、
朝有(一二)宴飫暮有賜。 朝には宴飫有り暮には賜有り。
(一三)中人之產數百家。 中人の產數百家、
未足充君一日費。 未だ君が一日の費に充つるに足らず。
吾君修己人不知。 吾君己を修む人知らず、

【五】翠華 天子の御旗、翠羽を以て飾る、故にかくいふ。
【六】瓦有松 屋根瓦の間に小さい松の生えること。
【七】吾君 吾君は唐の憲宗。五載は五年。
【八】都門 長安の都の門。
【九】一人 天子をいふ。
【一〇】六宮 天子の後宮をいふ。百司は百官。
【一一】八十一車 天子の鹵簿には八十一乘の屬車從ふ。
【一二】宴飫 盛宴なり。
【一三】中人 中產階級の人民。

不自逸兮不自嬉。 自ら逸せず自ら嬉ます。
吾君愛人人不識。 吾君人を愛す人識らず、
不傷財兮不傷力。 財を傷はず力を傷はず。
驪宮高兮高入雲。 驪宮高し高く雲に入る。
君之來兮爲一身。 君の來るは一身の爲なり、
君之不來兮爲萬人。 君の來らざるは萬人の爲なり。

【題義】天子が人民の財力を徒費することを憚り妄に行幸し給はざることをほめて作つた詩である。

【詩意】高い高い驪山の上に天子の離宮があつて、朱樓紫殿三層も四層も重なつてゐる。長くのどかな春の日には、玉でたたんだ暖かな石疊に溫泉が溢れ、風そよぐ秋には蟬が鳴き御苑の樹がもみぢするが、天子の御車來らず、空しく歲月を經過し、墻は苔の衣を蒙り、瓦のぬひめには松が生ひ出づる有樣である。今の天子在位五年の久しき、一たびも此離宮に臨幸せられぬは何故であらう。西皇居を隔つること遠からず、然るに遊幸したまはざるは、深き思召のあることであらう。上御一人の出御は容易の事にあらず、六宮の妃嬪媵妾隨從して百官總べて扈從し、八十一車千萬騎の行列、朝には宴會暮には恩賜の品品、中產の人數百家の資財を費しても未だ天子御一人一日の御遊の費用を辨ずるには

足らない。吾君の德を修むること世人未だ知らず、上御一人にて自ら嬉遊したまはず、國民を愛撫したまふも人其聖意の在るところを知らず、國民の財力を傷損するを憚りて敢て遊幸したまはぬのである。されば驪山の離宮空しく高く雲に入りて聳ゆるのみ。天子此處に臨幸あらせらるるは御一身のためで、御臨幸なきは國家萬民のためである。

百鍊鏡　辨二皇王鑒一也

百鍊鏡、皇王の鑒を辨ずるなり

百鍊鏡。　百鍊鏡。
（一）鎔範非二常規一。　鎔範常規に非ず、
（二）日辰置處靈且奇。　日辰置く處靈にして且つ奇なり。
（三）江心波上舟中鑄。　江心波上舟中に鑄る、
五月五日日（四）午時。　五月五日日午の時。
（五）瓊粉金膏磨瑩已。　瓊粉金膏磨瑩し已り、
化爲二一片（六）秋潭水一。　化して一片の秋潭の水と爲る。

【字解】【一】鎔範　鑄形なり。常規の規は圓形をいふ。
【二】日辰　日時計。
【三】江心　揚子江のまんなか。異聞集に、天寶中、揚州進二水心鏡一、背有二盤龍一、言鑄二鏡時一、有二老人一、自稱姓龍名護、以二五月五日一、於二揚子江心一鑄レ之とある。
【四】日午　正午。
【五】瓊粉　玉の如き粉。鏡を磨くに用ふ。

鏡成將レ獻二（七）蓬萊宮一。　鏡成つて將に蓬萊宮に獻ぜんとす、
（八）揚州長吏手自封。　揚州の長吏手自から封ず。
（九）人間臣妾不レ合レ照。　人間の臣妾照らす合からず、
背有二（一〇）九五飛天龍一。　背に九五飛天の龍有り。
人人呼爲二天子鏡一。　人人呼んで天子の鏡と爲す、
我有二一言聞二（一一）太宗一。　我一言の太宗に聞ける有り。
太宗常以レ人爲レ鏡。　太宗常に人を以て鏡と爲し、
鑒レ古鑒レ今不レ鑒レ容。　古を鑒み今を鑒み容を鑒みず。
四海安危居二掌內一。　四海の安危掌內に居き、
百王治亂懸二心中一。　百王の治亂心中に懸く。
乃知天子別有レ鏡。　乃ち知る天子には別に鏡有るを、
不二是揚州百鍊銅一。　是れ揚州百鍊の銅ならず。

【通義】天子は鏡を以て鑒みず、當に人を以て鑒となすべきことを辨明した詩である。

【六】秋潭水　明鏡を秋水に喩へたのである。
【七】蓬萊宮　唐の宮殿の名。
【八】揚州云云　此句一に銅盤金匣鐵甕重に作る。
【九】人間　俗世間。
【一〇】九五　易にて天子の位を九五の位といふ。龍を天子に喩ふ。
【一一】太宗　唐第二代の英主。

【詩意】　ここに百錬の銅鏡がある。（昔の鏡は青銅で作り其形は圓形である。）然も其鑄形は普通の圓さとはちがつて極めて正しい圓さである。此鏡を鑄る時には靈奇な處に日時計を据ゑつけ、五月五日の正午に、揚子江の中央の波上に漂ふ舟の中で鑄たのである。それから玉の粉や金の膏でみがきをかけると、一片の秋潭にも比すべき明鏡となつた。之を天子に獻上せんとして揚州の太守が自ら箱の中に封印をして藏めた。これは俗界の男女などが顏を照らすべきものではなく、背に飛龍が雕めてあるので、人皆天子の鏡と呼んだ。余は嘗て太宗皇帝から承つた言葉がある。太宗は平生人を以て鏡とせられ、又古今の成敗を鏡とせられて、己の姿を鑒る鏡は用ひられなかつた。かくて天下の安危を掌中に握り、百世の治亂を心中に懸けてゐられた。されば天子には別に臣民と違つた鏡があるので、揚州で鑄た百錬の銅鏡などではない。

青石　激忠烈也

青石　忠烈を激ますなり

青石出自藍田山(一)。　青石は藍田山より出づ、

兼車(二)運載來長安。　兼車運載して長安に來れり。

工人磨琢欲何用。　工人磨琢して何にか用ひんと欲する、

【字解】(一) **藍田山**　長安の南に在る山の名。(二) **兼車**　軟車といふが如し。

石不能言我代言。　石言ふ能はす我代つて言ふ。

不願作人家(三)墓前神道碣。　人家墓前の神道の碣と作らんことを願はす。

墳土未乾名已滅。　墳土未だ乾かざるに名已に滅す。

不願作官家道傍德政碑(四)。　官家道傍の德政の碑と作らんことを願はす、

不鐫實錄鐫虛辭。　實錄を鐫らすして虛辭を鐫る。

願爲段氏(五)顏氏碑。　願はくは段氏顏氏の碑と爲つて、

雕鏤太尉與太師。　太尉と太師とを彫鏤せんことを。

刻此兩片堅貞質。　此兩片堅貞の質に刻んで、

狀彼二人忠烈姿。　彼二人の忠烈の姿を狀せん。

義心如石屹不轉。　義心石の如く屹として轉ばす、

死節如石確不移。　死節石の如く確として移らす。

如觀奮擊朱泚日。　朱泚を奮擊せし日を觀るが如く、

似見叱呵希烈時。　希烈を叱呵せし時を見るに似たり。

(三) **人家**　普通の人の家。**神道碣**は墓道に建つる碑。(四) **德政碑**　官吏の德政を頌する碑。(五) **段氏**　段秀實、建中四年朱泚が謀叛した時笏を以て朱泚を擊つた。死後太尉を贈られた。**顏氏**は顏眞卿、李希烈の叛を罵る。眞卿は太子太師となる。

各於其上題名謚。　各其上に於て名謚を題し、
一置高山一沈水。　一は高山に置き一は水に沈め、
（六）陵谷雖遷碑獨存。　陵谷遷ると雖も碑獨存し、
骨化爲塵名不死。　骨化して塵と爲るも名死せず、
長使不忠不烈臣。　長く不忠不烈の臣をして、
觀碑改節慕爲人。　碑を觀て節を改め人と爲りを慕はしめん。
慕爲人勸事君。　人と爲りを慕はしめ、君に事ふるを勸めん。

【六】陵谷　丘と谷と地形の變ること。

【題義】人臣の忠勇義烈を勵ます爲に作つたのである。

【詩意】藍田山から出た靑石、數車に併せ載せられて長安の都に運ばれた。石工が之を琢磨して何に用ひんとするか、石自ら言ふ能はざれば我代りて言はう。「普通人家の墓碑となるを願はない。何となれば其墳墓の土未だ乾かざるに其人の名聲は世に傳らなくなつてしまふからである。又官家善政の頌德碑となることも願はない。何となれば事實を枉げて徒らに諛辭を刻するからである。願くは段太尉や顏太師の碑となりて、兩片の石に其忠烈の狀を現はしたいものだ。此二人忠義の心は屹然として石の轉ばすべからざるが如く、節に殉ずる志は確乎として石の移動せざるが如く、朱泚僭位の日死を犯して之を排擊したる實際を觀るが如く、叛臣李希烈の權威に屈せず、目前之を叱斥罵倒したる狀を目擊するが如くならしめたい。而して各姓名謚號を兩片の石に刻して、一は高山の上に置き一は水底に沈め、地の形勢變りて山は谷となり河は岡となるも其碑長く人間に傳はり、骨は朽ちて塵となるも二人の忠名は不朽に輝き、いつまでも世の不忠不義の臣をして此碑を觀て其志を改め、二人の忠烈を慕ひ天子に事ふるの道を盡さんことを勸めたいものだ。」

兩朱閣　刺佛寺寖多也

兩朱閣　佛寺の寖く多きを刺るなり

（一）兩朱閣。　兩朱閣、
南北相對起。　南北に相對して起る。
（二）借問何人家。　借問す何人の家ぞ、
（三）貞元雙帝子。　貞元の雙帝子なり。
帝子吹簫雙得仙。　帝子簫を吹いて雙びに仙を得たり、
（四）五雲飄飄飛上天。　五雲飄飄として飛んで天に上る。
（五）第宅亭臺不將去。　第宅亭臺將ち去らず、

【字解】【一】兩朱閣　二棟の朱塗の樓閣。【二】借問　試に問ふ。【三】貞元　唐の德宗の年號。雙帝子は二人の姫宮。【四】五雲　五色の雲。【五】第宅　邸宅なり。

化爲佛寺在人間。　化して佛寺と爲つて人間に在り。
粧閣妓樓何寂靜。　粧閣妓樓何ぞ寂靜なる、
柳似舞腰池似鏡。　柳は舞腰に似池は鏡に似たり。
花落黃昏悄悄(六)時。　花落ちて黃昏悄悄たる時、
不聞歌吹聞鐘磬。　歌吹を聞かずして鐘磬を聞く。
寺門敕榜(七)金字書。　寺門敕して金字の書を榜す、
尼院佛庭寬有餘。　尼院佛庭寬うして餘り有り。
青苔明月多閑地。　青苔明月閑地多く、
(八)比屋齊人無處居。　比屋の齊人居るに處無し。
憶昨平陽(九)宅初置。　憶ふ昨平陽宅初めて置きしとき、
呑併平人(一〇)幾家地。　平人幾家の地を呑併せしことを。
(一一)仙去雙雙作梵宮(一二)。　仙し去りて雙雙梵宮と作る、
漸恐人家盡爲寺。　漸く恐る人家の盡く寺と爲らんことを。

【六】悄悄　淋しき貌。
【七】榜　立札を立てる。
【八】比屋　軒を竝べる。齊人は平民。
【九】平陽　漢の武帝の姉、平陽公主。ここには德宗の姬君を指していふ。
【一〇】平人　平民。
【一一】仙去　薨去すること。
【一二】梵宮　佛寺。

【題義】佛寺が漸く多くなつて民居を侵すことを刺つたのである。

【詩意】二棟の朱塗の樓閣が南と北とに相對して聳えてゐる。何人の住居かと問へば德宗皇帝の二人の姬宮の御住居だとのことだ。この二人の姬宮樣は五色の雲に乘つて天に上られた。(薨去したこと、秦の穆公の女弄玉が蕭史といふ者の妻となり、簫を吹くことを敎へられ、倶に仙術を修めて鳳凰に乘つて昇天した故事を用ひたのである。)併し邸宅や亭臺は持ち去ることは出來ないので、此世に殘してあつたが、それが今では寺になつてゐる。化粧室や妓女の控室などはひつそりとして、庭前の柳に當日の舞腰を想ひ池の水を見て明鏡を想ふのみ。黃昏花落ちて音なき時、歌吹の聲ではなく、鐘磬の聲を聞くばかりである。寺の門には金泥で書いた立札が立てられ、尼院や庭園はからりとして廣く、夏は青苔の蒸すに任せ、秋は明月の照すに任せてあるが、軒を竝ぶる平民どもは住宅難を訴へてゐる有樣である。初め此姬宮樣が此邸宅を造られた時は平民ども何戸分の土地を併呑したのであらうか。定めて多くの戸數をつぶしたのであらう。それが御薨去になると佛寺にされてしまふ。この調子では人民の家がしまひには皆寺になつてしまひはしまいかと氣遣はれる。

西涼伎　刺封疆之臣也　西涼伎　封疆の臣を刺るなり

(一)西涼伎。　西涼の伎、

【字解】【一】西涼伎　甘肅省涼

假面胡(二)人假獅子。　假面の胡人假獅子。
刻木爲頭絲作尾。　木を刻して頭と爲し絲を尾と作し、
金鍍眼(三)睛銀帖(四)齒。　金を眼睛に鍍し銀を齒に帖す。
奮迅毛衣擺雙耳。　奮迅たる毛衣雙耳を擺ふ、
如從流(五)沙來萬里。　流沙より萬里に來るが如し。
紫髯深目兩胡兒。　紫髯深目の兩胡兒、
鼓(六)舞跳梁前致辭。　鼓舞跳梁前んで辭を致す。
應似涼州未陷日。　應に涼州の未だ陷らざる日、
安(七)西都護進來時。　安西都護進め來る時に似たるべし。
須臾云得新消息。　須臾にして云ふ新消息を得たり、
安西路絕歸不得。　安西路絕えて歸り得ず。
泣向獅子涕雙垂。　泣いて獅子に向つて涕雙び垂る、
涼州陷沒知不知。　涼州の陷沒せること知るや知らずや。

州の地から傳つた伎樂。
【二】胡人　えびす。
【三】眼睛　ひとみ。
【四】帖　はり紙すること。
【五】流沙　涼州地方の沙漠。
【六】鼓舞　鼓の音につれて舞ふ。跳梁はをどりあがる。
【七】安西都護　官名。

獅子回頭向西望。　獅子頭を回らし西に向つて望み、
哀吼一聲觀者悲。　哀み吼ぶこと一聲觀る者悲む。
貞(八)元邊將愛此曲。　貞元の邊將此曲を愛し、
醉坐笑看看不足。　醉坐笑ひ看て看れども足らず。
享賓犒士宴三(九)軍。　賓を享し士を犒うて三軍を宴す、
獅子胡兒長在目。　獅子胡兒長く目に在り。
有一征夫年七十。　一征夫有り年七十、
見弄涼州低面泣。　涼州を弄するを見面を低れて泣く。
泣罷斂手白將軍。　泣き罷んで手を斂めて將軍に白す、
主(一〇)憂臣辱昔所聞。　主憂ふるとき臣辱めらるること昔聞く所なり。
自從天(一一)寶兵戈起。　天寶に兵戈起りしより、
犬(一二)戎日夜吞西鄙。　犬戎日夜西鄙を吞む。
涼州陷來四十年。　涼州陷つて來四十年、

【八】貞元　德宗の年號。
【九】三軍　一に監軍に作る。
【一〇】主憂臣辱　史記越世家に見ゆ。
【一一】天寶　玄宗皇帝の年號。
【一二】犬戎　吐蕃を指す。

(一三)河隴侵將七千里。
平時安西萬里疆。
今日邊防在鳳翔。(一四)
緣邊空屯十萬卒。
飽食溫衣閑過日。
遺民腸斷在涼州。
將卒相看無意收。
天子每思常痛惜。
將軍欲說合慙羞。
奈何仍看西涼伎。
取笑資歡無所愧。
縱無智力未能收。
忍取西涼弄爲戲。

河隴侵將す七千里。
平時には安西萬里の疆、
今日邊防鳳翔に在り。
緣邊空しく屯す十萬の卒、
飽食溫衣閑に日を過す。
遺民腸斷つて涼州に在り、
將卒相看て收むるに意無し。
天子思ふ每に常に痛惜す、
將軍說かんと欲して合に慙羞すべし。
奈何ぞ仍りに西涼の伎を看、
笑を取り歡びに資して愧づる所無き。
縱ひ智力無くして未だ收むる能はざるも、
西涼を取つて弄して戲と爲すに忍びんや。

【一三】河隴　甘肅省の西部の地。侵將の將はセツテの意で助辭的に用ひたのである。
【一四】鳳翔　地名。

【題義】國境を守る臣を刺つた詩である。

【詩意】涼州の舞伎を見た。それは胡人が面をかぶつて獅子舞をするのである。その扮裝は木を刻して獅子の頭となし絲で尾を作り、目には鍍金の眼球をはめ齒には銀紙を貼り、毛衣を逆立て兩耳を振ひ、流沙の地方から萬里を越え中國に渡つて來た時の勢のやうだ。赤髯の目のくぼんだ二人の胡人が鼓の音につれて跳りながら觀客の前に進んで口上を述べる。「此獅子は涼州がまだ吐蕃の手に歸せぬ頃、安西都護が獻上した頃の儘で御座る。」と。やがて語を續けて「このごろ新しいたよりを得ましたが、安西の方は道路が絕えて歸られないと申します。」と。因つて泣いて獅子の方を向いて「お前は涼州が陷つたことを知つてゐるか」といふと、獅子は首を回らして西方を望み、悲しげに一聲吼える。之を見た觀客一同皆悲を催ほした。貞元の邊將某は此曲を好んで醉坐して笑ひながら之を見物し、賓客士卒を饗する時にも必ず此曲を演ぜしめる。或る時一人の七十ばかりになる從軍者があつて、此曲を演ずるを見うつ伏して泣いた。それから淚を拭つて邊將某に申出した。「主憂へ臣辱められるといふことは昔から聞く所であるが、天寶十四年に安祿山の亂が起つてから、吐蕃の兵が徐徐に西方の僻地を侵略し、涼州が彼等の手に陷つてから四十年になり、河隴七千里が侵略されてしまつた。平生は安西都護のゐた處は萬里の遠疆に在つたが、今日では都のすぐ鄰の鳳翔に防備を置くといふ狀態で、徒に十萬の兵卒を駐屯させてあるが、飽食暖衣して空しく日を送つてゐる。涼州の遺民は吐蕃の

領地になつたことを悲んでゐるが、邊防の將卒は少しも其土地を回復しようといふ氣はない。天子は常に此事を痛惜してゐる。邊將たる者は此事を口にするだに慙愧すべきである。いかなれば常にこの西涼の獅子舞の曲を見て笑ひ興じ、愧づることを知らぬのであるか、智謀がなくて回復が出來ぬとならば、まだ恕すべき所もあるが、涼州の獅子舞を取つて之を遊戲の資に供するとは何事であるかゝと。

八駿圖　誡奇物懲佚游也

八駿圖　奇物を誡め佚游を懲らすなり

穆(一)王八駿天馬駒。　穆王八駿天馬の駒、
後人愛之寫爲圖。　後人之を愛し寫して圖と爲す。
背如龍兮頸如象。　背は龍の如く頸は象の如く、
骨竦筋高脂(二)肉壯。　骨竦り筋高うして脂肉壯なり。
日行萬里疾如飛。　日に行くこと萬里疾きこと飛ぶが如し。
穆王獨乘何所之。　穆王獨り乘りて何れの所にか之きし。
四(三)荒八極踏欲遍。　四荒八極踏んで遍ねからんと欲す、
三十二蹄無歇時。　三十二蹄歇む時無し。

【字解】【一】穆王　周の天子。八駿は八頭の駿馬。
【二】脂肉壯　肉つき瘦せて健かなるをいふ。馬は瘦せたのをよしとする。壯、或は少に作り、前句の象を鳥に作る。
【三】四荒　四方の遠地。八極は八方のはて。

屬(四)車軸折趁不及。　屬車軸折れて趁へども及ばず、
黃(五)屋草生棄若遺。　黃屋草生じて棄てて遺るるが如し。
瑤(六)池西赴王母宴。　瑤池西のかた王母の宴に赴き、
七(七)廟經年不親薦。　七廟年を經て親ら薦めず。
璧臺南與盛(八)姬遊。　璧臺南のかた盛姬と遊び、
明(九)堂不復朝諸侯。　明堂復た諸侯を朝せしめず。
白(一〇)雲黃竹歌聲動。　白雲黃竹歌聲動く、
一(一一)人荒樂萬人愁。　一人荒樂して萬人愁ふ。
周從后稷至文武。　周は后稷より文武に至るまで、
積德累功世勤苦。　德を積み功を累ねて世勤苦す。
豈知纔及五(一二)代孫。　豈に知らんや纔に五代の孫に及び、
心輕王業如灰土。　心に王業を輕んずること灰土の如くなるを。
由來尤(一三)物不在大。　由來尤物は大に在らず、

【四】屬車　おともの車。
【五】黃屋　天子の車の幌。
【六】瑤池　池の名、仙女西王母の居る處。王母は西王母。
【七】七廟　天子の宗廟。
【八】盛姬　盛伯の女。
【九】明堂　天子が諸侯を會する堂。
【一〇】白雲、黃竹　歌の名。穆天子傳に見ゆ。
【一一】一人　天子をいふ。
【一二】五代　一に四代に作るは誤。
【一三】尤物　すぐれて珍奇な物。

能蕩君心則爲害。 能く君の心を蕩する卽ち害を爲す。
文帝(一四)却之不肯乘。 文帝之を却けて敢て乘らず、
千里馬去漢道興。 千里の馬去つて漢道興る。
穆王得之不爲戒。 穆王之を得て戒と爲さず、
八駿駒來周室壞。 八駿の駒來つて周室壞る。
至今此物世稱珍。 今に至るまで此物世に珍と稱す、
不知房星(一五)之精下爲怪。 房星の精下りて怪を爲すを知らず。
八駿圖。君(一六)莫愛。 八駿の圖、君愛する莫かれ。

【題義】 珍奇の物を貴ぶことを戒め佚游に耽ることを懲らした詩である。

【詩意】 周の穆王の八駿馬は後世の人が之を愛し畫圖として傳へた。其背は龍の如く其頸は象の如く筋骨太く逞ましく肉瘦せて健かで一日に萬里を行き飛ぶが如くに速かである。穆王は此の如き駿馬に乘りて何處に行くであらう。天下のすみずみまで走り廻り三十二の蹄休む時なく、隨從の車、軸折れて追隨する能はず、御召の乘輿も破れて草を生じ路傍に棄てられてゐる。さて穆王は西の方崑崙の瑤池に赴き西王母の宴席に招かれ、帝都は空虛となりて歷代の祖廟、天子の御親祭もなく、南は璧臺の盛姬と會遊して、諸侯の朝會も廢せられ、白雲黃竹の歌曲を聽きて神仙に伍して遊樂に耽り、天子一人は愉快ならんも天下の萬民は憂愁に沈んでゐた。周の祖先后稷より文王武王に至るまで功德を積み勤勞辛苦した結果、漸く得たる天下も纔か五代の孫穆王に及んで八駿馬のために王業を輕んずること土灰の如く天下の亂兆漸く現れて來た。由來珍奇な物は必ずしも大に在らず、區區の微と雖も、君の心を蕩かして害を爲すのである。故に漢の文帝は千里の馬の獻を却けて乘らなかつたので、漢の政道は隆興し、周の穆王は八駿馬を愛して戒むる所がなかつたので、周の王室は衰へた。今に至るまで世人は此八駿馬の圖を珍重するが、彼等は房星の精が地に下つて妖をなすものたることを知らないのである。諸君は、ゆめゆめ八駿圖などを愛好せぬがよい。

【一四】 文帝 漢の天子。
【一五】 房星 星の名。この星の精下りて駿馬となる。
【一六】 君 廣く世人を指す。

澗底松 念寒儁也

澗底松 寒儁を念ふなり

有松百尺大十圍。 松有り百尺大さ十圍、
生在澗底寒且卑。 生じて澗底に在り寒く且つ卑し。
澗深山險人路絕。 澗深く山險にして人路絕え、

【字解】 【一】 明堂 前の八駿圖に見ゆ。
【二】 此求彼有 此は天子の方、彼は澗底を指す。

老死不逢工度之。　老死するまで工の之を度るに逢はず。
天子(一)明堂欠梁木。　天子の明堂梁木を欠く、
此求彼有(二)兩不知。　此に求め彼に有り兩つながら知らず。
誰論(三)蒼蒼造物意。　誰か論らん蒼蒼たる造物の意、
但與之材不與地。　但だ之に材を與へて地を與へず。
(四)金張世祿黃憲賢。　金張は世祿せられて黃憲は賢なり、
(五)牛衣寒賤貂蟬貴。　牛衣は寒賤にして貂蟬は貴し。
貂蟬與牛衣。高下雖有殊。　貂蟬と牛衣と、高下殊なる有りと雖も、
高者未必賢。下者未必愚。　高者未だ必ずしも賢ならず、下者未だ必ずしも愚ならず。
君不見(六)沈沈海底生珊瑚。　君見ずや沈沈海底に珊瑚を生じ、
(七)歷歷天上種(八)白楡。　歷歷天上に白楡を種ゑたるを。

【三】蒼蒼　天の色。造物は萬物を作りし造物者、卽ち天。
【四】金張　漢の金日磾と張安世。黃憲は後漢の人、其父は牛醫なり。德高きも顯位に陞る能はずして卒した。
【五】牛衣　牛にきせる著物。漢の王章は貧にして牛衣を著てゐた。貂蟬は冠の飾。
【六】沈沈　深き貌。
【七】歷歷　分明なる貌。
【八】白楡　木の名。つまらぬ木也。

【題義】　儁は俊に同じ、俊才の貧賤に沈淪してゐるのを憐んだ詩である。

【詩意】　高さ百尺大さ十圍の松、澗底寒卑の地に生じ、深澗險山人の行くべき路なく、老いて枯死するまで工匠も之を量らず、天子の明堂、梁となすべき巨材を求むるも、彼此の地隔絶して其需用に供せられない。蒼蒼たる天は折角巨材を賦與しながら、其用を全うすべき地位を與へざるは何事であらう。金張兩姓は漢代の貴族として其祿を世襲し、黃憲は賢才ありて其地位卑く且つ貧し。牛衣の人は寒微貧賤で貂蟬を著るものは富貴である。其間に貴賤の別はあるけれども、貴きもの必ずしも賢ならず、賤しきもの必ずしも愚ならず。沈沈として深き海の底にも珊瑚の如き貴き樹を生じ、彼の高き天上にも白楡の如き賤しき木を種うるが如く、人の賢愚は必ずしも地位の高卑によりて定まるものではなく、寒微の士にも英俊の士があるのである。

牡丹芳　美天子憂農也　牡丹芳　天子の農を憂ふるを美するなり

牡丹芳。牡丹芳。　牡丹芳し、牡丹芳し。
(一)黃金蘂綻紅玉房。　黃金の蘂綻びて紅玉の房あり。
千片(二)赤英霞爛爛。　千片の赤英は霞爛爛、
百枝(三)絳焰燈煌煌。　百枝の絳焰は燈煌煌。
照地初開(四)錦繡段。　地を照して初めて開く錦繡の段、

【字解】【一】黃金蘂　黃金色をした花の蘂。紅玉房は紅色の花をいふ。
【二】赤英　赤き花びら。爛爛は輝く貌。
【三】絳焰　赤き花の色。煌煌は輝く貌。

當風不結蘭麝囊。(五) 風に當つて結ばず蘭麝の囊。
仙人琪(六)樹白無色。 仙人の琪樹は白うして色無く、
(七)王母桃花小不香。 王母の桃花は小にして香ばしからず。
(八)宿露輕盈汎紫艷。 宿露輕盈紫艷を汎べ、
(九)朝陽照耀生紅光。 朝陽照耀紅光を生ず。
紅紫二色間深淺。 紅紫二色深淺を間へ、
向背萬態隨低昂。 向背萬態低昂に隨ふ。
映葉多情隱羞面。 葉に映じては多情羞面を隱し、
臥叢無力含醉粧。 叢に臥しては力無くして醉粧を含む。
(一〇)低嬌笑容疑掩口。 低嬌は笑容口を掩ふかと疑ひ、
凝思怨人如斷腸。 凝思は怨人腸を斷つが如し。
(一一)穠姿貴彩信奇絕。 穠姿貴彩信に奇絕、
雜卉亂花無比方。(一二) 雜卉亂花比方無し。

【四】錦繡段 錦の織物。
【五】蘭麝囊 にほひ袋。
【六】琪樹 玉樹なり。
【七】王母 仙女西王母。その蟠桃は千年に一たび實を結ぶといふ。
【八】宿露 宵ごしの露。
【九】朝陽 朝日。
【一〇】低嬌 嬌面をたれる。
【一一】穠姿 あでやかな姿。貴彩は貴ぶべき色彩。
【一二】比方 たとへくらべる。

(一三)石竹金錢何細碎。 石竹金錢何ぞ細碎なる、
芙蓉芍藥苦尋常。 芙蓉芍藥苦だ尋常なり。
遂使王公與卿相。 遂に王公と卿相とをして、
(一四)遊花冠蓋日相望。 遊花の冠蓋日に相望ましむ。
(一五)庫車輕轝貴公主。 庫車輕轝の貴公主、
(一六)香衫細馬豪家郎。 香衫細馬豪家の郎。
(一七)衞公宅靜閉東院。 衞公宅靜にして東院を閉ち、
(一八)西明寺深開北廊。 西明寺深うして北廊を開く。
戲蝶雙舞看人久。 戲蝶雙び舞うて看人久しく、
殘鶯一聲春日長。 殘鶯一聲春日長し。
共愁日照芳難駐。 共に愁ふ日照して芳駐め難きを、
仍張帷幕垂陰涼。 仍に帷幕を張つて陰涼を垂る。
花開花落二十日。 花開き花落つること二十日、

【一三】石竹、金錢 草花の名。
【一四】遊花 花を賞して遊ぶ。冠蓋相望は車のひきつづくこと。
【一五】庫車 低い車。輕轝の轝は輿に同じ、車の類をいふ。公主は天子の女をいふ。
【一六】香衫 香を焚きこめた上衣。細馬は小作りな馬。豪家郎は富豪の少年。
【一七】衞公 太宗の臣李靖、衞國公に封ぜられた。東院は奥座敷。
【一八】西明寺 寺の名、牡丹を以て名あり。

一城之人皆若狂。　一城の人皆狂するが若し。
（一九）三代以還文勝質。　三代以還文質に勝ち、
人心重華不重實。　人心華を重んじ實を重んぜず。
重華直至牡丹芳。　華を重んずること直に牡丹の芳に至る、
其來有漸非今日。　其來るや漸有り今日に非ず。
（二〇）元和天子憂農桑。　元和の天子農桑を憂へ、
卹下動天天降祥。　下を卹み天を動かして天祥を降し、
去歲（二一）嘉禾生九穗。　去歲嘉禾九穗を生ず、
田中寂寞無人至。　田中寂寞として人の至る無し。
今年瑞麥分（二二）兩岐。　今年瑞麥兩岐を分つ、
君心獨喜無人知。　君の心獨喜んで人の知る無し。
無人知可歎息。　人の知る無きは、歎息す可し。
我願暫求（二三）造化力。　我願はくは暫く造化の力を求め、

【一九】三代　夏殷周なり。以還は以來。
【二〇】元和天子　憲宗皇帝。元和は其年號。
【二一】嘉禾　よき稻。
【二二】兩岐　穗のふたまたになること。
【二三】造化　造物者。

減却牡丹妖艷色。　牡丹妖艷の色を減却し、
少迴卿士愛花心。　少しく卿士花を愛するの心を迴らし、
同似吾君憂（二四）稼穡。　同じく吾君の稼穡を憂ふるに似せしめんことを。

【二四】稼穡　農業。

【題義】牡丹は世間の流行物であることは秦中吟の中の買花の篇にも述べてあるが、此詩は時の天子が牡丹を愛するよりも却つて農事に心を用ひさせ給ふことをほめて作つたのである。

【詩意】牡丹の花が芳しく咲いてゐる。黃金の蘂、紅玉の房、千片の赤英は霞の爛爛たるが如く、百枝の紅焰は燈の煌煌たるが如く、大地に錦繡をひろげたるが如く、風前に香嚢の紐を解いた如くである。仙人の白玉樹は此に比すれば色彩なく、西王母の桃花は小くもあり香氣も無い。宿露は紫艷の色を浮べ、朝日照して光彩を生じ、紅紫二色、濃きあり淡きあり、正面背面、其姿致萬態、上下低昂おもひおもひの姿をしてゐる。葉に映ずるものは多情の美人が羞を含んで面を隱すが如く、叢に臥すものは美人の醉うて力なきが如く、低れたるものは芙蓉の口を掩ふが如く、又怨ある女の物思に沈んで斷腸の思を抱くもののやうだ。濃艷の資質、珍貴の色彩、實に奇絕と云ふべく、平凡な草花などは到底比較するに足らない。石竹花金錢花などは零細論ずるに足らず、芙蓉芍藥など平凡で言ふに足らない。されば王公卿相以下の人人、牡丹を觀るがため冠蓋相望み、輕車に乗れる貴公主、美服を著

け肥馬に跨れる富豪の少年、相率ゐて花見にでかけ、衞公の宅でも東院を閉ぢ家内總出で繰り出し、西明寺では北廊を開いて花見の客を迎へる。鶯歌ひ蝶舞ひ人と共に春の長き日を遊び暮し、但日光花を照して春色老い易きを愁へ、帳幕を張りて日を遮る。花の開落僅に二十日、其間滿城の人皆な狂ふが如くである。三代以來風俗澆漓にして文が質に勝り、華美を尙んで質實を重んせず。その結果は花を重んじて牡丹を賞愛するに至つた。元和の天子下民を憫み、其聖德天を感動せしめて、天が禎祥を降し、去年は嘉禾九穗を生ずるの瑞を呈したが、其瑞を觀んとて田中に至る人はなく、今年兩岐の瑞麥ありしも、天子獨り之を喜びたまふのみで誰あつて知る者もない。實に歎息すべきことではないか。我は造化の力を借りて牡丹の妖艷を減殺し、公卿士大夫以下花を愛する心を廻して天子農を憂ふる大御心に似せしめんことを願ふ者である。

紅線毯　憂蠶桑之費也

紅線毯　蠶桑の費を憂ふるなり

(一)紅線毯。　紅線毯。
擇繭繰絲淸水煮。　繭を擇び絲を繰りて淸水に煑、
揀絲練線紅藍染。　絲を揀び線を練りて紅藍にて染む。

【字解】【一】紅線毯　紅色の毯物。

染爲紅線紅於花。　染めて紅線と爲し花よりも紅なり、
織作(二)披香殿上毯。　織つて披香殿上の毯と作す。
披香殿廣十丈餘。　披香殿の廣さ十丈餘、
紅線織成可殿鋪。　紅線織り成して殿に鋪く可し。
(三)綵絲茸茸香拂拂。　綵絲茸茸として香拂拂たり、
線軟花虛不勝物。　線軟に花虛にして物に勝へず。
美人蹋上歌舞來。　美人蹋み上り歌舞し來る、
(四)羅襪繡鞋隨步沒。　羅襪繡鞋步に隨つて沒す。
(五)太原毯澀毳縷硬。　太原の毯は澀くして毳縷は硬し、
(六)蜀都褥薄錦花冷。　蜀都の褥は薄くして錦花冷かなり。
不如此毯溫且柔。　此毯の溫にして且つ柔かなるに如かず、
年年十月來(七)宣州。　年年十月宣州より來る。
宣州太守加樣織。　宣州の太守樣を加へて織り、

【二】披香殿　宮殿の名。
【三】綵絲　いろいと。茸茸は紛亂する貌。拂拂は湧きのぼる貌。
【四】羅襪　薄絹のタビ。繡鞋はぬひとりしたクツ。
【五】太原　山西省太原府。毳縷は細き絲筋。
【六】蜀都　四川省成都府。
【七】宣州　安徽省宣城縣。

自謂爲臣能竭力。　自ら謂ふ臣と爲つて能く力を竭せりと。

百夫同擔進宮中。　百夫同じく擔うて宮中に進る、

線厚絲多卷不得。　線厚く絲多くして卷き得ず。

宣州太守知不知。　宣州の太守知るや知らずや、

一丈毯用(八)千兩絲。　一丈の毯は千兩の絲を用ふ。

地不知寒人要暖。　地は寒を知らず人は暖を要す、

少奪人衣作地衣。　人衣を奪つて地衣と作す少れ。

【題義】蠶絲が無益に消費されることを憂へて作つた詩である。

【詩意】紅線で織つた敷物がある。これを製するには繭を擇び絲を繰り清水で煮、更に紅藍で染め、之を織つて披香殿上の敷物にする。披香殿の廣さは方十丈餘あるが、この廣い殿上に隙間なく敷きつめることが出來る。色絲がふさふさと亂れ香氣が拂拂とあがり、絲は軟に花模樣は淡く、ふはふはとして抵抗力がない。美人が之を蹈んで歌ひつ舞ひつすれば、襪も鞵も一足毎に埋まつてしまふ。太原産の毯は滑でなく絲筋が硬く、蜀都産の褥は薄くて花模樣が冷かであつて、竝に此毯の溫柔なるには及ばない。この毯が毎年十月に宣州から獻上せられる。これは宣州の太守が新工夫を凝らして織

【八】千兩　目方の名。

つたもので、自分でも人臣として能く力を竭したものだと自任してゐるくらゐだ。之を百人の人夫にかつがせて宮中に獻上するのであるが線が厚く絲が多いから容易に卷くことも出來ない。さて宣州の太守は知つてゐるかどうかわからないが、一丈の毯を織るには千兩の絲が入用なのである。地面は寒さを知らないが人は暖かなことを要する。人の著物の材料を奪ひ取つて、地面の著物(敷物)を作ることはせぬがよからう。

杜陵叟　傷農夫之困也

杜陵叟　農夫の困を傷むなり

(一)杜陵叟杜陵居。　杜陵の叟杜陵に居り、

歳種薄(二)田一頃餘。　歳ごとに種う薄田一頃餘。

三月無雨旱風起。　三月雨無くして旱風起り、

麥苗不秀多黃死。　麥苗秀ですして多く黃死す。

九月降霜秋早寒。　九月降霜秋早く寒く、

禾穗未熟皆青(三)乾。　禾穗未だ熟せず皆青乾す。

【字解】【一】杜陵　長安の東南十五里に在り。叟は老人。

【二】薄田　地味のよくない田地。一頃は面積百畝。

【三】青乾　青くて枯れること。

長吏明知不申破。（四）　長吏明かに知れども申破せず、
急斂暴徵求考課。（五）　急斂暴徵して考課を求む。
典桑賣地納官租。（六）　桑を典し地を賣つて官租を納る、
明年衣食將何如。　明年の衣食將に何如せんとする。
剝我身上帛。　我が身上の帛を剝ぎ、
奪我口中粟。　我が口中の粟を奪ふ。
虐人害物卽豺狼。　人を虐たげ物を害するは卽ち豺狼なり、
何必鉤爪鋸牙食人肉。（七）　何ぞ必ずしも鉤爪鋸牙人肉を食むのみならんや。
不知何人奏皇帝。　知らず何人か皇帝に奏せし、
帝心惻隱知人弊。（八）　帝心惻隱人の弊を知る。
白麻紙上書德音。（九）　白麻紙上に德音を書し、
京畿盡放今年稅。　京畿盡く今年の稅を放す。
昨日里胥方到門。（一〇）　昨日里胥方に門に到り、

【四】申破　上の役所へ申告すること。
【五】考課　官吏の成績考査。
【六】典桑　典は質におくこと。
【七】鉤爪　かぎのやうに曲つた爪。
【八】惻隱　あはれむ。
【九】白麻紙　詔を書く紙。德音は、なさけ深き言葉。
【一〇】里胥　村役人。

手持尺牒（一一）牓鄕村。　手に尺牒を持つて鄕村に牓す。
十家租稅九家畢。　十家の租稅九家は畢る。
虛受吾君蠲（一二）免恩。　虛しく吾が君の蠲免の恩を受く。

【題義】農民の困苦を憐んだ詩である。

【詩意】杜陵に住む老農がある。年年一頃餘の田地を耕作してゐる。今年は三月に雨が降らないので麥に穗が出ず黃色になつて枯れてしまつた。九月には霜が降つて寒さが早く來たので、稻の穗が熟せぬうちに靑い儘枯れてしまつた。長吏は其事をよく知つてはゐるが、敢て上司に申告して減稅の計などはせず、却つて租稅の取立をきびしくして己の功績を擧げようとした。農民は已むを得ず桑を質に入れたり土地を賣つたりして稅を納めた。來年の衣食をどうするかなどといふことは考へる遑がなかつた。官吏は我我農民の著物を剝ぎ食物を奪ふ所の豺狼である。鉤の如き爪、鋸の如き牙を以て人の肉を食ふのばかりが豺狼ではない。適〻誰か天子に饑饉の事を申上げた者があつたので、天子は憐憫の情を以て民の窮狀を御察しになり、詔書を下し給うて京畿の地方に今年の租稅を免除せられた。併し因つて昨日村役人が來て、一尺ばかりの札を村村に揭げて免稅の詔書の下つたことを布告した。其時は十戶の中で九戶は既に納稅を終つてゐたから、折角の減免稅の御恩も後の祭で何の御利益もな

【一一】尺牒　長さ一尺の竹札。牓は札をかけること。
【一二】蠲免　租を減免すること。

かつた。

繚綾　念女工之勞也　繚綾、女工の勞を念ふなり

(一)繚綾繚綾何所似。繚綾繚綾何の似たる所ぞ、
不似(二)羅綃與紈綺。羅綃と紈綺とに似ず。
應似天台山上明月前。應に天台山上明月の前、
四十五尺瀑布泉。四十五尺の瀑布泉に似たるべし。
中有文章又奇絶。中に文章有り又奇絶、
地鋪白煙花簇雪。地に白煙を鋪き花雪を簇む。
織者何人衣者誰。織る者は何人ぞ衣る者は誰ぞ、
(三)越溪寒女漢宮姬。越溪の寒女漢宮の姬。
去年(四)中使宣口敕。去年中使口敕を宣べ、
(五)天上取樣人間織。天上より樣を取つて人間に織らしむ。

【字解】(一)繚綾　あや織の絹。
(二)羅綃　うすぎぬ。
(三)越溪　浙江省の山溪。寒女は貧女。
(四)中使　宮中の使者。口敕は口頭のみことのり。
(五)天上　宮中なり。人間は民間をいふ。

織爲雲外秋鴈行。織つては雲外秋鴈の行を爲し、
染作江南春水色。染めては江南春水の色を作す。
廣裁(六)衫袖長製裙。廣く衫袖を裁ち長く裙を製す、
(七)金斗熨波刀剪紋。金斗波を熨して刀紋を剪る。
異彩奇文相隱映。異彩奇文相隱映し、
(八)轉側看花花不定。轉側して花を看るに花定まらず。
(九)昭陽舞人恩正深。昭陽の舞人恩正に深し、
春衣一對直千金。春衣一對直千金。
汗沾粉汙不再著。汗に沾ひ粉に汙るれば再び著ず、
曳土蹋泥無惜心。土に曳き泥を蹋んで惜む心無し。
繚綾織成費功績。繚綾織り成すには功績を費す、
莫比尋常繒與帛。比する莫かれ尋常の繒と帛と。
絲細繰多女手疼。絲細く繰多くして女の手疼み、

(六)衫袖　上衣の袖。
(七)金斗　ひのし。
(八)轉側　あちこちとむきなかへること。
(九)昭陽　女官の居る宮殿の名。

（一〇）札札千聲不盈尺。　札札たる千聲尺にだも盈たず。
昭陽殿裏歌舞人。　昭陽殿裏歌舞の人、
若見織時應也惜。　若し織時を見ば應に也た惜むべし。

【一〇】札札　機を織る音。

【題義】機を織る工女の苦勞を念ひて作つた詩である。

【詩意】繚綾は何に似てゐるか。羅綃や紈綺などには似てゐない。天台山上の明月に照されてゐる、四十五尺の瀑布の水に似てゐる。その表には美妙なる文章があつて、恰も地上に白煙を鋪き雪の如き花を聚めたやうである。誰が織つて誰が著るかといふと、越溪の貧女が織つて宮中の女官が著るのである。去年は宮中から使者が來て、宮中の考案に從つて民間で織らせた。模樣は雲外に飛ぶ秋雁の行列を織り出し、色合は江南の春水の色を染め成すことにした。そして上衣の袖を十分にし裙を長くし、火熨斗をかけて皺を伸ばし剪刀で紋樣を剪りなどしたので、異彩奇文が互にうつりあつて、あちこちと向をかへてすかして見ると花模樣が樣樣にかはる。昭陽殿中の舞人は今正に君寵を辱うしてゐる。その一襲の春著は値が千金もする。しかも汗がしみたり白粉で汙れたりすると二度とは著ないで棄ててしまひ、泥の上を曳きずつてあるいて惜しいとも思はない。この繚綾を織り成すには仲仲の手間がかかるので、普通の絹とはわけがちがふのである。細い絲を度度繰り女工の手も痛くなる。それを如何に精を出しても一尺織るのは容易ではないのである。昭陽殿中の歌舞の人も、織る時の苦を見たらば少しは惜む心も出るであらう。

賣炭翁　苦宮市也　賣炭翁　宮市に苦むなり

賣炭翁。　賣炭翁、
伐薪燒炭南山中。（一）　薪を伐り炭を燒く南山の中。
滿面塵灰煙火色。　滿面の塵灰煙火の色、
兩鬢蒼蒼十指黑。（二）　兩鬢蒼蒼として十指黑し。
賣炭得錢何所營。　炭を賣つて錢を得何の營む所ぞ、
身上衣裳口中食。　身上の衣裳口中の食。
可憐身上衣正單。　憐む可し身上衣正に單なるを、
心憂炭賤願天寒。　心に炭の賤きを憂へて天の寒からんことを願ふ。
夜來城外一尺雪。　夜來城外一尺の雪、

【字解】【一】南山　長安の南に在る終南山。
【二】蒼蒼　髮の毛の白くなること。

曉駕炭車輾氷轍。　曉に炭車に駕して氷轍に輾らしむ。
牛困人飢日已高。　牛困み人飢ゑて日已に高け、
市南門外泥中歇。　市の南門外の泥中に歇む。
(三)翩翩兩騎來是誰。　翩翩たる兩騎來るは是れ誰ぞ、
黃衣使者白衫兒。　黃衣の使者白衫の兒。
手把文書口稱敕。　手に文書を把つて口に敕と稱し、
廻車叱牛牽向北。　車を廻らし牛を叱し牽いて北に向はしむ。
一車炭重千餘斤。　一車の炭重さ千餘斤、
(四)宮使驅將惜不得。　宮使驅將して惜み得ず。
半匹紅(五)綃一丈綾。　半匹の紅綃一丈の綾、
繫向牛頭充炭直。　繫けて牛頭に向つて炭の直に充つ。

【三】翩翩　馬の行く貌。
【四】宮使　上の黃衣使者なり。驅將の將はモツテの意で、驅りもてゆくこと。
【五】紅綃　紅色の絹。

【題義】唐の德宗の時、宦官が市中から品物を取つて來て宮內で商賣をした。之を宮市といふ。市民は安い代價で品物を勝手に持つて行かれるので其擾に堪へなかつたと唐書に見えてゐる。此詩は宮市の爲に人民が苦むことを述べたのである。

【詩意】炭を賣る老爺がある。終南山の中で木を斬つて炭を燒いてゐる。滿面塵や煙によごれ頭髮は胡麻鹽だが手の指は眞黑だ。炭を賣り錢を得て何にするかといへば、謂ふまでもなく衣食の料にするので道樂でやつてゐるのではない。いくら稼いでも身には暖な著物も著られないが、心では炭價の安きを憂へてウンと寒くなつてくれればよいと願つてゐる。昨夜から長安城外には雪が一尺も積つた。老爺は朝早く牛に炭車を牽かせて賣りに出かけた。やがて日も高くのぼり牛も人も飢ゑ疲れて來たので、長安の南門外の泥道の中に休息した。そこへ二人の騎士がやつて來た。見れば黃衣を著た使者（宦官）と白衣を著た若者とである。手には書附を持ち口には勅だと稱し、老爺の牛車を北の宮城の方に向つて進ましめた。この車の炭は千餘斤あるのだが、宮使が驅り立てるのだから惜しいけれども厭だとは言へない。そして僅に半匹の紅綃と一丈の綾絹とが炭の代價として牛の頭に投げ繫けられるだけだ。

母別子　刺新間舊也

母別子　新の舊を間するを刺るなり

母別子。子別母。　母は子に別れ、子は母に別る、
白日無光哭聲苦。　白日光無くして哭聲苦し。

（一）關西驃騎大將軍。　關西の驃騎大將軍、
去年破虜（二）新策勳。　去年虜を破りて新に勳を策し、
敕賜金錢二百萬。　敕して金錢二百萬を賜ひ、
洛陽迎得如花人。　洛陽迎へ得たり花の如き人。
新人迎來舊人棄。　新人迎へ來つて舊人棄てらる、
掌上蓮花眼中刺。　掌上の蓮花眼中の刺。
迎新棄舊未足悲。　新を迎へ舊を棄つるは未だ悲むに足らず、
悲在君家留兩兒。　悲みは君が家に兩兒を留むるに在り。
一始扶行一初坐。　一は始めて扶けられて行き一は初めて坐す、
坐啼行哭牽人衣。　坐して啼き行きて哭し人の衣を牽く。
以汝夫婦新嬿婉（三）。　汝が夫婦の新に嬿婉たるを以て、
使我母子生別離。　我が母子をして生きながら別離せしむ。
不如林中烏與鵲。　林中の烏と鵲と、

【字解】（一）關西　關は函谷關をいふ。後漢書の虞詡傳に「關西ハ將チ出シ、關東ハ相ヲ出ス」とある。驃騎大將軍は將軍の名號。
（二）虜　えびす。
（三）嬿婉　親密なこと。

母不失雛雄伴雌。　母は雛を失はず雄は雌を伴ふに如かず。
應似園中桃李樹。　應に園中の桃李の樹、
花落隨風子住枝。　花は落ちて風に隨ひ子は枝に住まるに似たるべし。
新人新人聽我語。　新人新人我が語を聽け、
洛陽無（四）限紅樓女。　洛陽限り無き紅樓の女。
但願將軍重立功。　但だ願ふ將軍重ねて功を立て、
更有新人勝於汝。　更に新人の汝に勝れるもの有らんことを。

（四）無限　無數に同じ、多きこと。紅樓は倡家。

【題義】新しい妻が乘込んで來て舊來の妻が離間されることを刺つた詩である。

【詩意】母と子との生別の悲劇がある。太陽も爲に光なく泣き悲む聲がいたいたしい。事の起りは關西の驃騎大將軍が去年虜を破つて勳功を立てたので、天子から金錢二百萬を賜り、其金で洛陽から花のやうな美人を迎へ取つた。新婦が乘込んで來ると舊婦は棄てられ、一は掌上の蓮花の如く愛玩され、一は目の中の刺の如く嫌はれることになつた。自分が棄てられて去ることは敢て悲むに足らないが、最も悲むべきことは君（舊婦が其夫を指して謂ふ）の家に二人の子供を殘して去ることだ。其中

の一人はやつと人に扶けられて歩き、一人は自分で坐ることが出來るくらゐのもので、坐する者は泣き行く者は號んで吾が衣を牽いて慕ふ。汝等夫婦が狎れ親む爲に我が母子をして生別をさせることになり、母子雌雄睦しく暮す林中の烏や鵲に及ばず、花は風に散り子だけ枝に殘つてゐる園中の桃李と同じだ。新人よ吾が言を聽け、洛陽には澤山の倡婦がゐて、將軍が更に軍功を立てて、汝より以上に美しい新人を迎へることを願つてゐるぞよ。

陰山道　疾貪虜也

陰山道　貪虜を疾むなり

(一)陰山道。陰山道。　陰山道、陰山道、
紇邏(二)敦肥水泉好。　紇邏敦肥にして水泉好し。
每至戎(三)人送馬時。　戎人の馬を送る時に至る每に、
道傍千里無纖草。　道傍千里纖草無し。
草盡泉枯馬病羸。　草盡き泉枯れて馬病羸し、
(四)飛龍但印骨與皮。　飛龍は但だ骨と皮とに印す。
五十匹縑易一匹。　五十匹の縑一匹に易ふ、
縑去馬來無了日。　縑去り馬來つて了る日無し。
養無所用去非宜。　養ふも用ふる所無く去るは宜しきに非ず、
每歲死傷十六七。　每歲死傷すること十に六七。
縑絲不足女工苦。　縑絲足らずして女工苦み、
疎織短截充匹數。　疎織短截匹數に充つ。
(五)藕絲蛛網三丈餘。　藕絲蛛網三丈餘、
回鶻訴稱無用處。　回鶻訴へ稱す用ふる處無しと。
(六)咸安公主號可敦。　咸安公主可敦と號す、
遠爲可(七)汗頻奏論。　遠く可汗の爲めに頻りに奏論す。
元和二年下新敕。　元和二年新敕を下し、
內出金帛酬(八)馬直。　內より金帛を出して馬の直を酬ゆ。
仍詔江淮馬價縑。　仍りに敕す江淮馬價の縑、
從此不令疎短織。　此れより疎短に織らしめずと。

【字解】【一】陰山　山脈の名。
【二】紇邏　地名か。
【三】戎人　えびす。回鶻をいふ。
【四】飛龍　駿馬をいふ。

【五】藕絲　蓮根の絲。
【六】咸安公主　德宗皇帝の女。德宗の貞元三年回鶻婚を乞ふ。李泌の勸によりて之を許す。可敦は回鶻語で妃の意。
【七】可汗　回鶻の王をいふ。
【八】馬價縑　馬の價に酬ゆる爲の縑。

（九）合羅將軍呼萬歲。　合羅將軍萬歲と呼び、
捧授金銀與縑綵。　金銀と縑綵とを捧授す。
誰知（一〇）黠虜啓貪心。　誰か知らん黠虜貪心を啓く、
明年馬多來一倍。　明年馬多く來ること一倍す。
縑漸好。馬漸多。　縑漸く好く、馬漸く多し、
（一一）陰山虜。奈爾何。　陰山の虜、爾を奈何せん。

【題義】回鶻の貪慾を疾んで作つた詩である。

【詩意】陰山から唐に通ずる道筋の紇邏のあたりは土地も肥えて泉もよい。併し回鶻人が馬を送つてよこす時節になると、馬が食ひ盡して細い草すら無くなつてしまふ。あまり多くの馬を送つてよこす爲に、草は盡き泉は枯れて馬は病み衰へ、流石の駿馬も骨と皮ばかりになつた所へ燒印を押す。（すべて官馬には燒印を押す例である）そして縑五十匹と馬一匹と交易する習であつて、唐からは縑が出され、回鶻からは馬が來て、去來して終る時がない。唐では多くの馬を養つておいても用ふる所もないが、併し之を拒絶することは國交上都合がわるいので、仕方なく養つておくのだから世話が行屆かないので、毎年十中の六七は死傷する。又回鶻へ送つてやるのに絹絲が不足を告げたり女工が難儀したりする。因つて疎略に織り丈を短く切つて匹數だけを整へる。中には藕絲や蜘蛛の巣などをませて織り、たけの三丈餘しかないのなどもある。すると回鶻ではこんな粗製品をよこされては役に立たないと故障を謂つてくる。咸安公主が回鶻王妃になつてからは、遠く回鶻王の爲に頻に縑の粗惡になつたことを奏諭してくる。それゆゑ元和二年に新敕を下して宮中の御藏から金帛を出して馬の代價とすることになり、又江淮地方から出す馬價の代價としての縑は疎略に短く織つてはならないといふ詔が下つた。是に於て回鶻の使者たる合羅將軍は喜んで萬歲を唱へ、唐から受取つた金帛を回鶻王に捧げた。かくて狡黠な回鶻は味を覺えて慾心を起し、翌年は馬が一倍多く來るやうになつた。唐の縑が好くなればなるほど回鶻の馬が多く來る。ああ陰山の虜どもは實に憎みても餘ある奴ばらである。

【九】合羅將軍　回鶻の將軍の名か。
【一〇】黠虜　わるがしこいえびす。
【一一】陰山虜　回鶻を指す。

時世粧　（一）儆戎也　時世粧　戎を儆むるなり

時世粧。時世粧。　時世粧、時世粧、
出自（二）城中傳四方。　城中より出でて四方に傳はる。
時世流行無遠近。　時世の流行遠近無く、
顋不施朱面無粉。　顋に朱を施さず面には粉無く、

【字解】【一】儆戎也　汪氏本には警辨變也に作る。今全唐詩に據つて改めた。
【二】城中　都會をいふ。

(三)烏膏注脣脣似泥。　烏膏脣に注けて脣泥に似、
雙眉畫作(四)八字低。　雙眉畫いて八字の低を作す。
(五)妍蚩黑白失本態。　妍蚩黑白本態を失ふ、
粧成盡似含悲啼。　粧成つて盡く悲啼を含めるに似たり。
圓鬟無鬢椎(六)髻樣。　圓鬟鬢無く椎髻の樣、
斜紅不暈赭面狀。　斜紅暈せず赭面の狀。
昔聞(七)被髮伊川中。　昔聞く髮を被る伊川の中、
辛有見之知有戎。　辛有之を見て戎有るを知る。
(八)元和粧梳君記取。　元和の粧梳君記取せよ、
髻椎面赭非(九)華風。　髻椎面赭華風に非ず。

【題義】時世粧とは時の流行の粧をいふ。この詩は世に奇異の粧が流行するのは、戎狄化せんとする前兆であるとなし、之を警める爲に作つたのである。

【詩意】今の流行の粧は都會から始つて四方の田舍までひろがる。然も遠近を論せず一樣にゆきわたる。その粧は如何といふに、口紅を施さず白粉をつけず、黑い脂を脣に注け、眉は八の字形に低れて畫き、美なるも醜なるも黑きも白きも本態を失ひ、化粧し終つた所は皆啼顏をしてゐるやうに見える。髮は鬢のないちよんまげに結ひ、斜に頰紅をさして赤面をなしてゐる。昔辛有は伊川で髮を被つてゐる者を見て、將來中國が夷狄化することを知つたといふが、元和の今日流行する粧も決して中國の風ではない。諸君は能く記憶しておくがよい。後日夷狄化するかも知れぬから。

【三】烏膏　黑き脂。
【四】八字低　八字形にたれた眉。
【五】妍蚩　美醜なり。
【六】椎髻　槌の形したマゲ。
【七】被髮云云　左傳僖公二十二年に、「初メ平王ノ東遷スルヤ、辛有伊川ニ適キ被髮シテ野ニ祭ル者ヲ見テ曰ク、百年ニ及バズシテ此レ其レ戎トナランカ、其禮先ヅ亡ビタリ」とある。
【八】元和　唐の憲宗の年號。粧梳は化粧。記取は記憶すること。取は助辭。
【九】華風　中國の風。

李夫人　鑒嬖惑也

李夫人　嬖惑に鑒みるなり

漢武帝。初喪(一)李夫人。　漢の武帝、初めて李夫人を喪へり。
夫人病時不肯別。　夫人病む時肯て別れず、
死後留得生前恩。　死後留め得たり生前の恩。
(二)君恩不盡念未已。　君恩盡きず念ひて未だ已まず、
(三)甘泉殿裏令寫眞。　甘泉殿裏眞を寫さしむ。
丹青寫出竟何益。　丹青寫し出すも竟に何の益あらん、
不言不笑愁殺人。　言はず笑はず人を愁殺す。

【字解】【一】李夫人　漢の武帝の寵姬。
【二】君恩　武帝の寵愛。
【三】甘泉殿　漢の宮殿の名。

又令（四）方士合靈藥。　又方士をして靈藥を合せしめ、
玉釜煎鍊金爐焚。　玉釜に煎鍊し金爐に焚く。
（五）九華帳深夜悄悄。　九華帳深うして夜悄悄、
（六）反魂香降夫人魂。　反魂香は降す夫人の魂。
夫人之魂在何許。　夫人の魂何の許にか在る、
香煙引到焚香處。　香煙引き到る焚香の處。
既來何苦不須臾。　既に來る何を苦みて須臾ならざる、
（七）縹緲悠揚還滅去。　縹緲悠揚として還た滅去す。
去何速兮來何遲。　去ること何ぞ速かに來ること何ぞ遲き、
是邪非邪兩不知。　是邪非邪兩つながら知らず。
（八）翠蛾髣髴平生貌。　翠蛾髣髴たり平生の貌、
不似（九）昭陽寢疾時。　昭陽に疾に寢ねし時に似ず、
魂之不來君心苦。　魂の來らざるとき君の心苦み、

【四】方士　魔術師。少翁なり。事漢書外戚傳に見ゆ。
【五】九華帳　いろいろの色模様のある帳。
【六】反魂香　死者の魂を呼び返す香。
【七】縹緲　遠くかすかなる貌。悠揚はふはふはと漂ふ貌。
【八】翠蛾　美しき眉。
【九】昭陽　宮殿の名。

魂之來兮君亦悲。　魂の來るとき君亦悲む。
背燈隔帳不得語。　燈に背き帳を隔てて語ることを得ず、
安用暫來還見違。　安んぞ暫く來つて還違らるるを用ひん。
傷心不獨漢武帝。　心を傷しむること獨り漢の武帝のみならず、
自古及今皆若斯。　古より今に及ぶまで皆斯の若し。
君不見穆王（一〇）三日哭。　君見ずや穆王三日哭し、
重璧臺前傷盛姬。　重璧臺前に盛姬を傷む。
又不見泰陵（一一）一掬淚。　又見ずや泰陵一掬の淚、
（一二）馬嵬坡下念楊妃。　馬嵬坡下楊妃を念ふ。
縱令妍姿艷質化爲土。　縱令妍姿艷質をして化して土と爲らしむるも、
此恨長在無銷期。　此恨長に在り銷ゆる期無し。
生亦惑。死亦惑。　生にも亦惑ひ、死にも亦惑ふ、
（一三）尤物惑人忘不得。　尤物人を惑はして忘れ得ず。

【一〇】穆王　前の八駿圖を見よ。
【一一】泰陵　唐の玄宗の陵。因つて玄宗を指す。
【一二】馬嵬坡　玄宗皇帝が安祿山の亂を避けて蜀に奔るとき、陣玄禮等に迫られて楊貴妃を殺した地。
【一三】尤物　美人なり。

人非木石皆有情。　人木石に非ず皆情有り、
不如不遇傾城色。(一四)　如かず傾城の色に遇はざらんには。

【題義】漢の武帝が李夫人の色香に迷ひ、たわけの限りを盡したことを述べて鑑戒としたのである。

【詩意】漢の武帝は李夫人を喪つた。李夫人の病氣の時にも肯て夫人の側を離れようとしなかつたが、死後にも恩寵を續け、夫人を念うて已まなかつた。因つて畫家に命じて甘泉殿に夫人の肖像を畫かしめたが、畫にかいた李夫人は物も言はねば笑ひもせず、却つて武帝の心をいやが上に愁へしむるのみであつた。故に武帝は更に方士をして反魂香を調合させ、玉の釜、金の爐で其香を煎錬せしめ、ひつそりとした眞夜中に九華帳の奥深き處に李夫人の姿を現さしめた。さて夫人の魂は現れたがなせか暫くも止らず、忽ちふはりふはりと滅え去つてしまつた。果して李夫人の姿であるか否か見定めもつかないうちに去つてしまつた。併し美しさは平生の李夫人とよく似てゐて、病中のやつれた姿とはちがつてゐた。夫人の魂が還つて來なければ武帝は悲み、還つて來ても亦悲んだ。燈を背にし帳を隔てて語ることも出來ず、ちよつと姿を見せて忽ち去られるとは何事であらうか。一體寵姬を喪つて心を傷ましめるのは武帝ばかりではない。周の穆王は三日の間大に哭して重壁臺の前で盛姬を傷み、唐の玄宗は一掬の涙を垂れて馬嵬坡下に楊貴妃を念うた。たとひ美しき姿は土に化するとも、思慕の情はいつまでも消えない。かくの如く生前にも死後にも美人の爲には惑ふのである。人は木石でないから美人に惑ふのは當然だから、なまなか美人などにめぐり遇はない方がましだ。

【一四】傾城　美人をいふ。

陵園妾　憐幽閉(一)也　陵園の妾　幽閉を憐むなり

陵園妾。(二)　陵園の妾、
顏色如花命(三)如葉。　顏色花の如く命葉の如し。
命如葉薄將奈何。　命葉の薄きが如く將に奈何せんとする、
一奉寢(四)宮年月多。　一たび寢宮に奉りて年月多し。
年月多。時光換。　年月多く、時光換る、
春愁秋思知何限。　春愁秋思知る何ぞ限らん。
青(五)絲髮落叢鬢疏。　青絲髮落ちて叢鬢疏に、
紅玉膚銷繫(六)裙縵。　紅玉の膚銷えて繫裙緩し。
憶昔宮中被妬猜。　憶ふ昔宮中妬猜せられ、

【字解】【一】憐幽閉也　汪本には託幽閉喩被讒遣黜也とある。今全唐詩に據る。
【二】陵園　天子の陵墓。
【三】命　運命。
【四】寢宮　陵墓なり。
【五】青絲　絲の黑髮。
【六】繫裙　腰にまとふ裳。

因讒得罪配陵來。　讒に因つて罪を得陵に配せられて來りしを。
老母啼呼趁車別。　老母啼呼して車を趁うて別れ、
(七)中官監送鏁門廻。　中官監送して門を鏁して廻る。
(八)山宮一閉無開日。　山宮一たび閉されて開く日無く、
未死此身不令出。　未だ死せずんば此身出でしめず。
松門到曉月徘徊。　松門曉に到るまで月徘徊。
(九)柏城盡日風蕭瑟。　柏城盡日風蕭瑟。
松門柏城幽閉深。　松門柏城幽閉深く、
聞蟬聽燕感光陰。　蟬を聞き燕を聽いて光陰を感ず。
眼看菊蘂重陽(一〇)淚。　眼菊蘂を看れば重陽の淚あり、
手把梨花寒食(一一)心。　手に梨花を把れば寒食の心あり。
把花掩淚無人見。　花を把り淚を掩ふも人の見る無く、
綠蕪墻遶青苔院。　綠蕪の墻は遶る青苔の院。

【七】中官　宦官。
【八】山宮　陵墓の宮殿。
【九】柏城　陵墓なり。蕭瑟は風の淋しく吹く貌。
【一〇】重陽　九月九日の節句。菊花酒を飲みて病氣をはらふ例なり。
【一一】寒食　冬至から百四、五、六日目をいふ。この三日間は禁火とて火を用ひない習慣がある。

四季徒支粧粉錢。　四季徒らに支す粧粉の錢。
(一二)三朝不識君王面。　三朝識らず君王の面。
遙想六宮(一三)奉至尊。　遙に想ふ六宮至尊に奉ることを、
(一四)宣徽雪夜浴堂春。　宣徽の雪夜浴堂の春。
雨露之恩不及者。　雨露の恩及ばざる者、
猶聞不啻三千人。　猶ほ聞く啻に三千人のみならずと。
我爾君恩何厚薄。　我と爾と君恩何ぞ厚薄ある。
願令輪轉(一五)直陵園。　願はくは輪轉して陵園に直し、
三歲一來均苦樂。　三歲一たび來つて苦樂を均うせしめん。

【題義】天子の陵墓の近くの宮中に幽閉されてゐる宮女を憐んだ詩である。
【詩意】天子の陵墓に奉仕する宮女がある。その顏色は花のやうに美しいが運命は葉のやうに薄い。一たび陵墓に仕へるやうになつてから餘程の歲月を經た。その間春の愁、秋の思が限なく積つて、綠の黑髮も拔けて薄くなり、玉の肌も痩せて帶がゆるくなつた。昔を憶へば宮中に仕へてゐた頃他人か

【一二】三朝　君主三代の間。
【一三】六宮　後宮をいふ。
【一四】宣徽　宮殿の名。浴堂も殿の名。
【一五】輪轉　順番に更代して。

ら妬まれ、讒言の爲に此陵に流されることになり、老母が泣き叫んで車の後を追つて來て別を惜み、官官が護送して來て陵墓の門を鎖して立返つた。さて一たび陵宮に幽閉されては、生きて此中から出ることは出來ない。夜は曉に到るまで月の徘徊するを眺め、晝は終日淋しき風の音を聞くのみで、蟬や燕の聲を聞いて月日の移るを感じ、菊を見ては重陽になつたかと涙を流し、梨花を把つては寒食が來たかと驚き、涙にかきくれてゐても、見る人とてもなく、ただ雜草の生ひかぶさつた牆が苔蒸した奥庭を取り圍んでゐるのみである。季節のうつりかはるにつれて其れ相應に化粧の錢を支出して身嗜みをしてゐるが何の甲斐もなく、三代の間一度も天顏を拜することは出來ない。遙に後宮にゐて天子に奉仕する宮女の上に想を馳すれば、宣徽殿の雪の宵、浴堂殿の春の日と、日夜君側に奉侍してゐるが、それでも君恩に浴することの出來ないものが三千人以上もあるとの事であるから、こちらの方に恩寵の及ばう筈もない。さて君側に時めいてゐる者と我とを比べて見るに、どうしてかくも御恩の厚薄があるのであらう。願はくは順番に更代して陵墓に宿直せしめ、三年に一度ぐらゐは苦樂を平均に受けるやうにさせたいものだ。

鹽商婦　惡幸人也

鹽商婦は幸人を惡むなり

(一)鹽商婦多金帛。　鹽商の婦、金帛多し、

不事田農與蠶績。　田農と蠶績とを事とせず。

南北東西不失家。　南北東西家を失はず、

風水爲鄉船作宅。　風水を鄉と爲し船を宅と作す。

本是(二)揚州小家女。　本是れ揚州小家の女、

嫁得(三)西江大商客。　西江の大商客に嫁ぎ得たり。

(四)綠鬟溜去金釵多。　綠鬟溜去して金釵多く、

(五)皓腕肥來銀釧窄。　皓腕肥え來つて銀釧窄し。

前呼(六)蒼頭後叱婢。　前には蒼頭を呼び後には婢を叱す、

問爾因何得如此。　爾に問ふ何に因つて此の如くなるを得たる。

壻作鹽商十五年。　壻鹽商と作つて十五年、

不屬州縣屬天子。　州縣に屬せず天子に屬す。

每年鹽利入官時。　每年鹽利を官に入るる時、

少入(七)官家多入私。　少しく官家に入れ多く私に入る。

【字解】【一】鹽商婦　鹽商人の妻。唐時の制度では鹽の專賣を許して其利を政府に收めしむる定めであつた。

【二】揚州　江蘇省揚州府江都縣治。

【三】西江　江西なり。

【四】綠鬟　黒髪のまげ。溜去は滑かに揷す意。

【五】皓腕　白い腕。銀釧は銀のうでわ。

【六】蒼頭　奴僕。

【七】官家　政府。

官家利薄私家厚。　官家は利薄うして私家は厚し、
(八)鹽鐵尙書遠不知。　鹽鐵尙書遠くして知らず。
何況江頭魚米賤。　何ぞ況んや江頭魚米賤く、
紅鱠黃橙香稻飯。　紅鱠黃橙香稻の飯、
飽食濃妝倚柂樓。(九)　飽食濃妝して柂樓に倚り、
(一〇)兩朶紅顋花欲綻。　兩朶の紅顋花綻びんと欲するをや。
鹽商婦。　鹽商の婦、
有幸嫁鹽商。　幸有つて鹽商に嫁ぎ、
終朝美飯食。　終朝飯食を美にし、
終歲好衣裳。　終歲衣裳を好くす。
好衣美食來何處。　好衣美食何處よりか來る、
亦須慚媿桑弘羊。(一一)　亦須らく桑弘羊に慚媿すべし。
桑弘羊死已久。　桑弘羊、死して已に久し、

【八】鹽鐵尙書　鹽及び鐵の專賣を掌る長官。
【九】柂樓　船上の樓。
【一〇】兩朶　兩片といふが如し。紅顋は紅頰。
【一一】桑弘羊　漢の武帝の時鹽鐵及び酒の專賣を始めた人。

不獨漢世今亦有。　獨り漢世のみならず今も亦有り。

【題義】世の僥倖にして榮華に耽る者を憎んで作つた詩である。

【詩意】鹽商の妻は金帛に富み、農蠶紡績の業も治めないで、東西南北どこへ行つても家室があり、船を家として風水の便に乘じて天下を横行してゐる。本揚州賤民の女であつたが、江西の豪商に嫁し、綠鬟に挿す金釵に富み、皓腕肥えて銀釧も窮屈になつてきた。前には奴僕を指呼し後を顧みては婢女を叱咤して威張りちらしてゐる。何により此くの如く驕奢の身となりしやと問ふに、夫が鹽商となりて十五年、州縣卽ち地方官の支配を受けずして天子に直屬し、毎年鹽を賣買して得る所の利益を官に入るる少く、自分の懷には多く入れるが、鹽鐵尙書は遠方にゐるのだから其情實を知らない。且つ江邊では魚米の價も低廉で、生活費もかからないから、日日美食に飽き厚化粧して船上の樓閣に倚り、これといふ仕事もせずに日を送つてゐる。鹽商の妻は、どうしてかくは多幸なのであらう。毎日旨い物を食つて美しい著物を著てゐる。この好衣美食は何處から來るのであらう。皆人民の懷から來るのである。されば此鹽商は漢の桑弘羊にも慚づべきほどの惡錢を貪つてゐるのだ。桑弘羊が死んで久しくなるが、今の世にも亦桑弘羊があるのである。

杏爲梁　刺居處僭也

杏爲梁　居處の僭なるを刺るなり

杏爲梁。桂爲柱。　杏を梁と爲し、桂を柱と爲す、

何人堂室李開府。(一)　何人の堂室ぞ李開府なり。

(二)碧砌紅軒色未乾。　碧砌紅軒色未だ乾かざるに、

去年身沒今移主。　去年身沒して今主を移せり。

高其牆。大其門。　其墻を高うし、其門を大にす、

誰家第宅盧將軍。　誰が家の第宅ぞ盧將軍なり。

(三)素泥朱板光未滅。　素泥朱板光未だ滅せざるに、

今歲官收賜別人。　今歲官收めて別人に賜ふ。

開府之堂將軍宅。　開府の堂將軍の宅、

造未成時頭已白。　造ること未だ成らざる時頭已に白し。

(四)逆旅重居逆旅中。　逆旅重ねて逆旅の中に居る、

心是主人身是客。　心は是れ主人身は是れ客。

【字解】(一) 李開府　唐の宰相李林甫を指すか。林甫は玄宗の時開府儀同三司となつた。(二) 碧砌　青色の石疊。紅軒は朱塗のノキ。(三) 素泥　白色の壁。朱板は朱塗の板。(四) 逆旅　宿屋。

更有愚夫念身後。(五)　更に愚夫の身後を念ふ有り、

心雖甚長計非久。　心甚だ長しと雖も計久しきに非ず。

窮奢極麗越規模。　奢を極め麗を極めて規模に越え、

付子傳孫令保守。　子に付し孫に傳へて保守せしむ。

莫敎門外過客聞。　門外の過客をして聞かしむる莫れ、

撫掌回頭笑殺君。　掌を撫し頭を回らして君を笑殺せん。

君不見馬家宅(六)尙猶存。　君見ずや馬家の宅尙ほ猶ほ存せるに、

宅門題作奉誠園。(七)　宅門題して奉誠園と作すを。

君不見魏家宅(八)屬他人。　君見ずや魏家の宅他人に屬せるに、

詔贖賜還五代孫。　詔贖して五代の孫に賜ひ還せるを。

儉存奢失今在目。　儉は存し奢は失へること今目に在り、

安用高墻圍大屋。　安んぞ高墻の大屋を圍むを用ひん。

【題義】身分に相應しない邸宅を營む者を諷つた詩である。

(五) 身後　死後なり。(六) 馬家宅　馬燧及び其子暢の家なり。後之を天子に獻じた。(七) 奉誠園　前の秦中吟の傷宅を見よ。(八) 魏家宅　元和四年官錢を以て魏徵の勝業坊の舊宅を贖ひ、其子孫に還し與へた。

【詩意】杏の木を梁とし桂の木を柱とした立派な家がある。一體誰の邸宅かと問へば李開府の邸宅だといふ。碧の石疊や朱塗の軒のまだ乾かないうちに、去年早くも李開府は死んで、今は別な人が其邸に住んでゐる。又高い牆を圍らし大きな門を構へた邸宅がある。聞けば盧將軍の邸宅なさうだ。白壁や朱塗の板の光もまだ失せないのに、今年政府が之を沒收して別な人に賜はつた。李開府にしても盧將軍にしても、その建築がまだ竣工せぬうちに早くも白頭の老爺となつてしまつた。彼等は宿屋も同樣な天地（李白の春夜宴桃李園序に夫天地萬物之逆旅、光陰百代之過客云云とある）の間にゐて、更に其中に邸宅といふ宿屋を作つたので、謂はば二重の宿屋住ひをしたもので、自分の心では其邸宅の主人のつもりでゐたらうが、實際は一夜泊りの客も同樣であつた。世には更に輪をかけた馬鹿者があつて自分の死後の事まで考へてゐる。彼等は心に永遠の事を考へてゐるが其計畫は決して永く存續するものではない。然るに彼等は分に過ぎた立派な家などを建てて子子孫孫に維持させようと考へてゐる。そんな事は門外を通る人に聞かせぬがよい。人が聞いたら手を拍ち頭を回らして其愚を笑ふであらう。見給へ彼の馬家の宅は今尚ほ存してゐるが、今は奉誠園と標札が掛つてゐる。又魏徵の宅は一たび他人の所有に歸したのを詔を以て之を贖ひ五代の孫に還し賜はつたではないか。要するに儉約であれば永續するが奢侈であれば滅亡するものだ。その實例が眼前に横はつてゐる。されば高い墻を圍らし大邸宅などを構へるのは愚の骨頂である。

【餘論】新唐書に、李師道私錢六百萬を上り魏徵の孫の爲に故第を贖はんとす。居易言ふ、徵は宰相に任せられ、太宗殿材を用ひて其正寢を成す。後嗣守る能はず。陛下猶ほ宜しく賢者の子孫を以ひ贖ひて之に賜ふべし。師道は人臣なり。美を掠むべからずと。帝之に從ふとある。又白樂天の文集に論魏徵舊宅狀がある。

井底引銀瓶　止淫奔也

井底引銀瓶　淫奔を止むるなり

井底引銀瓶。(一)　井底に銀瓶を引く、
銀瓶欲上絲(二)繩絕。　銀瓶は上らんと欲して絲繩絕ゆ。
石上磨玉簪。　石上に玉簪を磨す、
玉簪欲成中央折。　玉簪成らんと欲して中央より折る。
瓶沈簪折知(三)奈何。　瓶沈み簪折る知んぬ奈何かせん、
似妾今朝與君別。　妾が今朝君と別るるに似たり。
憶昔在家爲女時。　憶ふ昔家に在つて女たりし時、
人言擧動有殊(四)姿。　人は言ふ擧動殊姿有りと。

【字解】【一】銀瓶　銀のつるべ。
【二】絲繩　つるべのなは。

【三】知奈何　知は下に疑問詞あるときは不知と同意。どうしてよいかわからないといふ意。
【四】殊姿　美しい姿。

(五)嬋娟兩鬢秋蟬翼。　嬋娟たる兩鬢は秋蟬の翼、
(六)宛轉雙蛾遠山色。　宛轉たる雙蛾は遠山の色。
笑隨(七)女伴後園中。　笑つて女伴に隨ふ後園の中、
此時與君未相識。　此時君と未だ相識らず。
妾弄青梅倚短牆。　妾は青梅を弄んで短牆に倚り、
君騎白馬傍垂楊。　君は白馬に騎つて垂楊に傍ふ。
牆頭馬上遙相顧。　牆頭馬上遙かに相顧み、
一見知君卽斷腸。　一見知る君が卽ち腸を斷つを。
知君斷腸共君語。　君が腸を斷つを知りて君と共に語る、
君指(八)南山松柏樹。　君は南山松柏の樹を指す。
感君松柏化爲心。　君が松柏化して心と爲るに感じ、
暗(九)合雙鬟逐君去。　暗に雙鬟を合せて君を逐うて去る。
到君家舍五六年。　君が家に到つて舍すること五六年、

【五】嬋娟　美しき鬢。
【六】宛轉　弓形に曲る鬢。眉を形容する詞。雙蛾は兩方の美しき眉。
【七】女伴　女の遊び仲間。
【八】南山　終南山。長安の南に在り。
【九】合雙鬟　山遊示小妓詩に、雙鬟垂未合、三十纔過半とある。雙鬟を合せ結ぶこと、成人の姿をすること。

君家(一〇)大人頻有言。　君が家の大人頻に言ふ有り。
(一一)聘則爲妻奔是妾。　聘すれば則ち妻たり奔るは是妾なり、
不堪(一二)主祀奉蘋蘩。　祀を主り蘋蘩を奉するに堪へずと。
終知君家不可住。　終に君が家には住す可からざるを知るも、
其奈出門無去處。　其れ門を出でて去る處無きを奈せん。
豈無父母在高堂。　豈に父母の高堂に在る無からんや、
亦有親情滿故鄕。　亦親情の故鄕に滿つる有り。
潛來更不通消息。　潛みしより來更に消息を通せず、
今日悲羞歸不得。　今日悲羞して歸り得ず。
爲君一日恩。　君が一日の恩の爲に、
誤妾(一三)百年身。　妾が百年の身を誤る。
寄言(一四)癡小人家女。　言を寄す癡小人家の女。
愼勿將身輕許人。　愼んで身を將て輕しく人に許すこと勿れ。

【一〇】大人　父をいふ。母をいふ場合もある。
【一一】聘則爲妻　禮記内則篇に見ゆ。聘禮を行つて迎へた女ならば妻となし、聘禮に由らず男の許に奔つて來た女ならば妾とする。
【一二】主祀　夫を助けて祖先の祭を主ること。妻の職なり。奉蘋蘩は水草を神に捧げて祭ること、これも妻の職なり。詩經召南の采蘋、采蘩を見よ。
【一三】百年　一生涯をいふ。
【一四】癡小　愚で年のわかい。

【題義】女子の淫奔を戒めた詩である。

【詩意】井戸の底から銀の釣瓶を引きあげるのに、もう少しで上がらうといふ時に、繩が切れてしまふ。石の上で玉の簪を磨き、もう少しで出來あがらうといふ時に中央から折れてしまふ。かうなつてはどうしたらよいか。殆ど途方にくれる。今朝君（情人を指す）と別れる妾の身の上は丁度此れと同じだ。憶へば昔親の家にゐた處女の頃は、擧動恰好が水際立つて美しいと人からもほめられ、左右の鬢は秋の蟬の翼のやうに美しく、一對の眉は遠山の綠と其色を競ひ、女伴と奥庭の中に笑ひさざめいてゐて、まだ君と識合にはならなかつた。ある日妾は青い梅の實を弄びつつ低い牆にもたれてゐた。君は白馬に跨つて牆の傍の楊に近づいて來た。互に目と目とを見かはして妾は忽ち君が我が爲に心魂を碎いてゐることを悟つた。それから君と語り合つたが、君は終南山の松柏を指して心變のないことを誓はれた。妾は君の心に感激して竊に君の許に奔つて夫婦の契を結んだ。君の家に行つてから五六年にもなるが、君の家の親御は聘禮に由ればこそ妻といへるが、勝手に奔つて來た女は妻とはいへぬ。正妻として祖先の祭に與らしめる譯には行かぬとの御意見である。どうしても君の家に居とほすことは出來ないと諦めはしたが、今君の家を出てこれから何處へ行くであらうか。兩親も存生であり近しい人もないではないが、君の處へ身を寄せて以來全く音信を絶つてゐたから、今更歸つて行くことは出來ない。今になつて見れば君が一時のなさけの爲に、妾は一生を誤つてしまつた。世の無智無經驗な少女に忠告するが、決して輕しく男に身を任せてはなりませぬ。

官牛　諷執政也　　官牛　執政を諷するなり

官牛官牛駕官車。　官牛官牛官車に駕し、
(一)滻水岸邊驅載沙。　滻水岸邊に驅られて沙を載す。
(二)一石沙。幾斤重。　一石の沙、幾斤の重さぞ、
朝載暮載將何用。　朝に載せ暮に載せて將に何にか用ひんとする。
載向(三)五門官道西。　載せて五門官道の西に向ひ、
綠槐陰下鋪(四)沙堤。　綠槐陰下沙堤に鋪く。
(五)昨來新拜右丞相。　昨來新に右丞相に拜せられ、
(六)恐怕泥塗汚馬蹄。　泥塗の馬蹄を汚さんことを恐怕す。
右丞相馬蹄。　右丞相の馬蹄は、
蹋沙雖淨潔。　沙を蹋んで淨潔なりと雖も、

【字解】(一) 滻水　長安の東方を流るる川。
(二) 一石　枡目の名。
(三) 五門　大明宮の南の丹鳳門をいふ。
(四) 沙堤　國史補に、「凡ソ相ヲ拜スレバ、府縣沙ヲ載セテ路ヲ塡メ、私第ヨリ城東街ニ至ル、名ヅケテ沙堤トイフ」とある。
(五) 昨來　昨日から。
(六) 恐怕　おそれ、氣づかふ。

(七)牛領牽車欲流血。　牛領は車を牽いて血を流さんと欲す。

右丞相。　右丞相、

但能濟人治國調陰陽。　但だ能く人を濟ひ國を治め陰陽を調へば、

官牛領穿亦無妨。　官牛領穿たるるも亦妨げ無し。

【題意】宰相を諷諫した詩である。

【詩意】官で飼養してゐる牛が官用の車を牽いて、滻水のほとりから追立てられながら沙を載せて行く。一石の沙は幾斤の重さあるか隨分重いであらうが、朝晩之を運んで何にするのであらう。丹鳳門の西に持つて行つて、槐の木の下に敷くのである。昨日から新に右丞相が任命されたので、泥塗が丞相の馬の蹄をよごしはせぬかと恐れて沙堤を作る爲である。かくて右丞相の馬の蹄は沙を蹈んで淨潔ではあらうが、牛の頸は車を牽く爲に血が流れるやうだ。併し右丞相は能く人を濟ひ國を治め陰陽の氣を調へさへすれば、牛の頸に孔があいても差支はない。

【七】牛領　牛の頸。

紫毫筆　誡失職也

紫毫筆　失職を誡むるなり

(一)紫毫筆。　紫毫の筆、

尖如錐兮利如刀。　尖れること錐の如く利きこと刀の如し。

江南石上有老兎。　江南の石上に老兎有り、

喫竹飲泉生紫毫。　竹を喫し泉を飲んで紫毫を生ず。

(二)宣城工人采爲筆。　宣城の工人采つて筆と爲し、

千萬毛中選一毫。　千萬毛中一毫を選ぶ。

毫雖輕。功甚重。　毫は輕しと雖も、功は甚だ重し。

管勒工名充歲貢。　管に工の名を勒して歲貢に充つ、

君兮臣兮勿輕用。　君や臣や輕用する勿れ。

勿輕用。將何如。　輕用する勿くして、將に何如せんとする。

願賜東西府御史。(三)　願はくは東西府の御史に賜へ、

願頒左右臺起居。(四)　願はくは左右臺の起居に頒て。

搦管趨入黃金闕。　管を搦り黃金の闕に趨入し、

抽毫立在白玉除。(五)　毫を抽きて立つて白玉の除に在り。

【字解】【一】紫毫筆　紫色の毛の筆。

【二】宣城　安徽省宣城縣。

【三】御史　官名。非違を糾察する官。

【四】起居　起居郎と起居舍人。起居郎は左史で、君主の動止を記す。起居舍人は右史で君主の言を記す。

【五】白玉除　宮殿の階なり。

臣有姦邪正衙奏。 臣に姦邪有らば衙を正して奏せよ、
君有動言直筆書。 君に動言有らば筆を直くして書せよ。
起居郎。侍御史。 起居郎、侍御史、
爾知紫毫不易致。 爾紫毫の致し易からざるを知らん。
每歲宣城進筆時。 每歲宣城筆を進むる時、
紫毫之價如金貴。 紫毫の價金の如く貴し。
愼勿空將彈(六)失儀。 愼んで空しく將て失儀を彈すること勿れ、
愼勿空將錄(七)制詞。 愼んで空しく將て制詞を錄すること勿れ。

【六】彈失儀 失儀は失態。彈は糾彈すること。
【七】制詞 みことのり。

【題義】直言直筆を務むべき官吏が其職責を果さないのを誡めた詩である。

【詩意】紫の毫の筆がある。その尖つてゐることは錐の如く、利いことは刀の如くである。(筆鋒の犀利なこと) 江南の石の上に老兎がゐる。竹を食ひ泉を飲んで其體に紫の毫が生える。宣城縣の筆工が其毫を採つて筆を作るに、千萬本の中から僅に一本を選んで此筆を作るのである。毫は輕い物であるが、筆に作りあげる骨折は大變なものだ。出來あがると軸に筆工の名を刻みつけ年年貢物として納める。かかる貴重な筆であるから、君も臣も決して輕しく用ひてはならない。然らばどうしたらよいのか。御史や起居の役人に頒ち與へられるがよい。さすれば彼等は宮廷に立ち此筆を揮つて、奸邪の臣があれば御座の前に正しく其罪狀を奏聞し、君主の言動をば詐らずに記述するであらう。起居郎や侍御史たる人人よ、諸君は此紫毫筆の容易に得難きを知つてゐるであらう。每年宣城から獻納され、黃金のやうに貴いのである。されば徒に官吏の非違を糾彈したり、天子の制詔などを錄してはならない。

隋堤柳 憫亡國也

隋堤柳 亡國を憫むなり

(一)隋堤柳。 隋堤の柳、
歲久年深盡衰朽。 歲久しく年深うして盡く衰朽す。
風飄飄兮雨蕭蕭。 風飄飄として雨蕭蕭たり、
三株兩株汴河口。 三株兩株汴河の口。
老枝病葉(二)愁殺人。 老枝病葉人を愁殺す、
曾經(三)大業年中春。 曾て大業年中の春を經たり。

【字解】【一】隋堤 隋の煬帝が運河の傍に築いた堤防。煬帝は通濟渠を開き汴河を引き洞水に入れ淮水に達せしめた。又邗溝を開きて揚子江に通ぜしめた。其堤防に柳を植ゑた。
【二】愁殺 愁へしめる。殺は助辭。
【三】大業 隋の煬帝の年號。

大業年中煬天子(四)。　大業年中煬天子、

種柳成行夾流水。　柳を種ゑ行を成して流水を夾む。

西至黃河東至淮。　西は黃河に至り東は淮に至る、

綠影一千三百里。　綠影一千三百里。

大業末年春暮月。　大業の末年春暮の月、

柳色如煙絮(五)如雪。　柳色煙の如く絮雪の如し。

南幸江都(六)恣佚遊。　南江都に幸して佚遊を恣にす、

應將此樹蔭龍舟(七)。　應に此樹を將て龍舟に蔭せしなるべし。

紫髯郎將護錦纜。　紫髯の郎將錦纜を護り、

青蛾(八)御史直迷樓。　青蛾の御史迷樓に直す。

海內財力此時竭。　海內の財力は此時に竭き、

舟中歌笑何日休。　舟中の歌笑は何れの日か休まん。

上荒下困勢不久。　上荒み下困しんで勢久しからず、

【四】煬天子　煬帝。

【五】絮　柳の花。

【六】江都　江蘇省揚州府江都縣。煬帝の離宮を置いた地。

【七】龍舟　天子の舟。

【八】青蛾　年わかき美女。御史は書記なり。迷樓は煬帝の建てた樓。故に入る者をして方向に迷はしむ。此名あり。

宗社(九)之危如綴旒。　宗社の危きこと綴旒の如し。

煬天子。　煬天子、

自言歡樂殊未極。　自ら言ふ歡樂殊に未だ極らずと。

豈知明年正朔(一〇)歸武德。　豈に知らんや明年正朔武德に歸するを。

煬天子。　煬天子、

自言福祚(一一)長無窮。　自ら自ふ福祚長く窮り無しと。

豈知皇子封酅公(一二)。　豈に知らんや皇子酅公に封せらるるを。

龍舟未過彭城閣(一三)。　龍舟未だ彭城閣を過ぎらざるに、

義旗(一四)已入長安宮。　義旗已に長安宮に入る。

蕭牆(一五)禍生人事變。　蕭牆禍生じて人事變じ、

晏駕(一六)不得歸秦中。　晏駕して秦中に歸るを得ず。

土墳數尺何處葬。　土墳數尺何れの處にか葬る、

吳公臺(一七)下多悲風。　吳公臺下悲風多し。

【九】宗社　宗廟社稷。國家なり。綴旒は旗の周圍につける布片。

【一〇】正朔　こよみ。武德は唐の高祖の年號。

【一一】福祚　帝位。

【一二】酅公　唐の武德元年、隋の煬帝の孫恭帝を廢して酅國公となす。

【一三】彭城閣　煬帝が揚州府甘泉縣彭城村に建てた閣の名。閣の字は閤に作る。今唐宋詩醇に據つて改む。

【一四】義旗　唐の高祖が隋を伐つ爲に擧げた義兵をいふ。

【一五】蕭牆　家のまはりの牆。

【一六】晏駕　天子の崩御をいふ。秦中は長安をいふ。

二百年來汴河路。　二百年來汴河の路、
沙草和煙朝復暮。　沙草煙に和す朝復暮。
後王何以鑒前王。　後王何を以てか前王に鑒みん、
請看隋堤亡國樹。　請ふ看よ隋堤亡國の樹を。

【題義】隋の亡びたことを憫んだ詩である。

【詩意】隋堤の柳は年久しくなつたので今は皆衰朽してしまつた。雨風に打たれながら二本三本汴河の口に立つてゐる。其の老いた枝や枯れた葉は人をして坐に愁を催さしめるが、昔は大業の春を飾つたものである。煬帝は運河を夾んで柳の竝木を作り、西は黃河から東は淮水に至るまで、綠の影が千三百里に亙つた。江都の離宮に遊幸せられる時には、この樹の蔭に暫く舟を駐めたことであらう。其時は赤髯の郎將が錦の纜を護り、美貌の女史が迷樓に宿直した。かかる豪奢を極めた結果天下の財力は殆ど盡きたが、それでも歌笑の樂に耽つて已む時なく、上の者は歡樂に耽り下の者は困窮して國家は危難に瀕した。それでも煬帝はまだ歡樂が足りないと言つてゐたが、豈圖らんや其翌年には年號も唐の武德と改まり、自ら帝位の無窮を信じてゐたが、案外にも皇子（實は皇孫）恭帝は廢せられてしまつた。煬帝の乘つた龍舟はまだ彭城閣を過ぎないうちに、唐王李淵の義兵は早くも長安の宮殿に乘込んだ。其中に内部から反亂が起つて煬帝は臣下の手に斃れ、長安に歸ることも出來ないで呉公臺下悲風の吹きすさぶ處に葬られた。さて二百年このかた汴河のほとり沙原の草に煙たなびく中に朝も晚も亡國の記念として柳が立つてゐる。後世の天子は何に由つて前代の天子を鑒みるべきかとならば、何よりも先づ隋堤の柳を看て鑒戒とするがよい。

【餘論】唐宋詩醇に「一起諺に似、謠に似たり。最も古意あり。詳に興亡の事を敍し、仍ほ柳を以て結ぶ。俯仰情深し」と評してゐる。

【七】呉公臺　揚州府甘泉縣の西北四里に在り、煬帝を此に葬る。

草茫茫　懲厚葬也　草茫茫　厚葬を懲らすなり

草茫茫。土蒼蒼。　草茫茫たり、土蒼蒼たり。
蒼蒼茫茫在何處。　蒼蒼茫茫として何れの處にか在る、
驪山脚下秦皇墓。　驪山の脚下秦皇の墓。
墓中下涸二重泉。　墓中下に二重の泉を涸す、
當時自以爲深固。　當時自ら以て深固と爲す。
下流水銀象江海。　下には水銀を流して江海に象り、

【字解】【一】茫茫　廣き貌。【二】蒼蒼　青黒き貌。【三】在何處　在、一に此に作るを可とす。【四】驪山　秦の始皇帝を葬りし山の名。陝西省西安府臨潼縣に在る。【五】涸二重泉　漢書劉向傳に、秦始皇帝葬於驪山之阿、下錮三泉、上崇山墳、とある。涸二は錮三に作

上綴珠光作烏兎。(七) 上には珠光を綴りて烏兎と作す。
別爲天地於其間。 別に天地を其間に爲り、
擬將富貴隨身去。 富貴を將て身に隨へ去らんと擬す。
一朝盜掘墳陵破。 一朝盜掘墳陵破れ、
(八)龍椁神堂三月火。 龍椁神堂三月火あり。
可憐寶玉歸人間。(九) 憐む可し寶玉人間に歸す、
暫借泉中買身禍。 暫く泉中を借りて身の禍を買ふ。
奢者狼(一〇)藉儉者安。 奢なる者は狼藉せられ儉なる者は安し、
一凶一吉在眼前。 一は凶一は吉眼前に在り。
憑君回首向南望。 君に憑りて首を回らし南に向つて望まん、
(一一)漢文葬在灞陵原。 漢文は葬られて灞陵原に在り。

【詩意】厚葬の愚を懲らす爲に作つた詩である。

【餘論】草原がひろびろとひろがり土の色が青黒い。ここは何處であるかといふに、驪山の麓の秦の始皇帝の墓である。此墓は地下三重の泉の流れる處まで封じ固めたもので、始皇帝自ら大磐石だと信じ、且つ下には水銀を流して江や海に象り、上には珠を綴つて日月の形を作り、墓穴の内部に別天地を營んで、生前の富貴を其儘に攜へ往かうと期してゐた。處が一朝盜掘を企てた者があつて陵墓は破られ、靈柩も祭靈所も燒拂はれて、地中に深く埋めた寶玉も再び此世の物となり、氣の毒にも始皇帝は墓の爲に一身の禍を買ひ發掘の憂目を見ることになつた。贅澤な寶玉などを一緒に埋めるから盜掘の厄にも遇ふので儉約な者は安全である。奢は凶、儉は吉なる證據がすぐ眼の前に在る。君にたのむが始皇帝の墓から更に首を回らして南方を見られよ。薄葬を以て聞えた漢の文帝の灞陵が今以て無事に殘つてゐるではないか。

ゐを可とす。錮は堅く封じこむこと。三重泉は地を掘つて三度水の出る處に及ぶをいふ。
【六】水銀　漢書劉向傳に、「水銀爲江海、黃金爲鳧雁」とある。
【七】烏兎　日月をいふ。
【八】龍椁　天子の棺槨。神堂は墓中の祭靈所。三月火は楚の項羽が秦の都を燒き、三個月間火が消えなかつたこと。
【九】人間　世間。
【一〇】狼藉　亂暴なり。
【一一】漢文　漢の文帝、節儉の名高し。灞陵は文帝の陵墓。

古塚狐　戒艶色也

古塚狐　艶色を戒むるなり

古塚狐。妖且老。 古塚の狐、妖にして且つ老いたり、
化爲婦人顏色好。 化して婦人と爲つて顏色好し。
頭變雲(一)鬟面變粧。 頭は雲鬟に變じ面は粧に變ず、
大尾曳作長紅裳。 大尾曳いて長紅裳と作る。

【字解】【一】雲鬟　雲の如き鬟のマゲ。

徐徐行傍荒村路。 徐徐行くゆく荒村の路に傍ふ、
日欲暮時人靜處。 日暮れんと欲する時人の靜なる處。
或歌或舞或悲啼。 或は歌ひ或は舞ひ或は悲啼し、
翠眉不擧花顏低。 翠眉擧らず花顏低る。
忽然一笑千萬態。 忽然一笑千萬の態。
見者十人八九迷。 見る者十人に八九は迷ふ。
假色迷人猶若是。 假色の人を迷はすこと猶是の若し、
眞色迷人應過此。 眞色の人を迷はすは應に此に過ぐべし。
彼眞此假俱迷人。 彼眞此假倶に人を迷はす、
人心惡假貴重眞。 人心假を惡んで眞を貴重す。
狐假女妖害猶淺。 狐の女妖を假るは害猶淺く、
一朝一夕迷人眼。 一朝一夕人眼を迷はすのみ。
女爲狐媚害卻深。 女の狐媚を爲すは害却つて深く、

日增月長溺人心。 日に增し月に長じて人心を溺れしむ。
何況褒妲之色善蠱惑。 何ぞ況んや褒妲(一)の色善く蠱惑するをや、
能喪人家覆人國。 能く人の家を喪し人の國を覆す。
君看爲害淺深間。 君看よ害を爲す淺深の間、
豈將假色同眞色。 豈に假色を將て眞色に同じうせんや。

【一】褒妲　周の幽王の寵姫褒姒と殷の紂王の寵姫妲己。蠱惑は人を迷はすこと。

【題義】美人の容色に迷はされぬやうに戒めた詩である。

【詩意】古塚に老狐がゐて、それが美しい婦人に化ける。頭は忽ち黒髪の鬟に變り面は化粧した顏に變り、大きな尾は長い紅の裳に變る。日暮れて人靜まつた頃に、そろそろと淋しき村の路にでかけ、或は歌ひ、或は舞ひ、或は翠の眉、花の顏を垂れて悲み啼くかと見ると、忽ち笑ひなどして樣樣の態を作る。之を見ると十人に八九人は迷つてしまふ。假の美人(狐の化けた)でさへ此の通りであるから、本物の美人が人を迷はすことは此れ以上であらう。且つ人は誰でも假よりは本物を貴ぶものである。狐が女の妖色を假るのは害が淺く、ただ一朝一夕人の眼を迷はすだけであるが、女が狐のやうに媚びるのは害が深くて、日に月にますます人心を溺れしめる。況んや褒姒・妲己の如き美人は人の心を惑はすことが上手で、國家をも覆すほどである。諸君よく見給へ、假の美人(狐の化けたの)と本物の

美人とはどちらが害が深いか。本物の美人の害毒の深いことは到底狐の化物の比ではない。

黑潭龍　疾貪吏也

黑潭龍　貪吏を疾むなり

黑潭水深色如墨。　黑潭水深うして色墨の如し、
傳有神龍人不識。　神龍有りと傳ふるも人識らず。
潭上架屋官立祠。　潭上屋を架して官祠を立つ、
龍不能神人神之。　龍神なる能はず人之を神にす。
豐凶[一]水旱與疾疫。　豐凶水旱と疾疫と、
鄕里皆言龍所爲。　鄕里皆言ふ龍の爲す所と。
家家養豚漉清酒。　家家豚を養うて清酒を漉み、
朝祈暮賽依巫口。　朝に祈り暮に賽して巫口に依る。
神之來兮風飄飄。　神の來るや風飄飄たり、
紙錢[二]動兮錦傘搖。　紙錢動き錦傘搖ぐ。

【字解】[一] 豐凶　汪氏本には災凶に作る。今全唐詩に據りて改む。
[二] 紙錢　紙で作つた錢。神を祭るとき之を燒きて捧げる。錦傘は錦蓋に同じ。

神之去兮風亦靜。　神の去るや風亦靜なり、
香火滅兮盃盤冷。　香火滅して盃盤冷かなり。
肉堆潭岸石。　肉は潭岸の石に堆く、
酒潑廟前草。　酒は廟前の草に潑ぐ。
不知龍神享幾多。　知らず龍神享くる幾多ぞ、
林鼠山狐長醉飽。　林鼠山狐長に醉飽す。
狐何幸。豚何辜。　狐は何の幸ぞ、豚は何の辜ぞ、
年年殺豚將餧狐。　年年豚を殺して將に狐を餧はんとす。
狐假神龍食豚盡。　狐神龍を假りて豚を食ひ盡す、
九重泉[三]底龍知無。　九重泉底龍知るや無や。

【題義】慾の深い官吏が君主をだしに使つて民を苦め私利を貪ることを疾んで作つた詩である。
【詩意】黑ずんだ潭の水が非常に深くて色が墨のやうだ。そこに龍が住んでゐるさうだが誰も見た人はない。この潭の上に屋を構へ祠を立て龍を祭ることにした。村人の言に據れば豐凶も洪水も旱も疾

[三] 九重泉　泉は淵なり。唐の高祖の諱を避けて泉の字を代用す。深き淵をいふ。

疫も皆此龍の仕業であるといふ。故にどこの家でも豚を養ひ酒を漉して龍に捧げ、巫の言ふままに朝晩祈願をこめたり禮參りをしたりする。龍神の來るときはさつと風が吹いて來て紙錢や錦傘がうごく。其の去るときは風が靜まり香火も消え酒や肉を盛つた盃盤も冷える。祭の後には潭邊の石に肉が堆く置かれ、廟前の草に酒がまきちらされる。此酒肉を龍神はどれだけたべるであらう。（二）殆んどたべはしないで、山林に棲む鼠や狐が飲み食ひするのである。狐はなぜに幸を受け、豚は何の辜があるのであらう。年年豚を殺して其肉を狐にたべさせ、狐は龍神をだしに使つて豚を食ひ盡す。さても深淵に住む龍神は此事を知つてゐるのやら知らないのやら。

【餘論】全首すべて比喩を以て成る。龍を君に、狐鼠を貪吏に、豚を民に喩へたのである。

天可度　惡詐人也　　天可度　詐人を惡むなり

天可度。地可量。　天度る可く、地量る可し、
唯有人心不可防。　唯だ人心の防ぐ可からざる有り。
但見丹誠赤如血。　但見る丹誠の赤くして血の如くなるを、
誰知僞言巧似簧。（一）　誰か知らん僞言の巧にして簧に似たるを。
勸君掩（二）鼻君莫掩。　君に勸めて鼻を掩はしむるも君掩ふ莫れ、
使君夫婦爲參商（三）。　君が夫婦をして參商と爲らしめん。
勸君掇（四）蜂君莫掇。　君に勸めて蜂を掇らしむるも君掇る莫れ、
使君父子爲豺狼。　君が父子をして豺狼と爲らしめん。
海底魚兮天上鳥。　海底の魚天上の鳥、
高可射兮深可釣。　高きも射る可く深きも釣る可し。
唯有人心相對時。　唯だ人心相對する時、
咫尺之間不能料。　咫尺の間も料る能はざる有り。
君不見李義府（五）之　君見ずや李義府の
輩笑欣欣。　輩笑つて欣欣たり、
笑中有刀潛殺人。　笑中に刀有り潛に人を殺す。
陰陽神變皆可測。　陰陽神變皆測る可し、
不測人間笑是瞋（六）。　測られざるは人間の笑是れ瞋なることなり。

【字解】【一】簧　笙の舌。詩經小雅に巧言如簧とある。【二】掩鼻　鄭袖、楚王に美人を讒せんとして先づ美人に言つた。楚王は御身の鼻を嫌つてゐるから王の御前に出たらば鼻を掩ふがよいと。美人は其言のやうにした。楚王は之を見て鄭袖に其故を問うた。鄭袖答へて、彼女は王の惡臭を嫌ふ故でござると言つたので、王は怒つて、美人の鼻を斬らしめた。【三】參商　二星の名。相隔りて出で、相會することのない星である。【四】掇蜂　周の尹吉甫が後妻を娶つた。後妻は先妻の子なる伯奇が己に對して邪心あることを吉甫に讒したが吉甫は信じなかつたので、後妻の言ふやう、われ其證を示さん卅望見せよと。ある日毒蜂を衣の襟に置き伯奇をして之を掇らしめた。吉甫樓上から望見して大に怒り伯奇を放逐した。【五】李義府　唐の高宗の時の宰相。人と語るに嬉怡微笑す。而も狡險忌刻であつた。故に時の人は笑中に刀ありと謂つた。【六】瞋　怒ること。汪氏本には嗔に作る、今全唐詩に據つて改む。

【題義】詐り多き人を惡んで作つた詩である。

【詩意】天でも地でも測量することが出來るが、ただ人心の危險だけは豫防は出來ない。見た所では丹誠が血のやうに赤いやうでも、僞言が笙簧を動かすやうに上手な人もある。若し人が鼻を掩へと勸めても掩はぬがよい。若し鼻を掩うたならば、夫婦の仲をも參商のやうに隔ててしまふであらう。又人が蜂を掇れと勸めても掇らぬがよい。若し蜂を掇つたならば親子の間をも豺や狼のやうな恐ろしいものにしてしまふであらう。海底の魚でも天上の鳥でも射ることも出來、釣ることも出來る。ただ人の心は兩人相對する時、僅か一尺か八寸しか離れなくとも推量することは出來ない。見よ、かの李義府は欣欣として笑つてゐるが、笑の中に刀があつて陰に廻つて人を殺すのである。如何なる陰陽神變でも推測することが出來るが、推測の出來ないのは笑の中に怒の含まれてゐることである。

秦吉了　哀冤民也　　秦吉了　冤民を哀むなり

秦吉了(一)出南中(二)。　秦吉了、南中より出づ、
彩毛青黑花頸(三)紅。　彩毛青黑にして花頸紅なり。
耳聰心慧舌端巧。　耳聰く心慧くして舌端巧みに、
鳥語人言無不通。　鳥語人言通せざる無し。
昨日長爪鳶。　昨日長爪の鳶、
今朝大觜烏。　今朝大觜の烏。
鳶捎乳燕(四)一窠覆。　鳶は乳燕を捎めて一窠覆り、
烏啄母雞雙眼枯。　烏は母雞を啄んで雙眼枯る。
雞號墮地燕驚去。　雞は號んで地に墮ち燕は驚き去る、
然後拾卵攫其雛。　然る後卵を拾うて其雛を攫す。
豈無鵰(五)與鶚。　豈に鵰と鶚と無からんや、
嗉中(六)肉飽不肯搏。　嗉中に肉飽いて肯て搏たず。
亦有鸞鶴羣。　亦鸞鶴の羣有り、
閑立颺高如不聞。　閑に立ち颺ること高く聞かざるが如し。
秦吉了。　秦吉了、
人云爾是能言鳥。　人云ふ爾は是れ能言の鳥なりと。

【字解】【一】秦吉了　九官鳥ともいふ。よく人語をまねる鳥である。
【二】南中　南方の地方。
【三】花頸　模樣のある頸。
【四】乳燕　子持ちの燕。窠は燕の巢。
【五】鵰、鶚　皆猛鳥の名。
【六】嗉中　胃袋の中。

豈不見雞燕之冤苦。　豈に雞燕の冤苦を見ざらんや、
吾聞鳳凰百鳥主。　吾聞く鳳凰は百鳥の主なりと。
爾竟不為鳳凰之前致一言。　爾竟に鳳凰の前に一言を致すことを為さずんば、
安用嘈嘈閑言語。　安んぞ嘈嘈たる閑言語を用ひん。

【七】嘈嘈　騒がしき貌。閑言語は無用の言語。

【題義】無實の罪に泣く窮民を憐んで作つた詩である。

【詩意】秦吉了は南方蠻夷の國に産する鳥で、青黒の彩毛があつて花模様のある頸は紅である。耳さとく心さかしく舌巧にして鳥語人言皆通せざるはない。昨日は爪の長い鳶が來て乳燕を掠めて巣を覆し、今朝は嘴の大きな烏が來て、母雞を啄いて兩眼をつぶし、雞は啼きつつ地に落ち、燕は驚いて逃げ去つた後で、其卵を取り其雛を攫み食つた。鵰と鶚とは肉に飽きて烏鳶の為す所を知らぬげに見遁して搏つことを為さず、又鸞や鶴もゐるが此等は悠悠閑閑と立ちやすらひて其容姿を誇り、或は高く空に舞ひ上りて、雞燕の啼く聲を聞かぬふりをしてゐる。人は秦吉了を言語に巧みな鳥だといふが、雞燕の冤苦を知らない筈はあるまい。鳳凰は鳥中の王だと云ふから、秦吉了よ、お前は鳳凰の前に行つて一言烏鳶の暴虐、雞燕の冤苦を訴へるがよい。さうでなければ無用の閑言語を弄するも何の役にも立たない。

【餘論】これも全首比喩から成つてゐる。雞燕を冤民に、烏鳶を貪吏に、鵰鶚を武官に、鸞鶴を公卿に、鳳凰を天子に、秦吉了を諫官に喩へたのである。

鴉九劍　思決壅也　鴉九劍　壅を決せんことを思ふなり

(一)歐冶子死千年後。　歐冶子死して千年の後、
精靈暗授(二)張鴉九。　精靈暗に張鴉九に授けらる。
鴉九鑄劍吳山中。　鴉九劍を鑄る吳山の中、
天與日時神借功。　天日時を與へ神功を借す。
金鐵騰精火翻燄。　金鐵精を騰げ火燄を翻す、
(三)踴躍求為鏌鋣劍。　踴躍して鏌鋣の劍と為らんことを求む。
劍成未試十餘年。　劍成つて未だ試みず十餘年、
有客持金買一觀。　客有り金を持ち買うて一たび觀る。
誰知閉匣長思用。　誰か知らん匣に閉ぢられて長く用ひられんことを思ふを、

【字解】【一】歐冶子　古の刀工の名。
【二】張鴉九　人名。
【三】踴躍　をどりあがる。荘子大宗師篇に「金踴躍シテ我必ズ鏌鋣タランと、大冶必ズ以テ不祥ノ金トナサン」とある。鏌鋣は名劍の名。

（四）三尺青蛇不肯蟠。　三尺の青蛇肯て蟠らず。
客有心劍無口。　客に心有り、劍に口無し、
客代劍言告鴉九。　客劍に代り言うて鴉九に告ぐ。
君勿矜我玉可切。　君我が玉を切る可きを矜ること勿れ、
君勿誇我鐘可刜。　君我が鐘を刜る可きを誇ること勿れ。
不如持我決浮雲。　我を持つて浮雲を決し、
無令（五）漫漫蔽白日。　漫漫として白日を蔽はしむること無く、
爲君使無私之光及萬物。　君が爲めに無私の光をして萬物に及び、
（六）蟄蟲昭蘇萌草出。　蟄蟲昭蘇し萌草を出でしめんには如かず。

【四】三尺青蛇　劍をいふ。
【五】漫漫　雲のひろがる貌。
【六】蟄蟲　冬の間地中にこもつてゐる蟲。昭蘇は夜があけてよみがへる意で、蟲が穴から出ること。禮記樂記篇の字面。

【題義】壅蔽の害を除かんことを思うて作つた詩である。鴉九は刀工の名。

【詩意】古の刀工歐冶子が死んで千年を經た後に、その靈魂が暗に張鴉九に授けられた。張鴉九が吳山の中で劍を鑄るに方り、天は時日を與へ神は功力を貸し、金鐵は精氣を發し火は焰を吐き、鑄型の中の金鐵は踴りあがつて、あつぱれ古の鏌鎁の如き名劍とならうと意氣ごんでゐた。さて劍が出來あがつてから十年あまりになるが、まだ一度も使つたことがなかつた。或る人が其劍を買取つて觀た。すると劍は箱の中に閉ぢこめられてから以來久しく用ひられんことを望んでゐたので、いつまでも箱の中に蟠つてゐることを屑しとしなかつた。劍には口がないから何とも言はなかつたが、其人は忽ち其意を悟り、劍に代つて鴉九に告げた。張君よ、我（劍自ら謂ふ）は玉をも鐘をも切ることが出來るが、決して君はそれを誇りなさるな。それよりも我を持つて天上の浮雲を一掃し、天日を蔽ふことの出來ないやうにし、天日の無私公平な光を萬物に及ぼし、冬籠の蟲は這ひ出し、春草は若芽をふき出すやうにさせるがよい。

采詩官　監前王亂亡之由也
采詩官　前王亂亡の由を監みるなり

（一）采詩官。　采詩の官、
采詩聽謌導人言。　詩を采り謌を聽きて人言を導く。
言者無罪聞者誡。　言ふ者罪無く聞く者誡む、
（二）下流上通上下泰。　下流上に通じて上下泰し。
周滅秦興至隋氏。　周滅び秦興つてより隋氏に至るまで、

【字解】【一】采詩官　周の時代に置かれた官職で、各地を巡行して其地に行はれる詩を採り集め、天子に獻上することを掌る。天子は其詩を見て政事の得失民俗の良否を知ることを得た。
【二】下流　下の民情の流れ。

十代采詩官不置。　十代采詩の官置かれず。
（三）郊廟登歌讃君美。　郊廟の登歌君の美を讃し、
（四）樂府豔詞悅君意。　樂府の豔詞君の意を悅ばす。
若求（五）興論規刺言。　若し興論規刺の言を求めば、
萬句千章無一字。　萬句千章一字無し。
不是章句無規刺。　是れ章句の規刺無きならず、
漸恐朝廷絕諷議。　漸く恐る朝廷の諷議を絕たんことを。
諍臣杜口爲冗員。　諍臣口を杜ぎて冗員と爲り、
（六）諫鼓高懸作虛器。　諫鼓高く懸つて虛器と作る。
（七）一人負扆常端默。　一人扆を負うて常に端默し、
（八）百辟入門皆自媚。　百辟門に入つて皆自ら媚ぶ。
（九）夕郎所賀皆德音。　夕郎の賀する所は皆德音、
（一〇）春官每奏唯祥瑞。　春官の每に奏するは唯祥瑞。

【三】郊廟　郊は天を祭ること。廟は祖先を祀ること。登歌は堂上に登つて歌ふこと。
【四】樂府　音樂を掌る役所。又は其役所で作つた詩歌をいふ。
【五】興論　物にたとへて諷ふこと。規刺はいましめそしること。
【六】諫鼓　昔君主を諫めんとする時に打つた太鼓。
【七】一人　天子をいふ。扆は天子の御座の後に立てる屛風の如きもの。
【八】百辟　百官。
【九】夕郎　黄門侍郎なり。夕に青瑣門に入對する故なり。德音は天子より賜はる恩德の深きことば。

君之堂兮千里遠。　君の堂は千里遠く、
君之門兮九重閟。　君の門は九重閟づ。
君耳唯聞堂上言。　君の耳は唯聞く堂上の言、
君眼不見門前事。　君の眼は見ず門前の事。
貪吏害民無所忌。　貪吏民を害して忌む所無く、
奸臣蔽君無所畏。　奸臣君を蔽うて畏るる所無し。
君不見（一一）厲王胡亥之末年。　君見ずや厲王胡亥の末年、
羣臣有利君無利。　羣臣は利有つて君は利無かりしを。
君兮君兮願聽此。　君よ君よ願はくは此を聽け。
欲開壅蔽達人情。　壅蔽を開いて人情に達せんと欲せば、
先向歌詩求諷刺。　先づ歌詩に向つて諷刺を求めよ。

【題義】前代の帝王が國家を亂亡せしめた事に鑑み、采詩官を置いて民情を知る料とせられんことを希うた詩である。

【一〇】春官　禮を掌る官。
【一一】厲王　周代の暗君。胡亥は秦の二世皇帝。

【詩意】 昔周の代には民間から詩を采り集める官を置いて、民をして心に思ふ所を歌はしめるやうにした。そは言ふ者には何の罪もなく、聞く者は自分の戒とするに足るからである。かくして下の民情が上に通じて上下安泰になるのである。周が滅びて秦が興つてから隋に至る十代の間は采詩官を置かない。だから郊廟の祭に歌ふ詩はただ君德を讃美し、樂府で作る艷詞は君意を悦ばすのみで、諷刺諫誡の詩などは萬に一つもなかつた。詩歌に諷刺がないだけならばまだしもであるが、これでは朝廷に諷諫が絶えるやうになる恐れがある。卽ち諫官は口を杜いで冗員となり、諫鼓は懸けられてあつても虛器となり、上御一人は扆を背にして端然と默坐し、百官は宮門に入りて媚を呈し、黃門侍郞は君のありがたい御言葉を賀するに止り、禮官はいつも祥瑞を奏聞するのみになる。君主の堂は千里も遠く下民を離れ、君主の門は九重の奧に鎖され、君はただ堂上百官の諛言を聞くのみで、門外の世情は少しも知らないことになる。かくては貪吏は民を害して憚る所なく、奸臣は君を壅蔽して忌む所なくなるであらう。君も周の厲王や秦の胡亥の末年に奪臣が私利を貪つて、君は全く利を失つたことを御覽なされたで御座らう。ああ君よ君よ、我が下の言を聽き給へ。壅蔽を開き下情に通達せんと欲し給はば、先づ詩歌に就いて諷刺を求められるがよい。

【餘論】 此篇は新樂府五十篇の總結であるから、自家作詩の旨意を述べたのである。唐宋詩醇にも、「末章總結、言ふ者罪なく聞く者誡むの一語、作詩の旨を申明し、隱然として自ら三百篇の義に附くなり。諸篇全く杜甫の新安・石壕・垂老・無家等の作に做ひ、時事を諷刺し、婉にして風多し、其の杜に及ばざる者は只筆力の縱橫、格調の變化のみ」とある。

309
65

終

續國譯漢文大成

文學部 三十五

309
65

始

續國譯漢文大成

文學部第三十五册（第九帙の三）

白樂天詩集一の三

吉田律郎氏寄贈本

309
65

白樂天詩集 卷五

閑適一

古調詩　凡五十三首

閑適　一

常樂里閑居。偶題十六韻。兼寄劉十五公輿・王十一起・呂二炅・呂四熲・崔十八玄亮・元九稹・劉三十二敦質・張十五仲元。時爲校書郎。

常樂里の閑居、偶十六韻を題し、兼ねて劉十五公輿・王十一起・呂二炅・呂四熲・崔十八玄亮・元九稹、劉三十二敦質・張十五仲元に寄す。時に校書郎たり。

帝都名利場。雞鳴無安居。
　帝都名利の場、雞鳴いて安居する無し。

獨有嬾慢者。日高頭未梳。
　獨り嬾慢の者有り、日高くして頭未だ梳らず。

工拙性不同。進退迹遂殊。
　工拙性同じからず、進退迹遂に殊なり。

幸逢太平代。天子好文儒。　幸に太平の代に逢ひ、天子文儒を好む。
小才難大用。(七)典校在祕書。　小才大に用ひ難く、典校して祕書に在り。
三旬兩入省。因得養頑疎。　三旬兩び入省し、因つて頑疎を養ふを得たり。
(八)茅屋四五間。一馬二僕夫。　茅屋四五間、一馬二僕夫。
俸錢萬六千。月給亦有餘。　俸錢萬六千、月給りて亦餘有り。
既無衣食牽。亦少人事拘。　既に衣食の牽無く、亦人事の拘少し。
遂使少年心。日日常(九)晏如。　遂に少年の心をして、日日常に晏如たらしむ。
勿言無知己。(一〇)躁靜各有徒。　言ふ勿れ知己無しと、躁靜各徒有り。
(一一)蘭臺七八人。出處與之俱。　蘭臺七八人、出處之と俱にす。
旬時阻談笑。旦夕望(一二)軒車。　旬時談笑を阻つれば、旦夕軒車を望む。
誰能(一三)讐校間。解帶臥吾廬。　誰か能く讐校の間、帶を解いて吾が廬に臥せん。
窓前有竹翫。門外有酒沽。　窓前に竹の翫ぶべき有り、門外に酒の沽る有り。
何以待君子。(一四)數竿對一壺。　何を以てか君子を待たん、數竿一壺に對せん。

【字解】【一】常樂里　長安の市街の名。【二】劉十五公輿　劉公輿は人名。十五は其輩行。以下皆然り。【三】校書郎　官名。書籍を校勘することを掌る。白樂天は貞元十八年校書郎を授けられた。【四】雞鳴　夜の明けること。【五】嬾慢者　なまけもの。白樂天自ら謂ふ。【六】工拙　巧拙なり。【七】典校　圖書を校勘すること。祕書は祕書省。【八】四五間　一室を一間といふ。【九】晏如　安んずること。【一〇】躁靜　さわがしきと靜なると。【一一】蘭臺　祕書省をいふ。【一二】軒車　馬車。【一三】讐校　校勘なり。【一四】數竿　數本の竹。

【題義】白樂天が校書郎たりし時、常樂里の閑居に於て十六韻三十二句の詩を作つて其友に贈つたのである。

【詩意】帝都は名利の競爭場裏だから、夜が明けたら最後ぼんやりしてゐる者などはない。ただ一人の嬾者があつて、日が高くのぼるまで髮も梳づらずにゐる。萬事人なみはづれて拙劣だから、進退の迹も隨つてちがつてゐる。幸に太平の御代、學者を愛する天子に逢ふことを得たが、根が小才で重く用ひるほどの柄でないから、祕書省に於て書籍を校訂する役目を仰付けられた。三十日の中に二十日ほど祕書省に出勤し、頑疎の身を養ふことが出來る。四五間の茅屋を借り、一匹の馬と二人の召使を雇ひ、一萬六千錢の給料を貰ふから、生活には困らない。衣食に逐はれることもなく人事の屈託もないので、つひうかうかと少年時代を過してしまふ。元氣のよい友もあれば、しとやかな友もゐるから、知己なきを嘆ずる要もなく、七八人の同僚（題にある劉十五公輿以下の人人を指す）と相攜へて出入を俱にしてゐるが、十日も會談しないでゐると、待ち遠しくて朝晩來訪を望んでゐる。誰でもよいが

務の暇な時に吾が家に來て、帶でも解いてくつろぐ者はあるまいか。窓前には賞翫するに足る竹もあり門外には酒屋もあるから、別にたいした待遇もないが、數竿の竹を見ながら一壺の酒を酌むことは出來る。

答(一)元八宗簡同遊(二)曲江後明日見贈

元八宗簡が同じく曲江に遊んで後明日贈らるるに答ふ

長安千萬人。出門各有營。　長安千萬の人、門を出づれば各營み有り。

唯我與夫子。信馬悠悠行。　唯我と夫子と、馬に信せて悠悠として行く。

行到曲江頭。(三)反照草樹明。　行いて曲江の頭に到れば、反照草樹明かなり。

(四)南山好顏色。病客有心情。　南山顏色好く、病客心情有り。

水禽翻白羽。(五)風荷嫋翠莖。　水禽白羽を翻し、風荷翠莖を嫋ます。

何必(六)滄浪去。卽此可濯(七)纓。　何ぞ必ずしも滄浪に去らん、此に卽いて纓を濯ふ可し。

時景不重來。賞心難再幷。　時景重ねて來らず、賞心再び幷せ難し。

坐愁紅塵裏。夕鼓(八)鼕鼕聲。　坐に愁ふ紅塵の裏、夕鼓鼕鼕の聲あり。

歸來經一宿。世慮稍復生。　歸り來りて一宿を經、世慮稍復生す。

賴聞(九)瑤華唱。再得塵襟淸。　瑤華の唱を聞くに賴り、再び塵襟の淸きを得たり。

【字解】【一】元八宗簡　元宗簡は人名。八は輩行。【二】曲江　長安の遊園地の名。【三】反照　夕日に照らされる。【四】南山　長安の南に在る終南山。【五】風荷　風に吹かれる蓮。【六】滄浪　川の名。孟子に、「滄浪ノ水淸マバ以テ吾ガ纓ヲ濯フベシ」云云とある。【七】纓　冠の紐。【八】鼕鼕　太鼓の音。【九】瑤華唱　美しい詩。元宗簡の贈つた詩を指す。

【題義】元宗簡が俱に曲江に遊んだ翌日詩を贈つてよこしたので、其れに答へた詩である。

【詩意】長安の都の人人は足一たび我家の門を出れば皆名利に奔走してゐるが、ただ僕と君とは悠悠と馬に任せて遊行し、曲江の頭に行つた。折しも夕日に照されて草も樹も一層の光彩を放ち、終南山の景色もよく、病後の我も氣がはればれとした。近くには水禽が白い羽を翻し、風にゆられる蓮が翠の莖を搖がし、水は澄んでゐて、滄浪に往かずとも、ここで冠の紐を濯ふことが出來る。かかる好景は復と來らず、再び賞翫を俱にすることも難いのに、あたら夕暮を告げる太鼓の音が紅塵の間から響いて來た。割愛して歸り一晩過ぎると復心に俗念が湧いて來たが、君の美しい詩を讀んで再び心が淸らかになつた。

感時　時に感ず

朝見日上天。暮見日入地。　朝に見れば日天に上り、暮に見れば日地に入る。

不覺明鏡中。忽年三十四。　覺えず明鏡の中、忽ち年三十四となる。

勿言身未老。冉冉行將至。　言ふ勿れ身未だ老いずと。冉冉として行くゆく將に至らんとす。

白髪雖未生。朱顏已先悴。　白髪未だ生せずと雖も、朱顏已に先づ悴ふ。

人生詎幾何。在世猶如寄。　人生詎ぞ幾何、世に在ること猶は寄の如し。

雖有七十期。十人無一二。　七十の期有りと雖も、十人に一二無し。

今我猶未悟。往往不適意。　今我猶ほ未だ悟らず、往往意に適せず。

胡爲方寸間。不貯浩然氣。　胡爲ぞ方寸の間、浩然の氣を貯へざる。

貧賤非不惡。道在何足避。　貧賤は惡まざるに非ず、道在らば何ぞ避くるに足らん。

富貴非不愛。時來當自至。　富貴は愛せざるに非ず、時來らば當に自ら至るべし。

所以達人心。外物不能累。　所以に達人の心は、外物累はす能はず。

唯當飲美酒。終日陶陶醉。　唯當に美酒を飲み、終日陶陶として醉ふべし。

斯言勝金玉。佩服無失墜。　斯言は金玉に勝れり、佩服して失墜すること無かれ。

【字解】【一】冉冉　漸に進む貌。【二】朱顏　紅顏なり。【三】方寸　心をいふ。【四】浩然氣　盛大流行の氣。【五】陶陶　醉ふ貌。

【題義】歳月の移り易きに感じて作つた詩である。

【詩意】朝見れば日は天に上つてゐるが、暮には地に沒してしまふ。歳月の移るのは早いもので、我もいつしか三十四歳の齢を重ね、鏡を見て自分ながら老けたのに驚いた。未だ老いないなどと言つてはゐられぬ、忽ちのうちに老がやつて來る。現にまだ白髪は生えぬが、紅顏は遠の昔に衰へてしまつた。人生はまるで一夜泊の客のやうなもので、人生七十などといふが、七十まで生きる者は十人に一二人ともない。然るに自分はまだ此理を悟らず、適意快心を務めない。どうして心に浩然の氣を貯へないであらうか。貧賤を嫌はぬのではないが、道にさへ叶つてゐたら貧賤も避けるには足らない。富貴を願はぬのではないが、時節が到來したら自然に富貴になるであらう。達人の心は外物の爲に累はされることはない。ただ美酒を飲んで終日陶然として醉うてゐるがよいのだ。我が此言は金玉にまさる至言であるから、服膺して忘れぬやうにするがよい。

首夏同諸校正遊開元觀。因宿翫月

首夏諸校正と同じく開元觀に遊び、因つて宿して月を翫ぶ

我與二三子。策名在京師。　我二三子と、策名して京師に在り。
官小無職事。閑於爲客時。　官小にして職事無く、閑に客たる時に於いて、
沈沈道觀中。心賞期在茲。　沈沈たる道觀の中、心賞期すること茲に在り。
到門車馬廻。入院巾杖隨。　門に到りて車馬廻り、院に入りて巾杖隨ふ。
清和四月初。樹木正華滋。　清和四月の初、樹木正に華滋し。
風清新葉影。鳥戀殘花枝。　風は清し新葉の影、鳥は戀ふ殘花の枝。
向夕天又晴。東南餘霞披。　夕に向んとして天又晴れ、東南餘霞披く。
置酒西廊下。待月盃行遲。　酒を西廊の下に置き、月を待つて盃を行ること遲し。
須臾金魄生。若與吾徒期。　須臾にして金魄生じ、吾が徒と期するが若し。
光華一照耀。殿角相參差。　光華一び照耀して、殿角相參差たり。
終夜清景前。笑歌不知疲。　終夜清景の前、笑歌して疲るるを知らず。
長安名利地。此興幾人知。　長安名利の地、此興幾人か知る。

【字解】【一】首夏　初夏、陰曆四月。【二】校正　校書郎。【三】開元觀　道觀（道敎の寺）の名。【四】二三子　題の諸校正を指して言ふ。【五】策名　仕官すること。【六】沈沈　宮室深邃の貌。【七】清和　四月の稱。【八】金魄　月なり。【九】參差　高低一ならざること。

【題義】夏の初に校書郎たる僚友諸子と相攜へて開元觀に遊び、遂に一泊して月を賞して作つた詩である。

【詩意】我と諸君とは都に住んで仕官してゐるが、小官であるから此れといふ職責もないので、道觀の中に客となり倶に靜閑を樂まうと心に期した。先づ道觀の入口で馬車を還し、巾杖を持つて奧庭にはひつた。四月の初であるから樹木は正に花を著け、風は新葉を吹きうごかし、鳥は殘花を慕つて啼いてゐる。夕方になつて天が更に晴れて東南にかけて夕靄が霽れた。因つて西廊の下に宴席を設け、月を待ちつつ獻酬を始めた。間もなく月が出て吾等と樂を倶にするものの如く、清光を放ちて殿角の間に徘徊してゐる。因つて吾等は終夜笑歌して疲るるをも知らずに月光を賞した。さて長安の都人は名利の奴となつて奔走してゐる。吾等の清興を解する者が果して幾人あるであらうか。

（一）永崇里観居

（二）季夏中氣候。煩暑自此收。
（三）蕭颯風雨天。（四）蟬聲暮啾啾。
永崇里巷靜。（五）華陽観院幽。
（六）軒車不到處。滿地槐花秋。
年光忽（七）冉冉。世事本（八）悠悠。
何必待衰老。然後悟浮休。
眞隱豈長遠。至道在（九）冥搜。
身雖世間住。心與虛無遊。
朝飢有（一〇）蔬食。夜寒有布裘。
幸免凍與餒。此外復何求。
寡慾雖少病。樂天心不憂。
何以明吾志。（一一）周易在床頭。

永崇里の観居

季夏中氣の候、煩暑此より收まる。
蕭颯たる風雨の天、蟬聲暮に啾啾たり。
永崇里巷靜に、華陽観院幽なり。
軒車到らざる處、滿地槐花の秋。
年光忽ち冉冉、世事本悠悠。
何ぞ必ずしも衰老を待ちて、然る後に浮休を悟らん。
眞隱は豈に長遠ならんや、至道は冥搜に在り。
身は世間に住むと雖も、心は虛無と遊ぶ。
朝飢蔬食有り、夜寒布裘有り。
幸に凍と餒とを免る、此の外復何をか求めん。
慾寡くして少しく病むと雖も、天を樂みて心憂へず。
何を以てか吾が志を明さん、周易床頭に在り。

【字解】【一】永崇里　長安の市街の名。観居は道観の中に居ること。【二】季夏　夏の末。中氣とは二十四氣を十二月に分配し、當月の首を節氣といひ、當月の中を中氣といふ。中旬といふが如し。【三】蕭颯　秋風の吹く貌。【四】啾啾　蟬の聲。【五】華陽　道観の名。観院は道観の庭。【六】軒車　馬車なり。【七】冉冉　年月の進む貌。【八】悠悠　遙なる貌。【九】冥搜　目を閉ぢて思索すること。【一〇】蔬食　菜食。【一一】周易　易經。吉凶禍福を卜ふ書。

【題義】永崇里の華陽観に住み、名利の外に超然として心を澄ましむることを述べた。

【詩意】今や季夏の半で暑さも收まり、雨風が淋しく降つて蟬が啾啾と鳴き、永崇里の華陽観の庭は至つて閑靜で、來り訪ふ者もなく、一面に槐の花が咲いてゐる。年月は容赦なく移り、世事は悠悠として限りがない。衰老して後始めて退休を計るが如きは策の得たものではないから、宜しく冥搜して至道を悟り早く眞隱の計を立つべきである。されば吾身は俗界に碌碌としてゐるが心は虛無の道に遊び、飢ゑては蔬食を食ひ寒えては布裘を襲ね、凍餒を免れては外には何も求むる所はない。慾が薄いから少しぐらゐ病氣になつても天命に安んじて格別心配もせず、日夜周易を讀んで安心立命の修養を積んでゐる。

早送擧人入試

夙駕送（一二）擧人。東方猶未明。

早に擧人の試に入るを送る

夙に駕して擧人を送れば、東方猶は未だ明けず。

自謂出太早。已有車馬行。 自ら謂へらく出づること太だ早しと、已に車馬の行有り。
騎火高低影。街鼓(二)參差聲。 騎火高低の影、街鼓參差の聲。
(三)可憐早朝者。相看意氣生。 憐む可し早く朝する者、相看て意氣生ず。
日出塵埃飛。羣動互(四)營營。 日出でて塵埃飛び、羣動いて互に營營。
營營各何求。無非利與名。 營營として各何をか求むる、利と名とに非ざる無からんや。
而我常(五)晏起。虛住長安城。 而るに我常に晏起し、虛しく長安城に住す。
春深官又滿。日有歸山情。 春深うして官又滿つ、日に歸山の情有り。

【字解】【一】舉人 州縣より舉げられ進士の試驗を受ける人。【二】參差 遠近に聞えること。【三】可憐 あつぱれといふが如し。【四】營營 鬧躁すること。【五】晏起 おそく起きる。朝寢すること。

【題義】朝早く擧人の尙書省に入り試驗に應ずるを送つて作つたのである。

【詩意】朝早く馬車に乘つて擧人を送つた、時に夜がまだ明けなかつた。自分ではあまり早過ぎはせぬかと思つたが、來て見るともう馬車がいくらも走つてゐる。騎士の持つ炬火の光は或は高く或は低く、夜明けを告げる鼓の音はあちこちに響きわたる。朝早く試驗場に詰めかける健氣な人達は互に顏を見合せて、意氣揚揚として得意の色がある。夜が明け日が出ると塵埃が東西に飛散し、人皆營營として奔走してゐる。何の爲に奔走するかといへば、ただ名利を求める爲である。所が自分は常に朝寢をして獨りぼんやりとして求むる所もなく長安の都に住んでゐる。おまけに、今や春も深け我が官職の任期も滿ちたので、毎日山中にでも歸臥したいものだと願つてゐる。

招王質夫 自此後詩、爲盩厔尉時作　王質夫を招く

濯足雲水(一)客。折(二)腰簪笏身。 足を濯ぐ雲水の客、腰を折る簪笏の身。
(三)諠閑跡相背。十里別經旬。 諠閑跡相背き、十里別れて旬を經。
忽因乘(四)逸興。莫惜訪囂塵。 忽ち逸興に乘ずるに因り、囂塵を訪ふを惜む莫かれ。
窓前故栽竹。與君爲主人。 窓前に故に竹を栽ゑ、君が與に主人と爲す。

【字解】【一】雲水客 行雲流水を友とする人。王質夫を指す。雲水は僧侶をいふ時もある。【二】折腰 陶淵明の語に本づく。簪笏は頭にカンザシを挿み手にシヤクを持つことで、官職を奉ずること。【三】諠閑 靜躁といふが如し。【四】逸興 たのしみ。

【題義】王質夫を招請する詩である。白樂天が盩厔縣の尉といふ官職を奉じてゐた時の作である。

【詩意】君は俗界を離れて雲水を侶とする身であり、余は上官の前に腰を折つてぺこぺこする官吏である。君は閑、余は躁、各境地を異にし、且つ十里の遠さに住んで既に久しきを經た。併し遊興一た

び動いたならば余が塵俗の地を訪ふことを厭ひなさるな。窓の前には故に竹を栽ゑ、君をもてなす主人として、君の來り訪ふのを待つてゐるから。

祇役駱口(一)因與王質夫同遊秋山偶題三韻

駱口に祇役し、因つて王質夫と同じく秋山に遊び、偶三韻を題す

石擁百泉合。雲破千峰開。　石擁して百泉合し、雲破れて千峰開く。
平生煙霞侶。此地重徘徊。　平生煙霞の侶、此地重ねて徘徊す。
今日勤(二)王意。一半爲山來。　今日勤王の意、一半は山の爲に來る。

【字解】【一】駱口　驛の名。【二】勤王　王事に勤むること。

【題義】職事の爲に駱口驛に往き、その序に王質夫と秋山に遊び、六句の詩を作つたといふ意。

【詩意】下には石が百泉の流を圍んで大きな淵をなし、上には雲が霽れて數多の山峰が聳え、誠によい景色である。わが煙霞の侶たる王質夫と連れ立つて再び此地に遊んだ。實は今日王事(官職の事務)を果す爲に此地に來たのも、其一半は此山に遊びたいが爲である。

見蕭侍御憶舊山草堂詩因以繼和

蕭侍御が舊山の草堂を憶ふ詩を見、因つて以て繼ぎ和す

琢玉以爲架。綴珠以爲籠。　玉を琢ちて以て架と爲し、珠を綴りて以て籠と爲す。
玉架絆野鶴。珠籠鎖冥(一)鴻。　玉架に野鶴を絆ぎ、珠籠に冥鴻を鎖す。
鴻思雲外天。鶴憶松上風。　鴻は雲外の天を思ひ、鶴は松上の風を憶ふ。
珠玉信爲美。鳥不戀其中。　珠玉信に美と爲せども、鳥は其中を戀はず。
(二)臺中蕭侍御。心與鴻鶴同。　臺中の蕭侍御、心鴻鶴と同じ。
晩起慵冠(三)豸。閑行厭避驄。　晩起して豸を冠するに慵く、閑行して驄を避くるを厭ふ。
昨見憶山詩。詩思浩無窮。　昨山を憶ふ詩を見るに、詩思浩として窮り無し。
歸夢杳何處。舊居洛水東。　歸夢杳として何れの處ぞ、舊居洛水の東。
秋閑杉桂林。春老芝(四)朮叢。　秋は閑なり杉桂の林、春は老ゆ芝朮の叢。
自云別山後。離(五)抱常忡忡。　自ら云ふ山に別れし後、離抱常に忡忡たり。
衣繡非不榮。持(六)憲非不雄。　繡を衣るは榮ならざるに非ず、憲を持するは雄ならざるに非ず。

所樂不在此。悵望草堂空。　樂む所此に在らず、草堂の空を悵望すと。

【字解】【一】冥鴻　天上を飛ぶ雁。【二】臺中　臺は御史臺、役所の名。【三】冠豸　豸の尾の飾りのついた冠をかぶる。【四】芝朮　靈草の名。【五】離抱　遠く離れてゐる悲。【六】持憲　御史の官に在りて法憲を操ること。

【題義】蕭侍御が舊山の草堂を憶うて作つた詩を見て、それに唱和したのである。

【詩意】玉を琢つて架となし、之に野鶴を絆ぎ、珠を綴つて籠となし、之に鴻雁を入れて置かうとしても、鴻雁は天上の雲を慕ひ、野鶴は松上の風を慕つて安んじてゐない。珠玉はたとひ美なりとも鳥は決して其れを慕はないのである。蕭侍御も身は御史臺に居るものの心は鴻鶴と同じで、朝おそく起きでは衣冠をまとふに懶く、閑行を好んでは馬を避くるの煩を厭うてゐる。因つて先頃舊山の草堂を憶ふ詩を作つたが、詩思の限りなく深い巧みな詩であつた。さて其草堂は何處に在るかといふに、洛水の東に在つて、秋は杉桂が物靜に聳え立ち、春老くれば芝朮が叢をなし、全く俗塵を離れた處である。さればこそ蕭侍御は、「あの山に別れてからは常に離愁に惱まされてゐる。錦繡を身にまとふは光榮であり、法憲を持するは豪勢であるが、自分の樂は榮權を求むるに在るのではないから、いつも草堂の空を悵望してゐる」と言つてゐる。

病假中。南亭閑望　　病假の中、南亭の閑望

欹枕不視事。兩日門掩關。　枕を欹てて事を視ず、兩日門關を掩ふ。

始知吏役身。不病不得閑。　始めて知る吏身を役し、病まざれば閑を得ざるを。

閑意不在遠。小亭方丈間。　閑意遠きに在らず、小亭方丈の間。

西簷竹梢上。坐見太白山。　西簷竹梢の上、坐して見る太白山。

遙媿峯上雲。對此塵中顏。　遙に媿づ峯上の雲、此塵中の顏に對するを。

【字解】【一】病假　病氣の爲に閑暇を得ること。假は暇に通ず。【二】關　門のくわんぬき。【三】方丈　一丈四方の小室。【四】太白山　山の名。

【題義】病氣に因つて閑暇を得、南亭に坐して四方を眺望したといふ詩である。

【詩意】病床に臥して仕事を抛擲し、この二日間は門を閉ぢて往來を絶つてゐる。官吏になると常に勞役に服してゐなければならないから、病氣にでもならなければ閑暇は得られない。さて閑意を樂むには遠方に行くには及ばない。方丈の小亭に閉居してゐて事足るのである。西の簷の竹の梢の上に太白山を見ると、峰の上に無心の雲が悠悠と飛んでゐるが、あの雲が塵世に齷齪してゐる我が顏を見てゐるかと思ふと、何となく媿づかしい。

【餘論】唐宋詩醇に此詩を評して、「神韻酷だ淵明に似たり。西蒼の二句、亦採菊東籬下の語意を摹す」とある。實に適評である。

仙遊寺獨宿

沙鶴上階立。潭(一)月當戸開。
此中留我宿。兩夜不能廻。
幸與靜境遇。喜無歸侶催。
從今獨遊後。不擬共人來。

仙遊寺獨宿

沙鶴階に上りて立ち、潭月戸に當りて開く。
此中我を留めて宿せしめ、兩夜廻る能はず。
幸に靜境と遇ひ、喜ぶ歸侶の催す無きを。
今獨遊してより後、人と共に來ることを擬せず。

【字解】【一】潭月　ふちに影をうつす月。

【題義】獨り仙遊寺に遊んで遂に寺に宿したといふ詩である。

【詩意】此寺の境内には大きな池があつて、その積を見ると、鶴が階上に立つてゐる。又戸口を見ると、月が影を潭にうつしてゐる。實に一點の俗氣をも留めないよい景色である。この景色が遂に我を引留めて宿せしめ、返らうとも思はず既に二晩を過し、心が靜境とよく遇つて、歸りを促す友もないのが殊にうれしい。此處に獨遊を試みてからは、何處へ往くにも人と一緒に往かうとは思はないやうになつた。

前(一)庭涼夜

露(二)簟色似玉。風(三)幌影如波。
坐愁樹葉落。中庭明月多。

前庭の涼夜

露簟色玉に似たり、風幌影波の如し。
坐に愁ふ樹葉落ち、中庭明月多きを。

【字解】【一】前庭　庭、一に亭に作る。【二】露簟　露のおりてゐるタカムシロ。簟は竹を編んで作つた席。【三】風幌　風のよくあたる帷幌。

【題義】庭上秋夜の情景を述べた詩である。

【詩意】露の降りてゐる簟は玉のやうに青く、風のよくあたる帷は波のやうに動き、樹の葉はちらちらと落ち、庭上には明月が隈なく照してゐる。どこを見ても早や秋の色ならぬはない。之を見て坐に歳月の移り易きを愁へた。

官舍小亭閑望

風竹散清(一)韻。煙槐凝綠姿。

官舍小亭の閑望

風竹清韻を散じ、煙槐綠姿を凝す。

日高人吏去。閑坐在茅茨。　日高うして人吏去り、閑坐茅茨に在り。
葛衣禦時暑。蔬飯療朝飢。　葛衣時暑を禦ぎ、蔬飯朝飢を療す。
持此聊自足。心力少營爲。　此を持して聊か自ら足る、心力營爲少し。
亭上獨吟罷。眼前無事時。　亭上獨吟罷む、眼前無事の時。
數峯太白雪。一卷陶潛詩。　數峯太白の雪、一卷陶潛の詩。
人心各自是。我是良在茲。　人心各自に是とす、我是良に茲に在り。
廻謝爭名客。甘從君所嗤。　廻つて謝す名を爭ふ客、甘んじて君の嗤ふ所に從す

【字解】【一】清韻　清き響。【二】茅茨　茅葺き屋根の家。【三】蔬飯　粗飯なり。【四】太白　山の名。【五】陶潛　晉の陶淵明【六】廻謝　余の爲に言ふといふ意。

【題義】官舍の小亭に閑坐して四方を眺望した詩である。

【詩意】風に吹かれる竹の聲、煙たなびく槐の姿が、我が耳目を娯ましめる時、日高くのぼつて吏民も既に去り、我獨り茅屋に閑坐してゐる。葛衣をまとうて暑さを凌ぎ、粗飯をたべて飢を療し、此を以て自ら滿足し、心力を勞して齷齪しない。詩を吟じ罷め爲す事もなければ、仰いでは太白峯上の雪を望み、俯して陶淵明の詩卷を繙いてゐる。人にはそれぞれ自ら好む所があるものであるが、我はかかる生活を好む者である。世の名利を爭ふ人は、我が生活を見て嘲り笑ふであらうが、それは勝手にお笑ひなさるがよい。

早秋獨夜

早秋獨夜

井梧涼葉動。鄰杵秋聲發。　井梧涼葉動き、鄰杵秋聲發る。
獨向簷下眠。覺來半牀月。　獨り簷下に向つて眠り、覺め來れば半牀の月。

【字解】【一】井梧　井戸の傍に在るアヲギリ、涼葉は秋風に吹かれる葉。【二】鄰杵　近所から聞える砧の音。【三】半牀月　寢臺に半さしこむ月光。

【題義】初秋の夜に獨り閑居する情味を述べた詩である。

【詩意】井戸の傍の涼風に動く梧桐の葉も、近所から聞えて來る砧の音も、何處とはなしに秋の風味を帶びてゐる。我獨り簷先に眠り、目が覺めて見たら、中天の明月が我が寢臺の半面に其影を投げてゐた。

聽彈古淥水
古淥水を彈ずるを聽く

聞君古淥水。使我心和平。　聞く君が古淥水、我が心をして和平ならしむと。
欲識慢流意。爲聽疎汎聲。　慢流の意を識らんと欲し、疎汎の聲を聽くことを爲す。
西窓竹陰下。竟日有餘淸。　西窓竹陰の下、竟日餘淸有り。

【字解】【一】古淥水　琴曲の名。【二】慢流　のびのびとしてゐる情調。【三】疎汎　古雅な調子。【四】竟日　終日に同じ。

【題義】古淥水の曲を彈ずるを聽いて作つた詩である。

【詩意】君が古淥水の曲を聽けば、我が心をして和平ならしめるであらうと聞き、そののびのびとした情調を味はうと思つて古雅な調子を聽いた所が、成る程、聞きしにまさる妙趣があつて、西窓の竹陰に終日淸らかな餘韻が漂つてゐる。

松齋自題　時爲翰林學士
松齋に自ら題す　時に翰林學士たり

非老亦非少。年過三紀餘。　老いたるに非ず亦少きに非ず、年三紀の餘を過ぐ。
非賤亦非貴。朝登一命初。　賤しきに非ず亦貴きに非ず、朝に登る一命の初。
才小分易足。心寛體長舒。　才小にして分足り易く、心寛にして體長に舒ぶ。
充腸皆美食。容膝卽安居。　腸に充つるは皆美食、膝を容れては卽ち安居。
況此松齋下。一琴數帙書。　況んや此の松齋の下、一琴數帙の書、
書不求甚解。琴聊以自娛。　書は甚解を求めず、琴は聊か以て自ら娛しむ。
夜直入君門。晚歸臥吾廬。　夜直して君門に入り、晚に歸りて吾が廬に臥す。
形骸委順動。方寸付空虛。　形骸順動に委し、方寸空虛に付す。
持此將過日。自然多晏如。　此を持して將て日を過せば、自然にして晏如多し。
昏昏復默默。非智亦非愚。　昏昏復默默、智に非ず亦愚に非ず。

【字解】【一】三紀　十二年を一紀といふ。【二】一命　始めて命ぜられて正吏となること。【三】甚解　微細に理解すること。【四】夜直　役所に宿直する。【五】方寸　心をいふ。【六】晏如　安樂なこと。

【題義】松齋は樂天の書齋の名。自ら其書齋に題した詩である、この時樂天は翰林學士の官（制誥を起草することを掌る）に就いてゐた。

【詩意】今や吾が年は三十六歲を過ぎ、老いたといふ程でもなく又少いといふ程でもない。既に朝官に任ぜられて、賤しいといふのでもなく亦貴いといふ程でもない。いつも才分に安んじてゐるから、

心も體ものびのびとして、何を食つても旨く、何處に住んでも安泰である。況んや此松齋の中に琴書を侶とし、書を讀んでは敢て甚解を求めず、琴を彈じては獨り自ら娛んでゐるのであるから、益〻以て呑氣である。或は御所に宿直したり、或は吾が廬に安臥したりして、自然の理に順應して起居し、虛心平氣で苦勞などはしない。かくの如く無事安泰に日を送り、智者ともいへず愚者ともいへず、ただ昏昏默默としてゐる。

冬夜與錢員外同直禁中　　冬夜錢員外と同じく禁中に直す

夜深草詔罷。霜月凄凜凜。　夜深けて詔を草し罷み、霜月凄として凜凜たり。
欲臥煖殘盃。燈前相對飮。　臥せんと欲して殘盃を煖め、燈前に相對して飮む。
連鋪靑縑被。對置通中枕。　連ね鋪く靑縑の被、對べ置く通中の枕。
髣髴百餘宵。與君同此寢。　髣髴たり百餘の宵、君と此寢を同じうす。

【字解】【一】靑縑被　靑い絹の夜具。漢官儀に、「尙書郞入直スレバ中官靑縑白綾被通中枕ヲ供ス」とある。

【題義】冬夜錢員外（員外は官名）と禁裏に宿直したことを述べた詩である。

【詩意】夜更けて詔を草し終れば、寒月が物凄きまで冴えわたつてゐた。寢に就く前に殘りの酒を煖めて燈前に酌みかはし、靑縑被を敷き通中枕を竝べて、君と同じく宮中に宿直し、夢の間に早や百餘の宵を送つた。

和錢員外禁中夙興見示　　錢員外の禁中夙に興き示さるるに和す

窗白星漢(一)曙。窗暖燈火餘。　窗は白し星漢の曙、窗は暖なり燈火の餘。
坐卷朱裏幕。看封紫泥(二)書。　坐ながら朱裏の幕を卷き、紫泥の書を封ずるを看る。
(三)窅窅鐘漏盡。(四)曈曈霞景初。　窅窅として鐘漏盡く、曈曈たる霞景の初。
樓臺紅照耀。松竹靑扶疎(五)。　樓臺紅照耀し、松竹靑扶疎たり。
君愛此時好。廻頭特謂余。　君此時の好きを愛し、頭を廻らして特に余に謂ふ。
不知上(六)清界。曉景復何如。　知らず上淸界、曉景復何如と。

【字解】【一】星漢　星や、あまのがは。【二】紫泥　印泥なり。天子の詔は紫泥を以て封ずるのである。【三】窅窅　深遠の貌。鐘漏は時を告げる鐘及び水時計。【四】曈曈　日の出る貌。【五】扶疎　草木の茂る貌。【六】上淸　道家三淸の一、天仙の居る所の宮。ここは白樂天の奉仕してゐる至尊の御座所を指す。

【題義】錢員外が宮中に宿直して朝早く起き、宮中の曉景を見て作つた詩を白樂天に見せたので、

樂天がそれに和して作つたのである。

【詩意】夜が明けて窗の外はほのぼのと白くなり、窗の中は燈火がまだ點ぜられて暖である。君は赤色の裏のついた幕を卷きあげ、余の詔書を封ずるを看る。時正に鐘漏の聲もやんで、東方彩雲の間から旭がのぼり、樓臺のあたりに紅の光が照りはえ、松や竹が青青と茂つてゐる。君は此時の好景を愛し、頭を廻らして余に謂ふ、「至尊の御座所のあたりの曉景は又一入で御座らう」と。

夏日獨直寄蕭侍御

夏日獨り直し蕭侍御に寄す

(一)憲臺文法地。(二)翰林清切司。
憲臺文法の地、翰林清切の司。

(三)鷹猜課野鶴。(四)驥德責山麋。
鷹猜野鶴に課し、驥德山麋に責む。

課責雖不同。同歸非所宜。
課責同じからずと雖も、同じく宜しき所に非るに歸す。

是以(五)方寸內。(六)忽忽暗相思。
是を以て方寸の內、忽忽として暗に相思ふ。

夏日獨上直。日長何所爲。
夏日獨り直に上り、日長くして何の爲す所ぞ。

澹然無他念。虛靜是吾師。
澹然として他念無し、虛靜は是吾が師。

形委有事牽。心與無事期。
形は有事に委して牽かるるも、心は無事と期す。

(七)中臆一以曠。(八)外累都若遺。
中臆一に以て曠く、外累都べて遺るるが若し。

地貴身不覺。意閑境來隨。
地貴くして身覺えず、意閑にして境來り隨ふ。

但對松與竹。如在山中時。
但だ松と竹とに對し、山中に在る時の如し。

情性聊自適。吟詠偶成詩。
情性聊か自ら適し、吟詠偶　詩を成す。

此意非(九)夫子。餘人多不知。
此意夫子に非ずんば、餘人多くは知らず。

【字解】【一】憲臺　御史臺。侍御史の役所。刑獄の事を掌る。文法は法刑なり。【二】翰林　翰林院。時に白樂天は翰林學士で詔を草することを掌る。【三】鷹猜　鷹が鳥を狙ふこと。御史の職に喩ふ。【四】驥德　駿馬の功德。翰林の職に喩ふ。【五】方寸　心をいふ。【六】忽忽　失意の貌。【七】中臆　心中。【八】外累　外界の煩累。【九】夫子　蕭侍御を指す。

【題義】夏日に獨り宮中に宿直し、蕭侍御に寄贈した詩である。

【詩意】君の務めてゐる御史臺は法刑の事を掌る處で、余の務めてゐる翰林院は清切の司である。鷹の如き威嚴を野鶴（蕭侍御に比す）に求め、駿馬の功德を山麋（白樂天自ら比す）に求めるのは、たとひ求むる所のものは違つても、宜しきを得ざることは同じである。されば常に心の中に忽忽として憂へてゐる。さて余は夏日獨り禁中に宿直し、何をして長き日を送つてゐるかといふに、心を虛

靜にして慾念を起さぬやうにし、身は事に牽かるるとも心は無事ならんことを期し、心を曠くし累を逃れようと務めてゐる。故に地位の高いことなどは自ら知らず、意が閑であるから外境も隨つて靜で、松や竹に對してゐると、山中にゐると同じ感じがする。この境地が大に吾が意に適ひ、因つて此詩を作つた。吾が眞意は君でなければ他に解してくれる者はないから、敢て此詩を君に寄せる。

松聲

月好好獨坐。雙松在前軒。
西南微風來。潛入枝葉間。
(一)蕭寥發爲聲。半夜明月前。
寒山颯颯雨。秋琴(二)冷冷絃。
一聞滌炎暑。再聽破(三)昏煩。
(四)竟夕遂不寐。心體俱(五)翛然。
(六)南陌車馬動。西鄰歌吹繁。
誰知茲簷下。滿耳不爲喧。

松聲

月好くして獨坐に好し、雙松前軒に在り。
西南より微風來り、潛に枝葉の間に入る。
蕭寥發して聲を爲す、半夜明月の前。
寒山颯颯の雨、秋琴冷冷の絃。
一聞炎暑を滌ひ、再聽昏煩を破る。
竟夕遂に寐ねず、心體俱に翛然。
南陌車馬動き、西鄰歌吹繁し。
誰か知らん茲簷下、滿耳喧を爲さざるを。

【字解】(一)蕭寥　松風の聲。(二)冷冷　琴の聲。(三)昏煩　心の煩悶。(四)竟夕　終夜。(五)翛然　さつぱりすること。(六)南陌　南街。

【題義】自註に「修竹里、張家宅、南亭の作」とある。そこに坐して松聲を聞いたことを述べた詩である。

【詩意】明月に照されて獨り坐し、軒前の二株の松に對すれば、微風が吹いて來て枝葉の間に入り込み、半夜にそよそよと松風の音を立て、或は寒山に颯颯として雨の濺ぐが如く、或は秋夜に冷冷として琴を彈ずるが如くである。一たび此音を聞けば炎暑も洗ひ去られ、再び聽けば煩悶も一掃されてしまふ。終夜聞き惚れて眠る能はず、身も心もうつとりとしてしまつた。あたり近所には車馬の物音がしたり、歌吹の聲がしたりしてゐるが、此簷の下に居れば少しも喧噪を感じない。

禁中

門嚴九(一)重靜。窓幽一室閑。
好是修心處。何必在深山。

禁中

門嚴にして九重靜に、窓幽にして一室閑なり。
好し是れ心を修する處、何ぞ必ずしも深山に在らん。

【字解】【一】九重　禁裏の門は九重になつてゐる。

【題義】禁裏に居る時の感想を述べた詩である。

【詩意】九重の御門が嚴めしく靜に建てられ、その中に幽閑な室がある。ここは心を修練するに恰好な處で、必ずしも深山に入るを要しない。

贈吳丹

巧者力苦勞(一)。智者心苦憂(二)。
愛君無巧智。終歲閑悠悠。
嘗登御史(三)府。亦佐東諸侯。
手操紏謬(四)簡。心運決勝籌。
宦途似風水。君心如虛舟。
汎然(五)而不有。進退得自由。
今來脫豸冠(六)。時往侍龍樓(七)。
官曹稱心靜。居處隨跡幽。
冬負南簷日。支體(八)甚溫柔。
夏臥北窓風。枕席如涼秋。
南山(九)入舍下。酒甕在牀頭。
人間(一〇)有閑地。何必隱林丘。
顧我愚且昧。勞生殊未休。
一入金門(一一)直。星霜三四周。
主恩信難報。近地徒久留。
終當乞閒官(一二)。退與夫子(一三)遊。

吳丹に贈る

巧者は力苦勞し、智者は心苦憂す。
愛す君が巧智無く、終歲閑にして悠悠たるを。
嘗て御史の府に登り、亦東諸侯に佐たり。
手に紏謬の簡を操り、心に決勝の籌を運らす。
宦途は風水に似たり、君が心は虛舟の如し。
汎然として有せず、進退自由を得たり。
今來豸冠を脫し、時に往いて龍樓に侍す。
官曹は心に稱うて靜に、居處は跡に隨つて幽なり。
冬は南簷の日を負ひ、支體甚だ溫柔なり。
夏は北窓の風に臥し、枕席涼秋の如し。
南山舍下に入り、酒甕牀頭に在り。
人間に閑地有り、何ぞ必ずしも林丘に隱れん。
顧ふ我愚にして且つ昧く、生を勞して殊に未だ休まず。
一たび金門の直に入り、星霜三四周。
主恩信に報じ難く、近地徒に久しく留まる。
終に當に閒官を乞ひ、退いて夫子と遊ぶべし。

【字解】【一】苦勞　一に若勞に作る。【二】苦憂　一に若憂に作る。【三】御史　刑獄の事を掌る官。【四】紏謬　人の過誤を糾彈すること。簡は竹札なり。【五】汎然　一所に拘泥しないこと。【六】豸冠　貂の尾を飾に附けてある冠。【七】龍樓　天子の宮殿。【八】支體　身體。支は肢に同じ。【九】南山　長安の南に在る終南山。【一〇】人間　世間。【一一】金門　金馬門。翰林院の在る處。【一二】閒官　ひまな官職。【一三】夫子　吳丹を指す。

【題義】友人吳丹に贈つた詩である。

【詩意】　巧者は力を勞し智者は心を勞するが、君などは巧智を弄しないから、隨つて心力を勞することもなく、いつも悠悠としてゐる。嘗ては御史となつて人の過罪を糾彈する文書を操り、東方諸侯の補佐役となつて、決勝の謀を運らしたこともあり、官途は風水の如く危いが君の心は常に虛舟を泛べたやうに穩で、少しもこだはりがなく、進むも退くも自由であつた。近來は官職を辭したが折折陛下に侍することもある。今の務は心に稱つて靜に、居る處も幽閑であつて、冬は南簷の日光を背に受けて、體の溫柔を覺え、夏は北窓の風に臥して、枕席が秋のやうに涼しく、終南山は軒の下に見え、酒甕は牀頭に在り、まるで奧山にでも隱遁したやうである。飜つて顧ふに余は愚昧で、日夜生活の爲に齷齪として休息する暇もなく、一たび翰林學士となつて、最早三四年になるが、主恩に報ゆることも出來ずに徒に側近に侍して留滯してゐる。そのうちに閒官を乞うて引退し、君と共に悠悠自適したいものである。

初除戸曹喜而言志
初めて戸曹に除せられ喜んで志を言ふ

詔授戸曹掾。捧詔感君恩。
詔して戸曹の掾を授けられ、詔を捧げて君恩に感ず。

感恩非為己。祿養及吾親。
恩に感ずるは己が爲に非ず、祿養吾が親に及ぶ。

弟兄倶簪(二)笏。新婦儼衣巾。
弟兄簪笏を倶にし、新婦衣巾を儼にす。

羅列高堂下。拜慶正紛(三)紛。
高堂の下に羅列して、拜慶正に紛紛たり。

俸錢四五萬。月可奉晨(四)昏。
俸錢四五萬、月〻晨昏に奉ず可し。

廩祿二百石。歲可盈倉(五)囷。
廩祿二百石、歲〻倉囷に盈す可し。

喧喧車馬來。賀客滿我門。
喧喧として車馬來り、賀客我が門に滿つ。

不以我為貪。知我家內貧。
我を以て貪と爲さず、我が家內の貧を知ればなり。

置酒延賀客。客容亦歡欣。
置酒して賀客を延く、客容亦歡欣す。

笑云今日後。不復憂空樽。
笑つて云ふ今日より後、復空樽を憂へずと。

答云如君言。願君少逡(六)巡。
答へて云はく君が言の如し、願はくは君少しく逡巡せよ。

我有平生志。醉後為君陳。
我平生の志有り、醉後君が爲に陳せん。

人生百歲期。七十有幾人。
人生百歲の期、七十なる幾人か有る。

浮榮及虛位。皆是身之賓。
浮榮と虛位と、皆是身の賓なり。

唯有衣與食。此(七)享粗關身。
唯衣と食と有り、此享粗身に關かる。

苟免飢寒外。餘物盡浮雲。　苟も飢寒を免るる外、餘物盡く浮雲。

【字解】【一】戸曹掾　戸曹參軍をいふ。民戸をつかさどる屬官。【二】簪笏　簪は冠をとめるカンザシ。笏はシヤク。官吏となること。【三】紛紛　衆盛の貌。【四】昏晨　朝暮なり。【五】倉囷　米倉。【六】逡巡　待つこと。【七】此享　この供給。

【題義】樂天は元和五年に京兆戸曹參軍に任ぜられた。この詩は新任を喜んで己の志を述べたのである。除とは故官を除き去つて新官に就く意である。

【詩意】詔して戸曹參軍の官を授けられたので、詔を捧げて君恩の渥きに感泣した。それは己一身の爲に感泣したのではない。祿養が吾が親に及ぶからである。吾等兄弟倶に官に任ぜられたので、新婦等は衣巾を整へて兩親の堂下に列び、御祝の詞を申上げなどしてゐる。さてこれからは四五萬の俸錢を戴けるから朝夕珍味を捧げることも出來、二百石の廩祿を戴けるから米倉を盈すことも出來る。やがて車馬を驅つて祝賀の客がどやどややつて來たので、酒宴を設けて客をもてなせば、客も皆歡んでくれて、「今日から以後は酒樽の空になる心配もあるまい」などと笑ふので、自分は、「仰せの通りである。吾が平生の志を諸君の爲に一席辯するから、まあ待ち給へ。さて人生百歲とは申すが、實は七十まで生きる人が幾人あるであらうか。その長くもない人生を齷齪として浮榮や虛位などを求めて暮すのは愚の骨頂である。此等は皆身の附屬物に過ぎない。ただ衣と食との供給は命の綱で缺くべからざるものである。その外の物は畢竟浮雲の如きつまらぬものである」と答へた。

秋居書懷

秋居懷を書す

門前少賓客。階下多松竹。　門前賓客少なり、階下松竹多し。
(一)秋景下西墻。涼風入東屋。　秋景西墻に下り、涼風東屋に入る。
有琴慵不弄。有書閑不讀。　琴有れども慵くして弄せず、書有れども閑にして讀まず。
盡日方(二)寸中。澹然無所欲。　盡日方寸の中、澹然として欲する所無し。
何須廣居處。不用多積蓄。　何ぞ廣き居處を須ひん、多く積蓄するを用ひず。
(三)丈室可容身。斗儲可充腹。　丈室身を容る可く、斗儲腹を充たす可し。
況無治道術。坐受官家祿。　況んや治道の術無く、坐ながら官家の祿を受くるをや。
不種一株桑。不鋤一隴穀。　一株の桑を種ゑず、一隴の穀を鋤かず。
(四)終朝飽飯飡。卒歲豐衣服。　終朝飯飡に飽き、歲を卒るまで衣服に豐なり。
持此知愧心。自然易爲足。　此を持して愧心を知れば、自然に足ることを爲し易し。

【字解】【一】秋景　秋の日。【二】方寸　心なり。【三】丈室　方一丈の小室。【四】終朝　終日といふが如し。

【題義】秋日閑居して己の感懷を述べたのである。

【詩意】門に來り訪ふ客は稀であるが、階下に松や竹は多く植ゑてある。今や秋の日が西の墻に沈み、涼しい風が東の軒にはひつて來る。琴はあれども彈じようともせず、書物があつても讀まうともせず、心の中が淡然として何の慾もない。廣い家もいらなければ多くの蓄もいらない。方丈の室でも身を容るるに足り、一斗の儲でも腹を充すに足るのである。まして吾は政治の道も心得ぬ身で朝廷の俸祿を戴き、耕作の勞をもせずに衣食に飽きてゐる。此を顧みて自ら愧づるを知らば、自然に足るを知つて貪らぬやうになれるであらう。

禁中曉臥。因懷王起居

禁中曉臥、因つて王起居を懷ふ

遲遲禁漏盡。悄悄暝鴉喧。
遲遲として禁漏盡き、悄悄として暝鴉喧し。

夜雨槐花落。微涼臥北軒。
夜雨槐花落ち、微涼北軒に臥す。

曙燈殘未滅。風簾閑自翻。
曙燈殘つて未だ滅えず、風簾閑に自ら翻る。

毎得一靜境。思與故人言。
一靜境を得る毎に、故人と言はんことを思ふ。

【字解】【一】遲遲　時の進みのおそきこと。禁漏は禁中の水時計。【二】悄悄　憂ふる貌。暝鴉は暗いうちに鳴く鴉。【三】故人　舊友。王起居を指す。

【題義】禁裏に宿直して曉臥し、王起居（王は姓、起居は官名、起居郎、起居舍人あり）を懷うて作つた詩である。

【詩意】いつしか水時計の水も盡き、まだ暗いのに憂はしげに鴉が啼いてゐる。夜來の雨に槐の花の落つるを聞きつつ、涼しき北軒に横臥してゐると、燈火はまだ滅えずに殘り、簾が風にゆられて翻るのが見える。かかる靜境に遇ふ毎に君としめかやに語りたいと思ふ。

養拙

拙を養ふ

鐵柔不爲劍。木曲不爲轅。
鐵柔かなれば劍と爲らず、木曲れば轅と爲らず。

今我亦如此。愚蒙不及門。
今我も亦此の如し、愚蒙にして門に及ばず。

甘心謝名利。滅跡歸丘園。
心に甘んじて名利を謝し、跡を滅して丘園に歸る。

坐臥茅茨中。但對琴與樽。
坐臥す茅茨の中、但だ琴と樽とに對す。

身去韁鏁累。耳辭朝市喧。
身は韁鏁の累を去り、耳は朝市の喧を辭す。

逍遙無所爲。時窺五千言。
逍遙として爲す所無く、時に五千言を窺ふ。

無憂樂性場。寡慾淸心源。
憂無くして性場を樂み、慾寡くして心源を淸うす。

始知不才者。可以探道根。　始めて知る不才の者、以て道根を探る可きを。

【字解】【一】愚蒙　愚昧なり。不及門とは門にだも及ばず、況んや堂室をやの意。【二】茅茨　かやぶき屋根の家。【三】韁鎖　馬を縛る具。人事の煩累に喩ふ。【四】五千言　老子の書をいふ。

【題義】退いて拙陋の身を養ふことを述ぶ。

【詩意】鐵が柔では劍にすることは出來ず、木が曲つてゐては轅にすることは出來ない。自分は柔鐵曲木と同じく愚昧で物の役に立たない身だから、自ら好んで名利を絶ち隱退して田園に歸り、茅屋の中に坐臥して琴樽を樂み、世間の煩累を離れ逍遙として時に老子を繙き、吾が性を樂ましめ心を淸くしよう。ここに始めて不才の者こそ眞に道の蘊奥を究め得ることがわかつた。

寄李十一建

李十一建に寄す

外事牽我形。外物誘我情。　外事我が形を牽き、外物我が情を誘ふ。
李君別來久。(一)褊悋從中生。　李君別來久し、褊悋中より生ず。
憶昨訪君時。立馬扣柴荊。(二)　憶ふ昨君を訪ひし時、馬を立てて柴荊を扣く。
有時君未起。稚子喜先迎。(三)　時有りて君未だ起きず、稚子喜んで先づ迎ふ。
連步笑出門。衣翻冠或傾。　連步して笑つて門を出づれば、衣翻つて冠或は傾く。
掃階苔紋綠。拂榻藤陰淸。　階を掃へば苔紋綠に、榻を拂へば藤陰淸し。
(四)家醞及春熟。(五)園葵乘露烹。　家醞春に及んで熟し、園葵露に乘じて烹る。
看山東亭坐。待月南原行。　山を看て東亭に坐し、月を待ちて南原に行く。
門靜唯鳥語。(六)坊遠少鼓聲。　門靜にして唯鳥語のみ、坊遠くして鼓聲少なり。
相對盡日言。不及利與名。　相對して盡日言ひ、利と名とに及ばず。
分手來幾時。明月三四盈。　手を分ちて來幾時ぞ、明月三四盈つ。
別時殘花落。及此新蟬鳴。　別るる時殘花落ち、此に及んで新蟬鳴く。
(七)芳歲忽已晚。(八)離抱悵未平。　芳歲忽ち已に晚れ、離抱悵んで未だ平かならず。
豈不思命駕。吏職坐相縈。　豈に駕を命せんことを思はざらんや、吏職坐に相縈ふ。
前時君有(九)期。訪我來山城。　前時君期有り、我を訪うて山城に來れ。
心賞久云阻。言約無自輕。　心賞久しく云に阻る、言約自ら輕んずる無かれ。
相去幸非遠。走馬一日程。　相去ること幸に遠きに非ず、馬を走らすこと一日の程。

【字解】【一】褊恡　褊は急なり狹なり。恡は吝に同じ。鄙なり。【二】柴荊　柴や荊で造つた門。【三】稚子　幼兒。【四】家醞　家釀に同じ、自分の家で造つた酒。【五】園葵　庭園に生ずる野菜。【六】坊　市街。【七】芳歲　春をいふ。【八】離抱　離心といふが如し、離別せる抱懷。【九】有レ期　約束のあること。

【題義】友人李建（十一は排行）に寄せて來訪を促す詩である。

【詩意】世間の事物が我が心身を拘牽して其煩に堪へない所へ、君と久しく別れてゐるので心中ますます鄙吝の情が湧いて來た。憶ふに先頃君を訪ひ、馬を立てて柴門を扣いた時、ともすると君はまだ寢てゐることもあつて、君の家の幼兒が先づ喜んで出迎へ、更に君と連立つて門を出て來る。君は衣を飜し冠を傾け、あたふたと我を歡迎する。それから苔の蒸した階段を掃ひ藤棚の陰の榻に憩うて、手造りの春酒に舌鼓を打ち、園中の野菜を露ながら烹て肴となし、東亭に坐して山を看、南原に行つて月を待ちなどしてゐると、あたりはひつそりとして唯鳥の聲を聞くばかりで、市街を遠く離れてゐるので時を告げる鼓の音も聞えない。かくて終日語り盡してゐても名利の問題などには少しも涉らなかつた。さて君と別れてから、もはや三四個月になる。別れた時は殘りの花の落ちる頃であつたが、今は既に新蟬の聲を聞くやうになり、いつしか春も過ぎて獨り離居の悲を抱いてゐる。君を訪はうと思はぬのではないが役目に縛られて往くことも出來ない。君は嘗て我を訪ふ約束であつたから一度この山の邑に來てくれよ。馬で來れば僅か一日の道程で格別遠い處ではないのだから。

旅次華州贈袁右丞

華州に旅次し袁右丞に贈る

渭水綠溶溶。華山青崇崇。
渭水綠にして溶溶、華山青くして崇崇。

山水一何麗。君子在其中。
山水一に何ぞ麗なる、君子其中に在り。

才與世會合。物隨誠感通。
才世と會合し、物誠に隨つて感通す。

德星降人福。時雨助歲功。
德星人福を降し、時雨歲功を助く。

化行人無訟。囹圄千日空。
化行はれて人訟ふる無く、囹圄千日空し。

政順氣亦和。黍稷三年豐。
政順にして氣亦和し、黍稷三年豐なり。

客自帝城來。驅馬出關東。
客帝城より來り、馬を驅りて關東に出づ。

愛此一郡人。如見太古風。
愛す此一郡の人、太古の風を見るが如し。

方今天子心。憂人正忡忡。
方今天子の心、人を憂へて正に忡忡たり。

安得天下守。盡得如袁公。
安んぞ天下の守を得て、盡く袁公の如くなるを得ん。

【字解】【一】旅次　次はヤドルと訓ず。旅してやどる。華州は今の陝西省同州府華縣。南に太華・少華二山あり、北は渭水に面す。【二】袁右丞　袁は姓、右丞は官名、尚書右丞なり。時に華州刺史を兼ねてゐたらしい。【三】溶溶　水の盛に流るる貌。【四】崇崇

高く聳ゆる貌。【五】物　下の德星・時雨を指す。【六】德星　歲星なり、歲星の在る所必ず福あり、故に德星といふ。【七】時雨　時を得た雨。【八】囹圄　牢獄。【九】客　白樂天自ら謂ふ。帝城は京師長安。【一〇】忡忡　憂ふる貌。詩經に憂心忡忡。

【題義】旅行して華州に次り、州の刺史袁右丞に贈つて其德を贊した詩である。

【詩意】渭水は綠色をして溶溶と流れ、華山は青青と高く聳ゆる山水秀麗の華州に、袁右丞といふ君子がゐる。その才は能く世と遇合し、物皆其誠に感通し、德星が現れて人に福を降し、時雨が降つて歲功を助け、治化よく行はれて訟獄罷み、囚人が一人もなくなり、政治が順當であるから天氣も調和を保つて三年の間豐年が續いた。吾は京師から來て、馬を驅つて關東に往かうとして此地に宿つたのであるが、この一州の人民が皆淳朴で太古の風があるのを見て尤も嬉しく感ずる。今や天子は民の爲に憂心を抱いていらせられる。願はくは天下中の刺史が皆袁公のやうな人ばかりになるやうにありたいものだ。

酬楊九弘貞長安病中見寄

楊九弘貞が長安にて病中寄せらるるに酬ゆ

伏枕君寂寂。(一)折腰我營營。　枕に伏して君寂寂たり、腰を折りて我營營たり。
所嗟經時別。相去(二)一宿程。　嗟く所は時を經るの別れ、相去ること一宿程。
携手昨何時。(三)昆明春水平。　手を携ふ昨に何の時ぞ、昆明春水平かなり。
離郡來幾日。(四)太白夏雲生。　郡を離れて來幾日ぞ、太白夏雲生ず。
(五)之子未得意。貧病客(六)帝城。　之の子未だ意を得ず、貧病帝城に客たり。
貧堅志士節。病長(七)高人情。　貧は志士の節を堅うし、病は高人の情を長うす。
(八)隱几自恬淡。閉門無送迎。　几に隱りて自ら恬淡、門を閉ぢて送迎無し。
(九)龍臥心有待。(一〇)鶴瘦貌彌清。　龍臥して心待つ有り、鶴瘦貌彌清し。
清機發爲文。投我如振瓊。　清機發して文と爲り、我に投じて瓊を振ふが如し。
何以慰飢渴。捧之吟一聲。　何を以てか飢渴を慰せん、之に吟一聲を捧ぐ。

【字解】【一】折腰　腰を屈して人を拜すること。營營は汲汲として名利を求めること。【二】一宿程　一晩どまりで行ける道程。【三】昆明　長安に在る池の名。【四】太白　山の名。【五】之子　楊弘貞を指す。【六】帝城　長安をいふ。【七】高人　高士なり。【八】隱几　机案によりて坐すること。恬淡は無慾なり。【九】龍臥　龍の如く臥す。【一〇】鶴瘦　鶴の如く瘦せる。

【題義】楊弘貞(九は排行)が長安にゐて病に臥し、白樂天に詩を寄せたので其れに酬いた詩である。

【詩意】君は寂しく病に臥し、余は名利の奴となつて齷齪としてゐるので、僅に一宿程を隔つるに過ぎないのに、久しく相見ることも出來ずにゐるのは誠に嗟かはしいことだ。手を携へて昆明池の邊を

散步したのは春水の滿ちてゐる頃であつたが、今や既に太白山に夏雲の生ずる時節になつた。君は今以て芳しい事もなく貧と病とを抱いて長安に客寓し、貧は益その節義を堅くし、病は益その高風を增し、机案に憑りて俗情を絕ち、門を閉ぢて世と交を絕ち、龍の臥して風雲を待つが如く、鶴の如く瘦せて風貌が愈高潔になつた。その高潔の情を發して詩となり、それを我に寄せ示された。さて我は何を以て君が飢渴の情を慰めようか。ひとまづ此一篇の詩を贈ることにする。

禁中寓直(一)夢遊仙遊寺

禁中に寓直して夢に仙遊寺に遊ぶ

西軒草詔暇。松竹深寂寂。　西軒　詔を草するの暇、松竹深くして寂寂たり。
月出清風來。忽似山中夕。　月出でて清風來り、忽ち山中の夕に似たり。
因成西南夢(二)。夢作遊仙客。　因つて西南の夢と成り、夢に遊仙の客と作る。
覺聞宮漏(三)聲。猶謂山泉滴。　覺めて宮漏の聲を聞けば、猶山泉の滴るかと謂ふ。

【字解】【一】寓直　宿直なり。【二】西南夢　仙遊寺は白樂天の送王十八歸山寄題仙遊寺に曾於太白峰前住、數到仙遊寺裏來とあるから太白峰に在ることがわかる。又韓愈の南山の詩に西南雄太白とあるから、太白峰は長安の西南に在ることがわかる。【三】宮漏　宮中の水時計。

【題意】禁裏に宿直し、夢に仙遊寺に遊んだことを述べた詩である。

【詩意】西方の軒の近くに詔を草し終つてくつろいでゐると、松や竹の深く生ひ茂り、ひつそり閑とした處に、月出で風來り、恰も山中の夕暮のやうである。ついうとうとと西南なる太白峰に遊んだ夢を見た。夢が覺めて水時計の音を聞いても、山の泉の滴る聲かと疑つた。

贈王山人

王山人に贈る

聞君減寢食。日聽神仙說。　聞く君寢食を減じ、日に神仙の說を聽き、
暗待非常人。潛求長(一)生訣。　暗に非常の人を待ち、潛に長生の訣を求むと。
言長本對短。未離生死轍。　長を言ふは本と短に對す。未だ生死の轍を離れず。
假使得長生。才能勝夭(二)折。　假使長生を得るも、才に能く夭折に勝らん。
松樹千年朽。槿(三)花一日歇。　松樹千年に朽ち、槿花一日に歇む。
畢竟共虛空。何須誇歲月。　畢竟共に虛空なり、何ぞ歲月を誇るを須ひん。
(四)彭殤徒自異。生死終無別。　彭殤徒に自ら異にするも、生死終に別無し。

不如學無生。無生卽無滅。　如かず無生を學ばんには、無生は卽ち無滅なり。

【字解】【一】長生訣　ながいきする祕訣。仙術を修めること。【二】夭折　わかじに。【三】槿花　むくげの花、朝咲いて夕に萎む。白樂天の放言の詩に槿花一日榮とある。【四】彭殤　彭は彭祖、七百歳の壽を保つた人。殤は生れて間もなく死すること。

【題義】王山人が不老長生の仙術を修むるを聞き、長生を求むるよりは寧ろ生死を超逸する方がよいといふことを述べた詩である。

【詩意】聞けば君は寢食を減じて毎日神仙の說を聽き、非常の大德(すぐれた修道者)を待つて長生の祕訣を授からうと望んでゐるさうだが、長といふは短に對する詞であるから、やはり生死の轍を離れたものではなく、たとひ長生を得た所が、ただ夭折にまさるといふまでのことだ。松は千年の壽命を保ち槿花は一日で萎むが、畢竟共に虛空に歸するのだから、松と雖も敢て長壽を誇るべきではない。彭祖と殤子では非常な相違のやうだが、死することは同一で少しも差別はない。君も長生を求めるよりは寧ろ生死を超逸して無生を學ぶがよい。無生は卽ち無滅である。

秋山

久病曠心賞。今朝一登山。　久病心賞曠し、今朝一たび山に登る。

山秋雲物冷。稱我淸羸顏。　山秋にして雲物冷かに、我清羸の顏に稱ふ。

白石臥可枕。靑蘿行可攀。　白石臥して枕す可し、靑蘿行くゆく攀づ可し。

意中如有得。盡日不欲還。　意中得る有るが如く、盡日還るを欲せず。

人生無幾何。如寄天地間。　人生幾何も無し、天地の間に寄るが如し。

心有千載憂。身無一日閑。　心に千載の憂有り、身に一日の閑無し。

何時解塵網。此地來掩關。　何れの時か塵網を解き、此地來りて關を掩はん。

【字解】【一】靑蘿　靑い蔓草。【二】千載　千年なり、古詩に生年不滿百、常懷千歳憂とある。【三】塵網　世の中の煩累。

【題義】秋山に遊んで其景趣を賞し、遂に隱棲の志を起したことを述べた。

【詩意】久しく病に臥して心賞を缺いてゐたので、今朝は山に登つて鬱を霽らした。山は秋のことて雲氣も冷かで我が羸れた顏に快感を與へた。白い石は枕するに宜しく、靑い蘿は攀ぢのぼるに宜しく、大に心に叶つて終日歸らうとも思はない。思へば人の壽命は短いもので、天地の間に寄託してゐるに過ぎないが、然も心には常に千歳の憂を抱き、身には一日も閑暇はない。早く世の煩累を脫れ此山に來て門を閉ぢて高臥してゐたいものだ。

贈能七倫(一)

能七倫に贈る

澗松高百尋。四時寒森森(二)。
澗松高きこと百尋、四時寒くして森森たり。

臨風有清韻。向日無曲陰。
風に臨んで清韻有り、日に向つて曲陰無し。

如何時俗人。但賞桃李林。
如何ぞ時俗の人、但だ桃李の林を賞する。

豈不知堅貞。芳馨誘其心。
豈に堅貞を知らざらんや、芳馨其心を誘く。

能生學爲文。氣高功亦深。
能生文を爲ることを學び、氣高くして功亦深し。

手中一百篇。句句披沙金。
手中一百篇、句句沙金を披く。

苦節二十年。無人振陸沈(三)。
苦節二十年、人の陸沈を振ふ無し。

今我尙貧賤。徒爲爾知音(四)。
今我尙ほ貧賤、徒に爾が知音たるのみ。

【字解】【一】能七倫　能は姓、七は排行、倫は名。【二】森森　高く聳える貌。【三】陸沈　賢人のおちぶれてゐること。【四】知音　知己なり。

【題義】能倫を松に比し其高節と能文とを以てするも榮達することが出來ないでゐるのを憐んだ詩である。

【詩意】澗中の松は百尋も高く聳え立ち四季その操を變へず、風に臨んでは淸き韻を奏で日に向つては曲陰なく、實に氣高い姿であるが、世俗の人は桃李の芳馨にばかり心を引かれて、松柏の堅貞を賞する者はない。この松柏にも比すべき能生は能文高節の士で、其手に成つた百篇の文章は句句沙中に黃金を拾ふべきも、苦節を守ること二十年、誰も其窮を救ふ者がない。余も今尙は貧賤で、君の知己とは謂ひながら君を引立ててやることが出來ない。

題楊頴士西亭

楊頴士の西亭に題す

靜得亭上境。遠諧塵外蹤。
靜は亭上の境を得、遠は塵外の蹤に諧ふ。

憑(一)軒東南望。鳥滅山重重。
軒に憑りて東南を望めば、鳥滅して山重重。

竹露冷煩襟(二)。杉風淸病容。
竹露煩襟冷かに、杉風病容淸し。

曠(三)然宜眞趣。道與心相逢。
曠然として眞趣に宜し、道心と相逢ふ。

卽此可遺世。何必蓬壺(四)峯。
此に卽いて世を遺る可し、何ぞ必ずしも蓬壺の峯のみならん。

【字解】【一】憑軒　欄干に倚ること。【二】煩襟　煩悶の心。【三】曠然　心のはればれとすること。【四】蓬壺　蓬萊山。東海中の三仙山の一。

【題義】楊穎士の西亭に書きつけた詩である。

【詩意】この西亭は塵外遠き靜境に在り、欄干に倚つて東南を望めば、鳥の遙に雲中に隱れるあたりに山又山の聳えるのが見え、竹の葉露や杉の梢を渡る風は、心の煩や身の病を洗ひ去り、心も自然の趣と合致して愉快である。この亭に居れば全く俗界を遺れることが出來る。遠く蓬萊山などを求める必要はない。

題贈鄭(一)祕書徵君石溝溪隱居

鄭生常隱天台。徵起而仕。今復謝病隱於此。

鄭祕書徵君の石溝溪の隱居に題贈す　鄭生常に天台に隱る、徵せられて起つて仕ふ、今復た病を謝して此に隱る

鄭君得自然。虛白(二)生心胷。　鄭君自然を得、虛白心胷に生ず。
吸彼沆瀣(三)精。凝爲氷雪容。　彼の沆瀣の精を吸ひ、凝りて氷雪の容と爲る。
(四)大君貞元初。求賢致時雍(五)。　大君貞元の初め、賢を求めて時雍を致さんとす。
(六)蒲輪入翠微。迎下天台峯。　蒲輪翠微に入り、迎へられて天台峯を下る。
(七)赤城別松喬。(八)黃閣交夔龍。　赤城松喬に別れ、黃閣夔龍に交る。
俛仰受三命(九)。從容辭九重(一〇)。　俛仰して三命を受け、從容として九重を辭す。
出籠鶴翩翩。歸林鳳噰噰(一一)。　籠を出でて鶴翩翩たり、林に歸りて鳳噰噰たり。
在火辨良玉。經霜識貞松。　火に在りて良玉を辨じ、霜を經て貞松を識る。
新居寄楚山。山碧溪溶溶(一二)。　新居楚山に寄る、山碧にして溪溶溶たり。
(一三)丹竈燒烟熅。(一四)黃精花丰茸。　丹竈燒くこと烟熅、黃精花丰茸。
(一五)蕙帳夜琴淡。桂樽春酒濃。　蕙帳夜琴淡く、桂樽春酒濃なり。
時人不到處。苔石無塵蹤。　時人到らざる處、苔石塵蹤無し。
我今何爲者。趨世身龍鍾(一六)。　我今何爲る者ぞ、世に趨りて身龍鍾たり。
不向林壑訪。無由朝市逢。　林壑に向つて訪はずんば、朝市に逢ふに由無し。
終當解塵纓(一七)。卜築來相從。　終に當に塵纓を解き、築をトし來りて相從ふべし。

【字解】【一】鄭祕書　祕書は官名。徵君は學行ある士の詔によつて徵召された者をいふ。【二】虛白　莊子に、虛室生白とある。【三】沆瀣　露氣なり。仙人の餐する所のもの。【四】大君　天子。貞元は德宗の年號。【五】時雍　和平なり。【六】蒲輪　蒲で輪を卷いた車、卽ち安車なり。翠微は山の中腹をいふ。【七】赤城　山の名。浙江省天台縣の北六里に在り、天台山に往くには必ず此を經るのである。松喬は仙人の名、赤松子、王子喬。【八】黃閣　臺閣なり。夔龍は竝に舜の時の賢臣。【九】三命　三たび君命を受けて高位にのぼること。【一〇】九重　宮闕。【一一】噰噰　鳥の鳴く聲。【一二】溶溶　深廣の貌。【一三】丹竈　仙藥を錬る竈。

氤氳は雲氣の發散する貌。【一四】黄精　草の名。芊芊は草の盛なる貌。【一五】蕙帳　蕙は香草の名。蕙草で飾つたトバリ。【一六】龍鍾　潦倒失意なり。【一七】塵纓　俗塵に汚れた冠の紐。

【題義】自註に據るに、鄭生は常て天台山に隱遁してゐたが後徵されて祕書に官した。所が今復病と稱して官を退き石溝溪に隱居した。因つて此詩を贈り題したのである。

【詩意】鄭君は老莊自然の道を體得して心が常に靜虛で、沆瀣の精氣を吸つて氷雪のやうに淨潔な姿をしてゐる。德宗の貞元の初年に賢士を求めて天下の和平を圖らうと、安車蒲輪を以て鄭君を迎へたので、鄭君は天台山を下り仙人仲間に別を告げ、朝廷に登つて大官に伍することになつた。それから追追昇進したが、惜げもなく官を辭して宮廷を去り、籠を出た鶴、林に歸つた鳳凰にも比すべく、良玉の火中に在りて燒けず、貞松の霜を經て綠いや增すが如くである。さて其新居の楚山の中に在つて山碧に溪潤く、仙藥を練る竈の煙が立ちのぼり、黄精の花が茂つてゐる處に、琴を彈じ酒を酌んで獨り樂み、俗人の來り訪ふ者もない。飜つて、我は今何をしてゐるかといふと、俗世間に奔走して尾羽うち枯らしてゐる。君に逢ひたいが、それには是非とも林壑に向つて訪はねばならない。早く官を退き隱居を構へ、君に從つて遊びたいものだ。

及第後歸覲留別諸同年　及第の後歸覲せんとし諸同年に留別す

十年常苦學。(二)一上謬成名。　十年常に苦學し、一たび上り謬つて名を成す。

擢第未爲貴。賀親方始榮。　第に擢でらるるも未だ貴しと爲さず、親を賀して方に始めて榮なり。

(三)時輩六七人。送我出帝城。　時輩六七人、我を送つて帝城を出づ。

(四)軒車動行色。(五)絲管擧離聲。　軒車行色を動かし、絲管離聲を擧ぐ。

得意減別恨。(六)半酣輕遠程。　得意別恨を減じ、半酣遠程を輕んず。

(七)翩翩馬蹄疾。春日歸鄉情。　翩翩として馬蹄疾し、春日歸鄉の情。

【字解】【一】及第　貞元十六年、樂天年二十九、高郢の下で進士の試驗に及第した。歸覲は鄉里に歸つて親を省すること。諸同年とは同じ年に進士の試驗に及第した人人をいふ。留別とは旅立つ時、留り居る人に別を告げること。【二】一上　一たび及第すること。【三】時輩　即ち諸同人なり。【四】軒車　馬車。行色は旅立ちの景況。【五】絲管　絲竹管絃。樂器。【六】半酣　半醉なり。【七】翩翩　疾走の貌。

【題義】進士の試驗に及第して後、鄉里に親を歸省せんとして同期及第者に留別した詩である。

【詩意】十年間苦學した結果幸に及第の名譽を荷ふことが出來た。併し及第しただけではまだ貴しとするには足らない。故鄉に歸つて親に祝辭を述べてこそ始めて光榮とするに足るのである。さて今余の歸るに方り六七人の同年諸君が帝都の郊外まで見送つてくれて、發車の際に離別の曲を奏した。

が、得意のあまり離別の悲も薄く、酒に醉つて遠路をも苦にしない。馬の蹄も輕快で、春日歸郷の愉快は何とも言ひやうがない。

清夜琴興

清夜の琴興

月出鳥栖盡。寂然坐空林。　月出でて鳥栖み盡き、寂然として空林に坐す。

是時心境閑。可以彈素琴(一)。　是時心境閑なり、以て素琴を彈ず可し。

(二)清冷由木性。恬淡隨人心。　清冷木性に由り、恬淡人心に隨ふ。

心積和平氣。木應正始(三)音。　心は和平の氣を積み、木は正始の音に應ず。

響餘羣(四)動息。曲罷秋夜深。　響餘つて羣動息み、曲罷みて秋夜深し。

正聲感元化(五)。天地清沈沈(六)。　正聲元化を感じ、天地清くして沈沈たり。

【字解】【一】素琴　しらきの琴。【二】清冷　音の清爽寒涼な貌。【三】正始　三國魏の廢帝の年號。時俗清談を尙ぶ。世に正始の風と稱す。【四】羣動　羣物の動搖。【五】元化　天地の運化。【六】沈沈　夜の更け行く貌。

【題義】秋の夜に琴を彈じて樂んだことを述べた詩である。

【詩意】月出で鳥塒に就き、四方のひつそりとした時、空林の中なる庵に坐すれば、心が落著いて琴を彈ずるに宜しい。琴の音は清爽寒涼、木性に由りて正始の音に合ひ、心は恬淡安靜、和平の氣が滿ち滿ちてゐる。やがて數曲を彈じ終れば、夜は刻刻に深けて世間の物音も靜まり、天地自然の正聲を聞き、沈沈と夜の更け行くのを感ずる。

效陶(一)潛體詩十六首　幷序

陶潛が體に效ふ詩十六首　幷に序

余退居渭上(二)。杜門不出。時屬多雨。無以自娛。會家醞(三)新熟。雨中獨飮。往往酣醉。終日不醒。懶放之心。彌覺自得。故得於此。而有以忘於彼者。因詠陶淵明詩。適與意會。遂倣其體。成十六篇。醉中狂言。醒輒自哂。然知我者。亦無隱焉。

【訓讀】余渭上に退居し、門を杜ぢて出でず。時に多雨に屬し、以て自ら娛む無し。會家醞新に熟す。雨中に獨飮み、往往酣醉し、終日醒めず。懶放の心、彌自得するを覺ゆ。故に此に得て、而して以て彼に忘るるもの有り。因つて陶淵明が詩を詠ずるに、適意と會ふ。遂に其體に倣うて十六篇を成す。醉中の狂言、醒むれば輒ち自ら哂ふ。然れども我を知る者、亦隱す無し。

【字解】【一】陶潛　陶淵明なり。【二】渭上　渭水のほとり。樂天は貞元二十年に渭上に卜居した。時に校書郎の職を奉じてゐた。【三】家醞　自分の家で造つた酒。

【題義】陶淵明の詩を讀んで大に心に適する所あり、因つて其體に倣つて十六首の詩を作つたのである。

〔一〕

不動者厚地。不息者高天。　動かざる者は厚地、息まざる者は高天。
無窮者日月。長在者山川。　窮り無き者は日月、長へに在る者は山川。
松柏與龜鶴。其壽皆千年。　松柏と龜鶴と、其壽皆千年。
嗟嗟羣物中。而人獨不然。　嗟嗟羣物の中、而も人獨り然らず。
早出向朝市。暮已歸下泉。　早に出でて朝市に向ひ、暮に已に下泉に歸す。
形質及壽命。危脆若浮煙。　形質と壽命と、危脆にして浮煙の若し。
堯舜與周孔。古來稱聖賢。　堯舜と周孔と、古來聖賢と稱す。
借問今何在。一去亦不還。　借問す今何にか在る、一たび去りて亦還らず。
我無不死藥。萬萬隨化遷。　我に不死の藥無し、萬萬化に隨ひて遷る。
所未定知者。修短遲速間。　未だ定め知らざる所の者は、修短遲速の間なり。
幸及身健日。當歌一樽前。　幸に身の健なる日に及び、當に一樽の前に歌ふべし。
何必待人勸。持此自爲歡。　何ぞ必ずしも人の勸めを待たん、此を持して自ら歡を爲さん。

【字解】【二】下泉　黄泉、卽ち地下。【三】修短　長短なり。

【詩意】厚地は動くことなく高天は變轉して息まず。日月山川は無窮長生であり、松柏龜鶴は千年の壽命を保つ。ただ人だけは獨り短命である。朝には朝市に出掛けた人が夕には黄泉の客となる事もある位で、形體壽命の脆いことは浮雲の如くである。堯舜でも周公孔子でも忽ち死して復た還らない。世に不死の藥はないから、人は誰でも自然の化に隨つて死ずるにきまつてゐるので、ただ明にわからないのは長命か短命か、速く死ぬか遲く死ぬかである。されば幸に健康な時に酒でも飮んで樂み歌ふがよい。故に余は人の勸めを待つまでもなく、酒と歌とを借りて自ら歡を爲してゐる。

〔二〕

翳翳踰月陰。沈沈連日雨。　翳翳として月を踰えて陰り、沈沈として日を連ねて雨る。

開簾望天色。黃雲暗如土。　簾を開いて天色を望めば、黃雲暗くして土の如し。
行潦毀我墉。疾風壞我宇。　行潦我が墉を毀ち、疾風我が宇を壞る。
蓬莠生庭院。泥塗失場圃。　蓬莠庭院に生じ、泥塗塲圃を失ふ。
村深絕賓客。窓晦無儔侶。　村深くして賓客を絕ち、窓晦くして儔侶無し。
盡日不下牀。跳鼃時入戶。　盡日牀を下らず、跳鼃時に戶に入る。
出門無所往。入室還獨處。　門を出でて往く所無く、室に入りて還りて獨處す。
不以酒自娛。塊然與誰語。　酒を以て自ら娛ますんば、塊然として誰と與に語らん。

【字解】【一】黯黯　くもる貌。【二】沈沈　陰氣な貌。【三】行潦　庭の水たまり。【四】蓬莠　よもぎ、はぐさ。【五】泥塗　どろ。塲圃はハタケ。【六】跳鼃　とびあがる蛙。【七】塊然　獨居の貌。

【詩意】月を踰えて空が曇り每日淋しく雨が降つてゐる。簾を揭げて空模様を見ると黃色な雲が土のやうに暗く、水たまりは土塀を崩し、疾風は屋根を壞り、庭には雜草が生ひ茂り、畠は一面の泥海と化した。人里離れた處だから訪れる客もないので、小暗い窓の下につくねんとして、一日中牀を下りずにゐると、蛙が戶口に飛び込んで來る。門を出て見ても往く所もないから、又ひつこんで獨りでゐる。話相手もないので酒でも飮んで娛むより外はない。

〔三〕

朝飮一杯酒。冥心合元化。　朝に一杯の酒を飮み、冥心元化に合ふ。
兀然無所思。日高尙閑臥。　兀然として思ふ所無し、日高くして尙ほ閑臥す。
暮讀一卷書。會意如嘉話。　暮に一卷の書を讀み、意に會すること嘉話の如し。
欣然有所遇。夜深猶獨坐。　欣然として遇ふ所有り、夜深けて猶ほ獨坐す。
又得琴上趣。按絃有餘暇。　又琴上の趣を得、絃を按じて餘暇有り。
復多詩中狂。下筆不能罷。　復詩中の狂多く、筆を下して罷む能はず。
唯茲三四事。持用度晝夜。　唯だ茲の三四の事、持用して晝夜を度る。
所以陰雨中。經旬不出舍。　所以に陰雨の中、旬を經れども舍を出でず。
始悟獨住人。心安時亦過。　始めて悟る獨り住む人、心安くして時亦過ぐるを。

【字解】【一】元化　天地の運化。【二】兀然　動かざる貌。

【詩意】朝は一杯の酒を飮み、心が陶然として天地自然と冥合し、何の思ひ煩ふこともなく日の高くのぼるまで安らかに臥してゐる。夜は一卷の書を讀み、意に叶ふこと友人の嘉話を聞くが如く、夜の

深けるまで欣然として獨坐してゐる。又餘暇には琴を彈じて樂み、氣違じみた詩を作つて興を遣つてゐる。この三四件の事(酒、書、琴、詩)を用ひて晝夜を送つてゐるので、連日の雨に十日以上も家を出ずにゐられるのである。ここに始めて獨住の人が靜に時を送る氣樂さを悟つた。

〔四〕

(一)東家采桑婦。雨來苦愁悲。
蔟蠶北堂前。雨冷不成絲。
西家荷鋤叟。雨來亦怨咨。(二)
種豆南山下。雨多落爲萁。(三)
而我獨何幸。醞酒本無期。
及此多雨日。正遇新熟時。
開瓶瀉樽中。玉液黃金脂。
持翫已可悅。歡嘗有餘滋。(四)
一酌發好容。再酌開愁眉。
連延四五酌。酣暢入四肢。
忽然遺我物。誰復分是非。
是時連夕雨。酩酊無所知。
人心苦顚倒。反爲憂者嗤。

〔四〕

東家桑を采る婦、雨來りて苦だ愁悲す。
蠶を北堂の前に蔟す、雨冷にして絲を成さず。
西家鋤を荷ふ叟、雨來りて亦怨咨す。
豆を南山の下に種ゑ、雨多くして落ちて萁と爲る。
而して我獨り何の幸ぞ、酒を醞す本期無し。
此の多雨の日に及びて、正に新に熟する時に遇ふ。
瓶を開いて樽中に瀉ぐ、玉液黃金の脂あり。
持翫已に悅ぶ可く、歡嘗餘滋有り。
一たび酌みて好容を發し、再び酌みて愁眉を開く。
連に延く四五酌、酣暢して四肢に入る。
忽然として我と物とを遺る、誰か復是非を分たん。
是時連夕の雨、酩酊して知る所無し。
人心苦だ顚倒し、反りて憂ふる者の嗤と爲る。

【字解】【一】東家　東鄰の家。【二】怨咨　うらみなげく。【三】萁　豆の莖。【四】餘滋　滋は滋味なり。

【詩意】東鄰の桑摘女は雨が降つて來ると甚だしく愁悲する。なぜかといふと今丁度北堂の前に蠶を上蔟させたのが、雨がふると繭が出來ないからだ。西鄰の百姓爺も雨が降ると怨咨する。それは豆を南山の下に植ゑてあるが、雨が多いと莖ばかり殘つて實が落ちてしまふからだ。ただ我獨りは幸福なことに、酒を醸すには時期が限られてないから、丁度この多雨の時節に酒が出來上つたので瓶から樽に移すと、玉の液が黃金色の脂のやうである。眺めてゐてもよい氣持であるが、嘗めて見ると何ともいへぬ風味がある。一たび酌めば容色がよくなり、二たび酌めば愁眉が開け、たてつづけに四五杯やれば手足まで醉がまはり、忽ちのうちに我と人との區別を忘れ、是も非も忘れて、連日の雨に人民の苦むことなどは問題でなくなつてしまふ。まるで心が顚倒して世事を憂ふる人から嘲を招くやうになる。

〔五〕

朝亦獨醉歌。暮亦獨醉睡。
朝にも亦獨り醉うて歌ひ、暮にも亦獨り醉うて睡る。

未盡一壺酒。已成三獨醉。
未だ一壺の酒を盡さざるに、已に三獨醉を成す。

勿嫌飲太少。且喜歡易致。
嫌ふ勿れ飲むこと太だ少きを、且つ喜ぶ歡致し易きを。

一盃復兩盃。多不過三四。
一盃復兩盃、多きも三四に過ぎず。

便得心中適。盡忘身外事。
便ち心中の適を得て、盡く身外の事を忘る。

更復强一盃。陶然遺萬累(一)。
更に復一盃を强ひ、陶然として萬累を遣る。

一飲一石(二)者。徒以多爲貴。
一飲一石する者は、徒らに多きを以て貴しと爲す。

及其酩酊時。與我亦無異。
其酩酊の時に及んでは、我と亦異なる無し。

笑謝(三)多飲者。酒錢徒自費。
笑つて謝す多く飲む者、酒錢徒に自ら費すを。

【字解】【一】萬累　すべてのわづらひ。【二】一石　枡目の名。【三】笑謝　笑つて告げる。

【詩意】朝も獨り醉うて歌ひ、夜も獨り醉うて睡る。一壺の酒を飲み盡さないうちに早や三回も獨醉する。酒量は少いが酒興の深いのが嬉しい。一盃一盃と盃を重ねて三四盃に過ぎないうちに心持が愉快になり、身外の事をすべて忘れ、更に一盃を重ねると陶然として世の煩累を忘れてしまふ。一度に一石も飲む人は酒量の多きを誇つてゐるが、醉ふといふ點にかけては我と同じである。因つて笑つて多飲の人に告げる。ただ徒に多くの酒錢を費すは馬鹿げたことではないかと。

〔六〕

天秋無片雲。地靜無纖塵。
天秋にして片雲無く、地靜にして纖塵無し。

團團(一)新晴月。林外生白輪。
團團たる新晴の月、林外白輪を生ず。

憶昨陰霖天。連連三四旬。
憶ふ昨陰霖の天、連連たり三四旬。

賴逢家醞(二)熟。不覺過朝昏(三)。
家醞の熟するに逢ふに賴りて、覺えず朝昏を過ごす。

私言雨霽後。可以罷餘樽。
私に言ふ雨霽れて後、以て餘樽を罷む可しと。

及對新(四)月色。不醉亦愁人。
新月の色に對するに及び、醉はずんば亦人を愁へしむ。

牀(五)頭殘酒榼。欲盡味彌淳。
牀頭殘酒の榼、盡きんと欲して味彌淳し。

攜置南簷下。舉酌自殷(六)勤。
南簷の下に攜へ置き、舉げ酌むこと自ら殷勤。

清光入盃杓。白露生衣巾。
清光盃杓に入り、白露衣巾に生ず。

乃知陰與ㇾ晴。安可ㇾ無二此(七)君一。　乃ち知る陰と晴と、安んぞ此君無かる可けんや。
我有二樂(八)府詩一。成來人未ㇾ聞。　我に樂府の詩有り、成り來りて人未だ聞かず。
今宵醉有ㇾ興。狂詠驚二四鄰一。　今宵醉うて興有り、狂詠四鄰を驚かす。
獨賞猶復爾。何況有二交親一。　獨り賞するも猶ほ復爾り、何ぞ況んや交親有るをや。

【字解】〔一〕團團　月のまんまるな貌。〔二〕家醞　自家醸造の酒。〔三〕朝昏　朝暮。〔四〕新月　夕方に始めて現れた月。〔五〕林　物を掛ける架。槽は酒槽。〔六〕殷勤　ねんごろなること。〔七〕此君　酒を指していふ。〔八〕樂府詩　樂府は詩の一體なり。

【詩意】今や秋の季節で天には一片の雲もなく、地には一點の塵をも留めない。折しも團團たる明月が出て林外に白輪を躍らしてゐる。憶へば先頃は三四十日も雨が降り續いて、氣がくさくさしたが、ただ幸に手造の酒が熟したので、酒の力で朝晩を過すことが出來た。で、雨が霽れたら酒はやめようと言つてゐたのだが、さてこの新月を見ては飲まずにはゐられない。棚の上の酒樽は殘少くなつて特に味がよくなつて來た。それを攜へて南の簷の下に据ゑ、大事にして獨り味つてゐると、淸き光が盃の中までさし込み、夜露に著物がしつとりするまで飲み耽つた。晴れても陰つても酒がなくては何のそのだ。余は近頃樂府體の詩を作つたが、まだ世間には披露しない。今宵酒興が湧いたに乘じて、狂氣じみた聲を出して此詩を吟じた。獨りで此月を眺めてさへこんなに愉快なのだから、心合ふ友と賞したら尙更であらう。

〔七〕

中(一)秋三五夜。明月在二前軒一。　中秋三五の夜、明月前軒に在り。
臨ㇾ觴忽不ㇾ飲。憶我平生歡。　觴に臨んで忽ち飲まず、憶ふ我が平生の歡。
我有二同心人一。邈(二)邈崔與ㇾ錢。　我に同心の人有り、邈邈たり崔と錢と。
我有二忘(三)形友一。迢(四)迢李與ㇾ元。　我に忘形の友有り、迢迢たり李と元と。
或飛二青(五)雲上一。或落二江(六)湖間一。　或は青雲の上に飛び、或は江湖の間に落つ。
與ㇾ我不二相見一。于ㇾ今三四年。　我と相見ざること、今に三四年。
我無二縮地術一。君非二馭(七)ㇾ風仙一。　我に縮地の術無く、君は風に馭する仙に非ず。
安得明月下。四人來晤言。　安ぞ得ん明月の下、四人來りて晤言するを。
良夜信難ㇾ得。佳(八)期杳無ㇾ緣。　良夜は信に得難く、佳期は杳として緣無し。

明月又不駐。漸下西南天。　明月又駐らず、漸く西南の天に下る。
豈無他時會。惜此清景前。　豈に他時の會無からんや、此清景の前を惜む。

【字解】【一】中秋三五夜　八月十五夜。【二】迢迢　遠く隔る貌。【三】忘形友　形跡を脫略して交る友。【四】迢迢　遠く隔る貌。【五】靑雲　高位に喩ふ。【六】江湖　四方に放浪すること。【七】馭風　風に乘つて空中を飛ぶこと。【八】佳期　朋友の良會。【九】他時　後日。

【詩意】八月十五夜の月が軒前に上つた。酒に對して飮まうともせず、先づ友達の事を憶つた。我には崔・錢・李・元等、同心忘形の親友があるが、或は高位にのぼつて官界に時めき、或は江湖の間に放浪して、相見ざること既に三四年である。我に縮地の術なく、彼に飛仙の方がないから、此月の下に四人が歡談することは出來ない。で、またと得難い良い晩だが、相會するよすがはない。いつしか月も西南の天に傾いてしまつた。後日相會する時がないわけではないが、今夜の淸景を獨り賞するのが殘念でたまらない。

〔八〕

家醞飮已盡。村中無酒沽。　家醞飮んで已に盡き、村中酒の沽る無し。
坐愁今夜醒。其奈秋懷何。　坐して愁ふ今夜醒むるを、其れ秋懷を奈何せん。

有客忽叩門。言語一何佳。　客有り忽ち門を叩く、言語一に何ぞ佳なる。
云是南村叟。挈榼來相過。　云ふ是れ南村の叟、榼を挈げて來りて相過ぎる。
且喜樽不燥。安問少與多。　且つ喜ぶ樽の燥かざるを、安ぞ少と多とを問はん。
重陽雖已過。籬菊有殘花。　重陽已に過ぐと雖も、籬菊殘花有り。
歡來苦晝短。不覺夕陽斜。　歡び來りて晝の短きを苦む、覺えず夕陽斜なり。
老人勿遽起。且待新月華。　老人遽に起つ勿れ、且く新月の華を待て。
客去有餘趣。竟夕獨酣歌。　客去りて餘趣有り、竟夕獨り酣歌す。

【字解】【一】家醞　自家釀造の酒。【二】秋懷　秋のうれへ。【三】榼　酒樽。【四】重陽　九月九日の節句。【五】竟夕　終夜。

【詩意】手造の酒も飮み盡し、村には酒を賣る店もないので、秋の憂を霽らす由もなく獨り坐して考へ込んでゐると、一人の客が福音を齎してやつて來た。といふは南村の老翁が酒を携へて來たのである。何よりも酒樽の干あがらないのが嬉しい。酒の多少は問題ではない。況んや重陽は既に過ぎたが籬の菊花はまだ殘つてゐるので、此花に對して此酒を酌んだ。愉快になつて來るにつけても日足の短いのが惜まれたが、程なく日も西に傾いて老翁も歸らうとするのを、まアそんなに早く歸るにも及ぶ

まい。月の出るまで待つがよいと引き留めたが、やがて老翁は去つた。その後まで興趣が盡きないので一晩中獨りで醉歌した。

〔九〕

（一）原生衣百結。（二）顏子食一簞。
原生は衣百結、顏子は食一簞。
歡然樂其志。有以忘飢寒。
歡然として其志を樂ましめ、以て飢寒を忘るる有り。
今我何人哉。德不及（三）先賢。
今我何人ぞや、德先賢に及ばず。
衣食幸相屬。胡爲不自安。
衣食幸に相屬す、胡爲ぞ自ら安んせざらん。
況茲（四）清渭曲。居處安且閑。
況んや茲の清渭の曲、居處安にして且つ閑なり。
（五）楡柳百餘樹。（六）茅茨十數間。
楡柳百餘樹、茅茨十數間。
寒負簷下日。熱濯澗底泉。
寒ければ簷下の日を負ひ、熱ければ澗底の泉に濯ふ。
日出猶未起。日入已復眠。
日出づるも猶ほ未だ起きず、日入りて已に復眠る。
西風滿村巷。清涼八月天。
西風村巷に滿つ、淸涼八月の天。
但有雞犬聲。不聞車馬喧。
但鷄犬の聲のみ有り、車馬の喧しきを聞かず。
時傾一樽酒。坐望東南山。
時に一樽の酒を傾け、坐ながら東南の山を望む。
（七）稚姪初學步。牽衣戲我前。
稚姪初めて步を學び、衣を牽いて我が前に戲る。
即此自可樂。庶幾顏與原
此に卽いて自ら樂む可し、顏と原とに庶幾し。

【字解】【一】原生　孔子の弟子原憲、貧なり。百結はつぎはぎだらけの著物。【二】顏子　孔子の弟子顏回、亦貧なり。論語に、「一簞ノ食、一瓢ノ飲、陋巷ニ在リ、人ハ其憂ニ堪ヘズ、回ヤ其樂サ改メズ、賢ナルカナ回ヤ」とある。【三】先賢　原生と顏回とを指す。【四】淸渭曲　淸き渭水のほとり。【五】楡柳　木の名、にれ、やなぎ。【六】茅茨　茅葺屋根の家。十數間は十數室なり。【七】稚姪　幼少なヲヒ。

【詩意】昔原憲は百結の衣を身にまとひ、顏回は一簞の飯に飢を凌ぎ、以て飢寒を忘れて其道を樂んだ。今我は如何といふに、德は原憲や顏回に及ばないが、衣食には幸に不足がなく自ら安んじてゐる。況んや淸き渭水の曲に安住の居を構へ、門外には楡柳が百餘株あり、家には十餘の間數もある。寒ければ簷の下に出て背を暖め、熱ければ澗の泉に身を濯ひ、日が高くのぼるまで眠り、日の暮れるより早く寢に就くといふやうな呑氣な生活をしてゐるのだから。今や秋八月の好季節で、涼しい風が村中に滿ち、聞えるのは雞犬の聲ばかりで車馬の物音などは聞えない。酒杯を擧げて東南の山を眺めたり、やつと步行の出來るやうになつた稚い姪の相手になつたりしてゐると、實に獨り自ら樂むに足る。まア顏回や原憲にも敢て劣るまい。

〔十〕

（一）湛湛樽中酒。有功不自伐。不伐人不知。我今代其說。良將臨大敵。前驅千萬卒。（二）一簞投河飲。赴死心如一。壯士磨（三）匕首。勇憤氣（四）咆勃。一酣忘報讐。四體如無骨。（五）東海殺孝婦。天旱踰年月。一酌酹其魂。通宵雨不歇。咸陽秦獄氣。寃痛結爲物。千歲不肯散。（六）一沃亦銷失。況茲兒女恨。及彼幽憂疾。快飲無不消。如霜得春日。方知（七）麴蘖靈。萬物無與匹。

〔十〕

湛湛たる樽中の酒、功有れども自ら伐らず。
伐らざれば人知らず、我今其說に代る。
良將大敵に臨み、前んで千萬の卒を驅る。
一簞河に投じて飲ましむ、死に赴いて心一の如し。
壯士匕首を磨し、勇憤氣咆勃たり。
一酣讐に報ゆるを忘れ、四體骨無きが如し。
東海孝婦を殺し、天旱して年月を踰ゆ。
一たび酌んで其魂に酹すれば、通宵雨歇ます。
咸陽秦獄の氣、寃痛結んで物と爲る。
千歲肯て散せず、一沃亦銷失す。
況んや茲兒女の恨、及び彼幽憂の疾、
快飲すれば消せざる無し、霜の春日を得るが如し。
方に知る麴蘖の靈、萬物與に匹する無きを。

【字解】〔一〕湛湛　なみなみとたたへる。〔二〕一簞云云　黃石公記に、昔良將有饋簞醪者、投於河、令將士迎流飲之とある。〔三〕匕首　短刀。〔四〕咆勃　怒る貌。〔五〕東海　郡の名。事は漢書于定國傳に見ゆ。〔六〕一沃　一たび酒をそそぐ。〔七〕麴蘖　酒をいふ。

【詩意】なみなみと樽に湛へた酒には色色功德があるが、自ら伐らないから誰も知る者はない。今余は酒に代つて其功を述べてやらう。昔良將が大敵に臨み進んで千萬の卒を驅りし時、酒食を河に投じ流を迎へて飲食せしめた所が、士卒が死を物ともせずに心を一にして奮戰した。また壯士が匕首を磨ぎすまし勇憤の心を抱いて讐をつけ狙つたが、一醉すると忽ち讐を討つのを忘れ、さしもの勇氣も挫けてしまつた。また東海郡で孝婦を殺したので、その祟か年を踰えて旱魃が續いた。因つて酒を酹いで其魂を祭つた所が、夜どほし大雨が降つた。また秦の都の咸陽では獄氣が結んで變怪となり永く消えなかつたが、一たび酒を沃いだ爲に忽ち消え失せた。酒にはかかる大功德があるのだから、まして女女しい恨や幽憂の情などは、一杯飲みさへすれば春日の前の霜のやうに消えてしまふ。ここに於てか酒の效能は何物も匹敵し難いことがわかる。

〔十一〕

煙霞隔（一）玄圃。風波限（二）瀛洲。

〔十一〕

煙霞玄圃を隔て、風波瀛洲を限る。

我豈不欲往。大海路阻脩。　我豈に往くを欲せざらんや、大海路阻つて脩し。
神仙但聞說。靈藥不可求。　神仙は但だ說のみを聞き、靈藥は求む可からず。
長生無得者。擧世如（三）蜉蝣。　長生は得る者無し、世を擧げて蜉蝣の如し。
逝者不重廻。存者難久留。　逝く者は重ねて廻らず、存する者は久しく留まり難し。
踟躕未死間。何苦懷百憂。　踟躕して未だ死せざる間、何を苦んで百憂を懷く。
念此忽內（四）熱。坐看成白頭。　此を念うて忽ち內熱し、坐ながら白頭と成るを看る。
擧盃還獨飮。顧影自獻酬。　盃を擧げて還た獨り飮み、影を顧みて自ら獻酬す。
心與口相約。未醉勿言休。　心口と相約す、未だ醉はざるに休めよと言ふ勿れと。
今朝不盡醉。知（五）有明朝不。　今朝醉を盡さず、知る明朝有りや不や。
不見郭門外。（六）纍纍墳與丘。　見ずや郭門の外、纍纍たる墳と丘と。
月明愁殺人。（七）黃蒿風颼颼。　月明人を愁殺す、黃蒿風颼颼たり。
死者若有知。悔不（八）秉燭遊。　死者若し知る有らば、燭を秉つて遊ばざりしを悔いん。

【字解】【一】玄圃　崑崙山上にある仙人の居る處。【二】瀛洲　東海中に在る三仙山の一。【三】蜉蝣　かげろふ、極めて短命な蟲なり。【四】內熱　心の煩熱すること。【五】知　知らずの意。【六】纍纍　ごろごろとかさなる貌。墳丘は墓。【七】黃蒿　よもぎの類の草。墓上に生ずるもの。颼颼は風の聲。【八】秉燭遊　あかりをつけて夜まで遊ぶ。

【詩意】玄圃は煙霞に隔てられ、瀛洲は風波に遮られてゐる。かかる仙境に往きたくないわけではないが、海路遠く隔つて往くべき由もない。且つ神仙の事は話にこそ聞いてゐるが、不老長生の靈藥などは實に得られるものではないので、世間の人は誰でも皆蜉蝣のやうな果敢ない命を持つに過ぎないのだ。又一旦死ねば再び還ることは出來ず、生きてゐる者も永く留ることは出來ない。長くもない人世に、人は何故彼此と憂を抱くのであらうか。此事を考へると忽ち心中が煩熱して、見る間に白髮頭になるやうだ。因つて之を慰めようと、杯を擧げ影を顧みて獨酌し、先づ心が口と約束して、醉はないうちは罷めろとは言はぬことにする。今朝醉を盡さずにゐて、さて、明朝まで生きてゐるものやら其保證は出來ないのだ。見たまへ郊外に一歩踏み出すと纍纍として墓があるではないか。而も月が淋しく照し蓬が風にゆられてゐる。死者が若しかくと知つたら、生前に燭をつけて夜まで遊ばなかつたことを悔いるであらう。

〔十二〕

吾聞潯陽郡。昔有（一）陶徵君。　吾聞く潯陽郡、昔陶徵君有り。

閒適　效陶潛體詩十六首幷序

愛酒不愛名。憂醒不憂貧。　酒を愛して名を愛せず、醒むるを憂へて貧しきを憂へず。
嘗爲彭澤令。在官纔八旬。　嘗て彭澤の令と爲り、官に在ること纔に八旬。
（一）憮然忽不樂。掛印著公門。　憮然として忽ち樂まず、印を掛けて公門に著く。
口吟（三）歸去來。頭戴（四）漉酒巾。　口に歸去來を吟じ、頭に漉酒巾を戴く。
人吏留不得。直入故山雲。　人吏留むれども得ず、直ちに故山の雲に入る。
歸來（五）五柳下。還以酒養眞。　五柳の下に歸り來り、還酒を以て眞を養ふ。
人間榮與利。擺落如泥塵。　人間榮と利と、擺ひ落して泥塵の如くす。
先生去已久。紙墨有遺文。　先生去りて已に久し、紙墨遺文有り。
篇篇勸我飲。此外無所云。　篇篇我に飲を勸む、此外云ふ所無し。
我從老大來。竊慕其爲人。　我老大より來、竊に其人と爲りを慕ふ。
其他不可及。且傚（六）醉昏昏。　其他は及ぶ可からず、且く醉うて昏昏たるに傚ふ。

【字解】【一】陶徵君　陶淵明をいふ。徵君とは詔によつて徵召された人をいふ。【二】憮然　憂ふる貌。【三】歸去來　陶淵明は官を辭し歸去來辭を作り鄉里に歸つた。【四】漉酒巾　陶淵明は頭巾で酒をこしたといふ。【五】五柳　陶淵明の宅邊に五本の柳あり、因つて自ら五柳先生と號した。【六】醉昏昏　前後不覺に昏醉すること。

【詩意】昔潯陽郡に陶淵明といふ人があつた。酒を好んで名利を好まず、醒むるを憂へて貧を憂へず、嘗て彭澤縣令となつたが僅に八十日で官吏生活がいやになり、印綬を役所の門に掛け歸去來辭を吟じ、酒を漉す巾を頭に戴いて、人の引き留むるをも聽かずに故鄉に歸り、五柳の下の家に住んで酒を以て天眞を養ひ、世間の榮利を泥土の如くに擲ち去つた。其死後に詩文を遺して行つたが、篇篇皆我に飲酒を勸め、その外には何も言ふ所はない。我は老來その人となりを慕ひ、他の點は到底及ばないが、昏昏として醉臥することだけは彼に傚つてゐる。

〔十三〕

楚王疑忠臣。江南放（一）屈平。　楚王は忠臣を疑ひ、江南に屈平を放つ。
晉朝輕高士。林下棄（二）劉伶。　晉朝は高士を輕んじ、林下に劉伶を棄つ。
一人常獨醉。一人常獨醒。　一人は常に獨り醉ひ、一人は常に獨り醒む。
醒者多苦志。醉者多歡情。　醒むる者は苦志多く、醉ふ者は歡情多し。
歡情信獨善。苦志竟何成。　歡情信に獨り善し、苦志竟に何をか成す。

(三)兀傲甕間臥。(四)憔悴澤畔行。　兀傲して甕間に臥し、憔悴して澤畔を行く。

彼憂而此樂。道理甚分明。　彼は憂へて此は樂む、道理甚だ分明なり。

願君且飲酒。勿思(五)身後名。　願はくは君且く酒を飲め、身後の名を思ふ勿れ。

【字解】【一】屈平　屈原なり。【二】劉伶　字は伯倫、酒を縱にして放逸なり、嘗て酒德頌を著す。【三】兀傲　傲然としておごること。甕間は酒瓶の間。【四】憔悴　痩せ衰へる貌。【五】身後　死後なり。

【詩意】楚王は忠臣屈平を疑つて江南に流し、晉朝では高士劉伶を輕んじて林下に置いた。劉伶は常に醉ひ屈平は常に醒めてゐた。醒むる者は憂苦が多く醉ふ者は歡情が多い。歡情は信に善いが憂苦はつまらない。劉伶は酒瓶の間に傲然と構へてゐたが、屈平は憔悴して澤畔にさまよつた。屈平は憂へて劉伶は樂んだ。その道理は甚だ明かなことで、酒を飲むと否とに由るのである。願はくは諸君、ともかくも酒を飲むがよい。死後の名などはどうでもよいではないか。

〔十四〕

有一(一)燕趙士。言貌甚奇瓌。　一の燕趙の士有り、言貌甚だ奇瓌なり。

日日酒家去。脫衣(二)典數盃。　日日に酒家に去り、衣を脫いで數盃に典す。

問君何(三)落魄。云僕生(四)草萊。　問ふ君何ぞ落魄すると、云ふ僕草萊に生れ、

地寒命且薄。徒抱(五)王佐才。　地寒にして命且つ薄し、徒に王佐の才を抱く。

豈無濟時策。君門乏良媒。　豈に時を濟ふ策無からんや、君門良媒に乏し。

(六)三獻寢不報。遲遲空手廻。　三獻寢めて報せられず、遲遲として手を空しくして廻る。

亦有同門生。先升(七)靑雲梯。　亦た同門の生有り、先づ靑雲の梯に升る。

貴賤交道絕。(八)朱門叩不開。　貴賤交道絕え、朱門叩けども開かず。

及歸種禾黍。三歲旱爲灾。　歸つて禾黍を種うるに及び、三歲旱して灾を爲す。

入山燒(九)黃白。一旦化爲灰。　山に入りて黃白を燒く、一旦化して灰と爲る。

(一〇)蹉跎五十餘。生世苦不諧。　蹉跎たり五十餘、世に生れて苦だ諧はず。

處處去不得。却歸酒中來。　處處去り得ず、却つて酒中に歸り來る。

【字解】【一】燕趙士　燕趙は古の國の名、この地悲歌慷慨の士を出す。【二】典　質に入れること。【三】落魄　おちぶれる。【四】草萊　草深い田舍。【五】王佐　天子を輔佐する。【六】三獻　三たび文章を獻じて登庸を願ふこと。【七】靑雲　高位に喩ふ。【八】朱門　朱塗の門、貴人の家。【九】黃白　仙藥なり。【一〇】蹉跎　つまづく貌。

【詩意】一人の燕趙の地に生れた傑士がある。その言貌竝に奇偉である。毎日酒屋に往き著物を脫ぎ

質に入れて酒を飲む。なぜ君はそんなに落ちぶれたのかと問へば、答へていふには、僕は草深い田舍に生れ、身分も卑く運も拙いが、王佐の才を抱き世を濟ふ策も持つてゐる。が、良い媒介者を得ないので、三度ほど文を獻上して採用を願つたが、梨の礫で音も沙汰もなく、手を空しうしてすごすごと還つた。我が同門の男で先に高位に升つた者がある。が、今では身分の高下が出來てしまつたので交も絶え、たまに訪れても會つてもくれない。歸つて百姓を始めたが三年も旱が續いて收穫はない。山にはひつて仙藥を燒いて見たが、出來そこねて灰になつてしまつた。する事なす事失敗に終つて五十餘の齡を重ね、何をしても成らずじまひだ。と言つて外によい分別も出ず、酒中に歸つて安住の地としてゐるのだ。

〔十五〕

南巷有貴人。(一)高蓋駟馬車。
我問何所苦。四十垂白鬚。
答云君不知。位重多憂虞。
北里有寒士。(二)甖牖繩爲樞。
出扶桑藜杖。入臥蝸牛廬。
散賤無憂患。心安體亦舒。
東鄰有富翁。(三)藏貨徧五都。
東京收粟帛。西市鬻金珠。
朝營暮計算。晝夜不安居。
西舍有貧者。匹婦配匹夫。
布裙行賃舂。(四)裋褐坐傭書。
以此求口食。一飽欣有餘。
貴賤與貧富。高下雖有殊。
憂樂與利害。彼此不相踰。
是以達人觀。(五)萬化同一途。
但未知生死。勝負兩何如。
遲疑未知間。且以酒爲娛。

〔十五〕

南巷に貴人有り、高蓋駟馬の車。
我問ふ何の苦む所ぞ、四十にして白鬚を垂ると。
答へて云ふ君知らずや、位重くして憂虞多しと。
北里に寒士有り、甖牖にして繩を樞と爲す。
出でては桑藜の杖に扶り、入りては蝸牛の廬に臥す。
散賤にして憂患無く、心安く體も亦舒ぶ。
東鄰に富翁有り、藏貨五都に徧し。
東京に粟帛を收め、西市に金珠を鬻ぐ。
朝に營し暮に計算し、晝夜安居せず。
西舍に貧者有り、匹婦匹夫に配す。
布裙行いて賃舂し、裋褐にして坐ながら傭書す。
此を以て口食を求め、一飽欣び餘り有り。
貴賤と貧富と、高下殊なる有りと雖も、
憂樂と利害と、彼此相踰えず。
是を以て達人の觀は、萬化同一途。
但だ未だ生死を知らず、勝負兩ながら何如。
遲疑して未だ知らざるの間、且く酒を以て娛と爲さん。

【字解】【一】高蓋　蓋は車上に立てて日光を蔽ふもの。【二】甕牖　破瓶の縁を壁にぬり込んで窗にすること、貧居のさま。【三】褐　粗服なり、傭書は雇はれて筆耕すること。【四】藏貨　所有する品物。五都は長安・洛陽・鳳翔・江陵・太原をいふ。【五】萬化　宇宙間の萬物。

【詩意】南巷に貴人があつて、いつも馬車に乗つて出入する。あなたは何の苦勞があつて四十ぐらゐで白鬚を垂れてゐるのかと問うた所が、君は知るまいが、位が高いと苦勞も多いのだとの答であつた。また北里に貧士があつて、破甕の牖に繩の樞の破家に住み、出るには藜の杖をつき、入つては蝸牛のやうな庵に臥し、身分こそ賤いが心には何の苦勞もない。心が安らかだから體ものびのびとしてゐる。また東鄰には富翁がゐる。その所藏する貨物は五都に偏く、東京には粟帛を收藏し、西市には金珠を賣つてゐる。朝から晩まで營業と計算とに追ばれて、安居する暇はない。また西鄰には貧者がゐる。夫婦かけむかひで婢妾もなく、妻は布裙を垂れて米舂に雇はれ、夫は粗服をまとうて筆耕を營み、不足なく日日の糧にありついて欣欣として世を送つてゐる。此に由つて考へて見ると貴賤と貧富とは高下の相違はあるが、憂樂と利害とは格別の相違はないやうだ。されば達人は萬物を同一視して優劣を其間に置かない。ただ壽命の長短はまだわからないが、わからずに遲疑してゐる間、酒でも飲んで娛むと致さう。

〔十六〕

〔十六〕

濟水澄而潔。河水渾而黃。　濟水は澄みて潔く、河水は渾りて黃なり。
交流列四瀆。清濁不相傷。　交流して四瀆に列り、清濁相傷はず。
太公戰牧野。伯夷餓首陽。　太公は牧野に戰ひ、伯夷は首陽に餓う。
同時號賢聖。進退不相妨。　時を同じうして賢聖と號す、進退相妨げず。
謂天不愛民。胡爲生稻粱。　天民を愛せずと謂はば、胡爲ぞ稻粱を生ずる。
謂天果愛民。胡爲生豺狼。　天果して民を愛すと謂はば、胡爲ぞ豺狼を生ずる。
謂神福善人。孔聖竟栖遑。　神善人に福すと謂はば、孔聖竟に栖遑たり。
謂神禍淫人。暴秦終霸王。　神淫人に禍すと謂はば、暴秦終に霸王たり。
顏回與黃憲。何辜早夭亡。　顏回と黃憲と、何の辜ありてか早く夭亡する。
蝮蛇與鴆鳥。何得壽延長。　蝮蛇と鴆鳥と、何を得てか壽延長なる。
物理不可測。神道亦難量。　物理測る可からず、神道亦量り難し。
擧頭仰問天。天色但蒼蒼。　頭を擧げ仰いで天に問へば、天色但だ蒼蒼たり。
唯當多種黍。日醉手中觴。　唯當に多く黍を種ゑ、日に手中の觴に醉ふべし。

【字解】【一】濟水　川の名。【二】河水　黃河【三】四瀆　四つの大川。江・淮・河・濟をいふ。【四】太公　太公望。【五】栖遑　急迫の貌。【六】黃憲　後漢の人、字は叔度、當時の名賢なり。【七】鴆鳥　羽に毒ある鳥。

【詩意】濟水は澄んで淸く、黃河は濁つて黃色であるが、共に四瀆の中に數へられて、淸と濁と相傷ふことがない。太公望は周の武王を輔けて殷の紂王と牧野に戰ひ、伯夷・叔齊は武王に仕へることを屑しとせず、首陽山に隱れて餓死したが、共に聖賢と稱せられて肩を比べてゐる。若し天は民を愛せずといふならば、なせ民を養ふ穀物などを生ずるのであらうか。若又民を愛するといふならば、なせ民生を害する豺狼などを生ずるのであらうか。神は善人に福を與へるといふならば、孔子の如き聖人が急迫の間に一生を終つたのはなせであらうか。神は惡人に禍するといふならば、暴秦の始皇などが天子になつたのはなせであらうか。顏回や黃憲のやうな賢人は何罪があつて夭死したのか。蝮や鴆は何德があつて長生したのであらうか。物理天道は矛盾に滿ちて其眞意が少しもわからない。頭を擧げて天に問へば、ただ靑靑としてゐるだけで何の答もない。されば天事は措いて問はず、ただ當に黍を作つて酒を釀し、每日盃を手にして陶然としてゐるがよいのだ。

【餘論】捫蝨新語に、「山谷（宋の詩人黃山谷）常に謂ふ、白樂天・柳子厚皆詩を作ること淵明に效ふ、而して子厚を近しとなす」とあるが、汪立名は此に對して、「予を以て之を觀るに、子厚は語近くして氣近からず、樂天は學近くして語近からず、各其一を得たり」と謂つてゐる。

白樂天詩集　卷六

閒適二　古調詩四十五首

自題寫眞　時爲翰林學士。

自ら寫眞に題す　時に翰林學士たり

我貌不自識。李放寫我眞。
我が貌自ら識らず、李放我が眞を寫す。

靜觀神與骨。合是山中人。
靜に神と骨とを觀れば、合に是れ山中の人なるべし。

蒲(一)柳質易朽。麋(二)鹿心難馴。
蒲柳質朽ち易く、麋鹿心馴れ難し。

何事赤(三)墀上。五年爲侍(四)臣。
何事ぞ赤墀の上、五年侍臣と爲る。

況多剛狷性。難與世同(五)塵。
況んや剛狷の性多く、世と塵を同じうし難し。

不惟非貴(六)相。但恐生禍因。
惟貴相に非るのみならず、但恐らくは禍を生ずる因ならんことを。

宜當早罷去。收取雲(七)泉身。
宜しく當に早く罷め去り、雲泉の身を收取すべし。

【字解】【一】蒲柳 かはやなぎ、體質の虛弱なるをいふ。【二】麋鹿 麋は鹿の類の獸。【三】赤墀 宮殿の階庭は丹漆を以て塗る、故に赤墀、又は丹墀といふ。【四】侍臣 翰林學士をいふ。翰林學士は禁廷に侍直し、專ら制誥を司る。【五】同塵 調子を合せてゐること。老子に和光同塵とある。【六】貴相 貴位にのぼるべき相。【七】雲泉身 山中に住むべき身。

【題義】李放の畫いた樂天の肖像畫に題した詩である。

【詩意】我が容貌は自ら識らなかつたが、李放が我が肖像を畫いてくれたので、靜に風神骨格を觀察するに、どうしても山中に住むべき人柄である。身は虛弱で朽ち易く、心は粗野で馴れ難い。それが誤つて宮闕に侍して已に五年になる。且つ剛愎狷介の性質は世と相容れない。ひとり貴人たるの相がないのみならず、ともすれば禍を招く機因ともなりかねない相貌である。宜しく早く罷め去つて、山中の身を全うするがよいのである。

遣懷

自此後詩、在渭村作。

寓心身體中。寓性方寸內。
此身是外物。何足苦憂愛。
況有假飾者。華簪及高蓋。

懷を遣る 此より後の詩は、渭村に在りて作る

心を身體の中に寓し、性を方寸の內に寓す。
此身は是れ外物なり、何ぞ苦に憂愛するに足らん。
況んや假飾する者有り、華簪及び高蓋。

此又疎於身。復在外物外。
操之多惴慄。失之又悲悔。
乃知名與利。得喪俱爲害。
頹然環堵客。蘿蕙爲巾帶。
自得此道來。身窮心甚泰。

此れ又身より疎なり、復外物の外に在り。
之を操れば惴慄多く、之を失へば又悲悔す。
乃ち知る名と利と、得喪俱に害を爲すを。
頹然たり環堵の客、蘿蕙を巾帶と爲す。
此道を得しより來、身窮すれども心甚だ泰かなり。

【字解】【一】方寸 心をいふ。【二】華簪 冠をとめる簪。高蓋は馬車の上に立てるオホヒ。【三】惴慄 おどろきおそれる。【四】得喪 得るも失ふも。【五】頹然 ぐつたりと安臥すること。環堵客は貧居の士なり。【六】蘿蕙 蘿は蔓草の名、蕙は香草の名。

【題義】感懷を述べて氣を霽らした詩である。

【詩意】心を身體の中に寄託し、性を心の中に寄託する。此身は即ち是れ外物である。敢て心を勞して憂愛するには及ばないものだ。況んや衣冠だの車馬だのといふ假の飾はなほさらで、此等は皆此身よりも尙ほ一層疎遠なもので、即ち外物の中の又外物に過ぎない。殊に官位を得て衣冠車馬にありつけば職責の爲に心を勞し、又之を失へば失つたで悲悔する。されば名利といふものは、得ても失つても、俱に心の害をなすものだといふことがわかる。ただ彼の道を樂んで貧に安んずるの士は、蘿蕙を

以て巾帶となし、物外に超然として安臥してゐる。我も此道を悟つてからは身は困窮してゐるが心は甚だ安泰である。

渭上偶釣

(一)渭水如鏡色。中有鯉與魴。
偶持一竿竹。懸釣在其傍。
微風吹釣絲。(二)嫋嫋十尺長。
身雖對魚坐。心在(三)無何鄕。
昔有白頭人。亦釣此(四)渭陽。
釣人不釣魚。七十得文王。
況我垂釣意。人魚亦兼忘。
(五)無機兩不得。但弄秋水光。
興盡釣亦罷。歸來飮我觴。

渭上偶釣

渭水鏡色の如し、中に鯉と魴と有り。
偶一竿の竹を持し、釣を懸けて其傍に在り。
微風釣絲を吹き、嫋嫋として十尺長し。
身は魚に對して坐すと雖も、心は無何の鄕に在り。
昔白頭の人有り、亦此渭陽に釣る。
人を釣りて魚を釣らず、七十にして文王を得たり。
況んや我が釣を垂るるの意、人魚亦兼ね忘るるをや。
機無ければ兩つながら得ず、但秋水の光を弄す。
興盡きて釣も亦罷む、歸り來つて我が觴を飮む。

【字解】【一】渭水　川の名。【二】嫋嫋　風に動く貌。【三】無何鄕　莊子逍遙游篇に、無何有之鄕、廣莫之野とある。無我の境といはんが如し。【四】渭陽　渭水の北。【五】無機　巧詐の心のないこと。莊子に有機事者、必有機心とある。

【題義】渭水の上に偶釣魚を試みて感懷を述べたのである。

【詩意】渭水の流は鏡のやうに淸らかである。その中に鯉だの魴だのといふ魚がゐる。余は偶然一本の釣竿を持つて渭水の傍にでかけた。十尺も長さのある釣絲を微風が吹き靡かすのも面白い。吾が身は魚に對して坐してはゐるが、心は無我の境に在る。昔太公望といふ白髮の老人も、この渭水の北で釣をしたが、魚を釣らないで人を釣り、卽ち周の文王といふ知己を得た。所が余の釣するのは、人を釣らうといふのでもなければ、魚を釣らうといふのでもない。本來機心を持たないのだから人も魚も得られる筈がない。ただ秋水の光を眺めて心を慰めるだけだ。故に興が盡きれば釣をやめて歸り來り、酒を飮んでは樂んでゐる。

隱几

身適忘(一)四支。心適忘是非。
既適又忘適。不知吾是誰。

几に隱る

身適すれば四支を忘れ、心適すれば是非を忘る。
既に適すれば又適を忘る、知らず吾是れ誰ぞ。

百體如槁木(二)。兀然(三)無所知。　百體槁木の如く、兀然として知る所無し。
方寸(四)如死灰。寂然無所思。　方寸死灰の如く、寂然として思ふ所無し。
今日復明日。身心忽兩遺。　今日復た明日、身心忽ち兩つながら遺る。
行年三十九。歲暮日斜時。　行年三十九、歲暮れ日斜なる時。
(五)四十心不動。吾今其庶幾。　四十にして心動かず、吾今其れ庶幾し。

【字解】【一】四支　四肢なり、手足をいふ。【二】槁木　枯木なり。莊子に形固可使如槁木云云とある。【三】兀然　端坐する貌。【四】方寸　心をいふ。死灰は、つめたくなつた灰。莊子に心固可使如死灰乎とある。【五】四十云云　孟子に、吾四十不動心とある。

【題義】几は脇息の類、座傍に置き臂を掛け體を支ふるものである。莊子の齊物論に、「南郭子綦几に隱りて坐し、天を仰いで噓す。嗒然として其耦を喪ふに似たり云云」とある。この篇も同趣意で心が寂然として動搖せず、心身兩つながら忘れた境地を述べたのである。

【詩意】身が快適になれば手足を忘れ、心が快適になれば事の是非を忘れ、心身の快適を得れば、快適その物をも忘れ、全く己を忘れるものである。卽ち身體は枯木の如くに無感覺になり、心は冷灰の如くに無思慮になる。每日每日心も身も忘れて三十九年を送り、今、歲の暮の夕日に對してゐる。孟子は四十にして心を動かさずと謂つたが、吾もどうやら孟子ぐらゐにはなれさうだ。

春眠

新浴肢體暢。獨寢神魄(一)安。　新に浴して肢體暢び、獨り寢ねて神魄安し。
況因夜深坐。遂成日高眠。　況んや夜深るまで坐するに因りて、遂に日高るまで眠るを成すをや。
(二)春被薄亦暖。朝窻深更閑。　春被薄きも亦暖に、朝窻深くして更に閑なり。
却忘人間事。似得枕上仙。　却つて人間の事を忘れ、枕上の仙を得るに似たり。
至適無夢想。大和(三)難名言。　至適は夢想無く、大和は名言し難し。
全勝彭澤(四)醉。欲敵曹溪(五)禪。　全く彭澤の醉に勝り、曹溪の禪に敵せんと欲す。
何物呼我覺。伯勞(六)聲關關。　何物か我を呼び覺ます、伯勞聲關關たり。
起來妻子笑。生計(七)春茫然。　起き來れば妻子笑ふ、生計春茫然たり。

【字解】【一】神魄　心なり。【二】春被　春の夜具。【三】大和　心の和樂。【四】彭澤　縣の名、陶淵明彭澤縣令となる。【五】曹溪　梁の天監元年、僧智藥、舶を泛べて韶州曹溪の水口に至り、其香を聞き其味を嘗めて曰く、此水の上流に勝地ありと。歲

に山を開き寺を建つ後、禪宗の第六祖慧能禪師此に住す。【六】伯勞　鳥の名、もず。關關は鳥の聲。【七】生計　生活なり。

【題義】春の朝寢の趣致を述べた詩である。

【詩意】湯にはひると體がぐつたりとし、獨り寢れば心も安く、まして夜遲くまで起きてゐたので、朝は日の高くのぼるまで寢込んでしまつた。春であるから夜具が薄くとも暖く、室は奧まつた處に在るから朝になつても靜である。全く世間の煩を忘れて寢ながら仙人にでもなりさうだ。心身が快適であるから夢なども見ず、その和平さは名狀することは出來ない。淵明の醉興にも曹溪の禪味にも勝つてゐる。關關と鳴く伯勞の聲に我が眠を呼び覺されて起きて來ると、妻子にも笑はれるやうな狀態で、春の生活は全く以て茫然頽然である。

閑居

空腹一盞粥。飢食有餘味。　空腹一盞の粥、飢食餘味有り。

南簷半牀日。暖臥因成睡。　南簷半牀の日、暖に臥して因つて睡を成す。

綿袍擁兩膝。竹几支雙臂。　綿袍兩膝を擁し、竹几雙臂を支ふ。

從旦直至昏。身心一無事。　旦より直に昏に至るまで、身心一に事無し。

心足卽爲富。身閑乃當貴。　心足れば卽ち富たり、身閑にして乃ち貴に當る。

富貴在此中。何必居高位。　富貴此中に在り、何ぞ必ずしも高位に居らん。

君看裴相國。金紫光照地。　君看よ裴相國、金紫の光地を照らす。

心苦頭盡白。纔年四十四。　心苦みて頭盡く白し、纔に年四十四。

乃知高蓋車。乘者多憂畏。　乃ち知る高蓋の車、乘る者憂畏多きを。

【字解】【一】一盞　一椀なり。【二】竹几　竹で造つた脇息。【三】裴相國　宰相裴氏。【四】金紫　金印紫綬。【五】高蓋　蓋は車上に立てるおほひ。

【題義】閑居無事の至樂境を述べた詩である。

【詩意】腹のすいた時一椀の粥をすすれば、何ともいへぬ甘味がある。又南の簷の半日のあたる寢臺に横はつてゐると、いつしか夢路にはひつてしまふ。木綿の袍で膝をくるみ、竹の脇息に臂を支へて、爲す事もなく朝から晩まで日を送つてゐると、心に不足がないから富んでゐるやうな氣がする。又身が閑であるから貴人と同じである。富貴は要するに吾自身に在るので、必ずしも高位にのぼるには及ばない。その證據には、かの裴相國などは紫綬金印を垂れて榮華を極めたが、心はいつも國事に勞苦して、僅に四十四歲で死んでしまつたではないか。されば高蓋の馬車に乘る人は心に憂が絕えないこ

とがわかる。

夏日

夏日

東牕晩無熱。北戸涼有風。　東牕晩に熱無し、北戸涼しくして風有り。

盡日坐復臥。不離一室中。　盡日坐して復臥す、一室の中を離れず。

中心本無繋。亦與出門同。　中心本繋がる無く、亦門を出づると同じ。

【字解】(一) 盡日　終日に同じ。

【題義】夏日閑居の樂を述べたのである。

【詩意】東の窓は夕方は熱くなくなり、北の戸口は涼風がよく通る。一日中そちらに行つて坐つたりこちらに行つて臥したりして、一室の中を往來してゐる。心が何物にも束縛されてゐないから、一室の中に閉ぢ籠つてゐても門外に出たと同じである。

適意二首

適意二首

十年爲旅客。常有飢寒愁。　十年旅客と爲り、常に飢寒の愁有り。

三年作諫官。復多尸素羞。　三年諫官と作り、復尸素の羞多し。

有酒不暇飮。有山不得遊。　酒有れども飮むに暇あらず、山有れども遊ぶを得ず。

豈無平生志。拘牽不自由。　豈に平生の志無からんや、拘牽せられて自由ならず。

一朝歸渭上。泛如不繋舟。　一朝渭上に歸り、泛たること繋がざる舟の如し。

置心世事外。無喜亦無憂。　心を世事の外に置き、喜も無く亦憂も無し。

終日一蔬食。終年一布裘。　終日一蔬食、終年一布裘。

寒來彌懶放。數日一梳頭。　寒來れば彌懶放、數日一たび頭を梳る。

朝睡足始起。夜酌醉卽休。　朝には睡足りて始めて起き、夜は酌み醉へば卽ち休す。

人心不過適。適外復何求。　人心は適に過ぎず、適外復何をか求めん。

【字解】(一) 尸素　尸位素餐の略。無爲無能にして官職に居ること。(二) 渭上　渭水のほとり。(三) 蔬食　菜食なり。

【題義】心に任せ情に隨つて快を取ることを述べた詩である。

【詩意】十年間旅客となつて常に飢寒の愁を抱いてゐたが、三年間諫官となり復た尸位素餐の羞を被ることになつた。酒はあつても飮む暇もなく、山はあつても遊ぶことも出來ず、平生の志は、すべて

拘牽せられて自由を奪はれてゐたが、一旦渭上に退居してからは繋がざる舟と同じで何等の拘束がなく、世事に頓著しないから、喜もないかはりには憂もない。粗衣粗食で年月を送り、殊に寒くなると益懶くなつて、髪なども數日に一回櫛を入れるくらゐのものだ。朝は十分に睡が足りてから始めて起き、夜は酒に醉ふとすぐに寢てしまふ。要するに人の心は快適を得ることが大事だ。心の快適より外には何も求むべきものはない。

〔二〕

(一)早歳從旅遊。頗諳時俗意。　早歳旅遊に從ひ、頗る時俗の意を諳んず。

中年忝(二)班列。備見朝廷事。　中年班列を忝うし、備に朝廷の事を見る。

作客誠已難。爲臣尤不易。　客と作る誠に已に難し、臣と爲る尤も易からず。

況余方且(三)介。擧動多(四)忤累。　況んや余方にして且つ介、擧動忤累多きをや。

直道速我尤。(五)詭遇非吾志。　道を直くして我が尤を速くも、詭遇は吾が志に非ず。

胷中十年內。消盡(六)浩然氣。　胷中十年の內、浩然の氣を消盡す。

自從返(七)田畝。頓覺無憂媿。　田畝に返りてより、頓に憂媿無きを覺ゆ。

蟠木用難施。浮雲心易遂。　蟠木は用施し難く、浮雲は心遂げ易し。

(八)悠悠身與世。從此兩相棄。　悠悠たり身と世と、此より兩つながら相棄てん。

【字解】〔一〕早歳　わかい時。〔二〕班列　官位。〔三〕方且介　方正狷介。〔四〕忤累　人の心にさからふ。〔五〕詭遇　道をまげて人に迎合すること。〔六〕浩然氣　道德的勇氣。孟子に見ゆ。〔七〕田畝　田園。渭村を指していふ。〔八〕悠悠　閒暇の貌。

【詩意】少い時から各地を歷遊したので頗る世間の事情にも通じた。中年になつて官職に就き朝廷に奉仕した。客となつて世間を涉りあるくのも苦しいが、臣となつて君に仕へるのも仲仲樂ではない。まして余は方正狷介で擧動が人意に忤ふやうな事もあつて、正しい道を行へば人の尤を招き、道を枉げて迎合すれば吾が志に悖る。こんな狀態で十年の間に殆ど浩然の氣を消耗したが、この渭村に退居してからは始めて憂媿を免れることが出來た。余が身は蟠木の如く實用には立たないが、心は浮雲の如く無慾であるから遂げ易い。今後は身も世も兩つながら棄てて呑氣に暮すとしよう。

首夏病閒

首夏の病閒

我生來幾時。(一)萬有四千日。　我生れてより來幾時ぞ、萬有四千日。

自省於其間。非憂卽有疾。　自ら其間を省みるに、憂に非ざれば卽ち疾有り。
老去慮漸息。年來病初愈。　老い去つて慮り漸く息み、年來りて病初めて愈ゆ。
忽喜身與心。泰然兩無苦。　忽ち喜ぶ身と心と、泰然として兩ながら苦無きを。
況茲孟夏(二)月。清和(三)好時節。　況んや茲の孟夏の月、清和の好時節。
微風吹袷(四)衣。不寒復不熱。　微風袷衣を吹き、寒からず復熱からず。
移榻樹陰下。竟日(五)何所爲。　榻を樹陰の下に移し、竟日何の爲す所ぞ。
或飮一甌(六)茗。或吟兩句詩。　或は一甌の茗を飮み、或は兩句の詩を吟ず。
內無憂患迫。外無職役羈。　內に憂患の迫る無く、外に職役の羈す無し。
此日不自適。何時是適時。　此日自ら適せずんば、何の時か是れ適時ならん。

【字解】【一】萬有四千日　一萬四千日。一年を三百六十日として約三十九年なり。【二】孟夏　初夏をいふ。【三】清和　四月初夏の季節をいふ。【四】袷衣　袷に同じ、あはせ。【五】竟日　終日。【六】一甌　一椀なり。

【題義】初夏の好季節に病の癒えたことを悅んだ詩である。

【詩意】余は此世に生れてから既に一萬四千日になる。自ら其間の狀態を省みるに、憂に惱まされるか然らずば病に苦められて來た。近來年を取つて思慮が定まつて來て、今年になつてからは病氣もなほつた。乃ち身も心も安安として苦みのないのを自ら喜んでゐる。況んや四月清和の好時節で、微風が袷衣を吹き寒からず熱からず、快きかぎりである。因つて綠樹の下に榻を移して、或は茶を啜つたり詩を吟じたりして日を送つてゐると、心には少しも憂患がなく、身には何等の拘束もない。この時に自ら心を悅ばさなければ、いつ悅ばすであらうか。

晚春沽酒

晚春酒を沽ふ

百花落如雪。兩鬢垂作(一)絲。　百花落ちて雪の如し、兩鬢垂れて絲と作る。
春去有來日。我老無少時。　春去れども來る日有り、我老ゆれば少き時無し。
人生待富貴。爲樂常苦遲。　人生富貴を待てば、樂を爲すこと常に苦だ遲し。
不如貧賤日。隨分開愁眉。　如かず貧賤の日、分に隨つて愁眉を開かんには。
賣我所乘馬。典(二)我舊朝衣。　我が乘る所の馬を賣り、我が舊朝衣を典し、
盡將沽酒飮。酩酊步行歸。　盡く將に酒を沽うて飮み、酩酊步行して歸らんとす。
名姓日隱晦。形骸日變衰。　名姓日に隱晦し、形骸日に變衰す。

醉臥(三)黃公肆。人知我是誰。　醉うて黃公の肆に臥す、人知らんや我は是れ誰なるを。

【字解】【一】絲　白毛なり。【二】典　質におくこと。【三】黃公　世說に、王濬沖經黃公酒壚下過、顧謂後車客、吾昔與嵆叔夜、阮嗣宗共酣飮于此、今日視此、雖近邈若山河とある。

【題義】晚春酒を買つて酣飮することを述べた詩である。

【詩意】今や晚春となつて百花の落つること雪の如く、吾が兩鬢も白毛になつた。春は去つても又來るが、人は老いては再び少くはなれない。且つ富貴になつてから樂まうなどと思つてゐると、終に樂むことは出來なくなる。それゆゑ貧賤の時でも分相應に氣霽しをするがよいのだ。余も乘馬を賣り官服を質に置いて酒を飮み、醉つて步いて歸らうと思ふ。余が名も段段世間から忘れられ、容貌も日增に衰へるから、酒屋の店に醉臥してゐても、人は誰だかわかるまい。

蘭若寓居　蘭若の寓居

(一)名宦老慵求。退身安草野。　名宦老いて求むるに慵し、身を退けて草野に安んず。
家園病懶歸。寄居在(二)蘭若。　家園病んで歸るに懶し、寄居して蘭若に在り。
(三)薜衣換簪組。(四)藜杖代車馬。　薜衣簪組に換へ、藜杖車馬に代ふ。
行止輒自由。甚覺身(五)瀟灑。　行止輒ち自由、甚だ覺ゆ身の瀟灑たるを。
晨遊(六)南塢上。夜息東菴下。　晨に南塢の上に遊び、夜は東菴の下に息ふ。
人間千萬事。無有關心者。　人間千萬の事、心に關する者有る無し。

【字解】【一】名宦　名譽ある官職。【二】蘭若　寺院をいふ。【三】薜衣　薜蘿の衣。隱者の服。簪組の簪は冠をとめるカンザシ。組は冠の紐。【四】藜杖　アカザの杖。【五】瀟灑　さつぱりとして累なきこと。【六】南塢　南方の丘。

【題義】佛寺に寄寓してゐる時の生活狀態を述べた詩である。

【詩意】老いては名宦を求めようといふ氣も起らず、引退して草野の間に隱れてゐる。病んで故鄕に歸るに懶く、佛寺に寄寓することにした。薜蘿の衣を官服に換へ、藜の杖を車馬に代へて、行くも止まるも自由で、身がさつぱりしたやうに思はれる。晨には南の丘の上に遊び、夜は東の菴に休息し、世間の萬事は一切心に關することがない。

(一)麴生訪宿　麴生の訪宿

(二)西齋寂已暮。叩門聲(三)樀樀。　西齋寂として已に暮る、門を叩いて聲樀樀たり。
知是君宿來。自拂塵埃席。　知る是れ君が宿し來るを、自ら塵埃の席を拂ふ。

村家何所有。茶菓迎來客。　村家何の有る所ぞ、茶菓來客を迎ふ。
貧靜似僧居。竹林依四壁。　貧靜にして僧居に似たり、竹林四壁に依る。
厨燈斜影出。簷雨餘聲滴。　厨燈斜影出で、簷雨餘聲滴る。
不是愛閑人。肯來同此夕。　是れ閑を愛する人ならずんば、背て來りて此夕を同じうせんや。

【字解】【一】麴生　麴は姓なり。【二】西齋　西の書齋。【三】椓椓　戸を叩く聲。

【題義】麴生の來訪して遂に宿泊したことを述べた詩である。

【詩意】西の方の書齋は日が暮れてひつそりとしてゐる。所が俄に戸を叩く聲が聞える。さては君（麴生）が泊りに來たなと思つて、自ら起つて座敷の塵を掃ひ、山家のことで何もないが、茶菓を供してもてなした。家の貧靜なことは寺院のやうで、竹林が四方の壁に傍うて立ち、そこへ厨の燈が斜に光を投げ、簷の點滴の音がまだ聞える。君は閑靜を好む人なればこそ、來りて此夕を倶に樂むのであるが、君ならでは誰が來ようぞ。

聞庾七左降因詠所懷

庾七の左降を聞き因つて所懷を詠す

我病臥渭北。君老謫巴東。　我は病みて渭北に臥し、君は老いて巴東に謫せらる。
相悲一長歎。薄命與君同。　相悲んで一たび長歎す、薄命君と同じきを。
既歎還自哂。哂歎兩未終。　既に歎じて還た自ら哂ふ、哂歎兩ながら未だ終らず。
後心誚前意。所見何迷蒙。　後の心前の意を誚る、見る所何ぞ迷蒙なる。
人生大塊間。如鴻毛在風。　人の大塊の間に生るるは、鴻毛の風に在るが如し。
或飄青雲上。或落泥塗中。　或は青雲の上に飄り、或は泥塗の中に落つ。
衮服相天下。儻來非我通。　衮服天下に相たり、儻來るとも我が通に非ず。
布衣委草莽。偶去非吾窮。　布衣草莽に委す、偶去るとも吾が窮に非ず。
外物不可必。中懷須自空。　外物必とす可からず、中懷須く自ら空しうすべし。
無令怏怏氣。留滯在心胷。　怏怏の氣をして、留滯して心胷に在らしむる無かれ。

【字解】【一】左降　左遷に同じ、貶謫せられること。【二】渭北　渭水の北。【三】大塊　天地なり。【四】衮服　衮龍の衣、三公の服なり。【五】草莽　草野なり。【六】怏怏　憂悲する貌。

【題義】庾七（庾は姓、七は排行）が貶謫されると聞き、所感を述べた詩である。

【詩意】我は渭村に病臥し、君が老いて巴東に左遷せられると聞き、君も僕も共に薄命なことを悲ん

で長嘆した。併し又忽ち笑つた。笑つたり嘆いたりして、後の心が前の心を誚つた。なぜかう所見がぐらつくのか。一體人が天地の間に生れるのは鴻の毛が風に飄るやうなもので、或は幸に青雲の上に飄り、高位にのぼつて時めく者もあり、或は不幸にも泥土の中に落ち、急迫に泣く者もある。さればたとひ袞服を輝ふ身になつても、布衣を著て草野に居るとも、共に偶然の結果であつて眞の窮通ではない。要するに名利などといふ外物に心を取られてはならない。須らく心を虛にすべきである。怏怏の氣をば心胸の間に留滯せしめぬがよい。

答卜者

卜者に答ふ

病眼昏似夜。衰鬢颯(一)如秋。　病眼昏くして夜に似たり、衰鬢颯として秋の如し。
(二)除却須衣食。平生百事休。　衣食を須ふることを除却して、平生百事休す。
知君善易者。問我決疑不。　知る君は易を善くする者なるを、我に問ふ疑を決するや「不やと。」
不卜非他故。(三)人間無所求。　卜せざるは他の故に非ず、人間求むる所無し。

【字解】【一】颯　風の聲。【二】除却　のぞく。【三】人間　世間なり。

【題義】卜者に答へて己の感慨を述べたのである。

【詩意】眼を病んで物を見ても夜のやうに暗く、鬢の毛も薄くなつて蓬の秋風に靡くやうである。ただ衣食してゐるだけで、それより外は萬事衰廢してしまつた。君は易者なさうで、我に向つて一つトつてやらうかと謂はれるが、僕はトつて貰はなくても宜しい。何となれば僕はもう何も世間に望のない身の上だから。

歸田三首

歸田三首

人生何所欲。所欲唯兩端。　人生何の欲する所ぞ、欲する所唯兩端。
中人愛富貴。高士慕神仙。　中人は富貴を愛し、高士は神仙を慕ふ。
神仙須有籍(一)。富貴亦在(二)天。　神仙は須らく籍有るべし、富貴も亦天に在り。
莫戀(三)長安道。莫尋(四)方丈山。　長安の道を戀ふ莫かれ、方丈の山を尋ぬる莫かれ。
(五)西京塵浩浩。東海浪漫漫(六)。　西京は塵浩浩、東海は浪漫漫。
(七)金門不可入。(八)琪樹何由攀。　金門入る可からず、琪樹何に由りてか攀ぢん。
不如歸山下。如法種春田。　如かず山下に歸り、法の如く春田を種ゑんには。

【字解】【一】籙　道籙（道家の圖籙）をいふ。隋書に、受籙之法、初受五千文籙、次受三洞籙、次受洞玄籙、次受上清籙、文章怪誕、世所不識云云とある。【二】在天　天は天命。論語に、死生有命、富貴在天とある。【三】長安　唐の帝都。【四】方丈　東海に在る仙山。【五】西京　長安なり。浩浩は盛に塵の揚がる貌。【六】漫漫　ひろき貌。【七】金門　金馬門なり、學士待詔の處。【八】琪樹　玉樹なり、仙山に生ず。

【題義】田園生活を讃美した詩である。

【詩意】人生の欲望は唯二つに過ぎない。卽ち中人は富貴を欲し、高士は神仙を慕ふものである。併し神仙となるには圖籙を受けねばならず、富貴になるには運命がある。すぐに誰でもなれるといふわけではない。されば富貴になつて長安の大道を横行しようとか、方丈山に入つて神仙にならうなどとは思はぬがよい。長安は塵濛濛、東海は浪漫漫で近づくことは出來ない。金馬門には容易にはひれず、玉樹を攀ぢることは不可能である。やはり田園に歸臥して農耕を事とするがよい。

〔二〕

種田意已決。決意復何如。　田を種うる意已に決す、決意復何如。
賣馬買犢使。徒歩歸田廬。　馬を賣り犢を買ひて使ふ、徒歩して田廬に歸る。
迎春治耒耜。候雨闢菑畬。　春を迎へて耒耜を治め、雨を候ちて菑畬を開く。
策杖田頭立。躬親課僕夫。　杖を策いて田頭に立ち、躬親ら僕夫に課す。
吾聞老農言。爲稼愼在初。　吾老農の言を聞く、稼を爲すこと愼み初めに在り。
所施不鹵莽。其報必有餘。　施す所鹵莽ならざれば、其報必ず餘り有り。
上求奉王稅。下望備家儲。　上は王に奉ずる稅を求め、下は家に備ふる儲を望む。
安得放慵惰。拱手而曳裾。　安んぞ慵惰を放にし、手を拱いて裾を曳くを得んや。
學農未爲鄙。親友勿笑余。　農を學ぶ未だ鄙しと爲さず、親友余を笑ふ勿れ。
更待明年後。自擬執犁鋤。　更に明年の後を待ち、自ら犁を執りて鋤かんと擬すらん。

【字解】【一】耒耜　すき、農具。【二】菑畬　荒地を開墾して一歳なるを菑といひ、三歳なるを畬といふ。【三】鹵莽　粗略なり。

【詩意】で、余は農耕の決心をした。其決心は次の如くである。先づ馬を賣つて犢を買ひ、徒歩して田家に歸り、春を迎へて耒耜を治め、雨を待つて荒地を開墾し、杖を策いて田のほとりに立ち、自ら奴僕を指揮する。老農の言を聞くに、耕作は初めが大事で、初めの施設がよければ必ず十分の收穫があるさうだ。收穫があつたら、其中から御上への税を差引いて、あとは家の儲にする。なまけて著物の裾を引きずつて遊んではゐられない。農業を學ぶのは決して鄙しいことではない。わが親友だちよ

笑はずに見てゐたまへ、來年になつたら君だちも一つやつて見ようかと謂ふやうになるであらう。

〔三〕

三十爲近臣。腰間鳴佩玉。(一)　三十にして近臣と爲り、腰間に佩玉を鳴らす。
四十爲野夫。田中學鋤穀。　四十にして野夫と爲り、田中に穀を鋤くことを學ぶ。
何言十年內。變化如此速。　何ぞ言はん十年の內、變化此の如く速ならんとは。
此理固是常。窮通相倚伏。(二)　此理固に是れ常、窮通相倚伏す。
爲魚有深水。爲鳥有高木。　魚と爲りては深水有り、鳥と爲りては高木有り。
何必守一方。窘然自牽束。　何ぞ必ずしも一方を守り、窘然として自ら牽束せられん。
化吾足爲馬。吾因以行陸。　吾が足を化して馬と爲さば、吾因りて以て陸を行かん。
化吾手爲彈。吾因以求肉。　吾が手を化して彈と爲さば、吾因りて以て肉を求めん。
形骸爲異物。委(三)順心猶足。　形骸は異物たり、順に委して心猶ほ足る。
幸得且歸農。安知不爲福。　幸に且く農に歸するを得たり、安んぞ福と爲らざるを知らん。
況吾行欲老。瞥(四)若風前燭。　況んや吾行くゆく老いんと欲す、瞥として風前の燭の若し。
孰能俄頃間。將心繫榮辱。　孰れか能く俄頃の間も、心を將ちて榮辱に繫がれん。

【字解】【一】佩玉　腰に佩ぶる玉。【二】倚伏　相因りて至ること。老子に、禍兮福所倚、福兮禍所伏とある。【三】委順　自然の運行に順應すること。【四】瞥　暫く見ゆること。

【詩意】三十の時に天子の近臣となり佩玉を佩ぶる身になつたが、四十になつて野人となり、農耕を事とするやうになつた。僅か十年の間にこんな大變化を起さうとは思ひもかけなかつたが、併しこれは世間普通の常理で少しも不思議はないのだ。卽ち窮通禍福は相因つて至るものであるから。ただ魚となつたら水に住み、鳥となつたら木に住めばよいので、何も鳥なら鳥、魚なら魚と一方を固守して自ら拘束するに及ばないのだ。若し吾が足を化して馬となしたら、自由に陸をあるくであらう。吾が手を化して彈となしたら、その彈丸を用ひて鳥を射て肉を食はう。（莊子太宗師篇に、浸假而化予之左臂以爲雞、予因以求時夜、浸假而化予之右臂以爲彈、予因以求鴞炙云云とあるに本づく）吾が形體は外物である。外物の慾に迷はされず、自然に順應して行けば、いつも心の安定が保たれる。余も幸に農に歸ることが出來たので、これが身の幸福となるかも知れない。まして行くゆく老境に入り、風前の燈のやうな壽命であるから、たとひ暫くの間でも榮辱の爲に心を縛られるには忍びない。

秋遊原上

秋原上に遊ぶ

七月行已半。早涼天氣清。
七月行くゆく已に半なり、早涼天氣清し。

清晨起巾櫛。徐步出柴荆。
清晨起きて巾櫛し、徐步して柴荆を出づ。

露杖筇竹冷。風襟越蕉輕。
露杖筇竹冷かに、風襟越蕉輕し。

閑攜弟姪輩。同上秋原行。
閑に弟姪の輩を攜へ、同じく秋原に上りて行く。

新棗未全赤。晚瓜有餘馨。
新棗未だ全く赤からず、晚瓜餘馨有り。

依依田家叟。設此相逢迎。
依依たる田家の叟、此を設けて相逢迎す。

自我到此村。往往白髮生。
我が此村に到りしより、往往白髮生ず。

村中相識久。老幼皆有情。
村中相識ること久し、老幼皆情有り。

留連向暮歸。樹樹風蟬鳴。
留連して暮に向つて歸る、樹樹風蟬鳴く。

是時新雨足。禾黍夾道青。
是時新雨足り、禾黍道を夾みて青し。

見此令人飽。何必待西成。
此を見て人をして飽かしむ、何ぞ必ずしも西成を待たん。

【字解】【一】巾櫛　髮を櫛り衣を整へる。【二】柴荊　草の庵。【三】筇竹　竹の杖。【四】越蕉　越から產する蕉布。【五】依依　慣れ親む貌。【六】西成　秋の收穫。

【題義】秋、原上に遊んだことを述べた詩である。

【詩意】七月も最早半になつて涼風が吹き始めた。朝早く身じまひをして草の庵を立ち出でたが、朝露が深くおりてゐて竹の杖も冷かに、風が襟元を撫でて蕉布が輕い。弟姪輩をつれて高原に上つて行くと、棗も少しく色づき、終の瓜の香も高い。田舍爺がなれなれしく此等の果物を供して我等をもてなしなどした。余は此村に來てから日增に白髮が增したが、村人とも識合になつたので、老幼皆親愛してくれる。一日中遊びくらして夕方歸途に就いたが、あちこちの樹の上に蟬の聲が聞え、近頃雨が十分降つたので禾黍が道の兩側に茂つてゐた。此を見ただけでも豐年たること明である。秋の收穫を待つまでもない。

九日登西原宴望　同諸兄弟作

九日西原に登りて宴望す　諸兄弟と同じく作る

病愛枕席涼。日高眠未輟。
病んで枕席の涼きを愛し、日高くるまで眠りて未だ輟めず。

弟兄呼我起。今日重陽節。
弟兄我を呼んで起す、今日重陽の節。

起登西原望。懷抱同一豁。
起つて西原に登りて望み、懷抱一豁を同うす。

移座就菊叢。餻酒前羅列。　座を移して菊叢に就けば、餻酒前に羅列す。
雖無絲與管。歌笑隨情發。　絲と管と無しと雖も、歌笑情に隨つて發す。
白日未及傾。顏酡耳已熱。　白日未だ傾くに及ばざるに、顏酡くして耳已に熱す。
酒酣四向望。六合何空闊。　酒酣にして四に向つて望めば、六合何ぞ空闊なる。
天地自久長。斯人幾時活。　天地自ら久長、斯人幾時か活きん。
請看原下村。村人死不歇。　請ふ看よ原下の村、村人死して歇まず。
一村四十家。哭葬無虛月。　一村四十家、哭葬虛月無し。
指此各相勉。良辰且歡悅。　此を指して各相勉め、良辰且く歡悅せよ。

【字解】【一】九日　九月九日の節句。【二】重陽　九月九日の節句。【三】一醆　一たび醆らすこと。【四】餻酒　もち、さけ。【五】六合　天地四方をいふ。【六】良辰　良い時。節句などをいふ。

【題義】一族兄弟と九月九日の節句に西原に登り宴を張り四方を眺望して作つた詩である。

【詩意】病に臥しては枕席の涼しきを好み、日の高くのぼるまで眠つてゐた所が、兄弟等が來て我を呼び起し、今日は節句だから西原に登り（重陽には高い處に登り菊花の酒を飮んで惡魔はらひをするのが當時の風俗であつた）一緒にうさはらしをしようと謂ふ。因つて菊の叢に座を移し、餅だの酒だのを列べて飮食した。絲竹管絃の音樂はないけれども、心の向くままに歌ひつ笑ひつすると、まだ日の高いのに早くも顏が赤くなり耳が熱くなつた。酒酣なる時四方を眺めると、天地は一望空闊である。ああ天地は無窮であるが人生は短い。看よ此原の下の村は、四十戸の小村であるが、如何なる月でも葬式のない月はない。宜しく此を顧み、物日には酒でも飮んで樂を盡すがよい。

寄同病者　同病の者に寄す

三十生二毛。早衰爲沈痾。　三十にして二毛を生じ、早衰沈痾を爲す。
四十官七品。拙宦非由他。　四十にして官七品、拙宦他に由るに非ず。
面顏日枯槁。時命日蹉跎。　面顏日に枯槁し、時命日に蹉跎たり。
豈獨我如此。聖賢無奈何。　豈に獨我のみ此の如くならんや、聖賢も奈何ともする「無し。」
回觀親舊中。擧目尤可嗟。　親舊の中を回觀すれば、目を擧げて尤も嗟く可し。
或有終老者。沈賤如泥沙。　或は終老する者有り、沈賤して泥沙の如し。
或有始壯者。飄忽如風花。　或は始めて壯なる者有り、飄忽として風花の如し。

窮餓與天促（五）。不如我者多。　窮餓と天促と、我に如かざる者多し。

以此反自慰。常得心平和。　此を以て反つて自ら慰め、常に心の平和を得。

寄言同病者。迴歎且爲歌。　言を寄す同病の者、歎を廻らして且く歌ふを爲せ。

【字解】【一】二毛　白毛をいふ。【二】沈痾　痼疾なり。【三】七品　七位。【四】時命　時の運。蹉跎は、つまづくこと。【五】天促　わかじにする。

【題義】同病者に寄せて慰安を與へる詩である。

【詩意】三十で最早白毛が生え、早老の結果痼疾となつた。四十で七位の卑官に居るのも、他人の爲ではなく、己の無能の致す所である。顏色は日に日に衰へ、時運は益拙い。併しこれは我のみではない。聖賢と雖も奈何ともし難いのである。親舊の狀態を見渡して見るに皆嗟嘆すべき狀態に在る。或は生涯うだつが擧らず沈賤の間に終つた者もあれば、若かつた身が風前の花のやうに忽ち散つてしまつた者もあり、窮餓天折、竝に我に劣つた者が多い。此を觀て自ら慰め、心の平和を得た。吾と同じく病む者に告げるが、徒に嘆くことをやめて氣霽らしに歌でも歌ふがよい。

遊藍田山卜居（一）

藍田山に遊んで居を卜す

脫置腰下組（二）。擺落心中塵。　腰下の組を脫ぎ置き、心中の塵を擺ひ落す。

行歌望山去。意似歸鄉人。　行くゆく歌ひ山を望んで去る、意鄉に歸る人に似たり。

朝躡玉峰（三）下。暮尋藍水（四）濱。　朝には玉峰の下を躡み、暮には藍水の濱を尋ぬ。

擬求幽僻地。安置疎慵身。　幽僻の地を求めて、疎慵の身を安置せんと擬す。

本性便山寺。應須旁悟眞。　本性山寺に便あり、應に須らく旁ら眞を悟るべし。

【字解】【一】藍田山　山の名。陝西省西安府藍田縣に在る。【二】組　官印の綬なり。【三】玉峰　藍田山は美玉を生ずるを以て名高し。【四】藍水　川の名。

【題義】藍田山に遊んで隱居を定めたことを述べた詩である。

【詩意】官を辭し印綬を解き心中の塵を擺ひ落して、藍田山を指して往けば、恰も故鄉に歸る時のやうな氣がする。朝には山下を過ぎ暮には藍水を渡り、幽僻の地を求めて吾が疎嬾の身を置く場所を定めようと思ふ。吾が天性は山寺に緣があるから、山に隱れて天眞を養ふべきである。

村雪夜坐

村雪の夜坐

南窻背燈坐。風霰暗紛紛。　南窻燈に背いて坐す、風霰暗くして紛紛たり。

寂寞深村夜。殘(一)鴈雪中聞。　寂寞たる深村の夜、殘鴈雪中に聞ゆ。

【字解】【一】殘鴈　あとに殘つた鴈。

【題義】雪の降る晩に獨り坐する光景を述べた詩である。

【詩意】南窻に燈を背にして坐つてゐると、外には寒風に吹きまかれて雪や霰が紛紛と亂れ飛んでゐる。あたりはひつそりとして、ただ孤雁の雪中に鳴く聲が聞えるばかりだ。

東園翫菊

東園に菊を翫ぶ

少年昨已去。芳歲今又闌。　少年昨已に去り、芳歲今又闌なり。
如何寂寞意。復此荒涼園。　如何ぞ寂寞の意、復此荒涼の園。
園中獨立久。日淡風露寒。　園中に獨立つこと久し、日淡くして風露寒し。
秋蔬盡蕪沒。好樹亦凋(一)殘。　秋蔬盡く蕪沒し、好樹も亦凋殘す。
唯有數叢菊。新開籬(二)落間。　唯數叢の菊のみ有り、新に籬落の間に開く。
攜觴聊就酌。爲爾一留連。　觴を攜へて聊か就きて酌み、爾が爲に一たび留連す。
憶我少小日。易爲興所牽。　憶ふ我少小の日、興の牽く所と爲り易し。
見酒無時節。未飲已欣然。　酒を見ては時節無く、未だ飲まずして已に欣然たり。
近從年長來。漸覺取樂難。　近ごろ年長じてより來、漸く樂を取ること難きを覺ゆ。
常恐更衰老。强飲亦無歡。　常に恐る更に衰老し、强ひて飲むも亦歡無からんことを。
顧謂爾菊花。後時何獨鮮。　顧て謂ふ爾菊花、時に後れて何ぞ獨り鮮なる。
誠知不爲我。借爾暫開顏。　誠に知る我が爲ならざるを、爾を借りて暫く顏を開かん。

【字解】【一】凋殘　凋衰なり。【二】籬落　垣根。

【題義】東園に菊花を賞して作つた詩である。

【詩意】少年時代も既に過ぎ、陽春の候も既に去り、寂寞として樂まぬ心を以て此荒園に對した。久しく園中に立つて、日の光も淡く風も肌寒く、野菜なども盡く枯れ果て、樹木も凋落したのを感じた。ただ數叢の菊が垣根に花を開いてゐる。因つて酒を酌んで其花を賞翫した。憶へば余の少い頃は何事にも感興を起し易く、酒と聞けば時をきらはずに飲みたく、まだ飲まないうちから愉快であつた。近頃は年を取つたせゐか何を見ても樂まないが、更に此上老衰したならば、强ひて酒を飲んでも愉快に

はなれまい。ああ菊花よ、汝はどうして時を過ぎても鮮美を失はないのぢや。固よりこのおれの爲ではないが、暫く汝を借りて吾が愁眉を開くとしよう。

觀稼(一)　稼を觀る

(二)世役不牽我。身心常自(三)若。　世役我を牽かず、身心常に自若たり。
晩出看田畝。閑行旁村落。　晩に出でて田畝を看、閑行して村落に旁ふ。
(四)纍纍繞場稼。(五)嘖嘖羣飛雀。　纍纍として場を繞る稼、嘖嘖たる羣飛の雀。
年豐豈獨人。禽鳥聲亦樂。　年の豐なるは豈に獨り人のみならんや、禽鳥聲亦樂む。
田翁逢我喜。默起具杯杓。　田翁我に逢うて喜び、默して起つて杯杓を具ふ。
斂手笑相延。(六)社酒有殘酌。　手を斂めて笑つて相延く、社酒殘酌有り。
媿茲勤且敬。(七)藜杖爲淹泊。　媿づらくは茲の勤且つ敬なるに、藜杖爲に淹泊す。
言動任天眞。未覺農人惡。　言動天眞に任すも、未だ覺えず農人の惡しきを。
停杯問生事。夫種妻兒穫。　杯を停めて生事を問へば、夫は種ゑ妻兒は穫る。
筋力苦疲勞。衣食常單薄。　筋力苦だ疲勞し、衣食常に單薄なり。
自慚祿仕者。曾不營農作。　自ら慙づ祿仕の者、曾て農作を營まず。
飽食無所勞。何殊(八)衞人鶴。　飽食して勞する所無し、何ぞ衞人の鶴に殊ならん。

【字解】【一】稼　秋のみのり。詩經に、十月納禾稼とある。【二】世役　世間の勞役。【三】自若　安樂なり。【四】纍纍　かさなる貌。【五】嘖嘖　雀の鳴く聲。【六】社酒　立秋の後第五の戊の日を社日といひ、この日、土神を祭りて之に酬ゆ。【七】藜杖　あかざの杖。淹泊は留滯すること。【八】衞人鶴　功なくして祿を食むこと。左傳閔公二年に見ゆ。

【題義】秋の收穫の樣を觀て、農民の勞苦を憐み、祿仕する者の飽食を誇つた詩である。

【詩意】吾は世間の勞役に服せぬゆゑ、身心ともに安樂である。夕方田圃のあたりを散歩すると、稻が農場に纍纍と積みかさねられ、雀がチウチウ鳴いて羣れ飛んでゐる。豐年を喜ぶ者は人ばかりではない。鳥の聲さへ樂さうである。田舍爺は我を迎へて喜び、起つて酒宴の用意をなし、謹んで我を請じて社酒の殘りを饗した。吾も其親切と恭敬とに感じて暫く其處に杖を留めた。言動は天眞に任せて少しも飾立てないが、それが却つて好感を與へた。杯を停めて平生の仕事を問へば、夫妻相倶に耕作に勤め、筋力を疲らして働くが、それでも衣食は粗末なるを免れないとの事であつた。此話を聞いて、祿仕する者の勞役にも服せずして飽食暖衣してゐるのは、衞國の鶴と同じく慚づべきことであると悟つた。

聞哭者

哭する者を聞く

昨日南鄰哭。哭聲一何苦。　昨日南鄰に哭す、哭聲一に何ぞ苦しき。
云是妻哭夫。夫年二十五。　云ふ是れ妻夫を哭すと、夫年二十五。
今朝北里哭。哭聲又何切。　今朝北里に哭す、哭聲又何ぞ切なる。
云是母哭兒。兒年十七八。　云ふ是れ母兒を哭すと、兒年十七八。
四鄰尚如此。天下多夭(一)折。　四鄰尚は此の如し、天下多くは夭折す。
乃知浮世人。少得垂白髮。　乃ち知る浮世の人、白髮を垂るるを得ること少なるを。
余今過四十。念彼聊自悦。　余今四十を過ぐ、彼を念うて聊か自ら悦ぶ。
從此明鏡中。不嫌頭似雪。　此れより明鏡の中、頭の雪に似たるを嫌はじ。

【字解】(一)夭折　わかじにする。

【題義】死を哭する者を聞いて作つた詩である。

【詩意】昨日は南鄰の家で非常に哭泣してゐた。聞けば妻が夫の死を哭したのださうだ。夫の年は二十五だつたといふ。今朝は北鄰の家で頻に哭泣してゐる。これは母が其子の死を哭するので、子の年は十七八だといふ。四鄰皆かくの如く死を悲んでゐる所を見れば、世間には夭死する者が多く、白髮になるまで生きる人は少いことがわかる。余は既に四十を越えてまだ無事でゐる。彼等に比べて竊に己の長壽を悦んでゐる。此から後は鏡を見て頭髮の雪のやうに白いのを見ても、決して不平などは言ふまいと思ふ。

新構亭臺示諸弟姪

新に亭臺を構へ、諸弟姪に示す

平臺高數尺。臺上結茅(一)茨。　平臺高さ數尺、臺上に茅茨を結ぶ。
東西疏二牖。南北開兩扉。　東西に二牖を疏け、南北に兩扉を開く。
蘆簾前後卷。竹(二)簟當中施。　蘆簾前後に卷き、竹簟中に當りて施す。
清泠白石枕。疏涼黃葛衣。　清泠なり白石の枕、疏涼なり黃葛の衣。
開衿向風坐。夏日如秋時。　衿を開いて風に向つて坐すれば、夏日秋時の如し。
嘯傲頗有趣。窺臨不知疲。　嘯傲頗る趣有り、窺ひ臨めども疲るるを知らず。
東窗對華(三)山。三峰碧參(四)差。　東窗は華山に對し、三峰碧參差たり。

南簷當渭水。臥見雲帆飛。　南簷は渭水に當り、臥して雲帆の飛ぶを見る。
仰摘枝上果。俯折畦中葵。　仰いで枝上の果を摘み、俯して畦中の葵を折る。
足以充飢渴。何必慕甘肥。　以て飢渴に充つるに足れり、何ぞ必ずしも甘肥を慕はん。
況有好輩從。旦夕相追隨。　況んや好輩の從ふ有り、旦夕相追隨するをや。

【字解】【一】茅茨　茅葺きの庵。【二】竹蓆　たかむしろ。【三】華山　山の名。陝西省華陰縣の南に在り。【四】參差　高低齊しからざる貌。【五】葵　野菜の名。【六】好輩　諸弟姪を指して言ふ。

【題義】新に臺を築き亭を構へたことを述べた詩を作つて、諸弟姪に示したといふ意。

【詩意】高さ數尺の平臺を築き、其臺の上に茅葺きの亭を作つた。そして東西に二つの扉を明け、南北に二つの扉を設けた。前と後には蘆で編んだ簾を巻き揚げ、亭の中には竹の席を敷いた。石の枕も淸らかに葛の衣もすがすがしい。襟を開いて風に對すると、夏でも秋のやうに涼しい。ここに嘯傲してゐると、いつまでゐても疲れることはない。東の窓は華山に面し三峰の碧を鬪はしてゐるのが見え、南の簷は渭水に當り臥して舟帆の走るのが見える。仰いでは枝上の果實を摘むことが出來、俯しては畠の野菜を折ることも出來る。以て飢渴を醫するに足るから、敢て肥甘の肉などは求めない。まして氣心の合つた仲間が朝晩相伴つてゐるのであるから。

自吟拙什。因有所懷　自ら拙什を吟じ、因つて懷ふ所有り

懶病每多暇。暇來何所爲。　懶病每に暇多し、暇あつて來何の爲す所ぞ。
未能拋筆硯。時作一篇詩。　未だ筆硯を拋つ能はず、時に一篇の詩を作る。
詩成淡無味。多被衆人嗤。　詩成れども淡として味無く、多く衆人に嗤はる。
上怪落聲韻。下嫌拙言詞。　上は聲韻を落すを怪み、下は言詞に拙きを嫌ふ。
時時自吟詠。吟罷有所思。　時時自ら吟詠し、吟じ罷りて思ふ所有り。
蘇州及彭澤。與我不同時。　蘇州と彭澤と、我と時を同じうせず。
此外復誰愛。唯有元微之。　此外復誰をか愛する、唯元微之のみ有り。
謫向江陵府。三年作判司。　謫せられて江陵府に向ひ、三年判司と作る。
相去二千里。詩成遠不知。　相去ること二千里、詩成れども遠くして知らず。

【字解】【一】拙什　へたな詩。【二】蘇州　中唐の詩人韋應物、貞元の初、蘇州刺史となり惠政多し、人稱して韋蘇州といふ。彭澤　彭澤は彭澤縣令となつた陶淵明をいふ。【三】元微之　元稹、字は微之。樂天と同時の詩人。【四】判司　官名。文牘を批判することを司る。

【題義】自分の作つた詩を吟するに方り、懷ふ所を述べたのである。

【詩意】疎嬾の病を得てから毎に閑暇でゐるが、其間何をしてゐるかといふに、まだ筆硯を棄てることが出來ないで、時時詩を作つては樂んでゐる。併し拙い味もそつけもない詩だから衆人の物笑になるばかりで、上は聲譽を傷けはせぬかと怪み、下は自ら言詞に拙なるを嫌うてゐる。時時自ら吟じ、吟じ畢つては色色詩に就いての事を思ひ出す。余は最も韋應物と陶淵明の詩を好むが、倶に我と時を同うしないのを惜む。此外には唯元微之の詩を愛するが、微之は江陵郡に貶せられ、三年間判司の官を奉じてゐる。余と二千里を隔ててゐるから、詩が出來てゐるであらうが、惜しいかな知る由がない。

【餘論】甌北詩話に、「香山の詩、恬淡閑適の趣、多く之を陶・韋に得たり。其の自吟拙什に云く、時時自吟詠、吟罷有所思、蘇州及彭澤、與我不同時、此外復誰愛、唯有元微之、と、又題潯陽樓に云く、常愛陶彭澤、文思何高玄、又怪韋蘇州、詩情亦清閑、と。此れ以て其趣向の在る所を觀るべきなり。」とある。

(一)東陂秋意。寄(二)元八

(三)寥落野陂畔。獨行思有餘。
(四)秋荷病葉上。白露大如珠。

東陂の秋意、元八に寄す

寥落たる野陂の畔、獨行いて思ひ餘有り。
秋荷病葉の上、白露大にして珠の如し。

忽憶同賞地。曲江(五)南北隅。
秋池少遊客。唯我與君倶。
(六)啼蛩隱紅蓼。瘦馬蹋青(七)蕪。
當時與今日。倶是暮秋初。
(八)節物苦相似。時景亦無餘。
唯有人分散。經年不得書。

忽ち憶ふ同じく賞せし地、曲江南北の隅。
秋池遊客少なり、唯我と君と倶にす。
啼蛩紅蓼に隱れ、瘦馬青蕪を蹋む。
當時と今日と、倶に是れ暮秋の初。
節物苦だ相似たり、時景亦餘り無し。
唯人の分散する有り、年を經れども書を得ず。

【字解】【一】東陂　曲江の東隄。陂、一に披に作る。【二】元八　元は姓、八は排行。【三】寥落　荒れ果ててさびしき貌。【四】秋荷　秋の蓮の葉。【五】曲江　陝西省長安縣の東南に在る池の名。【六】啼蛩　鳴くコホロギ。紅蓼は、赤いタデ。【七】青蕪　青い荒地。【八】節物　季節。

【題義】東陂のあたりを散歩して秋に感じ、懷舊の意を賦して元八に寄せたのである。

【詩意】淋しい池塘の畔を獨りで遊び歩いてゐると感懷が深い。萎れかかつた蓮の葉の上に、白露が眞珠のやうに溜つてゐるのも秋の哀を感ぜしめる。憶へば、この曲江の南北隅に君と一緒に遊んだのは、やはり秋の末で遊客が少かつた。啼いてゐた蛩が人の足音に怖れて、蓼の蔭に隱れたり、吾等の乘つた瘦馬が荒地を目的もなく踏みあるいたりした。併し季節は同じでも、あの頃の景色は今は殘つ

てゐない。が、人のみは相變らず存生であるのに、ただ東西に分散して、年を經るまで書信すら通じ難いのは悲に堪へない。

閑居

深閉竹間扉。靜掃松下地。
深く閉づ竹間の扉、靜に掃ふ松下の地。

獨嘯晩風前。何人知此意。
獨り嘯く晩風の前、何人か此意を知らん。

看山盡(一)日坐。枕帙移時睡。
山を看て盡日坐し、帙を枕とし時を移して睡る。

誰能從我遊。使(二)君心無事。
誰か能く我に從うて遊ぶ、使君心無事。

【字解】【一】盡日　終日。【二】使君　刺史をいふ。州の長官。

【題義】閑居の景趣を述べた詩である。

【詩意】深く竹林の中の門扉を閉ぢ松下の地を淨らかに掃ひ、獨り晩風の前に微吟してゐる。世に誰も余の樂を知る者はない。終日山を眺めて坐し、倦めば書帙を枕にして睡る。我に從つて遊ぶ者は此州の刺史某氏のみである。この人も塵心のない好人物である。

詠拙

拙を詠ず

所稟有巧拙。不可改者性。
稟くる所巧拙有り、改む可からざる者は性なり。

所賦有厚薄。不可移者命。
賦せらるる所厚薄有り、移す可からざる者は命なり。

我性拙且蠢。我命薄且屯。(一)
我が性拙にして且つ蠢なり、我が命は薄にして且つ屯なり。

問我何以知。所知良有因。
問ふ我何を以てか知る、知る所良に因有り。

亦曾擧兩足。學人蹋紅塵。(二)
亦曾て兩足を擧げ、人を學んで紅塵を蹋む。

從茲知性拙。不解轉如輪。
茲に從りて性の拙を知る、轉じて輪の如くなるを解せず。

亦曾奮六(三)翮。高飛到青雲。
亦曾て六翮を奮ひ、高く飛んで青雲に到る。

從茲知命薄。摧落不逡巡。
茲に從りて命の薄を知る、摧け落ちて逡巡せず。

慕貴而厭賤。樂富而惡貧。
貴を慕ひて賤を厭ひ、富を樂んで貧を惡む。

同此天地間。我豈異於人。
此の天地の間を同じうし、我豈に人に異ならんや。

性命苟如此。反則成苦辛。
性命苟に此の如し、反すれば則ち苦辛と成る。

以此自安分。雖窮每欣欣。
此を以て自ら分に安んじ、窮すと雖も每に欣欣たり。

葺茅爲我廬。編蓬爲我門。
茅を葺いて我が廬と爲し、蓬を編んで我が門と爲す。

縫布作袍被。種穀充盤飧。　布を縫うて袍被と作し、穀を種ゑて盤飧に充つ。

靜讀古人書。閑釣淸渭濱。　靜に古人の書を讀み、閑に淸渭の濱に釣る。

優哉復游哉。聊以終吾身。　優なる哉復游なる哉、聊か以て吾が身を終へん。

【字解】【一】也　雖なり。【三】紅塵　俗塵なり。【三】六翮　翮は羽莖。おやばれ。【四】袍被　衣衾なり。【五】盤飧　盤は皿、皿の中の食物。【六】優哉游哉　閑暇自得の貌。

【題義】己の拙陋を詠じた詩である。

【詩意】天から稟けた性には巧拙の差異があつて、是は人力を以て改めることは出來ない。又天から賦與せられた運命にも厚薄の相違があつて、是も人力で變更することは出來ない。所で余が性は愚で命は薄い。これは次のやうな理由で明に自覺してゐる。さて理由といふのは、かうである。自分は嘗て人眞似に利益を逐うて奔走して見た。人は轉ずること車輪の如く、利益の前には信義も絲瓜もなく、友を賣り世を欺いて恬としてゐるが、自分にはどうしても其れが出來ない。これで我が性の愚なことがわかつた。亦嘗て名官を求めて飛揚して見たが、間もなく尾羽打ち枯らして墜落してしまつた。これで我が命の薄いことがわかつた。富貴を好んで貧賤を厭ふことは我も世人と同じである。併し愚であり薄である所の性と命とに反いて、柄にもない慾を出せば却つて苦辛を招くことになるから、己の分に安んじて、たとひ貧窮に居ても欣欣としてゐるのである。因つて茅屋を結び蓬門を構へ、布被をまとひ耕作を事とし、或は靜に古人の書を讀み、或は淸渭の濱に釣し、悠悠自適して吾が身を終らうと思ふのである。

詠慵

慵を詠ず

有官慵不選。有田慵不農。　官有れども慵くして選ばれず、田有れども慵くして農らず。

屋穿慵不葺。衣裂慵不縫。　屋穿てども慵くして葺かず、衣裂くれども慵くして縫はず。

有酒慵不酌。無異樽長空。　酒有れども慵くして酌まず、樽の長く空しきに異る無し。

有琴慵不彈。亦與無絃同。　琴有れども慵くして彈せず、亦絃無きと同じ。

家人告飯盡。欲炊慵不舂。　家人飯の盡くるを告ぐ、炊がんと欲するも慵くして舂かず。

親朋寄書至。欲讀慵開封。　親朋書を寄せて至る、讀まんと欲するに封を開くに慵し。

嘗聞嵇叔夜。一生在慵中。　嘗て聞く嵇叔夜、一生慵中に在りと。

彈琴復鍛鐵。比我未爲慵。　琴を彈じ復鐵を鍛す、我に比すれば未だ慵しと爲さず。

【字解】〔一〕嵆叔夜　嵆康、字は叔夜、三國魏の人、竹林七賢の一人、琴を彈じ詩を詠ず。性鍛を好み夏月には常に大柳下に鍛す。

【題義】事を爲すに慵きことを述べた詩である。

【詩意】官は設けてあつても選任されず、田はあつても耕さず、屋根が破れても葺かず、著物が綻びても縫はず、酒があつても飲まず、琴があつても彈せず、米がなくなつても舂かず、友達から手紙が來ても封も切らず、是皆慵の然らしむる所である。昔嵆康は慵中に一生を終つたといふが、それでも琴を彈じたり鐵を鍛へたりした。我ほどに慵ではなかつたらしい。

冬夜

家貧親愛散。身病交遊罷。　家貧しくして親愛散じ、身病んで交遊罷む。

眼前無一人。獨掩（一）村齋臥。　眼前に一人無く、獨り村齋を掩うて臥す。

（二）冷落燈火暗。（三）離披簾幕破。　冷落して燈火暗く、離披して簾幕破る。

（四）策策窗戸前。又聞新雪下。　策策たり窗戸の前、又新雪の下るを聞く。

（五）長年漸省睡。夜半起端坐。　長年漸く睡を省き、夜半起きて端坐す。

不學（六）坐忘心。寂寞安可過。　坐忘の心を學ばずんば、寂寞安んぞ過す可けんや。

（七）兀然身寄世。（八）浩然心委化。　兀然として身世に寄せ、浩然として心化に委す。

如此來四年。一千三百夜。　此の如くにして來四年、一千三百夜。

【字解】〔一〕村齋　村莊といふが如し。〔二〕冷落　寂靜なり。〔三〕離披　開く貌。〔四〕策策　雪のふる音。〔五〕長年　年老いること。〔六〕坐忘　何の思慮もないこと、莊子の字面。〔七〕兀然　危坐する貌。〔八〕浩然　心の廣き貌。化は自然の運行。

【題義】冬夜の情趣を述べた詩である。

【詩意】家が貧い爲に骨肉の親も東西に離散し、病に臥して世間の交際も絶えてしまつた。眼前に一人の相手もなく村莊の中に獨り臥してゐる。めいり込むやうに靜寂で燈火も暗く、簾や幕が破れてひらひらしてゐる。折しも策策として雪の降る聲が聞えて來た。老いては睡眠時間も少くなつて、夜半には既に起きてしまふから、莊子の所謂坐忘の修練でもしなければ、獨住の寂寞を過すことが出來ない。ただ塊然たる身を此世に寄せ、心を廣くして自然に任せ、四年、一千三百夜を過して來た。

村中留李三固言宿

村中に李三を留めて固く宿せよと言ふ

平生早遊宦。不道無親故。　平生早く遊宦す、親故無しと道はず。

如我與君心。相知應有數。　我と君との心の如きは、相知ること應に數有るべし。

(五)春明門前別。(六)金氏陂中遇。
村酒兩三盃。相留寒日暮。
勿嫌村酒薄。聊酌論(七)心素。
請君少(八)踟躕。繫馬門前樹。
明年身若健。便擬江湖去。
(九)他日縱相思。知君無覓處。
後會既(一〇)茫茫。今宵君且住。

春明門前に別れ、金氏陂中に遇ふ。
村酒兩三盃、相留む寒日の暮。
嫌ふ勿れ村酒の薄きを、聊か酌んで心素を論ぜん。
請ふ君少らく踟躕し、馬を繫げ門前の樹。
明年身若し健ならば、便ち江湖に去らんと擬す。
他日縱ひ相思ふとも、知る君が覓むる處無からんことを。
後會既に茫茫たり、今宵君且く住まれ。

【字解】【一】李三　李は姓、三は排行。【三】遊宦　官吏となつて進行すること。【三】親故　緣故なり。【四】數　理なり、命なり。【五】春明門　唐六典に、京城の東面に三門あり、中なるを春明といふとある。【六】金氏陂　蓋し陂の名。【七】心素　素心に同じ、心のまこと。【八】踟躕　猶豫すること。【九】他日　後日。【一〇】茫茫　不明なこと。

【題義】村で李三に遇ひ、遂に之を引き留めて自分の家に宿らせようとする詩である。

【詩意】君と僕とは早く官吏となつて懇親を結んだ間柄でもあり、又心持から謂つても當然相知るべき筈である。都の春明門前で別れたのが、今偶然この金氏陂で出遇つた。因つて君を引き留めて村酒を酌むことにした。たとひ酒は薄くとも、互に心の底を語り合はう。馬を門前の樹に繫いで、少しゆつくりするがよい。僕も健康が回復したら來年は復た世間に乘り出さうかと思つてゐるから、後日相思ふとも僕の行方がわからなくなるかも知れない。後會期すべからずであるから、今晩は僕の處へとまつたらどうぢや。

友人夜訪

簷間清風簟(一)。松下明月盃。
幽意正如此。況乃故人(二)來。

友人夜訪ふ
簷間清風の簟、松下明月の盃。
幽意正に此の如し、況んや乃ち故人の來るをや。

【字解】【一】簟　たかむしろ。竹を編んで作つたムシロ。【二】故人　舊友。

【題義】友人が夜來訪したことを述べた詩である。

【詩意】簷の先の清風の當る處に簟を敷き、松の下で明月に對して酒を酌めば、幽閑の情味が正に饒である。所へ友人の來訪とあつて一入興味が增した。

遊悟眞寺詩　一百三十韻

(一)元和九年秋。八月月上(二)弦。

悟眞寺に遊ぶ詩　一百三十韻
元和九年の秋、八月月の上弦。

我遊悟眞寺。寺在王順山。　我悟眞寺に遊ぶ、寺は王順山に在り。
去山四五里。先聞水(三)潺湲。　山を去ること四五里、先づ聞く水の潺湲たるを。
自茲捨車馬。始渉(四)藍溪灣。　茲より車馬を捨て、始めて藍溪の灣を渉る。
手拄青竹杖。足蹋白石灘。　手に青竹の杖を拄へ、足に白石の灘を蹋む。
漸怪耳目曠。不聞人世喧。　漸く耳目の曠きを怪み、人世の喧しきを聞かず。
山下望山上。初疑不可攀。　山下より山上を望めば、初は疑ふ攀づ可からずと。
誰知中有路。(五)盤折通巖巓。　誰か知らん中に路有り、盤折して巖巓に通ずるを。
一息(六)幡竿下。再休(七)石龕邊。　一たび幡竿の下に息ひ、再び石龕の邊に休む。
龕間長丈餘。門戸無(八)扃關。　龕間長さ丈餘、門戸に扃關無し。
俯窺不見人。(九)石髮垂若鬟。　俯して窺へども人を見ず、石髮垂れて鬟の若し。
驚出白蝙蝠。雙飛如雪翻。　驚き出づ白蝙蝠、雙び飛んで雪の翻るが如し。
回首寺門望。青崖夾(一〇)朱軒。　首を回らして寺門を望めば、青崖朱軒を夾む。
如擘山腹開。置寺於其間。　山腹を擘いて開くが如し、寺を其間に置く。

入門無平地。地窄虛空寛。　門に入れば平地無く、地窄くして虛空寛し。
房廊與臺殿。高下隨峰巒。　房廊と臺殿と、高下峰巒に隨ふ。
巖崿無(一一)撮土。樹木多瘦堅。　巖崿撮土無く、樹木多くは瘦堅。
根株抱石長。屈曲蟲蛇蟠。　根株石を抱いて長く、屈曲蟲蛇蟠まる。
松桂亂無行。四時鬱(一二)芊芊。　松桂亂れて行無く、四時鬱として芊芊。
枝梢嫋清翠。韻若風中絃。　枝梢清翠を嫋め、韻風中の絃の若し。
日月光不透。綠陰相交延。　日月光透らず、綠陰相交延す。
幽鳥時一聲。聞之似寒蟬。　幽鳥時に一聲、之を聞くに寒蟬に似たり。
首憩賓位亭。就坐未及安。　首め賓位亭に憩ひ、坐に就いて未だ安んずるに及ばず。
須臾開北戸。萬里明(一三)豁然。　須臾ありて北戸を開けば、萬里明にして豁然たり。
拂簷虹(一四)霏微。遶棟雲回旋。　簷を拂うて虹霏微たり、棟を遶りて雲回旋す。
赤日間(一五)白雨。陰晴同一川。　赤日白雨に間り、陰晴一川を同じうす。
野綠簇草樹。眼界吞(一六)秦原。　野綠草樹に簇り、眼界秦原を吞む。

渭水細不見。漢陵(一七)小於拳。
渭水細くして見えず、漢陵拳よりも小なり。

却顧來時路。(一八)縈紆映朱欄。
却つて來時の路を顧みれば、縈紆して朱欄に映す。

歷歷上山人。一一遙可觀。
歷歷たり山に上る人、一一遙に觀る可し。

前對多寶塔。(一九)風鐸鳴四端。
前には對す多寶塔、風鐸四端に鳴る。

(二〇)欒櫨與戶牖。(二一)恰恰金碧繁。
欒櫨と戶牖と、恰恰として金碧繁し。

云昔迦葉佛。此地坐(二二)涅槃。
云ふ昔迦葉佛、此地涅槃に坐すと。

至今(二三)鐵鉢在。當底手跡穿。
今に至るまで鐵鉢在り、底に當りて手跡穿つ。

西開玉像殿。白佛森比肩。
西には開く玉像殿、白佛森として肩を比ぶ。

(二四)抖擻塵埃衣。禮拜氷雪顏。
塵埃の衣を抖擻し、氷雪の顏を禮拜す。

疊霜爲袈裟。貫雹爲(二五)華鬘。
霜を疊んで袈裟と爲し、雹を貫いて華鬘と爲す。

逼觀疑(二六)鬼功。其跡非(二七)雕鐫。
逼く觀て鬼功かと疑ふ、其跡彫鐫に非ず。

次登觀音堂。未到聞(二八)栴檀。
次に觀音堂に登る、未だ到らずして栴檀を聞く。

上階脫雙履。(二九)斂足升瑤筵。
階に上りて雙履を脫し、足を斂めて瑤筵に升る。

(三〇)六楹排玉鏡。四座敷(三一)金鈿。
六楹玉鏡を排し、四座金鈿を敷く。

黑夜自光明。不待燈燭燃。
黑夜自ら光明、燈燭の燃ゆるを待たず。

衆寶互低昂。碧珮珊瑚幡。
衆寶互に低昂、碧珮珊瑚の幡。

風來似天樂。相觸聲珊珊。
風來れば天樂に似たり、相觸れて聲珊珊。

白珠垂露凝。赤珠滴血殷。
白珠垂露凝り、赤珠滴血殷し。

點綴佛髻上。合爲七寶冠。
佛髻の上に點綴し、合して七寶冠と爲る。

雙瓶白琉璃。色若秋水寒。
雙瓶白琉璃、色は秋水の寒きが若し。

隔瓶見(三二)舍利。圓轉如(三三)金丹。
瓶を隔てて舍利を見る、圓轉金丹の如し。

玉笛何代物。天人施(三四)祇園。
玉笛何れの代の物ぞ、天人祇園に施す。

吹如秋鶴聲。可以降靈仙。
吹けば秋鶴の聲の如し、以て靈仙を降す可し。

是時秋方中。三五月正圓。
是時秋方に中し、三五月正に圓なり。

寶堂豁三門。(三五)金魄當其前。
寶堂三門を豁き、金魄其前に當る。

月與寶相射。(三六)晶光爭鮮姸。
月と寶と相射て、晶光鮮姸を爭ふ。

照人心骨冷。竟(三七)夕不欲眠。　人を照して心骨冷かに、竟夕眠るを欲せす。
曉尋南塔路。亂竹低嬋(三八)娟。　曉に尋ぬ南塔の路、亂竹低れて嬋娟たり。
林幽不逢人。寒蝶飛翾(三九)翾。　林幽にして人に逢はず、寒蝶飛んで翾翾たり。
山果不識名。離(四〇)離夾道蕃。　山果名を識らず、離離として道を夾みて蕃し。
足以療飢乏。摘嘗味甘酸。　以て飢乏を療するに足る、摘み嘗むれば味甘酸。
道南藍谷神。紫(四一)纖白紙錢。　道の南に藍谷神あり、紫纖白紙錢。
若歲有水旱。詔使修蘋(四二)蘩。　若し歲水旱有れば、詔して蘋蘩を修せしむ。
以地清淨故。獻(四三)奠無葷羶。　地の淸淨なるを以ての故に、獻奠に葷羶無し。
危石疊四五。嵬(四四)嵬欹且刓。　危石四五を疊み、嵬嵬として欹ち且つ刓らる。
造物者何意。堆在巖東偏。　造物者何の意ぞ、堆して巖の東偏に在る。
冷滑無人跡。苔點如花(四五)牋。　冷滑人跡無く、苔點じて花牋の如し。
我來登上(四六)頭。下臨不測淵。　我來りて上頭に登り、下不測の淵に望む。
目眩手足掉。不敢低頭看。　目眩きて手足掉ひ、敢て頭を低れて看す。

風從石下生。薄人而上摶。　風石下より生じ、人に薄りて上り摶つ。
衣服似羽(四七)翮。開張欲飛騫。　衣服羽翮に似、開張して飛び騫らんと欲す。
嶕(四八)嶢三面峰。峰尖刀劍攢。　嶕嶢たり三面の峰、峰尖りて刀劍攢まる。
往往白雲過。決開露青天。　往往白雲過ぎ、決開して靑天を露す。
西北日落時。夕暉紅團團。　西北日落つる時、夕暉紅くして團團たり。
千里翠(四九)屏外。走下丹砂丸。　千里翠屛の外、走り下る丹沙の丸。
東南月上時。夜氣淸漫漫。　東南月上る時、夜氣淸くして漫漫たり。
百丈碧潭底。寫出黃金盤。　百丈碧潭の底、寫し出す黃金の盤。
藍水色似藍。日夜長潺潺。　藍水は色藍に似たり、日夜長く潺潺たり。
周廻繞山轉。下視如靑環。　周廻して山を繞りて轉じ、下視すれば靑環の如し。
或鋪爲慢(五〇)流。或激爲奔湍。　或は鋪いて慢流と爲り、或は激して奔湍と爲る。
泓澄最深處。浮出蛟龍涎。　泓澄最も深き處、浮び出づ蛟龍の涎。
側身入其中。懸磴尤險難。　身を側てて其の中に入れば、懸磴尤も險難。

捫蘿蹋（五一）樛木。下逐飲澗猨。　蘿を捫して樛木を蹋み、下つて澗に飲む猨を逐ふ。
雪迸起白鷺。錦跳驚（五二）紅鱣。　雪迸しりて白鷺起り、錦跳りて紅鱣驚く。
歇定方盥漱。濯去支體煩。　歇み定まりて方に盥漱し、濯ひ去る支體の煩。
淺深皆洞徹。可照腦與肝。　淺深皆な洞徹し、腦と肝とを照らす可し。
但愛清見底。欲尋不知源。　但だ愛す清くして底を見るを、尋ねんと欲するも源を知らず。
東崖饒怪石。積甃蒼（五三）琅玕。　東崖に怪石饒し、積甃す蒼琅玕。
温潤發於外。其間韞（五四）璵璠。　温潤外に發し、其間に璵璠を韞む。
（五五）卞和死已久。良玉多棄捐。　卞和死して已に久しく、良玉多く棄捐せらる。
或時洩光彩。夜與星月連。　或は時に光彩を洩らし、夜星月と連なる。
中頂最高峰。拄天青玉竿。　中頂の最高峰、天を拄ふ青玉の竿。
（五六）翾飜上不得。豈我能攀援。　翾飜も上り得ず、豈に我能く攀援せんや。
上有白蓮池。（五七）素葩覆清瀾。　上に白蓮池有り、素葩清瀾を覆ふ。
聞名不可到。處所非（五八）人寰。　名を聞けども到る可からず、處所人寰に非ず。

又有一片石。大如方尺甎。　又一片の石有り、大さ方尺の甎の如し。
插在半壁上。其下萬仞懸。　挿んで半壁の上に在り、其下萬仞懸る。
云有過去師。坐得（五九）無生禪。　云ふ過去の師有り、坐して無生の禪を得たりと。
號爲定心石。長老世相傳。　號して定心石と爲す、長老世〻相傳ふ。
却上謁仙祠。蔓草生（六〇）綿綿。　却き上りて仙祠に謁すれば、蔓草生じて綿綿たり。
昔聞王氏子。（六一）羽化升上玄。　昔聞く王氏の子、羽化して上玄に升ると。
其西曬藥臺。猶對（六二）芝朮田。　其西に曬藥臺あり、猶ほ芝朮の田に對す。
時復明月夜。上聞黃鶴言。　時に復明月の夜、上に黃鶴の言を聞く。
廻尋畫龍堂。二叟鬢髮斑。　廻りて畫龍堂を尋ぬ、二叟鬢髮斑なり。
想見聽法時。歡喜禮（六三）印壇。　想ひ見る法を聽く時、歡喜して印壇に禮し、
復歸泉窟下。化作龍（六四）蜿蜒。　復泉窟の下に歸り、化して龍の蜿蜒たるを作すを。
階前石孔在。欲雨生白煙。　階前に石孔在り、雨らんと欲すれば白煙を生ず。
往有寫經僧。身靜心精專。　往に寫經の僧有り、身靜にして心精專なり。

感彼雲外鴿。羣飛千翩翩。　彼の雲外の鴿を感ぜしめ、羣飛千翩翩たり。
來添硯中水。去吸巖下泉。　來りて添ふ硯中の水、去つて吸ふ巖下の泉。
一日三往復。時節長不愆。　一日に三たび往復し、時節長く愆はず。
經成號聖僧。弟子名揚難。　經成りて聖僧と號す、弟子を揚難と名く。
誦此蓮花偈。數滿百億千。　此蓮花の偈を誦し、數は滿つ百億千。
身壞口不壞。舌根如紅蓮。　身壞るれども口壞れず、舌根紅蓮の如し。
（六五）顱骨今不見。石函尙存焉。　顱骨今見えず、石函尙ほ存せり。
粉壁有吳畫（六六）。筆彩依舊鮮。　粉壁に吳畫有り、筆彩舊に依りて鮮かなり。
（六七）素屏有褚書。墨色如新乾。　素屏に褚書有り、墨色新に乾くが如し。
靈境與異跡。周覽無不殫。　靈境と異跡と、周覽して殫さざる無し。
一遊五晝夜。欲返仍盤桓（六八）。　一遊五晝夜、返らんと欲して仍ほ盤桓す。
我本山中人。誤爲時網（六九）牽。　我は本山中の人、誤つて時網に牽かる。
牽率使讀書。推挽（七〇）令效官。　牽率して書を讀ましめられ、推挽して官に效さしめらる。

既登文字（七一）科。又忝諫諍員。　既に文字の科に登り、又諫諍の員を忝うす。
拙直不合時。無益同素餐（七二）。　拙直にして時に合はず、益無くして素餐に同じ。
以此自慚惕。戚戚（七三）常寡歡。　此を以て自ら慚惕し、戚戚として常に歡寡し。
無成心力盡。未老形骸（七四）殘。　成る無くして心力盡き、未だ老いざるに形骸殘す。
今來脫簪組（七五）。始覺離憂患。　今來簪組を脫し、始めて憂患を離るるを覺ゆ。
及爲山水遊。彌得縱疎頑。　山水の遊を爲すに及んで、彌〻疎頑を縱にするを得たり。
野麋斷羈絆。行走無拘攣。　野麋羈絆を斷ち、行走拘攣無し。
池魚放入海。一往何時還。　池魚放たれて海に入る、一往何の時か還らん。
身著居（七六）士衣。手把南（七七）華篇。　身に居士の衣を著け、手に南華の篇を把る。
終來此山住。永謝區（七八）中緣。　終に此山に來りて住し、永く區中の緣を謝せん。
我今四十餘。從此終身閑。　我今四十餘、此より身を終るまで閑ならん。
若以七十期。猶得三十年。　若し七十を以て期せば、猶ほ三十年を得ん。

【字解】【一】元和　憲宗皇帝の年號。【二】上弦　陰曆七八日頃の弓張月。【三】潺湲　水の流るる音。【四】藍溪　谷川の名。

【五】盤折　屈曲すること。【六】幡竿　旗竿。【七】石龕　石の厨子。佛像を安置するもの。【八】扃鐍　戸じまり。【九】石髮　苔なり。【一〇】朱軒　朱塗のノキ。【一一】撮土　ひとつまみの土。【一二】芊芊　茂る貌。【一三】翛然　遠くまで打開けて見晴し得ること。【一四】霏微　雲霧などの飛散する貌。【一五】白雨　ゆふだち。【一六】秦原　長安附近(古の秦の地)の野原。【一七】漢陵　漢代の天子の陵墓、長安の郊外に在る。【一八】縈紆　回旋すること。【一九】風鐸　塔の四隅に垂れてある鈴。【二〇】欒櫨　ひぢき。ますがた。【二一】恰恰　適合する貌。【二二】涅槃　死なり。【二三】鐵鉢　佛具。【二四】抖擻　拂ひ去ること。【二五】華鬘　佛像の頂に飾るもの。もと西域婦女の首飾。【二六】鬼功　鬼神の製作。【二七】雕鐫　彫刻なり。【二八】栴檀　香の名。【二九】斂足　謹愼の態なり。【三〇】六楹　六本の圓柱。【三一】金鋪　黄金や螺鈿。【三二】舍利　佛骨なり。【三三】金丹　仙藥なり。【三四】祇園　寺なり。【三五】金魄　明月。【三六】晶光　明かな光。【三七】覺夕　終夜。【三八】嬋娟　美好の貌。【三九】翾翾　飛ぶ貌。【四〇】離離　つゞく貌。【四一】紫纖　紫の傘。白紙錢は紙で作つた神に供へる紙。【四二】蘋蘩　水草。之を神に供へて祭るなり。【四三】獻奠　供物。葷擅は、なまぐさい物。【四四】嵩嵬　高くかさなる貌。【四五】花牋　花模樣のある紙。【四六】上頭　頂上。【四七】羽翮　鳥の羽。【四八】嵯峨　山峰の貌。【四九】翠屏　綠色の屏風。【五〇】慢流　ゆるやかな流。【五一】樛木　垂れさがつてゐる木。【五二】紅鱗　赤い鱗。【五三】琅玕　石の玉に似たるもの。【五四】璵璠　寶玉の名。【五五】卞和　和氏の璧を發見した人。【五六】鼯鼪　鼠の類の獸。【五七】素葩　白い花。【五八】人寰　俗世間。【五九】無生禪　生死を超脱した禪定。【六〇】綿綿　長く續く貌。【六一】羽化　羽が生えて仙人になる。上玄は天なり。【六二】芝朮　皆藥草の名。【六三】印壇　戒壇なり。【六四】蜿蜒　龍の遊ぶ貌。【六五】顱骨　頭の骨。【六六】吳畫　吳道子のかいた畫。【六七】素屏　白い屏風。楷書は褚遂良のかいた字。【六八】盤桓　徘徊なり。【六九】時網　時代の習俗。【七〇】推挽　人に推されたり、ひかれたりする。【七一】文字科　校書郎となりしこと。【七二】簪組　簪は冠を留めておくカンザシ。組は印綬。【七三】素餐　無能にして、たゞ俸祿を食むこと。【七四】戚戚　憂ふる貌。【七五】形骸殘　身の損傷すること。【七六】居士　處士。隱人。【七七】南華篇　莊子をいふ。【七八】區中　世俗なり。

【題義】悟眞寺といふ寺に遊んだことを述べた詩で、一百三十韻、二百六十句、一千三百字から成る大篇である。故に段落を切つておくことにした。

【詩意】元和九年秋八月上弦の頃に、王順山に在る悟眞寺に遊びに行つた。王順山の四五里前まで行くと早くも水の潺湲と流れる音を聞いた。此處から山阪になるので乘物をおりて藍溪の灣を渉り、手に青竹の杖をつき、足に白い石の早瀬を蹈んで行くと、耳目の妨となるものもなく、世間のうるさい物音も聞えない。初め山の下から山上を望見した時は、攀ぢ登れさうもなく思はれたが、山の中に路があり、屈曲して巖の巓に通じてゐる。先づ旗竿の立つてゐる處で一休して、再び石の厨子のある處で休んだ。厨子の長さは一丈ばかりあつて門にも戸にも扃鐍がない。俯して中をのぞいて見ても誰も居ない。たゞ苔が鬟のやうに垂れてゐる中から、驚いて白い蝙蝠が二匹飛び出した。首を回らして寺の門を望めば、青い崖が朱塗の軒を夾んでゐる。卽ち山腹を切り開いて其間に寺を置いたことがわかる。(以上寺外の景)

門をはひると中は土地に高低があつて平地はない。窮屈ではあるが境内は廣い。房廊や臺殿が峰巒の形勢に應じて高くも低くも建てられて居り、巖や崖には一撮の土だになく、そこに生えてゐる樹木は多くは痩せて堅い。其根は石を抱いて長く延び、屈曲して蟲や蛇の蟠つてゐるやうである。松や桂が行列を成さずに雜生し、四季ともに鬱鬱と茂つてゐる。清翠滴るばかりの枝が風にゆられて、管絃を奏するやうな音を立て、日月の光も透らぬほどに綠陰が深い。時に幽鳥の啼くのを聞いたが、丁度蟬

の啼くやうな聲であつた。(以上寺中の景)

先づ賓位亭(亭の名)で休んだ。座に就いて席の定まるを待たず、早速北の戸を開いて見ると、萬里の遠くまで一望空豁である。簷のさきには虹がかかつてゐる。棟のまはりには雲が渦巻いてゐる。赤日と白雨とが入りまじり、同じ一つの川が或處は晴れ、或處は曇つてゐる。野原には綠色の草木が蔽つてゐる。長安のあたりも一目に見えるが、渭水の流は細くてはつきりわからず、漢代の御陵は拳よりも小さく見える。振り回つてもと來た路の方を見ると、めぐりめぐつて朱塗の欄干と相映じてゐる。さて此欄干に倚つてゐると、山に登つて來る人が一人一人はつきりと見える。亭の前には多寶塔がある。塔の四隅には風鈴が鳴つてゐる。欒や櫨や戸や窓は金碧燦爛として照り輝いてゐる。昔伽葉佛(佛の名)が此地で涅槃に入つた(死んだこと)と云はれてゐる。されば今でも伽葉佛の持つてゐた鐵鉢が殘つてゐて、その底には手の跡がついてゐる。西には玉像殿がある。其中には白い佛像が肩を比べて列んでゐる。自分は塵に汚れた著物を脱ぎ去つて氷雪のやうな白佛の御顏を禮拜した。よく見ると白佛は霜を疊んで袈裟となし、雹を絲で貫いて華鬘にしたかのやうである。近く寄つて見れば神の仕業かと疑はれる。その出來ばえは人の手で彫刻したものとは思はれない。次に觀音堂に登つた。まだ堂まで行かないうちに早くも栴檀の香を聞いた。履をぬいで階段を上り、謹んで玉をちりばめた立派な席へ升つて見た。堂の中には六本の柱が立つてゐて、そこに玉で飾つた鏡がかけてあり、あたりには黄金や螺鈿が敷きつめてあつて、夜でも明るいから燈をつける必要もないくらゐだ。ここには多くの寶物が或は低く或は昂く置かれて、碧玉の珮だの珊瑚の幡だのがある。風が吹くと其等の物が相觸れ、珊珊として天上の音樂を聞くやうである。又白い珠は露が凝り固まつたやうであり、赤い珠は血の滴るやうである。さういふ珠が佛像の髮の上に點綴して七寶冠となつてゐる、又白い琉璃で作つた二つの瓶がある。その色は秋の水のやうに澄んでゐる。その中に舍利がある。圓く轉がつてゐることは金丹のやうである。又玉で作つた笛がある。いつの時代の物か知らないが、天人が此寺に施したものだといふ。之を吹くと秋天の鶴のやうな聲がして、仙人をも此世に呼び降すことが出來る。

この時は丁度秋の半で、十五夜の月が圓かである。寶堂は三方の門が開いてゐて明月が其前に當つてゐる。月と寶物とが相照して、明かな光が妍美を爭ひ、人の心骨をも寒からしめるほどである。それが爲に終夜眠らうとも思はずに夜を明かした。

夜が明けてから南の塔のある方へ行つた所が、美しい竹が亂れ生えて林をなしてゐる。いかにも奥深い處で人影だになく、ただ淋しげに蝶がひらひらと飛んでゐる。又名も知れぬ果が纍纍と路を夾んでなつてゐる。以て飢渇を醫することが出來る。その味は甘く酸くて甘露のやうである。道の南に藍谷の神の祠がある。紫の傘だの白い紙錢だのが供へてある。洪水や旱の時は詔して此神を祭らせる。清淨の地であるから、供物を見ても生臭い物などは一つもない。更に進み行けば、石が四つ五つ

高く累り、それが傾いてゐて刀か何かで削つたやうに立つてゐる。一體造物者はどんな考で巖の東端に此石を置いたのであらう。表面は滑かで人の足跡もなく、苔が處處に生えて花模樣のある紙のやうである。自分は此石の頂に登り、下の深い谷底を見下したが、目はくらみ手足は掉ひ、長く看てゐられなかつた。しかも風が石の下から吹き起つて、我を薄り搏ち、著物は羽をひろげたやうになり、今にも飛びあがりさうになつた。三面の峰が高く聳えて刀劍が集つてゐるやうである。往往白雲が其れに切られて青天を露はすことがある。西北の方を見ると夕日は赤く圓く、綠色の屛風のやうに千里も續く山の外に、丹砂の丸が走り下るやうに沈んで行く。翻つて東南を見ると、夜氣がひろびろと澄み渡り、そこへ明月が現れて、恰も百丈の碧潭の底に黃金の盆が寫つてゐるやうである。藍水の流は藍のやうに綺麗で、夜晝休みなしに潺湲と音立てて、山を遶つて流れてゐる。それを見下すと丁度青い環のやうである。或は平に流れて緩流となり、或は激して奔湍となり、水の澄んで深い處には蛟龍の涎が浮び出てゐる。身を側てて藍水の溪谷にはひつて見ると、中天に懸つたやうに石磴があつて甚だ危險である。蘿につかまつたり垂れ下つた木の枝を踏んだりして下つて行くと、谷間に水を飮んでゐた猿が驚いて逃げ出した。又白鷺は雪の飛ぶやうに飛びあがり、赤い鰻は錦を曳くやうに逃げまはつた。騷の靜まるのを待つて手を洗ひ口を漱ぎ、肢體の疲を洗ひ去つた。此川は淺い處も深い處も皆澄み徹つて、人の內臟までも寫るくらゐである。底の底まで見えるのを愛翫するだけで、其源がわからないから尋ねて行くことは出來なかつた。東の崖には怪石が多く、青い琅玕が石疊のやうにかさなつてゐる。玉の溫潤の氣が外に現れて其間に璵璠といふ寶玉が藏めてある。今は卞和のやうな玉を見分ける人がないから、良玉も棄てられて世に現れないが、この石は時に或は光を洩して、夜になると天上の星や月と光を連ねるさうである。中頂の最高峰は天を支へる青玉の竿のやうで、鼯鼬でも上れないのだから、自分などには到底登れない。其上に白蓮池があつて、白い花が漣の上を覆つてゐる。その池の名は聞いたが、全く俗界を離れた處で行つて見ることは出來ない。又一尺四方の甎ぐらゐな一箇の大石があつて、崖の中腹に挿つて萬仞の谷の上に懸つてゐる。昔法師が此石の上に坐して無生禪を悟得したといふ。此石は定心石と名づけられ、此寺の長老が代代語り傳へてゐる。更に此處から上つて仙人の祠に參詣した。あたりには蔓草が一面に生えてゐる。聞けば昔王氏の子が仙人になつて天に升つた所なさうだ。其西に藥を曬した臺があつて、今でも藥草畠に對してゐる。時時明月の夜には、仙人の乘つた黃鶴の聲が聞えるさうだ。次の畫龍堂を尋ねた。鬚や髮の白毛交りになつた二人の老翁が描いてある。自分は此老翁が法話を聽いた時に、歡喜に滿ち戒壇に向つて禮拜し、又地下の穴に下り蜿蜒たる龍と化したといふ話を想ひ浮べた。堂の階段の前に石の孔があつて、雨の降らうとする時には白い煙が出るといふ。又昔經文を寫す僧があつたが、雲外に飛んでゐる鴿が其僧の靜專に感じ、千匹も羣り飛んで、巖下の泉を吸つて來ては、經を寫す硯の水を添へ、一日に三回往復して、

いつも時節を違へなかつたといふ。其經が出來あがつて此僧は聖僧の名を取つた。其弟子に揚難といふ者があつて、此聖僧の蓮花の偈を誦すること百億千の數に滿ち、體は壞れても口は壞れず、舌が紅蓮のやうに赤くなつたといふ。其等の頭骨は今見ることは出來ないが、死骸を入れた石の函は今でも殘つてゐる。又白壁には吳道子のかいた畫があつて、昔のままの色彩を存してゐる。又白い屛風には褚遂良の書がある。墨色が今書いたばかりのやうである。以上述ぶる如く靈境と異跡と、殘らず見盡した。ここに來て五晝夜を經、いざ返らうとは思ふけれども、何となく立ち去りかねて暫く徘徊した。

我はもと山中に生れた者であるが、誤つて時代の習俗に引きずられ、無理やりに書を讀ませられ、又他人の推挽によつて官吏にせられた。既に校書郎となり、又左拾遺に任ぜられて君を諫める職に就いたが、愚直な性分だから時勢と合はず、何の功益も立て得ず、給料の只取りをしてゐると同じであつたから、いつも此事を憂へて心に樂がなかつた。かくて成す所もなく心力盡き、まだ老いたといふほどでもないのに身體が損はれてしまつた。此頃官職を退いて始めて重荷を卸したやうに感ずる。且つ今ここへ來て山水の遊をなし、愈我が疎頑の性を縱にすることが出來た。丁度野の鹿が絆を離れて自由に行走することが出來、池の魚が海に放たれて復と池に還らないのと同じである。これからは身には處士の服をまとひ、手には莊子を持つ、永く此山に住んで俗緣を絕ちたいものだ。今自分は年四十餘であるが、是からは一生閑で暮らさうと思ふ。假に七十まで生きるとすれば、まだ三十年此山で樂むことが出來る。

【餘論】唐宋詩醇に、「洋洋灑灑、一氣讀み去りて、千巖秀を競ひ萬壑流を爭ふに幾く、目、賞するに給せず。其中に就いて細かに之を尋ぬれば則ち步驟井然、一絲紊れず。首四句寺に遊ぶに因りて山に登るを點清し、竝に年月日俱に細敍す。去㆑山四五里より置㆓寺於其間㆒に至るまで、寺外の景を寫し、曲折靈異、逈に塵世を隔て、仙境に入るが如し。妙は回㆑首寺門望の四句を以て一頓挫を作すにあり。遂に心神の蕩漾を覺ゆ。宛も是れ初めて到る神情。入㆑門無㆓平地㆒の一句提筆を作し、聞㆑之似㆓寒蟬㆒に至るまで、寺中路徑の逶迤、樹木の蒼鬱を敍す。首憩賓位亭より可㆔以降㆓靈仙㆒に至るまで、細かに寺中歷る所の境と相傳の法物とを敍し、北戶を開きて前行し、又回顧して來路を見る。是れ多寶塔に對するを以てなり。玉像殿、觀音堂、皆寺の西界。是時秋方中より竟夕不㆑欲㆑眠に至るまで、夜中の景を摹寫し、八月月上弦の一句と相映じて又一束となす。曉尋南塔路より欲㆑返仍盤桓に至るまで、連日遊ぶ所の境を歷敍し、變化して之を出す。南よりして東、而して中、而して上。北を言はざるものは、寺門に入りしより大抵皆北に向つて行けばなり。其間神像あり、峰巖あり、水あり、怪石あり、白蓮あり、祠あり、臺あり、畫あり、書あり。細細寫し出す。日落ち月上る。復た次日晝より夜に入るの景を帶敍し、更に拖沓せず。寫經僧、誦經弟子は、只虛寫し、傳聞上にありて敍出し、靈境與㆓異跡㆒の四句、一總束と作す。一遊五晝夜、又八月月上弦と照應す。我本山中人より末に至るまで、遊

字の意を收足す。四十餘、三十年、又元和九年と照應す。全詩を細玩すれば、分明に記序を作るの手筆を以て之を詩に用ふ。韓愈の南山の詩は奇肆を以て勝り、此は秀折を以て勝る。匹敵と謂ふべし。謝靈運が山に遊ぶの詩、柳宗元が山水の記、素より奇構と稱す。彼を以て此に方ぶれば廣狹の別なくんばあらず」と評してある。

又甌北詩話には「唐人の五言古詩大篇、少陵の北征、昌黎の南山に如くは莫し。二詩の優劣は黃山谷已に嘗て之を言へり。然れども香山にも亦遊王順山悟眞寺一首あり。多きこと一千三百字に至る。世顧つて未だ言及する者あらず。今其詩を以て南山と相校するに、南山の詩は但儱侗として山景を摹寫し、數十の或の字を用ひて極力刻畫す。而も之を以て移して他山を寫すも亦通用すべし。悟眞寺の詩は、則ち先づ山に入るを寫し、次に寺に入るを寫し、先づ賓位に憩ひ、次に玉像殿に至り、次に觀音巖、この夕寺中に宿し、明日又南塔の路より藍谷を過ぎ、其巓に登り、又藍水環流の處に到り、中頂の最高峰に上り、尋で一片石、仙人祠に謁し、廻りて畫龍堂を尋ね、吳道子の畫、褚河南の書あるを點明し、總べて登歷凡て五日を結び、層次既に清楚を極む。且つ一處は一處の景物を寫し、他處に移易すべからず。南山の詩に較ぶれば更に之に過ぐるに似たり。又北征、南山、皆仄韻を用ふ。故に氣力健舉なり。此れ但平韻を用ひて逐層鋪敍し、沛然として餘あり、一語の冗弱なし。更に難きを覺ゆるなり。而るに詩人知らず、則ち香山に長恨、琵琶諸大篇の人口に膾炙するあるを以て、遂に此詩を不問に置くのみ」と評してある。

酬張十八訪宿見贈　自此後詩、爲贊善大夫時作

張十八が訪宿して贈らるるに酬ゆ　此より後の詩は贊善大夫たりし時作る

昔我爲近臣。君常稀到門。　昔我近臣たりしとき、君常に稀に門に到る。
今我官職冷。唯君來往頻。　今我官職冷なり、唯君來往すること頻なり。
我受狷介性。立爲頑拙身。　我狷介の性を受け、立ちて頑拙の身と爲る。
平生雖寡合。合卽無緇磷。　平生合ふこと寡しと雖も、合へば卽ち緇磷無し。
況君秉高義。富貴視如雲。　況んや君高義を秉り、富貴視ること雲の如きをや。
五侯三相家。眼冷不見君。　五侯三相の家、眼冷にして君を見ず。
問其所與遊。獨言韓舍人。　其の與に遊ぶ所を問へば、獨言ふ韓舍人と。
其次卽及我。我媿非其倫。　其次は卽ち我に及ぶ、我愧づらくは其倫に非ざるを。
胡爲謬相愛。歲晚逾勤勤。　胡爲ぞ謬りて相愛する、歲晚れて逾勤勤たり。

(六)落然頽簷下。一話夜達晨。　落然たる頽簷の下、一話して夜晨に達る。
牀單食味薄。亦不嫌我貧。　牀單にして食味薄きも、亦我が貧を嫌はず。
日高上馬去。相顧猶逡巡。　日高くして馬に上り去る、相顧みて猶ほ逡巡す。
長安久無雨。日赤風(七)昏昏。　長安久しく雨無く、日赤くして風昏昏たり。
憐君將病眼。爲我犯埃塵。　憐む君が病眼を將つて、我が爲に埃塵を犯すを。
遠從延康里。來訪(八)曲江濱。　遠く延康の里より、來りて曲江の濱を訪ふ。
所重君子道。不獨愧相親。　重んずる所は君子の道なり、獨り相親むことを愧づるのみならず。

【字解】【一】近臣　天子の近臣。左拾遺となつたこと。【二】狷介　守る所堅く、他と和合せぬこと。【三】緇磷　緇は黑くなること。磷は薄くなること。論語に、不曰堅乎、磨而不磷。不曰白乎、涅而不緇とある。【四】五侯三相　貴顯の人。【五】韓舍人　韓は姓、舍人は官名。【六】落然　凋落の貌。【七】昏昏　暗き貌。【八】曲江　長安に在る池の名。

【題義】張十八（張は姓、十八は排行）が白樂天の居を訪うて遂に一宿し、詩を作つて樂天に贈つたので、樂天がそれに酬いた詩である。これから後の詩は樂天が年四十三、太子左贊善大夫に任せられてから作つたものである。

【詩意】昔余が天子の近臣であつた頃は、君は余を訪ふことが稀であつたが、今は余の官職が卑いので、君は度度余を訪ふやうになつた。余は狷介で人と相容れない性質であつたが、遂に頑拙の身となつた。それゆゑ人と合はないが、いざ合つたとなると容易に節を屈げて人に雷同するやうなことはない。まして君は高義の人で富貴を視ること浮雲の如くである。されば富貴の人は君を親愛しない。因つて與に遊ぶ所の人を君に問へば、先づ第一が韓舍人、其次は余だといふ。余の如きは君の朋輩たるに足らぬ者であるが、何の誤で君に親愛されるやうになつたのか、年を取るに隨つて益親愛の度を増し、落然たる破屋に宿し、一晩中語り明し、寢牀の粗末なことも食物のまづいことも敢て厭はない。翌朝日が高くのぼつてから馬に上つて歸るに方り、又互に顏を見合せて別を惜んだ。今や長安は久しく雨が降らないので、日がかんかん照つて風が砂塵を捲きあげる。君は眼病を患へてゐるのに、余の爲に此砂塵を犯して、延康里から遠く余を曲江の濱に訪問してくれたことを感謝する。余は君の君子の道あることを尊敬する者で、ただ獨り君の親愛を辱うすることを愧づるのみではない。

朝歸書寄元八　　朝より歸り書して元八に寄す

進入閤前拜。退就廊下餐。　進んで閤前に入りて拜し、退いて廊下に就いて餐す。
歸來昭國里。人臥馬歇鞍。　歸り來る昭國里、人臥して馬鞍を歇む。

却睡至日午。起坐心浩然。　却つて睡りて日午に至り、起坐して心浩然たり。

況當好時節。雨後清和天。　況んや好時節に當り、雨後清和の天。

柿樹綠陰合。王家庭院寬。　柿樹綠陰合し、王家庭院寬し。

瓶中鄠縣酒。墻上終南山。　瓶中鄠縣の酒、墻上終南の山。

獨眠仍獨坐。開襟當風前。　獨り眠りて仍ほ獨り坐し、襟を開いて風前に當る。

禪僧與詩客。次第來相看。　禪僧と詩客と、次第に來りて相看る。

要語連夜語。須眠終日眠。　語らんと要すれば夜を連ねて語り、眠るべくして終日眠る。

除非奉朝謁。此外無別牽。　朝謁に奉ずることを除非して、此外別に牽かるる無し。

年長身且健。官貧心甚安。　年長じて身且つ健なり、官貧にして心甚だ安し。

幸無急病痛。不至苦飢寒。　幸に急病の痛み無く、飢寒に苦しむに至らず。

自此聊以適。外緣不能干。　此より聊か以て適す、外緣干す能はず。

唯爲靜者信。難爲動者言。　唯靜者の爲に信ぜられ、動者の爲に言ひ難し。

臺中元侍御。早晚作郎官。　臺中の元侍御、早晚郎官と作らん。

未作郎官際。無人相伴閑。　未だ郎官と作らざる際は、人の相伴つて閑なる無し。

【字解】【一】臺中　臺は御史臺。役所の名。

【題義】朝廷から退いて昭國里の官宅に歸り、元侍御に寄せた詩である。

【詩意】晨に宮門に入りて拜謁し、退いて廊下で朝食を賜はり、それから昭國里に歸つて來て、吾も馬も休息し、眞晝頃まで睡つて起きると氣が晴晴とする。まして雨あがりの清和の時節で、王家の廣い庭には柿の樹の綠陰が深く、瓶の中には鄠縣の酒があり、墻上には終南山を望むことが出來るのであるから。睡から覺めて獨り坐し、襟を開いて風を入れてゐると、禪僧だの詩人だのが次第に訪ねて來て、語りたければ夜どほしでも語り明し、眠むければ一日中でも眠つてゐて、朝謁を除く外には別に拘牽するものはない。年取つても健康で官は卑くとも心は甚だ安く、病氣の苦痛もなければ飢寒の心配もない。これからは悠悠自適して、俗緣の爲に心を干されることのないやうにしたいものだ。かかる事は唯靜寂を愛する人のみに理解されることで、心の躁妄な人には言ふことは出來ない。君は早晩郎官となるであらうから其時は此樂を共にしたいものだ。まだ郎官にならないうちは相伴つて閑遊することは出來ないが。

酬吳七見寄

吳七が寄せらるるに酬ゆ

(一)曲江有病客。(二)尋常多掩關。　曲江に病客有り、尋常多くは關を掩ふ。
又聞馬死來。不出身更閒。　又聞く馬死してより來、出でずして身更に閒なりと。
聞有送書者。自起出門看。　書を送る者有りと聞き、自ら起ちて門を出でて看る。
(三)素緘署丹字。中有(四)瓊瑤篇。　素緘丹字を署し、中に瓊瑤の篇有り。
口吟耳自聽。當暑忽(五)翛然。　口に吟じて耳自ら聽き、暑に當りて忽ち翛然たり。
似漱寒玉水。如聞(六)商風絃。　寒玉の水に漱ぐに似たり、商風の絃を聞くが如し。
(七)首章歎時節。末句思笑言。　首章時節を歎じ、末句に笑言を思ふ。
懶慢不相訪。隔街如隔山。　懶慢して相訪はず、街を隔てて山を隔つるが如し。
嘗聞(八)陶潛語。心遠地自偏。　嘗て聞く陶潛が語、心遠くして地自ら偏なり。
君住安邑里。左右車徒喧。　君は安邑里に住す、左右車徒喧し。
竹藥閉深院。琴樽開小軒。　竹藥深院を閉ぢ、琴樽小軒を開く。
誰知市南地。轉作(九)壺中天。　誰か知らん市南の地、轉た壺中の天と作すを。
君本(一〇)上淸人。名在(一一)石堂間。　君は本上淸の人、名は石堂の間に在り。
不知有何過。謫作人間仙。　知らず何の過有りてか、謫せられて人間の仙と作る。
常恐歲月滿。飄然歸(一二)紫煙。　常に恐らくは歲月滿ちて、飄然として紫煙に歸らんことを。
莫忘(一三)蜉蝣內。進士有(一四)同年。　忘るる莫かれ蜉蝣の內、進士同年有るを。

【字解】【一】曲江　長安に在る池の名。【二】尋常　平生なり。【三】素緘　白い封書。丹字は赤文字。【四】瓊瑤篇　玉の如き詩。【五】翛然　疾く飛ぶ貌。【六】商風　秋風。【七】首章　一篇の發端。【八】陶潛　陶淵明。【九】壺中天　別世界の意。漢書方術傳に、費長房は汝南の人なり。曾て市掾となる。市中に老翁あり藥を賣る。一壺を肆頭に懸け、市罷むに及べば輒ち跳りて壺中に入る。長房往いて再拜す。翁乃ち俱に壺中に入る。ただ玉堂の嚴麗なるを見る云云とある。【一〇】上淸　道家三淸の一。【一一】石堂　石室に同じ。神仙傳に、崑成子崆峒の山、石室の中に居るとある。【一二】紫煙　天上神仙の居る處。【一三】蜉蝣　かげろふ。俗世間に喩ふ。【一四】同年　同じ年に進士の試驗に及第した人。

【題義】吳七（吳は姓、七は排行）が白樂天に詩を寄せたので、樂天が其れに酬いた詩である。

【詩意】曲江に病夫（白樂天自ら謂ふ。樂天が曲江の邊に住んでゐたことは、前の酬張十八訪宿見贈の詩にある）があつて、平生多くは門を掩うて閉居してゐる。折しも手紙を持つて來た者があると聞いて、門外に出て使者を見、外出しないで閑で暮してゐる。赤文字で署名した白い封書を受取つて、開いて見ると中に一篇の詩があつた。自分で吟じて自分で聽

けば、忽ち暑氣が退散してしまつた。冷い水で口を漱ぎ秋風の音を聞いたやうである。其詩の發端には時節を嘆じ、末の方には君と笑言したいといふやうなことが述べてある。その癖自分は人を訪問するに懶く、街を隔ててゐるのをば、山でも隔ててゐるやうに思つてゐる。陶淵明の詩句に、「心遠くして地自ら偏なり」とあるが、君は安邑里に住んでゐる。その近所は車馬の音が騷がしい。然るに君は深院を閉ぢて竹や芍藥などを植ゑ、小軒を開いて琴酒を樂み、市の南方に獨り別天地を構へてゐる。君はもと仙界の人であるのに、何の罪を以て人間界に謫せられたのであらう。自分は年限が滿ちたら又紫煙を逐うて天上に去るのではないかと常に恐れてゐる。どうか俗世間に同年の友がゐることを忘れぬやうにしてもらひたい。

昭國閑居（一）

貧閑日高起。門巷晝寂寂。
時暑放朝參（二）。天陰少人客。
槐花滿田地。僅絕人行跡。
獨在一牀眠。清涼風雨夕。
勿嫌坊曲（三）遠。近卽多牽役。
勿嫌祿俸薄。厚卽多憂責。
平生尙恬曠。老大宜安適。
何以養吾眞。官閑居處僻。

昭國の閑居

貧閑にして日高くして起き、門巷晝寂寂たり。
時暑にして朝參を放され、天陰りて人客少なり。
槐花田地に滿ち、僅ど人行の跡を絕つ。
獨り一牀に在りて眠る、清涼たる風雨の夕。
嫌ふ勿れ坊曲の遠きを、近ければ卽ち牽役多し。
嫌ふ勿れ祿俸の薄きを、厚ければ卽ち憂責多し。
平生すら尙は恬曠、老大宜しく安適すべし。
何を以てか吾が眞を養ふ、官閑にして居處僻なり。

【字解】【一】昭國　長安の里の名。前の朝歸書寄元八に見ゆ。【二】朝參　朝廷に出勤すること。【三】坊曲　町なり。

【題義】昭國里の官宅に閑居する情趣を述べた詩である。

【詩意】貧にして且つ閑であるから、日が高くのぼつてから始めて起きる。あたりは晝でも靜かである。丁度暑い氣節なので休暇を賜はつて參朝もせず、陰り勝ちの天氣だから來り訪ふ客も少く、槐の花が一面に散り敷いて殆ど人の足跡をも埋めるばかりだ。この清涼な風雨の夕に獨り靜に眠つてゐる。住む町の僻遠なことは敢て厭はない。若し近ければ却つて色色な役目が增すであらうから。又俸祿の薄いことも敢て厭はない。厚ければ隨つて責任も重くなるから。少い時ですら安佚を好んだのであるから、老いては益安適を好まざるを得ない。で、何を以て吾が天眞を養ふかといふに、官が閑で居處の僻遠なことである。

喜陳兄至

陳兄の至るを喜ぶ

黃鳥啼欲歇。青梅結半成。　黃鳥啼いて歇めんと欲し、青梅結んで半成る。
坐憐春物盡。起入東園行。　坐に憐む春物の盡くるを、起つて東園に入りて行く。
攜觴嬾獨酌。忽聞叩門聲。　觴を攜ふるも獨り酌むに嬾し、忽ち聞く門を叩く聲。
(一)閒人猶喜至。何況是陳兄。　閒人だも猶は至るを喜ぶ、何ぞ況んや是れ陳兄なるをや。
從容盡日語。(二)稠疊長年情。　從容として盡日語り、稠疊たり長年の情。
勿輕一杯酒。可以話平生。　輕んずる勿れ一杯の酒、以て平生を話る可し。

【字解】【一】閒人　ひまな人。【二】稠疊　繁冗なこと。長年は老年。

【題義】陳某の來り訪ひしを喜んで作つた詩である。

【詩意】今や黃鳥も啼き歇まんとし、青梅も半熟せんとする時節になつた。春景色の盡きんとするを惜みつつ、起つて東園を步いて見た。獨りでは酒を酌む氣にもなれずにゐる所へ、忽ち門を叩く聲を聞いた。こんな時はどんな暇人でも來てくれるのは嬉しいものだが、まして陳兄とあつては尙更に嬉しい。因つて從容として一日を語り盡した。話のくどいのは年寄りの常情で仕方がない。何のあいそもないが、一杯の酒を輕んせずに平生を語るがよい。

贈杓直

杓直に贈る

世路重祿位。棲(一)棲者孔宣。　世路祿位を重んず、棲棲たる者は孔宣。
人情愛年壽。夭死者顏淵。　人情年壽を愛す、夭死する者は顏淵。
二人如何人。不奈命與天。　二人は如何なる人ぞ、命と天とを奈んともせず。
我今信多幸。撫己愧前賢。　我今信に幸多し、己を撫して前賢に愧づ。
已年四十四。又爲(二)五品官。　已に年四十四、又五品の官と爲る。
況茲知足外。別有所安焉。　況んや茲足るを知るの外、別に安んずる所有り。
早年以(三)身代。直赴(四)逍遙篇。　早年には身代を以て、直に逍遙の篇に赴く。
近歲將(五)心地。廻向(六)南宗禪。　近歲には心地を將つて、廻つて南宗の禪に向ふ。
外順世間法。內脫區(七)中緣。　外は世間の法に順ひ、內は區中の緣を脫す。
進不厭朝市。退不戀人寰。　進んで朝市を厭はず、退いて人寰を戀はず。

自吾得此心。投足無不安。　吾此心を得てより、足を投じて安んせざる無し。

體非道引適。意無江湖閒。　體は道引に非ずして適ひ、意は江湖無くして閒なり。

有興或飮酒。無事多掩關。　興有れば或は酒を飮み、事無ければ多く關を掩ふ。

寂靜夜深坐。安穩日高眠。　寂靜にして夜深けて坐し、安穩にして日高けて眠る。

秋不苦長夜。春不惜流年。　秋は長夜を苦ます、春は流年を惜ます。

委形老小外。忘懷生死間。　形を老小の外に委し、懷を生死の間に忘る。

昨日共君語。與余心膂然。　昨日君と共に語り、余と心膂のごとく然り。

此道不可道。因君聊强言。　此道道ふ可からず、君に因りて聊か强ひて言ふ。

【字解】【一】栖栖　遑遑に同じ、東奔西走して忙しき貌。論語に、丘何爲是栖栖者與云云とある。孔宣は孔子なり、孔子は開元二十七年に文宣王と追諡せられた。【二】五品　五位なり。【三】身代　身世に同じ。【四】逍遙篇　莊子に逍遙遊篇あり。【五】心地　心をいふ。【六】南宗禪　禪宗は五祖より後分れて南北二宗となる。南頓北漸の別あり。【七】區中　俗世間。【八】道引　按摩の如き術。【九】流年　歲月の流るるが如きをいふ。【一〇】心膂　膂は背なり。書經君牙篇に股肱心膂とある。

【題義】李杓直（卷七に秋日懷杓直と題する詩がある）に贈つて己の興懷を述べた詩である。

【詩意】世間の人は皆祿位を重んずる。所が孔子は祿位を得ず栖栖として東西に奔走した。人情は長命を好む。所が顏淵（孔子の弟子、名は回）は夭死してしまつた。孔子も顏淵も天命なれば如何ともすることが出來なかつたのである。然るに余は何の幸か、前賢に劣る身でありながら、已に四十四まで長生きして且つ五品の官にもなつた。そして唯足るを知るばかりでなく、別に心に安んずる所もある。年少い時から身を以て逍遙遊篇の旨意に叶はんことを期し、近頃は心を以て南宗の禪に向け、外は世間の習俗に順つてゐるが、心は俗緣を超脫し、進んで朝市を厭はず、退いて世間を戀はざる境地に達した。既に此悟を得てからは、一擧一動安んせざる所はない。されば道引に依らずとも體胖に、江湖に居なくとも心が穩である。興が湧けば酒を飮み、閑居して門を出です、夜のふけるまで靜に坐し、日の高くのぼるまで安眠し、秋は夜の長きを厭はず。春は日の過ぎ易きを惜ます、老小生死の界を超越してゐる。昨日君と語り合つて見た所に據れば、君の考も全く余と符節を合せたやうに一致する。この道は言葉に現すことは出來ないが、君の爲に强ひて言つて見たのである。

寄張十八

張十八に寄す

飢止一簞食。渴止一壺漿。　飢ゑては一簞の食に止まり、渴しては一壺の漿に止まる。

出入止一馬。寢興止一牀。　出入は一馬に止まり、寢興は一牀に止まる。

此外無長物(三)。於我有若亡。　此外長物無し、我に於いて有れども亡きが若し。
胡然不知足。名利心遑遑(四)。　胡ぞ然く足るを知らず、名利に心遑遑たる。
念茲彌懶放。積習遂爲常。　茲を念うて彌懶放し、積習遂に常と爲る。
經旬不出門。竟日(五)不下堂。　旬を經れども門を出でず、竟日堂を下らず。
同病者張生。貧僻住延康(六)。　病を同じうする者は張生なり、貧僻にして延康に住す。
慵(七)中每相憶。此意未能忘。　慵中每に相憶ふ、此の意未だ忘るる能はず。
迢迢(八)青槐街。相去八九坊(九)。　迢迢たる青槐の街、相去ること八九坊。
秋來未相見。應有新詩章。　秋來未だ相見ず、應に新詩章有るべし。
早晚(一〇)來同宿。天氣轉清涼。　早晚來りて宿を同じうせよ、天氣轉た清涼なり。

【字解】【一】一簞食　一かごの飯。【二】寢興　ねると、おきると。【三】長物　餘計な物。【四】遑遑　あくせくと奔走すること。【五】竟日　終日。【六】延康　長安の里の名。【七】慵中　ものうい時。【八】迢迢　遙なる貌。青槐は街路樹なり。【九】坊　町なり。【一〇】早晚　早く。

【題義】張十八に寄せて來宿を促した詩である。

【詩意】飢を醫するには一簞の飯を食ひ、渴を療するには一壺の漿を飲み、出入には一匹の馬に乘り、寢るには一個の寢臺を用ひる。この外には餘計な物は何もない。我に取つては有つても無いと同じである（別に必要を感じないから）。世間の人はなぜ足ることを知らないのであらうか、名利の爲に常に東奔西走してゐる。吾は之を念うて愈放埒になり、それが習慣になつて、十日間も門を出ず、終日堂を下らない。張君も余と病癖を同うする人で延康里に貧居してゐる。自分は常に君を憶うて忘れることが出來ない。槐の竝木を隔てること八九坊ではあるが、秋になつてからまだ逢はないけれども、多分新作の詩も出來てゐるであらうから早く宿りがけに來るがよい。天氣も清涼であるから。

題玉泉寺

玉泉寺に題す

湛湛(一)玉泉色。悠悠(二)浮雲身。　湛湛たる玉泉の色、悠悠たる浮雲の身。
閒心對定水。清淨兩無塵。　閒心定水に對す、清淨にして兩ながら塵無し。
手把青筇(三)杖。頭戴白綸巾(四)。　手に青筇の杖を把り、頭に白綸の巾を戴く。
興盡下山去。知(五)我是誰人。　興盡きて山を下り去る、知る我は是れ誰人ぞ。

【字解】【一】湛湛　水の平なる貌。【二】悠悠　閑暇の貌。【三】青筇竹　青い竹の杖。【四】白綸巾　白い綸子で作つた頭巾。【五】知　不知の意。

【題義】　玉泉寺の壁に題した詩である。

【詩意】　此寺の境内には湛湛として靜に湛へた玉泉がある。此泉に對して立つ我は、悠悠として浮雲の如き無心無欲の人である。この閒心と靜水とは共に清淨無垢である。手に青い竹の杖を持ち、頭に白い綸子の頭巾をかぶつて、飽くまで境内を漫歩し、興が盡きれば山を下つて歸る。その時は殆ど己の何人であるかをも忘れてしまふ。

朝回遊城南

朝より回りて城南に遊ぶ

朝退馬未困。秋初日猶長。　朝より退いて馬未だ困まず、秋初日猶

回轡城南去。郊野正清涼。　轡を回して城南に去れば、郊野正に清涼。

水竹夾小徑。縈廻繞川岡。　水竹小徑を夾み、縈廻して川岡を繞る。

仰看晩山色。俯弄秋泉光。　仰いで晩山の色を看、俯して秋泉の光を弄す。

青松繫我馬。白石爲我牀。　青松に我が馬を繫ぎ、白石を我が牀と爲す。

常時（一）簪組累。此日（二）和身忘。　常時簪組の累、此日身に和して忘る。

且隨（三）鵷鷺末。暮遊鷗鶴傍。　旦に鵷鷺の末に隨ひ、暮に鷗鶴の傍に遊ぶ。

（四）機心一以盡。兩處不亂行。　機心一に以て盡き、兩處行を亂さず。

誰辨（五）心與跡。（六）非行亦非藏。　誰か心と跡とを辨せん、行に非ず亦藏に非ず。

【字解】【一】簪組　簪は冠をとめるカンザシ。組は印綬。官職に喩ふ。【二】和身　身と倂せて。【三】鵷鷺　朝官の行列をいふ。鵷と鷺との整齊にして序あるが如くなる故。【四】機心　巧詐の心。莊子天地篇に、機事ある者は必ず機心ありとある。【五】心與跡　跡は行事なり。【六】非行亦非藏　行は出でて道を行ふこと、藏は退いて隱るること。論語に「之ヲ用フレバ則チ行ヒ、之ヲ舍ツレバ則チ藏ル」とある。

【題義】　朝廷を退出してから城南に遊びに行つたことを述べた詩である。

【詩意】　朝廷から退けて來てもまだ馬が疲れてもゐず、秋の初でまだ日も長いので、手綱を回して城南にでかけたが、野邊の景色が如何にも清涼である。近くには小流や竹林が小徑を夾み岡を繞つてゐるのを見、遠くは仰いで山の夕景色を看、俯して秋泉の光を賞し、青松に馬を繫ぎ白石に腰を下して休息してゐると、平生の宦情も我が身の累も忘れてしまつた。かくて朝には官列に加はつて鵷鷺と伍を成し、夕には此處に來て鷗鶴と遊び、巧詐の心が全く盡きて官吏としても野人としても其行を亂さない。誰か吾が心跡を辨知するであらう。吾が心跡は卽ち行にもあらず亦藏にもあらず、行藏を超越したものである。

309
65

終

續國譯漢文大成

文學部 三十六

309
65

帙入

始

吉田待郎氏 寄贈本

續國譯漢文大成

文學部 第三十六册（第九帙の四）

白樂天詩集 一の四

309
65

白樂天詩集卷七

閑適三 古調詩凡六十一首

舟行江州路上作 自此後詩、爲江州司馬時作。

舟行、江州路上の作 此より後の詩は、江州司馬たりし時作る

帆影日漸高。閑眠猶未起。 帆影日漸く高く、閑眠猶未だ起きず。
起問鼓枻人。已行三十里。 起きて枻を鼓する人に問へば、已に行くこと三十里。
船頭有行竈。炊稻烹紅鯉。 船頭行竈有り、稻を炊ぎて紅鯉を烹る。
飽食起婆娑。盥漱秋江水。 飽食起つて婆娑、盥漱す秋江の水。
平生滄浪意。一旦來遊此。 平生滄浪の意、一旦來りて此に遊ぶ。
何況不失家。舟中載妻子。 何ぞ況んや家を失はず、舟中妻子を載するをや

【字解】【一】鼓枻 舟をこぐ。【二】船頭 舟のへさき。【三】行竈 自由に持ちあるくことの出來る竈。【四】婆娑 舞ふ貌。【五】盥漱 手を洗ひ、口をすすぐ。【六】滄浪 川の名、漢水ともいふ。楚辭漁父篇に、漁父莞爾而笑、鼓枻而去、歌曰、滄浪之水清兮、可以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可以濯吾足、云云とある。

【題義】貶謫せられて江州（江西省潯陽郡）に行く舟中の作である。唐宋詩醇に、遷謫せられて遠行するのに、絶えて憂愁不平の語を吐かないのは見地が高いとほめてゐる。

【詩意】舟の中に寢て日が高くのぼるまで起きずにゐた。起きて船頭に聞いて見ると已に三十里も走つたとの事である。舳の方に持ち運びの出來る竈があつて、飯をたいたり鯉を烹たりしてゐる。食事が終つてから起ちさまようて、川の水で手を洗ひ口を漱いだ。平生浮世をよそに舟遊びでもしたいと思つてゐたが、一旦此に遊んで宿志を果すことが出來た。まして一家眷族相率ゐて舟中に在るのは誠に愉快である。

湓浦早冬（一）

湓浦の早冬

潯陽孟冬月。草木未全衰。（二）　潯陽孟冬の月、草木未だ全く衰へず。
秖抵長安陌。涼風八月時。（三）　秖に抵る長安の陌、涼風八月の時。
日西湓水曲。獨行吟舊詩。　日は西す湓水の曲、獨行して舊詩を吟ず。
蓼花始零落。蒲葉稍離披。（四）　蓼花始めて零落し、蒲葉稍離披す。
但作城中想。何異曲江池。（五）　但城中の想を作す、何ぞ曲江の池に異ならんや。

【字解】【一】湓浦 湓水といふ川が長江に入る處、江西省九江縣の西に在る。【二】潯陽 郡の名。江州なり。孟冬は初冬。【三】長安 唐の都。陝西省に在る。陌は巷なり。【四】離披 ひらき盡すこと。【五】曲江 長安に在る池の名。白樂天は、もと其近所に住んでゐた。

【題義】湓浦の邊の初冬の景を述べた詩である。

【詩意】潯陽郡では初冬でも草木が未だ全く凋衰しない。丁度長安の涼風八月頃に相當してゐる。日の西に傾いた時、湓水の邊を舊詩を吟じながら獨り歩いてゐると、蓼の花は落ち蒲の葉は開き、とりどりの風情がある。だから此處に居れば長安の曲江の邊に居ると少しも變りはない。

江州雪

江州の雪

新雪滿前山。初晴好天氣。　新雪前山に滿ち、初めて晴れて天氣好し。
日西騎馬出。忽有京都意。　日西にして馬に騎りて出づれば、忽ち京都の意有り。
城柳方綴花。簷冰纔結穗。　城柳方に花を綴り、簷冰纔に穗を結ぶ。

須臾風日暖。處處皆飄墜。　須臾にして風日暖かに、處處皆飄墜す。
行吟賞未足。坐歎銷何易。　行吟賞未だ足らず、坐歎銷何ぞ易き。
猶勝嶺南看。雰雰不到地。　猶ほ嶺南の看に勝れり、雰雰として地に到らず。

【字解】【一】嶺南　五嶺（大庾・始安・臨賀・桂陽・掲陽をいふ）の南の地方。【二】雰雰　雪の降る貌。

【題義】江州の雪景を述べた詩である。

【詩意】前方の山に一面に雪が積つて、しかも好晴の天氣になつた。因つて日の西に傾く頃馬に乘つて雪見に出かけ、ふと長安にゐるやうな氣持がした。柳は皆白い花を綴り、氷柱は穗のやうに垂れてゐたが、須臾して暖になると、處處はげて來た。まだ十分賞翫しないうちに銷えてしまふのは惜いが、併し嶺南地方のやうに、チラチラ降つても地に屆かないうちに消えてしまふよりは勝つてゐる。

題潯陽樓

潯陽樓に題す

常愛陶彭澤。文思何高玄。　常に愛す陶彭澤、文思何ぞ高玄なる。
又怪韋江州。詩情亦清閑。　又怪む韋江州、詩情亦清閑。
今朝登此樓。有以知其然。　今朝此樓に登り、以て其の然るを知る有り。
大江寒見底。匡山青倚天。　大江寒くして底を見し、匡山靑くして天に倚る。
深夜湓浦月。平旦鑪峯煙。　深夜湓浦の月、平旦鑪峯の煙。
清輝與靈氣。日夕供文篇。　清輝と靈氣と、日夕文篇に供ふ。
我無二人才。孰爲來其間。　我二人の才無し、孰爲ぞ其間に來る。
因高偶成句。俯仰愧江山。　高きに因りて偶句を成し、俯仰して江山に愧づ。

【字解】【一】陶彭澤　陶淵明をいふ。淵明は今の江西省潯陽道彭澤縣の縣令になつたから。【二】文思　詩情なり。【三】韋江州　韋應物をいふ。韋應物は建中三年比部員外郎に拜せられ、出されて滁州刺史となり、久うして江州に調せられ、貞元中蘇州刺史となつた。故に普通に韋蘇州といふ。【四】大江　揚子江。【五】匡山　廬山なり。【六】湓浦　前の湓浦早冬に見ゆ。【七】鑪峯　廬山の香鑪峯。

【題義】潯陽樓の壁に題した詩である。

【詩意】自分は常に陶淵明の詩の高玄の風あるを愛し、又韋應物の詩の淸閑の趣あるを賞する者であるが、今朝この樓に登つて見て、二人の詩の妙は江山の助に由るものであることを知つた。長江は澄んで底までも見え、廬山は靑く天上に聳え、深夜には湓浦の月の賞すべきあり、平旦には香鑪峯の煙

の纏纏たるあり、その清き光と靈氣とは朝に夕に詩料を提供してゐる。さて自分は二人の才力がないから、ここに來ても何の益もない。高樓に登つて此詩を作つては見たが、誠に江山に對して愧ぢざるを得ない。

【餘論】白樂天が陶淵明や韋應物に私淑してゐたことは卷六の自吟拙什因有所懷の所で述べたとほりである。

訪陶公舊宅　幷序

陶公の舊宅を訪ふ　幷に序

予夙慕陶淵明爲人。往歲渭(一)上閒居。嘗有效陶體詩十六首。今遊廬山。經柴(二)桑。過栗(三)里。思其人。訪其宅。不能默默。又題此詩云。

【訓讀】予夙に陶淵明の人と爲りを慕ふ。往歲渭上に閒居せしとき、嘗て陶が體に效ふ詩十六首有り。今廬山に遊び、柴桑を經、栗里を過ぎ、其人を思うて、其宅を訪ひ、默默たる能はず。又此詩を題すと云ふ。

垢塵不汚玉。靈鳳不啄羶(四)。　垢塵は玉を汚さず、靈鳳は羶を啄ます。

嗚呼陶(五)靖節。生彼晉宋間。　嗚呼陶靖節、彼の晉宋の間に生れ、

心實有所守。口終不能言。　心實に守る所有り、口終に言ふ能はず。

永惟孤(六)竹子。拂衣首陽山。　永く惟ふ孤竹の子、衣を拂ふ首陽の山。

夷齊各一身。窮餓未爲難。　夷齊各一身、窮餓すれども未だ難しと爲さず。

先生有五男。與之同飢寒。　先生五男有り、之と飢寒を同じうす。

腸中食不充。身上衣不完。　腸中食充たず、身上衣完からず。

連徵竟不起。斯可謂眞賢。　連りに徵さるれども竟に起たず、斯れ眞賢と謂ふ可し。

我生君之後。相去五百年。　我君の後に生れ、相去ること五百年。

每讀五(七)柳傳。目想心拳(八)拳。　五柳の傳を讀む每に、目に想ひ心に拳拳たり。

昔嘗詠遺風。著爲十六篇。　昔嘗て遺風を詠じ、著して十六篇と爲す。

今來訪故宅。森若君在前。　今來りて故宅を訪へば、森として君前に在るが若し。

不慕樽有酒。不慕琴無絃。　樽に酒有るを慕はず、琴に絃無きを慕はず。

慕君遺榮利。老死此丘園。　君が榮利を遺れて、此丘園に老死するを慕ふ。

柴桑古村落。栗里舊山川。　柴桑の古村落、栗里の舊山川。

不レ見二籬下菊一、但餘二墟中煙一。　籬下の菊を見ず、但墟中の煙を餘す。
子孫雖レ無レ聞、族氏猶未レ遷。　子孫聞ゆる無しと雖も、族氏猶ほ未だ遷らず。
毎レ逢二姓レ陶人一、使二我心依(九)然一。　陶を姓とする人に逢ふ毎に、我をして心依然たらしむ。

【字解】【一】潤上　潤水のほとり。【二】柴桑　縣名。陶淵明此に家す。【三】栗里　淵明の故居のあつた處。【四】腥　腥き物。【五】陶靖節　世人陶淵明を稱して靖節先生といふ。【六】孤竹　國の名。伯夷・叔齊は孤竹君の子である。【七】五柳傳　陶淵明の宅邊に五柳樹あり。因つて自ら五柳先生傳を作る。【八】拳拳　奉持して忘れないこと。【九】依然　思慕する貌。

【題義】陶淵明の舊宅を訪ひ、其の人と爲りを慕つて作つた詩である。

【詩意】塵垢は玉を汚すことは出來ず、鳳鳥は腥い物などは食はない。彼の陶先生は晉宋簒奪の世に生れ、口にこそ言はなかつたが心には晉室に對して臣節を持し、常に孤竹君の子なる伯夷・叔齊が、殷を滅した周室に仕へずして首陽山に隱れたことを慕つてゐた。伯夷・叔齊は各一人者であつたから、困窮餓死するも、まだ大層難い事では無い。先生には五人の男子があつて、皆飢寒を俱にし、遂に天子の徵召を蒙つたが竟に出でて仕へなかつたのは、實に難い事で、眞の賢者と謂ふべきである。我は先生に後るること五百年に生れ、五柳先生傳を讀む毎に目に想ひ心に慕つてゐる。嘗に其遺風を詠じて十六篇の詩を作つたが、今その舊宅を訪へば、先生が儼然として吾が前に立つてゐるやうに思ふ。

高圖

樽に酒のあること、琴に絃のないことなどは慕はないが、（淵明の歸去來辭に、有レ酒盈レ樽とあり、又昭明太子の陶潛傳に、淵明不レ解二音律一、而蓄二無絃琴一張一、毎二酒適一輒撫弄以寄二其意一とある）先生の榮利を遺れて此地に老死したのを慕つてゐる。今柴桑や栗里の跡を訪へば、籬の菊は見えないが（淵明の飲酒二十首に採二菊東籬下一、悠然見二南山一とある）墟中の煙は今も殘つてゐる（淵明の歸二園田居一に、曖曖遠人村、依依墟里煙とある）。子孫は名聲は高くないが、遺族は今も此地に住んでゐるので、陶といふ姓の人に逢ふ毎に、何となく思慕の情に堪へない。

北亭

廬(一)宮山下州、湓(二)浦沙邊宅。　廬宮山下の州、湓浦沙邊の宅。
宅北倚二高岡一。迢(三)迢數千尺。　宅北高岡に倚る、迢迢たり數千尺。
上有二青青竹一。竹間多二白石一。　上に青青たる竹有り、竹間に白石多し。
茅亭居二上(四)頭一。豁(五)達門四闢。　茅亭上頭に居る、豁達門四に闢く。
前楹捲二簾(六)箔一。北(七)牖施二牀席一。　前楹に簾箔を捲き、北牖に牀席を施す。

江風萬里來。吹我涼淅淅。(八)　江風萬里より來り、我を吹いて涼淅淅たり。

日高公(九)府歸。巾笏(一〇)隨手擲。　日高くして公府より歸り、巾笏手に隨つて擲つ。

脫衣恣搔首。(一一)坐臥任所適。　衣を脫いで搔首を恣にし、坐臥適する所に任す。

時傾一盃酒。曠望湖天(一二)夕。　時に一盃の酒を傾け、曠しく湖天の夕を望む。

口詠獨酌謠。目送歸飛翮。　口に獨酌の謠を詠じ、目に歸飛の翮を送る。

慙無出塵(一三)操。未免折(一四)腰役。　慙づらくは出塵の操無く、未だ腰を折る役を免れざるを。

偶獲此閑居。謬似高(一五)人跡。　偶此閑居を獲、謬つて高人の跡に似たり。

【字解】【一】廬宮山　廬山記によれば、周の威王の時匡俗廬君あり。此山に居る。因つて廬山といふ。【二】湓浦　前の湓浦早冬を見よ。【三】迢迢　高き貌。【四】上頭　頂上。【五】豁達　ほがらかに開く。【六】簾箔　すだれ。【七】北牖　北の窓。【八】淅淅　風の聲。【九】公府　役所。【一〇】巾笏　冠やシヤク。【一一】搔首　髮を搔く。【一二】湖天　湖と天と相接すること。湖は鄱陽湖なり。【一三】出塵操　脫俗の心。【一四】折腰　膝を屈して服從すること。【一五】高人　心を高尙にして仕へざる者の稱。

【題義】江州司馬として北亭に坐臥する興趣を述べた詩である。

【詩意】廬山の下、湓浦の邊に我が宅がある。宅の北は數千尺も高い岡に倚つてゐる。岡の上には靑い竹が生えてゐて、竹の間には白い石が多くある。頂上に茅屋があつて四方に門が開けてゐる。前の楹には簾を捲きあげ北の牖には寢臺を設けてある。江風が萬里のさきから吹いて來て非常に涼しい。余は日のまだ高いうちに役所から歸り、冠も笏もなげすて、著物を脫ぎ髮を搔いて、心の欲する儘に任せて坐臥し、一杯の酒を傾けて遙に湖天の夕景色を眺め、詩などを吟じながら飛鳥の塒に歸るのを見送つて樂んでゐる。未だ俗塵を超脫することが出來ず、腰を折つて上官に事へざるを得ない身ではあるが、偶此閑居を得たので、やや高士の俤を具へてゐるやうにも見える。

泛湓水(一)

湓水に泛ぶ

四月未全熱。麥涼江(二)氣秋。　四月未だ全く熱からず、麥は涼し江氣の秋。

湖山處處好。最愛湓水頭。　湖山處處好し、最も愛す湓水の頭。

湓水從東來。一派入江流。　湓水東より來り、一派江に入りて流る。

可憐似縈(三)帶。中有隨風舟。　憐む可し縈帶に似たるを、中に風に隨ふ舟有り。

命酒一臨泛。捨鞍揚棹(四)謳。　酒を命じて一たび臨み泛べ、鞍を捨てて棹謳を揚ぐ。

放廻岸傍馬。去逐波間鷗。　岸傍の馬を放廻し、波間の鷗を去逐す。

煙浪始渺渺。風襟亦悠悠。　煙浪始めて渺渺、風襟亦悠悠。
初疑上河漢。中若尋瀛洲。　初河漢に上るかと疑ひ、中ごろ瀛洲を尋ぬるが若し。
汀樹綠拂地。沙草芳未休。　汀樹綠地を拂ひ、沙草芳未だ休まず。
青蘿與紫葛。枝蔓垂相樛。　青蘿と紫葛と、枝蔓垂れて相樛まる。
繫纜步平岸。回頭望江州。　纜を繫いで平岸に步し、頭を回らして江州を望む。
城雉映水見。隱隱如蜃樓。　城雉水に映じて見え、隱隱として蜃樓の如し。
日入意未盡。將歸復少留。　日入れども意未だ盡きず、將に歸らんとして復少らく留まる。
到官行半歲。今日方一遊。　官に到りて行くゆく半歲、今日方に一遊す。
此地來何暮。可以寫吾憂。　此地來ること何ぞ暮き、以て吾が憂を寫く可し。

【字解】【一】湓水　川の名、源は江西省瑞昌縣の淸湓山より出で、東流して九江縣城の下を經、又北流して大江に入る。【三】江氣　一に江風に作る。麥は初夏に熟する故、陰曆四月を麥秋といふ。【四】襟帶　腰をめぐる帶。【五】棹謳　舟をこぐ人の歌。【五】渺渺　ひろびろしてゐる貌。【六】悠悠　心ののびのびする貌。【七】河漢　あまのがは。【八】瀛洲　東海中の仙山。【九】城雉　城の石垣。【10】隱隱　分明ならざる貌。蜃樓は蜃氣樓。

【題義】湓水に舟を泛べて遊んだことを述べた詩である。

【詩意】四月麥秋の頃は熱からず寒からず、湖を見ても山を見ても、よい景色であるが、余は最も湓水の邊の景色を好む。湓水は東から流れて來て長江に注ぐ川で、帶のやうにめぐり、中に舟が風のまにまに漂つてゐるのもよい。因つて酒を命じて舟を泛べ、馬を捨てて漕ぎ出した。煙の如き浪路が渺渺として廣く、襟を撫でて吹く風も心地よい。初めは天河を上るかと疑はれ、中ごろは仙境に遊ぶかと思はれた。岸に近づけば汀の樹は地を拂つて綠に、沙洲の草は香氣を放ち、青い蘿や紫の葛が蔓を垂れて茂つてゐる。纜を繫いで平な岸を步き、頭を回らして江州を見ると、城の石垣が水にうつつて蜃氣樓のやうに、ぼんやりと見え、日が暮れても歸る氣になれない。余は江州司馬になつて此地に來てから、やがて半年になるが、今日始めて湓水に遊んだ。かくも吾が憂を霽らすことが出來るならば、もつと早く來ればよかつた。

答故人

故人に答ふ

故人對酒歎。歎我在天涯。　故人酒に對して歎ず、我が天涯に在るを歎ず。
見我昔榮遇。念我今蹉跎。　我が昔の榮遇を見、我が今の蹉跎たるを念ふ。
問我爲司馬。官意復如何。　問ふ我れ司馬と爲りて、官意復如何と。

答云且勿歎。聽我爲君歌。　答へて云ふ且く歎ずる勿れ、我が君が爲めに歌ふを聽け、
我本蓬華人。(三)鄙賤劇泥沙。　我は本蓬華の人、鄙賤泥沙よりも劇し。
讀書未百卷。信口嘲風花。　書を讀んで未だ百卷ならざるに、口に信せて風花を嘲る。
自從筮仕來。(四)六命三登科。(五)　筮仕してより來、六たび命せられ三たび登科す。
顧慙虛劣姿。所得亦已多。　顧みて慙づ虛劣の姿、得る所亦已に多し。
散員足庇身。(六)薄俸可資家。　散員も身を庇ふに足り、薄俸も家を資く可し。
省分輒自愧。豈爲不遇耶。　分を省みて輒ち自ら愧づ、豈に不遇と爲さん耶。
煩君對杯酒。爲我一咨嗟。(七)　煩はす君が杯酒に對し、我が爲に一たび咨嗟するを。

【字解】【一】故人　舊友。【二】蹉跎　つまづくこと。江州司馬に貶せられたことをいふ。【三】蓬華　蓬戶華門、貧賤の人の居る所。【四】筮仕　初めて仕ふること。【五】六命　六たび君命を受くること。登科は試驗に及第すること。【六】散員　閑散な官員。【七】咨嗟　嘆息する。

【題義】ある舊友が白樂天の江州司馬に貶せられたことを嘆いたのに答へた詩である。

【詩意】友人が酒を酌みながら我が天涯萬里の江州に貶せられたことを嘆き、司馬になつた心持はどうだと弔問の詞を寄せた。余は詩を以て此に答へよう。我はもと貧賤の身である。書を讀むこと百卷に足らぬ淺學でありながら、口に任せて花鳥風月を嘲弄し、官に就いてから以來、六たび君命を辱うし三たび及第の榮譽を荷つた。謭劣の身に取つては實に分外の利得と謂はねばならない。たとひ閑散の職にもせよ身を庇ふに足り、俸祿は薄くとも家の資となすに足りる。司馬となつてゐることは分に過ぎた幸福と思つてゐるので、決して不遇とは思つてゐない。君が折角の酒興を妨げて、我が爲に嘆いてくれたことは感謝に堪へない。

官舍內新鑿小池

官舍の內、新に小池を鑿つ

簾下開小池。盈盈(一)水方積。　簾下に小池を開く、盈盈として水方に積る。
中底鋪白沙。四隅甃青石。　中底に白沙を鋪き、四隅に青石を甃む。
勿言不深廣。但取幽人適。　言ふ勿れ深廣ならずと、但幽人の適を取る。
泛灩(二)微雨朝。泓澄(三)明月夕。　泛灩たり微雨の朝、泓澄たり明月の夕。
豈無大江水。波浪連天白。　豈に大江の水無からんや、波浪天に連りて白し。
未如牀席間。方丈(四)深盈尺。　未だ如かず牀席の間、方丈深さ尺に盈つるに。

清淺可狎弄。昏煩聊漱滌。　清淺狎弄す可く、昏煩聊か漱滌す。
最愛曉暝時。一片秋天碧。　最も愛す曉暝の時、一片秋天碧なり。

【字解】【一】盈盈　清淺の貌。【二】泛灔　水波の上に及ぶ貌。【三】泓澄　水の清き貌。【四】方丈　一丈四方。【五】曉暝　朝暮。

【題義】官舍內に小池を鑿つたことを述べた詩である。

【詩意】簾の下に小池を鑿ち、なみなみと水を湛へた。底には白沙を敷き、四方の隅には靑石を疊んだ。深廣とはいへないが幽人の心を慰むるには十分である。微雨の降りそそぐ時の小波の風情、明月の夜の澄み切つた樣も面白い。大江の水の波浪天を打つのもわるくはないが、この臥牀の前の一丈四方の小池の趣には及ぶまい。この小池の水は淸淺で手に掬み弄ぶことも出來れば、心身の煩累を濯ふことも出來る。殊に朝晚の秋の空のやうに碧色を湛へた趣は最も愛すべきものである。

宿簡寂觀（一）
簡寂觀に宿す

巖白雲尙屯。林紅葉初隕。　巖白くして雲尙は屯り、林紅にして葉初めて隕つ。
秋光引閒步。不知行遠近。　秋光閒步を引き、行の遠近を知らず。
夕投靈洞（二）宿。臥覺塵機（三）泯。　夕に靈洞に投じて宿し、臥して塵機の泯ぶるを覺ゆ。
名利心既忘。市朝夢亦盡。　名利は心既に忘れ、市朝は夢亦盡く。
暫來尙如此。況乃終身隱。　暫く來るも尙ほ此の如し、況んや乃ち身を終るまで隱るるをや。
何以療夜飢。一匙（四）雲母粉。　何を以てか夜の飢を療さん、一匙雲母の粉。

【字解】【一】簡寂觀　道觀（道教の寺）の名。【二】靈洞　道觀をいふ。【三】塵機　塵俗の心。【四】一匙　ひとさじ。雲母粉は仙藥の名。

【題義】簡寂觀といふ道觀に宿つたことを述べた詩である。

【詩意】巖頭に白雲が集まり紅葉がちらほら散る秋の風情が自然と吾が閑步を引き、道の遠きをも忘れしめた。夕に簡寂觀に投宿したが、忽ち俗氣が消滅したやうに感じ、心に名利を忘れ、夢に市朝を見なかつた。暫く來てさへ此の通りだから、終身ここに隱居してゐたらば如何ばかり高潔の身になるであらう。さて夜中になると一匙の雲母粉を以て飢を醫するのであるから、それも其筈である。

讀謝靈運詩
謝靈運の詩を讀む

吾聞達士（一）道。窮通順冥數（二）。　吾聞く達士の道は、窮通冥數に順ふ。

通乃朝廷來。窮卽江湖去。　通じては乃ち朝廷に來り、窮しては卽ち江湖に去る。
謝公才廓落。與世不相遇。　謝公才廓落として、世と相遇はず。
壯志鬱不用。須有所洩處。　壯士鬱して用ひず、須く洩らす所の處有るべし。
洩爲山水詩。逸韻諧奇趣。　洩らして山水の詩を爲る、逸韻奇趣に諧ふ。
大必籠天海。細不遺草樹。　大にしては必ず天海を籠め、細にしては草樹を遺さず。
豈惟翫景物。亦欲攄心素。　豈に惟景物を翫ぶのみならんや、亦心素を攄べんと欲す。
往往卽事中。未能忘興諭。　往往事中に卽き、未だ興諭を忘るる能はず。
因知康樂作。不獨在章句。　因つて知る康樂の作、獨り章句に在るのみならざることを。

【字解】【一】達士　事理に通達した人。【二】冥數　天命なり。冥冥として測知すべからず。故にいふ。【三】廓落　廣大の貌。【四】逸韻　すぐれた詩。【五】心素　本心。【六】康樂　謝靈運は康樂公に封ぜられた。

【題義】謝靈運の詩を讀んで所感を述べた詩である。

【詩意】達人は窮通を天命に委し、通じては朝廷に升つて天下に號令し、窮しては江湖に去つて風月を樂しむ者であるが、謝靈運は廣大の才を抱いて、而も不遇であつた。空しく胸中に鬱積して用ひなかつた所の壯志が發して山水の詩となり、皆自然の奇趣に諧ひ、大は天海をも籠め、小は草木をも遺さなかつた。然も唯自然の景物を寫すのみならず、己の本心をも述べて、事に就いて興諭することを忘れなかつた。されば彼の作は唯獨り文字章句の末に於てすぐれてゐるばかりではない。

北亭獨宿　　北亭の獨宿

悄悄壁下床。紗籠耿殘燭。　悄悄たる壁下の床、紗籠殘燭耿なり。
夜半獨眠覺。疑在僧房宿。　夜半獨り眠り覺め、疑ふらくは僧房に在りて宿するかと。

【字解】【一】悄悄　靜な貌。【二】紗籠　紗のきれを張つた行燈。【三】僧房　寺院。

【題義】例の北亭に獨り宿した時の詩である。

【詩意】靜な壁の下の寢臺に臥してゐると、紗のきれで張つた雪洞が特に明るく見える。夜中に目が覺めて、寺にでも寢てゐるやうに思はれた。

約心　　心に約す

黑鬢絲雪侵。靑袍塵土涴。　黑鬢絲雪侵し、靑袍塵土涴す。

(三)兀兀復騰騰。江城一上佐。(四)　兀兀復た騰騰、江城一たび佐に上る。
朝就高齋上。薫然負(五)暄臥。　朝には高齋の上に就き、薫然として暄を負うて臥す。
晩下小池前。(六)澹然臨水坐。　晩には小池の前に下り、澹然として水に臨んで坐す。
已約終身心。長如今日過。　已に終身の心に約す、長く今日の如く過さんと。

【字解】【一】緋雪　しらが。【二】青袍　司馬の服。【三】兀兀　動かざる貌。騰騰は盛なる貌。【四】佐　刺史を輔佐する役。司馬。【五】負暄　ひなたぼつこ。【六】澹然　安靜の意。

【題義】自ら心に約束したことを述べた詩。

【詩意】黒い鬢の毛が段段白くなり、青い袍も塵によごれた。併しあつぱれ江州司馬として自ら收りかへつてゐる。朝には晴れやかな書齋を擇んで、ひなたぼつこをして臥し、暮には小池の前におり立つて、水に對して心を鎭める。永く吾が心に約し、今日のやうにして一生を終らうと決定した。

晩望

(一)江城寒角動。沙洲夕鳥還。　江城寒角動き、沙洲夕鳥還る。
獨坐高亭上。西南望遠山。　獨り高亭の上に坐し、西南遠山を望む。

【字解】【一】江城　江邊の町。江州を指す。角は軍中で吹く笛。

【題義】江邊の城下には寒空に角聲が響きわたり、沙濱には塒に歸る鳥が飛んでゐる。自分は獨り高亭の上に坐して、西南に連る遠山を飽かず眺めた。

早春

雪消氷又釋。景和風復暄。　雪消えて氷又釋け、景和して風復暄かなり。
滿庭田地濕。薺葉生墻根。　滿庭田地濕ひ、薺葉墻根に生ず。
官舍(一)悄無事。日西斜掩門。　官舍は悄として事無く、日西にして斜に門を掩ふ。
不開(二)莊老卷。欲與何人言。　莊老の卷を開かずんば、何人と言はんと欲する。

【字解】【一】悄　靜かなる貌。【二】莊老　莊子、老子。

【題義】初春の光景情趣を述べた詩である。

【詩意】雪も氷も既に解け、景色も和らぎ風も暖かである。庭は一面に濕つて薺の芽が垣根に生えた。自分は官舍に閑居し、夕陽に對して獨坐してゐる。老子や莊子でも讀むより外には、物言ふ相手もない。

春寢

何處春暄來。微和生血氣。　何處よりか春暄來り、微和血氣に生ず。
氣薫肌骨暢。東窗一昏睡。　氣薫じ肌骨暢び、東窗一たび昏睡す。
是時正月晦。假日無公事。　是時正月晦、假日公事無し。
爛熳不能休。自午將及未。　爛熳として休する能はず、午より將に未に及ばんとす。
緬思少健日。甘寢常自恣。　緬に思ふ少健の日、甘寢常に自ら恣にす。
一從衰疾來。枕上無此味。　一たび衰疾してより來、枕上此味無し。

【字解】【一】春暄　春の暖かさ。【二】假日　休暇の日。【三】爛熳　熟眠の貌。【四】甘寢　快く眠ること。

【題義】春の暖かい日に晝寢をしたことを述べた詩である。

【詩意】春の暖かさが何處からともなくやつて來て、血氣が自然と調和を得たやうに感じ、氣も骨ものびのびとして、東の窓の下に睡つてしまつた。丁度正月の晦で、休暇で役向の仕事もない所から、午頃から未の刻（午後二時）まで前後不覺に熟睡した。今から思へば、年の少い達者な頃は、いつも愉快に睡つたものであつたが、老衰してから後は、あんな快い睡味は得られない。

睡起晏坐

後亭晝眠足。起坐春景暮。　後亭晝眠足り、起坐春景暮る。
新覺眼猶昏。無思心正住。　新に覺めて眼猶ほ昏く、思無くして心正に住す。
淡寂歸一性。虛閑遺萬慮。　淡寂一性に歸し、虛閑萬慮を遺る。
了然此時心。無物可譬喩。　了然たる此時の心、物の譬喩す可き無し。
本是無有鄉。亦名不用處。　本是れ無有の鄉、亦不用の處と名く。
行禪與坐忘。同歸無異路。　行禪と坐忘と、歸を同じうして異路無し。

【字解】【一】了然　よく心に悟ること。【二】無有鄉　莊子にある無何有鄉に同じ。自註に、道書に無何有の鄉といひ、禪經に不用處といふ、二者名を殊にして歸を同うすとある。【三】坐忘　思慮なきこと。莊子に、肢體を墮し聰明を黜け、形を離れ知を去り、大道に同うす。此を坐忘といふとある。

【題義】晝寢の夢が覺めて夕方閑坐してゐる時の感興を述べた詩である。

【詩意】後亭に晝寢して睡が覺め、夕暮の春景に對して坐すれば、眼はまだぼんやりとしてゐるが、心は何の屈託もなく安住し、淡淡として自然の性に復歸し、一切の思慮が消盡した。この時の心持は何物も譬へようがない。或は無何有鄉といひ或は不用處といふ。禪定も坐忘も、名こそ違ふが歸趣は

同じである。

詠懷

盡(一)日松下坐。有時池畔行。
盡日松下に坐し、時有りて池畔に行く。

行立與坐臥。中(二)懷淡無營。
行立と坐臥と、中懷淡として營み無し。

不覺流(三)年過。亦任白髮生。
覺えず流年過ぎ、亦白髮の生ずるに任す。

不爲世所薄。安得遂閒情。
世の薄んずる所と爲らずんば、安んぞ閒情を遂ぐることを得んや。

【字解】【一】盡日　終日。【二】中懷　心の中。【三】流年　歳月の去るのが早いこと。

【題義】胸中の懷を述べた詩である。

【詩意】終日松の樹の下に坐し、或は時に池の畔をさまよふ。行き立つも坐し臥すも、心の中には何等の營みもなく、全く無心で、歳月の移るをも忘れ、白髮の生ずるに任せて暮してゐる。世間から棄てられてゐるからこそ、閒情を遂げることが出來るので、若し世に時めいてゐたら、かくは閒情を遂げることは出來まい。結句世に重んぜられないのが嬉しい。

春遊西林寺

春西林寺に遊ぶ

下馬西(一)林寺。翛(二)然進輕策。
馬より下る西林寺、翛然として輕策を進む。

朝爲公府吏。暮作靈(三)山客。
朝に公府の吏と爲り、暮に靈山の客と作る。

二月匡(四)廬北。氷雪始消釋。
二月匡廬の北、氷雪始めて消釋す。

陽叢抽茗芽。陰(五)竇洩泉脈。
陽叢茗芽を抽き、陰竇泉脈を洩らす。

熈(六)熈風土暖。藹(七)藹雲嵐積。
熈熈として風土暖かに、藹藹として雲嵐積る。

散作萬壑春。凝爲一氣碧。
散じて萬壑の春と作り、凝りて一氣の碧と爲る。

身閑易飄(八)泊。官(九)散無牽迫。
身閑にして飄泊し易く、官散にして牽迫無し。

緬彼十(一〇)八人。古今同此適。
緬なる彼の十八人、古今此適を同うす。

是年淮(一一)寇起。處處興兵(一二)革。
是年淮寇起り、處處兵革を興す。

智士勞思謀。戎(一三)臣苦征役。
智士は思謀に勞し、戎臣は征役に苦しむ。

獨有不(一四)才者。山中弄泉石。
獨り不才の者有り、山中に泉石を弄す。

【字解】【一】西林寺　廬山に在る寺の名。【二】翛然　疾く飛ぶ貌。輕策は輕い杖。【三】靈山　廬山を指す。【四】匡廬　廬山は一に匡山ともいふ。【五】陰竇　日かげの小流。【六】熙熙　やはらぐ貌。【七】藹藹　盛なる貌。【八】飄泊　さまよふこと。【九】官散　官職の閑なこと。【一〇】十八人　自註に、昔永遠・宗雷等十八賢、同じく西林寺に隱るとある。【一一】淮寇　元和十年、吳元濟淮蔡に據りて反す、十二年、裴度之を平定す。【一二】兵革　戰亂。【一三】戎臣　武臣。【一四】不才者　白樂天自ら謂ふ。

【題義】春廬山の西林寺に遊んで作つた詩である。

【詩意】西林寺の門外で馬から下り、杖を曳いて境內にはひつた。時恰も二月のことで氷や雪も既に解け、日向の叢には茶の芽が生え、日陰の小流にも泉が流れてゐる。雲氣風物皆和らぎ、春が山中に滿ちて碧を凝らしてゐる。身に暇があるから到處にさまよふことが出來、官職も閑散だから何の拘束もない。昔から十八人の賢者が此山に隱れて悠悠自適したのを羨ましく思つた。今年は淮蔡地方に賊が起つて、それが四方にはびこり、智士は謀略に勞し武臣は征戰に苦んでゐるが、僕のやうな無能な者は呑氣に山中に遊んで、泉石を賞玩してゐる。

出山吟

朝詠遊仙詩(一)。暮歌采薇曲(二)。　朝には遊仙の詩を詠じ、暮には采薇の曲を歌ふ。
臥雲坐白石。山中十五宿。　雲に臥し白石に坐し、山中に十五宿す。
行隨出洞水。回別緣巖竹。　行いては洞を出づる水に隨ひ、回りては巖に緣る竹に別る。
早晚(三)重來遊。心期瑤草(四)綠。　早晚重ねて來り遊ばん、心に期す瑤草の綠ならんことを。

【字解】【一】遊仙詩　晉の何劭、郭璞、皆遊仙詩を作つた。【二】采薇曲　伯夷・叔齊、首陽山に隱れ、采薇曲を作つた。【三】早晚　いつか。【四】瑤草　仙草なり。

【題義】廬山に遊んで歸る時に詠んだ詩である。

【詩意】朝には遊仙の詩を詠じ、暮には采薇の曲を歌ひ、雲に臥し石に坐し、此山に來て十五日ほど宿つた。今洞窟を出づる水に隨ひ巖に緣る竹に別れて歸途に就くのであるが、仙草の綠なる頃を期して又再び此山に遊ばうと思ふ。

歲暮

已任時命(一)去。亦從歲月除。　已に時命の去るに任せ、亦歲月の除するに從す。
中心一調伏(二)。外累(三)盡空虛。　中心一に調伏し、外累盡く空虛。
名宦(四)意已矣。林泉計何如。　名宦意已みぬ、林泉計何如。
擬近東林寺(五)。溪邊結一廬。　東林寺に近く、溪邊一廬を結ばんと擬す。

名宦　名譽ある官職。【五】東林寺　廬山に在る山の名。

【字解】【一】時命　時運。【二】調伏　佛語、心口意の三業を調和して諸惡を制伏すること。【三】外累　外界の煩累。【四】

【題義】歳暮の感想を述べた詩である。

【詩意】已に時運の去るに任せ、亦年月の改まるに任せて敢て惜まない。吾が心は十分調伏せられ、外界の煩累をも盡く超脱した。名宦に登らうといふ野心もなく、ただ林泉の計を立て、東林寺の近くの溪間に、庵を結びたいものだと思つてゐる。

聞早鶯

早鶯を聞く

日出眠未起。屋頭聞早鶯。　日出づるも眠りて未だ起きず、屋頭早鶯を聞く。

忽如(一)上林曉。(二)萬年枝上鳴。　忽ち上林の曉、萬年枝上に鳴くが如し。

憶爲近臣時。秉筆直(三)承明。　憶ふ近臣たりし時、筆を秉りて承明に直す。

春深(四)視草暇。旦暮聞此聲。　春深くして視草の暇、旦暮此聲を聞く。

今聞在何處。寂寞潯陽城。　今聞く何の處にか在る、寂寞たる潯陽城。

鳥聲信如一。(五)分別在人情。　鳥聲信に一なるが如し、分別人情に在り。

不作天涯意。豈殊禁中聽。　天涯の意を作さずんば、豈に禁中の聽に殊ならんや。

【字解】【一】上林　天子の園林。【二】萬年　祝福の詞。【三】承明　承明廬は漢時侍從の臣の居る處。【四】視草　翰林學士の詔書を草すること。【五】分別　區別、差別。

【題義】鶯の聲を聞いて感想を述べた詩である。

【詩意】日が出てもまだ起きずに寢てゐて、屋根のあたりで鶯の囀くのを聞き、忽ち天子の御庭の玉樹の枝で囀くやうに思つた。嘗て天子の近臣となり筆を持つて承明廬に宿直してゐた頃、詔を草する暇に朝晩此聲を聞いたものであつたが、今は寂寞たる此潯陽城で聞くことになつた。鳥の聲はどこで聞いても變りのある筈はないが、聞く人の感情に由つて相違が生ずるのである。されば天涯の貶客たるを悲む心さへ起さなければ、禁中で聽くと同じである。

栽杉

杉を栽う

勁葉森(一)利劍。孤莖挺(二)端標。　勁葉森として利劍あり、弧莖挺として端標あり。

纔高四五尺。勢若干(三)青霄。　纔に高きこと四五尺、勢 青霄を干すが若し。

移栽東窓前。愛爾寒不凋。　東窓の前に移し栽ゑ、爾が寒くして凋まざるを愛す。

病夫臥相對。日夕閒蕭(四)蕭。　病夫臥して相對し、日夕閒にして蕭蕭たり。

昨爲山中樹。今爲簷下條。　昨は山中の樹と爲り、今は簷下の條と爲る。

雖然遇賞翫。無乃近塵囂。　然く賞翫に遇ふと雖も、乃ち塵囂に近く無からんや。

猶勝澗谷底。埋沒隨衆樵。　猶は勝れり澗谷の底、埋沒して衆樵に隨はんには。

不見鬱鬱松。委質山上苗。　見ずや鬱鬱たる松、質を山上の苗に委するを。

【字解】【一】森　森嚴なる貌。【二】挺　高く立つ貌。端標は正しきしるし。【三】青霄　青空。【四】蕭蕭　風の聲。

【題義】山中の杉を簷の下に移し植ゑ、己の感想を述べた詩である。

【詩意】杉の勁い葉は利劍のやうに森嚴で、孤立してゐる幹は高尙な風趣があり、高さは纔に四五尺でも、青空をも淩がんとする勢がある。之を東窓の前に移し栽ゑたのは冬になつても凋衰しない所が氣に入つたからである。余は今病に臥して朝晚風に吹かるる聲を聞いてゐる。先日までは山に在つたのが、今は吾が簷の下に植ゑられ、賞翫されるのはよいが、それだけ俗塵に近づくことになつたわけで、其點は感服しないであらうが、併し澗間に埋もれて樵人の相手をしてゐるよりは勝つてゐよう。見よ彼の鬱鬱と茂つた松でも山の雜草に身を任せて困められてゐるではないか。

過李生

李生に過る

蘋小蒲葉短。南湖春水生。　蘋小にして蒲葉短く、南湖春水生ず。

子近湖邊住。靜境稱高情。　子は湖邊に近く住み、靜境高情に稱ふ。

我爲郡司馬。散拙無所營。　我は郡の司馬と爲り、散拙にして營む所無し。

使(一)君知性野。銜(二)退任閒行。　使君性の野なるを知り、銜より退けば閒行するに任す。

行攜小榼(三)去。逢花輒獨傾。　行くに小榼を攜へて去り、花に逢へば輒ち獨り傾く。

半(四)酣到子舍。下馬叩柴(五)荊。　半酣にして子が舍に到り、馬より下りて柴荊を叩く。

何以引我步。繞籬竹萬莖。　何を以てか我が步を引く、籬を繞る竹萬莖。

何以醒我酒。吳音吟一聲。　何を以てか我が酒を醒ます、吳音吟一聲。

須臾進野飯。飯稻茹芹英。　須臾にして野飯を進む、稻を飯ひ芹英を茹はしむ。

白(六)甌青竹箸。儉潔無羶(七)腥。　白甌青竹の箸、儉潔にして羶腥無し。

欲去復徘徊。夕鴉已飛鳴。　去らんと欲して復た徘徊すれば、夕鴉已に飛鳴す。

何當重遊此。待君湖水平。　何か當に重ねて此に遊び、君を待つて湖水平なるべき。

【字解】【一】使君　郡の太守をいふ。【二】衙　役所。閑行は閑歩なり。【三】小榼　小さい酒樽。【四】半酣　半酔なり。【五】柴荊　わびしき住居。【六】白甌　白い皿。【七】腥羶　なまぐさき物。

【題義】李生の宅を訪ひて作つた詩である。

【詩意】蘋は小さく蒲の葉はまだ短いが南の湖には春水が増した。湖の近所の君の家は閑静な場所で君の高情にふさはしい。我は九江郡司馬の職に在るが無能で何の爲す所もなく、太守も吾が野情に富んでゐるのを知つてゐるから、役所から退けてからは自由に閑歩することを許してある。行くには必ず酒榼を攜へ、花に對して獨りで傾け、半酔ふと君の家を訪れる。君の家の籬を繞る澤山の竹が我を引きつける爲でもあり、又君の吳音の吟聲を聽いて酔を醒まさうと思ふからでもある。須臾すると米の飯に芹などを添へて御馳走になる。白い皿や竹の箸も淸らかに、腥い物などは少しもない。今日も覺えず時を移して夕の鴉が鳴く頃になつた。いつか又ここに來て、湖上の水が漫漫と湛へた時に君に伴つて遊びたいと思ふ。

詠意

意を詠す

常聞（一）南華經。巧勞智憂愁。　常て南華の經を聞くに、巧なるは勞し智あるは憂愁す。

不如無能者。飽食但（二）遨遊。　如かず無能の者、飽くまで食ひ但遨遊するに。

平生愛慕道。今日近此流。　平生愛して道を慕ふ、今日此流に近し。

自來（三）潯陽郡。（四）四序忽已周。　潯陽郡に來りしより、四序忽ち已に周る。

不分物黑白。但與時沈浮。　物の黑白を分たず、但時と沈浮す。

朝飡夕安寢。用是爲身謀。　朝に飡ひ夕に安寢し、是を用つて身の爲に謀る。

此外卽閑放。時尋山水幽。　此外卽ち閑放、時に山水の幽を尋ぬ。

春遊（五）慧遠寺。秋上（六）庾公樓。　春は慧遠の寺に遊び、秋は庾公が樓に上る。

或吟詩一章。或飲茶（七）一甌。　或は詩一章を吟じ、或は茶一甌を飲む。

身心一無繫。浩浩如（八）虛舟。　身心一も繫がる無く、浩浩として虛舟の如し。

富貴亦有苦。苦在心危憂。　富貴も亦苦有り、苦は心の危憂に在り。

貧賤亦有樂。樂在身自由。　貧賤も亦樂有り、樂は身の自由に在り。

【字解】【一】南華經　莊子をいふ。唐の天寶元年、莊子を號して南華眞人となした。【二】遨遊　遨も亦遊なり。【三】潯陽郡　卽ち江州。【四】四序　四時、春夏秋冬なり。【五】慧遠　晉の高僧。業を道安に受け、太元中、東林寺を廬山に立て、慧永、宗炳等と白蓮社を結んで念佛す。十八賢の目あり。【六】庾公樓　江西省九江縣治に在り。晉の庾亮江州を鎭ぜし時建つる所。【七】一甌

一統なり。【六】浩浩　廣き貌。

【題義】己の胸懷を述べた詩である。

【詩意】莊子の言ふ所によれば、巧智の人は苦勞し憂愁するゆゑ、無能にして飽食遨遊する者に如かずとあるが、自分も從來道を慕ひ來つた結果、今日此流儀に近くなつて來た。この潯陽郡司馬に貶謫せられてから既に一周年になるが、事の正否をも辨せず、ただ時と浮沈し、眠食の安きを求めて朝夕を送るを何よりの謀となし、此外は萬事なげやりにして、時に山水の幽勝を探り、春は慧遠のゐた寺に遊び、秋は庾公の樓に月を賞し、詩を吟じ茶を啜り、心身ともに何等の繫累なく、殆ど波上に漂ふ虛舟のやうである。富貴の人にも苦痛がある、苦痛とは心の憂である。貧賤の身にも樂はある、その樂は身の自由なことだ。

食筍

筍を食ふ

此州乃(一)竹鄕。春筍滿山谷。　此州は乃ち竹鄕、春筍山谷に滿つ。

山夫折盈抱。抱來早市鬻。　山夫折りて抱に盈つ、抱き來りて早市に鬻ぐ。

物以多爲賤。(二)雙錢易一束。　物は多きを以て賤しと爲す、雙錢一束に易ふ。

置之炊甑中。與飯同時熟。　之を炊甑の中に置けば、飯と同時に熟す。

(三)紫籜拆故錦。素肌擘新玉。　紫籜故錦を拆き、素肌新玉を擘く。

毎日遂加飡。經旬不思肉。　毎日遂に飡を加へ、旬を經れども肉を思はず。

久爲(四)京洛客。此味常不足。　久しく京洛の客と爲り、此味常に足らず。

且食勿(五)踟躕。南風吹作竹。　且つ食うて踟躕する勿れ、南風吹いて竹と作さん。

【字解】【一】竹鄕　竹の名產地。【二】雙錢　二枚の錢。【三】紫籜　紫色の竹の皮。【四】京洛　長安洛陽地方。【五】踟躕　躊躇なり。

【題義】筍を食ふことを述べた詩である。

【詩意】此地は筍の本場で春になると山谷の間に澤山生える。田舍爺が一抱持つて來て市場で賣る。すべて品が多ければ價は賤いもので、錢を二枚も出せば一束の筍が買へる。これを甑の中に入れて置くと飯と一緒に煮える。古錦のやうな皮を拆き、新玉のやうな白い肌を擘き、毎日これをたべてゐるが、十日を經ても肉が食ひたいなどとは思はない。都に居た頃は筍がないので食べられなかつたが、今はいくらでも食べられる。まア躊躇せずに食ふとしよう。南風が吹くに隨つて竹になつてしまふから。

遊石門澗

石門澗に遊ぶ

石門無舊徑。披榛(一)訪遺跡。　石門舊徑無し、榛を披いて遺跡を訪ふ。

時逢山水秋。清輝如古昔。　時に山水の秋に逢ふ、清輝古昔の如し。

嘗聞慧遠(二)輩。題詩此巖壁。　嘗て聞く慧遠の輩、詩を此巖壁に題すと。

雲覆莓苔(三)封。蒼然(四)無處覓。　雲覆うて莓苔封じ、蒼然覓むる處無し。

蕭(五)疎野生竹。崩剝多年石。　蕭疎たる野生の竹、崩剝せる多年の石。

自從東晉後。無復人遊歷。　東晉より後、復人の遊歷する無し。

獨有秋澗聲。潺(六)湲空旦夕。　獨り秋澗の聲有り、潺湲空しく旦夕。

【字解】【一】榛　草木の叢。【二】慧遠　前の詠懷に見ゆ。【三】莓苔　こけ。【四】蒼然　青黑く古めかしきこと。【五】蕭疎　まばらに生えてゐること。【六】潺湲　泉流の音。

【題義】石門澗は廬山に在る。六朝時代に慧遠等の詩僧の遊んだ處である。此詩は形勝依然として其人無きを弔したのである。汪立名曰く、按ずるに石門澗二處あり。一は江州にあり。太平寰宇記に云ふ、石門澗は廬山の西にあり、懸崖對聳、形闕の如く、雙石の間に當り、懸流數丈、一石あり、二十許人を坐せしむべしと。一は杭州の西湖にあり。咸淳臨安志に云ふ、武林山石門澗。陸羽の二寺記に云ふ、南に嶮巖あり。舊臥龍石、橫澗石あり、慈雲法師松を此に種うと。然れども詩中に慧遠題詩の語あり。自ら是れ江州の作。西湖志に亦此を收むるは誤れりと。

【詩意】石門には古い徑もないので、榛莽をおし披いて遺跡を尋ねた。丁度秋のことで山水が昔ながらの淸輝を呈してゐた。ここの巖壁には東晉の聖僧慧遠が詩を題したと傳へてあるが、今來て見ると雲覆ひ苔封じて、どこが其れやら搜すことも出來ない。ただ疎に生えてゐる竹や、崩れかけた古石があるばかりだ。東晉から後には遊賞する人もないと見えて、澗川の水が朝から晩まで音立てて流れてゐるばかりだ。

招東鄰

東鄰を招く

小(一)榼二升酒。新(二)簟六尺床。　小榼二升の酒、新簟六尺の床。

能來夜話否。池畔欲秋涼。　能く來りて夜話するや否や、池畔秋涼ならんと欲す。

【字解】【一】小榼　小さい酒樽。【二】新簟　新しい竹の席。

【題義】東鄰の友を招待する詩である。

【詩意】小さい酒樽には二升の酒があり、新しい簟を敷いた六尺の床もある。池の畔は大分涼味が饒になつたが、一晩話しに來ては如何。

題元十八溪亭　亭在廬山東南五老峯下

元十八の溪亭に題す　亭は廬山の東南、五老峯下に在り

怪君不喜仕。又遊煙(一)霞里。　怪む君が仕を喜ばず、又煙霞の里に遊ぶを。
今日到幽居。了(二)然知所以。　今日幽居に到り、了然として所以を知る。
宿君石溪亭。潺(三)湲聲滿耳。　君が石溪の亭に宿すれば、潺湲として聲耳に滿てり。
飲君螺(四)盃酒。醉臥不能起。　君が螺盃の酒を飲めば、醉臥して起つ能はず。
見君五(五)老峯。益悔居城市。　君を五老の峯に見、益城市に居るを悔ゆ。
愛君三男兒。始歎身無子。　君が三男兒を愛し、始めて歎ず身に子無きを。
余方(六)鑪峯下。結室爲居(七)士。　余鑪峯の下に方り、室を結んで居士と爲る。
山北與山東。往來從此始。　山北と山東と、往來此より始まらん。

【字解】【一】煙霞里　山水の景色のよい處。【二】了然　明に悟ること。【三】潺湲　泉流の聲。【四】螺盃　貝で作つた杯。【五】五老峯　廬山の最高峯。【六】鑪峯　廬山の北峯の名、香鑪峯。【七】居士　處士なり。仕官せぬ人。

【題義】元十八（元は姓、十八は排行）の溪亭に遊び、その壁に題した詩である。

【詩意】君は仕官を好まず山水の勝を探つて遊んでゐるが、今日君の幽居に來て見て、始めて其眞意がわかつた。君の溪亭に宿ると泉流の音が耳を洗ひ、君の貝の杯で酒を飲むと起てないほど醉つてしまふ。君を五老峯に訪ひて、益都會に住むのがいやになり、君が三人の男の子を愛するのを見て、自分が子のないことを嘆息した。今から自分も香鑪峯下に庵を結んで處士となり、廬山の北と廬山の東と互に往來して君と遊びたいものだ。

香鑪峯下。新置草堂。卽事詠懷。題於石上。

香鑪峯下、新に草堂を置き、事に卽き懷を詠じ、石上に題す

香(一)鑪峯北面。遺(二)愛寺西偏。　香鑪峯の北面、遺愛寺の西偏。
白石何鑿(三)鑿。清流亦潺(四)潺。　白石何ぞ鑿鑿たる、清流亦潺潺たり。
有松數十株。有竹千餘竿。　松有り數十株、竹有り千餘竿。
松張翠傘蓋。竹倚青琅(五)玕。　松は翠の傘蓋を張り、竹は青き琅玕を倚す。

其下無人居。悠(六)哉多歲年。 其下人の居る無し、悠なる哉多歲の年。
有時聚猿鳥。終日空風煙。 時有りて猿鳥を聚め、終日風煙を空しうす。
時有沈(七)冥子。姓白字樂天。 時に沈冥の子有り、姓は白、字は樂天。
平生無所好。見此心依(八)然。 平生好む所無し、此を見て心依然たり。
如獲終老地。忽乎不知還。 終老の地を獲たるが如く、忽乎として還るを知らず。
架巖結茅宇。斲壑開茶園。 巖に架して茅宇を結び、壑を斲りて茶園を開く。
何以洗我耳。屋頭飛落泉。 何を以てか我が耳を洗ふ、屋頭に落泉飛ぶ。
何以洗我眼。砌(九)下生白蓮。 何を以てか我が眼を洗ふ、砌下に白蓮生ず。
左手攜一壺。右手挈五(一〇)絃。 左手に一壺を攜へ、右手に五絃を挈ふ。
傲然意自足。箕(一一)踞於其間。 傲然として意自ら足り、其間に箕踞す。
興酣仰天歌。歌中聊寄言。 興酣にして天を仰いで歌ふ、歌中に聊か言を寄す。
言我本野夫。誤爲世網牽。 言ふ我は本野夫なり、誤りて世網に牽かる。
時來昔捧(一二)日。老去今歸山。 時來りて昔日を捧げ、老去りて今山に歸る。

倦鳥得茂樹。涸魚反清源。 倦鳥茂樹を得、涸魚清源に反る。
捨此欲焉往。人間多險難。 此を捨てて焉にか往かんと欲する、人間險難多し。

【字解】【一】香鑪峯 廬山の北峯の名。【二】遺愛寺 香鑪峯に在る寺の名。【三】鑿鑿 鮮明の貌。【四】潺潺 泉流の聲。【五】琅玕 石の玉に似たるもの。【六】悠哉 遠き貌。【七】沈冥子 おろかもの。【八】依然 思慕する貌。【九】砌下 みぎりの下。【一〇】五絃 五絃琴。【一一】箕踞 兩足を伸べてすわること。【一二】捧日 日を以て帝王に喩ふ。天子を翊戴すること。

【題義】香鑪峯の下に新に草堂を構へ、感懷を述べて石に題した詩である。

【詩意】香鑪峯の北の遺愛寺の西邊は、白い石が鮮明で清流が潺潺と流れ、松が數十本、竹が千餘本あつて、松は翠の蓋を張り、竹は靑い玉を聳やかしてゐる。其下に人住まぬこと幾百年、ただ猿や鳥が聚り風煙が罩めてゐるばかりである。時に白樂天といふ愚物があつて、平生これといふ好みもないが、此景を見て始めて思慕の情を起し、終老の地を得たものの如くに喜んで還るのも忘れ、茅屋を結び茶園を開いた。屋頭から迸る泉は我が耳を洗ひ、砌の下の白蓮は我が目を洗ふに足る。左手に一壺の酒を攜へ、右手に五絃の琴を挈へ、傲然として得意になり兩脚を伸べてすわり、興が湧いて歌ひ、中に己の感懷を寄せた。我はもと野人であるが誤つて世間の累にひかれ、一時は天子に奉仕したが、今は老いて山に歸つた。謂はば遊びあきた鳥が茂樹を得、涸あがつた魚が清流に反つたやうなものだ。自分は此處を捨てて更に何處にも往きはしない。世路は險難であるから。

【餘論】唐宋詩醇に、草堂の結構、四圍の景致、記中（白樂天の作つた草堂記）に詳なり。此詩淡寫し去りて自ら朴老の致を具ふと評してゐる。今左に草堂記を掲げて參考に供しよう。

匡廬の奇秀は天下の山に甲たり。山北の峯を香鑪といひ、峯北の寺を遺愛寺といふ。峯寺の間に介まり、其境勝絕、又廬山に甲たり。元和十一年秋、太原の人白樂天見て之を愛し、遠行の客の故鄕を過ぎて戀戀去る能はざるが如し。因て峯に面し寺に腋して草堂を作爲す。明年春草堂成る。三間兩柱二室四牖、廣袤豐殺一に心力に稱ふ。北戶を洞し陰風を來すは徂暑を防ぐなり。南甍を敞かにし陽日を納るるは、祁寒を慮るなり。木は斲するのみ。丹を加へず。墻は圬するのみ。白を加へず。墄階石を用ひ、冪窓紙を用ひ、竹簾紵幃率ね是に稱ふ。堂中に木榻四、素屛二、漆琴一張、儒道佛書各三兩卷を設く。樂天既に來りて主となり、仰いで山を覩、俯して泉を聽き、傍ら竹樹雲石を睨す、辰より酉に及び接應暇あらず。俄にして物誘ひ氣隨ひ、外適し內和し、一宿體寧く、再宿心恬かに、三宿の後頽然嗒然、其然るを知らずして然り。自ら其故を問ひ、答へて曰く、是居や前に平地あり、輪廣十丈。中に平臺あり、平地に半す。臺の南に方池あり、平臺に倍す。池を環りて山竹野卉多し。池中に白蓮白魚を生ず。又南石澗に抵る。澗を夾みて古松老杉あり。大いさ僅ど十人圍、高さ幾百尺なるを知らず。修柯雲に戞り、低枝潭を拂ひ、幢の竪つが如く、蓋の張るが如く、龍蛇の走るが如し。松下に灌叢蘿蔦多く、葉蔓駢織、日月を承翳して光地に到らず。盛夏の風氣八月の時の如し。下に白石を鋪きて出入の道となす。堂北五歩層崖に據り、石を積み空に嵌し、垤塊雜木異草其上を蓋覆し、綠陰濛濛、朱實離離、其名を識らず。四時一色。又飛泉あり。茗を植ゑ、就て以て烹燀す。好事の者見て以て日を永うすべし。堂東に瀑布あり。水懸ること三尺。階隅に瀉ぎ石渠に落つ。昏曉は練色の如く、夜中は環珮琴筑の聲の如し。堂西は北崖の右趾に倚り、剖竹を以て空に架し、崖上の泉を引き、脈分れ綫懸り、簷より砌に注ぎ、纍纍貫珠の如く、霏微雨露の如く、滴瀝飄灑、風に隨うて遠く去る。其四傍耳目杖屨の及ぶべきもの、春は錦繡谷の花あり。夏は石門澗の雲あり。秋は虎谿の月あり。冬は鑪峯の雪あり。陰晴顯晦、昏旦含吐、千變萬狀、殫く紀し覼縷して言ふべからず。故に云ふ、廬山に甲たるものと。噫。凡そ人一屋を豐にし一簣を華にして其間に起居するも、尙驕穩の態あるを免れず。今我是物の主となり、物至りて知を致し、各類を以て至る。又安んぞ外適し內和し體寧く心恬ならざるを得んや。昔永遠宗雷輩十八人、同じく此山に入り、老死して反らず。我を去ること千載、我其心を知る是を以てなる哉。矧んや予自ら思ふ。幼より老に迨ぶまで、若くは白屋、若くは朱門、凡そ止まる所、一日二日と雖も、輒ち簣土を覆うて臺となし、拳石を聚めて山となし、斗水を環らして池となす。其の山水を喜ぶ、病癖此の如し。一旦蹇剝來りて江郡に佐たり。郡守優容を以て我を撫し、廬山靈勝を以て我を待つ。是れ天我に時を與へ、地我に所を與へ、卒に好む所を獲。又何を以て求めん。尙冗員の羈する所を以て、餘累

未だ盡きず。或は往き或は來り、未だ寧處に遑あらず。予が異時弟妹婚嫁畢り、司馬の歳秩滿つるを待ちて、出處行止、以て自ら遂ぐるを得ば、則ち必ず左手に妻子を引き、右手に琴書を抱き、斯に終老し以て我が平生の志を成就せん。清泉白石實に此言を聞け。時に三月二十七日、始めて新堂に居り、四月九日、河南の元集虛、范陽の張允中、南陽の張深之、東西二林寺の長老湊朗滿晦堅等凡て二十有二人と、齋を具し茶果を施し、以て之を落す。因て草堂の記を爲る。

草堂前開一池。養魚種荷(一)。日有幽趣。

草堂の前に一池を開き、魚を養ひ荷を種う、日に幽趣有り

(二)淙淙三峽水。(三)浩浩萬頃陂。　淙淙たり三峽の水、浩浩たり萬頃の陂。
未如新塘上。微風動漣漪(四)。　未だ如かず新塘の上、微風漣漪を動かすに。
(五)小萍加汎汎。(六)初蒲正離離。　小萍加す汎汎たり、初蒲正に離離たり。
紅鯉二三寸。白蓮八九枝。　紅鯉二三寸、白蓮八九枝。
遶水欲成徑。護堤方插籬。　水を遶りて徑を成さんと欲し、堤を護りて方に籬を插む。
已被山中客。呼作白家池(七)。　已に山中の客に、呼んで白家の池と作さる。

【字解】【一】荷 蓮なり。【二】淙淙 水の聲。三峽は長江の險處。瞿塘峽・巫峽・西陵峽をいふ。【三】浩浩 廣大なる貌。【四】漣漪 さざ波。【五】小萍 小さうきくさ。汎汎はうかぶ貌。【六】初蒲 若い蒲。離離は繁茂する貌。【七】白家 白氏といふが如し。

【題義】草堂の前に池を鑿ち魚を養ひ蓮を種ゑ、日に日に幽趣の加はることを述べた詩である。

【詩意】淙淙たる三峽の水、浩浩たる萬頃の池も、吾が草堂の前の池の、微風に漣の立つ風情には及ぶまい。春のこととて小さい萍が日増に殖え、若い蒲が繁茂し、中には鯉を養ひ蓮を植ゑてある。水を圍んで徑を作り、又堤を護る爲に籬を設けようと思つてゐる。既に山の中の人からは白氏の池などと名までつけられるやうになつた。

白雲期 黄石巖下作

白雲期 黄石巖下の作

三十氣太壯。胸中多是非。　三十氣太だ壯なり、胸中是非多し。
六十身太老。(一)四體不支持。　六十にして身太だ老ゆ、四體支持せず。
四十至五十。正是退閒時。　四十より五十に至る、正に是れ退閒の時。
年長識命分(二)。心慵少營爲(三)。　年長じて命分を識り、心慵くして營爲少し。

見酒興猶在。登山力未衰。　酒を見て興猶ほ在り、山に登りて力未だ衰へず。

吾年幸當此。且與白雲期。　吾が年幸に此に當る、且く白雲と期す。

【字解】（一）四體　四肢なり。手足。（二）命分　天命。論語に、「五十ニシテ天命ヲ知ル」とある。（三）營爲　事を經營すること。

【詩意】三十ぐらゐの時は氣力が壯で、心中に是非の葛藤が多い。六十となると最早老境に入つて手足も自由がきかなくなる。四十から五十までは、正に心も落ち著き、天命を自覺するやうにもなり、何事にも進んで當らうとしなくなる。併し酒を見ては興を催し、山に登るぐらゐの元氣はある。自分は今丁度その年配になつた。因つて酒を攜へ山に登つて白雲と交會を結ばうと思ふ。

登香爐峯頂　香爐峯の頂に登る

（一）迢迢香爐峯。心存耳目想。　迢迢たる香爐峯、心に存し耳目に想ふ。

終年牽物役。今日方一往。　年を終るまで物役に牽かれ、今日方に一たび往く。

攀蘿蹋危石。手足勞俯仰。　蘿を攀ぢて危石を蹋み、手足俯仰に勞す。

同遊三四人。兩人不敢上。　同遊三四人、兩人は敢て上らず。

上到峯之頂。目眩心怳怳。（二）　上りて峯の頂に到れば、目眩めき心怳怳たり。

（三）高低有萬尋。（四）濶狹無數丈。　高低萬尋有り、濶狹數丈無し。

不窮視聽界。焉識宇宙廣。　視聽の界を窮めずんば、焉んぞ宇宙の廣きを識らん。

江水細如繩。（五）湓城小於掌。　江水は繩如りも細く、湓城は掌よりも小し。

紛吾何（六）屑屑。未能脫（七）塵鞅。　紛として吾何ぞ屑屑たる、未だ塵鞅を脫する能はず。

歸去思自嗟。低頭入蟻（八）壤。　歸り去り思ひて自ら嗟く、頭を低れて蟻壤に入るを。

【字解】（一）迢迢　高き貌。香爐峯は前に見ゆ。（二）怳怳　自失する貌。（三）高低　高さの意。低は意味なし。（四）濶狹　ひろさ。狹は意味なし。（五）湓城　潯陽なり。今の江西省九江縣治。（六）屑屑　煩細なり。（七）塵鞅　俗事に羈束せらるること。（八）蟻壤　蟻穴なり。

【題義】香爐峯の頂に登り、四方を眺望した感想を述べた詩である。

【詩意】高く聳ゆる香爐峯は、いつも我が心目の間にちらついてゐるが、一年中職責に拘束せられて登る機會がなかつたが、今日始めて目的を果した。蘿を攀ぢ危石を蹋み、手足は俯仰に疲れた。同行者は三四人あつたが、其中の二人は途中でへたばつてしまつた。絕頂に到ると目が眩み心が失はれる。高さは萬尋もあるのに濶さは僅か數丈に足らない尖峯であるから、それも其筈である。併し絕頂に登

つて遠く四方を見窮めると始めて宇宙の廣大なことがわかる。長江は繩よりも細く潯陽の町は掌よりも小く見える。常に俗事に牽かれて齷齪としてゐる身は、今此山から歸り去るに就いて、又頭を低れて蟻穴にも比すべき俗世間にはひるのかと思ふと自然と溜息が出る。

答崔侍郞錢舍人書問。因繼以詩

崔侍郞、錢舍人の書問に答へ、因つて繼ぐに詩を以てす

旦暮兩(一)蔬食。日中一閑眠。　旦暮に兩たび蔬食し、日中に一たび閑眠す。

便是了一日。如此已三年。　便ち是れ一日を了す、此の如きこと已に三年。

心不擇時適。足不揀地安。　心は時の適するを擇ばず、足は地の安きを揀ます。

窮通與遠近。一貫無兩端。　窮通と遠近と、一貫して兩端無し。

常見今之人。其心或不然。　常に今の人を見るに、其心或は然らず。

在勞則念息。處靜已思喧。　勞に在れば則ち息はんことを念ひ、靜に處しては已に喧しきを思ふ。

如是用身心。無乃自傷(二)殘。　是の如く身心を用ふ、乃ち自ら傷殘する無からんや。

坐輸憂惱便。安得(三)形神全。　坐して憂惱の便を輸さば、安んぞ形神の全きを得ん。

吾有二道友。(四)藹藹崔與錢。　吾に二道友有り、藹藹たり崔と錢と。

同飛(五)青雲路。獨墮(六)黃泥泉。　同じく青雲の路に飛び、獨り黃泥の泉に墮つ。

歲暮物萬變。(七)故情何不遷。　歲暮れて物萬變す、故情何ぞ遷らざる。

應爲平生心。與我同一源。　應に平生の心を爲し、我と一源を同じうすべし。

(八)帝鄕遠於日。(九)美人高在天。　帝鄕は日よりも遠く、美人は高くして天に在り。

誰謂萬里別。常若在目前。　誰か謂ふ萬里の別と、常に目前に在るが若し。

泥泉樂者魚。雲路遊者鸞。　泥泉に樂む者は魚なり、雲路に遊ぶ者は鸞なり。

勿言雲泥異。同在逍遙間。　言ふ勿れ雲泥異なりと、同じく逍遙の間に在り。

因君問(一〇)心地。(一一)書後偶成篇。　君が心地を問ふに因りて、書後偶篇を成す。

愼勿(一二)說向人。人多笑此言。　愼みて人に說く勿れ、人多くは此言を笑はん。

【字解】【一】蔬食　菜食なり。【二】傷殘　損傷なり。【三】形神　身心なり。【四】藹藹　盛なる貌。【五】青雲路　高位高官に喩ふ。【六】黃泥泉　貶謫に喩ふ。【七】故情　もとの情。【八】帝鄕　帝都長安。【九】美人　天子をいふ。【一〇】心地　我が貶謫せられた心持。【一一】書後　返事の手紙を書いた後。【一二】說向人　向は於に同じ、人に說くなり。

【題義】崔侍郞と錢舍人とが手紙を以て白樂天の貶謫を弔問した返事を出し、更に此詩を作つたので

ある。

【詩意】朝晩二回菜食して日中に一回晝寢をする。かうして一日を終り、已に三年を經た。時の快適を求めず、地の安定を求めず、身の窮通、地の遠近の如きは、一樣に視て差別を其間に立てない。今の世の人を見るに、多くは此の如くならず、勞に居りては休息を求め、靜に處りては喧を冀ふ。これは自ら身心を傷ける態度である。坐して憂惱の侵すに任せてゐれば身心の安全は保たれないにきまつてゐる。吾に二人の道友がある。卽ち崔侍郎と錢舍人とである。二人とも榮位にのぼつたが、僕だけは貶謫に遇つた。併し歲も改まつて萬物皆一變したのであるから、我を憐むの情も遷改して然るべきである。平生のやうな心持になり、僕と同樣になるがよい。帝都は遠く離れ、天子を拜することは出來ないが、常に目前に在るやうに思つてゐるので、相去ること萬里などとは思つてゐない。泥水の中に樂む魚も靑雲の間に遊ぶ鸞も、雲と泥との違こそあれ、其樂は同じである。君が僕を弔問せられたに因つて、返書を認めて後偶然此詩を作つた。併し此事は人には言はないでくれ。人が聞いたら負惜みを謂ふと笑ふであらう。

烹葵

葵を烹る

昨臥不夕食。今起乃朝飢（一）。
昨臥して夕食せず、今起きて乃ち朝飢す。

貧厨何所有・炊稻烹秋葵（二）。
貧厨何の有る所ぞ、稻を炊ぎ秋葵を烹る。

紅粒香復軟・綠英（三）滑且肥。
紅粒香しく復た軟かに、綠英滑にして且つ肥えたり。

飢來止於飽。飽後復何思。
飢ゑ來れば飽くに止まる、飽いて後復た何をか思はん。

憶昔榮遇日。迨今窮退時。
昔榮遇の日を憶ひ、今窮退の時に迨ぶ。

今亦不凍餒。昔亦無餘貲。
今亦凍餒せず、昔亦餘貲無し。

口既不減食。身又不減衣。
口既に食を減せず、身又衣を減せず。

撫心私自問。何者是榮衰。
心を撫して私に自ら問ふ、何者か是れ榮衰。

勿學常人意。其間分是非。
常人の意を學んで、其間是非を分つこと勿れ。

【字解】【一】朝飢　詩經に惄如調飢とある。調は朝なり。【二】秋葵　野菜の名。【三】綠英　綠の葉。

【題義】葵を烹て食ひ、因つて所感を述べた詩である。

【詩意】昨日は寢てゐたので夕飯を食はなかつた爲に、今朝起きて見ると大分腹が減つてゐた。勝手元が不如意で何もないから、米の飯に葵を烹て食べることにした。薄紅色の飯は香氣があつて軟で、綠色の葵葉は滑で肥えてゐる。飢ゑては飽くまで食ひ、飽けば外に何の屈託もない。昔榮遇を受けた

頃から今貶謫せられてゐる時までの事を追憶すれば、今も凍餒の患があるわけでもなく、昔も財政に餘裕があつたわけでもない。随つて著たり食つたりに格別の相違はない。因つて獨り胸を打つて自ら問うて見た。どちらが榮でどちらが衰なのであるかと。要するに世の常の人のやうに、盛衰の間に是非を置いて盛を是とし衰を非とするやうな考はしない。盛衰を一如とする考である。

小池二首

小池二首

晝倦前齋熱。晚愛小池清。　晝は前齋の熱きに倦み、晚には小池の清きを愛す。

映林餘景沒。近水微涼生。　林に映じて餘景沒し、水に近く微涼生ず。

坐把蒲葵扇。閒吟三兩聲。　坐して蒲葵の扇を把り、閒吟す三兩聲。

【字解】〔一〕餘景　夕日。〔二〕蒲葵　葉の椶櫚に似てゐる常綠喬木。その葉で扇を作る。

【題義】亭前の小池（官舍内新鑿小池の詩卷七に見ゆ）の涼味を述べた詩である。

【詩意】晝は前座敷の熱きに倦み疲れるが夕方になると小池の清澄が誠によい。林に映ずる夕日もいつしか沒すると、そろそろ涼味が湧いて來る。蒲葵扇を手に持ち、坐して微吟するのも趣味が深い。

〔二〕

有意不在大。湛湛方丈餘。　意有りて大に在らず、湛湛たり方丈餘。

荷側瀉清露。萍開見游魚。　荷側つて清露を瀉ぎ、萍開いて游魚を見る。

每一臨此坐。憶歸青溪居。　一たび此に臨んで坐する每に、「青溪の居に歸らんこと」を憶ふ。

【字解】〔一〕湛湛　水のたたへること。方丈は一丈四方。〔二〕荷　蓮の葉。〔三〕萍　うきくさ。

【詩意】敢て大なるに意あるにあらず、僅に一丈四方ばかりの小池に水が湛へてゐる。蓮の葉が傾いて清い露がこぼれ、萍が開いて游いでゐる魚が見える。一たび此池に對して坐する每に、青溪の居に歸りたいと思ふ。

閉關

關を閉づ

我心忘世久。世亦不我干。　我が心世を忘るること久し、世亦我を干さず。

遂成一無事。因得長掩關。　遂に一に事無きを成し、因つて長く關を掩ふを得たり。

掩關來幾時。髣髴二三年。　關を掩ひて來幾時ぞ、髣髴たり二三年。

著書已盈帙。生子欲能言。　書を著はして已に帙に盈ち、「子を生んで能く言はんと」欲す。

始悟身易老。復悲世多艱。　始めて身の老い易きを悟り、復た世の艱多きを悲む。
廻顧趨時者。役役塵壤間。　廻顧す時に趨る者、塵壤の間に役役たり。
歲暮竟何得。不如且安閑。　歲暮れて竟に何をか得る、且く安閑なるに如かず。

【字解】【一】髣髴　分明ならぬこと。【二】趨時者　世の勢利を逐ひ求むる者。【三】役役　勞苦する貌。

【題義】門關を閉ぢて閑居することを述べた詩である。

【詩意】我が心は久しく世を忘れ、世も亦我を棄てて顧みない。遂に何の爲す事もなく門を閉ぢて閑居することが出來る。閉居してから夢のやうに二三年を過ぎ、其間に書を著して帙に盈ち、子を生んで其子が物を言ふやうになつて來た。吾が身の追追老境に入ることを悟り、復た世路の艱難を悲む。世間に奔走して勢利を逐ふ者を見るに、皆塵土の間に勞苦してゐるが、老年になつて果して何を獲るか。何物も獲ないのが世の常である。そんな馬鹿な苦勞をするよりは、安閑と閑居してゐる方が遙によい。

弄龜羅　　龜羅を弄す

有姪始六歲。字之爲阿龜。　姪有り始めて六歲、之に字して阿龜と爲す。
有女生三年。其名曰羅兒。　女有り生れて三年、其名を羅兒と曰ふ。
一始學笑語。一能誦歌詩。　一は始めて笑語を學び、一は能く歌詩を誦す。
朝戲抱我足。夜眠枕我衣。　朝に戲れて我が足を抱き、夜眠りて我が衣を枕す。
汝生何其晚。我年行已衰。　汝生るること何ぞ其れ晚き、我年行くゆく已に衰ふ。
物情小可念。人意老多慈。　物情は小にして念ふ可く、人意は老いて慈多し。
酒美竟須壞。月圓終有虧。　酒美にして竟に須く壞るべし、月圓にして終に虧くる有り。
亦如恩愛緣。乃是憂惱資。　亦恩愛の緣の如き、乃ち是れ憂惱の資。
擧世同此累。吾安能去之。　世を擧げて此累を同じうす、吾安んぞ能く之を去らん。

【字解】【一】物情　人情なり。

【題義】阿龜と羅兒との二兒を戲弄するについて感想を述べた詩である。

【詩意】姪の阿龜は六歲、吾が女の羅兒は三歲。一人は笑つたり語つたりが出來、一人は詩歌を誦することが出來る。朝は吾が足を抱いて戲れ、夜は吾が衣を枕にして眠る。ああ汝等は何故晚く生れたか。汝等は皆幼少であるのに我はもう老衰した。人情の常として小さい者に對しては彼此と心配し、

年老いると慈愛が增すものである。酒の美なるは人を壞り月圓なれば虧けると同じく、恩愛の緣は卽ち煩惱の本である。世間皆この累を免れないが、吾も世間なみの恩愛の情に惱まされる。

栽樹

樹を栽る

種樹當前軒。樹高柯(一)葉繁。　樹を種ゑて前軒に當る、樹高くして柯葉繁る。
惜哉遠山色。隱此蒙(二)籠間。　惜しい哉遠山の色、此蒙籠の間に隱る。
一朝持斧(三)斤。手自截其端。　一朝斧斤を持し、手自ら其端を截る。
萬葉落頭上。千峰來面前。　萬葉頭上に落ち、千峰面前に來る。
忽似決雲霧。豁達覩青天。　忽ち雲霧を決して、豁達として青天を覩るに似たり。
又如所念人。久別一欵(四)顏。　又念ふ所の人に、久しく別れて一たび欵顏するが如し。
始有清風至。稍見飛鳥還。　始めて清風の至る有り、稍飛鳥の還るを見る。
開懷東南望。目遠心遼然。　懷を開いて東南を望めば、目遠くして心遼然たり。
人各有偏(五)好。物莫能兩全。　人各偏好有り、物能く兩ながら全きこと莫し。
豈不愛柔(六)條。不如見青山。　豈に柔條を愛せざらんや、青山を見んには如かず。

【字解】(一) 柯葉　枝葉。(二) 蒙籠　枝葉のおほひかぶさること。(三) 斧斤　をの、まさかり。(四) 欵顏　親しく顏を合せること。(五) 偏好　かたよつた好み。(六) 柔條　柔かな枝。

【題義】木の枝を截つて青山を眺めることが出來るやうにした悅を述べた詩である。

【詩意】樹を軒の前に植ゑた所が、段段そだつて、遠山の色が枝葉に遮られて見えなくなつてしまつた。因つて斧で其端を截つた。頭上にはばらばらと葉が落ちたが、おかげで羣峰が面前に現れて來た。恰も雲霧を披いて青天を仰ぎ、久しく別れてゐた懇親の人に遇つたやうである。始めて清風がよく透るやうにもなり、飛鳥の還るのも見えるやうになつた。東南の方を遙に眺望すると心も隨つて廣廣とする。人には皆偏好があり、物には兩全を許さない。余も樹の柔い枝を好まぬのではないが、青山を見る方がもつと好きだ。

望江樓上作

望江樓上の作

江畔百尺樓。樓前千里道。　江畔百尺の樓、樓前千里の道。
憑高望平遠。亦足舒懷抱。　高きに憑りて平遠を望むも、亦懷抱を舒ぶるに足る。

驛路使憧憧(一)。關防(二)兵草草。　驛路使憧憧、關防兵草草。

及茲多事日。尤覺閒人(三)好。　茲多事の日に及んで、尤も閒人の好きを覺ゆ。

我年過不惑(四)。休退誠非早。　我年不惑を過ぐ、休退誠に早きに非ず。

從此拂塵衣。歸山未爲老。　此より塵衣を拂ひ、山に歸るも未だ老いたりと爲さず。

【字解】【一】憧憧　絶えず往來する貌。【二】關坊　關所。草草は、いそがしきさま。【三】閒人　閑居する人。【四】不惑　四十歳。

【題義】望江樓に登つて作つた詩である。

【詩意】江の邊に百尺も高い樓があつて、千里のさきまで見晴すことが出來る。高い所から遠方を眺めるのも氣を霽すことが出來て大によい。今や驛路の使者は頻頻と往來し、關所を守る兵士は防戰に忙がしい。この多事の時に於ては殊に閑人生活が好い。自分は年四十であるから今引退してもそんなに早いわけでもない。今から塵衣を脫ぎ棄てて老い朽ちてしまはないうちに山に歸つて閑居しよう。

題座隅

座隅に題す

手不任執殳(一)。肩不能荷鋤。　手は殳を執るに任へず、肩は鋤を荷ふ能はず。

量力揆所用。曾不敵一夫。　力を量り所用を揆るに、曾て一夫にも敵せず。

幸因筆硯功。得升仕進途。　幸に筆硯の功に因り、仕進の途に升るを得たり。

歷官凡五六。祿俸及妻孥(二)。　官を歷ること凡そ五六、祿俸妻孥に及ぶ。

左右有兼僕(三)。出入有單車(四)。　左右に兼僕有り、出入に單車有り。

自奉雖不厚。亦不至飢劬(五)。　自ら奉ずること厚からずと雖も、亦飢劬に至らず。

若有人及此。傍觀爲何如。　若し人の此に及ぶ有らば、傍より觀て何如と爲す。

雖賢亦爲幸。況我鄙且愚。　賢と雖も亦幸と爲す、況んや我鄙にして且つ愚なるをや。

伯夷古賢人。魯山(六)亦其徒。　伯夷は古の賢人なり、魯山も亦其徒なり。

時哉無奈何。倶化爲餓殍(七)。　時なる哉奈何ともする無し、倶に化して餓殍と爲る。

念彼益自愧。不敢忘斯須(八)。　彼を念うて益自ら愧づ、敢て忘るること斯須もせず。

平生榮利心。破滅無遺餘。　平生榮利の心、破滅して遺餘無し。

猶恐塵妄(九)起。題此於座隅。　猶ほ塵妄の起らんことを恐れ、此を座隅に題す。

【字解】【一】殳　兵器の名。長さ一丈二尺、刃なし。【二】妻孥　妻子なり。【三】兼僕　二三人の召使。【四】單車　一乘の

車。【五】飢劬　飢と苦勞。【六】魯山　自註に、元魯山は山居して水に阻てられ、食絶えて終るとある。【七】餓殍　餓死者。【八】斯須　しばらく。須臾に同じ。【九】塵妄　榮利の心。

【題義】自ら警めて塵心の起らないやうに座隅に題した詩である。

【詩意】吾が手は武器を執るに任へず、吾が肩は鋤を荷ふに堪へない。自ら己の力を量るに、一人前には足りない男だ。幸にも學問文章の功を以て官職に就くことが出來て、既に五六の官に歷任し俸祿を得て妻子をも養ふことが出來、身のまはりには二三人の召使もあり、出入には車もある。たとひ豐な生活は出來なくとも飢餓に迫るほどではない。人が傍觀したらば定めて羨むであらう。こんな境遇にゐるのは賢者でさへ幸とするに足るのである。まして我のやうな鄙にして愚なる者に取つては、非常な幸福と謂はねばならない。伯夷や魯山は皆古の賢人であるが、時命の然らしむる所奈何ともすることが出來ないで倶に餓死した。吾は大に彼等に對して愧づべきであつて、暫くも忘れたことはない。それが爲に榮利を求める心も消滅して跡形もなくなつた。が、猶ほ榮利の心の兆さんことを恐れて此詩を座隅に書きつけて置く。

昔與微之在朝日。同蓄休(一)退之心。迨今十年。淪落老大。追尋前約。且結後(二)期

昔微之と朝に在りし日、同じく休退の心を蓄ふ。今に迨んで十年、淪落老大なり。前約を追尋し、且つ後期を結ぶ

往子爲(三)御史。伊余忝拾(四)遺。
皆逢盛明代。倶登清(五)近司。
余繋玉爲珮。子曳繡爲衣。
從容香煙下。同侍白(六)玉墀。
朝見寵者辱。暮見安者危。
紛(七)紛無退者。相顧令人悲。
宦情君早厭。世事我深知。
常於榮顯日。已約林(八)泉期。
況今各流落。身病齒髮衰。
不作臥(九)雲計。攜手欲何之。
待君女嫁後。及我官滿時。

往に子は御史と爲り、伊れ余拾遺を忝うす。
皆盛明の代に逢ひ、倶に清近の司に登る。
余は玉を繋いで珮と爲し、子は繡を曳いて衣と爲す。
香煙の下に從容し、同じく白玉の墀に侍す。
朝に寵ある者の辱めらるるを見、暮に安き者の危きを見る。
紛紛として退く者無し、相顧みて人をして悲ましむ。
宦情君早く厭ひ、世事我深く知る。
常て榮顯の日に於て、已に林泉の期を約す。
況んや今各流落し、身病みて齒髮衰ふ。
雲に臥す計を作さず、手を攜へて何に之かんと欲する。
君が女の嫁する後を待ち、我が官の滿つる時に及び、

稍無骨肉累。粗有漁樵資。　稍骨肉の累無く、粗漁樵の資有らん。

歲晚(一〇)青山路。白首期同歸。　歲晚れて青山の路、白首同じく歸らんことを期す。

【字解】【一】休退　官を退くこと。【二】後期　後日の約束。【三】御史　官名。【四】拾遺　官名。【五】淸近司　天子に近く奉侍する官職。【六】白玉墀　宮殿なり。【七】紛紛　數の多いこと。退者は無事に退引する者。【八】林泉　隱遁なり。【九】臥雲　前に同じ。【一〇】歲晚　年老ゆ。

【題義】嘗て元微之と朝廷に仕へてゐた時は、早く官を退いて隱居しようと約束したが、十年を經た今日になつても、引退もし得ないで倶に淪落老衰してゐるのは、感慨無量である。因つて昔の約束を追懷し、更に後日の約束を結ぶといふ意である。

【詩意】昔君は御史となり僕は拾遺となつて、同じく盛明の御宇に遇ひ側近に奉侍し、僕は玉の珮を垂れ君は錦繡の衣をまとうて金殿の上に仕へた。その頃君寵のあつた者が忽ち其寵を失ひ、安泰の地位にゐた者が忽ち失脚することが多く、無事に引退の出來る者は殆ど無いのを見て、君は宮仕がつくづくいやになり、僕も世事の恃み難いことを痛感した。因つて足下の明るいうちに早く引退しようと約束した。まして今日は各貶謫の憂目に遇ひ、身は病み形は老いた。今にして歸隱の計を立てないで何としようぞ。君の女が人に嫁し我が任期の滿つる頃には、骨肉の厄介もなくなり、漁樵の資力も出來るであらうから、白髮の老人が二人相攜へて青山に歸ると致さう。

垂釣　　釣を垂る

臨水一長嘯。忽思十年初。　水に臨んで一たび長嘯し、忽ち思ふ十年の初。

三登甲乙第(一)。一入承明廬(二)。　三たび甲乙の第に登り、一たび承明廬に入る。

浮生(三)多變化。外事有盈虛。　浮生變化多く、外事盈虛有り。

今來伴江叟。沙頭坐釣魚。　今來りて江叟に伴ひ、沙頭坐して魚を釣る。

【字解】【一】甲乙第　進士に甲乙の二科あり。進士の試驗に及第したこと。【二】承明廬　漢代に侍從の臣のゐた役所。【三】浮生　定めなき人生。

【題義】魚釣に往き感慨を起して作つた詩である。

【詩意】水に臨んで嘯き、忽ち十年間の事を思ひ出した。自分は三たび進士の試驗に及第し、一たび侍從の臣となつたが、人生には變化が多く、世事には盈虛があるもので、今は年老いた漁夫に伴つて、この濱邊に釣をしてゐる。變れば變る浮世である。

晚燕　　晚燕

百鳥乳雛畢(一)。秋燕獨蹉跎。　百鳥乳雛畢り、秋燕獨り蹉跎たり。

去社日已近。銜泥意如何。　社を去ること日已に近し、泥を銜む意如何。
不悟時節晩。徒施工用多。　時節の晩きを悟らず、徒に工用を施すこと多し。
人間事亦爾。不獨燕營窠。　人間の事も亦爾り、獨り燕の窠を營むのみならず。

【字解】【一】乳雛　雛をかへすこと。子を生むこと。【二】蹉跎　時を失ふこと。【三】社　立秋の後第五の戊の日を秋社といふ。燕は秋社の頃に南國に移る習である。【四】窠　燕の巣。

【題義】燕が程なく南國に歸らねばならぬにも拘らず、子を生む爲に其巣を作るのを見て、自己の境遇と酷似してゐることを述べた詩である。

【詩意】他の鳥は皆子を生み畢つたが、燕は此れから子を生む爲に、社日も近くなつて、程なく南國に歸らねばならぬにも拘らず、泥を銜んで巣を作り、時節の晩いのも悟らずに、頻に工力を用ひてゐる。人も此れと同じだ。ただ獨り巣を作る燕ばかりではない。

贖雞　雞を贖ふ

清晨臨江望。水禽正諠繁。　清晨江に臨んで望めば、水禽正に諠繁なり。
鳧雁與鷗鷺。游颺戲朝暾。　鳧雁と鷗鷺と、游颺して朝暾に戲る。
適有鬻雞者。挈之來遠村。　適雞を鬻ぐ者有り、之を挈へて遠村より來る。
飛鳴彼何樂。窘束此何寃。　飛鳴して彼れ何をか樂む、窘束すること此れ何ぞ寃なる。
喔喔十四雛。罩縛同一樊。　喔喔たり十四雛、罩縛す同一の樊。
足傷金距踠。頭搶花冠翻。　足傷みて金距踠まり、頭搶きて花冠翻る。
經宿廢飲啄。日高詣屠門。　宿を經て飲啄を廢し、日高くして屠門に詣る。
遲廻未死間。飢渴欲相呑。　遲廻して未だ死せざる間、飢渴して相呑まんと欲す。
常慕古人道。仁信及魚豚。　常に慕ふ古人の道、仁信魚豚に及ぶを。
見茲生惻隱。贖放雙林園。　茲を見て惻隱を生じ、贖ひて雙林園に放つ。
開籠解索時。雞雞聽我言。　籠を開き索を解く時、雞雞我が言を聽け。
與爾鏹三百。小惠何足論。　爾に鏹三百を與ふ、小惠何ぞ論ずるに足らん。
莫學銜環雀。崎嶇謾報恩。　學ぶ莫れ環を銜む雀の、崎嶇として謾に恩に報いしことを。

【字解】【一】諠繁　聲かまびすし。【二】游颺　およいだり、飛びあがつたりする。朝暾は旭日。【三】窘束　拘束されること。【四】喔喔　雞の鳴く聲。【五】樊　鳥籠。【六】金距　けづめ。【七】經宿　前の晩から。宵越しに。【八】屠門　肉市なり。【九】遲廻　徘徊なり。【一〇】魚豚　易經に、信及豚魚とある。【一一】惻隱　憐愍の情。【一二】鏹　さし。錢貫なり。【一三】

銜環雀　續齊諧記に、楊寶年九歳、華陰山北に至り、一黄雀の鴟梟の搏つ所となり、樹下に墜つるを見る。寶取り歸り黄花を食はしむること百餘日。毛羽成り乃ち飛び去る。其夜黄衣童子あり寶に向つて再拜して曰く、我は西王母の使者なりと。白環四枚を以て寶に與へて曰く、君の子孫をして位三公に登らしむること當に此環の如くなるべしと、とある。【三】崎嶇　困難すること。謾とは、やたらにの意。

【題義】　雞を買つて放してやつたことを述べた詩である。

【詩意】　朝江上を望むと水禽が喧しく鳴き、鳧雁や鷗鷺が朝日を受けて飛んだり游いだりして戯れてゐる。折しも雞屋が雞を持つて遠方の村から賣りに來た。かの水禽は飛んだり鳴いたりして何を樂んでゐるであらう。それとは打つて變つて此雞は氣の毒なことに、籠の中に十四羽一緒に拘束されて足が傷いて距が縮まり、頭がつかへて雞冠がゆがみ、宵から飲まず食はずに押込められてゐて、晝になれば肉屋の店に竝べられるのだ。籠の中に徘徊してゐる中も腹が減つて共食ひもしかねない有樣である。余は常に古人の道の、無智の豚魚をも感動せしめる仁信を慕ふ者である。此を見て忽ち憐愍の情を起し、此雞を買つて雙林園に放してやつた。籠を開き索を解く時に、雞どもに次のやうに申渡した。俺は汝等に三百錢を與へたが、それは誠に小惠で論ずるに足らないのだから、彼の環を銜んで御禮をした雀のまねをして、やたらに恩報じなどをするには及ばぬぞよと。

秋日懷杓直　時杓直出牧澧州。

晩來天色好。獨出江邊步。
憶與李舍人。(一)曲江相近住。(二)
常云遇清景。必約同幽趣。
若不訪我來。還須覓君去。
開眉笑相見。把手期何處。
西寺老胡僧。南園亂松樹。
攜持小酒榼。(三)吟詠新詩句。
同出復同歸。從朝直至暮。
風雨忽消散。江山眇回互。
潯陽與湓陽。(四)(五)相望空雲霧。
心期自乖曠。(六)時景還如故。
今日郡齋中。(七)秋光誰共度。

秋日杓直を懷ふ　時に杓直は出されて澧州に牧たり

晩來天色好し、獨江邊に出でて歩す。
憶ふ李舍人と、曲江に相近く住せり。
常に云に清景に遇へば、必ず幽趣を同うせんことを約す。
若し我を訪うて來らずんば、還つて須く君を覓めて去るべし。
眉を開いて笑つて相見、手を把つて何の處にか期する。
西寺の老胡僧、南園の亂松樹。
小酒榼を攜持し、新詩句を吟詠す。
同じく出でて復同じく歸り、朝より直に暮に至る。
風雨忽ち消散し、江山眇に回互す。
潯陽と湓陽と、相望めば空しく雲霧。
心期自ら乖曠し、時景還つて故の如し。
今日郡齋の中、秋光誰と共にか度らん。

【字解】【一】李舍人　舍人は官名。李杓直なり。【二】曲江　長安に在る池の名。白樂天は嘗て曲江の畔に住んだ。【三】酒權　酒權。【四】潯陽　白樂天の貶せられてゐる處。江西省の江州郡。【五】灃陽　卽ち灃州。今の湖南省武陵道灃縣。【六】心期　心の約束。【七】郡齋　郡の役所。

【題義】秋、李杓直を懷うて作つた詩である。此時杓直は灃州刺史であつた。

【詩意】夕方になつて天氣が好くなつたので獨りで江邊を散步し、嘗て李舍人と共に曲江の近所に住んでゐた時の事を回想した。あの頃は好景に遇へば必ず幽賞を共にし、君が我を訪はなければ、我が必ず君を訪ひ、手を把つて相喜び、寺の胡僧を訪ねたり、園の亂松を眺めたり、酒を酌んだり、新作を吟じたりして、行動を倶にしたものであつた。それが今は風雨の東西に分散し、江山の遙に對峙するが如く、一は潯陽に在り、一は灃陽に在りて、空しく雲霧を隔て、見る所の景色は昔のままであるが、兩人の親交は阻隔せられ、共に郡官に貶せられ、相攜へて秋色を賞することも出來ない。

食後

食罷一覺睡。起來兩甌茶。
擧頭看日影。已復西南斜。
樂人惜日促。憂人厭年賖。

食後

食罷んで一たび睡より覺め、起き來れば兩甌の茶あり。
頭を擧げて日影を看れば、已に復た西南に斜なり。
樂む人は日の促きを惜み、憂ふる人は年の賖なるを厭ふ。

無憂無樂者。長短任生涯。

憂も無く樂も無き者は、長短生涯に任す。

【字解】【一】兩甌　二椀。

【題義】食後晝寢の夢が覺めた後の感想を述べた詩である。

【詩意】食事が終つてから一睡し、睡が覺めて二椀の茶を飮んで心を澄まし、頭を擧げて太陽を見れば、已に西南に傾いて今日も復た暮れる。樂のある人は日の短いのを惜み、憂のある人は日の長いのを厭ふものであるが、自分のやうに憂もなければ樂もない者は、長くとも短くとも成行に任せて生涯を送つてゐる。

齊物二首

青松高百尺。綠蕙低數寸。
同生大塊間。長短各有分。
長者不可退。短者不可進。
若用此理推。窮通兩無悶。

物を齊うす二首

青松高きこと百尺、綠蕙低きこと數寸。
同じく大塊の間に生じ、長短各分有り。
長き者も退く可からず、短き者も進む可からず。
若し此理を用つて推さば、窮通兩ながら悶ふること無「けん。」

【字解】【一】綠蕙　蕙は香草の名。【二】大塊　天地。

【題詩】 莊子に齊物論あり、萬物を同一視して差別を其間に置くべからざることを說いた。この篇も莊子と同じ意味である。

【詩意】 松は高さが百尺もあるが、蕙は僅に數寸に過ぎない。同じく天地の間に生じても、此の如き長短の相違がある。長い者は退けて之を短くすることは出來ず、短い者は進めて之を長くすることは出來ない。長短各その用があるのである。若し此理を推究すれば、窮するも通するも敢て憂ふべきではない。

〔二〕

椿壽(一)八千春。槿花(二)不經宿。　椿壽は八千の春、槿花は宿を經ず。

中間復何有。冉冉(三)孤生竹。　中間復何か有る、冉冉たる孤生の竹。

竹身三年老。竹色四時綠。　竹身は三年に老ゆ、竹色は四時に綠なり。

雖謝(四)椿有餘。猶勝槿不足。　椿の餘有るに謝すと雖も、猶ほ槿の足らざるに勝れり。

【字解】【一】椿壽　莊子逍遙遊篇に、上古有大椿者、以八千歲爲春、八千歲爲秋とある。【二】槿花　むくげの花。朝咲いて夕に萎む。經宿は宵を越すこと。【三】冉冉　漸く進む貌。【四】謝　讓る。劣る。

【詩意】 大椿は八千歲を以て春となし、槿花は宵を越すを待たずして萎む。その中間に位するものは竹であらう。竹の身は三年たてば老いるが、色は四季常に變らない。大椿の長きに比すれば劣つてゐるが、槿花の忽ち萎むに比すれば勝つてゐる。

山下宿

山下に宿す

獨到山下宿。靜向月中行。　獨り山下に到りて宿し、靜に月中に向つて行く。

何處水邊碓(一)。夜舂雲母(二)聲。　何處の水邊の碓ぞ、夜雲母を舂くの聲あり。

【字解】【一】碓　からうす。【二】雲母　鑛物の名。仙藥に用ふ。卷七の宿簡寂觀を見よ。

【題義】 山の下に宿して作つた詩である。

【詩意】 獨り山の下に宿し、靜に月下を步行した。何處の川邊の水車か知らぬが、雲母を舂く聲が聞える。さては仙術を修業する人が住んでゐると見える。

題舊寫眞圖

舊眞を寫せる圖に題す

我昔三十六。寫貌在丹青(一)。　我昔三十六、貌を寫して丹青に在り。

我今四十六。衰顇(二)臥江城。　我今四十六、衰顇して江城に臥す。

豈止十年老。曾與衆苦并。　豈に止だ十年老ゆるのみならんや、曾ち衆苦と并す。

一照舊圖畫。無復昔儀形。　一たび舊圖畫に照らすに、復た昔の儀形無し。

形影默相顧。如弟對老兄。　形影默して相顧みれば、弟の老兄に對するが如し。

況使他人見。能不昧平生。　況んや他人をして見しめば、能く平生に昧からざらんや。

義和鞭日走。不爲我少停。　義和日の走るに鞭ち、我が爲めに少くも停まらず。

形骸屬日月。老去何足驚。　形骸日月に屬す、老去何ぞ驚くに足らんや。

所恨凌煙閣。不得畫功名。　恨む所は凌煙閣に、功名を畫くを得ざるを。

【字解】【一】丹青　畫なり。【二】衰頽　老衰する。江城は江州。【三】義和　日輪の御者。【四】凌煙閣　唐の太宗が功臣の像を畫かせた閣の名。

【題義】十年前に書いた肖像畫を見て感慨を述べた詩である。

【詩意】我は昔三十六の時肖像畫を書かせて置いた。今は四十六になり、老衰して江州に病臥してゐる。ただ十年だけ老けたばかりでなく、色色の難儀もして來たので、今もとの肖像畫と實物とを照し合せて見ると、全く昔の俤はない。實物と畫と默して相顧ること、弟の老兄と相對する如くである。まして他人に見せたらば同じ人とは認めぬであらう。歳月はどんどん走つて暫くも停らず、形骸は歳月に伴つて變るものだから老衰するのは怪むに足らないが、功名を立てて凌煙閣上に畫かれないのが殘念である。

閑居

肺病不飮酒。眼昏不讀書。　肺病みて酒を飮まず、眼昏くして書を讀まず。

端然無所作。身意閒有餘。　端然として作す所無く、身意閒にして餘有り。

棲雞籬落晚。雪映林木疎。　雞棲んで籬落晩れ、雪映じて林木疎なり。

幽獨已云極。何必山中居。　幽獨已に云に極まる、何ぞ必ずしも山中に居らんや。

【字解】【一】端然　正しくすわること。【二】雞棲　雞が塒にはひること。籬落は垣根。

【題義】閑居の情趣を述べた詩である。

【詩意】肺の病に罹つて酒を廢し、眼が霞んで讀書を廢し、爲す事もなく端坐してゐると、心も靜で至つて暇である。折しも雞は塒に就いて垣根のあたりが小暗くなり、疎に生えた林木の間に雪が斑に映じ、實に幽閑孤獨の極である。閑靜を味ふには必ずしも山中に住むを要しない。

對酒示行簡

今旦一樽酒。歡暢何怡怡。
此樂從中來。他人安得知。
兄弟唯二人。遠別恒苦悲。
今春自巴峽。萬里平安歸。
復有雙幼妹。笄年未結褵。
昨日嫁娶畢。良人皆可依。
憂念兩消釋。如刀斷羈縻。
身輕心無繫。忽欲凌空飛。
人生苟有累。食肉常如飢。
我心既無苦。飲水亦可肥。
行簡勸爾酒。停盃聽我辭。
不歎鄕國遠。不嫌官祿微。

酒に對して行簡に示す

今旦一樽の酒、歡暢何ぞ怡怡たる。
此樂中より來る、他人安んぞ知るを得ん。
兄弟唯二人、遠く別れて恒に苦だ悲む。
今春巴峽より、萬里平安にして歸る。
復た雙幼妹有り、笄年にして未だ褵を結ばず。
昨日嫁娶し畢り、良人皆依る可し。
憂念兩ながら消釋し、刀の羈縻を斷つが如し。
身輕くして心に繫る無し、忽ち空を凌いで飛ばんと欲す。
人生苟も累有れば、肉を食ふも常に飢うるが如し。
我が心既に苦無し、水を飲むも亦肥ゆ可し。
行簡爾に酒を勸む、盃を停めて我が辭を聽け。
鄕國の遠きを歎せず、官祿の微なるを嫌はず。

但願我與爾。終老不相離。

但願くは我と爾と、終老相離れざらんことを。

【字解】【一】怡怡　よろこぶ貌。【二】從中來　心の中から湧いて來る。【三】巴峽　地名。行簡は蜀にゐたが、舟で巴峽を下つて樂天の處へ來た。【四】笄年　女子の成年者をいふ。禮記に、女子十有五年にして笄すとある。結褵とは嫁すること。褵は香嚢なり。詩經に、親結其褵とあり。褵は嫁して後佩ぶるものとす。【五】良人　をつと。【六】羈縻　繫つてある繩。

【題義】酒に對して弟なる白行簡に示した詩である。

【詩意】今朝お前と酒に對するのは實に愉快でたまらない。腹の中から喜がこみあげて來る。とても他人にはわかるまい。俺とお前とは、たつた二人の兄弟で、遠く別れて常に苦んでゐたが、今春巴峽から萬里の長途を無事にお前が歸つて來た。また二人の幼妹があつて皆成年に達してゐたが、先頃人に嫁し、各依るべき良人が定まつた。これで憂念が釋けて、繩目が解けたやうに身も心も輕くなり、空にも飛びあがりさうである。人には心に累があつては何を食つても旨くはない。俺は心に苦がないから、水を飲んでも肥えるであらう。今お前に盃をさす前に一應俺の辭を聽いてくれ。鄕里を遠く離れてゐることは嘆ずるに足らぬ。又官祿の微少なことも嫌ひはせぬ。ただお前と永く離れずに一生を終りたいものだ。

詠懷

懷を詠ず

(一)冉牛與顏淵。(二)卞和與馬遷。　冉牛と顏淵と、卞和と馬遷と、
或罹天(三)六極。或被人(四)刑殘。　或は天の六極に罹り、或は人に刑殘せらる。
顧我信爲幸。百骸且完全。　我を顧みるに信に幸と爲す、百骸且つ完全なり。
五十不爲天。吾今欠數年。　五十天と爲さず、吾今數年を欠く。
知分心自足。(五)委順身常安。　分を知れば心自ら足り、順に委すれば身常に安し。
故雖窮退日。而無(六)戚戚顏。　故に窮退の日と雖も、而も戚戚の顏無し。
昔有(七)榮先生。從事於其間。　昔榮先生有り、其間に從事す。
今我不量力。擧心欲攀援。　今我力を量らず、心を擧げて攀援せんと欲す。
窮通不由己。歡戚不由天。　窮通は己に由らず、歡戚は天に由らず。
命卽無奈何。心可使泰然。　命は卽ち奈何ともする無く、心は泰然たらしむ可し。
且務由己者。省躬諒非難。　且く己に由る者を務めよ、躬を省みること諒に難きに非ず。
勿問(八)由天者。天高難與言。　天に由る者を問ふ勿れ、天は高くして與に言ひ難し。

【字解】【一】冉牛　孔子の弟子冉耕、字は伯牛。癩病に罹つた。顏淵は孔子の弟子顏回、夭死した。【二】卞和　玉を楚王に獻じたが、誤つて石だと鑑定され、王を欺いた罪で刖られた。馬遷は漢の司馬遷、李陵を辯護した爲に腐刑にせられた。【三】六極　書經に、威用六極、一日凶短折、二日疾、三日憂、四日貧、五日惡、六日弱とある。【四】刑殘　殘は害なり。【五】委順　自然の運命に順應すること。【六】戚戚　憂ふる貌。【七】榮先生　榮啓期なり。孔子泰山に遊び啓期の鹿裘帶索、琴を鼓して歌ふを見、問うて曰く、先生何をか樂むと。曰く吾が樂最も多し。天萬物を生ず。人を貴しとなす。吾人たるを得たるは一樂なり。男女の別、男は尊く女は卑し。吾男たるを得たるは二樂なり云云と。【八】由天者　天命、運命。

【題義】己の感慨を述べた詩である。

【詩意】冉伯牛・顏淵・卞和・司馬遷等は、或は天刑に罹り或は刑罰に罹つた。我自ら顧みるに刑罰を免れて身體は完全であり、又天刑を免れて五十近くまで生きてゐるのは實に幸福である。己の分を知り天命に順へば心身共に安靜である。故に貶謫に遇つても憂愁するやうなことはない。昔榮啓期は此種の修養を積んだが、自分も己の力を量らずして其風を追求しようと思つてゐる。抑窮通は己に由るのではなくて天命に由るのである。喜憂は天命に由るのではなくて己に由るのである。天命は人力を以て奈何ともすべからず。心は泰然として安靜ならしめることが出來る。人は宜しく己に由るものを務むべきであつて、天命は天に任せて置くべきである。

夜琴

蜀桐木性實。楚絲音韻淸。　蜀の桐は木の性實なり、楚の絲は音韻淸し。

調慢彈且緩。夜深十數聲。　調慢にして彈くこと且つ緩し、夜深けて十數聲。
入耳淡無味。愜心潛有情。　耳に入りて淡くして味無く、心に愜うて潛に情有り。
自弄還自罷。亦不要人聽。　自ら弄びて還た自ら罷む、亦人の聽かんことを要せず。

【題義】夜、琴を彈じて自ら樂むことを述べた詩である。

【詩意】蜀の桐は木の性質が緻密で、楚の絲は音色が澄んでゐる。ゆるやかに夜深けて獨りかきならせば、淡泊で何の味もなければど、靜に聽けば仲仲風情がある。彈きたい時に彈いて飽きればやめ、ただ自ら樂むので、人に聽いてもらはうといふのではない。

山中獨吟　山中獨吟

人各有一癖。我癖在章(一)句。　人各一癖有り、我が癖は章句に在り。
萬(二)緣皆已消。此病獨未去。　萬緣皆已に消し、此病獨未だ去らず。
每逢美風景。或對好(三)親故。　美風景に逢ひ、或は好親故に對する每に、
高聲詠一篇。怳(四)若與神遇。　高聲に一篇を詠じ、怳として神と遇ふが若し。
自爲江(五)上客。半在山中住。　江上の客と爲りし自り、半山中に在りて住す。
有時新詩成。獨上東巖路。　時有りて新詩成り、獨り東巖の路に上る。
身倚白石崖。手攀青桂樹。　身は白石の崖に倚り、手は青桂の樹を攀づ。
狂吟驚林壑。猿鳥皆窺覰。　狂吟して林壑を驚かし、猨鳥皆窺覰す。
恐爲世所嗤。故就無人處。　世の嗤ふ所と爲らんことを恐れ、故に人無き處に就く。

【字解】(一)章句　詩をいふ。(二)萬緣　多くの俗緣。(三)好親故　よき親戚故舊。(四)怳　うつとりとして心を失ふ貌。(五)江上客　江州に貶せられたこと。

【題義】山中で獨り自作の詩を吟ずることを述べた詩である。

【詩意】人には皆それぞれ癖があるが、我が癖は詩である。多くの俗緣は凡て消え去つたが、ただ詩の病癖だけはまだ殘つてゐる。よい景色や親しい人人に逢へば必ず一篇の詩を吟ずるが、その時は全く己を忘れて神と遇つたやうな心持がする。江州に貶せられてからは半は山中に住んだが、時に新詩が出來ると、獨りで東巖の路に上り往き、白石に倚り青桂を攀ぢ、狂聲を張り揚げて其詩を吟ずる。猿や鳥が驚いて覗き込んでゐる。實は世人が笑ふであらうと氣遣つて、わざと人のゐない處で吟ずるのだ。

達理二首

理に達す二首

何物壯不老。何時窮不通。　何物か壯にして老いざる、何の時か窮して通せざる。
如彼音與律。宛(一)轉旋爲宮。　彼の音と律との如し、宛轉して旋つて宮と爲る。
我命獨何薄。多悴而少豐。　我が命獨り何ぞ薄き、悴むこと多くして豐かなること少し。
當壯已先衰。暫泰還長窮。　壯なるに當りて已に先づ衰へ、暫く泰にして還長く窮す。
我無奈命何。委(二)順以待終。　我命を奈何ともする無し、順に委して以て終りを待つ。
命無奈我何。方(三)寸如虛空。　命我を奈何ともする無し、方寸虛空の如し。
(四)瞢然與化俱。(五)混然與俗同。　瞢然として化と倶にし、混然として俗と同じうす。
誰能坐此苦。(六)齟齬於其中。　誰か能く此苦に坐し、其中に齟齬せんや。

【字解】(一)宛轉　うつりかはる。宮は音律の名、五音の一。(二)委順　天命の自然に順應する。(三)方寸　心をいふ。(四)瞢然　曖昧の貌。化は自然の運行。(五)混然　混同する貌。(六)齟齬　くひちがふこと。苦惱すること。

【題義】天理に通達して自然の運に任せることを述べた詩である。

【詩意】如何なる物でも壯にして老いない物はなく、窮すれば何日かは又通ずるものである。譬へば音律が宮から徵商羽角の四音が出で、それから復宮に還るやうなものだ。が、我獨り何故かくは薄命なのであらうか。壯なるべきに先づ已に衰へ、安泰なことは暫くで窮することが長い。けれども、天命はどうすることも出來ない。ただ運に任せて一生を終るまでのことだ。又運命と雖も我を苦めることは出來ない。余が心は虛空の如く平然としてゐる。余は自然の化に任せ世俗と態を同うし、苦の中に在つても其れが爲に心を惱ますことはしない。

〔二〕

(一)舒姑化爲泉。(二)牛哀病作虎。　舒姑化して泉と爲り、牛哀病んで虎と作る。
或(三)柳生肘間。或男變爲女。　或は柳肘間に生じ、或は男變じて女と爲る。
鳥獸及水木。本不與民伍。　鳥獸及び水木、本民と伍せず。
胡然生變遷。不待死歸土。　胡然ぞ生れて變遷し、死して土に歸するを待たざる。
百骸是己物。尙不能爲主。　百骸は是れ己が物なり、尙ほ主と爲ること能はず。
況彼時(四)命間。倚(五)伏何足數。　況んや彼の時命の間、倚伏何ぞ數ふるに足らん。
時來不可遏。命去焉能取。　時來りて遏む可からず、命去りて焉んぞ能く取らん。
唯當養(六)浩然。吾聞(七)達人語。　唯當に浩然を養ふべし、吾達人の語を聞けり。

【字解】【一】舒姑　宣城記に、昔舒氏の女あり、父と薪を登山に折く。忽ち泉の處に坐し牽挽すれども動かず。父遽に家に告ぐ。還るに及んで唯清泉の湛然たるを見る、とある。【二】牛哀　淮南子に、牛哀病むこと七日、化して虎となる、とある。【三】柳　莊子至樂篇に、柳生其左肘とある。【四】時命　時運天命。【五】倚伏　禍福の互に相因つて至ること。老子に、禍兮福所倚、福兮禍所伏とある。【六】浩然　廣大なる氣象。【七】達人　事理に通達した人。

【詩意】舒姑は化して泉となり、牛哀は病んで虎となり、或は柳が肘に生じ、或は男が變つて女になる。此等の鳥獸水木は人間とは類を異にするものであるのに、死して土に歸するを待たずして、なぜ變化往來するのであらう。又吾が身は己の所有物である。然るに其れさへ自分が主となつて自由にすることは出來ない。まして時運天命には禍福の相違があつて、紛紛として數ふるを待たないほど多い。時運が向いて來れば之を拒むことは出來ず、又天命が去れば之を捕へて置くことは出來ない。ただ宜しく浩然の氣を養つて禍福を以て喜憂をなさぬがよい。これは達人の言ふ所で疑のない言葉だ。

湖亭晩望殘水

湖亭にて晩に殘水を望む

湖上秋泬寥。湘邊晩蕭瑟。
湖上秋泬寥たり、湖邊晩に蕭瑟たり。

登亭望湖水。水縮湖底出。
亭に登りて湖水を望めば、水縮つて湖底出づ。

清渟得早霜。明滅浮殘日。
清渟つて早霜を得、明滅びて殘日を浮ぶ。

流注隨地勢。窪坳無定質。
流注地勢に隨ひ、窪坳定質無し。

泓澄白龍臥。宛轉青蛇屈。
泓澄として白龍臥し、宛轉として青蛇屈す。

破鏡折劍頭。光芒又非一。
破鏡劍頭を折り、光芒又一に非ず。

久爲山水客。見盡幽奇物。
久しく山水の客と爲り、見盡す幽奇の物。

及來湖亭望。此狀難談悉。
湖亭に來りて望むに及び、此狀談じ悉し難し。

乃知天地間。勝事殊未畢。
乃ち知る天地の間、勝事殊に未だ畢きざるを。

【字解】【一】泬寥　空虛なる貌。【二】蕭瑟　さびしき貌。【三】窪坳　くぼみたる處。【四】泓澄　深く淸き貌。【五】宛轉　屈曲する貌。【六】勝事　すぐれた景色。

【題義】湖亭の上から夕方涸あがつた殘水を望見して作つた詩である。

【詩意】湖のほとりは秋色が淸く、夕方は殊に物淋しい。亭に登つて湖を眺望すると水が乾て底が現れてゐる。淸く流の停つてゐる所は霜が降つたやうで、光の消滅してゐる所は殘日を浮べたやうで、地勢に隨つて曲折し、或は窪く或は高くなつてゐる。深く澄んだ處は白龍の臥すが如く、宛轉として ゐる處は青蛇の屈するが如く、或は鏡の破れ劍の折れたるが如く、その光が樣樣である。自分は久しく山水の間に住んで珍らしい景色も見盡したが、今この湖亭から眺めた景色は千樣萬態で一一述べ盡

すことは出來ない。以て天地間の奇勝は窮りなく多いことがわかる。

郭虚舟相訪

郭虚舟相訪ふ

朝暖就南軒。暮寒歸後屋。　朝暖かにして南軒に就き、暮寒くして後屋に歸る。

晩酌一兩盃。夜棊三數局。　晩酌一兩盃、夜棊三數局。

寒灰埋暗火。曉焰凝殘燭。　寒灰暗火を埋め、曉焰殘燭を凝らす。

不嫌貧冷人。時來同一宿。　貧冷の人を嫌はず、時に來りて一宿を同じうす。

【題義】郭虚舟の來り訪ひ、遂に一宿したことを述べた詩である。

【詩意】朝は日當りのよい南の軒に往き、日が暮れて寒くなれば後の家に歸り、晩酌を倶にして二三番棊を鬪はし、火を埋めて寢に就き、夜が明けても尙ほ燈がついてゐる。貧賤の人でも敢て厭はないので、時時來ては宿つて往く。

白樂天詩集 卷八

閑適四　古詩調凡二十七首

長慶二年七月自中書舍人出守杭州路次藍溪作　自此後詩、倶赴杭州時作

長慶二年七月、中書舍人より出されて杭州に守たり、路藍溪に次りて作る

(一)太原一男子。自顧庸且鄙。　太原の一男子、自ら顧みるに庸にして且つ鄙なり。

老逢(二)不次恩。洗拔出(三)泥滓。　老いて不次の恩に逢ひ、洗拔せられて泥滓を出づ。

既居(四)可言地。願助朝廷(五)理。　既に言ふ可きの地に居る、朝廷の理を助けんことを願ふ。

伏(六)閤三上章。(七)戇愚不稱旨。　閤に伏して三たび章を上れども、戇愚にして旨に稱はず。

(八)聖人存大體。優(九)貸容不死。　聖人大體を存す、優貸して不死を容す。

（一〇）鳳詔停舍人。（一一）魚書除刺史。
（一二）冥懷齊寵辱。（一三）委順隨行止。
我自得此心。于茲十年矣。
（一四）餘杭乃名郡。郡郭臨江汜。（一五）
已想海門山。潮聲來入耳。
昔予貞元末。（一六）羈旅曾遊此。
甚覺太守尊。（一七）亦諳魚酒美。
因生江海興。每羨滄浪水。（一八）
尙擬拂衣行。況今兼祿仕。
靑山峰巒接。白日煙塵起。
東道既不通。改轅遂南指。
自秦窮楚越。浩蕩五千里。（一九）
聞有賢主人。而多好山水。

鳳詔舍人を停め、魚書刺史に除す。
冥懷寵辱を齊うし、順に委して行止に隨ふ。
我此心を得てより、茲に十年なり。
餘杭は乃ち名郡、郡郭江汜に臨む。
已に想ふ海門の山、潮聲來りて耳に入るを。
昔予貞元の末、羈旅して曾て此に遊ぶ。
甚だ太守の尊きを覺え、亦魚酒の美を諳んず。
因て江海の興を生じ、每に滄浪の水を羨む。
尙衣を拂うて行かんと擬す、況んや今祿仕を兼ぬるをや。
靑山峰巒接し、白日煙塵起る。
東道既に通せず、轅を改めて遂に南指す。
秦より楚越を窮め、浩蕩五千里。
聞く賢主人有り、而して好山水多しと。

是行頗爲愜。所歷良可紀。
策馬渡藍溪。勝遊從此始。

是行頗る愜ふを爲す、歷る所良に紀す可し。
馬に策つて藍溪を渡り、勝遊此より始まる。

【字解】【一】太原一男子　白樂天自ら謂ふ。樂天は太原の人である。【二】不次　順序に因らない。【三】泥滓　泥土。【四】可言地　天子を諫める地位。中書舍人になつたこと。【五】理　治なり。【六】閤　宮門なり。【七】戇愚　馬鹿正直。【八】聖人　聖天子。【九】優貸　罪をゆるすこと。【一〇】鳳詔　天子の詔。舍人は中書舍人。【一一】魚書　魚符なり。策書なり。刺史は州の長官。除は任命すること。【一二】冥懷　晴昧の心。【一三】委順　運命に任せる。【一四】餘杭　浙江省杭州。【一五】江汜　川のほとり。【一六】羈旅　旅行。【一七】太守　刺史なり。【一八】滄浪　水の色なり。【一九】浩蕩　遙遠の貌。

【題義】長慶（穆宗の年號）二年七月、白樂天は中書舍人（長慶元年に、中書舍人知制誥に任ぜられた）から杭州刺史に轉任を命ぜられた。この詩は長安を出て杭州に往く時、藍溪（陝西省藍田縣の東南に在り。後の宿藍溪對月、參照）に宿つて作つた詩である。

【詩意】吾は自ら顧みるに庸愚鄙陋の身である。それにも拘らず老年になつて不次の恩遇を蒙り、諫官の顯職に陞つたので、朝政を裨補しようと志し、三たび上書して意見を陳べたけれども、愚直なので天子の御意に叶はなかつた。然し特別の御憐憫を垂れ給うて誅戮を加へられず、中書舍人を免じて杭州刺史に任ぜられた。吾はもと寵辱を同一視し運に任せて行止する修養を積み、此心を悟り得てから既に十年になるから、遠地に轉任を命ぜられても格別意に介しない。殊に杭州は名勝の地で城郭

が江濱に臨み、海門の山の潮聲が此處にゐても耳に聞えるやうに想はれる。（錢塘江の兩岸に龕・赭の二山があつて、南と北に相對峙すること門のやうである、潮汐が此二山に束ねられ勢極めて湍悍、萬馬の奔騰するが如くである。浙江の潮と稱して古來世に其名が高い。）嘗て貞元の末に、一度杭州に遊び刺史の權勢のあるのも知り、魚や酒のよいのも知つてゐる。因つて江海の興が起つて官を退いて行つて遊ばうかとまで思つたのに、今官職を帶びて其地に往くことになつたのは勿怪の幸と謂ふべきである。ただ東の方の道は峯巒が連續して居り、且つ戰亂も起つて通れないから、方向を轉じて南を指して進むことにした。この秦（長安）から楚越に至るには、五千里の里程があるが、聞けば行先には賢主人もあり好山水もあるさうであるから、此行は頗る吾が意を得たもので、到處紀すべきものも多いであらう。馬に鞭つて藍溪を渡れば愈形勝の地に踏み込むわけだ。

【餘論】唐宋詩醇に、中間舊遊一層を以て襯となし、波を推し、瀾を助け、曲折あるを致す。白文公年譜に云ふ、河朔復亂れ、居易數上疏して其事を論ず、天子用ふる能はず、遂に外任を求む。蓋し穆宗荒縱、宰相蕭俛、杜元穎、崔植等、皆齷齪遠略無し、宜なり公の朝に居るを樂まざるや。時に汴軍亂れて路通せず、故に襄漢より任に赴く、とある。

初出（一）城留別　　初めて城を出でて留別す

朝從紫禁（二）歸。暮出青門（三）去。　朝には紫禁より歸り、暮には青門を出でて去る。

勿言城東陌。便是江南路。　言ふ勿れ城東の陌と、便ち是れ江南の路。

揚鞭簇車馬。揮手辭親故（四）。　鞭を揚げて車馬簇り、手を揮ひて親故を辭す。

我生本無鄉。心安是歸處。　我生れて本鄕無し、心安きは是れ歸處。

【字解】【一】出城　長安の都を出る。留別とは後に留まる人に贈りて別るること。【二】紫禁　天子の宮殿。【三】青門　長安城の東南の門。【四】親故　親戚故舊。

【題義】初めて長安城を出でて親戚故舊に留別した詩である。

【詩意】朝宮城から歸つて其夕方青門を出て長安を去ることになつた。ここは城東の巷だと言つて平氣でもゐられない。これから江南の杭州に往く門出だから、何となく感慨が深い。見送りの車馬が澤山來た。因つて手を揮つて故舊に暇を告げる。よく考へて見れば自分は何處が故鄕と定まつた處はないのだから、氣樂な處が吾が落著くべき土地だ。杭州でも結構だ。

過駱山人野居小池　駱生棄官居此二十餘年　　駱山人が野居の小池に過る

茅覆環堵（一）亭。泉添方丈（二）沼。　茅は環堵の亭を覆ひ、泉は方丈の沼に添ふ。

紅芳照水荷。白頸觀魚鳥。　紅芳水を照す荷、白頸魚を觀る鳥。
拳石苔蒼翠。尺波煙杳眇。　拳石苔蒼翠、尺波煙杳眇。
但問有意無。勿論池大小。　但問ふ意有りや無や、池の大小を論ずる勿かれ。
門前車馬路。奔走無昏曉。　門前車馬の路、奔走昏曉無し。
名利驅人心。賢愚同擾擾。　名利人の心を驅り、賢愚同じく擾擾たり。
善哉駱處士。安置身心了。　善いかな駱處士、身心を安置し了る。
何乃獨多君。丘園居者少。　何ぞ乃ち獨り君を多とするのみならん。丘園居る者少「なればなり。

【字解】【一】環堵　禮記に、儒は一畝の宮、環堵の室ありとある。註に、堵は長さ一丈高さ一尺、而して一堵を環るを方丈となすとある。【二】方丈　一丈四方。【三】荷　蓮花。【四】拳石　拳ほどの石。【五】杳眇　小暗きさま。【六】昏曉　朝暮。【七】擾擾　紛紛に同じ、數多き貌。【八】丘園　隱居の地。

【題義】駱山人の隱居を訪うて作つた詩である。

【詩意】茅葺の小亭があつて、其前に泉が小池に流れ注いでゐる。紅の芳しい蓮花が池の水を照し、白い頸の鳥が魚を狙つてゐる。小石には綠の苔が蒸し、煙波が水面を罩めてゐる。池の大小は問題ではない。唯之を賞する人の意が問題なのである。門前には車馬を驅りて名利に奔走する者が朝から晩まで絕間がない。ただ駱處士は身心を安置して此處に隱居してゐる。實に見上げた態度である。余は唯獨り君の隱居を稱するばかりではない、世に隱居する者の少いのを嘆くのである。

宿清源寺

清源寺に宿す

往謫潯陽去。夜憩輞溪曲。　往に潯陽に謫せられて去るとき、夜輞溪の曲に憩ふ。
今爲錢塘行。重經茲寺宿。　今錢塘の行を爲し、重ねて茲寺を經て宿す。
爾來幾何歲。溪草二八綠。　爾來幾何歲ぞ、溪草二八の綠。
不見舊房僧。蒼然新樹木。　見ず舊房の僧、蒼然たり新樹の木。
虛空走日月。世界遷陵谷。　虛空日月を走らし、世界陵谷を遷す。
我生寄其間。孰能逃倚伏。　我が生其間に寄す、孰か能く倚伏を逃れん。
隨緣又南去。好住東廊竹。　緣に隨つて又南に去る、好住せよ東廊の竹。

【字解】【一】輞溪　輞谷ともいふ。陝西省藍田縣の西南に在り。王維の別莊の在りし處。淸源寺ここに在り。【二】錢塘　杭州なり。【三】新樹　新に植ゑた。【四】陵谷　山が變じて谷になる。【五】倚伏　禍福なり。卷七の逮理二首を見よ。【六】好住

偓在といふが如し。

【題義】 輞溪の清源寺に宿して作つた詩である。

【詩意】 先年潯陽（江州）に流されて往く時にも輞溪の清源寺に休憩したことがあつたが、今度杭州へ赴任するに方り、重ねて此寺に宿ることになつた。あの時からでは最早十六年を經てゐるから、嘗てゐた僧などは見えず、新しく植ゑた木が蒼然と茂つてゐる。月日は休みなしに走り、世は陵谷の變を續けてゐる。其間に生を享けた我も禍福の推移を免れない。されば緣に隨つて南方の杭州に往くことになつた。東廊の竹よ無事でゐろよ。緣あらば又逢はうせ。

宿藍溪對月

藍溪に宿し月に對す

昨夜鳳池頭。今夜藍溪口。　昨夜鳳池の頭、今夜藍溪の口。

明月本無心。行人自回首。　明月本心無し、行人自ら首を回らす。

新秋松影下。半夜鐘聲後。　新秋松影の下、半夜鐘聲の後。

清影不宜昏。聊將茶代酒。　清影宜しく昏すべからず、聊か茶を將つて酒に代ふ。

【字解】 【一】鳳池　鳳凰池の畧。禁苑中の池沼。中書省の在る處。【二】藍溪　一に藍橋に作る。【三】行人　旅立つ人。樂天自ら謂ふ。

【題義】 藍溪に宿し月に對して作つた詩である。この詩は文苑英華には宿藍橋題月と題してある。藍橋は陝西省藍田縣の東南に在る。蓋し藍水の上に架けてある橋だから藍橋といふのであらう。

【詩意】 昨夜は宮中の鳳凰池の畔で此月を見たが、今夜は藍溪の口で見る。月には何の心もないが、旅に出る身は感慨のあまり自然と仰ぎ見るやうになる。殊に秋夜の松の下、夜半の鐘の後に於て最も懷かしさを感ずる。月の清光は酒を勸めて之を濆すのは宜しくないから、酒の代りに茶を勸める。

自望秦赴五松驛馬上偶睡睡覺成吟

望秦より五松驛に赴く、馬上偶睡る、睡覺めて吟を成す

長途發已久。前館行未至。　長途發すること已に久し、前館行いて未だ至らず。

體倦目已昏。瞌然遂成睡。　體倦みて目已に昏く、瞌然として遂に睡を成す。

右袂尙垂鞭。左手暫委轡。　右袂尙ほ鞭を垂れ、左手暫く轡を委ぬ。

忽覺問僕夫。纔行百步地。　忽ち覺めて僕夫に問へば、纔に行く百步の地。

形神分處所。遲速相乖異。　形神處所を分つ、遲速相乖異す。

馬上幾多時。夢中無限事。　馬上幾多時ぞ、夢中限無き事。

誠哉達(三)人語。百齡同一寐。　誠なる哉達人の語、百齡一寐に同じ。

【字解】【一】望秦　地名であらう。全唐詩には秦望に作る。【二】睡然　疲れて眠る貌。【三】達人　道理に通じた人。

【題義】望秦から五松驛に赴く間に、馬に乘つてゐて、うとうとと睡つたが、その睡から覺めて作つた詩である。

【詩意】長途に向つて出發してから大分久しくなるが、まだ目的とする宿まで行き著けない。つい體が疲れて馬の上で睡つた。右の袖の所に鞭が下つて左手に暫く手綱を任せてある。驚き覺めて馬丁に問へば、僅に百歩ばかり進んだだけだといふ。身心の分明なると否とで、かくの如く遲速が異るのである。馬上に睡つたのは僅の時間であるが、その間に色色な夢を見た。達人の言葉に百年の齡も一睡に同じだとあるが、實に其通りである。

(一)鄧州路中作

鄧州路中の作

(二)蕭蕭誰家村。秋梨葉半赤。　蕭蕭たり誰が家の村ぞ、秋梨葉半赤し。

(三)漠漠誰家園。(四)秋韮花初白。　漠漠たり誰が家の園ぞ、秋韮花初めて白し。

路逢故里物。使我嗟(五)行役。　路に故里の物に逢ひ、我をして行役を嗟かしむ。

不歸(六)渭北村。又作江南客。　渭北の村に歸らず、又江南の客と作る。

去鄉徒自苦。濟世終無益。　鄉を去り徒に自ら苦む、世を濟ふ終に益無し。

自問波上萍。何如澗中石。　自ら問ふ波上の萍、何ぞ澗中の石に如かん。

【字解】【一】鄧州　河南省南陽府。【二】蕭蕭　風の聲。誰家は何處なり。【三】漠漠　布列の貌。【四】秋韮　韮はニラ。【五】行役　旅に出て役勤めする。【六】渭北村　渭水の北の村。長安の附近に在り、樂天は嘗て此に住んだ。

【題義】鄧州の道中で作つた詩である。

【詩意】何處の村か知らぬが秋風が吹いて梨の花が半色づいてゐる。又誰の園か知らぬが韮の花が眞白に咲き亂れてゐる。途中で故里の物を見ると、旅に出てゐる我が身が悲しくなる。況んや渭北の村に歸るのではなく、遠い江南の杭州へ行くのだから。世を濟ふ志も成らずに故鄉を去つて難儀する我が身は波に漂ふ萍のやうだ。谷川の石の一處に安住してゐるのに劣ること萬萬である。

朱藤杖紫騘馬吟　朱藤杖紫騘馬吟

拄上山之上。　拄へて山の上に上り、
騎下山之下。　騎りて山の下に下る。
江州去日朱藤杖。　江州より去りし日の朱藤杖、
(一)忠州歸時紫騘馬。　忠州より歸る時の紫騘馬。
天生二物濟我窮。　天二物を生じて我が窮を濟ふ、
我生合是棲棲者。(二)　我が生は合に是れ棲棲たる者なるべし。

【字解】〔一〕忠州　樂天は元和十三年に忠州刺史に任ぜられ、江州を去つて忠州（今の四川省東川道忠縣）に赴任した。〔二〕棲棲者　東奔西走して忙しき人。論語に、微生畝謂孔子曰、丘何爲是棲棲者與云云とある。

【題義】杖と馬とに就ての感想を述べた詩である。

【詩意】一は吾が身を拄へて山に登り、一は吾が身を乘せて山を下る。一は江州を去る時の記念の杖で、一は忠州から歸る時の記念の馬である。天は此二物を作つて我が窮を救ふのである。我は東西に奔走して安住の地を得ない者であるから。

桐樹館重題　桐樹館に重ねて題す

堦前下馬時。　堦前馬を下る時、
梁上題詩處。　梁上詩を題する處。
(一)慘淡病使君。　慘淡たり病使君、
(二)蕭疎老松樹。　蕭疎たり老松樹。
自嗟還自哂。　自ら嗟き還た自ら哂ふ、
又向杭州去。　又杭州に向つて去ることを。

【字解】〔一〕慘淡　痛ましき貌。使君は刺史の稱。病使君とは樂天自ら謂ふなり。〔二〕蕭疎　さびしくまばらなこと。

【題義】嘗て桐樹館に詩を題したことがあつて、今度杭州刺史として赴任する途すがら又此に休憩したので、更に詩を題したのである。

【詩意】桐樹館の堦段の前で馬から下り、梁上に詩を題した。痛ましいさまなる病刺史殿が、疎に淋しく立つてゐる老松に對し、深く感慨に打たれ、又杭州に向つて去ることを自ら嗟き又自ら嘲笑した。

過紫霞蘭若(一)　紫霞の蘭若に過る

我愛此山頭。及此三登歷。　我此山頭を愛し、此に及んで三たび登歷す。
紫霞舊精舍。寥落空泉石。(二)　紫霞の舊精舍、寥落たる空泉石。

朝市日喧隘(三)。雲林長悄寂。　朝市は日に喧隘、雲林は長く悄寂。
猶存(四)住寺僧。肯有歸山客。　猶ほ存す住寺の僧、肯て山に歸る客有り。

【字解】【一】紫霞　山の名か。精舍は寺院。【二】寥落　荒れ果てた貌。【三】喧隘　こみあひてうるさきこと。【四】存　存問なり。

【題義】紫霞山の寺院に過りて作つた詩である。

【詩意】我は此山を愛して今日まで既に三回登つた。寺院は古び、泉石は荒れ、都會は騒がしいが山寺はいつ來て見ても靜でよい。住寺の僧に挨拶して、俺も山寺に歸つて來たぞよと冗談を言つて見た。

感舊紗帽　帽即故李侍御所贈　　舊紗帽に感ず

昔君烏紗(一)帽。贈我白頭翁。　昔君が烏紗の帽、我が白頭の翁に贈る。
帽今在頂(二)上。君已歸泉(三)中。　帽は今頂上に在り、君は已に泉中に歸る。
物故猶堪用。人亡不可逢。　物は故りて猶ほ用ふるに堪へたり、人は亡すれば逢ふ可からず。
岐(四)山今夜月。墳(五)樹正秋風。　岐山今夜の月、墳樹正に秋風。

【字解】【一】烏紗帽　黒い紗で作つた帽子。【二】頂上　頭の上。【三】泉中　黄泉。地下。【四】岐山　山の名。【五】墳樹　墓の木。

【題義】亡友李侍御から貰つた古帽子に感じて作つた詩である。

【詩意】昔君は黒い紗の帽子を此白頭翁なる我にくれた。その帽子は今尚吾が頭上に在るが、君は既に地下の人になつてしまつた。物は古くなつても役に立つが、人は死ぬと再び逢ふことは出來ない。今夜岐山の上に輝く明月が秋風に吹かれる墓上の樹を淋しく照してゐる。

思竹窗　　竹窓を思ふ

不憶西(一)省松。不憶南(二)宮菊。　西省の松を憶はず、南宮の菊を憶はず。
惟憶新(三)昌堂。蕭(四)蕭北窗竹。　惟だ憶ふ新昌の堂、蕭蕭たる北窓の竹。
窗間枕(五)簟在。來後何人宿。　窓間枕簟在り、來後何人か宿する。

【字解】【一】西省　自註に、西省大院有松とある。【二】南宮　自註に、南宮本廳有菊とある。【三】新昌　今の浙江省紹興府新昌縣。【四】蕭蕭　風の聲。【五】枕簟　簟は竹で編んだムシロ。

【題義】新昌縣の竹窓を思うて作つた詩である。

【詩意】西省の松や南宮の菊は格別思ひ出さないが、新昌縣の北窓の竹だけは、よく思ひ出す。あの窓の下の枕簟には、僕の來た後、何人が宿つたであらうか。

馬上作

馬上の作

處世非不遇。榮身頗有餘。　世に處して遇はざるに非ず、身を榮する頗る餘有り。
勳爲上柱國。爵乃朝大夫。　勳は上柱國と爲り、爵は乃ち朝大夫。
自問有何才。兩入承明廬（一）。　自ら問ふ何の才か有りて、兩び承明廬に入る。
又問有何政。再駕朱輪車（二）。　又問ふ何の政か有りて、再び朱輪の車に駕する。
矧予東山人。自惟朴且疎。　矧んや予は東山の人、自ら惟ふに朴にして且つ疎なり。
彈琴復有酒。但慕嵇阮（三）徒。　琴を彈じて復た酒有り、但嵇阮が徒を慕ふ。
闇被鄉里薦。誤上賢能書。　闇に鄉里に薦められ、誤りて賢能の書を上る。
一列朝士籍。遂爲世網拘。　一たび朝士の籍に列り、遂に世網に拘せらる。
高有罾繳（四）憂。下有陷穽（五）虞。　高きは罾繳の憂有り、下きは陷穽の虞り有り。

毎覺宇宙窄。未嘗心體舒。　毎に覺ゆ宇宙の窄きを、未だ嘗て心體舒かならず。
蹉跎（六）二十年。頷下生白鬚。　蹉跎たること二十年、頷下白鬚を生ず。
何言左遷去。尚獲專城居（七）。　何ぞ言はん左遷し去ると、尚ほ專城の居を獲たり。
杭州五千里。往若投淵魚。　杭州五千里、往いて淵に投ずる魚の若し。
雖未脫簪組（八）。且來泛江湖。　未だ簪組を脫せずと雖も、且つ來りて江湖に泛ぶ。
吳中多詩人。亦不少酒沽（九）。　吳中に詩人多く、亦酒沽少からず。
高聲詠篇什（一〇）。大笑飛杯盂。　高聲に篇什を詠じ、大に笑つて杯盂を飛ばす。
五十未全老。尚可且歡娛。　五十未だ全く老いず、尚ほ且く歡娛す可し。
用茲送日月。君以爲何如。　茲を用つて日月を送る、君以て何如と爲す。
秋風起江上。白日落路隅。　秋風江上に起り、白日路隅に落つ。
回首語五馬（一一）。去矣勿踟躕（一二）。　首を回らして五馬に語ぐ、去れ踟躕すること勿かれ。

【字解】【一】承明廬　漢代侍從の臣の居る所。【二】朱輪車　貴人の乘る車。【三】嵇阮　嵇康。阮籍。竝に三國魏の酒徒。【四】罾繳　あみ、いぐるみ。【五】陷穽　おとしあな。【六】蹉跎　つまづくこと。【七】專城居　地方長官の位。【八】簪組　簪は冠をとめるカンザシ。組は印綬。官職に喩ふ。【九】酒沽　賣る酒。【一〇】篇什　詩篇。【一一】五馬　太守の馬をいふ。【一二】

踟蹰　躊躇なり。

【題義】馬上で作り自己の感慨を述べた詩である。

【詩意】自分は世を渉るに於て決して不遇ではない。寧ろ身に餘る光榮を荷つた。勳等は上柱國となり位階は朝大夫となり、何の才もないのに再び侍從の臣となり、何の政績もなくて再び朱輪車に乘つた。是れ皆以て光榮となすに足るものである。況んや自分はもと東山の野人で、唯琴と酒とを好むの外何の取柄もないのが、誤つて鄕里から推薦せられて進士の試驗に及第し、朝士の列に加へられて世間の煩累に拘束せられることとなり、進んでは人の讒謗を憂へ、退いては人の構陷を慮り、天地の窮屈さを感じて、一刻も心のゆるまることがなかつた。かくて齷齪として二十餘年を送り、頷の下に白い鬚が生えるやうになつた。今度杭州刺史に任せられたが、地方長官たる位を得たのであるから、決して左遷などと言ふべきではない。因つて喜んで五千里外の杭州へ行くこと、淵に赴く魚のやうである。これからは全く官職の覊を脫したわけではないが、江湖に泛んで暢暢とすることが出來る。且つ吳中（杭州は古の吳の地である）には詩人も多く酒も豐富にあるから、高聲に詩を吟じ大笑して杯盤を飛ばすことも出來る。五十といふ年齡はまだそれほど老衰してはゐない、まだまだ樂みもある。まア詩と酒とを以て月日を送らう。諸君は吾が言を聽いて如何に思はるるか。定めて是認せらるるであらう。今や秋風が江上に起り夕日が路隅に傾いた。さア馬よ、躊躇せずと杭州を指して進み去らぬか。

秋蝶

秋花紫蒙蒙。秋蝶黃茸茸。　秋花紫にして蒙蒙、秋蝶黃にして茸茸たり。
花低蝶新小。飛戲叢西東。　花低れて蝶新小、飛び戲る叢の西東。
日暮涼風來。紛紛花落叢。　日暮れて涼風來り、紛紛として花叢に落つ。
夜深白露冷。蝶已死叢中。　夜深けて白露冷かに、蝶已に叢中に死す。
朝生夕俱死。氣類各相從。　朝に生じ夕に俱に死す、氣類各相從ふ。
不見千年鶴。多棲百丈松。　見ずや千年の鶴、多く百丈の松に棲むを。

【字解】〔一〕蒙蒙　盛なる貌。〔二〕茸茸　散亂する貌。

【題義】秋の蝶が花の萎むと共に死するのを見て、羽振のよい人に媚びて名利を求むる者の最後を諷した詩である。

【詩意】秋の花が紫に咲き亂れてゐる。黃色の蝶が花を目がけて羣り集る。日が暮れて涼風が吹く

と、花が紛紛と散り落ちる。夜が深けて白露が降ると蝶も死んでしまふ。花と蝶とは同氣相求むる仲間で、朝に同じく生れて夕に倶に死する。此とは反對に、かの千年の齡を保つ鶴は多く百丈の松に身を寄せる。花のやうな輕薄なものには決して身を寄せない。

登商山最高頂　商山の最高頂に登る

高高此山頂。四望唯煙雲。　高高たり此山頂、四望唯煙雲。
下有一條路。通達楚與秦。　下に一條の路有り、楚と秦とに通達す
或名誘其心。或利牽其身。　或は名其心を誘ひ、或は利其身を牽く。
乘者與負者。來去何紛紜。　乘る者と負ふ者と、來去何ぞ紛紜たる。
我亦斯人徒。未能出囂塵。　我も亦斯人の徒、未だ囂塵を出づる能はず。
七年三往復。何得笑他人。　七年に三たび往復す、何ぞ他人を笑ふことを得ん。

【字解】【一】紛紜　多き貌。【二】囂塵　俗世間。

【題義】商山の頂に登つて感ずる所を述べた詩である。

【詩意】此山の上から四方を見れば、すべて雲煙濛濛としてゐる。下に一筋の道があつて秦と楚とに通じてゐる。世間の人は名利に牽かれて、駕籠に乘る者もあれば其駕籠を舁く者もあり、往來が極めて頻繁である。かく申す僕も亦同類で、未だ全く塵世を脱却しきれず、七年の間に三度此道を往復した。他人を笑ふ資格はない。

枯桑　枯桑

道傍老枯樹。枯來非一朝。　道傍の老枯樹、枯れ來ること一朝に非ず。
皮黃外尙活。心黑中先焦。　皮は黃にして外尙ほ活し、心は黑くして中先づ焦す。
有似多憂者。非因外火燒。　多憂の者に似たる有り、外火に因つて燒くるに非ず。

【題義】枯桑を見て感ずる所を述べた詩である。

【詩意】道の傍に枯れた桑の樹がある。昨日今日枯れたのではないらしい。皮は黃色で外から見れば活きてゐるやうだが、心は黑焦になつてゐる。名利の爲に憂ふる人も此と同じだ。外界の傷害に由るのではなくて、己の慾念の爲に自ら害するのである。

山路偶興

山路の偶興

筋力未全衰。僕馬不至弱。　筋力未だ全く衰へず、僕馬至つて弱からず。

又多山水趣。心賞非寂寞。　又山水の趣多く、心賞寂寞に非ず。

捫蘿上煙嶺。躡石穿雲壑。　蘿を捫つて煙嶺に上り、石を躡んで雲壑を穿つ。

谷鳥晩仍啼。洞花秋不落。　谷鳥晩に仍ほ啼き、洞花秋にも落ちず。

提籠復攜榼。遇勝時停泊。　籠を提げ復た榼を攜へ、勝に遇うて時に停泊す。

泉憩茶數甌。嵐行酒一酌。　泉に憩ふ茶數甌、嵐に行く酒一酌。

獨吟還獨嘯。此興殊未惡。　獨り吟じ還獨り嘯く、此興殊に未だ惡からず。

假使在城時。終年有何樂。　假使城に在る時も、終年何の樂有らん。

【字解】〔一〕僕馬　召使及び馬。〔二〕榼　酒樽。〔三〕勝　よい景色。〔四〕數甌　數椀。〔五〕城　長安を指す。

【題義】山路を通る時に偶然感じた興味を述べた詩である。

【詩意】吾が體力は未だ全く衰へず、召使や馬もさほど弱くはない。又山水の趣もあつて心の寂寞を慰めることも出來る。蘿を攀ぢて煙罩めたる嶺に上り、石を躡んで雲深き壑を通り、谷に啼く鳥の聲を聽き、秋にも落ちない花の色を賞し、籠と樽とを携へて、よい景色に遇へば宿泊し、泉の所では數椀の茶を飲み、嵐の前には一酌して勇氣をつけ、獨りで吟嘯するのも決して惡くはない。たとひ長安の都に在るとも、一年中何の樂みもない。それよりも山路の旅の方が遙に勝つてゐる。

山雉

山雉

五步一啄草。十步一飲水。　五步に一たび草を啄み、十步に一たび水を飲む。

適性遂其生。時哉山梁雉。　性に適うて其生を遂ぐ、時なる哉山梁の雉。

梁上無罾繳。梁下無鷹鸇。　梁上に罾繳無く、梁下に鷹鸇無し。

雌雄與羣雛。皆得終天年。　雌雄と羣雛と、皆天年を終ふることを得ん。

嗟嗟籠下雞。及彼池中鴈。　嗟嗟籠下の雞、及び彼の池中の鴈。

既有稻粱恩。必有犧牲患。　既に稻粱の恩有れば、必ず犧牲の患有り。

【字解】〔一〕時哉山梁雉　論語に、山梁雌雉、時哉時哉とある。時哉は時を得たるを賛するなり。山梁は山路に架けた橋。〔二〕罾繳　網や、いぐるみ。

【題義】 山中の雉の呑氣なことを羨んだ詩である。

【詩意】 五歩あるいては草を啄み、十歩あるいては水を飲み、氣の向くままにして生を送る山梁の雉は、時を得たものである。橋の上には網も矢もなく、橋の下には鷹もゐないから、雌も雄も雛も皆揃つて天年を全うすることが出來る。此に反して籠の中に飼はれてゐる雞や池の中に飼はれてゐる雁は、人の稻粱の恩を受けて生きてゐるから、いつかは其人の犧牲にならなければならない。

初下漢江舟中作。寄兩省給舍。

初めて漢江を下る舟中の作、兩省の給舍に寄す

秋水漸紅粒。朝煙烹白鱗。　秋水紅粒を漸し、朝煙白鱗を烹る。
一食飽至夜。一臥安達晨。　一食飽いて夜に至り、一臥安くして晨に達る。
晨無朝謁勞。夜無直宿勤。　晨に朝謁の勞無く、夜は直宿の勤無し。
不知兩掖客。何似扁舟人。　知らず兩掖の客、何ぞ扁舟の人に似ん。
倘想到郡日。且稱守土臣。　倘ほ想ふ郡に到る日、且つ稱す土を守る臣と。
猶須副憂寄。恤隱安疲民。　猶ほ須く憂寄に副ひ、恤隱して疲民を安んずべし。
朞年庶報政。三年當退身。　朞年庶はくは政を報じ、三年當に身を退くべし。
終使滄浪水。濯吾纓上塵。　終に滄浪の水をして、吾が纓上の塵を濯はしめん。

【字解】 【一】漢江　川の名。漢水ともいふ、北より南に流れ漢口の所で長江に入る。【二】兩省　門下省と中書省。白樂天は嘗て左拾遺となり門下省に屬し、後中書舍人となり中書省に屬した。給舍は給事中と中書舍人。【三】漸紅粒　米をとぐこと。【四】白鱗　白い魚。【五】朝謁　參朝して天子に拜謁すること。【六】直宿　宿直に同じ。【七】兩掖　兩省に同じ。宮殿の左右の傍垣に在るを以てかくいふ。【八】扁舟　小舟。扁舟人とは樂天自ら謂ふ。【九】到郡　杭州に到る。【一〇】憂寄　天子の寄託。【一一】恤隱　めぐみ、いたむ。【一二】朞年　滿一周年。【一三】滄浪水　漢水の別名。孟子に、滄浪之水淸兮、可以濯我纓とある。【一四】纓上塵　冠の紐の塵。

【題義】 漢水を下る時舟の中で作り、門下・中書二省の給事中・中書舍人たる人人に寄せた詩である。

【詩意】 川の水で米をといで飯を炊き、川の白い魚を烹てたべ、飽くまで食ひ安らかに眠り、朝謁や宿直の勤勞もない。兩省に奉仕する諸君は、恐らく舟中の我のやうに呑氣なわけには行くまい。更に杭州に到著すれば、土を守るの臣と稱して威張つてゐられるのであるから、聖天子の寄託に副ひ疲民を救ふことを務め、一年の後には相當の治績を擧げて天子に報告し、三年の後には首尾よく引退し、滄浪の水で冠の紐の塵を濯ひたいものだ。

自蜀江至洞庭湖口有感而作

蜀江より洞庭湖の口に至り、感有りて作る

江從西南來。浩浩（一）無旦夕。　江は西南より來り、浩浩として旦夕無し。
長波逐若瀉。連山鑿如劈。　長波逐うて瀉ぐが若く、連山鑿ちて劈くが如し。
千年不壅潰（二）。萬姓無墊溺（三）。　千年壅潰せず、萬姓墊溺無し。
不爾民爲魚。大哉禹之績。　爾の民を魚と爲さす、大なる哉禹の績。
導岷（四）既艱遠。距海（五）無咫尺。　岷を導く既に艱遠なり、海に距る咫尺無し。
胡爲不訖功。湖水斯委積。　胡爲ぞ功を訖へず、湖水斯に委積する。
洞庭與青草（六）。大小兩相敵。　洞庭と青草と、大小兩ながら相敵ふ。
混合萬丈深。淼茫千里白。　混合して萬丈深く、淼茫として千里白し。
每歲秋夏時。浩大吞七澤（七）。　每歲秋夏の時、浩大にして七澤を吞む。
水族窟穴多。農人土地窄。　水族窟穴多く、農人土地窄し。
我今尚嗟歎。禹豈不愛惜。　我今尙ほ嗟歎す、禹豈に愛惜せざらんや。
邈未究其由。想古觀遺跡。　邈として未だ其由を究めず、古を想うて遺跡を觀る。
疑此苗人（八）頑。恃嶮不終役。　疑ふ此苗人の頑、嶮を恃みて役を終へす。
帝亦無奈何。留患與今昔。　帝も亦奈何ともする無し、患を留めて今昔に與ふ。
水流天地內。如身有血脈。　水の天地の內に流るるは、身に血脈有るが如し。
滯則爲疽疣（九）。治之在鍼石。　滯れば則ち疽疣と爲る、之を治むること鍼石に在り。
安得禹復生。爲唐水官伯。　安んぞ得ん禹復た生れ、唐の水官の伯と爲り、
手提倚天劍（一〇）。重來親指畫（一一）。　手に倚天の劍を提げ、重ねて來りて親しく指畫し、
疏河似剪紙。決壅如裂帛。　河を疏すること紙を剪るに似、壅を決すること帛を裂くが如く、
滲作膏腴（一二）田。蹋平魚鼈宅。　滲して膏腴の田と作し、蹋みて魚鼈の宅を平にし、
龍宮變閭里。水府生禾麥。　龍宮閭里に變じ、水府禾麥を生じ、
坐添百萬戶。書我司徒（一三）籍。　坐ながら百萬の戶を添へ、我が司徒の籍に書せん。

【字解】【一】浩浩　廣大なる貌。【二】壅潰　ふさがりついゆ。【三】萬姓　百姓なり。墊溺は、おぼれること。【四】導岷　書經の禹貢篇に、岷山導江とある。【五】距海　書經の益稷篇に、予決九川距四海とある。【六】青草　湖名。湖南省湘陰縣の北百里に在り、南は湘水に接し、北は洞庭湖に通ず。【七】七澤　司馬相如の賦に、臣聞楚有七澤云云とある。【八】苗人　南方の蠻族。【九】疽疣　はれもの。いぼ。【一〇】倚天劍　劍の名。【一一】指畫　指圖する。【一二】膏腴　肥沃なり。【一三】司徒　官名。

【題義】長江を下つて洞庭湖の口に至り大禹疏鑿の功を思ひ感ずる所あつて此詩を作つたのである。

【詩意】長江は西南より來り、朝から晩まで休みなく、連山の間を劈いて瀉ぐが如く浩浩と流れてゐる。千年の間塞がることも潰ゆることもなく、百姓が溺沒の患を免れたのは、禹の治水の功績に由るのである。禹は遠く艱難を冒して岷山から長江を導き海に至るまで水路を通じたのに、なせ其功を終へずして湖水に水を蓄へるやうにしたのであらうか。而も洞庭と青草と孰れ劣らぬ二大湖を置き、深さも深く廣さも廣く、毎年夏から秋にかけて、其水が溢れ出し、魚類が山窟に住み、耕地が狹められる。我が今日尙ほ嗟嘆するくらゐだから、禹も定めて遺憾に思つたであらう。併し太古は邈として今其由を知ることは出來ない。ただ遺跡を觀て古を想ふに過ぎない。多分この地方にゐた苗人が頑固で、嶮を恃んで禹の命に從はないので、流石の大禹も奈何ともすることが出來ないで、今日まで患害を留むるに至つたのであらう。水が天地の内に流れるのは、人の身體に血脈があるのと同じで、それが停滯すれば病氣になるから、鍼石を以て之を療治しなければならない。願はくは禹が再び此世に生れて來て、唐の治水の長官となり、河を決すること紙を剪るが如く、壅を通すること帛を裂くが如く、蹋んで魚鼈の居を平げ、潤して肥沃の田地となし、龍宮や水府を陸地となして禾黍を種ゑ、我が唐の領土を殖すやうにあらしめたいものだ。

【餘論】唐宋詩醇に、「議論奇闢、筆力亦渾勁、題と相稱ふ。集中此種絕だ少し。頗る昌黎(韓愈)に近し。其源亦杜甫の劍門の一篇より脫胎す」と評してある。又甌北詩話に、「香山(白樂天)に洞庭湖を過ぐる詩あり。謂へらく、大禹水を治む。何ぞ盡く諸水を驅りて直に之を海に注がずして此大浸(大湖)を留めて湖南千里の地を占むる。若し水を去つて陸と作さば、又數百萬の生靈を活し司徒の籍に增入すべし。豈に禹の時苗頑にして命を用ひず、遂に此役を興す能はざりしかと。此れ書生の見、好んで議論をなして行ふべからざる者なり。萬山の水、奔騰して下る。其中途必ず停瀦の處あり、始めて衝溢して患をなさず。江西の鄱陽あり、江南の巢湖、洪澤湖、太湖あり、時に隨つて容納し以て其勢を緩うす。故に害をなすこと較少し。黃河の水は地の停蓄するなし。遂に歲歲患をなす。若し蜀江をして峽を出でて後卽ち衆水を挾み直に東海に趨らしめば、其間吳楚經由の地、橫溢衝決、將に更に黃河より甚しき者あらんとす。香山ただ議を發し以て其詩才を騁せて有識に笑はれんことを知らざり」と論じてゐるのは、治水論としては兎も角も、詩を論ずる言としては稍拘泥に過ぎる。

初領㆑郡。政衙退。登㆓東樓㆒作　自㆑此後詩到㆓杭州㆒後作

初めて郡を領し、政衙より退き、東樓に登りて作る

(一)鰥惸心所㆑念。(二)簡牘手自操。　鰥惸心に念ふ所、簡牘手自ら操る。

何言(三)符竹貴。未免州縣勞。　何ぞ符竹の貴きを言はん、未だ州縣の勞を免れず。
頼是餘杭郡。(四)臺榭遶官曹。　頼に是れ餘杭郡、臺榭官曹を遶る。
淩晨親政事。向晩恣遊遨。　晨を淩いで政事を親らし、晩に向つて遊遨を恣にす。
山冷微有雪。波平未生濤。　山冷にして微く雪有り、波平にして未だ濤を生せず。
水心如鏡面。千里無(五)纖毫。　水心鏡面の如く、千里纖毫無し。
直下江最闊。近東樓更高。　直下江最も闊く、近東樓更に高し。
(六)煩襟與滯念。一望皆遁逃。　煩襟と滯念と、一望すれば皆遁逃す。

【字解】【一】鰥惸　よるべなき孤獨の人。【二】簿牘　役所の文書。【三】符竹　わりふ。符を剖いて命を下す。因つて詔命か符竹といふ。【四】臺榭　樓閣といふが如し。官曹は役所。【五】纖毫　すこしの汚れ。【六】煩襟　煩悶。

【題義】初めて餘杭郡（卽ち浙江省杭州府）に到りて刺史の職を領し、郡の役所から退出して東樓に登つて作つた詩である。此から後の詩は杭州に到著してから後の作である。

【詩意】鰥寡孤獨の民には特に哀憐を加へ、文書は必ず自ら取調べて敢て部下に任せない。身は地方官たるを免れないのだから、詔命を蒙つたからとて己の尊貴に誇るやうなことはしない。幸なことには餘杭郡には役所の附近に樓閣が多いので、朝役所に出て事務を執れば、夕方は其處に往つて遊ぶことが出來る。今この東樓から眺めると、山は寒げに見えて少しく雪が積り、川は穩に流れて荒濤も立たず、鏡の如く澄んで千里纖塵を留めない。殊に此樓の下は最も川幅の廣い所で、又此樓は役所の東方の最も近い處に在る。この樓に登つて一望すれば煩悶も何も忽ち一掃されてしまふ。

清調吟

清調吟

(一)索索風戒寒。(二)沈沈日藏耀。　索索として風寒を戒め、沈沈として日耀を藏す。
勸君飲(三)濁醪。聽我吟清調。　君に勸む濁醪を飲み、我が清調を吟ずるを聽かんことを。
(四)芳節變窮陰。朝光成夕照。　芳節窮陰に變じ、朝光夕照と成る。
與君生此世。不合長年少。　君と此世に生れ、合はずして年少を長ず。
今晨從此遊。明日安能料。　今晨此遊に從ふも、明日安んぞ能く料らん。
若不結(五)跏禪。卽須開口笑。　若し結跏の禪ならずんば、卽ち須く口を開いて笑ふべし。

【字解】【一】索索　風の聲。【二】沈沈　小暗き貌。【三】濁醪　濁酒。【四】芳節　花咲き鳥啼く好季節。【五】結跏　あぐらをかいて坐禪すること。

【題義】清調は樂曲の一。其曲に苦寒行・豫章行等の名あり。

【詩意】風が索索と吹いて寒さを警戒し、日は耀を藏めて晝尙ほ暗い。どうか濁酒を酌んで我が淸調吟を聽いてくれ。春の好季節も忽ち變じて窮陰となり、朝日の光も忽ち夕日となる世の習である。君と此世に生れあはせたが、久しく相合ふこともなくて互に老境に入つてしまつた。今朝は此處で倶に遊ぶとも、明日はどこでどうなるか知れたものではない。こんな離合聚散定めなき人世であるから、坐禪でも組んで一切空と悟りきるか、然らずば浮世三分五厘と諦めて、口を開いて大笑するよりほかはない。

狂歌詞

明月照君席。白露霑我衣。　明月君が席を照し、白露我が衣を霑す。

勸君酒杯滿。聽我狂歌詞。　君に勸む酒杯滿てり、我が狂歌詞を聽け。

五十已(一)後衰。二十已前癡。　五十より已後は衰へ、二十より已前は癡なり。

晝夜又分半。其間幾何時。　晝夜又半を分つ、其間幾何時ぞ。

生前不歡樂。死後有餘貲(二)。　生前歡樂せずんば、死後餘貲有らむ。

焉用黃壚(三)下。珠衾玉匣(四)爲。　焉ぞ黃壚の下、珠衾玉匣を用ふるを爲さん。

【字解】【一】已後　以後に同じ。【二】餘貲　餘財。【三】黃壚下　黃泉の下。死後。【四】玉匣　玉の箱。

【題義】人生の果敢なきを述べ、時に及んで行樂すべきことを說いた詩である。

【詩意】今年も早や涼秋の候となり、明月が席を照し、白露が衣を霑すやうになつた。先づ滿を引いて我が狂歌を聽いてくれ。人は五十になれば老衰し、二十前は癡に過ぎない。盛の花は二十から五十までだ。その三十年が間に夜が半分あるから、樂みを盡せるのは殘る十五年だ。高が知れたものではないか。だから生前に歡樂を盡さなければ、徒に死後に餘財を殘すことになる。死んだ後では珠の衾や玉の箱があつても、何の役にも立たぬではないか。

郡亭

平旦(一)起視事。亭午(二)臥掩關。　平旦起きて事を視、亭午臥して關を掩ふ。

除親簿領(三)外。多在琴書前。　親く簿領するを除く外、多くは琴書の前に在り。

況有虛白(四)亭。坐見海門(五)山。　況んや虛白の亭有り、坐ながら海門の山を見る。

潮來一凭檻(六)。賓至一開筵。　潮來りて一たび檻に凭り、賓至りて一たび筵を開く。
終朝對雲水。有時聽管絃。　朝を終ふるまで雲水に對し、時有りて管絃を聽く。
持此聊過日。非忙亦非閑。　此を持して聊か日を過ごし、忙に非ず亦閑に非ず。
山林太寂寞。朝闕空喧煩。　山林太だ寂寞たり、朝闕空しく喧煩。
唯茲郡閣(七)內。囂靜得中間。　唯茲郡閣の內、囂靜中間を得たり。

【字解】【一】平旦　朝。【二】亭午　正午。掩關　關は門を閉ぢること。【三】簿領　簿書を取調べること。【四】虛白　莊子人間世篇に、虛室生白、吉祥止止とある。日光の能く照すこと。【五】海門　前の長慶二年七月、自中書舍人出守杭州を見よ。【六】檻　欄干、てすり。【七】郡閣　郡亭。

【題意】餘杭郡の役所の亭に閑坐する興趣を述べた詩である。

【詩意】朝起きて事務を執り、正午になれば門を閉ぢて閑居する。簿書を取調べるより外は、多くは琴書を弄んでゐる。殊に此亭は日光がよく當つて明るく、海門の山を坐ながら見ることが出來るから、潮がさして來たと謂つては欄干に凭り（杭州の潮のことは前に述べた）客が來たと謂つては酒筵を設け、或は雲や水を眺めたり、管絃を弄したりして、閑ならず忙ならず、快き日を過ごしてゐる。山中に隱居すれば、あまりに寂寞に過ぎ、朝廷に居れば、あまりに騷がし過ぎるが、この郡亭は丁度その中間で、あつらへむきである。

詠懷　懷を詠ず

昔爲鳳閣(一)郎。今爲二千(二)石。　昔は鳳閣の郎と爲り、今は二千石と爲る。
自覺不如今。人言不如昔。　自ら覺ゆ今に如かずと、人は言ふ昔に如かずと。
昔雖居近密。終日多憂惕。　昔近密に居ると雖も、終日憂惕多し。
有詩不敢吟。有酒不敢喫。　詩有れども敢て吟せず、酒有れども敢て喫せず。
今雖在疎遠。竟歲無牽役。　今疎遠に在りと雖も、歲を竟るまで牽役無し。
飽食坐終朝。長歌醉通夕。　飽食して坐して朝を終へ、長歌して醉ひて通夕。
人生百年內。疾速如過(三)隙。　人生百年の內、疾速なること過隙の如し。
先務身安閒。次要心歡適。　先づ身の安閒を務め、次に心の歡適を要す。
事有得而失。物有損而益。　事は得て失ふ有り、物は損して益する有り。
所以見道人。觀心不觀跡。　所以に道を見る人、心を觀て跡を觀ず。

【字解】〔一〕鳳閣郎　中書舍人。〔二〕二千石　地方長官。杭州刺史となつたこと。〔三〕過隙　白駒の隙を過ぐるが如し。

【題義】己の感懷を述べた詩である。

【詩意】昔は中書舍人となり、今は杭州刺史となつた。自分では今の方がよいと思ふが、人は昔の方がよいと言ふ。昔は天子のお側に侍してはゐたが、いつも心に憂が絶えなかつた。詩を吟ずることも出來ねば、酒を飮むことも出來なかつた。今は疎遠に居るけれども、一年中これといふ拘束はなく、飽きるほど食べて醉歌してゐられる。人壽百歲と相場がきまつてゐるが、その速いことは白駒の隙を過ぐるが如しだ。だから先づ何よりも身體の安閑が大事で、次は心の快適だ。世間の事は得が損となり損が得となるのだ。故に道に通じた人は精神的に觀察して、形跡の上から判斷を下さない。で、精神的に判斷すれば、やはり杭州刺史の方がよいのだ。

立春後五日

立春後五日　
立春後五日。春態紛婀(一)娜。　立春の後五日、春態紛として婀娜たり。
白日斜漸長。碧雲低欲墮。　白日斜に漸く長く、碧雲低れて墮ちんと欲す。
殘氷坼玉片。新蕚排紅(二)顆。　殘氷玉片を坼き、新蕚紅顆を排く。
遇物盡欣欣。愛春非獨我。　物に遇うて盡く欣欣、春を愛するは獨我のみに非ず。
迎芳後園立。就暖前簷坐。　芳を迎へて後園に立ち、暖に就いて前簷に坐す。
還有惆悵心。欲別紅爐火。　還つて惆悵の心有り、紅爐の火に別れんと欲す。

【字解】〔一〕婀娜　美しき貌。〔二〕紅顆　紅のかたまり。

【題義】立春後五日の情景を述べた詩である。

【詩意】立春から五日を經て、大分春めいて來た。日は段段に長くなり、空は段段低くなり、氷は玉片を坼き、新蕚は紅花を開き、すべての物が欣欣としてゐる。春を愛するのは我のみではない。或は花に對して後園に立ち、或は前軒に坐して日光に浴する。今まで親んで來た爐火に別れるのが、何となく悲しいやうな氣もする。

郡中即事

郡中即事
(一)漫漫潮初平。熙熙(二)春日至。　漫漫として潮初めて平かに、熙熙として春日至る。
空闊遠江山。晴明好天氣。　空闊として江山遠く、晴明にして天氣好し。

外有適意物。中無繫心事。　外には意に適ふ物有り、中には心に繫る事無し。
數篇對竹吟。一杯望雲醉。　數篇竹に對して吟じ、一杯雲を望んで醉ふ。
行攜杖扶力。臥讀書取睡。　行くゆく杖を攜へて力を扶け、臥して書を讀みて睡を取る。
久養病形骸。深諳閒氣味。　久しく病める形骸を養ひ、深く閒なる氣味を諳んず。
遙思九城陌。(三)擾擾趨名利。(四)　遙に思ふ九城の陌、擾擾として名利に趨るを。
今朝是隻日。(五)朝謁多軒騎。(六)　今朝是れ隻日、朝謁軒騎多し。
寵者防悔尤。(七)權者懷憂畏。　寵ある者は悔尤を防ぎ、權ある者は憂畏を懷く。
爲報高車蓋。(八)恐非眞富貴。　爲に報ず高車蓋、恐らくは眞の富貴に非ざるを。

【字解】【一】漫漫　廣廣としてゐる貌。【二】熙熙　やはらぐ貌。【三】九城陌　長安の都を指していふ。【四】擾擾　紛紛に同じ。【五】隻日　奇數の日をいふ。偶數の日を雙日といふ。唐の制度では、天子は隻日に朝を視ることになつてゐる。【六】軒騎　軒は車。【七】悔尤　くい、とがめ。【八】高車蓋　蓋は車の日覆。貴人をいふ。

【題義】即事とは現前の事物に就いて賦する詩をいふ。郡は杭州である。

【詩意】今や潮が漫漫として平に、春光が融融として滿ちてゐる。江山は空闊、天氣は晴明、身外には快適の物が多く、心中には何等の累がなく、竹に對して詩を吟じ、雲を望んで杯を擧げ、杖を曳いて行遊し、書を讀んで睡を催し、閑適の氣味を十分に覺つた。飜つて長安の都を憶へば相變らず名利に奔走する者が多いであらう。殊に今朝は奇數日で、天子出御の日であるから、朝謁の爲に車騎が右往左往して、君寵ある者は人の尤を防がんとし、權力ある者は憂畏を抱いて安き心もあるまい。して見れば高車駟馬に乘る人は、決して眞の富貴を得た者とは言へないのである。

白樂天詩集 卷九

感傷一　古調詩凡五十五首

西明寺牡丹花時憶元九

西明寺の牡丹花の時元九を憶ふ

前年題名處。今日看花來。
前年名を題する處、今日花を看來る。

一作芸香吏。三見牡丹開。
一たび芸香の吏と作り、三たび牡丹の開くを見る。

豈獨花堪惜。方知老暗催。
豈に獨り花の惜むに堪ふるのみならんや、方に知る老の暗に催すを。

何況尋花伴。東都去未廻。
何ぞ況や花を尋ぬる伴、東都に去つて未だ廻らず。

詎知紅芳側。春盡思悠哉。
詎ぞ知らん紅芳の側、春盡きて思悠なる哉。

【字解】【一】元九　元は姓、九は排行。元稹なり。【二】芸香吏　校書郎。芸香は紙魚をよける。因つて藏書の臺を芸臺といふ。【三】尋花伴　花見に行つた仲間。元稹を指して言ふ。【四】東都　洛陽。【五】紅芳　牡丹の花。【六】悠哉　憂思の貌。

【題義】西明寺の牡丹の花の咲く頃元稹を憶うて作つた詩である。

【詩意】先年倶に名を題した西明寺に今日牡丹の花を見に來た。自分は校書郎に任せられてから、丁度三回この花の開くのを見た。この花の又散るのを見ては愛惜の情に堪へないが、それは唯花を惜むのみではなく、一方には己の段段に老いるのを惜むのである。まして共に花を尋ねた親友元稹は、洛陽に去つて未だ還らないので、春の盡きるのを惜むと同時に、元稹を思慕する情に堪へない。元稹はかくとは知らずにゐるであらうか。

傷楊弘貞
楊弘貞を傷む

顏(一)子昔短命。仲尼(二)惜其賢。
顏子昔短命、仲尼其の賢を惜む。

楊生亦好學。不幸復徒然(三)。
楊生亦學を好む、不幸にして復た徒然り。

誰識天地意。獨與龜鶴年。
誰か識る天地の意、獨り龜鶴に年を與ふるを。

【字解】【一】顏子　孔子の弟子顏回。【二】仲尼　孔子の字。【三】復徒然　一本に今復然に作る。

【題義】楊弘貞の夭死を惜んだ詩である。

【詩意】昔顏回は短命であつたので、孔子は其の賢にして夭折したことを惜んだが、楊弘貞も好學の人でありながら不幸にして夭死した。此の如き人を若死させて鶴や龜に長壽を與へる天意は、誠に理解に苦まざるを得ない。

權(一)攝昭應。早秋書事寄元拾遺(二)。兼呈李司錄(三)
權攝昭應たるとき、早秋事を書し元拾遺に寄せ、兼ねて李司錄に呈す

夏閏秋候早。七月風騷騷。
夏閏にして秋候早く、七月風騷騷。

渭(四)川煙景晚。驪(五)山宮殿高。
渭川煙景晚れ、驪山宮殿高し。

丹(六)殿子司諫。赤(七)縣我徒勞。
丹殿に子は諫を司り、赤縣に我徒に勞す。

相去半日程。不得同遊遨。
相去ること半日程、遊遨を同じうするを得ず。

到官來十日。覽鏡生二(八)毛。
官に到つて來た十日、鏡を覽るに二毛を生ず。

可憐趨走吏。塵土滿青(九)袍。
憐む可し趨走の吏、塵土青袍に滿つ。

郵(一〇)傳擁兩驛。簿書堆六曹(一一)。
郵傳兩驛を擁し、簿書六曹に堆し。

爲問綱紀掾。(一二)何必使鉛刀。(一三)　爲に問ふ綱紀の掾、何ぞ必ずしも鉛刀を使はん。

【字解】【一】權攝昭應　昭應は縣名、今の陝西省臨潼縣。權攝とは暫時職位を代理すること。【二】元拾遺　元稹を指す。元稹は元和の初左拾遺となつた。【三】李司錄　錄は祿の訛。司祿は官名。班祿の事を掌る。【四】渭川　川の名。【五】驪山　山の名。山に宮殿あり。【六】丹殿　朱塗の宮殿。【七】赤縣　帝都に近き縣。【八】二毛　白髪。【九】青袍　官服。【一〇】郵傳　宿次馬車。【一一】六曹　府州の佐吏六曹に分る。功曹・倉曹・戸曹・兵曹・法曹・士曹是れなり。【一二】綱紀掾　政治を佐くる屬官。李司錄を指す。【一三】鉛刀　鈍才の人に喩ふ。

【題義】白樂天が盩厔縣尉と、臨時に昭應縣尉とを兼ねてゐた時、事を書して左拾遺元稹に寄せ、兼ねて李司錄に呈した詩である。

【詩意】夏閏があつたので秋の來るのが早く、七月になつたばかりで秋風がさわがしく、渭川の煙景を隔てて驪山宮の高く聳えてゐるのが見える。君は左拾遺として朱殿の中に諫諍の事を司り、僕は縣尉として昭應縣に苦勞してゐる。君と僕との居る處は相去ること僅に半日程であるが、共に遊樂することも出來ねば、僕は此官に就いてから十日にしかならないが、鏡にうつして見ると既に白髪が生え、小役人として驅けまはつてゐるので塵に官服が汚れる。而も驛傳に乘つて盩厔と昭應との二縣をかけ持ちしてゐるので、簿書が堆積して整理がつかない。因つて李司錄殿に御尋ね申すが、私のやうな鈍才を御使ひにならずとも、他に人があるで御座らう。

新栽竹　　新に竹を栽う

佐邑意不適。(一)閉門秋草生。　邑に佐として意適せず、門を閉づれば秋草生ず。
何以娯野性。種竹百餘莖。　何を何てか野性を娯ましむる、竹を種うること百餘莖。
見此溪上色。憶得山中情。　此溪上の色を見、山中の情を憶ひ得たり。
有時公事暇。盡(二)日遶欄行。　時有りて公事の暇、盡日欄を遶つて行く。
勿言根未固。勿言陰未成。　言ふこと勿れ根未だ固からずと、言ふこと勿れ陰未だ成らずと。
已覺庭宇內。稍稍(三)有餘淸。　已に覺る庭宇の內、稍稍として餘淸有るを。
最愛近牕臥。秋風枝有聲。　最も愛す牕に近く臥せば、秋風枝に聲有るを。

【字解】【一】佐邑　縣尉となる。【二】盡日　終日。【三】稍稍　やや。段段に。

【題義】新に竹を栽ゑたことを述べた詩である。

【詩意】縣尉となつたが氣に食はないので、門を閉ぢて秋草の生ずるに任せてゐる。吾が野性を娯ましむる爲に百餘本の竹を種ゑた。この溪上の竹の色を見て山居の情味を憶ひ、公事の暇には欄干を遶つて竹を見て歩いてゐる。根はまだ固まらず深い陰を成すほどでもないが、既に庭中に清涼の氣を添

へたやうに思ふ。殊に窓に近く臥せば、秋風の聲を聞けるのが甚だ嬉しい。

秋霖中過尹縱之仙遊山居（一）（二）

秋霖中、尹縱之が仙遊の山居に過る

慘慘（三）八月暮。連連三日霖。　慘慘たり八月の暮、連連たり三日の霖。

邑居尚愁寂。況乃在山林。　邑居だも尚は寂を愁ふ、況んや乃ち山林に在るをや。

林下有志士。苦學惜光陰。　林下に志士有り、苦學して光陰を惜む。

歲晚千萬慮。併入方寸（四）心。　歲晚れて千萬慮、併せて方寸の心に入る。

巖鳥共旅宿。草蟲伴愁吟。　巖鳥旅宿を共にし、草蟲愁吟に伴ふ。

秋天牀席冷。雨夜燈火深。　秋天牀席冷かに、雨夜燈火深し。

憐君寂寞意。攜酒一相尋。　君が寂寞の意を憐み、酒を攜へて一たび相尋ぬ。

【字解】〔一〕秋霖　秋のながあめ。〔二〕仙遊　山の名。後の寄題盩厔廳前雙松を見よ。〔三〕慘慘　いたみかなしむ貌。〔四〕方寸心　心なり。

【題義】秋霖の降り續く時、仙遊寺の山居に尹縱之を訪うて作つた詩である。

【詩意】何となく人の心を悲ましめる八月の末に、三日間雨が降りつゞいて、町に居てすら寂寞を感ずるのだから、山林の中に隱居してゐては尚更であらう。林下に志士あり尹縱之といふ。光陰を惜んで苦學してゐるが、年は取り彼此と苦勞も多く、それが爲に心を搔き亂されてゐる。而も巖鳥と共に宿し草蟲と愁吟する狀態で、誰あつて慰める者もなく、秋雨の冷なる夜獨り寒燈に對してゐる。因つて余は君の寂寞を慰めてやらうと思つて、酒を携へて尋ねて來た。

寄江南兄弟

江南の兄弟に寄す

分散骨肉（一）戀。趨馳名利牽。　分散して骨肉戀ひ、趨馳して名利牽く。

一奔塵埃馬。一汎風波船。　一は塵埃の馬を奔らせ、一は風波の船を汎ぶ。

忽憶分手時。憫默秋風前。　忽ち憶ふ手を分つ時、憫默す秋風の前。

別來朝復夕。積日成七年。　別來朝復た夕、日を積んで七年と成る。

花落城中池。春深江上天。　花は落つ城中の池、春は深し江上の天。

登樓東南望。鳥滅煙蒼然。　樓に登つて東南を望めば、鳥滅して煙蒼然たり。

相去復幾許。道里近三千。相去ること復た幾許ぞ、道里三千に近し。

平地猶難見。況乃隔山川。平地すら猶ほ見難し、況んや乃ち山川を隔つるをや。

【字解】【一】骨肉 兄弟なり。

【題義】江南に往つてゐる兄弟に寄せた詩である。

【詩意】南北に分散して兄弟相思うてゐるが、これも名利の爲に牽かれてである。余は馬に跨つて塵埃の間に奔走し、汝は船を泛べて風波の上に漂泊してゐる。秋風の前に默然として相別れたのも早や七年の昔となつた。今この長安では花が散つてゐるが、江南は既に春も深けたことであらう。樓に登つて東南を眺めても、雲煙が蒼然としてゐるばかりで、汝の影も形も見えない。相距ること殆ど三千里。平地ですら見難いのに、況んや山川を隔ててゐるのであるから、さうあるべき筈である。

曲江早秋 二年作

曲江の早秋 二年の作

秋波紅蓼水。夕照青(一)蕪岸。秋波紅蓼の水、夕照青蕪の岸。

獨信馬蹄行。曲(二)江池四畔。獨り馬蹄に信せて行く、曲江池の四畔。

早涼晴後至。殘暑暝來散。早涼晴れて後至り、殘暑暝れ來つて散ず。

方喜炎(三)燠銷。復嗟時節換。方に喜ぶ炎燠の銷するを、復た嗟く時節の換るを。

我年三十六。冉(四)冉昏復旦。我が年三十六、冉冉として昏れて復た旦く。

人壽七十稀。七十新過半。人壽七十稀なり、七十新に半を過ぐ。

且當對酒笑。勿起臨風歎。且く當に酒に對して笑ふべし、臨風の歎を起すこと勿れ。

【字解】【一】青蕪 青草の荒地。【二】曲江 長安に在る池の名。樂天は此池の邊に住んでゐた。【三】炎燠 炎暑。【四】冉冉 漸く進む貌。

【題義】曲江の早秋の情景を述べた詩で、元和二年、年三十六の時の作である。

【詩意】紅の蓼の花の咲き亂れてゐる池には小波が立ち、青い草の生えた岸には夕日が照してゐる。獨り馬に任せて曲江のまはりをさまよへば、日が暮れると共に暑熱が去る。暑さの去るのは嬉しいが、又時節の換るのは嗟かはしい。一日一日と年月を重ねて余も今や三十六になつた。七十まで生きる人は稀だといふが、余は既に其半を過ぎたのである。酒でも飲んで笑つて暮さう。秋風に對して嘆息しても仕方がない。

寄題盩厔(一)廳前雙松 兩松自仙遊山移植縣廳

盩厔廳前の雙松に寄題す 兩松は仙遊山より縣廳に移植す

憶昨爲吏日。折腰多苦辛。
歸家不自適。無計慰心神。
手栽兩樹松。聊以當嘉(二)賓。
乘春日一溉(三)。生意漸欣欣。
清韻(四)度秋在。綠茸(五)隨日新。
始憐澗底色。不憶城中春。
有時晝掩關。雙影對一身。
盡日不寂寞。意中如三人。
忽奉宣室(六)詔。徵爲文苑臣(七)。
閑來一惆悵。恰似別交親。
早知煙翠前。攀翫不逡巡(八)。

憶ふ昨吏たりし日、腰を折り苦辛多きを。
家に歸りて自ら適はず、心神を慰するに計無し。
手づから兩樹の松を栽ゑ、聊か以て嘉賓に當つ。
春に乘じて日に一たび溉すれば、生意漸く欣欣たり。
清韻秋に度りて在り、綠茸日に隨ひて新なり。
始めて憐む澗底の色、憶はざりき城中の春。
時有りて晝關を掩ひ、雙影一身に對す。
盡日寂寞たらず、意中三人の如し。
忽ち宣室の詔を奉じ、徵されて文苑の臣と爲る。
閑に來りて一たび惆悵し、恰も交親に別るるに似たり。
早く知る煙翠の前、攀翫して逡巡せざるを。

悔從白雲裏。移爾落囂塵。

悔ゆらくは白雲の裏より、爾を移して囂塵に落しし ことを。

【字解】(一) 盩厔 縣の名。(二) 嘉賓 よき客。(三) 一溉 一たび水を灌ぐ。(四) 清韻 清き松風の音。(五) 綠茸 綠の芽。(六) 宣室 宮殿なり。(七) 文苑臣 儒臣。集賢校理となつたこと。(八) 逡巡 ためらふこと。

【題義】寄題とは其地に往かずして題詠すること。此詩は白樂天が縣尉となつてゐた盩厔縣廳の前の二本の松を詠じたのである。

【詩意】憶へば先年盩厔縣尉を勤めてゐた時は、膝を屈して上官に服事せねばならないので、家に歸つて來ても尙ほ不愉快で、心を慰める方便がなかつた。因つて手づから二本の松を栽ゑて之を賓客となし、春に乘じて毎日水を灌いだので大分いきいきとして來て、秋になつては淸らかな松風の音を立て、新芽が日增に吹いて來た。始めは谷底に操を守る靑松の色を愛して、城中の花などは、念頭に置かないやうになり、時としては晝も門を閉ぢて二本の松に對してゐると、終日少しも淋しさを感せず、人のやうに思はれて、樹木とは思はれなかつた。所が忽ち詔命に由つて集賢校理に任ぜられて、盩厔を去ることになつて親友に別れるやうな悲しさを感じた。かくて永く攀ぢ翫ぶことが出來ないことを知り、白雲の間から俗界に移し植ゑたことを悔いた。

翰林院中感秋懷王質夫(一) 王居仙遊山

翰林院中、秋に感じ王質夫を懷ふ　王は仙遊山に居る

何處感時節。新蟬禁中聞。　何處にか時節を感ずる、新蟬を禁中に聞く。
宮槐有秋意。風夕花紛紛。　宮槐秋意有り、風夕花紛紛。
寄跡鴛鷺行。歸心鷗鶴羣。　跡を寄す鴛鷺の行、心を歸す鷗鶴の羣。
唯有王居士。知予憶白雲。　唯王居士有り、予が白雲を憶ふを知る。
何日仙遊寺。潭前秋見君。　何れの日か仙遊寺、潭前秋君を見ん。

【字解】【一】翰林院　役所の名。この時白樂天は翰林學士であつた。【二】禁中　禁裡。【三】鴛鷺行　役人の行列。【四】王居士　居士は處士に同じ、王質夫を指して言ふ。

【題義】翰林院にゐて秋に感じ王質夫を懷うて作つた詩である。

【詩意】自分は何處にゐて秋の來たことを感じてゐるかといへば、肩の凝る禁裡に於て新蟬の聲を聞いてゐる。宮殿の庭に在る槐の樹にも秋意が漂ひ、風の夕に紛紛と散る花を見ても感慨を催さざるを得ない。殊に我は役人の仲間には加はつてゐるが、心は江湖に悠遊する鷗鶴を慕ふ者であるが、我が此眞意を知る者は唯王居士だけである。いつか仙遊寺に往つて、秋潭の前に王君と語り合ひたいものだ。

禁中月

海上明月出。禁中清夜長。　禁中の月　海上明月出で、禁中清夜長し。
東南樓殿白。稍稍上宮墻。　東南樓殿白く、稍稍として宮墻に上る。
淨落金塘水。明浮玉砌霜。　淨金塘の水に落ち、明玉砌の霜に浮ぶ。
不比人間見。塵土汚清光。　人間の見るに比せず、塵土清光を汚す。

【字解】【一】禁中　禁裡。清夜は一に秋夜に作る。【二】稍稍　少しづつ。段段に。【三】金塘　御溝の堤。【四】玉砌　玉を敷いたミギリ。【五】人間　俗世間。

【題義】禁裡の月は俗世間で見る月とは自ら別な感じのすることを述べた詩である。

【詩意】海上から明月が躍りあがつて、禁中の秋の夜長を照し、先づ東南の方の樓殿が明るくなつたと思ふ間に、刻一刻に宮殿の墻の上に月光が這ひ上り、冴えた光が御溝の水にうつり、玉敷の庭の霜に浮び、俗界で見る塵に汚れた色とは、殆んど比べものにはならない。

贈賣松者

一束蒼蒼色。知從澗底來。　松を賣る者に贈る　一束蒼蒼の色、知んぬ澗底より來るを。

（三）斸掘經幾日。枝葉滿塵埃。　斸掘幾日をか經たる、枝葉塵埃に滿つ。

不買非他意。城中無地栽。　買はざるは他の意に非ず、城中地の栽うる無ければなり。

【字解】【一】蒼蒼　青きこと。【三】斸掘　きり、ほる。

【題義】松を賣る者に贈つた詩で、暗に俗界には我が身を置くに適する地のないことを嘆じたのである。

【詩意】一東の青青とした松は、深く俗界を離れた澗の底から持つて來たものだ。根掘にして來て間もないのに、早くも枝葉が塵埃にまみれてしまつた。憐れむべき此松を買つてはやりたいが、この長安城中には此松を栽ゑるにふさはしい淸らかな土地がないから、買ふのはやめた。

初見白髮　初めて白髮を見る

白髮生一莖。朝來明鏡裏。　白髮一莖を生ず、朝來明鏡の裏。

勿言一莖少。滿頭從此始。　一莖少しと言ふこと勿れ、滿頭此より始まる。

青山方遠別。黃綬初從仕。　青山方に遠く別れ、黃綬初めて從仕す。

未料容鬢間。（二）蹉跎忽如此。　未だ鬢間に容るることを料らざるに、蹉跎たること忽ち此の如し。

【字解】【一】黃綬　黃色の印綬。【二】蹉跎　時を失ふ貌。

【題義】初めて頭髮の白くなつたのを見て歲月の移り易きことを嘆じた詩である。

【詩意】朝、鏡を見て一驚を喫した。白毛が一本生えてゐる。一本だからよいなどと安心してはゐられない。滿頭盡く白くなる前提であるから。自分は遠く青山に別れて來て、初めて宮中に仕へることになつた。まだ鬢の間に白毛などが生えようとは思ひもよらなかつたのに、事志の如くならず、忽ち此の如く老衰してしまつた。

別元九後詠所懷　元九に別れて後所懷を詠す

（二）零落桐葉雨。（三）蕭條槿花風。　零落す桐葉の雨、蕭條たり槿花の風。

（四）悠悠早秋意。生此幽閑中。　悠悠たる早秋の意、此幽閑の中に生ず。

況與（五）故人別。（六）中懷正無悰。　況んや故人と別れて、中懷正に悰み無し。

勿云不相送。心到（七）靑門東。　云ふこと勿れ相送らずと、心は靑門の東に到る。

(八)相知豈在多。但問同不同。　相知豈に多きに在らんや、但問ふ同じきと同じからざるとを。

(九)同心一人去。坐覺長安空。　同心一人去つて、坐に覺ゆ長安の空しきを。

【字解】【一】元九　元稹なり。九は排行。【二】零落　おちる。【三】蕭條　物淋しき貌。槿花は、むくげの花。【四】悠悠　憂ふる貌。【五】故人　舊友。元九を指す。【六】中懷　心中。【七】靑門　長安城の東南の門。【八】相知　知友。【九】同心　同心の友。

【題義】元稹に別れて後、己の感慨を述べた詩である。

【詩意】桐の葉にパラパラと雨が落ち、槿花にソヨソヨと風が吹き、物淋しき秋の風情が此靜寂の中に漂つてゐる。殊に君と別れて後は心中正に樂まない。君の去るのを見送りはしなかつたが、心は君に伴つて靑門の東まで行つた。友達といふものは敢て數の多いことを要しない。ただ意氣の投合するか否かが問題なのである。今君が去つてからは長安が空あきになつてしまつたやうな氣がする。

禁中秋宿

禁中の秋宿

風翻朱裏幕。雨冷通(一)中枕。　風は翻す朱裏の幕、雨は冷なり通中の枕。

(二)耿耿背斜燈。秋(三)牀一人寢。　耿耿として斜燈に背き、秋牀一人寢ぬ。

【字解】【一】通中枕　漢官儀に、尙書郎臺中に入直すれば官靑縑白綾被帷帳畫通中枕を供すとある。【二】耿耿　心の安んぜざる貌。【三】秋牀　秋のねどこ。

【題義】宮殿中の秋夜宿直の情味を述べた詩である。

【詩意】秋風が緋色の裏のついた幕を翻し、雨が通中枕頭に冷氣を送る時、燈を背にして獨り淋しく牀上に臥してゐると、何となく心が落著かない。

早秋曲江(一)感懷

早秋曲江の感懷

(二)離離暑雲散。(三)嫋嫋涼風起。　離離として暑雲散じ、嫋嫋として涼風起る。

池上秋又來。(四)荷花半成子。　池上秋又來り、荷花半は子を成す。

(五)朱顏易消歇。白日無窮(六)已。　朱顏消歇し易く、白日窮已無し。

人壽不如山。年光急於水。　人壽は山の如くならず、年光は水より急かなり。

(七)靑蕪與紅蓼。歲歲秋相似。　靑蕪と紅蓼と、歲歲秋相似たり。

去歲此悲秋。今秋復來此。　去歲此に秋を悲み、今秋復た此に來る。

【字解】【一】曲江　前に見ゆ。【二】離離　雲の長く續く貌。【三】嫋嫋　風の吹く貌。【四】荷花　蓮の花。子は果實。【五】

朱顏　紅顏に同じ。わかき顏色。【六】窮巳　きはまりやむ。【七】青蕪　青青と茂つた草。

【題義】曲江のほとりに住み、早秋に遇ひ感慨を述べた詩である。

【詩意】今や曲江のほとりは暑天の雲が散じて涼風のそよぐ秋となり、池の蓮の花も半は實を結んだ。歳月は窮り已むことなく流れ去り、紅顏はいつしか老い朽ちてしまふ。人壽は山のやうに停止してゐるものではなく、年月は水の流よりも速である。青い草原や紅の蓼はいつの秋でも同じ色を呈してゐるが、人は年年歳歳同じ姿ではゐない。自分は去年此處で秋を悲んだが、今年も亦ここへ來て秋を悲んでゐる。

寄元九

元九に寄す

身爲近(一)密拘。心爲名(二)檢縛。　身は近密に拘せられ、心は名檢に縛せらる。
月夜與花時。少逢杯酒樂。　月夜と花時と、杯酒の樂みに逢ふこと少なり。
唯有元夫子。閑來同一酌。　唯元夫子のみ有り、閑に來りて一酌を同じうす。
把手或酣歌。展眉時笑謔。　手を把りて或は酣歌し、眉を展べて時に笑謔す。
今春敍御(三)史。前月之東(四)洛。　今春御史に敍せられ、前月東洛に之く。
別來未開(五)顏。塵埃滿樽杓。　別來未だ顏を開かざるに、塵埃樽杓に滿つ。
蕙(六)風晩香盡。槐雨餘花落。　蕙風晩香盡き、槐雨餘花落ちぬ。
秋意一蕭(七)條。離(八)容兩寂寞。　秋意一に蕭條、離容兩つながら寂寞。
況隨白日老。共負青山約。　況んや白日に隨つて老い、共に青山の約に負けるをや。
誰識相念心。鞲(九)鷹與籠鶴。　誰か識らん相念ふ心、鞲鷹と籠鶴と。

【字解】【一】近密　天子の左右に侍すること。【二】名檢　名儀なり。【三】御史　官名。監察御史。【四】東洛　洛陽。長安の東に在る故かくいふ。【五】開顏　笑ふこと。【六】蕙風　蕙は香草の名。【七】蕭條　物淋しき貌。【八】離容　離居の容姿。【九】鞲鷹　鞲は韝に同じ、革にて作り腕に卷きて鷹をとまらせるもの。

【題義】洛陽に居る親友元稹に寄せた詩である。

【詩意】自分は左拾遺として天子の左右に侍する爲に、いつも身が拘束せられ、心は官職の爲に常に繋縛せられて、月夜にも花時にも十分に酒を飲んで樂むことも出來なかつたが、ただ君が長安にゐて時時來てくれるので共に酒杯を銜み、酣歌笑謔して樂むことが出來た。所が君は今春監察御史に任せられ先月洛陽に去つたので、君に別れてからは獨り愁に鎖されて酒樽にも塵が積るやうになつた。今や蕙香も盡き槐花も落ち、秋の淋しさがあたりを支配して、君も僕も寂寞として離別を悲んでゐる

始末である。況んや一日一日と老い込んで、共に青山に隱退しようといふ約束も遂げられない。東西に別れて相念ふ心は、丁度韝の上の鷹か籠の中の鶴のやうだ。

春暮寄元九

春暮元九に寄す

梨花結成實。燕卵化爲雛。
梨花結んで實と成り、燕卵化して雛と爲る。

（一）時物又若此。道情復何如。
時物又此の若し、道情復何如。

但覺日月促。不嗟年歲徂。
但日月の促きを覺え、年歲の徂くを嗟かず。

浮生都是夢。老小亦何殊。
浮生は都べて是れ夢なり、老小亦何ぞ殊らん。

唯與（二）故人別。（三）江陵初謫居。
唯故人と別れ、江陵に初めて謫居す。

時時一相見。此意未全除。
時時一たび相見ん、此意未だ全く除かず。

【字解】【一】時物　時節の物。【二】故人　舊友。【三】江陵　元和五年監察御史元稹を貶して江陵士曹となす。

【題義】春の末に元稹に寄せた詩である。

【詩意】今や梨の花も既に實となり、燕の卵も雛と化した。すべての物皆變移したが、君の道情は如何であるか。ただ日の短いことを感じて歲月の去ることは悲まないであらう。何となれば浮生は夢で老少不常であるから。併し舊友（白樂天自ら謂ふ）と別れて江陵に謫居することであるから、時時相見て相慰めたいものだといふ考へは恐らく未だ全く除き去れずに居るであらう。

早梳頭

早に頭を梳る

夜沐早梳頭。窓明秋鏡曉。
夜沐して早に頭を梳る、窓は明かなり秋鏡の曉。

（一）颯然握中髮。一沐知一少。
颯然たり握中の髮、一たび沐して一たび少なきを知る。

年事漸（二）蹉跎。世緣方（三）繳繞。
年事漸く蹉跎として、世緣方に繳繞たり。

不學（四）空門法。老病何由了。
空門の法を學ばずんば、老病何に由つてか了せん。

未得（五）無生心。白頭亦爲夭。
未だ無生心を得ざれば、白頭も亦夭と爲す。

【字解】【一】颯然　衰ふる貌。【二】蹉跎　時を失ふ貌。【三】繳繞　身にまとひつく。【四】空門法　佛法なり。その教世界一切皆空なるを說く故。【五】無生心　生命慾を超脫した心。王維の詩に、欲知除老病、惟有學無生とある。

【題義】朝早く頭髮を梳り感慨を述べた詩である。

【詩意】夜髮を洗ひ翌朝鏡に對して之を梳るに、手に握つて見ると洗ふたびに少くなり、歲月空しく

去つて功業立たず、世間の係累が徒に我が身にまとうてゐる。ただ佛理を學んで老病死苦の惱を擺脫すべきである。無生心を悟得しなければ、たとひ白頭になるまで生きても、尙ほ夭死したやうにしか思はぬであらう。

出關路

關路を出づ

山川函(一)谷路。塵土游(二)子顏。
山川函谷の路、塵土游子の顏。

蕭(三)條去國意。秋風生故(四)關。
蕭條たり國を去るの意、秋風故關に生ず。

【字解】【一】函谷　關所の名。【二】游子　行旅の人。【三】蕭條　物淋しき貌。【四】故關　古き關所。函谷關を指す。

【題義】長安を去り函谷關を出る時の情景を述べた詩である。

【詩意】山と川との錯綜してゐる函谷關をば旅塵に汚れた游子がトボトボと出る。折しも秋風が古關を吹き、都を去る身をして坐に淋しさを感ぜしめる。

別舍(一)弟後月夜

舍弟に別れし後の月夜

悄(二)悄初別後。去(三)住兩盤桓。
悄悄たり初めて別れて後、去住兩つながら盤桓たり。

行(四)子孤燈店。居(五)人明月軒。
行子孤燈の店、居人明月の軒。

平生共貧苦。未必日成歡。
平生貧苦を共にし、未だ必ずしも日に歡を成さず。

及此暫爲別。懷(六)抱已憂煩。
此に及んで暫く別を爲し、懷抱已に憂煩。

況是庭葉盡。復思山路寒。
況んや是れ庭葉盡き、復た山路の寒きを思ふをや。

如何爲不念。馬瘦衣裳單。
如何ぞ念はざるを爲さん、馬瘦せて衣裳單なり。

【字解】【一】舍弟　弟なり。【二】悄悄　憂ふる貌。【三】去住　去る者も留まる者も。盤桓は、徘徊といふが如し。【四】行子　旅路に在る人。行簡を指すか。【五】居人　留まりて家に在る人。【六】懷抱　心の思。

【題義】月夜に旅中に在る弟を憶つて作つた詩である。

【詩意】一たび相別れてからは、去つた弟も留まる我も、倶に愁を抱いて徘徊してゐる。去つた弟は孤燈の影淋しき旅店に我を憶ひ居るであらう。後に留まる我は明月の光さやけき軒の下に弟を偲んでゐる。平生貧苦を共にして歡樂を成す日もなかつたが、今や暫の別をなし、益心を痛ましめる。況んや庭前の木の葉の落ち盡したのを見て、弟の旅する山路の寒さを推察すれば、瘦馬に跨り薄著をしてゐる弟を憐まざるを得ない。

新豐路逢故人（一）

新豐の路にて故人に逢ふ

塵土長路晚。風煙廢宮秋。　塵土長路の晚、風煙廢宮の秋。
相逢立馬語。盡日（二）此橋頭。　相逢うて馬を立てて語る、盡日此橋の頭。
知君不得意。鬱鬱來西遊。　知んぬ君が意を得ず、鬱鬱として西に來りて遊ぶを。
惆悵新豐店。何人識馬周（三）。　惆悵す新豐の店、何人か馬周を識らん。

【字解】【一】新豐　縣名。今の陝西省臨潼縣の東北に在る。故人は舊友。【二】盡日　終日。【三】馬周　唐人。學を嗜み詩春秋を善くす。中郎將常何の家に舍す。貞觀中百官に詔して得失を言はしむ。何は武人にして學に渉らず。周條二十餘事を爲る。太宗怪み問ふ。何曰く、家客馬周之を爲ると。召して與に語り大に悅び、監察御史に拜す。

【題義】新豐縣の途中で長安の都に往かうとする舊友に逢つて作つた詩である。

【詩意】塵深く秋風寒く廢宮の跡淋しき新豐縣で偶然舊友たる君に遇ひ、馬を立てて終日橋の袂で語り合つた。志を得ないので憂愁を抱き西の長安に往かうとする君の眞意もよくわかつた。併し今の世には馬周を知つて拔擢するやうな人はない。誠に悲しむべきことだ。

金鑾子晬日（一）

金鑾子の晬日

行年欲四十。有女曰金鑾。　行年四十ならんと欲し、女有り金鑾と曰ふ。
生來始周歲。學坐未能言。　生れて來、始めて周歲、坐することを學べども未だ言ふ能はず。
慙非達者（二）懷。未免俗情憐。　慙らくは達者の懷に非ざるを、未だ俗情の憐みを免れず。
從此累身（三）外。徒云慰目前。　此れより累身の外、徒に云に目前を慰せん。
若無夭折（四）患。則有婚嫁牽。　若し夭折の患無くんば、則ち婚嫁の牽有り。
使我歸山計。應遲十五年。　我が歸山の計をして、應に十五年を遲からしめん。

【字解】【一】晬日　子生れて一歲なるを晬といふ。【二】達者　天理に通達した人。【三】累身　身をわづらはす。【四】夭折　わかじに。

【題義】樂天の女金鑾子が生れて一周年を經た時に作つた詩である。

【詩意】吾年四十に近くなつて一女子を擧げ金鑾と名づけた。既に生後一周年を經て、坐ることは出來るやうになつたが、まだ物を言ふことは出來ない。吾は天理に通達した身でないから、俗人の常で妄りに愛情に驅られる。今後は此子が吾が身を累すでもあらうが、又吾が目前の慰安にもなるであらう。若し幸に夭死せずに育てば行くゆく結婚といふ親としての義務も負はねばならぬ。それが爲に我が隱居の計畫も、十五年ほど晚れることになる。

青龍寺早夏

青龍寺の早夏

塵埃經小雨。地高倚長坡。(一)　塵埃小雨を經、地高うして長坡に倚る。
日西寺門外。景氣含清和。(二)　日は西す寺門の外、景氣清和を含む。
閑有老僧立。靜無凡客過。　閑にして老僧の立てる有り、靜にして凡客の過ぐる無し。
殘鶯意思盡。新葉陰涼多。　殘鶯意思盡き、新葉陰涼多し。
春去來幾日。夏雲(三)忽嵯峨。　春去りて來幾日ぞ、夏雲忽ち嵯峨たり。
朝朝感時節。年鬢(四)暗蹉跎。　朝朝時節を感じ、年鬢暗に蹉跎す。
胡爲戀朝市。不去歸煙蘿。(五)　胡爲ぞ朝市を戀ひ、煙蘿に去り歸らざる。
青山寸歩地。自問心如何。　青山寸歩の地、自ら問ふ心如何。

【字解】〔一〕長坡　長丘。〔二〕淸和　初夏の氣。〔三〕夏雲　夏の夕立雲。嵯峨は山の高く聳ゆる貌。〔四〕年鬢　年貌といふが如し。年漸く老ゆれば鬢髮漸く白し。故に衰老の意に用ふ。蹉跎は志の成らぬこと。〔五〕煙蘿　雲煙のたなびく蔓草。

【題義】初夏の頃に青龍寺に寓して境内の景趣や自己の感懷を述べた詩である。

【詩意】雨あがりで塵埃の洗ひ去られた長い丘の上に青龍寺が立つてゐる。折しも日は寺門の西に傾き、四圍の景色は清和の氣を含んでゐる。如何にも閑靜で、ただ老僧の立つてゐるのを見るのみで、俗人などは一人もゐず、殘鶯の春を惜む心も盡きて、新葉が色濃く茂つてゐる。春が去つてからまだ間もないのに、空には奇峰の如き夏雲が聳えてゐる。此等の景色を見て毎日時節の推移に心を驚かすと共に、老衰して事の志と違ふことを嘆いてゐる。ああ吾はなせ朝市に牽戀して、山の中に隱遁しないのであらうか。今この境内を僅ばかり歩いて見て、自らどんな氣がするかを問うた。寸歩の青山ですら此程快いのであるから、俗界の羈絆を遁れて隱居したならば、如何ばかり愉快を感ずるであらう。

秋題牡丹叢

秋牡丹叢に題す

晩叢白露夕。衰葉涼風朝。　晩叢白露の夕、衰葉涼風の朝。
紅艷久已歇。碧芳今亦銷。　紅艷久しく已に歇き、碧芳今亦銷す。
幽人坐相對。心事共蕭條。(一)　幽人坐して相對し、心事共に蕭條。

【字解】〔一〕蕭條　物淋しきこと。

【題義】一時花の盛には幾多の人を醉はしめた牡丹も秋となつては見る影もなく寂れてゐることを述べた詩である。

【詩意】白露が降り涼風の吹く秋となつては、盛の花と稱美された牡丹も、僅に衰葉を留むるのみで、色も香も既に銷え失せ、ただ幽人（樂天自ら謂ふ）が此に對して淋しく同病相憐んでゐる。

(一)勸酒寄元九　酒を勸めて元九に寄す

(二)薤葉有朝露。槿枝無宿花。(三)　薤葉朝露有り、槿枝宿花無し。
君今亦如此。促促(四)生有涯。　君今亦此の如し、促促として生涯有り。
既不逐禪僧。林下學楞伽。(五)　既に禪僧を逐ひ、林下に楞伽を學ばず。
又不隨道士。山中煉丹砂。(六)　又道士に隨ひ、山中に丹砂を煉らず。
(七)百年夜分半。一歲春無多。　百年夜半を分ち、一歲春多きこと無し。
何不飲美酒。(八)胡然自悲嗟。　何ぞ美酒を飲まずして、胡然として自ら悲嗟する。
俗號消愁藥。神速無以加。　俗に消愁藥と號す、神速以て加ふる無し。
一杯驅世慮。兩杯反天和。(九)　一杯世慮を驅り、兩杯天和を反す。
三杯卽酩酊。或笑任狂歌。　三杯卽ち酩酊し、或は笑つて狂歌に任す。
陶陶復兀(一〇)兀。吾孰知其他。　陶陶復た兀兀、吾孰んぞ其他を知らん。
況在名利途。平生有風波。　況んや名利の途に在つて、平生風波有るをや。
深心藏陷穽。巧言織網羅。　心を深うして陷穽を藏し、言を巧にして網羅を織る。
擧目非不見。不醉欲如何。　目を擧げて見ざるに非ず、醉はずして如何せんと欲する。

【字解】(一)元九　元稹なり。(二)薤葉　おほにらの葉。古詩に薤上朝露何易晞、露晞明朝更復落、人死一去何時歸とある。(三)宿花　宵越しの花。槿花は一朝にして萎む。(四)促促　短き貌。(五)楞伽　佛經の名。(六)丹砂　不老長生の仙藥。(七)百年　古來人壽を百年と假定す。(八)胡然　何故にの意。(九)天和　自然の調和。(一〇)兀兀　動かざる貌。

【題義】酒を勸める意を述べて元稹に寄せた詩である。

【詩意】薤葉の上の朝露は忽ち晞あがり、槿の枝に宵越しの花はない。君の壽命も此と同じで瞬く間に過ぎてしまふ。君は禪僧に伍して佛理を修することもせず、又道士に就いて仙藥を煉ることもしないから、老病死苦の惱なきを得ないであらう。まして古來人壽百歲といふが、その半分の五十年は夜だから覺めて樂むことは出來ず、また一年の中にも花咲く春ばかりではなく、霜枯の秋もあれば冬もある。だから考へて見れば氣がくさくさして酒でも飮んで紛らすより外はない。なぜ酒も飮まずにくよくよしてゐるのだ。酒は俗にも謂ふ通り愁を掃ふ玉箒で、これほど速效のある妙藥はないのだ。一杯やれば世の煩を一掃し、二杯やれば自然の調和に復歸し、三杯やれば酣笑狂歌し、ただ陶然として

世間の萬事を忘れてしまふ。況んや名利を爭ふ官界にゐて、世間の風波に身を寄せてゐると、或は穽を設けて人を陷れようとする陰謀家もあれば、言を巧にして人を欺瞞しようとする權略家もあつて、目を擧ぐれば滔滔たる天下皆此類である。酒にでも醉つてゐなければ、どうして此世が渉られよう。

曲江感秋　五年作

曲江にて秋に感ず

沙草新雨地。岸柳涼風枝。　沙草新雨の地、岸柳涼風の枝。
三年感秋思。併在曲江池。　三年感秋の思、併せて曲江の池に在り。
早蟬已嘹唳。晩荷復離披。　早蟬已に嘹唳、晩荷復離披す。
前秋去秋思。一一生此時。　前秋去秋の思、一一此時に生ず。
昔人三十二。秋興已云悲。　昔人三十二、秋興已に云に悲む。
我今欲四十。秋懷亦可知。　我今四十ならんと欲す、秋懷亦知る可し。
歲月不虛設。此身隨日衰。　歲月虛しく設けず、此身日に隨ひて衰ふ。
暗老不自覺。直到鬢成絲。　暗に老いて自ら覺らず、直に鬢の絲を成すに到る。

【字解】【一】曲江　前に見ゆ。【二】嘹唳　鳴く聲。【三】晩荷　時すぎた蓮花。離披は十分に開くこと。【四】昔人　晉の潘岳を指す。年三十二の時秋興賦を作り秋懷を述べた。【五】秋懷　秋のおもひ。【六】成絲　白毛になること。

【題義】曲江の邊に住んで秋に感じて作つたのである。元和五年の作であるといふ。

【詩意】曲江の邊の雨あがりの沙草や涼風に舞ふ柳枝を見て、秋の愁を感ずること既に三回であるが、今年も秋が環つて來て蟬が鳴き蓮花が開くのを見聞して、年年秋を悲む情が又ここに蘇つた。昔潘岳は三十二の時に秋興賦を作つて秋を悲んだが、今吾は四十に垂んとしてゐるのだから、秋を悲むのも當然である。歲月は人を待たず、此身は日を逐うて衰へる。いつとはなしに老い行くのも知らず、ぼんやりしてゐる間に、忽ち兩鬢が白くなつてしまふ。

酬張太祝晩秋臥病見寄

張太祝が晩秋病に臥して寄せられしに酬ゆ

高才淹禮寺。短羽翔禁林。　高才禮寺に淹り、短羽禁林に翔る。
西街居處遠。北闕官曹深。　西街居處遠く、北闕官曹深し。
君病不來訪。我忙難往尋。　君病んで來り訪はず、我忙しくして往き尋ね難し。
差池終日別。寥落經年心。　差池たる終日の別、寥落たる經年の心。

露濕綠(七)蕪地。月寒紅樹陰。 露は濕す綠蕪の地、月は寒し紅樹の陰。

況茲獨愁夕。聞彼相思吟。 況んや茲獨愁の夕、彼の相思の吟を聞くをや。

上歎言笑阻。下嗟時歲侵。 上には言笑の阻るを歎じ、下には時歲の侵すを嗟す。

容衰曉窗鏡。思苦秋絃琴。 容は衰ふ曉窗の鏡、思は苦し秋絃の琴。

一章錦(八)繡段。八(九)韻瓊瑤音。 一章錦繡の段、八韻瓊瑤の音。

何以報珍(一〇)重。慚無雙(一一)南金。 何を以てか珍重に報いん、慚づらくは雙南金無きを。

【字解】【一】張太祝　太祝は官名。張籍は貞元十五年、進士の第に登り、太常寺太祝を授けられ、久しうして祕書郎に遷る、詩を作り樂府に長じ警句多し。【二】禮寺　太常寺なり。禮儀を掌る官署。【三】禁林　天子の宮城。【四】北闕　宮城なり。【五】差池　齟齬して合はぬ貌。【六】寥落　さびしき貌。【七】綠蕪　綠の草原。【八】錦繡段　錦の織物。【九】八韻　十六句より成る古詩。瓊瑤は美玉。【一〇】珍重　珍品といふが如し。【一一】雙南金　美金なり。

【題義】張籍が病中白樂天に詩を寄せたので、白樂天が其れに酬いた詩である。

【詩意】君は優れた才能を有するにも拘らず、久しく太常寺太祝といふ微官に淹滯し、我は短才の身を以て却つて天子の左右に奉侍してゐる。君は遠く西街に住んで病に臥し、我は宮中奧深き處に居て職務の爲に忙しいので、互に往來問尋することも出來ず、終日相別れてゐると數年も會はずにゐるやうな物淋しさを感ずる。況んや今は晩秋のことなれば、白露の綠の草原を濕し、寒月の紅樹の陰に輝くのを見て獨り愁ふる時しも、君が相思の情を籠めた詩を讀んでは尙更ら感慨を深うする。君の詩は始には久しく談笑の機會を得ないことを嘆き、終には歲月の迫るのを嗟き、曉の鏡に對しては容貌の衰ふるを悲み、秋琴を彈じては苦しき思を寄せてゐることが述べてある。實に錦の織物にも比すべき玉の如き立派な詩である。かかる珍重すべき立派な詩に對し、何を返禮として贈るべきか。我に美金でもあらば贈ることも出來るが、其の持合せのないのが慚かしい。

立秋日曲江憶元九

立秋の日曲江にて元九を憶ふ

下馬柳陰下。獨上隄上行。 馬より下る柳陰の下、獨り隄上に上りて行く。

故(一)人千萬里。新蟬三兩聲。 故人千萬里、新蟬三兩聲。

城中曲江水。江上江(二)陵城。 城中曲江の水、江上江陵の城。

兩地新秋思。應同此日情。 兩地新秋の思、應に此日の情を同うすべし。

【字解】【一】故人　舊友。元稹を指していふ。【二】江陵　時に元稹は江陵士曹に貶せられてゐた。

【題義】立秋の日に長安の曲江で、江陵に謫居する元稹を憶うて作つた詩である。

【詩意】曲江の柳の陰で馬から下り、隄上に上つて獨り行き、新蟬の聲を聞いて遠方に謫居する君を憶うた。我は長安の曲江に居り、君は南方の江陵に居り、居は南と北とに隔れども、同じく秋に遇うて、同じく悲嘆の情を抱いてゐるであらう。

早朝賀雪寄陳山人

早朝して雪を賀し陳山人に寄す

長安盈尺雪。早朝賀君喜。
長安盈尺の雪、早朝君が喜を賀す。

將赴（一）銀臺門。始出（二）新昌里。
將に銀臺門に赴かんとし、始めて新昌里を出づ。

上堤馬蹄滑。中路蠟燭死。
堤を上りて馬蹄滑に、路に中つて蠟燭死ゆ。

十里向北行。寒風吹破耳。
十里北に向つて行けば、寒風吹いて耳を破る。

（三）待漏午門外。候對三殿裏。
待漏す午門の外、候對す三殿の裏。

鬚鬢凍生冰。衣裳冷如水。
鬚鬢凍りて冰を生じ、衣裳冷なること水の如し。

忽思（四）仙遊谷。暗謝（五）陳居士。
忽ち思ふ仙遊の谷、暗に謝す陳居士。

暖覆褐裘眠。日高應未起。
暖に褐裘に覆はれて眠り、日高うして應に未だ起きざるべし。

【字解】【一】銀臺門　宮門の名。唐時翰林院は此門内に在つた。【二】新昌里　長安の街名。【三】待漏　漏は水時計。羣臣の參朝する者、漏刻移りて宮門の開くを待つこと。午門は宮城の正門。【四】仙遊　山の名。卷九の寄二題盩厔廳前雙松一の註に見ゆ。【五】陳居士　居士は處士に同じ、題の陳山人なり。

【題義】曉に參內して雪の降つたことを賀し奉り、因つて仙遊山中に隱居する陳山人に寄せた詩である。

【詩意】長安の都には深さ一尺に盈つる大雪が降つたので、曉に參內して御喜を陛下に申し上げようと思ひ、銀臺門を指して新昌里の宅を出た。曲江の堤を上れば馬の蹄が雪にすべり、途中で蠟燭の火が消えてしまつた。更に十里の道北に進めば寒風が吹きすさんで耳が裂けるやうである。午門の外に時の到るを待ち、それから宮殿に昇つて賀詞を述べたが、兩鬢には氷がはり衣裳は水に浸したやうになつた。フト浮世をよそに仙遊山中に隱居して暖な褐裘に覆はれ、日の高く上るまで寢てゐる陳山人に對して、敢て一言を呈したい氣持になつた。

初與元九別後。忽夢見之及寤而書適至。兼寄桐花詩。悵然感懷。因以此寄

元九初謫江陵

初めて元九と別れて後忽ち夢に之を見る、寤むるに及んで書適至り、兼ね

て桐花の詩を寄す。悵然として感懷す。因つて此を以て寄す（元九初めて江陵に謫せらる）

（一）永壽寺中語。（二）新昌坊北分。　永壽寺中に語り、新昌坊北に分る。
歸來數行淚。悲事不悲君。　歸來數行の淚、事を悲みて君を悲ます。
（三）悠悠藍田路。自去無消息。　悠悠たる藍田の路、去りてより消息無し。
計君食宿程。（四）已過商山北。（五）　君が食宿の程を計るに、已に商山の北を過ぐ。
昨夜雲四散。千里同月色。　昨夜雲四散し、千里同く月色。
曉來夢見君。應是君相憶。　曉來夢に君を見る、應に是君相憶ふべし。
夢中握君手。問君意何如。　夢中君の手を握り、問ふ君意何如と。
君言苦相憶。無人可寄書。　君言ふ苦に相憶ふ、人の書を寄す可き無しと。
覺來未及說。叩門聲冬冬。（六）　覺め來りて未だ說くに及ばず、門を叩きて聲冬冬。
言是商州使。送君書一封。　言ふ是商州の使と、君が書一封を送る。
枕上忽驚起。顚倒著衣裳。　枕上忽ち驚起し、顚倒して衣裳を著け、
開緘見手札。（七）一紙十三行。　緘を開いて手札を見れば、一紙十三行。

上論遷謫心。下說別離腸。　上に遷謫の心を論じ、下に離別の腸を說く。
心腸都未盡。不暇敍炎涼。　心腸都て未だ盡きず、炎涼を敍するに暇あらず。
云作此書夜。夜宿商州東。　云ふ此書を作るの夜、夜商州の東に宿し、
獨對孤燈坐。（八）陽城山館中。　獨り孤燈に對して坐す、陽城山館の中。
夜深作書畢。山月向西斜。　夜深けて書を作り畢れば、山月西に向つて斜なり。
月下何所有。一樹紫桐花。　月下何の有る所ぞ、一樹の紫桐花。
桐花半落時。復道正相思。　桐花半落つる時、復道ふ正に相思ふと。
（九）殷勤書背後。兼寄桐花詩。　殷勤背後に書し、兼ねて桐花の詩を寄す。
桐花詩八韻。（一〇）思緖一何深。　桐花の詩八韻、思緖一に何ぞ深き。
以我今朝意。憶君此夜心。　我今朝の意を以て、君が此夜の心を憶ふ。
一章三遍讀。一句十回吟。　一章三遍讀み、一句十回吟ず。
珍重八十字。（一一）字字化爲金。　珍重す八十字、字字化して金と爲る。

【字解】【一】永壽寺　寺の名。【二】新昌坊　長安の街名。【三】悠悠　遙なる貌。藍田は縣名。長安の東南九十里に在る。【四】

感傷　初與元九別後悵然感懷因以此寄

食宿程　れとまりする日程。【五】商山　山名。【六】冬冬　門をたたく聲。【七】手札　自筆の手紙。【八】陽城　驛名。前に見ゆ。【九】殷勤　ねんごろなること。【一〇】八韻　韻字の八字あること。即ち十六句より成ること。【一一】八十字　十六句の五言古詩なれば八十字になる。

【題義】元和五年に元稹が江陵に貶せられて長安を去つてから、白樂天が彼を夢に見た。その夢が寤めると元稹から手紙が來て、同時に自作の桐花の詩をも寄せた。因つて慨然として感ずる所あり、此詩を作り、以て元稹に寄せたのである。

【詩意】君と永壽寺内で語り合ひ、新昌坊北で別れ、歸つてからボロボロと涙を流した。それは君の寃罪を恨む公義から出た涙であつて、君の貶謫を悲む私情から出た涙ではない。君は遙遙と藍田縣を過ぎ去り、爾來音信不通であつた。併し君の行程を推測すれば既に商山の北を過ぎたであらう。昨夜は雲が散つて月色千里を照す良夜であつて、僕も君と同じく明月を仰いだが、其夜の夢に君と相見た。君が僕を憶ふ心が通じて我が夢となつたのであらう。僕は夢の中で君の手を握り、君が心中の思を問へば、君は「友を憶ふ情が深いが、さて心中の思を吐き盡して訴へるほどの友がない」と言つた。夢が覺めてまだ人にも語らないうちに門を叩く聲が聞え、「商州から來た使者で御座る」と言つて君からの一封の手紙を置いて行つた。驚いて起きあがり倒に著物を著て、封を切つて見ると一枚の紙に十三行に書いてあり、始には遷謫の意を論じ、終には別離の悲を說いてある。いくら述べても盡きぬほど悲嘆の情に鎖されてゐるので、寒暖の挨拶などを書く暇はなかつた。中に「商州の東なる陽城驛の山館に宿り孤燈に對して此手紙を認めた。認め畢つた時は大分夜も深けて山月が西に傾き、月の下に一本の桐の木があつて紫の花を著けてゐた。桐花の半落つる時復た相思の情に驅られて桐花の詩を作り、丁寧に手紙の裏に書き添へて君に寄せる」と書いてある。桐花の詩は十六句から成り、極めて情思の深い作であつて、此詩を讀んで君の當夜の心を能く察することが出來る。遂に一章を三回通讀し一句を十回も吟じた。實に金玉にも比して珍重すべき好詩である。

【餘論】舊唐書本傳に、居易（樂天）は河南の元稹と相善し。同年に制擧に登り、交情隆厚なり。稹監察御史より謫せられて江陵府士曹掾となる。翰林學士李絳、崔羣、上（憲宗皇帝）の前に於て稹の無罪を面論し、居易は累疏して切諫すれども報せられずとある。

唐宋詩醇には、「一意百折、往復纏綿、極めて平、極めて曲、愈淺く愈深し。兩人覿面對語するも此親切なきを覺ゆるなり。杜甫の李白に於ける、居易の元微之に於ける、皆友誼中の最も篤き者なり。故に兩集中の贈答の詩、眞摯なること乃ち爾り。悲レ事不レ悲レ君の一句、從前の上章論救私情に係らざるを見る。此れは是れ篇中の眼目」と評してある。

和元九悼往 感舊蚊幬作

元九の往を悼むに和す 舊蚊幬に感じて作る

美人別君去。自去無處尋。
美人君に別れ去る、去つてより尋ぬるに處無し。

舊物零落盡。此情安可任。
舊物零落し盡す、此情安んぞ任ふ可けんや。

唯有襭紗幌。塵埃日夜侵。
唯襭紗幌有り、塵埃日夜侵す。

馨香與顏色。不似舊時深。
馨香と顏色と、舊時の深きに似ず。

透影燈耿耿。籠光月沈沈。
影を透して燈耿耿、光を籠めて月沈沈。

中有孤眠客。秋涼生夜衾。
中に孤眠の客有り、秋涼夜衾に生ず。

舊宅牡丹院。新墳松柏林。
舊宅牡丹の院、新墳松柏の林。

夢中咸陽淚。覺後江陵心。
夢中咸陽の淚、覺めて後江陵の心。

含此隔年恨。發爲中夜吟。
此隔年の恨を含み、發して中夜の吟と爲る。

無論君自感。聞者欲沾襟。
君が自ら感ずるに論無し、聞く者襟を沾さんと欲す。

【字解】【一】舊物　形見の品。【二】襭紗幌　即ち蚊幬。【三】耿耿　明なる貌。【四】沈沈　奥深き貌。【五】新墳　新しき墓。【六】咸陽　秦の都。唐の長安なり。【七】江陵　郡名。元稹の謫せられてゐる地。

【題義】元稹が長安にゐた頃に蓄へて置いた美人が死んで、形見の蚊帳が殘つてゐたが、江陵に謫せられてから此蚊帳を見て美人の長逝を悼む詩を作つた。此詩は白樂天が其れに和韻したのである。

【詩意】美人が一たび君を後にして死んでからは、天にも地にも尋ぬべき處なく、形見の品さへ段段に散失するやうになつたことは、堪へ難い心の悲であらう。ただ一つ共に寝た蚊帳が殘つてゐるが、それも塵に汚れて、在りし日の色香の深きには似もやらず。燈をすかし月を籠めて中に一人寝の男がゐて、秋の夜寒を嘆きながら、昔は牡丹の花の咲き誇る小院に、花と容姿を競つてゐたのが、今は松柏の茂つた墓の主となつてしまつたことを偲び、夢に思を長安に馳せて、身は江陵に謫居し、此恨を含んで夜中に美人の長逝を悼む詩を作つた。其詩を讀めば君が自ら感動するは言ふまでもなく、聞く人までも襟を沾さずにはゐられない。

重到渭上舊居

重ねて渭上の舊居に到る

舊居清渭曲。開門當蔡渡。
舊居清渭の曲、門を開けば蔡渡に當る。

十年方一還。幾欲迷歸路。
十年方に一たび還れば、幾んど歸路に迷はんと欲す。

追思昔日行。感傷故游處。
追思す昔日の行、感傷す故游の處。

(三)挿柳作高林。(四)種桃成老樹。　挿柳高林と作り、種桃老樹と成る。

因驚成人者。盡是舊童孺。　因つて驚く成人の者、盡く是れ舊童孺。

試問舊老人。半爲遶村墓。　試に問ふ舊老人、半ば遶村の墓と爲る。

浮生同過客。前後遞來去。　浮生過客に同じく、前後遞に來去す。

白日如弄珠。出沒光不住。　白日珠を弄するが如く、出沒光住らず。

人物日改變。擧目悲所遇。　人物日に改變す、目を擧げて所遇を悲む。

回念念我身。安得不衰暮。　回念して我身を念へば、安んぞ衰暮せざるを得ん。

(五)朱顏銷不歇。白髮生無數。　朱顏銷して歇まず、白髮生じて數無し。

唯有山門外。三峰色如故。　唯有り山門の外、三峰色故の如し。

【字解】【一】渭上　渭水のほとり。渭水は長安に在る。【二】蔡渡　わたし場の名。【三】挿柳　自分がもと挿した柳。【四】種桃　嘗て植ゑた桃。【五】朱顏　紅顏に同じ。若い顏色。

【題義】樂天は貞元の末に渭水の上に卜居し、其後他に居を移したが、元和六年母の喪に服する爲に渭上に退居した。その時の作であらう。

【詩意】吾がもとの住居は渭水の曲に在つて、門を開けば丁度蔡渡と相對してゐる。十年ぶりで還つて見ると、大分樣子が變つて殆ど道に迷ひさうだ。昔散歩したことを思ひ遊んだ處を見などして無量の感慨を起した。見れば自分の挿して置いた柳が高い林となり、手づから植ゑた桃が大木になつてゐる。殊に驚いたことは今の成人は皆昔の子供であり、昔の老人は半は村のまはりに散在する墓の主になつてゐることだ。人生は旅人と同じで往來先後定めなく、月日は曲取りの珠のやうで、ちらりとする間に過ぎ去つてしまふ。人も物も日に變り改まり目を擧げて見れば驚き悲まざるを得ない。吾が身の老衰したのも不思議はない。紅顏は去つて跡なく白髮のみいや增しに生える。ただいつ見ても變らないのは山門の外の山峰のみである。

白髮

白髮　はくはつ

白髮知時節。暗與我有期。　白髮時節を知り、暗に我と期する有り。

今朝日陽裏。梳落數莖絲。　今朝日陽の裏、數莖の絲を梳落す。

家人不慣見。憫默爲我悲。　家人見るに慣れず、憫默して我が爲に悲む。

我云何足怪。此意爾不知。　我云ふ何ぞ怪むに足らん、此意爾知らず。

凡人年三十。外壯中已衰。　凡そ人年三十なれば、外壯なるも中已に衰ふ。

但思寢食味。已減二十時。　但寢食の味を思ふに、已に二十の時に減れり。

況我今四十。本來形貌羸。　況んや我今四十、本來形貌羸る。

書魔昏兩眼。酒病沈四肢。　書魔兩眼を昏うし、酒病四肢を沈め、

親愛日零落。在者仍別離。　親愛日に零落し、在る者も仍は別離するをや。

身心久如此。白髮生已遲。　身心久しく此の如し、白髮生ずること已に遲し。

由來生老死。三病長相隨。　由來生老死、三病長く相隨ふ。

除却無生念。人間無藥治。　無生の念を除却すれば、人間に藥治無し。

【字解】【一】無生念　卷九の早梳頭の無生心に同じ。

【題義】白髮の生じたことから、人は宜しく生死を超逸すべきことを述べた詩である。

【詩意】白髮はチャンと時節を心得てゐて、我と舊約でもあるものの如くに我が頭上にやつて來た。今朝日あたりのよい處で髮を梳つてゐた所が、バラバラと五六本白髮が落ちた。家族の者は始めて見たので、皆びつくりして物も言はずに先づ我が老衰を悲んだ。因つて我はかう言つて聞かせた。「白髮が生えるのは敢て怪むに足らない。お前等は其譯を知るまいから言つて聞かせるが、一體人は三十になれば、外見は達者なやうでも中は既に衰へてゐるのだ。だから睡眠や飲食の快味を考へて見ても、二十歳頃よりは遙に劣つてゐる。まして我は今年四十であつて、本來が瘦せ枯れてゐる所へ、讀書魔の爲に兩眼を昏まし、飲酒病の爲に身體を損じ、親友は日に日に死亡し、生き殘つてゐる者は遠く離れて遇ふ機會もないといふ狀態であるから、寧ろ白髮の生え方が遲いくらゐなのである。由來人は生老死といふ三厄を帶びてゐるのだから、佛理を悟つて生死の界を超脫するがよいので、それを措いては他に治療藥はないのだ」と。

秋日

池殘寥落水。窗下悠揚日。　池には殘る寥落の水、窗下悠揚の日。

嫋嫋秋風多。槐花半成實。　嫋嫋として秋風多く、槐花半實と成る。

下有獨立人。年來四十一。　下に獨り立てる人有り、年來四十一。

【字解】【一】寥落　荒れ果てて淒じき貌。【二】悠揚　日の沒せんとする貌。【三】嫋嫋　秋風の音。

【題義】秋日獨居無聊の狀を寫した詩である。

【詩意】荒れ果てて水の涸れた池、今にも沈まんとする夕日、秋風に吹かれる槐の花は半實になつてゐる。この景色に對して獨り立ちさまよつてゐる人がある。年の頃は四十一で最早盛の春も過ぎてゐる。

將之饒州(一)江浦夜泊　　將に饒州に之かんとして江浦に夜泊す

明月滿深浦。愁人(二)臥孤舟。　明月深浦に滿つるとき、愁人孤舟に臥す。
(三)煩寃寢不得。夏夜長於秋。　煩寃して寢ね得ず、夏夜秋よりも長し。
苦乏衣食資。遠爲江海游。　衣食の資に乏しきに苦み、遠く江海の游を爲す。
光陰坐遲(四)暮。鄉國行阻(五)修。　光陰坐ながら遲暮、鄉國行くゆく阻修。
身病向鄱陽。家貧寄徐州。　身病んで鄱陽に向ひ、家貧にして徐州に寄る。
前事與後事。豈堪心併憂。　前事と後事と、豈に心の併せ憂ふるに堪へんや。
憂來起長望。但見江水流。　憂へ來りて起つて長望すれば、但江水の流るるを見るのみ。
雲樹靄蒼蒼。煙波淡悠悠。　雲樹靄として蒼蒼たり、煙波淡として悠悠たり。
故園迷處所。一念堪白頭。　故園處所に迷ふ、一念白頭なるに堪へたり。

【字解】【一】饒州　江西省鄱陽縣の地。江浦は江蘇省江寧府に屬す。【二】愁人　愁ある人。樂天自ら謂ふ。【三】煩寃　心に煩悶すること。【四】遲暮　年よること。【五】阻修　遠く隔たること。

【題義】この詩は貞元十五年頃の作で、饒州に赴かんとして江浦に舟泊した景況を述べたのである。年譜に據れば、樂天の兄の幼文が江西省の浮梁縣主簿となり、樂天は之に從行したとあるから、其時に作つたのであらう。當時家族の徐州（今の江蘇省銅山縣）にゐたことは詩中にも述べてある。

【詩意】明月の隈なく深浦を照す時、孤舟に臥せば、心が憂悶して眠られず、夏の夜が秋の夜よりも長く感せられる。何とかして生活の資を得たいと思つて江海の旅に出たが、徒に年を取るばかりで一足ごとに鄉里が遠くなるのが心細い。而も身は病を抱いて鄱陽に向ひ、家族は徐州に寄託してゐるので、あとさきの事を考へると、どちらを向いても憂愁に堪へない。起つて鄉里の方を望めば、ただ江水の流れるのを見るばかりで、陸地は雲樹蒼蒼として眼を遮り、水上は煙波遠くして窮りなく、故鄉は終に見ることが出來ず、一念爲に頭髮を白くする。

思歸　時初爲校書郎　　歸を思ふ　時に初めて校書郎と爲る

養無晨昏(一)膳。隱無伏(二)臘資。　養ふに晨昏の膳無く、隱るるに伏臘の資無し。

逢求及親祿。（三）僶俛來京師。　逢に親に及ぶの祿を求め、僶俛して京師に來る。
薄俸未及親。別家已經時。　薄俸未だ親に及ばず、家に別れて已に時を經。
冬積溫席戀。（四）春違（五）采蘭期。　冬は溫席の戀を積み、春は采蘭の期に違ふ。
夏至一陰生。（六）稍稍夕漏遲。　夏至一陰生じ、稍稍として夕漏遲し。
（七）塊然抱愁者。長夜獨先知。　塊然として愁を抱く者、長夜獨り先づ知る。
（八）悠悠鄉關路。夢去身不隨。　悠悠たる鄉關の路、夢に去れども身は隨はず。
坐惜時節變。蟬鳴槐花枝。　坐に惜む時節の變ずるを、蟬は鳴く槐花の枝。

【字解】【一】長昏　朝夕なり。【二】伏臘　伏は夏、臘は冬の物日。【三】僶俛　勉强する貌。【四】溫席　袁山松後漢書に、羅威の母年七十、天寒ければ常に身を以て席を溫め、而る後其處を授くとある。【五】采蘭　晉書皇甫謐傳に、謐著述を以て務となす。武帝頻に詔を下して敦迫す。謐上疏して云く、陛下棒を拔きて蘭を採り、并せて蕭艾を收む云云とある。【六】稍稍　段段少しづつ。夕漏は日の暮れる時刻。【七】塊然　孤立の貌。【八】悠悠　遙なる貌。

【題義】鄉里に歸りたいといふ情を述べた詩で、貞元十八年、初めて校書郎を授けられた頃の作である。

【詩意】親を養はうとすれば朝晩供すべき食膳がなく、隱居して仕へまいとすれば生活の資力がない。逢に官に就き親にまで及ぶ所の俸祿を食まうと志して長安の都に來て、官には就いたが至つて薄俸であるから親にまでは及ばず、家を離れて久しく時を送り、冬は親を戀ひ慕つて席を溫めんことを欲し、春は採蘭の期に違つて昇進も出來ないでゐる。今や夏至になつて陰氣が生じ（夏至には陽氣が極まつて陰氣が生じ、冬至には陰氣が極まつて陽氣が生ずると周易にある。）段段日の暮れるのが少しづつ早くなつて、夜の時間のたつのがだんだん遲くなるのであるが、愁を抱いて獨居する身には夜の長くなることが人より先に分るのである。幾山川を隔つる鄉里には夢では歸ることが出來ても身は夢と伴はない。槐の枝に鳴く蟬の聲を聞くにつけても、坐に時節の移るのが惜まれる。

（一）冀城北原作　冀城北原の作

野色何（二）莽蒼。秋聲亦（三）蕭疏。　野色何ぞ莽蒼、秋聲亦蕭疏。
風吹黃埃起。落日驅（四）征車。　風吹いて黃埃起り、落日征車を驅る。
何代此開國。封疆百里餘。　何の代にか此に國を開く、封疆百里餘。
古今不相待。朝市無常居。　古今相待たず、朝市常居無し。
昔人城邑中。今變爲丘墟。　昔人城邑の中、今變じて丘墟と爲る。

昔人墓田中。今化爲里閭。　昔人墓田の中、今化して里閭と爲る。

廢興相催迫。日月互居諸。(五)　廢興相催迫し、日月互に居諸す。

世變無遺風。焉能知其初。　世變じて遺風無し、焉んぞ能く其初を知らん。

(六)行人千載後。懷古空躊躇。　行人千載の後、古を懷うて空しく躊躇す。

【字解】【一】冀城　冀州の古城。今の河南省臨漳縣の西南に在る。【二】莽蒼　草の色。【三】蕭疎　淋しき親。【四】征車　行旅の車。【五】居諸　居も諸も助辭なり。詩經邶風日月篇に、日居月諸、照臨下土とある。【六】行人　旅人。白樂天自ら謂ふ。千載は千年。

【題義】冀州城北の野原を過ぎ感ずる所ありて此詩を作つた。

【詩意】野原が青青と茂り、秋風が淋しく吹いて塵埃を立ててゐる處を、夕日の前に車を走らせて道を急ぐ。ここに、冀州城を建てて百里の境域を治めたのは遠い昔のことであらうが、歲月は移り易り朝市も常住のものではないから、昔城邑であつた所が今は變じて丘墟となり、昔墓地であつた所が今は化して城邑となり、興廢常なく日月去來し、變遷して跡を留めないので、誰も明に其初を知る者はない。今吾千載の後に此地を過ぎ、古を懷うし空しく低回顧望するのみである。

客路感秋寄明準上人　客路秋に感じ明準上人に寄す

日暮天地冷。雨霽山河淸。　日暮れて天地冷に、雨霽れて山河淸し。

長風從西來。草木凝秋聲。　長風西より來り、草木秋聲を凝らす。

已感歲倏忽。(一)復傷物凋零。(二)　已に歲の倏忽なるを感じ、復た物の凋零するを傷む。

孰能不憯悽。(三)天時牽人情。　孰か能く憯悽せざらん、天時人情を牽く。

借問空門子。(四)何法易修行。　借問す空門の子、何の法か修行し易く、

使我忘得心。不敎煩惱生。　我をして心を忘れ得しめ、煩惱をして生せしめざる。

【字解】【一】倏忽　迅速なること。【二】凋零　凋落なり。【三】憯悽　いたみかなしむ。【四】空門子　佛僧をいふ。明準上人を指して言ふ。

【題義】旅の途中に在りて秋の淋しさに感じ、明準上人に寄せた詩である。

【詩意】今や日暮れ雨霽れて天地山川が殊に淸冷を加へた。折しも西の方から風が吹いて來て、草木が秋の聲を立ててゐる。この色を見、この聲を聞けば、歲月の迅速なるに感じ、萬物の凋落を傷み、人をして心を痛ましめる。天時は此の如く人情を牽くのである。因つて上人に尋ねるが、我をして吾が心を忘れしめて、煩惱を起さしめないやうにするには、どの敎法が最も修行し易いであらうか。

游(一)襄陽懷(二)孟浩然

楚山碧巖(三)巖。漢水碧湯(四)湯。
秀氣結成象。孟(五)氏之文章。
今我諷遺文。思人至其鄉。
清風無人繼。日暮空襄陽。
南望鹿門山。藹若有餘芳。
舊隱不知處。雲深樹蒼蒼。

襄陽に游びて孟浩然を懷ふ

楚山碧にして巖巖、漢水碧にして湯湯。
秀氣結んで象を成すは、孟氏の文章なり。
今我遺文を諷し、人を思うて其鄉に至る。
清風人の繼ぐ無く、日暮れて襄陽空し。
南鹿門山を望めば、藹として餘芳有るが若し。
舊隱處を知らず、雲深うして樹蒼蒼たり。

【字解】【一】襄陽　湖北省の縣名。【二】孟浩然　唐の襄陽の人、少くして節義を好み鹿門山に隱る。年四十のとき京都に遊び、嘗て大學に於て詩を賦す。一座嘆服す。開元二十八年卒す。【三】巖巖　高く聳ゆる貌。【四】湯湯　水の盛に流るる貌。【五】孟氏　孟浩然。

【題義】孟浩然の故鄉なる襄陽に遊んで孟浩然を追懷した詩である。

【詩意】襄陽に來て見ると楚山が巖巖と聳え立ち、漢水が湯湯と流れてゐる。この山水秀麗の氣が凝つて現れたものが即ち孟浩然の詩である。余は其遺篇を讀んで追慕の情に堪へず、其鄉里なる襄陽に來たのであるが、今は誰も其風を承け繼ぐ者がなくて、襄陽のあたりは蕭條として日の暮れたやうである。ただ南の方の鹿門山を望み見れば、今尙ほ餘芳を存するやうに思はれる。併し其の隱居した場所は知る由もなく、樹木が蒼蒼として雲に聳ゆるばかりである。

秋暮西歸途中書情

耿(一)耿旅燈下。愁多常少眠。
思鄉貴早發。發在雞鳴前。
九月草木落。平(二)蕪連遠山。
秋陰和曙色。萬木蒼(三)蒼然。
去秋偶東遊。今秋始西(四)旋。
馬瘦衣裳破。別家來二年。
憶歸復愁歸。歸無一囊錢。
心雖非蘭(五)膏。安得不自然。

秋暮西歸の途中情を書す

耿耿たる旅燈の下、愁多くして常に眠少し。
鄉を思うて早發を貴ぶ、發すること雞鳴の前に在り。
九月草木落ち、平蕪遠山に連る。
秋陰曙色に和し、萬木蒼蒼然たり。
去秋偶東遊し、今秋始めて西旋す。
馬瘦せ衣裳破れ、家に別れて來二年。
歸を憶うて復歸を愁ふ、歸つて一囊の錢無し。
心は蘭膏に非ずと雖も、安んぞ自ら然えざるを得ん。

【字解】【一】耿耿　明なる貌。【二】平蕪　平野。【三】蒼蒼然　青青としてゐる貌。【四】西旋　西に歸る。【五】蘭膏　蘭

香で煉つた油。楚辭に、蘭膏明燭、華容備些とある。

【題義】秋の末に西方の郷里に歸る途中で情思を述べた詩で、未だ志を得ざる少年時代の作である。

【詩意】枕頭の燈火があかあかと輝き、胸中の愁が燃え盛つて少しも眠られない。懷鄕の思ひに驅られて朝は雞の鳴く前に早く宿を立つた。時恰も晩秋九月のことで草木の葉も落ち盡し、平野が遠山と連つて一望空闊。秋冷と曙色と相和して、見渡す限り蒼蒼然としてゐる。去年の秋東に旅して今西の鄕里に歸るのであるが、家を離れて二年の間に、馬も瘦せ旅衣も破れてしまつて、實は歸りたくもあり歸りたくもないのだ。空の財布を懷にしての歸鄕は決して華華しいものではない。吾が心は膏ではないが、自ら燃えざるを得ないではないか。

秋懷

月出照北堂。光華滿墀墀(一)。　月出でて北堂を照し、光華墀墀に滿つ。
涼風從西至。草木日夜衰。　涼風西より至り、草木日夜衰ふ。
桐柳減綠陰。蕙蘭(二)消碧滋。　桐柳綠陰を減じ、蕙蘭碧滋を消す。
感物私自念。我心亦如之。　物に感じて私に自ら念へば、我が心亦之の如し。
安得長少壯。盛衰迫天時。　安んぞ少壯を長うするを得ん、盛衰天時に迫る。
人生如石火(三)。爲樂常苦遲。　人生石火の如し、樂みを爲すこと常に苦だ遲し。

【字解】(一)墀墀　堂下の階段。(二)蕙蘭　竝に香草の名。碧滋の滋は茂る意。(三)石火　石を打つて發する火。忽ち消える故、極めて短き時間の意に用ふ。

【題義】秋の感想を述べた詩である。

【詩意】月の光が北堂の階段までも隈なく照らしてゐる。冷かな風が西から吹いて來て草木が日增に枯れて行く。柳も桐も綠蔭が薄くなり、蕙も蘭も色香が褪せてしまふ。此等の景物の變衰を見て翻つて吾が心を思へば、吾が心も此と同じで、いつまでも同じ若さを保つことは出來ない。盛衰の運は天時をさへ左右するのである。まして人生は尙更で、まるで電光石火のやうに果敢ない。だから出來る時に樂みを爲すがよいのだ。

別楊穎士・盧克柔・殷堯藩

楊穎士・盧克柔・殷堯藩に別る

倦鳥暮歸林。浮雲晴歸山。　倦鳥暮れて林に歸り、浮雲晴れて山に歸る。
獨有行路子(一)。悠悠(二)不知還。　獨り行路の子有り、悠悠として還るを知らず。

人生苦營營。（三）終日羣動間。（四）　人生苦だ營營、終日羣動の間。

所務雖不同。同歸於不閑。　務むる所同じからずと雖も、歸を不閑に同じうす。

（五）扁舟來楚鄕。（六）疋馬往秦關。　扁舟楚鄕に來り、疋馬秦關に往く。

（七）離憂繞心曲。（八）宛轉如循環。　離憂心曲を繞り、宛轉として循環の如し。

且持一杯酒。聊以開愁顏。　且つ一杯の酒を持して、聊か以て愁顏を開かん。

【字解】【一】行路子　他鄕に旅寓する人。【二】悠悠　遙なる貌。【三】營營　汲汲といふが如し、あくせくすること。【四】羣動　多くの物のどよめき。【五】扁舟　小舟。【六】疋馬　匹馬に同じ、一匹の馬。秦關は長安をいふ。【七】離憂　離別の憂。駱賓王の詩に、當歌悽別曲。對酒泣離憂。とある。【八】宛轉　それからそれところがること。

【題義】楊穎士・盧克柔・殷堯藩三人に別れて長安に往かんとする時に作つた詩である。

【詩意】鳥は飛ぶに倦めば故の林に歸り、雲は空が晴れて來れば山に歸る。ただ行旅の人たる吾は一たび故鄕を離れて、還るを知らずに放浪してゐる。人は皆物慾に驅られ羣動の間に伍して終日齷齪として安んずる間がない。その爲す所は各異るけれども閑暇のないことは皆同じである。我も扁舟に乘つて此楚地に來たが、これから更に匹馬に跨つて長安に往かうとする。今諸君と別るるに方り、離別の憂が宛轉として心をめぐつて去らない。まア酒でも飮んでうさはらしを致さう。

題贈定光上人

二十身出家。四十心離塵。　二十にして身家を出で、四十にして心塵を離る。

得徑入大道。（一）乘此不退輪。（二）　徑を得て大道に入り、此に乘じて退輪せず。

一坐十五年。林下秋復春。　一坐十五年、林下秋復春。

春花與秋氣。不感無情人。　春花と秋氣と、無情の人を感ぜしめず。

我來如有悟。潛以心照身。　我來つて如し悟る有らば、潛に心を以て身を照さん。

誤落聞見中。憂喜傷形神。（三）　誤つて聞見の中に落ち、憂喜形神を傷ましむ。

安得遺耳目。冥然反天眞。（四）　安んぞ耳目を遺るるを得て、冥然として天眞に反らん。

【字解】【一】大道　佛道なり。【二】退輪　退轉に同じ。【三】形神　肉體と精神。【四】天眞　生れたままの純粹なる性。蘇軾の詩に、天眞爛漫是我師とある。

【題義】定光上人の畫像に題し、且つ上人に贈るといふ意である。

【詩意】上人は二十の時に出家し、四十になつて始めて塵俗を超脫し、門徑を得て佛道の奧儀を悟入し、不退轉の勇猛心を以て修業を積んでゐる。既に林下に坐禪を組んでから十五年になるが、春花も秋氣も情念を離れた大悟の人を左右することは出來ない。實に立派な高僧である。我も上人の指導を

受けて悟が開けたならば、身を以て心を役するの愚を免れ、心を以て身を照すやうになれるであらう。今は耳目に誤られて、徒に喜憂して身心を傷けてゐるけれども、早く耳目の慾を遣れて天眞に復歸するやうになりたいものだ。

祇(一)役駱口驛喜蕭侍御書至兼覩新詩吟諷通宵因寄八韻　時爲盩厔尉

駱口驛に祇役し、蕭侍御の書至るを喜び、兼ねて新詩を覩て吟諷すること通宵、因つて八韻を寄す　時に盩厔の尉たり

日暮心無(二)憀。吏(三)役正營營。　日暮れて心無憀、吏役正に營營。
忽驚芳(四)信至。復與新詩幷。　忽ち驚く芳信至り、復新詩と幷す。
是時天無雲。山館有月明。　是時天雲無く、山館月明有り。
月下讀數(五)遍。風前吟一聲。　月下に讀むこと數遍、風前に吟ずること一聲。
一吟三四歎。聲盡有餘淸。　一吟三四歎、聲盡きて餘淸有り。
雅哉君子文。詠性不詠情。　雅なる哉君子の文、性を詠じて情を詠せず。
使我靈(六)府中。鄙(七)悋不得生。　我が靈府の中をして、鄙悋生ずるを得ざらしむ。
始知聽韶(八)濩。可使心和平。　始めて知る韶濩を聽き、心をして和平ならしむ可きを。

【字解】【一】祇役　役目の爲に往くこと。駱口驛は陝西省盩厔縣の西南に在る。【二】無憀　無聊に同じ。淋しく樂まぬこと。【三】吏役　官吏としての務。營營は忙しきこと。【四】芳信　手紙。【五】數遍　數回通讀する。【六】靈府　心をいふ。【七】鄙悋　悋は吝に同じ。【八】韶濩　韶は舜の音樂、濩は殷の湯王の音樂。

【題義】樂天が盩厔縣尉の官に在りし日、役目の用事で駱口驛に行き、適蕭侍御から手紙を貰つたことを喜び、手紙に添へてよこした詩を一晩中賞吟して、その返事かたがた八韻十六句の詩を寄せたのである。

【詩意】日が暮れて心に無聊を感じ、役目の仕事にくさくさしてゐる所へ、御手紙と新作の詩を戴いて驚喜した。丁度天に雲なく月が冴えてゐたので、月と風とに對して數回吟誦し、吟じ畢つては贊歎した。實に立派な君子の詩で、癡情を棄てて天性を詠出してある。之を吟誦した結果、我が心をして鄙吝の情を起さざらしめた。是に於てか、立派な音樂を聽けば心を和平ならしめるものだといふことも始めてわかつた。

酬李少府曹長官舍見贈　李少府曹長が官舍にて贈らるるに酬ゆ

(一)低腰復斂手。心體不遑安。　腰を低れ復た手を斂め、心體安んずるに遑あらず。
一落(二)風塵下。始知爲吏難。　一たび風塵の下に落ち、始めて吏と爲るの難きを知る。
公事與日長。(三)宦情隨歲闌。　公事日と長じ、宦情歲に隨つて闌なり。
惆悵(四)靑袍袖。(五)芸香無半殘。　惆悵す靑袍の袖、芸香半殘る無きを。
賴有李夫子。此懷聊自寬。　賴に李夫子有り、此懷聊か自ら寬うす。
(六)兩心如止水。彼此無波瀾。　兩心止水の如く、彼此波瀾無し。
往往簿書暇。相勸强爲歡。　往往簿書の暇、相勸めて强ひて歡を爲す。
白馬晚蹋雪。綠觴春煖寒。　白馬晚に雪を蹋み、綠觴春寒を煖む。
戀月夜同宿。愛山晴共看。　月を戀ひて夜同じく宿し、山を愛して晴に共に看る。
野性自相近。不是爲同官。　野性自ら相近し、是れ同官なるが爲ならず。

【字解】〔一〕低腰　腰を折りて上官に媚びること。斂手は手をひつこめて、したいこともせずにゐること。〔二〕風塵　官途をいふ。〔三〕宦情　出仕を思ふ心。闌は盡きんとすること。〔四〕靑袍　官服なり。〔五〕芸香　芸は香草の名、書中に挿みて蟲害を除くに用ふ。〔六〕兩心　君と僕との心。止水は流れずに靜止してゐる水。

【題義】少府は宮中の服御食膳の事を掌る官名、尙書省に屬す。曹長とは尙書の丞郎郎中相呼ぶの語。この詩は李少府が其官舍で樂天に詩を贈つたので、其れに酬いたのである。

【詩意】官吏となれば、腰を折つて上官に媚びたり、したい事もせずに愼んでゐたりしなければならないので、身も心も安まる暇がない。一たび官吏になつて見て、始めてらくでないことがわかつた。役目の仕事は日增に殖えるので、仕官を望んだ心も今は大分褪めて來て、書物も讀まないので書物の移香も半は消え去つたことを悲んでゐる。ただ幸に君がゐるので、聊か自ら慰められるのだ。君と僕との心は明鏡止水の如く、兩者の間に少しの波風も立たず。職務の暇には相勸めて歡樂を倶にし、或は白馬に跨つて雪見に出かけたり、或は綠酒を酌んで春寒を煖めたり、月を戀うては共に宿し、山を愛しては共に眺めなどしてゐる。要するに野性が相似てゐるからなので、ただ同官だからといふわけではない。

留別　留別

秋涼卷(一)朝簟。春煖撤夜衾。　秋涼しくして朝簟を卷き、春煖にして夜衾を撤す。
雖是無情物。欲別尙(二)沈吟。　是無情の物と雖も、別れんと欲して尙は沈吟す。

況與有情別。別隨情淺深。　況んや有情と別るるをや、別は情の淺深に隨ふ。

二年歡笑意。一旦東西心。　二年歡笑の意、一旦東西の心。

獨留誠可念。同行力不任。　獨り留まれば誠に念ふ可し、同じく行けば力任へず。

前事詎能料。後期諒難尋。　前事詎ぞ能く料らん、後期諒に尋ね難し。

惟有潺湲涙。不惜共沾襟。　惟潺湲たる涙有り、惜まずして共に襟を沾す。

【字解】【一】朝簟　簟は竹片を編んで作つた敷物。たかむしろ。【二】沈吟　思案に耽けること。【三】前事　將來の事。過去の事の意にも用ふ。【四】後期　後日の再會。【五】潺湲　水の流るる聲。

【題義】留別とは旅立つ人が留まり居る人に別を告げるのをいふ。

【詩意】秋冷になつて簟を卷き藏め、春暖になつて夜具を取片附けるなど、無情の物と別れるさへ思案に暮れるのであるから、有情の人と別れるのは尙更哀れの深いわけである。君とは二年の間歡笑を俱にしたが、忽ち東西に別れねばならない。獨り後に殘れば思慕の情に堪へぬであらうが、一緒に行くことは事情が許さない。將來の事は豫想がつかないから、再會も殆ど期し難い。ただ涙を惜まず泣き、共に袖を絞つて別れよう。

曉別

曉鼓聲已半。離筵坐難久。　曉鼓聲已に半なり、離筵坐すること久しうし難し。

請君斷腸歌。送我和涙酒。　君に請ふ斷腸の歌、我を送る涙に和する酒。

月落欲明前。馬嘶初別後。　月は明けんと欲する前に落ち、馬は初めて別るる後に嘶く。

浩浩暗塵中。何由見回首。　浩浩たる暗塵の中、何に由つてか首を回らすを見ん。

【字解】【一】離筵　送別の宴席。【二】浩浩　廣大の貌。

【題義】曉に友に別れて去る時の詩であらう。

【詩意】夜明を告げる鼓の聲も旣に鳴つた。別は惜しいが此席も切り上げねばならない。サア君の斷腸の歌と、我を送る涙に混つた酒とが所望ぢや。折から月も落ち夜も明け、相別れて去れば一聲高く馬が嘶いた。濛濛と塵埃が立ちこめてゐるから、後髮を引かれて振り向いても、恐らく吾が顏は見えまい。

北園

北園東風起。雜花次第開。　北園東風起り、雜花次第に開く。

心知須臾落。一日三四來。　心に須臾にして落つるを知り、一日に三四たび來る。

花下豈無酒。欲酌復遲廻。(一)　花下豈に酒無からんや、酌まんと欲して復た遲廻す。

所思眇(二)千里。誰勸我一杯。　思ふ所眇として千里、誰か我に一杯を勸めん。

【字解】【一】遲廻　躊躇すること。【二】眇千里　遙に千里を隔つること。

【題義】北園に花を觀て友を懷うた詩である。

【詩意】北園には春風が吹くと樣樣の花が次第に開く。吾は花の壽命の短いことを知つてゐるから、散らぬうちにと思つて、一日に三四回も見に來る。花の下に酒はあれども、我が思ふ友は遠く千里を隔てて、此處には一杯を勸めてくれる親しい友もないので、飲む氣にもならない。

惜栯李花

栯李花を惜む

花細而繁、色艷而黯、亦花中之有思者、速衰易落、故惜之耳

花は細にして繁く、色艷にして黯し、亦花中の思ひ有る者なり。速に衰へて落ち易し、故に之を惜しむのみ

樹小花鮮妍。香繁條軟弱。　樹小にして花鮮妍、香繁くして條軟弱。

高低(一)二三尺。重疊千萬蕚。　高低二三尺、重疊千萬蕚。

朝艷藹(二)霏霏。夕凋紛漠漠。(三)　朝は艷にして藹として霏霏、夕に凋んで紛として漠漠。

辭枝朱粉細。覆地紅綃(四)薄。　枝を辭して朱粉細に、地を覆うて紅綃薄し。

由來好顏色。常苦易銷鑠。　由來好顏色、常に苦む銷鑠し易きを。

不見萇(五)蕩花。狂風吹不落。　見ずや萇蕩花、狂風吹けども落ちず。

【字解】【一】高低　高さ。【二】藹霏霏　盛に茂る貌。【三】紛漠漠　散りて跡なき貌。【四】紅綃　紅の薄絹。【五】萇蕩花　草花の名。

【題義】栯李は梅の一種。その花艷なれども落ち易し。故に之を惜んだ詩である。

【詩意】木は小さいけれども花は美しく、枝は軟弱だけれども香は高く、木の高さは二三尺だけれども花は千萬輪も重り咲き、朝は艷麗で盛であるが、夕には凋れて跡なく散つてしまふ。散つては赤い粉が細に地に敷き、紅の薄絹で地を覆つたやうだ。由來人でも花でも美しいのは壽命が短いものだ。だから醜い萇蕩花などは、いくら狂風が吹いても落ちはしない。

照鏡

鏡に照す

皎皎(一)青銅鏡。斑斑(二)白絲鬢。　皎皎たる青銅の鏡、斑斑たる白絲の鬢。

豈復更藏年。實年(四)君不信。　豈に復た更に年を藏さんや、實の年をば君信せず。

【字解】(一) 皎皎　明なる貌。(二) 斑斑　白と黑とまじる貌。(三) 君　鏡を指していふ。

【題義】己の顏を鏡に照して見たことを述べた詩である。

【詩意】ひかひかと光る青銅の鏡(昔の鏡は皆金屬製である)に、吾が白毛まじりの胡麻鹽頭が寫つた。自分は年齡を匿してゐるのではないが、鏡は吾が年齡を信じないで、年齡以上に老けて寫してゐる。

新秋

新秋

西風飄一葉。庭前颯已涼。　西風一葉を飄し、庭前颯として已に涼し。

風池明月水。衰蓮白露房。　風池明月の水、衰蓮白露の房。

其奈江南夜。(一)緜緜自此長。　其れ江南の夜を奈んせん、緜緜として此より長からん。

【字解】(一) 緜緜　長く續く貌。

【題義】新秋の景況を述べた詩である。

【詩意】西風が桐の一葉を飄し、庭前が何となく涼しくなつた。池の漣には明月がうつり、蓮の實には白露が置いてゐる。追追夜が長くなるが、獨り江南に客たる吾は如何にして此長夜を過ごさうか。

夜雨

夜雨

早蛩啼復歇。殘燈滅又明。　早蛩啼いて復た歇み、殘燈滅えて又明なり。

隔牖知夜雨。芭蕉先有聲。　牖を隔てて夜雨を知る、芭蕉先づ聲有り。

【題義】秋の夜に雨の降り出したことを述べた詩である。

【詩意】蛩が啼いては又歇め、燈火が消えかかつては又明るくなる。窓を隔てて聽けば雨が降り出したらしい。芭蕉の葉音が何よりの證據だ。

秋江送客

秋江客を送る

(一)秋鴻次第過。哀猿朝夕聞。　秋鴻次第に過ぎ、哀猿朝夕に聞く。

是日孤舟客。此地亦離羣。　是日孤舟の客、此地亦羣を離る。

(二)濛濛潤衣雨。(三)漠漠冒帆雲。　濛濛たり衣を潤す雨、漠漠たり帆を冒す雲。

不醉(四)潯陽酒。煙波愁殺人。　潯陽の酒に醉はずんば、煙波人を愁殺せん。

【字解】【一】秋鴻　秋の雁。【二】濛濛　雨の降る貌。【三】漠漠　暗き貌。【四】潯陽　郡名。今の江西省九江縣治。樂天は當時ここの司馬であつた。

【題義】秋潯陽江を舟出する人を送る詩である。

【詩意】今や秋となつて雁が次第に南を指して飛び、哀しげな猿の聲が朝夕聞える。この悲秋に際して一人の客が孤舟を泛べて此地を旅立つ。折から雨は濛濛として衣を潤し、雲は漠漠として帆を冒し、一入悲を添へてゐる。江上の煙波が君を愁へしめるであらうほどに、酒でも飲んで紛らすがよからう。

感逝寄遠（一）　寄通州元侍御・果州崔員外・澧州李舍人・鳳州李郎中

逝に感じて遠きに寄す　通州の元侍御・果州の崔員外・澧州の李舍人・鳳州の李郎中に寄す

昨日聞甲死。今朝聞乙死。　昨日は甲の死を聞き、今朝は乙の死を聞く。
知識（二）三分中。二分化爲（三）鬼。　知識三分が中、二分は化して鬼と爲る。
逝者不復見。悲哉長已矣。　逝く者復び見ず、悲哉長へに已みぬ。
存者今如何。去我皆萬里。　存する者今如何、我を去つて皆萬里。
平生知心者。屈指能有幾。　平生心を知る者、指を屈して能く幾か有る。
通果澧鳳州。眇然（四）四君子。　通果澧鳳州、眇然たる四君子。
相思俱老大。浮世如流水。　相思ふに倶に老大、浮世流水の如し。
應歎舊交遊。凋零（五）日如此。　應に歎ずべし舊交遊、凋零日に此の如きを。
何當一杯酒。開眼笑相視。　何か當に一杯の酒、眼を開き笑つて相視るべき。

【字解】【一】逝　人の死をいふ。【二】知識　知りあひの人。【三】爲鬼　死ぬこと。【四】眇然　少き貌。【五】凋零　死亡すること。

【題義】人の死亡に感じて遠方に居る友に寄せた詩である。

【詩意】昨日は甲の死を聞き、今朝は乙の死を聞くといふ有樣で、知合の者三分の二は既に死んでしまつた。一旦死んだ者は復と見ることは出來ず、悲しいかな取返しがつかない。また生きてゐる友も皆遠く離れてゐて、平生互に心を知り合つた友達は指折り數へても澤山はない。僅に通州・果州・澧州・鳳州の四人ぐらゐのものだ。しかも皆老年で、浮世は流水の如く定めなきものであるから、知合の人が日增に死んで行くのを見ては、いづれも嘆息してゐるであらう。いつか一緒に集つて酒を酌み、笑つて相見たいものだ。

秋月

夜初色蒼然。夜深光浩然。
稍轉西廊下。漸滿南牕前。
況是綠蕪地。復茲淸露天。
落葉聲策策。驚鳥影翩翩。
棲禽尙不穩。愁人安可眠。

秋月

夜初めて色蒼然、夜深けて光浩然たり。
稍西廊の下に轉り、漸く南牕の前に滿つ。
況んや是綠蕪の地、復茲淸露の天。
落葉聲策策、驚鳥影翩翩。
棲禽すら尙ほ穩かならず、愁人安んぞ眠る可き。

【字解】【一】蒼然　夕暮の色。【二】浩然　盛なる貌。【三】綠蕪　綠の野原。【四】策策　落葉の聲。

【題義】秋の月を詠じた詩である。

【詩意】夕方の色は蒼然として靑黑いが、段段夜が深けると月が高く上つて明るくなり、時の移るに隨つて西廊に轉じ、更に南窓をまともに照し、下は廣大なる綠野から上は淸露の天空までも限なく輝かす。此時さらさらと落葉の音がして、鳥が驚いてひらひらと飛び出す。木に棲つてゐる鳥さへ夢を驚かすのであるから、まして愁人は眠られない筈である。

309
65

昭和三年八月廿五日印刷
昭和三年八月廿八日發行

著作權所有

續國譯漢文大成　文學部第九軼　【非賣品】

編輯兼發行者　國民文庫刊行會
東京市神田區淡路町二丁目十四番地

右代表者　鶴田久作
東京市本鄕區西片町十番地

印刷者　渡邊一郎
東京市小石川區西古川町二十五番地

印刷所　中外印刷株式會社
東京市小石川區西古川町二十五番地

發行所　國民文庫刊行會
電話神田（五三五番・八三八番）
振替東京一八五七二番

終